大和田建樹編

日本歌謠類聚

上巻

東京　博文館藏版

序

古今の風俗を目に傳へて後の世に見するものは畫なり。古今の言語を耳に遺して後の世に聞かしむるものは歌なり。此二つのもの。いかでか社會思想の變遷を談ずる人々の研究し洩らすべき材料ならんや。然れども目に傳ふるものは。世おのづから之が研究に從事しつゝあるを知る。耳に遺すものに至りては未だ之を蒐集して我國文學上の參考品たらしめし人あるを聞かず。是れ余が日本歌謠類聚を世に公にする所以なり。

そも〳〵我國の歌謠なるもの。之を既往に尋ねて幾ばくの變遷をか來しつるど問ふ人あらば。余は答へて之に四つの時期ありと言はんとす。四つの時期とはいかに。曰く唱歌詠歌いまだ分離せざりし時代。曰く唐樂摸倣時代。曰く拍子時

或は士氣を鼓舞せんが爲めに。或は軍機を示さんが爲めに。響き出てたる將帥の聲は載せて記紀二書にあり。之を始として代々の天皇皇后より公卿臣民に至るまで。喜あるとては吟じ。風光を愛するとては吟じ出だせるもの。其時に起りたる眞心ならざるはあらず。

今この眞心のまゝを我言葉にあらはし。之を自由の節もて吟じて我をも人をも慰めたる時代を名づけて。唱歌詠歌未だ分離せざりし時代とす。口に出だせば必ず歌ひて。今日いはゆる歌人なるものゝ連ぬるが如き文學上の和歌はなかりしかばなり。されば此時の歌は。文字不足なる時は節もて伸ばし。音調餘ある時は聲もて縮めつゝ歌ひしが故に。字の數と句の法とに後世の如く嚴なる規律はあらざりき。

一たび三韓と交通開けし以來。二たび隋國と信路の通ぜし

（二）

代。曰く俗曲時代。これのみ。いでや今少しく之をつばらに語らん。

傳へ曰ふ。神代のむかし岩戸の前にて天鈿女命舞を奏し八百萬神歌ひ遊び給へり。之ぞ神樂の起りなること。其曲節の如何なりしかは知るに由なしといへども。天照大御神の岩戸を出で給ひし時。神々相見るに面皆白かりしかば。手を伸して。あはれ。あなおもしろ。あなたのし。あなさやけ。おけ。と歌ひ給ひぬと語り傳へたるを見れば。其時の感情を聲に發し。おの〳〵自然の節を附けて歌ひしものなるは想像するに餘りあり。然れども是は邈たる神代の事。もとより其傳説に止まるや否やを保すべからずといへども。傳説は當時社會の反映に出づる所以を知らば。又以て思なかばに過ぎん。

神武天皇中州を平定せんとして屢ば土賊と戰はせ給ふや。

藤原氏おとろへて平氏かはり。平氏ほろびて源氏おこり。社會の秩序一變して言語風俗すでに泰平無事なりし平安時代のものにあらず。前代の音樂歌謠また世人の嗜好を滿たす能はざるは明なる狀勢なり。此に於て今樣の如きもの曲舞の如きものの出で。一方には文句に一種の節を附けて朗讀する語りものの起れり。而して是等のもの。多くは助くるに鼓銅拍子のものを以てす。笛あるひは用ひられたる事あれども。拍子として加はりたるに過ぎざりしなり。故に之を拍子時代の歌謠といふ。拍子時代なるが故に歌詞あるひは散文的なる部分も交りたるは宴曲などに於て之を見るべし。此時代の產物として最も記憶すべきものは謠曲なり。謠曲全般の事は別問題として此にいはず。

德川氏一たび覇府を江戶に開くや。世はやう〳〵亂世に遠

以來。文物百般のもの〻輸入せらる〻と共に。音樂また渡來せしは誰も知るごころ。是までは其時々に隨意の節もて奏せし音樂も。今は譜の指揮するごころに從はざるべからず。さりこて我感情を歌はんごするに當り嚴格なる譜に合はんも究屈なる心地のせられて。遂に音樂に合はせて宴會の席なごに歌ふ歌ご。我思ふごころを述べて自ら慰むる歌ごは分離するに至りぬ。而して定限ある譜に支配せられつ〻產まれ出でたるものを神樂催馬樂の類なりごす。是ぞ奈良朝の頃より平安朝を蓋ひて朝廷貴族の間に寵を受けたるものにして。余がいふ唐樂摸倣時代ごは即ちこれなり。此頃の歌謠また字句の上に一定の制限なきが如く見ゆるものは。寧ろ音樂これが主ごなりて歌詞これが從ごなるの傾ありしがためのみ。

までもあるまじ。

王政維新の後は俗曲時代なほ未だ衰へざれども西洋音樂の渡來あり。隨つて學校唱歌の奬勵あり。日に月にオルガンの聲ピヤノの音その反響を廣めつゝ今や洋樂時代の入りて之に代らんとするが如き有樣を呈し出だせり。今日以後の歌謠またおのづから語勢調子を一變すべきは當然の事ぞかし。

以上述べ來れる時代を代表せるものゝ外に地方歌謠なるものあり。作者も時代も知られざれども。口々相つたへて其村其里に行はるゝ田植うた盆踊うた手鞠うたの如き是なり。言語研究の上よりするも人情研究の上よりするも韻文的思想研究の上よりするも。味はふべき價は寧ろ他の種類の上にある事を信ぜんごす。

ざかり。遂に三百年の昌平を來しゝかば。戰國以來たえ〴〵なりし文學技藝の類一つとして興り立たぬものなし。然れども士人以上の社會には古典を恢復し舊制を摸倣する事にのみ急なりしかば。音樂歌謠に於てもひとへに平安朝を學び足利時代を師とするに過ぎざりき。よりて其人情風俗の向ふところに從ひて起るべき音曲唱歌は民間にのみ其流行をほしいまゝにすべき餘地を與へたり。上流下流その趣味を異にする事かくの如くなるが故に。上なるものは下と離れて益す迂遠になり。下なるものは上と隔たりていよいよ卑俗になりたるも。亦止むをえざる次第ならずや。當時の歌詞中ずゐぶん卑俗きくに忍びざる如きもの多きは蓋し是がためのみ。而して是等多くは琴に彈き三絃に奏するの曲。世に之を俗曲といへり。俗曲時代の稱さらに說明する

日本歌謠類聚上卷目次

第一編　かみつよぶり

其一　大歌

其二　童謠

其三　雜曲

第二編　なかつよぶり

其一　神樂歌

近ごろの國民新聞に櫻痴居士の客に語りし言を載せて曰く。詩の音律的調なきものを予は名づけてペーパー、ポエムといふと。余もとより此言に左袒するもの。其點よりするも日本歌謠類聚また或はペーパー、ポエットたるを救ふの一助たるべきか。

明治三十一年二月十四日のあした氷の如き手を息もてあたゝめつゝ東窓のもとにてしるす

編　者

其二　催馬樂

律

呂

其二　風俗

其二　謠曲

其四　雜曲

第四編　ちかつよぶり

其一　小唄

其三　小歌

長唄

端唄

其二 琴唄

日本歌謠類聚上卷

大和田建樹編

第一編　かみつよぶり

およそ我國開闢より奈良朝頃までの歌謠を集め載す。

其一　大歌

朝廷の式樂となりて一定の譜を附し歌はるゝものを集め載す。樂器は横笛和琴なごを用ひしなるべし。今こゝに撰べるものゝ外。續日本紀に難波曲、倭部曲、淺茅原曲、廣瀨曲、八裳刺曲なごの名はあれご。其歌の傳はらぬこそ殘り多けれ。

○夷曲

神代紀の一書にいはく。時味耜高彦根神。光儀華艷。映二于二丘二谷之間一。云々。味耜高彦根神之妹下照媛。欲下令二衆人一知中映二丘谷一者味耜高彦根神上。故歌曰

天なるや。弟棚機の頸懸せる。玉の御統の。あな玉はや。眞谷二わたらす。あぢすき

日本歌謠類聚上卷目次　終

旣而餘黨猶繁。云々。道臣命選二我猛卒一陰期之曰。酒酣之後。吾則起歌。汝等聞二吾歌聲一則一時刺レ虜。已而坐定酒行。虜不レ知三我之有二陰謀一任レ情徑醉。時道臣命乃起而歌之曰。

忍坂の。大室屋に。人多に入り居りとも。ひとさはに。來入り居りとも。みつゝし。來目の子らが。頭椎い。石椎い持ち。撃ちてし止まむ。

時我卒。聞レ歌倶拔二其頭椎劒一一時殺レ虜々無二復噍類者一。皇軍大悅仰レ天而咲。因歌之曰。

今はよ。いまはよ。あゝしやを。今だにも。吾兒よ。いまだにも。あごよ。

今來目部。歌而後大哂。是其緣也。

又歌曰。

夷を。一人當百人。人はいへども。手向ひもせず。

皇軍攻必取。戰必勝。而介冑之士。不レ無二疲弊一故聊爲二御謠一以慰二將卒之心一焉。謠曰。

楯並めて。伊那佐の山の、木の間ゆも。い行き守らひ。戰へば。我はや飢ぬ。鳥つ鳥。鵜飼が部。今助けに來ぬ。

十有二月癸巳朔丙申。皇師遂擊二長髓彥一。云々。昔孔舍衞之戰。五瀨命中レ矢而薨。天皇銜レ之常懷二憤懟一至二此役一也。意欲二窮誅一乃爲二御謠一之曰。

たかひこね。

又歌曰。

あまざかる。鄙つ女の。い渡らす瀬と。石川片淵。かたぶちに。網張りわたし。女ろ寄に。寄し依り來ね。いしかはかたぶち。

此兩首歌辭。今號二夷曲一。

○來目歌

神武紀にいはく。兄猾獲二罪於天一。事無レ所レ辭。乃自踏レ機而壓死。云々。已而弟猾大設二牛酒一以勞二饗皇師一焉。天皇以二其酒肉一班二賜軍卒一。乃爲二御謠一之曰。

菟田の。高城に。鴫羅張る。わが待つや。鴫は障らず。いすくはし。鯨さやり。前妻が。魚乞はさば。立柧棱の。實の無けくを。扱けしひゑね。後妻が。魚乞はさば。いち榮樹。實の多けくを。こけだひゑね。

是謂二來目歌一。今樂府奏二此歌一者。猶有二手量大小。及音聲巨細一。此古之遺式也。

冬十月。云々。先擊二八十梟帥於國見丘一。破斬レ之。天皇志存二必克一。乃爲御謠之曰。

神風の。伊勢の海の。大石にや。い延ひ回る。細螺の。吾兒よ。したゞみの。いはひもとほり擊ちてし止まむ。

○御葬歌

景行記日本武尊崩御の段にいはく。於ㇾ是坐ㇾ倭后等諸。下到而作二御陵一。即匍二匐廻其地之那豆岐田一而哭爲ㇾ歌曰。

なづきの田の稻莖に。いながらに。延ひもとほろふ。野老蔓。

於ㇾ是化二八尋白智鳥一。翔ㇾ天而向ㇾ濱飛行。爾其后及御子等。於二其小竹之苅杙一。雖二足跳破一。忘二其痛一以哭追。此時歌曰。

淺篠原。腰なづむ。空は行かず。あしよゆくな。

又入二其海鹽一而。那豆美行時。歌曰。

海處ゆけば。腰なづむ。大河原の。植草。うみがは。いさよふ。

又飛居二其磯一之時。歌曰。

濱つ千鳥。濱よは行かず。磯づたふ。

是四歌者。皆歌二其御葬一也。故至ㇾ今。其歌者。歌二天皇之大御葬一也。

○酒樂之歌

仲哀記にいはく。於ㇾ是還上坐時。其御祖息長帶日賣命。釀二待酒一以獻。爾其何御祖御歌曰。

みつ〳〵し。來目の子等が。垣本に。粟生には。韮一もと。そのが本。其根芽つなぎて。擊ちてし止まむ。

又謠之曰

みつ〳〵し。來目の子等が。垣もとに。植ゑしはじかみ。口ひゞく。我は忘れず擊ちてし止まむ。

因復縱レ兵忽攻レ之。凡諸御謠。皆謂二來目歌一。此的取レ歌者名レ之也。

○思邦歌

景行紀にいはく。十七年春三月戊戌朔己酉。幸二子湯縣一。云々。是日涉二野中大石一。憶二京都一而歌之曰。

はしきよし。吾家の方ゆ。雲ゐたちくも。大和は。國のまほらま。たゝなづく。青垣山でもれる。大和しうるはし。命の。まそけむ人は。疊薦。へぐりの山の。白樫が葉を。髻華に刺せ男子。

是謂二思邦歌一也。

宮人の足結の小鈴。落ちにきと。宮人とよむ。里人もゆめ。

此歌者。宮人振也。

○志都歌

雄略記にいはく。一時。天皇遊行。到於美和河之時。河邊有洗衣童女。其容姿甚麗。天皇問其童女。汝者誰子。答曰。已名謂引田部赤猪子。爾令詔者。汝不嫁夫。今將喚。而還坐於宮。故其赤猪子。仰待天皇之命。既經八十歲。云々。於是。天皇大驚。吾既忘先事。云々。不得成婚而賜御歌。其御歌。

みもろの。嚴橿がもと。橿がもと。ゆゝしきかも。橿原少女。

又歌曰。

引田の。若栗栖原。若時に。率寐ましものを。老いにけるかも。

爾赤猪子之泣淚。悉濕其所服之丹摺袖。答其大御歌而歌曰。

みもろに。築くや玉垣。つきあまし。誰にかも寄らむ。神の宮人。

又歌曰。

日下江の。入江の蓮花ばちす。身の盛人。ともしきろかも。

云々。此曰歌者。志都歌也。

この御酒は我御酒ならず。酒の神。常世にいます岩立たす少名御神の。神壽ぎ。壽ぎ狂ほし。豊壽ぎ壽ぎ廻ほし。奉り來し御酒ぞ。あさず食せさゝ。

云々。爾建内宿禰命。爲二御子一答歌曰。

この御酒を。釀みけむ人は。そのつゞみ。臼に立てゝ。歌ひつゝ。釀みけれかも。舞ひつゝ。釀みけれかも。この御酒のあやに。寄樂し。さゝ。

此者酒樂之歌也。

○國栖之歌

應神記にいはく。於二吉野之白檮上一作二横臼一而。於二其横臼一釀二大御酒一。獻二其大御酒一之時。擊二口鼓一爲レ伎而。歌曰。

檮の生に。横臼を作り。よくすに。釀みし大御酒。うまらに。聞しもち食せ。吾が父。

此歌者。國主等獻二大贄一之時々。恒至二于今一詠之歌也。

○宮人振

允恭記にいはく。爾其大前小前宿禰。擧レ手打レ膝。儛訶那傳歌參來。其歌曰。

せ。ことの。かたりごとも。ことをば。

即天皇歌曰。

百磯城の。大宮人は。鶉取り。領巾とりかけて。鶺鴒尾ゆきあへ。庭雀。群集りゐて。今日もかも。酒宴くらし。ことの。かたりごとも。ことをば。

此三歌者天語歌也。

○宇岐歌

同記同文の次にいはく。是豐樂之日。亦春日之袁杼比賣。獻二大御酒一之時。天皇歌曰。

みなそゝぐ。臣の少女。酒瓶執らすも。ほだりとり。固く執らせ。下固く。やがたく執らせ。ほだり執らす子。

此者宇岐歌也。

○志都歌

同記同文の次にいはく。爾袁杼比賣獻レ歌。其歌曰。

○天語歌

同記にいはく。天皇坐長谷之百枝槻下。爲豐樂之時。伊勢國之三重婇。指擧大御盞以獻。有其百枝槻葉落浮於大御盞。其婇不知落葉浮於盞。猶獻大御酒。天皇看行其浮盞之葉。打伏其婇。以刀刺充其頸。將斬之時。其婇白天皇曰。莫殺吾身。有應白事。即歌曰。

纏向の日代の宮は。朝日の。日照る宮。夕日の。日がける宮。竹の根の。根足る宮。此根の。根延ふ宮。やほによし。いきづきの宮。眞木さく。檜の朝廷。新嘗屋に。生ひ立てる。百足る。槻が枝は。上枝は。天を覆へり。中枝は。東をおへり。下枝は。鄙をおへり。上枝の。枝の末葉は。中枝に。落ちふらばへ。中枝の。枝の末葉は。下つ枝に。落ち觸らばへ。下枝の。枝の末葉は。ありぎぬの。三重の子が。さゝがせる。瑞玉盞に。浮きしわぶら。落ちなづさひ。水凝。こをろに。是しも。あやに。惶し。高光る。日の御子。ことの。語りごとも。此をば。

故獻此歌者。赦其罪也。爾大后歌。其歌曰。

やまとの。この高市に。小高有。市の高所。新嘗屋に。生ひ立てる。葉廣。ゆつま椿。其が葉の。ひろりいまし。その花の。照りいます。高光る。日の御子に。豐御酒。たてまつら

有二諸歌三首一其一曰。

はろ〴〵に。琴ぞきこゆる。島の籔原。

其二曰。

をちかたの。阿波野の雉響さず。我は寢しかど。人ぞとよもす。

其三曰。

小林に。我を入て。殺し人の面も知らず。家も知らずもや。

うちはしの

天智紀にいはく。九年夏四月癸卯朔。壬申。夜半之後。災二法隆寺一。一屋無レ餘。火雨雷震。五月童謡曰。

打橋の。頭の遊に。いでませ子。玉代の家の。八重込の外に。いでましの。悔は不有ぞ。

いでませこ玉代の家のやへこのとに。

たちばな

同紀にいはく。十年春正月。是月以二大錦下一。授二佐平、余自信、沙宅、紹明一。云々。以二小山下一授二餘達率等五十餘人一也。童謡曰。

橘は。おのが枝々。なれゝども。玉に貫く時。同じ緒に貫く。

みえしぬ

やすみし。我大君の。朝戸には。い寄り立たし。夕戸には。いよりだゝす。脇机がしたの板にもが。吾兄を。

此者志都歌也。

其二　童謠

國家の吉凶などを預言して謠言はしむるさなく童などの街にて謠ひあるく歌を集め載す。之を日本紀等にて童謠さいへり。

岩の上に

皇極紀にいはく。蘇我臣入鹿。獨謀將廢上宮王等。而立古人大兄。為天皇。于時有童謠曰。

岩の上に。小猿米燒く。米だにも。たげてとほらせ。山羊の翁。

はろゞに

同紀右の歌の續にいはく。戊申於劍池蓮中。有一莖二萼者。豐浦大臣妄推曰。是蘇我臣將榮之瑞也。云々。是月國內巫覡等。折取枝葉。懸掛木綿。伺大臣度橋之時。爭陳神語入微之說。其巫甚多。不可具聽。老人等曰。移風之兆也。時

同紀にいはく。天皇崩于近江宮。云々。于時童謠曰。其一。

三吉野のえしぬの鮎。鮎こそは島邊も吉き。えぐるしゑ。水葱のもと。芹のもと。吾はくるしゑ。

其二

臣の子の。八重の紐解く。一重だに。いまだ解かねば。皇子の紐解く。

其三

赤駒の。いゆきはゞかる眞葛原。何の傳言。直にし吉けむ。

かづらきの

光仁紀にいはく。天皇寛仁敦厚。意豁如也。云々。又龍潜之時。童謠曰。

かづらきの。寺の前なるや。豊浦の寺の西なるや。オシトド。トシトド。櫻井に。白璧沈着や。好き王しづくや。オシトド。トシトド。然せば。國ぞ榮ゆるや。吾家らぞ。榮ゆるや。オシトド。トシトド。

于時井上内親王爲妃。識者以爲。井則内親王之名。白璧爲天皇之諱。蓋天皇登極之徵也。

おほみやに

桓武紀にいはく。天宗天皇。云々。逡讓位于天皇。初有童謠曰。

第二編　なかつよぶり

おおよそ桓武天皇遷都より鎌倉時代の始までのを集め載す。

其一　神樂歌

朝廷もしくは諸神社にて神事の節もちひられたる神樂の唱歌を集め載す。樂器は横笛篳篥笙和琴笏拍子の類にして。今も宮内省式部職の伶人は其歌と曲とを相傳し。朝廷および諸社の神事には用ふるなり。

○庭燎（神前にて燒火する時に歌ふもの）

深山には。深山には霰ふるらし。外山なる。眞拆の葛。色づきにけり。色づきにけり。

○採物（物を手に採り持ちて舞ふ時に歌ふもの）

榊

本（二列に並びたる其一方の歌ふもの）

榊葉の。香をかぐはしみ。とめくれば。八十氏人ぞ。圓居せりける。八十氏人ぞ。圓居

大宮に。直に向へる山邊の坂いたくな踏みそ。土にはありとも。

識者以爲。天皇登祚之徵也。

其三　雜曲

上に漏れたるを此に載す。

をこめらに

高野天皇紀に。いはく。辛卯。葛井、船、津文、武生、藏六氏男女二百三十人。供奉歌垣。其服並着青摺細布衣。垂紅長紐。男女相並。分行徐進。歌曰。

をとめらに。をとこ立ち添ひ。踏み鳴らす。西の都は。よろづよの宮。

其歌垣歌曰。

淵も瀬も。清くさやけし。博多川。千歳を待ちて。澄める川かも。

杖

本

此杖はいづこの杖ぞ。天にます豐をか姫の宮の杖なり。神の杖なり。

末

逢坂を。今朝こえくれば。山人の。千歳つけとて切れる杖なり。くれし杖なり。

或説

本

足引の山を險しみ。木綿附くる。榊が枝を。杖に突きつる。杖にきりつる。

末

皇神のみ山の杖と。山人の。千歳を祈り。きれる御杖ぞ。きれる御杖ぞ。

篠

本

此さゝはいづこの笹ぞ。舍人等が腰にさがれる。鞆岡のさゝ。ともをかの笹。

末

笹分けば。袖こそ破れめ。利根川の。石は踏むとも。いざ川原より。いざ川原より。

せりける。

末（二列に並びたる他の一方の歌ふもの）

神垣の。御室の山の。榊葉は。神の御前に。茂りあひにけり。しげりあひにけり。

或說

本

榊葉に。木綿取り垂でゝ。誰が世にか。神の御前に。いはひそめけん。いはひそめけん。

末

霜八度。置けど枯れせぬ。榊葉の。立ち榮ゆべき。神のきねかも。神のきねかも。

幣

本

幣帛は。わがにはあらず。天にます。豐をか姬の。神のみてぐら。神のみてぐら。

末

幣帛に。ならましものを。皇神の。御手に取られて。なづさはましを。なづさはるべく。

末

梓弓春くるごとに。皇神の豊の遊に。おはんとぞ思ふ。おはんとぞおもふ。

劒

本

白銀の。目貫の太刀を。提げ佩きて。奈良の都を。ねるは誰が子ぞ。ねるは誰が子ぞ。

末

石の上。ふるや男の。太刀もがな。組の緒垂で丶。宮路かよはん。みやお通はん。

或説

本

いはひこし。神は祭りつ。明日よりは。組の緒垂で丶。遊べ太刀佩き。遊べ太刀佩き。

末

奥津城に。皇神たちを。いはひこし。心は今ぞ。たのしかりける。たのしかりける。

鉾

本

此鉾は。いづこの鉾ぞ。天にます。豊をか姫の。宮の鉾なり。みやの御鉾ぞ。

或説

本　笹の葉に。雪降りつもる。冬の夜に。豊の遊をするがたのしさ。するがたのしさ。

末　瑞籬の。神の御代より笹の葉を。手草に取りて。遊びけらしも。遊びけらしも。

弓

本　弓といへば。品なきものを。梓弓眞弓槻弓。品こそあるらし。品こそあるらし。

末　陸奥の。安達の眞弓。わが引かば。やう〳〵寄り來。しのび〳〵に。しのび〳〵に。

或説

末　獵夫らが。持たせの眞弓。奥山に。み獵すらしも。弓の弭見ゆ。弓のはず見ゆ。

本　四方山の。守りに賴む。梓弓。神の寶に。今しつるかな。今しつるかな。

本

せがゐや。せがゐの水を

末

いたゐや。板井の清水。

○韓神

本

三島木綿。肩に取り掛け。われ韓神の。からをきせんや。からをき。からをきせんや。

末

八葉盤を。手に取りもちて。われ韓神の。からをきせんや。からをきせんや。

或説

本

わが生れは。皆人知らず。父が方。母が方とも。神ぞ知るらん。神ぞ知るらん。

末

宮人の。垂幣は榮ゆる。大直日。いざわがともに。神さかもされ。神さかもされ。

末

四方山の人の守りにする鉾を神のみまへにいはひつるかな。いはひ立てたる。

杓

本

大原や清和井の清水ひさごもて鳥は鳴くとも遊びてを汲め遊びて行かん。

末

我門の板井の淸水里遠み人し汲まねば水さびにけり。水草居にけり。

○片折　（歌ひぶりの名）

本

大原やせがゐやせがゐの水を。

末

我門のいたゐや板井の淸水。

○諸擧　（歌ひぶりの名）

いなの穂の。諸穂に垂でよ。枯朽穂もなく。かれちぼもなく。

前張

本

裂榛に。衣は染めん。雨ふれど。雨ふれど。

末

雨ふれど。うつろひがたし。深く染めてば。ふかくそめてば。

階香取

本

しながどり。猪名の湊に。アイゾ。入る舟の。檝よくまかせ。舟かたぶくな。舟傾くな。

末

若草のや。妹も乘りたりや。アイゾ。我も乘りたりや。舟かたぶくな。舟かたぶくな。

井奈野

本

しながどりや。猪名の柴原。アイゾ。飛びてくる。鴫が羽音は。おとおもしろき。鴫が羽おとは。

○大前張

宮人

本

宮人の。大裝衣。膝とほし。着のよろしもよ。おほよそごろも。

末

ひざとほし。きのよろしもよ。おほよそごろも。

難波潟

本

難波潟。汐みちくれば。海士衣。あまごろも。

末

あまごろも。田蓑の島に。田鶴なきわたる。たづ鳴きわたる。

木綿志天

本

ゆふしでし。神の幸田に。稻の穗の。いなのほの。

末

アイゾ。たがにへびとぞ。鳴つきのぼる。網おろしさでさしのぼる。

末

天にますや。豐をか姬や。その贄人ぞ。鳴つきのぼる。網さしおろしさでさしのぼる。アイゾ。その贄人ぞ。鳴つきのぼる。網おろしさでさしのぼる。

閑野

本

しづやの小菅鎌もて刈らば。生ひんや。生ひんや小菅。

末

天なる雲雀。おりこや雲雀。とみくさ。富草くひて。

磯等

本

いそらが崎に鯛釣る海士も。鯛つるあまも。

末

我妹子がためと鯛つるあまも。たひつるあまも。

篠波

末

しながどりや。ゐなのふし原。アイゾ。網さすや。我背の君は。いくらか取りけん。いくらか取りけん。

脇母古

本

我妹子にや。一夜膚觸れ。アイゾ。おやまちせしより。鳥も取られず鳥も取られずや。

末

然りともや。我背の君は。アイゾ。五つ取り。六つ取り。七つ八つ取り。こゝのよ。十は取り。十は取りけんや。

○小前張

薦枕

本

こもまくら。高瀨の淀にや。誰が贄人ぞ。鴫突きのぼる。網おろし。小網さしのぼる。

末

そをもふと。何もせずして、春日すら。春日すら。春日すら。春日すら。春日すら。

大宮

本

大宮の。少小舍人や。てらにやてらにや。玉ならば。てらにや。

末

玉ならば。晝は手に据ゑや。よるは纒き寢ん。てらにや。

湊田

本

みなと田に。鴾八つ居りお。とろちなや。とろちなや。八つながら。とろちなや。

末

八つながら。物思はず居りや。とろちなや。八つながら。とろちなや。とろちなや。

蛬

本

きりぎりすの。ねたさうれたさや。御園生に。參り來て。木の根をほりはんで。おさ

本

さゝなみや。志賀の辛崎や。御稲搗く女のよさゝや。それもがも。かれもがも。最愛者の。眞いとこせにせん。

末

蘆原田の。稲春蟹のや。おのれさへ。よめを得ずとてや。指上げてはおろしや。おろしてはさゝげや。肱擧をするや。

殖槻

本

うゑつきや。田中の杜や。もりやてふ。笠の淺茅が原に。

末

我を置て。二妻とるや。とるなてふ。笠の淺茅が原に。

總角

本

少童を。早稲田にやりてや。其を思ふと。そをもふと。そをもふと。そをもふと。

ヤ。いづれぞも。とうぞまり。

末

ヤ。かの崎こえて。

本

ヤ。深山の小葛。

末

ヤ。繰れ〳〵こつゞら。

本

ヤ。鷺の頸取ろんと。

末

ヤ。いとはた長うて。

本

ヤ。皹踏むな。後なる子。

末

ヤ。我も目はあり。先なる子。

まさ。角折れぬ。おさまさ。角折れぬ。

末

ねたさうれたさゃ。御園生に參り來て。木の根をはりはんで。おさまさ。角折れぬ。

或説

本

したらがまうどの。單の狩衣。なとりれそ。いと妬し。

末

勿取入そ。小雨にそぼぬらせ。夜離する。いと〱妬し。

千歳

本

せんざい。せんざい。せんざいや。ちとせの。せんざいや。なほせんざい。

末

まんざい。まんざい。まんざいや。よろづよの。まんざいや。なほまんざい。

早歌

本

ヤ。霜月(しもつき)しはすの。かきこぼり。

本

ヤ。あふり戸(ど)や。ひわりど。

末

ヤ。檜割戸(ひわりど)や。あふりど。

本

ヤ。ゆすりあげよ。そゝりあげん。

末

ヤ。そゝりあげよ。ゆすりあげん。

本

ヤ。谷(たに)から行(ゆ)かば。岡(をか)から行(ゆ)かん。

末

ヤ。岡(をか)から行(ゆ)かば。谷(たに)から行(ゆ)かん。

本

ヤ。これからゆかば。かれから行(ゆ)かん。

本
ヤ。舍人來んぞ。後來んぞ。
末
ヤ。我も來んぞ。しりこんぞ。
本
ヤ。おちの山脊山。
末
ヤ。脊山のおちの夫。
本
ヤ。近衞の御門に。巾子落いつ。
末
ヤ。髮の根の無ければ。
本
ヤ。女の財は。
末

末

我こそは。見ればや。うれたさんに。手折りて來しかや。どくせにこや。たゝちきひばや。手折りて來しかや。どくせにこや。

木綿作

本

木綿作る。志那の原にや。朝たづんね。朝尋ね。あさたづねや。

末

あさたづんね。汝も神ぞや。遊べあそんべ。あそべあそべ。あそべや。

晝目歌

本

いかばかり。よきわざしてか。天照るや。ひるめの神を。暫留めん。しばしとゞめん。

末

いづこにか。駒をつながん。朝日子が。さすや岡邊の。玉笹のうへに。玉ざゝの上に。

弓立

本

末

ヤ。かれからゆかば。これからゆかん。

○星

吉々利々

本

きり〳〵。千歳榮。白衆等。聽說。晨朝。淸淨偈や。明星は。明星は。くはやこゝなりや。なにしかも。今宵の月の。たゞこゝにますや。たゞこゝに。たゞこゝにますや。

末

びやくしゆんと。ちやうせつ。しんてう。淸淨偈や。あかぼしは。みやうじやうは。くはやこゝなりや。何しかも。今宵の月の。たゞこゝに。たゞこゝに。たゞこゝにますや。

得錢子

本

とくせにこが。閨なる。標結ふひばを。誰か手折りし。とくせにこや。たゝらこきひばや。誰か手折りし。とくせにこや。

わがをれば。名のりをしつゝや。行くは誰が子ぞ。ゆく人やたれ．

或說

本

朝倉や。おめの湊に。網引き居れば。海士の童女に。なびきあひにけり。なびきあひにけり．

末

かづらきや。渡る久米路の。繼橋の。こゝろも知らず。いざかへりなん。朝かへりなん。

其駒

その駒ぞや。我に。我に草乞ふ。草は取り飼はん。轡取り。草は取りかはんや。水は取りかはんや。

或說

あしぶちのや。もりの。杜の下なる。若駒率てこ。足斑の。虎毛の駒。

竈殿歌

本

伊勢島や海士の賤民等が燒く火の氣。オケ〳〵。

末

たく火の氣。いそらば崎に。かをりあふ。オケ〳〵。

本

大君の。齋木とる山の。若櫻。オケ〳〵。

末

わかざくら。とりにわれゆくや。檝棹。人貸せ。オケ〳〵。

本

皇神の。今朝の神上に。あふ人は。千歳の命。延ぶとこそ聞け。

末

皇神は。よき日祭れば。明日よりは。明の衣を。褻衣にせん。

朝倉

本

あさくらや。木の丸殿にや。わが居れば。わがをれば。

末

見れ。

○東遊

一歌

アハレ。オオオオ。ハレムナ。手をとゝのへろな。歌とゝのへむな。榮えむのねえ。

二歌

オオオオ。エ我脊子が。今朝のことては。アハレ。七つ緒の。八つ緒の琴を。調べたることや。なをかけや。あまのかつのをけや。オオオ。

駿河歌

ヤ。有度濱に。駿河なる。有度濱に。打ち寄する。波はなゝくさの妹。ことこそよし。

二段

ことこそよし。なゝくさのいもは。ことこそよし。あへるとき。いさゝは寢なんや。なゝくさのいも。ことこそよし。

求女子歌

千早振。この御社の。姫小松。アハレヽンレヽンヤレヽンヤレヽンヤレン。おはれ

豐竈。御遊すらし。久かたの。天の川原に。琴の聲する。瑟の聲する。ひさの聲する。

末

久かたの。天の川原に。豐へつひ。御あそびすらしも。瑟の聲する。ひさの聲する。

酒殿歌

本

さかどのは。廣し眞廣し。甕越に。我手な取りそ。然はせぬわざ。然告げなくに。

末

さかどのは。今朝はな掃きそ。舍人女の。裳引き裾引き。今朝は掃きてき。今朝庭掃きゝ。

或說

天の原。ふりさけ見れば。八重雲の。雲の中なる。雲の中臣の。中臣の。天の小菅を。拆きはらひ。祈りしことは。今日の日のため。たふとや。わが皇神の。神祖のよさ。

又

庭鳥は。かけろと鳴きぬなり。起きよ。起きよ。わが一夜妻。人もこそ見れ。人もこそ

二段

つち山。待つらん人を。行きてはや。アハレ。ゆきてはや見ん。

澤田川

一段

澤田川。袖つくばかり。淺けれど。ハレ。

二段

淺けれど。恭仁の宮人。高橋わたす。

三段

アハレ。そこよしや。高橋わたす。

高砂

一段

高砂の。さいさごの。たかさごの。

二段

尾上に立てる。白玉椿。玉やなぎ。

三段

のひめこまつ。

大廣歌

大廣や。をひれの山はや。よりてこそ。よりてこそ。山はや。山はや。よりてこそ。

其二　催馬樂

唐樂高麗樂と共に朝廷貴族の間に行はれたる一種の歌謠なり。樂器は大方神樂に同じく箏をも又用ひたり。今なほ伶人の相傳する事も神樂に異ならず。但し神樂は歌あり舞ありて。催馬樂には舞なく。唐樂高麗樂には舞あれども歌なし。是ぞ右にいへる三種音樂の間の相違にはありける。

○律

我駒

一段

いで我駒。早く行きこせ。待乳山。アハレ。まつち山。ハレ。

貫河

一段

ぬき川の。瀬々の小菅の。やはら手枕。やはらかに。寝る夜はなくて。親避くる夫。

二段

おやさくる夫は。ましてるはしも。しかしあらば。矢矧の市に。沓買ひにかん。

三段

沓かはゞ。線鞋の。細底を買へ。さしはきて。上裳とり着て。宮路かよはん。

東屋

一段

あづまやの。まやのあまりの。雨そゝぎ。われ立ちぬれぬ。そのとんのど開かせ。

二段

かすがひも。戸ざしもあらばこそ。その殿戸。われさゝめ。おし開いて來ませ。我や人妻。

走井

はしりゐの。小萱刈り收めかけ。それにこそ。繭つくらせて。糸引きなさめ。

それもがと。サン。ましもがと。ましもがと。

四段

練緒さみをの。御衣掛にせん。玉やなぎ。

五段

何しかも。サン。何しかも。なにしかも。

六段

心もまだいけん。百合花の。さかりばなの。

七段

今朝咲いたる。初花に。あはましものを。さゆり花の。

夏引

一段

夏引の。白糸。七はかりあり。さごろもに。織りても着せん。汝妻はなれよ。

二段

かたくなに。ものいふ女かな。汝麻衣も。我妻。のごとく。袂よく。着よく肩よく襟や

はらかに。縫ひ着せめかも。

わが門にや。わがかどに。上裳の裾ぬれ。下裳の裾ぬれ。朝菜摘み。夕菜つみ。あさなつみ。

二段

朝菜つみ。夕菜つみ。我名を。知らまくほしからば。御園生の。みそのふの。

三段

みそのふのや。みそのふの。おやめの郡の。大領の。愛娘といへ。弟娘とこそいはめ。

我門乎

一段

わが門を。とさんかうさん。ねる男。寄來ざるらしや。よしこざるらしや。

二段

由緣無に。とさんかうさん。ねる男。寄來ざるらしや。よしこざるらしや。

大路

一段

大路に。沿ひてのぼれる。青柳が花や。あをやぎが花や。

二段

飛鳥井

あすかゐに。あすかゐに宿りはすべし。オケ。蔭もよし。眞水も寒し。御馬草もよし。

青柳

一段

あをやぎを。あをやぎを。片糸によりてや。オケヤ。鶯の。オケヤ。

二段

うぐひすの。縫ふといふ笠は。オケヤ。梅の花笠や。

伊勢海

伊勢の海の。いせのうみの。淸き渚の潮間に。莫鳴菜や摘まん。貝や拾はん。玉やひろはん。

庭生

庭に生ふる。庭におふる。からなづなは。よき品なり。ハレ。宮人の。下ぐる袋を。おのれ掛けたり。

我門爾

一段

あふみちの。しのゝ小薄はやひかず。こもち。待ちやかねらん。しのゝをずゝきや。さきんだちや。

道口

みちのくち。武生の國府に。我はありと。親には申したべ。心あひの風や。さんだちや。

更衣

ころもがへせんや。さきんだちや。我衣は。野原篠原。萩の花摺や。さきんだちや。

何爲

いかにせん。せんや。鴛鴦の鳴鳥。出でゝゆけば。親はありくと。さいなめど。夜妻さだめつや。さきんだちや。

雞鳴

鷄は鳴きねてふ。今朝くらまぎれ。下紐の緒に。おしすがりゐてこそ。とゞこほれ泣く子なすまで。

老鼠

西寺の。おいねずみ。若鼠。御裳喰づ。袈裟つんづ。けさつんづ。法師に申さん。師にま

青柳がじなひを見れば。今さかりなりや。今さかりなれや。

水大

大芹は。國の禁物。小芹こそ。ゆでゝもうまし。是やこの。せんばん。さんたのきの。柞の木の盤。むしかめの筒。犀角の賽。平賽投賽。兩面。かすめ浮けたる。切りとほし。金はめ盤木。五六がへしの。一二のさいや。四三のさいや。

淺水

あさんづの橋の。とゞろとゞろと降りし雨の舊りにし我を。誰ぞ此。中人たてゝ。御許のかたち。消息し。とぶらひに來るや。さ公達や。

挿櫛

さしぐしは。十まり七つ。ありしかど。たけくのじようの。朝に取り。ようさり取り。とりしかば。さしぐしもなしや。さきんだちや。

鷹子

鷹の子は。余に賜らんや。手にすゑて。粟津の原の。御栗栖の。めぐりの鶉取らさんや。さきんだちや。

逢路

三段

アハレ。そこよしや。よろづよまでに。

梅枝

一段

むめがえに。來居る鶯や。春かけて。ハレ。

二段

春かけて。鳴けどもいまだや。雪は降りつゝ。

三段

アハレ。そこよしや。雪は降りつゝ。

櫻人

一段

さくらびと。さくら人。その舟ちゞめ。島つ田を。十町つくれる。見て歸り來んや。ソヨヤ。明日かへりこんや。ソヨヤ。

二段

ことをこそ。明日ともいはめ。をちかたに。妻避る夫なれば。明日も實來じや。ソヨ

うせ。

○呂(りょ)

安名尊(あなたふと)

一段

あなたふと。あなたふと。今日(けふ)の尊(たふと)さや。いにしへも。ハレ

二段

いにしへも。かくやありけん。今日のたふとさ。

三段

あはれ。そこよしや。けふのたふとさ。

新年(あたらしきとし)

一段

あたらしき。あたらしき。年(とし)のはじめにや。かくしこそ。ハレ。

二段

かくしこそ。仕(つか)へまつらめや。よろづ代までに

つくり。ハレ。

二段

瓜つくり。我を欲しといふ。いかにせん。なよやらいしなや。さいしなや。いかにせん。いかにせん。ハレ。

三段

いかにせんなりやしねらし。瓜たつまでに。やらいしなや。さいしなや。瓜たつま。瓜たつまでに。

眞金吹

一段

まがねふく。眞金ふく。吉備の中山。帯にせる。なよやらいしなや。さいしなや。帯にせる。ハレ。

二段

帯にせる。細谷川の。音のさやけさ。やらいしなや。さいしなや。音のさや。おとのさやけさ。

紀伊國

ヤ。しあすもさねこじや。ソヨヤ。

葦垣

一段

あしがきまがき。かきわけて。踏み越すと。追ひ越すと。ハレ。

二段

踏み越すと誰か。たれか。此ことを。親にまう。讒し申しゝ。

三段

とゞろける。この家。此いへの。弟嫁。親にまう。よこしけらしも。

四段

天地の。神も。かみも。證したべ。我はまう。よこし申さず。

五段

菅の根の。すがな。無情ことを。我は聞く。われは聞くかな。

山城

一段

山しろの。狛のわたりの瓜つくり。なよやらいしなや。さいしなや。瓜つくり。うり

竹河の橋のつめなるや。橋のつめなる。花園に。ハレ。

二段

花園に。我をば放てや。我をば放てや。童女たぐへて。

河口

一段

かはぐちの關の荒垣や。關のあらがきや。まもれども。ハレ。

二段

まもれども。出でゝ我寢ぬや。出でゝわれねぬや。關のあらがき。

此殿者

一段

このとのは。むべも富みけり。三枝の。アハレ。さきくさの。ハレ。

二段

さき草の。三棟四棟の中に。殿づくりせりや。とのづくりせりや。

此殿西

一段

一段

きのくにの。紀の國のや。白良の濱に。ましらゝの濱に。おりゐる鷗ハレ。その玉もてこ。

二段

風しも吹いたれば。餘波しも立てれば。水底霧りて。ハレ。その玉見えず。

葛城

一段

かづらきの。寺の前なるや。豊浦の寺の。西なるや。

二段

榎の葉井に。白玉しづくや。眞白玉しづくや。おしとんど。おしとんど

三段

しかしてば。國ぞ榮えんや。我家らぞ。富せんや。おしとんど。おしとんど。おしとんど。おしとんど。

竹河

一段

みまさかや。くめの久米の佐良山。さら／＼に。ナヨヤ。ナヨヤ。

二段

さら／＼に。わがな我名は立てじ。よろづよまでにや。よろづよまでにや。

藤生野

一段

ふぢふの〻。かたち。かたちが。原に。しめはやし。ナヨヤ。しめはやし。ナヨヤ。

二段

しめはやし。いつき。いはひしもしるく。時にあへるかも。時にあへるかもや。

妹與我

いもとわれと。妹と我と。いるさの山の。山蘭。手な觸れそや。香を薫すがにや。香を増さすがにや。

淺緑

あさみどりや。濃い花田。染めかけたりと。見るまでに。玉光る。下光る。新京。朱雀の。しだり柳。まだい田居となる。前栽。秋萩撫子。唐葵。しだり柳。

青馬

この殿の此とのゝ。西の西の倉垣。春日すら。アハレ。春日すら。ハレ。

二段

春日すら。ゆけども。ゆけどもつきず。西の倉垣や。にしのくらがきや。

此殿奧

一段

この殿の。此とのゝ。おくの奧の造酒舍の。うばたまり。アハレ。うばたまり。ハレ。

二段

うばたまり。われを。我を戀ふらし。小賢肥なるや。こざかでゆなるや。

鷹山

一段

たか山に。たかを。鷹を放ちあげて。招くよしを無み。アハレ。をくをなみ。ハレ。

二段

をくをなみ。わがす。わがする時に。おへる夫かもや。おへるせなかも。

美作

一段

り。トウ〳〵。かより逢ひにけり。トウ〳〵。

本滋

一段

もとしげき。もとしげき。吉備の中山。昔より。むかしから。

二段

むかしから。昔より。名の舊りこぬは。今の世のため。けふの日のため。

箕山

みの山に。繁に生ひたる。玉柏豊の明に。あふがたのしさや。あふがたのしさや。

眉止之女

大御酒わかせや。まゆとじめ。まゆとじめ。まゆとじめ。まゆとじめや。まゆとじめ。
まゆとじめ。

酒飲

酒をたうべて。たべ酔うて。たふとこりんぞや。まうでくる。なよろぼひぞ。まうでくる。タンナ。タンヤ。タリヤランナ。タリチリラ。

田中井戸

青の馬放れば。取り繋げ。眞青の馬はなれば。取りつなげ。凌箭矢の。箭雄子が孫なる。眞郎子。眞大膽子の。大氣の童の。さをこがひてなる。さいろんこ。

妹之門

妹が門や。夫が門。行き過ぎかねてや。わがゆかば。肱笠の。ひぢがさの。雨もや降らなん。郭公。雨やどり。笠やどり。やどりてまからん。しでたをさ。

席田

一段

むしろだのや。席田の。伊津貫川にや。住む鶴の。いつぬき川にや。すむつるの。

二段

すむ鶴のや。すむつるの。千歳をかねてぞ。あそびあへる。よろづよかねてぞ。あそびあへる。

大宮

大宮の。西の小路に。菖蒲込んだり。さやめこんだり。タリヤリタンナ。

總角

あげまきや。トウ〳〵。尋ばかりや。トウ〳〵。放りて寢たれども。まろび逢ひにけ

三段

かやるか.かやるか。中は絶えたるか。

奥山

おく山に。木伐るや翁木をやは削る。眞木やはけんづる。木けんづるをぢ。

奥々山

おく山に。木流すと。木伐る翁。木やと木やと。木をやはけんづる。眞木やはけんづる木けんづる翁。

我家

わいへんは。帷帳をも。垂れたるを。大君きませ聟にせん。御肴に何よけん。鮑榮螺か。石陰子よけん。

其三　風俗

風俗は當時諸國の謂はゆる流行唄なり。採られて禁中大歌所の歌曲と爲り。或は大嘗會の大歌に。或は神樂に催馬樂に用ひられたるも多し。樂器は詳ならざれども。朝廷貴族の間にて謠はるゝものは。神樂歌催

田中の井戸に。光れる田水葱。摘め〳〵吾子女。田中の子あこめ。タヲリラリ。田中の子あこめ。

無力蝦

ちからなきかへる。力なきかへる。骨なき蚯蚓。骨なきみゝず。

難波海

なんばの海。なんばの海。漕ぎもてのぼる。小舟大舟。筑紫津までに。今すこしのぼれ山崎までに。

鈴之川

すゞか川。すゞか川。八九瀬の瀧を。みな人の。めぐるもしるくや。時にあへる。時にあへるかもや。

石川

一段

いしかはんの。高麗人に。帯を取られて。からき悔する。

二段

いかんなる。いかんなる帯ぞ。花田の帯の。中は絶えたる。

之太乃浦

しだの浦を。朝こぐ小舟。さし寄せろ。我さへ乗りてな。しだの浦を。みをや。

君平置天

君を置きて。あだし心を。我持たばや。ナヨヤ。末の松山。波も越えなむや。波もこえなむ。

越方

遠方や。彼方や。安達の原にたゝるかしらに。たゝるからに。うわるからに。おのをによする。さ寐といはなくに。よせばよせ。よせばよせ。よそふる人の。憎からなくに。

小車

小車に。しきのひもとかむ。よひりをしのばせよやな。われしのばせこわれしのばせ。そよまさに。ねてけらしも。月の面を。さわたる雲の。まさやけくみること。さやけくみる。

陸奥

馬楽と異なるところなかりけらし。

小筑波

小筑波を。こゆるすりきぬ。かへりきてや。たかこひすくせ。をつくばを。こゆるすきぬ。

小由流支

こよろぎの。磯立ち馴らし。磯ならし。菜摘む。めざしぬらすな。ぬらすな。沖にをれ。をれ波。
ぬろ〳〵も。君がめすべき。めすべき。菜をし摘み。摘みて。ハヤ。

玉垂

玉だれの。小瓶を。中にすゑて。主はもや。肴覓ぎに。肴とりに。こゆるぎの。磯の若和布刈りあげに。

鴛鴦

をしたかべ。鴨さへ來ゐる。原の池のや。玉藻はまねな刈りそや。おひもつくがにや。おひもつくがにね。

大鳥の。羽根に。ヤレナ。霜降れり。ヤレナ。誰かさ云ふ。千鳥ぞさ云ふ。雀鷄ぞさいふ。
蒼鷺ぞ。京より來て。さ云ふ。

難波都良布江

なはのつぶら江の。春なれば。霞みて見ゆる。なはのつぶら江。

荒田

あらたに生ふる。富草の花。手に摘み入て。宮へ參らむ。なかつたえ。

東路

あづまぢに。かるかやの。よこほちになさけを。かいかるかやの。見ねばや。ことも
やすらに。かるかやの。しさや。かいかるかやの。

菅牟良

すがむらの。ヤハレ。小菅村のや。むらのや。老いては我こそ。かい刈らめ。

知々良々

ちゝらゝが門に。うそふい。なろこう立てれ。てうとをひさげて。などかはや立て
りしもせざらむ。おのれかや。最愛者の門にてうとをひさげて。

我門

アハレヤ阿武隈に霧立ちわたり明けぬとも。夫をばやらじ。待てばすべなしや。

甲斐

甲斐が嶺をさやにも見しがけゝれなく。心なく。横ほり立てる。さやの中山。

常陸

筑波嶺の。このもかのもに。陰はあれども。君がみかげに。ます陰も。ますかげもなしや。

同

常陸にも。田をこそ作れ。おだ心や。兼ぬとや君が。山を越え。野を越え。雨夜きませる。

筑波山

筑波山。葉山しげ山。しげきをぞや。たが子も通ふな。下にかよへ。我つまは下に。

月面

月のおもを。さわたる雲の。まさやけくみる。

大鳥

難波の。つぶら江の。秋なれば。霧立ちわたる。なはのつぶら江。

二段

音なせそや。音なせそ。

三段

あなかま。これとも。あそかなれ。

八乎止女

八少女は。わが八少女ぞ。立つや八少女。立つや八少女。神のます。高天の原に。立つや少女。立つや八少女。

彼乃行

かの行くは。雁か鵠か。雁ならば。ハレヤトウ〳〵。
雁なら。名のりぞせまし。猶くゞひなりや。トウ〳〵。

うばらこき

うばらこきの。下には。鼬笛吹く。猿奏づ。いなごまろは。拍子打つ。きり〳〵すは。鉦鼓打つ。

わが門のや。しだら小柳。サハレトウ〳〵しだる小柳。しだるかいては。ナヨヤ。しだる小柳。
しだるかいては。や。國ぞ富せむ。郡ぞ榮えむ。里ぞ富せむ。吾家ぞ富せむや。しだるこやなぎ。

乎之高倍

をしたかべ。鴨さへ來ゐる。原の池に。生ふる玉藻はや。よき草の。ゆかりぞや。まねな刈りそや。

伊勢人

伊勢人は。あやしきものをや。何と云へは。小舟に乘りてや。波の上を漕ぐや。波のへをこぐや。

加比加禰

甲斐が嶺に。白きは雪かや。いな岡のか。ひの毛衣や。さらすてふくりや。さらすてふくり。

鳴高

鳴高しや。鳴高し。大宮近くて。なりたかし。アハレノ。なりたかし。

ふるき都を。來て見れば。淺茅が原とぞ。なりにける。月の光は。くまなくて。秋風のみぞ。身にはしむ。……後德大寺實定作。

よろづの佛の　(同上)

よろづの佛の。願よりも。千手のちかひぞ。たのもしき。枯れたる木草も。たちまちに。花さき實なる。とこそ聞け。

君をはじめて　(同上)

君をはじめて。見る時は。千代も經ぬべし。姫小松。おまへの池なる。龜岡に。鶴こそむれゐて。あそぶなれ。

佛も昔は　(同上)

佛もむかしは。凡夫なり。我らもつひには。ほとけなり。三身佛性具しながら。へだつる心の。うたてさよ。

君がわげでし　(同上)

君がわげでし。手枕の。たえて久しく。なりにけり。何しにひまなく。睡れけん。ながらへもせぬ。もののゆゑに。

心のやみの　(同上)

其四　今樣

今樣は多く七言五言の句をもて四句もしくは六句つらねたる歌にて。五言七言とつらねゆく古體の長歌などに對して云へる稱なり。禁中にては五節の折にも用ひられ。又中つ世の末頃より盛に世にもてはやされたる白拍子などいへる舞姫も多く之を歌ひて舞ひたりと見ゆ。樂器は用ひどころによりて定まらざりしやうなり。唐樂の越天樂さいふ曲に合はせて歌ふ事もあるをもて後世は之に合ふやうに心して作る事とはなりぬ。

りやうぜんみやま　（五節間郢曲）

靈山みやまのや。五葉松や。竹葉なりとぞ。人はいふ。われも見るや。竹葉なりとも。折りもてこん。閨のかざしにや。まろさゝん。

蓬萊山　（同上）

ヤ。蓬萊山にはや。千とせふるや。萬歳千秋かさなれり。ムヤ。松のえだには。鶴すぐひ。ム巖のそばにはや。龜あそぶ。

ふるき都　（源平盛衰記所載）

涙は。瀧の水。妙法蓮華の。池となり。弘誓の舟に。さをさして。沈む我身を。のせたまへ。

月も同じ　（長門本平家物語所載）

月も同じ月。空も同じ空の。いかなれば。こよひの空の。照りまさるらん。

ありのすさびの　（義經記所載）

ありのすさびの。にくきだに。ありきのあとは。戀しきに。わかで離れし。面影を。いつの世にかは。忘

心のやみの。深きをば。燈籠の火てぞ照らすなれ。彌陀の誓を。たのむ身は。照らさぬところも。なかりけり。

はくろは（同上）

白露は月の。ひかりにて。黄土うるほす。化あり。權現舟に。さをさして。むかひの岸に。よする波。

佛の方便（同上）

ほとけの方便。なりければ。神祇の威光。たのもしや。たゝけば必ひゞきあり。仰げば定めて。花ぞさく。

さまも心も（同上）

さまも心も。かはるかな。おつる

別のことさら（曾我物語所載）

わかれの殊更かなしきは。親のわかれ。子のなげき。夫婦の思と兄弟と。いづれを分きて。思ふべき。袖にあまれる。忍音を。かへしてとゞむる。關もがな。

をさまりなびく（吾妻鏡所載）

をさまりなびく。時なれや。一天四海の。内のみか。人の國まで。日の本の。もろこしが原も。此ところ。

信濃にあるなる（體源抄所載）

信濃にあるなる。木曾路川君におもひの。深ければ。水泡に袖をも。ぬらしつゝ。あらぬ世をこそ。すぐしけれ。

竹のよなかは（同上）

竹の夜中は。あはれぬる。ふしも定めず。起きゐつゝ。人に知られぬ。戀をして。鳥の鳴くまで。寐も入らず。

よしなの我等が（同上）

よしなの我等が。獨寐や。かばかり寒き。冬の夜に。ころも薄くて。夜は長し。たのめし人は。待てどこず。

るべき。

　わかれのことに　(同上)

わかれのことに。悲しきは。親のわかれ。子のわかれ。すぐれてげにも。悲しきは。夫妻の別。なりけり。

　春はさくらの　(同上)

吉野法師判官を追ひかけ奉る事の條に曰く。辨慶をりふし舞ひたりければ。大衆も引きかれて是を見る。舞はおもしろくなりけれども。なかしき事をぞうたひける。

春はさくらの。流るれば。吉野川とは。なづけたり。秋は紅葉の。ながるれば。立田川とも。いひつべし。冬も末に。なりぬれば。法師も紅葉も。ながれたり。

　あたりの野邊の　(同上)

あたりの野邊の。白眞弓。れし張りすびきし。肩に掛け。なれぬほどは。何れをそれん。馴れての後は。そるぞくやしき。……藤原實方作

　月影のみ　(同上)

月影のみよするは。田上川の。みなかみ。稲舟の。わづらふ。最上川の早き瀬。そことも知らぬ。琵琶の聲。霞のひまに。まぎれり。

かに聞きつる。今日なれば。

熊野にまします （同上）

熊野にまします。權現は。名草の濱にぞ。おりたまふ。和歌の浦に。ましませば。年はゆくとも。若王子。

ちはやぶる神 （同上）

ちはやぶる神。上におはします。ものならば。あはれに。おぼしめせ。神もむかしは。人ぞかし。

春のはじめ （同上）

春のはじめの。梅の花。よろこび開けて。實なるとか。みたらし川の。うす氷。こゝち解けたる。たぐひかな。

峰の嵐の （同上）

峰のあらしの。はげしさに。木々の木の葉も。散りはてゝ。

松の木陰に （同上）

松のこかげに。立ちよれば。千とせの緑は。身にしめども。松が枝かざしに。さしつ

心の內には　（同上）

こゝろの內には。忍べども。色に出にけり我戀は。ものやおもふと。みな人の。おやめていかにと問ふまでに。

藥師の十二の　（古今著聞集所載）

藥師の十二の。誓願は。衆病悉除。たのもしき。一經其耳は。さておきつ。皆令滿足すぐれたり。

ませのうちなる　（同上）

笆のうちなる。白菊も。うつろふ見るこそ。あはれなれ。我等が通ひて。見し人も。かくしつゝこそ。かれにしか。

像法轉の　（梁塵口傳集所載）

像法轉の。時にては藥師の誓ぞ。たのもしき。一たび御名を。聞く人は。よろづの病なしといふ。

四大聲聞　（同上）

四大聲聞。いかばかり。よろこび身よりも。餘るらむ。われらは末世の佛ぞと。たし

其二

幢のかげは八千とせ。松花のいろは十返り。

其三

見るにめでたき。花のいろ。千とせの松に。降る雪。

其四

豊年の。しるしは。天に滿ちて。降る雪。

其五

年のうちに。咲く梅ぐれなゐにほひの。薄雪。

其六

日陰の糸に。むすぼゝれ。小忌の袖に。置く霜。

其七

おまへの池の。鴨どり。上毛の霜の。しろさよ。

其八

つい立ちて見たれば御階の月の。おかさよ。

其九

れば。春の雪こそ。降りかゝれ。

大宮權現　（日吉山王利生記所載）

大宮權現は。おもへば敎主。釋迦ぞかし。一たび此地を。踏む人は。靈山界會の。友となる。……僧都慶增作

其五　雜曲

上に載せたる種類に洩れたるをこゝに集む。

鬢多々良　（五節間郢曲）

びんだゝらを。搖がせばこそ。あゆがせばこそ。愛敬づいたれ。ヤレコトウトウ。

思之津　（同上）

おもひの津に。舟のよれかし。星のまぎれにおして參らう。ヤレコトウトウ。

物云舞　（同上）

其一

千世に萬代。かさなるは。鶴のむれゐる。龜岡。

いざ立ちなん。鴛鴦の鴨鳥。水まさらば。とくぞまさらん。

白薄様　（同上）

白うすやう。厚染紫の紙。まきわけの筆巴書いたる。筆の軸。ヤレコトウトウ。

春の野　（土佐日記所載舟歌）

春の野にてぞ。音をば泣く。わがすゝきにて。手を切る切る。摘んだる菜を、親や貧食るらん。姑や。くらふらん。カヘラヤ。よんべの。童女もがな。錢こはん。空言をしておぎのりわざをして。錢もゝてこず。おのれだにこず。

國のかた　（同上）

なはこそ。國のかたは。見やらるれ。わが父母。ありとしおもへば。カヘラヤ。

川そひ柳　（榮花物語所載）

川そひ柳。風ふけば。動くと見れど。根はつよし。

ほとゝぎす　（枕草子所載田植歌）

ほとゝぎす。おれよかやつよ。おれ鳴きてぞ。我は田に立つ。

夜は誰と　（同書所載）

よるは。誰と寝ん。常陸の。介と寝ん。寝たる。肌もよし。

つい立ちて見たれば。神のます內野の。森の影の。高さよ。

其十

つい立ちて見たれば。御隨身の。持ちたる。立松明の。しろさよ。

其十一

つい立ちて見たれば。衣被女の。おほさよ。

其十二

つい立ちて見たれば。舞姫の。おほさよ。

其十三

すさましく。いふなる。十二月の。月夜を。豐のあかりの。光は。めづらしくぞ。覺ゆる。

水猿曲　(同上)

水のすぐれて。おぼゆるは。西天竺の。白鷺池。しんしやう許由に。すみわたる。昆明池の。水の色。ゆくすゑ久しく。澄むとかや。賢人の釣を。垂れしは。嚴陵瀨の。河の水。月影ながら。漏るなるは。山田の筧の。水とかや。蘆の下葉を。とづるは。三島入江の。氷水。春立つ空の。若水は。汲むとも〳〵。盡きもせじ。つきもせじ。

伊立佐奈牟　(同上)

第三編　ちかむかしぶり

およそ鎌倉時代より室町東山の頃を經て德川氏の初期にいたる歌謡を載す。

其一　宴曲

當時宴席などにて流行せし一種の歌曲あり。節附など大方謠曲に類す。樂器は無くして扇拍子などにて謠ひしものならん。之を集めたるものには宴曲集、宴曲鈔、拾菓集、拾菓鈔、郢曲撰要等の書あり。

春

霞たなびく雲井より。春立ちけりな天の戸の。明くる氣色も閑にて。鶯さそふ春風。かすむとすれど淡雪の。下草は猶結ぼれて。岩間の氷解けやらず。爭でか春の越えつらん。不勿の關の東路。そよや有らまほしきは梅が香を。櫻の花に匂はせて。柳が枝に咲かせてしがな。百千鳥。木傳へば已が羽風にも。亂れぬべき物をな。誰におふせてか。啼く音も絶せざるらん。八重款冬紫深き藤浪。汀になびく池の面。取々にぞや覺ゆる。しひてや手折らまし。折らしてや挿頭さましやな。三月の永き春日も。猶わかなくに暮しつ。

また(同上)

男山の。峰のもみぢ葉。さぞ名が立つ。さぞ名が立つ。

花

春は義弓木の德ありて名を顯せり。櫻梅桃李這花の中にも勝れたる紅梅糸櫻初花櫻さけるより。梢にかゝる白雲。花の所の名高きは。石崇が住みし金谷苑。廬山の邊の錦繡谷。我朝の吉野山。龍田泊瀨志賀の山。奈良の都の八重櫻。大内山の花櫻。雲井の櫻をかざすなる。臨時の祭の舞人。花しづめの祭はげにさはこの神のなをぞたのもしき。去來穗別の天皇の。稚櫻の宮の花の盃。淳和の帝の花の宴天長八年の春なり。花見の御幸と聞えしは。保安第五の二月。萬代のためしをば。花にぞ留めし白川。瓶にさしたる花を見て。物思なしや老のはる。けふもこずと恨みしは。雪と降りし庭の花。楊貴妃が顏。雨を帶びたる花の枝。源氏の紫の上。霞の中の樺櫻。催馬樂の櫻人。雙調には柳花苑。花山の遍照僧正。花薗の右大臣とかや。花色衣花染。花うすやう花がたみ。靈山說法の。庭には。四種曼陀の花ぞ降る。法華に喩へし優曇花。いかなる匂なるらん。あはれ賢き御代なれば。あの風も枝をならさず。千年の春ぞ閑けき。

春野遊

上陽の春の野遊の曲紅錦をさらす春日影。閑けき風にや匂ふらん霞にもるゝ

梅花

夫れ青陽の春を迎へては。南枝の初花先ひらき。仙方の雪にたぐへて。淺紅芬郁の色をます。若木の梅の垣ごしに。誰袖なれし白妙。老木は深き匂あり。木ずゑに春の風をいたむ。凡梅花の徳有りて。其名をあまたに分ちつゝ。催馬樂には梅が枝。香の中には梅花方。色をも香をも君ならず。誰にかみせん難波津に。さくや此花冬籠。今は春なる。浪の初花立歸り。見て過ぎ難き花の香や。梅津の里に匂ふらん。かたじけなくも聖廟は。天下の鹽梅、風月の匂香ばしく。春を忘るなとばかりの。言葉の風に誘引はれて。根こじて移る飛梅。琴上に飛びし花の雪。軒端の梅も片敷て。上枝立枝の薄匂。凝花舍は梅壺。紅梅殿梅園梅の色榮花にはつぼみ花。やれ梅唐草唐梅衣の色の妙なるは。つぼみ紅梅梅重。あの雪の下の紅梅義孝の少將が昔語を思ひ出づる。世尊寺の梅とかや。誰蓑蟲のきたるらん。垣根の梅の花笠。五條わたりの春の夜の。在中將が問はずがたり。月やあらぬと讀みけんも。色ならぬ梅の花盛。光源氏に集めしは。薰合の色々。散り過ぎたりし梅の枝に。つけし言の葉の。わりなきは先齋院の其品。紅梅の大臣と聞えしも。此卷に名をや顯しけん。

珍しき。四五月のにはひの端山の峰の雲の外。二三更の間の夢の直の雨の後。枝には露を帯びつゝ。金鈴りゝと房なり。花は艶を施して。岩麝芬々と香ばしき。盧橘の香をもとめて。鳴くは昔や忍ばるゝ。有りつる垣根の同聲に。慕ひ來にける哀は。さすがに人には異なるや。花散里の時鳥。待つ日は聞かず日比經て。今夜聞きつと讀めりしは。音羽の山の時鳥。鳴きつる方を詠むれば。たゞ有明の月影の。強顏人の梢より。鳴音空なる戀ひわびて。心の中をかきくどき。岩瀬の杜の郭公。如來りしは。いかなる夜の事なりけん。汝が父なれど鶯は。賤しき垣根に木傳ひて。玉敷庭には音信れず。然るを一聲の山鳥は。夜となくひるとなく。聞かん事を松の戸に。明方かけてや名乘るらん。木の丸殿の曉。鶯の聲の中より巢立てども藍より青き聲あるは。たゞ郭公鳥のみならで。履手乞ては何かせん。賜女が不直を顯す。五常の中の信あるは。布穀に過ぎたる鳥ぞなき。何の田長に名もしるく。己鳴きては早苗とり。丸は田に立つ鶯に。にぎはひわたる君が代。げに治まれる時の鳥。寢覺の空の村雨に。袖に涙の色染めて。人の戀しき常盤山。唐紅にふり出でゝ鳴くは我身の類かと。露けき五月雨に。しげき菖蒲に水越えて。善惡も見えぬ夜の浪に。御船をとめし淀の渡。まだ夜深きにと詠めしは。いかなる船の中

花の香。花に鳴きては木傳ふ鶯は。この誰が家の軒端にか。珠簾いまだ卷かざるに。夢の枕に音信れて。人來と客を呼ぶとかや。臺頭に酒有りて。醉を勸むる砌に。爐下に卷を和するは。野澤に求めししゃの若菜。折る手にたまる早蕨。土筆と書けるは土筆。長安の薺の青き色。田中の井戸に引く田菘。吾子女よいかにとめてかし。形見に袖を連ねつゝ。摘みしらせばやとぞ思ふ。うつろふ情の色しあらば。花のもとに。歸らん事をや忘るらん。遊絲繚亂の色々。碧羅の天になびくなり。棠を口口て打ち解くる。花の下紐永き日も。あかでぞ暮るゝ山鳥の尾上の櫻さきしより。一木が本は綾なくて。見きと語らん都人に。いざうち群れて御吉野や。小泊瀨志賀の山越。片野のみのゝ櫻がり。雉鳴く野の夕煙龍田の奥の幾霞。々を分けて。誰栗栖野に宿らん。尋ね入る野のつぼすみれ。摘みてやくるらん今夜ねて。名殘の袖はしぼるとも。小野の芝生の露分衣。日も夕暮の歸るさ。

郭公

綠松の陰の本。紫藤の露の庭。胡蝶も霞に遠ざかり。溪鳥も雲に入りぬれば。待たるゝものとは我宿に。來向ふ空の時鳥。ほどとき過ぎず聞かばやと。おもふ心や誘引ひけん。その神山の昔年。其神館に。たちやすらひけん片岡の。もりて初音ぞ

な。

月

更闌夜閑にして。清明たる月の夜。明月峡の曉。庾公が樓に登れば。千里に月明かなり。殘月窓に傾きて。宮漏正に長ければ。打つや砧の萬聲。千度寢覺の床の上に拂ひもあへぬ露霜を。片敷く袖にや置き副へむ。月冷て風秋なり。この和琴緩く調べて。潭月に望むのみならし。索々たる絃のひゞき。松の嵐も通ひ來て。更けては寒き霜夜の月を。候山に送るなり。瀧水氷むせんで。ながるゝ事をや得ざるらん。月の出汐や御津の濱。松の下枝をあらふ波の。波間にうかぶ白妙の。月や砂を照らすらむ。月は明石の浦の棲居。槇の戸口の月影問はず語の夢もげに。忘れぬ節とや成ぬらん。いざ見に行かん更科や。姨捨山清見が關。廣澤住江難波瀉蘆間にやどる夜半の月。仰げば清き久方の。月の都は九重の。雲の梯にすみわたる。露臺の月の在明。月華門の夕月夜。秋の宮人の袖のうへに。移ろふ萩が花ずり。露もさながら色々の。玉かと見ゆる月影。いざよひに弓張伏待の月。朧に霞む三日月

秋興

蕭颯たる涼風。一時の秋を告ぐとかや。槐花雨に潤ふ。桐葉風涼し。林をいろどる

ならん。おぼつかなしや鞍橋山々路暮しつ往きやらで。只一聲のあやなくも。やがて明けぬる篠目の。信田の森の千枝の數。聞きてもあかぬ名殘は。いつも初音の郭公。紀路の遠山めぐりつゝ。今來の岡にぞ侍るなる。さかでも杉のむら立を。こゝを瀬にせん山田の原。又百千歸信濃なる。須賀の荒野になく比や。聲六月の郭公。

秋

取りし早苗の何の間に。稻葉の鳴子引替て。秋風吹けば七夕の。妻迎船に契りてや。時しもこゑをほにあげて。雲井をわたる雁金。遠の山路や霧こめて。友迷はせる旅人は。過さぬ秋や怨むらん。露分けわぶる篠の目。春は緑にみえし若草の。花は野邊に紅葉は峰に。いろどる露の玉ゆらも。日影を待ち得ざりけるは。垣ほにつたふ朝がほ。古枝にさける本荒の。小萩が花苅萱女郎花。ほのかに招く夕間暮。えう過やられざりける。同じ雲井のなどやらん。七月八月。九月になれば久方の。月の都に。光ぞさやけかりける。賤士假寢の稻莚。棹鹿の音に驚かされて。おどろかすなんなる物をな。山田の打木の寢覺は。この夜や寒からん。つゞりさせと鳴く蛬。いかゞはすべき暮るゝ秋の名殘をしとふ袂よりや。先は時雨そむらんや

河砂如來。諸佛菩薩受持名號。功德無量無邊。引接。頼もしくぞや覺ゆる。立ち舞ふ袖もしばし。追儺の夜半の宮人。

雪

瑞を豊年に顯す。尺に滿つ白雪の。降りて暮れ行く年月の。積りても。終に紅葉ぬ松が枝。緑も深き春くれば。雪間を分くる若草の。はつかに思ふ心は。うき人の末の松山浪越すかとみゆる。浦ちかくふりくる雪。々の光に明くる山の。尾上の里のさと人は。人目枯れ行く跡無き庭に。訪はぬを情と思へども。恨めしくや侍るらん、裴司徒が家の雪も。春過ぎ夏深く。積りて道は迷はず。瑤階を連ぬる庭の雪。瓊樹を植うる林の雪は。この一萬株の花ほころび梅が枝に。花降りまがふ淡雪。鶯の百囀すれども。猶風まぜの春の雪は。班女が閨の中には。秋の扇の色となる。孫康が窓には。雪を集めて光とす。朝に跡を尋ねしは。雪の中の口口ぬ駒とかや。夕に鳥立に迷ふ雪も。白符にみゆる箸鷹。皓鶴あざやかなるをうばはれ。白鷴は素をうしなふ。抑善政曇らぬ御代に。わふがたのしき九重の。豐の明の小忌衣。袖ふる雪はなほさえて。日影に消えぬ玉敷の。御垣にたえぬ御溝水。汀は氷峯のゆき。君にぞまよふ道は迷はずと詠めても。さえなばけぬべき命の。なほ又世にふ

紅葉。綠苔を掃ふもてなし。是皆秋の興を増して。色々にみゆる。百種千種の花のひも。早解けそむるいと萩に。亂れて結ぶ白露。薄霧の立つ旅衣の。袖かとまがふ初尾花。分け行く末もはる〴〵と。ほのかにきけば妻籠に。男鹿鳴く野の眞葛原。末枯れぬれば蟲の音も。絶々よわる夕暮。よしさらば今夜は。こゝに宿らん。男山。花にあだ名は立ちぬとも。我脱ぎ懸けん藤袴。なまめき立てる女郎花。げにそもえならぬ色なれば。あたりのゆかりまでも。心置かるゝ夕露の。手枕さむきかりがねの床。第一に心を病ましむる。何の處にかすぐれたる。月の明かなる前。此夜はじめて長ければ。かう〳〵たる星の。あけなんとする曉。壁に背ける灯の。幽にのこる窓の中。

冬

今日よりは。間なく時雨の。間無く時雨の。布留の神杉や。年舊りぬれば染あへなくに猶綠に。三輪の山本嵐や過ぎて明けぬらん。僅にのこる紅葉は。霜に枯れ行く淺茅生の。宿には人も問ひこず。板井の水も水草ゐて。水の上に霰ふり。小野の山里雪ふかし。跡だに見ねぬ細道。春の隣の近ければ。老木は花もうらやまし。厭ひてもいとふ方ぞなき。來る老樂の關守。さても佛名に成りぬれば。三千世界恒

も白雲の懸らぬ山も。あらしふきそふ木の本に消えずはありともちる花の明日は雪とや積るべき。如何に鳴海の恨みても。人を見る目は假にだに。憂節知らぬ呉竹の長夜懸けて契らばや。

袖湊

思立つより戀衣。袖の湊の深くのみ。鳴海の波の音に立てゝ。謂はぬは苦しき栲縄の長恨と成やせん。人心いさ末しらず花染の。かはりやすさ世の間の習を誰かは頼むらん。川船の着香に着も離れねば。うきたる中と思へども。寄てはかへる仇波の情を懸る言の葉。諸共におもふ聞は能やさは心筑紫陸奥信夫の奥千尋の海の底までも。入りなんとぞや覺ゆる。勝具の海のな。鵜の居る岩の挾間にも葎のやど萱が軒。土生の小屋のいぶせさも。苔踏ならす岩がね。重なる雲をわけても。太唐濤唐櫓械梶を取りても。渡さまほしき物をな。コノ不來の關守は。打ち寐る霄もありなん。置くらん露もさのみやは。袂にむすぶべきやな。契の末のかはらずは。虎臥す野邊鯨の寄る島にも。留めば留めなんや。如何なる思なりけん。反魂香に咽びし。けぶりの末の面影。生きても思に堪へしとや。この石李倫が別には綠珠が身をもすてけん。

る白雪に。市の南に望みし賣炭翁は。さゆる一尺の雪を悦ぶおもひあり。我宿の。薄おしなみ降る雪は。世々につもりても。跡絶たじとぞやおぼゆる。

戀路

戀路は如何なる習ぞ。思ひそめ入りそめしより。一方ならず濕ひて。峯の雪汀の氷ならねども。急雨か露か時雨か。すぞろに袖の濕ふは。雲か霧か霞か。つれなき中の隔の行末もしらず迷ふは。其や白雲の。かゝらぬ山もなく／＼ぞ。君には迷ふ迷ひても。愛も情も。露のかごともかゝらぬ身に。仕へつゝ。あの顧みもせぬ我宿の。軒端にしげる忍ぶ草の。種取らましを逢事の。最如此難岩にも。松は生ふなるものを。強てなど強顔色と知りながら。なはこりずまの浦に燒く海士だに愼思さへ。煙のするにや顯れん。後をば知らずたのみつる。今夜許や新枕。かへしもあへぬ睦語の。名殘は未だ盡きなくに。後夜將に明けなんとす。頻に鳥も音に立てゝ。つらき別在明の。月こそ袖に曇りけれ。又夕暮と契れども。憂習の言の葉は盡きても知らずや契らねば。待つとしも無く音信の。そよともすれば下荻の。末こす風をや恨むらん。見しや夢有りしやうつゝ。面影の。忘れずながら遠ざかる。雲井の鴈の玉章も。虚の空なる紀念かな。君が爲に衣裳に薫物すれども。匂有と

くらん露出でて拂ふと斗の情はよしや葦垣のひまこそなけれ勝に又とはれねば條目苅澤田に袖のぬれにぞ濡れし物思ふ。我衣手を見せばや妹に山城の六田の淀に小網差してしをるゝ麻の狹衣。

雲

鷄人曉を唱へて雲居に聞を驚かし。淮王の藥を嘗めし古夕の雲をや分つらん。行客の跡を埋むる白雲に都の空も遠ざかり。遠樹を隱す浮雲は玉の色にや紛れけん。五月雨の山本晴るゝ雲の外に一聲名のる郭公。雨と成り雲とや成りしとなげくころの跡訪ふ人の面影も淺からずぞや覺ゆる。雲冴え雪降る峰を踏み分けて。岩にや道を迷ひにし。飽かぬ名殘の曉に見る人うらむ横雲。曇る氣色のうれしきは暮待つ空に立雲。洞天に日暮れて沉々たる雲海。蓬來遠うしてこの漫々たる雲の濤。無常を思ふ夕暮の雲に立ちそふ煙の跡は何に消えぬらん。往事を忍ふ曉の雲や昔を隔つらん。立ち騷ぐ雲にしばしは迷ふとも終には御法の風吹きて業障の雲ぞ晴れぬべき。

朝

朝市の榮花盛にしてや。君の恩も事繁く。市を成す樂は。仕ふる道ある御代なれ

吹風戀

吹く風の目に見ぬからに身にしみて。思ふ心よ何ぞもかく。益無く迷ふ戀路の。すゑやは何合坂の。せきとめ難き。瀧津心は山川の音に立てゝも謂はばや物を無端。命も知らずかげろふの。岩垣淵の隱に身を捨てゝも。何かは忍ぶ思ふには負くる習も荒磯の。海の片貝この拾ひもて。會はぬ恨の數取。とちはや斯くばかり。見目の外に強顏は。枯れも終なでや思草。葉末の露のたまさかに。來てだに手にもたまらぬは。取滯り衣手に。咽ぶ涙の中に別れにし。うき面影を身にそへて。明け行く空に朝鳥の。音のみ啼かれて左右に。憂き物なれや人毎の。聞え苦しき世の中に。長居のあはん賴だに。懸けても如何仇浪の。寄邊定めぬ水の上の泡と消えなでや浮沈。水隱に喘餘。早川の瀨には立てねど。苦しき戀の淵となる。涙の床の浮枕。人賴なる夢をだに。結びも終ぬ片糸の。今將更に逢はずは何をか玉の緒にはせむ。

龍田川戀

戀すてふ。我名はまだき龍田川。渡らぬ水の分きてなど。あやなく袖ぬらすらん。知らず幾世か玉の緒の。ながらへにける伊勢の海の。海人の眞手口の。しばし置

さるらん。夕鹽夕なぎ夕波千鳥、鳴音さびしき夕間暮夕の殊にわりなきは。野分の風も身にしみて。思ひ亂れし節かとよ。忘るゝ間なく忘られぬ夕の空の村雲に。猶立ち迷ふ夕霧の。離の花の夕しめり。手折りし袖やそぼちけん。夕顔の花咲く宿の主やたれ。たそがれ時の空目は。げにおぼつかなくぞ覺ゆる。夕立の。晴れぬるあとの夕づく日。かげろふかたの涼しきは。雲間をわたる夕風。夕霜の。晩田の稻葉うちなびき。風にたまらぬ夕露は。結びもあへず亂るらん。墨染の夕の色のすごきは、樒つむ山路のそばづたひ麓の野守のはるゞゝと。そことも見えぬ歸るさに。時しもわれや入逢の、かねて思ひし有增より。猶心澄む山蔭の。五百代小田の夕嵐草の戸ざしの明暮は。袖も干しあへぬ霧の間に。聲よわりゆく故郷の。蓬が杣のきりゞゝす暮れ行く空の氣色誰も哀やまさるらん。夕は脆き涙かな。

山

五天竺國震旦國浪を隔てゝ、百萬里。其地は何くも。知らねども。名を傳へ聞く山々は鐵圍山須彌山。王舍城の嗜闍崛山。この觀世音の補陀落山。文珠のまします五臺山。悉達太子の修行せし阿私仙人が檀特山崑崙玄圃節風山驟布の泉は天

ば。夙夜の功をや重ぬらん。朝候日たけて出臣月卿かたぶけ雲客袂を連ぬるは。朝拝朝覲の其儀式鳳闕仙洞の春の朝。この朝餉に見そなはし。朝政もおこたらず。春のくる。葛城山の朝霞。かすみて出づる朝日影明るもしるきあまの戸。露とやいはん涙とやいはん。歸るさの袖うち拂ふ篠目。又寢の夢の名殘なれば、おきうき朝の床の上に。見る甲斐有りてうれしきは。契りし今朝の玉札除目の朝の上書槿の花咲く垣穂の朝露。朝置く霜の朝濕り。朝居雲の朝まだき。霧のまがきのへだては。きぬ〴〵の朝やつらからん。朝滿鹽の朝なぎに。網子調ふる海士小船。朝立つ旅のゆくすゑ。遠里遙に見渡せば。朝けの煙のもよひ。にぎはふ民のかまどは。さかゆる御代のしるしなり。小泊瀬雅武の尊いますがりき。泊瀬朝倉の宮に宮居して。賢き昔の御名をとゞむ。あの浦島の子がいにしへも。この御時の事かとよ。

夕

夕陽西に傾きて。東にかへりみれば。まだ麓は霧の隔てつゝ。山より遠の夕日影さすがに暮れや終ざらん。松のゆきあひの木枯に。つれなき色をのこしても外の木の葉や時雨るらん夕こえかゝる旅の空。かこつ方なき哀は夕やわきてま

海邊

蒼波路遠し。雲の波煙の波を凌ぎて。纜を解き舷を叩いて。商客の夢を驚かす。憂寢の床の梶枕。旅泊の哀を催す。滿來鹽の彌増に湊を隔つる伊豆手船の。名殘を留むる猪名の湊。難波入江の浦風に。末葉に波を亂葦の。世に定無き鳰鳥の。浮巣を仇にやたのむらん。伊勢の海の清き渚の玉敷く。濱邊に拾ふ貝しばしと思ふやすらひに。涼しき松の下蔭。烏羽玉の夜佐の浦浪の。荒磯に碎くる音立て丶。友迷はせる小夜千鳥の。聲澄む程にや成りぬらん。苫莚月軒を漏る月の。かたぶく空は天の戸の明くるもしらぬ篠目に。燒きさしたるいさり火の。煙に紛ふ朝霞。浦より遠の浦傳。憂かりし鹽の彌台に。沈みも終ぬ身と成りて。淺からざりし契も。如何なるしるべなりけん。あはと見る淡路吹き越す奥つ風に。鳴湊の若布海松房。玉藻貝苅干てふ里の。海士の間遠の衣冴えて。月影ながらやこほるらん。海漫々たり。年々に藥を尋ねし蓬萊宮。天水茫々として。更に氷に所無かりき。

海道

行々たる露の驛に。思を千里の雲に馳せ。渺々たる風の泊に。心を幾世の浪に碎かん。霞隔霧を凌ぎ。立ち別るれば旅の空。雲井の外にや成りぬらん。馴れ來し都

臺山。海中五つの神山は。龍伯人につられて。蓬來方丈瀛州のや。三の山こそ殘りけれ。秦皇帝の宿りしは。泰山五株の松の蔭。漢の武帝の上りしは。萬歳呼崇高山李將軍が瀧山。嚴子凌か富春山。淮陽山の一老商路山の夏黄公匡。盧山の杏羅浮山の橘。紫容山の白雲。銅梁山の翠黛。元和九年の秋八月。この上弦白樂天のわそびして。王順山ぞゆかしき。我國秋津嶋には。東山山陰山陽道。國々の名山。山又山の青巖。天武天皇大友の皇子を恐みて。芳野山に入りたまふ。淸和天皇は。十善の寶位を振り捨てゝ。水の尾の山に住み給ふ。前中書王の小倉山。惟喬の御子の小野の山。宇治山喜撰法師。花山の遍照僧正。室の戸ふかき北山。この御門の西山神社の勝れて尊きは男山賀茂山稲荷山春日熊野山。靈寺の殊に聞ゆるは。泊瀨山石山比叡山。書寫の山。弘法大師の入定は。紀伊國高野の山の奥。さても東の方にこそ。名高き山聞ゆなれ。相坂不破の中山佐夜中山高足山。都良香が記をつゞる。駿河の國の富士の山。在中將が踏み分けし。宇津の山邊の蔦かへで。足柄箱根の山越えて。道わるときの賢に。鎌倉山の榮えゆく。君が御代こそ目出度けれ。龜谷巨福山。大樹榮の幕府山。花の匂も紅葉も。いつも常盤の色ながら。嵐の聲も月影も。いく萬代を契るらん。

亂れて吹く風に。ひぢ笠雨の舊渡の。橋にかゝる歩人。雲晴れ行けば夏の日の。熱田八劔逸早く。惠に大鳴海潟。干潟も遠浦傳。天照神は星崎に。光も曇らぬ代にしあれば。願を滿の塩風も。猶吹送る二村山。打ち過ぎぬれば是や此。又國越堺川。遠里遙に立ち上る。煙の末の一筋に。哀は旅夕暮。

同

唐衣着つゝ馴れにし。着つゝ馴れにし妻しあれば。都をさへに忘れめや。外にのみ聞きわたりしを參河なる。蜘手に懸る八目の。澤邊に咲ける花の色に。移りやすき人心を。傷めて見る杜若武士の。持てる矢作に。取り副ふる梓の眞弓。春の澤田を作岡の。苗代水をやまかすらん。早藤澤に懸ぬる。宮路の山中中々に。向へば遙けき東路を。渡津かけて見渡せば。新今橋の今更に。立ち歸る橋柱。嵐の音も高足山に。さびしく立てる一松。直下と見下せば。鹽見坂雲水遙に連りて。眼正に穿なんとす。濱の砂はかぞへても。白洲が崎に居隔。入海遠き濱名の橋。渚の松が根年を經て。誰主ならば不審。朽ちぬる海士の捨船。岡邊の若草春といへば。引馬もさこそは斯らめ。水鳥の下居池田の薄氷。とけて臥られぬ旅の床。夢さへうとくや成りぬらん。佐夜の中山長經ば。命の中に又も越えなん幾秋と。君が千年を菊

をかへりみて。會坂越えて。打出の濱より遠を見渡せば。鹽ならぬ海に漾る。石山詣の昔まで。其面影の心地して。山田にかゝる潮の渡。矢橋を急ぐ渡守。長等の山を外にみて。淡津の原を後にし。勢田の長橋野路の末も時雨れて痛く守山の。篠に露數く篠原の。小竹分くる袖も濕りつゝ。日も夕暮にや成りぬらん。暮るも霞む鏡山。いざ立ち寄りて見てだに行かん。年經ぬる身はこの老いぬるか。老蘇の森の下草の。茲に駒を留めても。今夜は是處に假枕。草引き結び旅寢せん。更けぬるか人を咎むる犬上の。床の山はいさや何ぞいさや河。々風寒き曉の。寢覺に聞けば小夜千鳥の。岡邊の松に積る雪の。雪より白む篠の目に。小野の古道雪吹して蓑うらかへす旅衣。末野を廻れば伊吹山。みも冴暮す夕嵐に。氷りやすらん佐目井も。楢の葉柏はら〳〵と。降るや霰の音立てゝ。關の藤河浪越と。水のしがらみ行きやらで。誰かは心を留めん。不破の關屋の板廂。眞屋の餘に間荒なれば。時雨も月もたまらず。駒並べて渡る井せきの杭瀨川。雨にさはるは笠縫の。里にやしばし休らはむ。己々契や結ぶの森。羨ましくも立て置きて。枝差し通す二本。水水の流れて川嶋の。若墨俣や替るらん。危く渡す浮橋の。足重を越え早朝も。早赤池にや成りぬらん。初霜結ぶ絲薄。枯葉の尾花袖濕て。茅茨や切らぬ萱津の軒。々

つまでか。古屋の垣にしげらん。瓢簞屢空ければ。この又げには。草顔淵が巷に滋かんなるものをな。何とかや忍ぶにはあらぬ草の名に。軒端にしげるわびしさ。書絶えぬるか水莖の岡の眞葛恨みても。良枯まさる冬草。

船

一葉風に誘引はれて。水に浮べる昔より。河海を渡るはかりこと。波濤を凌ぐ便とす。されば艖くる小船の。さはりおほみ逢難。蓬壺を尋ねしも。船をして煙波の底に傳ふらん。潯陽に月靜なり。入江の船の琵琶の曲。東の船西の船。悄然として是を聞く。かの和琴緩くかき鳴らして。唐櫓さびしき船の中。葦間の月に棹してうたふ翁の釣漁の船。つながぬ船の定めなく。誰をさしてか松浦船。心づくしの波の上。年や經ぬらん長井の浦の渚に朽ちぬる拾船。外渡舟の。械の滴もたへ難き。三千里の須磨の浦傳ひ。客帆寒き夕鹽風や。船人さわぐ鳰の海。鸚鵡洲の夜の泊。隣船に歌の聲。愁ひて明月涙をやみがくらむ。玉をかざり錦いろ〳〵の。財力ある隋堤の。柳に繋ぐ船。

心

明王孝をもて代を治め。功臣忠あれば國を守り。忠孝ともに勇ある人を前とす

川の流も久し大井河。歩より渡ば前嶋の。岸邊に浪寄藤枝を手折や插頭の本ならん。手向の袖の追風に。靡くは神の木綿四手。

・草

聞くもやさしきさいたづま。春の緑と夏野の草の葉をしげみ。秋百草の色々。冬はさびしき枯葉まで。とり〲なる中にも。先は雪間の若菜卯杖つき。摘まばしきに春日野の。飛火の野守出て見よ。すぐろの薄角ぐめば。駒いばゆなりや粟津野に。はどろと折るは早蕨よ。とりたがへたるは相撲草。天の戸の冬やこれならん。御生所の葵のかづらと。五月に軒端に逢ふあやめな。五月雨すればしほたれぬ。いつかりほさん眞菰草。小菅の笠のひまもがな。早苗を急ぐ御田屋守。若苗とらんさをとめ。かの岡に草苅るをのこ。しかな苅りそ有りつゝも。君が來まさん御馬草。まうけんにせんやな奥山の。岩本小菅ねふかめて。思ふ心よ君が爲め。色どりにする槻草。うつろひぬるか何の間に。人の心は秋の露の。色々ごとにおけばこそ。千種もひもとけ咲いたる花を手にとりて。かきかぞふれば。七種のはな。尾花葛花。なでしこの花をみなべし。藤ばかま槿。たゞかりそめに結ぶ契かは。小野の草伏草枕。あだなる鶉の草ぐさ。あの壁におふる草の名の。いつまで草のい

般若心經心月輪。心の眞も悟り得てぞ。是等の御法もくもりなき。

酒

酒に名德の譽あり。しかも百藥の名を獻ず。萬年を延ぶる翫び皆情を催す中だちたり。花の春の木の本には歸らん家路も忘られ。紅葉の秋の林には。酒を溫めて日を暮らす。南樓の秋の夜もすがら。光をさしそふる盃の。かたぶく空を猶慕ひ香爐峰の雪の朝。簾をまきあげて。誰かは是を勸めざらん。されば唐の太子の賓客も。あの酒功讃に德をのべ。晉の劉伯倫は又常に。一壺の酒を持し。戰場に臨みても勇める色に誇るとか。古德もおほく愛しき。賢人もさすが捨てざりき。況んや與宴の砌には。なんぞ必しも人のすゝめをまたんや。身づからこの邊によらん鸚鵡盃のたはむれ。みな其限なつかし。酒の香ばしきのみならず。誰かは德に歸せざらん。百敷には酒殿酒司のことわざ。酒をたうべてと歌ふなるは。催馬樂の歌の詞なり。樂には酒胡酒清子。皆舞曲はなけれど。飲酒等勅を重ねても。猶輙からず聞ゆる。胡飲酒の曲ぞすぐれたる。孝行の實をあらはれしも。養老の瀧のいにしへ。いかなる酒の流ならんげにありがたかりしためしかな。

留餘波

るや。是周公孔子の敎ならむ。壁に納めし箱の底。ふかき心は玉くしげ。明暮心を磨きつゝ。百錬くもらぬ政。凡心を法として。すなほに仕ふれば。賢き御影を仰ぎつゝ。あまねき雨露の恩をうく。されば戴淵心を改め。周處思を飜す。誠なるかな彼是同心を直からしむ。緑竹紫藤の春の雨。黄葉梧桐の秋の露。皆節をしれる情あり。誰かは心なしといはん。いはんや花に木傳ふ鶯。水に住むてふ蛙の聲も。其心を動かす理あり。いざやさは心づからの色を見ん。移ろふ花をばよぎて吹け。治まれる御世の春風。その原や道に綾なく迷ひつゝ。心を知らぬはゝき木に。さま〴〵なりしあらそひの。上の品の上より。下れる品のしかすがに。此七夕の手づかひ賢き態までも。猶捨て果てざる類なれば心を前とや撰びけん。抑心を德として。其形見にくかりしかど。賢女の聞えありては。彼梁伯が孟光。項羽が勇める兵勢多しといへども。陳平張良の心の道にはせかれき。この山は關に心おかず。海又浪をさまる。かゝるのどけき御代なれば。心に愁ふる事もなし。戀ぞ心に任せねば。おり立つ田子の身づからが。とどめんかたも覺えぬ。よしさらば思はじよしなしとにかくに。心ひとつの思なれば。こゝろの外の法の道。筏の棹のさしてしも。げに彼岸をや求むべき。諸法は意識のなす所や。心地觀經心地品。あの

は。三千の客を賞しつゝ。わが床を下にあらたむ。文集の詞はひろけれども。上下の巻につゞまやかに。柿の本の太夫を。上とも更に云ひ難し。この赤人を下とも定めざりける。古今集を撰ばれ。千歌二十巻なれども。上下に是を分ちたる。內外の縑緗多くは。此字に巻を名付るなり。光源氏のわりなきは。若菜の上下なりけり。あはれをかけし小萩がもとに。露置添ふる雲の上人。下人して問ひけるは。伊勢より須磨の便とか。家々に替へて引くは。平胡籙の上帶。人にしられて解くなるは契を結ぶ下帶。うはものすそ下重。袖のうは露下ひもの。せきとめがたき涙を。上にはつゝむとすれども。下には通ふ思の色を。誰かは咎めざるべき。吹下嵐の山の麓の。其水上はとなせの瀧。筏を下す大井川。下は名に流れたるや。夕方の月の桂の川淀に。影さえわたる冬の夜。岩間傳にわき歸り。下行く水も上こす浪も。氷を碎く心地して。拂ひもあへぬ蘆鴨の。上毛の霜はむすべども。おのが青羽はつれなくて。つらゝの下にや朽ちぬらん。入江の波の下草。抑上は三世の諸佛。下闡提に至るまで。上求菩提の月の光。下又衆生に影を低る。されば兜率の雲の上を分け。彌勒の下りし阿愉舍國の輪周・那講堂の御法をも。上古無著世親と。この護法我賢論師より下末代に傳はる如來は金剛座の上。あの菩提樹下を定め

行く人も留まる袖も旅衣。馴れ來て後の悔しさを。今更思ふも甲斐無くて。勝引雨はやど嘆けども。駒並べて先前立つは涙にて。足柄清見不破の關守徒らに。肩は如何に名のみなれや。しひても留めぬ別路に。人を心に送らさゝらめや。猶行末にも會坂は。ありとこそ聞け足曳の。山より山の末迄も。嶺の白雲外にやがて遠ざかり行くは如何せん。

上下

上として哀れむは。君の君たる思なり。下として仰ぐは。あの臣の臣たる道とかや。かたじけなくもすべらぎは。雲上階下の御名にいます。天地もこれを司り。あらゆる世のことわざ。皆上下の字に治まる。先は青陽の始に。この上の子の日を定めて。若菜を奏する政。下の卯の日は必ず。卯杖を献ずとかや。或は上東上西門上鸞樓。上の戸上の御局或は殿上の下侍。この掃部寮に仰せて。垣下の座を敷くなるは。臨時の祭の庭の儀。上達部のなみ立ちて連ぬる袖の色々に。思ひ〳〵に手折るは。かざしの花の下枝。晋の王羲之が垂露の點。書き流しけん水莖の。上下の字に任せつゝ。逆卷く浪も立ち歸る。濁らぬ泉の流はげに。有り難かりしためしかな。齊の威王は隣國の民に禮をなし。我座の上をあたへき。孟嘗君が砌に

替らぬに。容ならぬ春の夜の。月やあらぬと詠めても。みし面影をや慕ふらん。あだし閑麗のせめて猶。透る心の逸早く。都をさへに住み浮れて。東路はるかに思ひ立つ。淺間の嶽の夕煙。富士の高峰は時知らぬ。山路の雪の曙。蔦の下道や打ち拂ひ。限無く遠く來にけりと來し方を。思ひ續けて。いと哀なる時しもあれ。名もむつましき鳥の音。隅田川原の渡守に。事問ひわびし旅の空。物うき鄙の栖居なれば。このかた〳〵心もいさやさは。都の土産にいざといはん。何かは忘れん御芳野の。田面の雁もひたぶるに。我方にのみ寄ると鳴くものを。久方の餘隈無心もて。誰に思を掛も賢神の。園垣。つれなき中の隔とや。狩の使の假にても。思ひ寄るべき便かは。子一つばかりの月影に。丑三つまでは語らへど。夢現とも分きかねてや。心迷に明けにけん。井筒にかけしまろがたけ。振分髪の戯。落穗拾ひし田邊の庵。春日の里深草水無瀬小野の里。菟原の郡高安の里をば闕ずや通ひけん。飯匙取りしわざまでも。忘れぬ情の妻なれや。

源氏

藻鹽草書き集めたる其中に。紫式部が筆の跡。疎かなるは無しやな。六條の院の女樂。傳へて聞くも面白や。頃は正月の二十日の空。をかしき程に成り行くに。御

て正覺をとなへ給ふとか。

伊勢物語

昔男在原の。其身は賤しといひながら。かたじけなくも楢の葉の。末葉の露の白玉か。何ぞと問ひし人も皆。あだなるちぎりの中様かは。心の奥は陸奥の。信夫の里の摺衣。亂るゝ涙より。袖に湊のさわぐまで。一方ならぬ迷にも。命つれなくながらへて。初冠の往年より。五十に餘る年月を。送り迎ふる春秋の詞の花の色々に。凋るゝ匂を殘しつゝ。思ひ思はず花筐。目並人は大幣と。名にこそ立てれ百年に。一年足らぬ白髪。立ち寄る考の波までも。情をかくるは武藏鐙。さすがに誰をか捨てはてし。我身一は

す事も容易ならず。常に宴席の間などの遊樂に供せしは。猶その内の面白き處を短く拔き出だして謠ひもし舞ひもせしさまは。今日なほ謠や能や好む人の間に行はるゝにても知るべし。此短篇のところこそ。謠曲大成以前の謠曲いはゆる當時の人の曲舞にして。むしろ普く當世に行はれたる歌曲ならんとは思はるゝなれ。樂器は横笛、大鼓、小鼓、太鼓を用ひて拍子を取り。役者にはシテありて一曲の主人公をなし。ワキ又ツレありて之が補助をなし。地謠ありて同吟する役をつとむ。これらの役を用ひずして。一人謠ふを獨吟と稱へ。樂器なしにてするを素謠といふ。又終に附したる高砂以下の最短篇は。小謠と稱へて。樂器もなく舞もなく。酒間一座の興に盃をさして其肴の代りに謠ひしをもて肴謠などと呼ばるゝものなり。

翁

翁「とう〳〵たらりたらりら。たらりあがりらゝりとう。地「ちりやたらりたらりら。たらりあがりらゝりとう。翁「所千代迄おはしませ。地「我等も千秋候はん。翁「鶴と龜との齡にて。地「幸心に任せたり。翁「とうとうたらりたらりら。地「ちりやたらりたらりら。たらりあがりらゝりとう。千歳「鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。地「絶えず滔たり。アリウトウ〳〵〳〵。千歳「絶えず滔たり。常に滔たり。君が千歳を經ん事も。天つ少女の羽衣よ。鳴るは瀧の水。日は照るとも。地「絶えず滔

前の梅も盛に。大方の花の木どもゝ。皆けしきばみ霞み渡るに。臥待の月差し出で、。先女三の宮を見奉れば。人より殊に少くして。櫻の細長に。柳の絲の御髮。こぼれかゝりて琴彈き給ふ御姿。鶯の木傳ふ羽風にも。亂れぬべくぞ覺ゆる。女御の君。今少し匂ひかゝる樣して。箏の琴をぞまさぐり給ひし。閒きこぼれたる藤の傍並無。早朝を見る心地す。紫の上は。葡萄染にや色濃小袿に。蘇枋の細長をぞき給ふ。いと花やかに和琴を。氣高こそかきたつれ。花といはゞ櫻に喩へても。猶物より異に見ゆるに。並てあらぬ御邊に。明石はけおさるべけれども。いとさしもあらぬもてなしゝて。高麗の青地錦の。端さしたる茵に。琵琶を打ち置きて。只氣色ばかりひきかけて。たをやかに使ひなしたる撥の持成。五月待つ盧橘の花も實もともに。押し折れたる喩は。何にも如何くたされん。

其二　謠曲

謠曲はもと神前にて奏する歌曲なりしが足利氏の時大に用ひられて幕府の式樂となれり。されば最初は簡單の曲なりしものも前後を補ひ首尾完結して長篇一番の作となり。此に至りて謂はゆる能樂なるものに進化し來りしなり。然れども一番の能樂となりては之を謠

て。皆此島に御出現中にも皇孫は。日向國に天降り給ひて。地神第四の。火火出見の皇子を御出生げに有りがたき代々とかや。天下を有ちたまふ事。すべて八十三万六千八百餘歳なり。かゝる目出度皇子たちに御代を楪葉の權現とあらはれおはします伊弉諾伊弉冊の神代も。唯今の國土なるべし。

上宮太子

欽明天皇三十二。睦月一日の夜半に。御夢想の告あり。金色の僧來り給ひ。后に告げて宣はく。我救世の願あり。則后の御胎内に。宿るべしとありしかば。后答へて宣はく妻が胎内は垢穢なり。いかで貴き御體を。やどし給はんとありしかば。僧重ねて宣はく。我は垢穢をいとはず。唯望むらくは人間に。着到せんが爲めなり。后辭するに所なし。ともかくもとありしかば。此僧大に喜びて。后の御口に。飛び入り給ふと御覽じて。曉月軒にかゝやき。松風夢をやぶりて。五更の天も明けにけり。帝このよし聞しめし。喜びの色をなし給ふ。后必ず聖人を。生み給ふべしとありしかば。隙行駒をつながねば。大抜提河の池の水。すまで濁れるごとくにて十二月と申すには。南殿の御厩にて。御產平安。皇子御誕生なる。厩戸皇子と申すも。上宮太子の御事なり。

たり、アリウトウ〳〵、翁「總角やとんどや。地「尋ばかりやとんどや。翁「やあ座して居たれども、地「參られんげりやとんどや。翁「千はやぶる神のひこさの昔より久しかれとぞ祝ひ。地「そよやりちや。翁「凡そ千年の鶴は萬歲樂と歌うたり。又萬代の池の龜は。甲に三極を具へたり。渚の砂さく〳〵として。朝の日の色を朗じ。瀧の水冷々として。夜の月鮮に浮んだり。天下泰平國土安穩。今日の御祈禱なり。在原や何處の翁ども。地「あはれ何處の翁ども。そやいづこの翁トウ〳〵。翁「そよや千秋萬歲の祝の舞なれば。一舞まはう萬歲樂。地「萬歲樂。翁「まんざいらく。地「まんざいらく。

淡路

然れば天に五行の神まします。木火土金水これなり。既に陰陽の相分れて。木火土の精伊弉諾となり。金水の精こりかたまつて。伊弉冊と顯る。然れども未だ世界ともならざりし。先を伊弉諾といひ。國土治まり。万物出生する所を。伊弉冊と申す。則ちこの淡路の國を初とせり。さればにや。二柱の御神の。巳凝島と申すも。此一島の事かとよ。凡そ此島初めて。大八洲の國を作り。紀の國伊勢嶋日向ならびに。四つの海岸を作り出だし。日神月神。蛭子素戔男と申すは。地神五代の初に

まへたりければ唯蜑人の栖むに異ならず。昔は幡洞紫山のうちにして。春秋を送り迎へて樂しみ盡くる事なし。今は苫屋の庇芦垣の。月もり風もたまらねば。晝もつらし夜もうし。女御更衣の。其拜所もなく。月卿雲客の拜趨もなし。只懷舊の御淚に。まどろませ給ふ夜半もなければ。この浪唯こゝもとに。立ち寄る心地して。須磨の浦の昔まで。おぼしめし出ださる。

歌占

一生は唯夢の如し。誰か百年の齡を期せん。萬事は皆空し。いづれか常住の思ひをなさん。命は水上の泡。風に隨つて廻るが如し。魂は籠中の鳥の。開くを待ちて去るに同じ。消ゆるものは再び見えず。去るものは重ねて來らず。須臾に生滅し。刹那に離散す。恨めしきかなや。釋迦大師の慇懃の敎を忘れ。悲しきかなや。閻魔法王の。呵責の言葉をきく。吝利身を助くれども。未だ北邙の煙を免れず。恩愛心をなやませども。誰か黃泉の責に隨はざる。これが爲めに馳走す。所得いくばくの利ぞや。これによつて追求す。所作多罪なり。暫く目をふさいで往事を思へば舊友皆亡す。指を折つて故人を數ふれば。親疎多くかくれぬ。時移り事去つて。今何ぞ渺茫たらんや。人とゞまり我行く。誰か又常ならん。三界無安猶如火宅。天仙

隱岐物狂

承久三年七月八日の日。時氏鳥羽殿に參じて申しけるは。世はかうにて渡らせ給ひ候ふなり。御出家なくては叶ふまじと。情なく申し上ぐれば。力およばせ給はずして。やがて御髮をおろされたり。綺羅の御姿をひきかへて。衲衣を御身に奉り。御似繪をかゝせ給ひて。七條の女院に參らせらる。女院御覽じあへずして修明門院と。御同車ありて鳥羽殿に。御幸ならせ給ひて。庭上に御車を。立てられければ一院も。御すだれをかゝげて。御顏ばかりさし出だして。唯とく〳〵。御歸りあれとばかりにて。やがて御すだれをおろされけり。程なき人目の御契り。御身も心も燃えこがれ。煙の中の苦しみもかくや。と思ひ知られたり。さらでだに悲しかるべき。初秋の夕暮に。あはれすゝむる折節もあり。秋の山風吹き落ちて。御身にこそはしみ渡れと。隱岐の海のあら礒の。新島守は誰やらん。御出家の後は。かくても鳥羽殿に。渡らせ給ふべきやらんと。御心安く思しめさるゝ所に。時氏又參じて。隱岐國へ流し奉る。御供には男女以上五人なり。前蹕の警衛もなく。百官の扈從するもなし。庶人の旅に異ならず。道すがらの御有樣。まことに哀れなりけり。扨も此島に。渡らせ給ひて。あまの郡かりたの郷といふ所に。御座をか

消え殘る雪の木芽山。東は伊吹おろしのはげしきに。霞まぬ月の餘古の海。南をはるかに見わたせば。三上犬上鏡山。見なれし夢の鳥籠の山。いざと答へてつゝめども。契りはよそに守山。猶もそなたのなつかしく。忍ぶ思ひを志賀の故郷。花園の花やちるらんと。思ひながらの旅に立つ。心や物に狂ふらん。比叡山と申すは。あまり名高き山なれば。言葉もおよびがたし。彼山につゞきて。次第に末を見わたせば。横川の水の末かとよ。比良の湊の川音は。あらしやともに流れ松。岩こす波のうちおろし。神といはふも白髭の。沖なる松の高島や。ゆるぎの森の鷺すらも。わが如く。ひとりは音をよも鳴かじ。彼よりも是よりも。唯此島ぞありがたき。童男化女が舟の中見ずは歸らじと誓ひけん。蓬萊宮と申すとも。是にはよもまさらじ。汀の淸水巖にかゝる青苔。青山おほひ懸りて。何れも共に青き海。緑樹陰しづんでは。魚も梢にのぼり。月海上に浮んでは。兎も波を走れり。すべて耳にふれ。目に見る事の何れかは。大慈大悲の。誓願にもるゝ事やある。

由良物狂

古人にあひ馴れて。偕老同穴あさからず。同じ契りと思ひしに。人の心の花かとよ。葛城山の峯の雲。よそに通ふと聞きしより。ねたくも人に。待つといはれじと

倘し死苦の身なり。況んや下劣貧賤の報に於てをや。何どか其罪輕からん。死に苦しみを受けかさね。業に悲しみ猶そふる。斬鎚地獄の苦しみは。臼中にて身を切る事。千段して血狼籍たり。一日の其中に。萬死萬生たり。劍樹地獄の苦しみは手に劍の木を攀れば。百節零落す。足に刀山ふむ時は。千肢ともに解すとかや。石割地獄の苦しみは。兩崖の大石。もろ〳〵の罪人をくだく。次の火煩地獄は。頭に火焔をいたゞけば。百節の骨頭より。炎々たる火を出だす。ある時は焦熱大焦熱のほのほに咽び。ある時は紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられ。鐵杖頭を粹き。火燥あなうらを燒く。飢ゑては鐵丸を呑み。渇しては銅汁を飲むとかや。地獄の苦しみは無量なり。餓鬼の苦しみも無邊なり。畜生修羅の悲しみも。我等にいかでまさるべき。身より出でたる科なれば。心の鬼の身を責めて。かやうに苦をば受くるなり。月の夕の浮雲は。後の世の迷ひなるべし。

島廻

此島の四方を遙に見渡せば。漫々とある海上の。水の煙は霞にて。里はそことも白波の。汀の松は麓に見え。山は高きよりまづ近し。北に向へば雁がねの。雲路を分けて歸る山。有乳の山のわら玉の。年の初のころなれば。待ちし花かと疑ふは。

の根を絶えて。清水寺を立ち出で丶。猶も思ひを志賀の浦。大津とかやに下りぬ矢橋の浦の渡船。さしてそことは白浪を。盗人とは思はで。東路さして賣られ行く。過ぎにし方も覺えず。行末も尙遠江の。懸川の宿に年たけて。又越ゆべしと思ひきや。命なりけり小夜の中山。なか〳〵に殘る身ぞつらき。

加茂物狂

げにや其神に祈りし事は忘れじを。あはれはかけよ加茂の川波。立ち返り來て行末の。誓ひを賴むあふせの末。憐み垂れて玉簾。かゝる氣色を守り給へ。我も其四手に淚ぞかゝりにし。又何時かもと思ひ出しまゝ。淚ながらに立ち別れて。都にも心とめし。東路の末遠く。聞くは其名もなつかしみ。思ひみだれししのぶずり。誰故ぞいかにと。かこたんとする人も無し。鄙の長路におちぶれて。尋ぬるかひもなく〳〵。其面影の見えざれば。尙其かたの覺束なく。三河にかゝる八橋の蜘蛛手に物を思ふ身は。いづくをそこと知らねども。岸邊に波を懸河。小夜の中山なかなかに。命のうちは白雲の。又見るべしと思ひきや。花紫の藤枝の。いく春かけて匂ふらん。馴れにし旅の友だにも。心岡邊の宿とかや。蔦の細道分け過ぎて。着馴衣を宇津の山。現や夢になりぬらん。見聞くに付けてうき思ひ。尙こりず

つゝみしに。男山の女郎花の。くねる心にあくがれ出でゝ。涙の雨の古里を。足にまかせて立ち出づる。由良の湊の泊舟。和泉國に着きしかば。信太の森の葛の葉の。しばし待たんと思へども。我には人の歸らず。訪はれしほどは待ち馴れし夕のさかひの鐘を聞き。難波の寺に參れば。彼國に生るゝ心地して。西を遙かにふしをがみ。入江の芦のかりの世に。いつまで物を思ふべき。濃き墨染に樣かへ。眞の道に入らばやと。思ひ長柄の橋柱。千度まで悔しきは。捨てざりし身の古へ。過ぎにし方の旅衣。春も半になりしかば。花の都に上りて。淸水寺に參れば。大慈大悲の日の光。艶々とある地主の櫻。まことに權現の誓ひかや。花のあたりは心して。松には風の音羽山。音に聞きしよりも。猶まさり貴さおもしろさに。下向の道もおぼえず。かくて夜に入ると。まどろむ隙もなくして。御名を唱へて居たりしに同じやうに通夜して。近くよりそふ女あり。語らひよりて申すやう。痛はしやかたがたは。思ひありと見えたり。思しめす事あらば。心の中を語りて。御慰みもあれかしと。懇に申せば。賴もしく思ひて。立ちよる陰もなき身なり。さまかへたきと申せば。痛はしき事かな。我が住む里にしばらく。足を休め給ひて。誠に樣をかへ給はゞ。然るべき尼寺に。引き付け奉るべし。とくとくと誘はれて。身を浮草

て今までも香椎の浦風の治まる御代となるとかや。

石橋

其外國土世界に於て。橋の名所さまぐ＼にして。水波の難をのがれ萬民富める世を渡るも。即ち橋の德とかや。然るに此石橋と申すは。人間の渡せる橋にあらず。己れと出現してつゞける石の橋なれば。石橋と名を名づけたり。其面僅に尺よりはせばうして。苔甚だ滑かなり。其長さ三丈餘。谷のそくばく深きこと。千丈餘におよべり。上には瀧の糸。雲よりかゝりて。下は泥梨も白波の。音は嵐に響きあひて。山河震動し。雨つちくれを動かせり。橋のけしきを見わたせば。雲にそびゆる粧ひの。たとへば夕陽の雨の後に。虹をなせる姿。又弓をひける形なり。遙に臨んで谷を見れば。足冷しく肝消え。進んで渡る人もなし。神變佛力にあらずは。誰か此橋を渡るべき。向ひは文珠の淨土にて。常に淸香の花ふりて。簫笛琴箜篌夕日の雲に聞え來。目前の奇特あらたなり。暫く待たせ給へや。影向の時節も。今いくほどによも過ぎじ。

白髭

迦葉世尊。西天に出世し給ふ時。大聖釋尊其授記を得て。都率天に住し給ひしが。

まの心とて。又歸り來る都路の。思ひの色や春の日の。雲井の影も一入に。柳櫻をこきまぜて。錦をさらす經緯の。霞の衣のにほやかに。立ち舞ふ袖も梅が香の。花やかなりし春過ぎて。夏もはや北祭。けふ又花の都人。行きかふ袖の色々に。貴賤群集の粧ひも。飜す袂なるらん。

香椎

皇后の宣旨の趣。詳に仰せありければ。日本は神國なり。賢王たり。いかで宣旨をそむくべき。しかも龍女の身として。八王の后に立たんこと。且は面目たるべしとて。此二つの珠をさゝげけり。干珠といふは白き玉。滿珠といふは青き玉。豐姫と。右大臣に持たせまゐらせて。三日と申すに龍宮を出で。皇后にまゐらせさせ給ひけり。彼豐姫と申すは。川上の明神の御事。あとめの磯良と申すは。筑前國にては。志賀の松の明神。常陸國にては。鹿島の大明神。大和國にては。春日の大明神。一體分身同體異名顯はれて。御代を守り給へり。其後皇后は。仲哀天皇の御爵を。かたじけなくも取り出だし。かす井の濱にある。椎の木の三枝に。置き奉り給ひしに。此香椎の芳しき事。諸方に滿ち〳〵て。逆風にも薫ずなる。圓生樹にも異ならず。さてこそ此浦本はかす井といひけるを。香しき椎の字に。書きあらため

ひて。二佛東西に去り給ふ。其時の翁も。今の白髭の神とかや。

高雄

それより高き自性身。大日法身の佛土なれば。是を高雄とは名づけ給へり。是又釋尊一代に限らず。過去久遠。未來永々に至るまで。番々の出世。ことの仔細なりと知るべし。代々の帝又。大智大悲の上人達の。修し行せし事どもは。異事に思ひ給ふな。然るに此寺を神願と名づけしを。宇佐の願とのみ知ることは。愚なり愚なり。天神七代地神五代の昔より。衆生濟度の其爲めに。靈地と定め置き給ふ所ぞと知れや知れ此寺を。あだに思ひ給ふな。さればにや。最澄空海此山に。修練年久しく。住みならひ給へば。峯には八幡大菩薩。麓には清瀧の。社壇甍を並べ。上求菩提の峯の嵐。下化衆生の谷の水音。何れも相應の有樣。見る人聞く人諸共に。畜類千行の粧ひ。骨髓に通り有りがたや。本尊は八幡の御守佛。淨瑠璃界の主尊なり。又兩界の曼茶羅は。三國相應の靈物。愚になどか思ふべき。神と佛の常のすみかと知るべし。

二人御子

さても燕丹太子。秦の始皇に禁獄せられ。老いたる母に見えん爲め。歸國の許を

我八相成道の後。遺教流布の地。何れの處にかあるべきとて。此南贍部州を普く飛行して御覽じけるに。漫々とある大海の上に。一切衆生。悉有佛性如來。常住無有變易の波の聲。一葉の蘆に凝り固まつて。一つの島となる。今の大宮權現の波止土濃なり。其後人壽百歲の時。悉達と生れ給ひて。八十年の春のころ。頭北面西右脇臥拔提の浪と消え給ふ。されども佛は。常住不滅法界の。妙體なれば昔。蘆の葉の島となりし。中つ國を御覽ずるに。時は鸕鷀草葺不合尊の御代なれば。佛法の名字を人知らず。こゝに此叡山の麓。さゝ浪や志賀の邊に釣を垂るゝ老翁あり。釋尊かれに向つて。翁もし此地の主たらば。此山を我に與へよ。佛法結界の地となすべしと宣へば。翁答へて申すやう。我人壽六千歲の初より。此山の主として。此湖の七度まで。蘆原になりしをも。正に見たりし翁なり。たゞし此地結界となるならば。釣する所失せぬべしと。深く惜しみ申せば。釋尊力なく。今は寂光土に。歸らんとし給へば。時に東方より。淨瑠璃世界のあるじ。藥師忽然と出で給ひて。よきかなや釋尊。此地に佛法を弘め給はん事よ。我人壽二萬歲の昔より。此所の主たれど。老翁未だ我を知らず。なんぞ此山を惜しみ申すべき。はや開闢し給へ。我もこの山の王となつて。共に後五百歲の。佛法を守るべしと。固く誓約し給

しなれど、秘曲にひかれて王琴の岩こす波や吉野川、水の綠も空色の。青垣山の山際に、天降りつゝ乙女子が其唐玉衣を。かなでそめしも我ぞかし。其時萬山雲つきて、明々とわる晴天に。一輪みてる夜の。清光何れの處にか。至らぬ隈もあらし吹く。松聲もこゑすみて。琴の秘曲にしたがひ。天女則ち舞ひうつる。月の花葛。雲の羽袖を飜して。左右颯々の妙なる舞歌の跡とめて。豊の明の明らけき。五節の舞姫の奏は今に絶せず。

須磨源氏

いともかしこき勅により。十二にて初冠。高麗國の相人の。付けたりし初より。光源氏と名を呼ばる。帚木の巻に中將。紅葉の賀の巻に正三位に叙せられ。花の宴の春の夜の。行衞も知らで入る月の。おぼろけならぬ契りゆゑ、年二十五と申せしに。津の國須磨の浦。海士人が歎きを身につみて。次の春播磨の明石の浦づたひ。問はずがたりの夢をさへ。現に語る人もなし。さるほどに。天下に奇特の告ありしかば。また都に召し還され。數の外の官を經て。其後うちつゞき。澪標に内大臣。乙女の巻に太政大臣。藤のうら葉に太上天皇。かく樂しみを極めて光君とは申すなり。

なげきしに汝を許し歸さん事。烏の頭白くなり。馬に角生ひたらん時。必ず歸國を許すべしと。綸言ありしを承り。燕丹天に仰ぎ。地に伏して祈ればげに孝行のかひありて。烏の頭白くなり。馬に角生ひたりしかば。綸言。汗の如くにて。燕丹を歸さるゝ。燕丹國に歸りて後。荊軻秦武陽を語らひ。咸陽宮に參内す荊軻は劍を拔き持つて。御衣の袂を扣へて。玉體にこそは近づけ。かゝりける所に。后のしらべ給ひける。玉琴に聞きとれて。荊軻秦武陽は。眠れるが如くなり。七尺の屏風は。跳らば何どか越えざらん。御衣の袂も。ひかば忽ちきれぬべしと。押し返し押し返し。三反しらべたまへば。始皇帝は聞し召し。御衣の袂を引つ切つて。屏風を飛び去り。銅の柱に隱れ給へば。せん方なくて劍を投げ奉れば。帝は恙ましまさで。荊軻秦武陽は。終に討たれけりとかや。

・吉野琴

清見原の天皇と。聞えさせ給ひしは。天武の御名なりけり。初めは大友の皇子に襲はれて。しばしは天ざかる。鄙の旅行といへども。ほどなく敵を亡ぼして。一天四海の波浪まで。治まる御代の。政。國家のためしにも。此御嘉例なるべし。然れば天も感應の。證驗まさにあらはれて、天の羽衣まれにてこそ。君が代にふるため

念妄りに起るとも。それも敢て拂はじ。糸を亂せる柳は。緑なる色を其まゝに。錦を織るてふ花はまた。紅の色の外ぞなき。かやうに悟ればたゞ。未悟の時に達はず。此未悟に至るをこそ。如來地とは申すなれ。

兵揃

去ぬる保元に。味方とありし清盛も。平治の今は。敵となつて。合戰數度に及びたり平家は三千餘騎。味方は僅五百餘騎。されども軍には。一度不覺の名を取らず。平家の大將重盛の。手勢五百餘騎。信頼が固めたる。郁芳門にさし向ふ。陽明門は僅に。義平が手勢十六騎。たとへば蟷螂が斧を執つて。龍車に向ふ如くなり。十六騎の兵は。鎌田兵衛政清。後藤兵衛實基。波多野次郎義通。佐々木源三。三浦次郎山内須藤刑部俊通。岡部六彌太忠澄。長井齋藤別當實盛。猪俣小平六範綱。熊谷次郎直實。金子十郎。平山武者季重。安達右馬允。上總介廣常。關次郎。片桐小八郎これらは一人當千の兵。惡源太十七騎これなり。

舞車

凡伊勢物語に見えたるは。以上十二人なり。第一は紀有常が息女。第二には忠仁公の御息女。清和天皇の后宮に。染殿の后これなり。第五には長柄の卿の御むす

松浦物狂

生國は筑紫肥前在所は松浦。わざと名字は申さぬなり。ある人の妻にていひしが。夫は讒臣の申事により。無實の科を蒙り。都へ上り給ひしが。かつて音信聞かざれば。死生をだにもわきまへず。あまり別れの悲しさに。ある夕暮に。我等唯二人。玉島や松浦のうらに立ち出づる。都の方へ行く舟の。便を待つべき所に。男一人來りて。我此船の船頭なり。御姿を見奉るに。世の常ならぬ人なれば。痛はしく思ひ申すなり。とく／＼船に召さるべし。都までは送り屆け申さんと。懇に語れば。誠ぞと心得て。手を合せ禮拜す。急ぎ船に乘り移る。其時水主梶取ども。順風に帆をあげて。海路を走り行くほどに。程なく津の國。須磨の浦につく。波の關もる所なれば。此浦に船をさしとゞむ。

徑山寺

涙を流す志。誠知られて早蕨の。手を合せ禮拜し。御僧の前にひざまづく。げにや昔も少林の。邊に立ちし雪の中の。芭蕉の僞りは。あらじと見えて哀なり。然るに宗門と申すは。一超直入如來地。其故をいかなれば。十界は悉く。唯一心の上にあり。一念不生の直路には。佛も衆生も何處にかさてあるべき。是ぞ誠の空界。邪

を報せんため。雷とならん時。禪室ばかりこそ。威光目出度いへ。いかなる勅使なりとても。內裏にまゐり給はずは。生々世々に此恩を。何とかは報ぜざるべき。此御歎きは。申しても餘りあるべし。いかなる勅使なりとても。二度までは參るまじ。勅使三度に及ばゝ。普天の下率土のうち。王土にあらずといふ事なし。さのみはいかゞと宣へは。菅丞相の御色は。事の外に變りつゝ。折節御前に。柘榴を置かれたりしを。おつ取り口に含んで。はら／＼と嚙み碎き。妻戸にくわつと吐きかくる。赤き柘榴は忽ちに。火焔となつて妻戸に。三尺ばかり燃え上る。僧正見給ひ。洒水の印を結んで鑁字の明を誦せしかば。火熱は消えにけりやな。其妻戸は山上の。本坊に今もありと聞ゆる。

花筐

かたじけなき御たとへなれども。いかなれば漢王は。李夫人の御別れを嘆き給ひ。朝政。神さびて。夜の御殿も徒に。唯思ひの涙。御衣の袂を濡らす。又李夫人は好色の。花の粧衰へて。しをるゝ露の床の上。塵の鏡のかげを恥ぢて。遂に帝に。見え給はずして去り給ふ。帝深く歎かせ給ひつゝ。其御かたちを。甘泉殿の壁に寫し。我も畫圖に立ち添ひて。明暮歎き給ひけり。されどもなか／＼。御思ひはまさ

め、第六は筑紫の染川の里の女なりけり、第十八鷲尾の卿の妹に。戀死の女これなり。十一は周防守在原仲平がむすめなりけり。十二には大和守。繼蔭の息女に。今の伊勢にてありしが。其名の所を書きかへて。后宮の上童に。猿子の前とぞ召されける。住吉の社に參りて。日數を送り祈念する。懇誠頻りに隙なくは。感應いかで無からんと。頼みを深くかけまくも。かしてき神の御前にて。靜に法施をまゐらせ。宮人と思しき老躰に此物語を尋ぬるに。いざとよ對面の初に。伊勢物語の奥儀を。くれ〴〵と語らんは。且は空恐ろし。且は道の聊爾なりとて。左右なう物をもいはざりけり。美人の中に取りては。何れか劣り優らん。

同

比叡山延暦寺の座主。法性坊の僧正とて。貴き人おはします。此人は三伏の夏の夜。五更も未だ明けざるに。九識の窓の前。十乘の床の邊に。瑜伽の法水を湛へて。三密の月をすまし見るに。妻戸をほと〳〵と。叩く聲すなり。誰なるらんと思召し。戸を開き見給へば。過ぎにし二月や。後の五日に。世を早うすと聞えし。菅丞相にておはします。不思議やと思召し。請じ入れ奉り。深夜の御光臨。何事にかはとありしかば。菅丞答へて宣はく。濁れる世に生れて。無實の讒言力なし。讒臣の仇

家の郷にありしに。里の長の獨姫。儲の君と持て成せば。鄙人なりといへども。其かこちかうたけて。心に情有明の。月にかゝる小夜時雨。やもめ男のあくがれて。宵々毎に通路の。關守に姿を見えじと。狩衣の袖をうち被き。指貫のそばを高く取り。足早に歩み行きつゝ。君が閨もる窓の隙。垣間見ぬれば妻しあり。はる〴〵來ぬる衣々の。別れとなれば戀しくて。三吉野のたのむの雁もひたぶるに。君が方にぞよると鳴くなる。それは秋狩る鹿の聲。妻戀の歌の心なり。又夏刈の玉江の蘆。惡しく語りなは。當座の恥辱家のは。ぢ。よし〳〵言はじ。唯酒飲うで遊ばん。

玉取

邪見偸盗は貧困の因縁。慈悲惻隱は。富貴榮花の基とかや。世に四恩あり。天地の恩。國王の恩。衆生の恩。父母の恩。中にも重きは。これ父母の恩とかや。重花は頑なる。父に仕へし其故に。虞舜の君といつかれ。郭巨は母を養ひ。孝行の心深き故。金釜を堀りしためしあり。酉夢父をうち。天雷終に身をさき。斑婦は母を亡じつゝ。靈蛇命を奪へり。無上世尊も其昔。阿難に對しおはしまし。恩重經を說き給ひ。叨利天に上りては。安居の法を說き給ふも。御母摩耶夫人の。孝養の爲めなり。君子の五常釋門の五戒までも。唯孝行の。心ぞ基なりける。

れども。物言ひかはす事なきを。深くなげき給へば。李少と申す太子の。幼くましますが。武帝に奏し給ふやう。李夫人は元はこれ。上界の嬖妾。くわする國の仙女なり。一旦人間に。生るゝとは申せども。遂に元の。仙宮に還りぬ。泰山府君に申さく。李夫人の面影を。しばらくてゝに招くべしとて。九花帳のうちにして。反魂香を焼き給ふ。夜更け人靜まり。風凄しく月あきなるに。それかと思ふ面影の。あるかなきかにかげろへは。尚愈増の思草。葉末にむすぶ白露の。手にもたまらではかどもなく。唯徒に消えぬれば。縹渺悠揚としては又。尋ぬべき方なし。悲しさの餘りに。李夫人の住み馴れし。甘泉殿を立ち去らず。空しき床を打ち拂ひ。古き衾古き枕。ひとり袂をかたしく。

横山

其ころ未だ荒鷹の。夜末の月の山に入り。野に出づる日の暮るゝをも。白斑の鷹を失ひて。鳥の落草かき分けて。尋ぬる鷹を。翁や知りて侍ると。下す宣旨もおもき鷹を。通決鏡にあらはしたり。是ぞ野守の鏡なる。又我朝の其昔。在原の中將。二條の后に參りしを。いかなる人か大君に。黄楊の小櫛の鬢の髮。さしたる科にふせられ。遠流の身となりひらは。當國に下りて。入間の郡三吉野や。今の川越の山

なり。其まゝきぬぐの。袖の名殘も引きとむる。心ならずも歸るさに。年月つもる心地して。又此浦に立ちかへり問へば行方も白波の。あはれはかなき契り故面影殘る海ぎはに。さそらへ出でし夕まぐれ。濱の眞砂を踏みわたる。蛙の道の跡見れば。ありし言の葉あらはるゝ。心を知れば疑ひも。涙ながらもつくぐと思へばよしな人界も。水の底なる鱗や。藻に住む蛙うたかたの。あはれ江による心なれば。六趣四生に廻りめぐる。車の輪の如く。鳥の翅や花に鳴く。鶯も同じみのりなる。言の葉を囀る。蛙こそためしなりけれ。

高野物狂

然れば末世の隱所として。結界淸淨の道場たり。中にも此三鈷の松は。大同二年の御歸朝以前に。我法成就圓滿の地の。しるしに殘り留まれとて。三鈷を投げさせ給ひしに。光と共に飛び來り。此松が枝の梢にとゞまる。然れば諸木の中にわきて。松にとゞまる其ためし。千代万代の末かけて。久しかれとの御方便。委しく舊記にあらはれたり。さればにや。眞如平等の松風は。八葉の嶺を靜に吹き渡り。法性隨緣の月の影は。八の谷に曇らずして。誠に三會の曉を待つごとくなり。然れば即身成佛の相をあらはし。入定の地を示しつゝ。深々たる奥の院。深山烏の

濡衣

昔筑前守なりける。人の息女のありけるが。尋常人の厭ふなる。繼母の中の讒言にて。蜑の衣をかり取りて。女の朝寢したりける。臥床に是をぬぎ着せて。さらぬやうにて置きたりしに。兼て心を合せつる。蜑人來りて我衣を。取らせ給ひていふぞと。さも心なき蜑衣の。ひとへに無き名をいひ付けたり。則ち盜人の事なれば。父これを聞きつけて。世の聞え見苦しとて。息女をやがて害しけり。其後彼女父が夢に見えつゝ。一首の歌を詠じけり。ぬぎ着する其たばかりの濡衣は。永き涙のためしなりと。いひ捨てゝさめ〴〵と。泣くと思へば夢さめぬ。それより人の習ひにて。無き名負ひたる其故に。濡衣といひ傳へたり。淺ましやそも前の世にいかなれば。人に仇をばなしつらん。今は又身の上に。報いの罪の廻り來て。憐みの親にだに。身を失はれ徒に。無き名を殘す例にも。ひかふる袖の濡衣を。乾しもせで苦しみの。海はいつまでなるらん。

蛙

昔壹岐守何某と申しゝ。雲の上人。あからさまなる此宮路に。行きとゞまりし蜑乙女の。かりの苫屋の濱びさし。久にもあらぬ一夜の契り。思ひの妻となりたる

すの逢ひがたき。親子の道すでにはや。思ひし鳥の別路の。行方は何處白露の。置所定め無き。身の果いかになりぬらん。

雪

抑も天のうるはひに。雨露霜雪の四つを立て。同じく雪月花の。三つの德を讃るにも。雪こそ殊にすぐれたれ。先づ春は梅櫻。咲くより散るまでも。雪を忘るゝ色はなし。夏は五月雨の。古屋の軒端暮れながら。庭は曇らぬ卯の花の。垣根や雪にまがふらん。夜寒忘れて待つ月の。山の端白き影までも。ふらぬ雪かと疑はれ。冬野に殘る菊までも。すは初雪と面白さに。山路のうきや忘るらん。

定家一字題

抑も定家の。一字の題に春はまづ。霞鶯梅柳。蕨櫻桃。梨雉や。鶴蛙なく菫薊躑藤。夏にもなれば葵。鵑霖。鵜の鳥に橘。螢や蟬に扇。蓮泉や秋は又。荻萩露の薄蘭。雁鹿虫に霧の月。鶉や鴫に菊蔦。椛や冬はまた。霈の霜の薄氷。霰霙に雪鴨。鷹衾椎とかゝれたり。

實方

されば心を種として。花も榮行く言葉の林。紀の貫之も書きたるなり。在原の業

聲さびて。飛花落葉の嵐風まで。無常觀念の粧ひ。これとても又常住の。皆令佛道。緣覺の相を成し給ふ。然れば時うつり事去るや。四季をり〳〵のおのづから。光陰惜しむべし。時人を待たざるに。貴賤群集の雲霞。かゝる高野の山高み。谷峯の風常樂の夢さめ。法の稱名妙音の。心耳に殘りみち〳〵て。唱へ行ふ聞法の。聲は高野にて。しづかなる靈地なりけり。

敷路物狂

げにや鷲の御山も。在世說法の砌こそ。雲の色も草木も。畜類も鳥類も。皆佛身を得たりしが。今はさびしく冷しさ。月ばかりこそ昔なれ。泥洹双樹の苔の庭。二千餘年の今までも。年々に名ばかりこそ。二月の。其夜に歸る夜半はなし。孤山の松の間には。よそ〳〵白毫の。秋の月を禮し。滄海の波の上には僅に紫臺の。曉の露をひ、かん人は。栴檀の種よりも生を得ず。唯赤白の。二諦を受けし故とかや。抑も地を走る獸。空をかける翅まで。親子の道のあはれさは。心なしともいひがたし。草木は地よりも生ずれども。雨露を得て養ひの。枝葉の綠榮え行く。花の父母の。惠みの春は絕えせず。げにやかぞいろは。いかに哀と思ふらん。三年になりぬ足引の。山橘の色に出でゝ。鳴く音はそれか郭公。ほどときゝ過ぐれども。世をうぐひ

で。碧岩の前に落つなるも。今更思ひ知られたり。花見ずはいかでか。此山に一夜明かさん。

初瀬六代

初瀬の鐘の聲。つく〴〵思へ世の中は。諸行無常の理り。かりに見ゆる親子の。夢幻の時の間と。かねてはかくと思へども。まこと別れになる時は。思ひし心もうち失せて。唯くれ〴〵と堪へかぬる。胸の火はこがれて。身は消ゆる心のみなり。さるにても我子の失はれんとしけるとは。聞けどもなほやさりとものの。頼みをかけまくも。かたじけなくも唯賴め。南無や大悲の觀世音。願はくは本よりの。御誓願にまかせつゝ。念彼觀音力。刀尋段々の功力げに。僞らせ給はずは。劍をも析らせて。我子を助け給へや。かゝりける所に。男一人來りつゝ。齋藤五まゐりたりと。申せば御母も。いかに〳〵と宣へば。御喜びになりたり。駿河の千本にて。既に斬られさせ給ひしを。上人其時に。駒を早めて走り下り。喜びの御敎書にて。助からせ給ふよし。申せば御母も。あまりの事の心にや。嬉しさとだにもわきまへず。唯茫然とあきれつゝ。有りがたの事やと。手を合せ給ふ袂より。覺えず落つる涙の。嬉しさ袖をだに。乾さぬや心なるらん。

平は。其心あまりて。言葉はたらずたとへば。しぼめる花の色なうて。匂殘るに異ならず。宇治山の喜撰が歌は。其言葉かすかにて。秋の月の雲に入る。小野小町は。妙なる花の色好み。歌のさまさへ女にて。たゞ弱々とよむとかや。大伴の黑主は。薪を負へる山人の。花の陰に休みて。徒に日をや送るらん。それらは和歌の詞にて。心の花をあらはす。千種を植うる吉野山。落花は道を埋めども。去年のしをりぞしるべなる。

鼓瀧

抑も春の夜の一時。花に清香月に陰。惜しまるべしや。時もげに。及ぶかたなき上旬の空。色も長閑き春の日の。流にひかるゝ盃の。手先さへぎる心かな。花前に酒を酌んで。紅色を飲むとかや。げに面白や盃の。光もめぐる春の夜の。有明櫻てりまさり。天花に醉へりや。流水も雪なりげにあくがるゝ春なれや。我と心にさそはれて。都ははるゞの跡に霞のうす衣。日も夕暮は過ぐれども。其まゝに長居して。花に名殘は有馬山。鼓の瀧に時移り。宿を花にかるもかく。猪名野も近かりき。床は露の篠枕。深山がくれの曉に。遠寺の鐘もかすかにて。深洞に風すぼく。老檜悲しむ。聲も秋をうるはすや。猿子を抱いて青嶂の影にかへりぬ。鳥花を含ん

しとかや。其故は素戔鳥尊の。女と住み給はんとて。出雲國に居まして。大宮作せし所に。八色雲の立つを。御覽じて尊の。一首の御詠かくばかり。八雲たつ出雲八重垣妻ごめに。八重垣つくる其八重垣をと。神詠もかたじけなや。今の世の例なるべし。さても我須磨の浦に旅寢して。詠めやる明石の浦の朝霧と。よみしも思ひ知られたり。人麿世になくなりて。歌のこと止まりぬと。紀貫之も躬恒も。かくこそ書きおきしかども。松の葉の散りうせず。正木のかづら永く傳はり。鳥の跡あらん其ほどは。よも盡せじな敷島の。歌には神も納受の。男女夫婦の媒とも。此歌の情なるべし。

阿古屋松

げにや雪ふりて。年の暮れぬる時までも。終に朽ちせぬ松が枝の。老木になれども年々に。又若みどり立枝の。幾春の惠なるらん。秦の始皇の御爵に。あづかるはどの木なりとて。異國にも本朝にも。今以て此木を賞翫す。千年まで限れる松も今日よりは。君にひかれて萬代までの春秋を。送りむかへて御影山。高砂住の江辛崎や都の富士もあづまぞと。三保の松原くりはらや。あねわの松の人ならば。都のつとにさそひなん。あはれ阿古屋の松陰の。名高きやたぐひなかるらん。

飛鳥川

正月雨に物思ひ居れば郭公。夜ぶかく鳴きて何地行くらんと。よみし心も今更に。身に白糸の夜となく。晝ともわかであだし世の何時までとてかながらへん。思へばあはれ胡蝶の夢に。遊ぶぞ今日の現なる。御田屋守今日は五月になりにけり。急げや早苗生ひもこそすれ。げにや五月雨の。晴れぬ日數もふり行くに。明日とないひそ飛鳥川の。水田の深みどり。立ちつれいざや植ゑうよ。抑もいくばくの田を作ればか郭公。四手の田長を朝な〳〵よぶと。詠せしも誠なり。四手の山田の時過ぎて。此土に來り聲立てゝ程時過ぐる世の中の。教を知る故に。時の鳥とは申すなり。五月山郭公を高み時鳥。鳴く音空なる戀やする。我も戀しき綠子の。行方もしらで足引の。山路に迷ひ里に出で。國々浦々わたる日の。つもる三年の春過ぎて。夏もはや五月雨の。振分髮の玉かづら。かゝる業はいつか身に。馴衣袖ひぢて。いざ〳〵早苗取らうよ。

俊成忠度

凡歌には六義あり。これ六道の巷に詠じ。千早振神代の歌は。文字の數も定めなし。其後天照太神の御兄。素戔烏尊より。三十一字に定め置きて。末世末代のため

賢受不可捨ぞかなしき。はじめ華嚴の御法より般若に及ぶ四十餘年。未顯眞實の方便。成佛の誠あらはれて。妙法蓮華經ぞかし。正直捨方便。無上の道に到るべしげにありがたや此經は。逢ふ事難き優曇華の。花待ち得たり。嬉しの今の機緣や。

笠取

すなはち一花開けぬれば。天下は皆春なりしに。梅花雪を帶びて。白妙まじる青柳の梢に遊ぶ花鳥の。翼にかける花の粧ひ。鶯の笠に似たればとて。梅の花笠とは名づけ給ふ。御詠に青柳を。片糸によりて鶯の。縫ふてふ梅の花笠との。叡感あまねき御神詠。末の世までも匂久しき山高み。花の香久に殘ればとて。天の香久山と。今に名高き山とかや。かやうに叡感の普き花の姿をも。笠に似たりと勅。妙なる梅花の顏。色美しき粧ひまで。こぞめの氣色匂ひそふ。柳の眉のかざりまでも。花笠の縫ふてふ。いともかしこき御詠なり。御侍御笠と申せ宮城野の。木の下露は雨にまさりて。夕日かげさすや三笠の山高み。こゝにも薄青の。衣笠山も近かり所から此山陰の秋の暮。さゞるともよも濡れじ。笠取山のもみぢ葉ば。行きかふ人の袖のみぞ照るや木の間の雨ならば。拂はずと袖やほさまし。

反魂香

立ち去りて跡もなく。かたちも消えてあとは唯煙ばかりぞ反魂の。孝行の子ならば。何とやしばしも留まらぬ。傳へ聞く漢王は。李夫人の別れ故。甘泉殿の床の上に。ふるき衾の恨を添へ。九花帳の中にて。此香の煙を立て。月の夜更け行く鐘の聲。艶容便々と氣色だつ。玉殿にうつろひて。李夫人の御姿。ほのかに見え給へり。三五夜中の新月の。夜半の空隈なくて。長安雲上の粧ひ。氣色に至る心地して。皆感涙をうるはせば。君も龍顔に御袖をおしあて丶。反魂の煙のうちに。立ちよらせ給へば。又李夫人は消え〳〵と。時雨もまじる有明の。見えつ隱れつかげろふの。有るか無きかの御姿。かくやと思ひ知られたり。

身延

ありがたや衆罪如霜露惠日の光に。消えて即身成佛たり。彼調達が五逆の緣に。沈みはてにし阿鼻の苦しみ。終に法義の基に變ず。況んや受持し讀誦せんをや。唯一時も結緣せば。これぞ眞の佛心なる。歸命妙法蓮華經。一部八卷四七品。文々悉く。神力を示しのべ給ふ。濁亂の衆生なれば。此經は保ちがたし。しばらくも保つものは。我即歡喜して。諸佛も然なりと。一乘の妙文なるものを。深着虛妄法。

神八幡大菩薩羽生の宮と申すなり。木曾殿頼もしく思召し。さては此軍に勝たんことは決定なり。急ぎ社壇にまゐりて。願書をこめんと宣ひ。覺明をこそ召されけれ。覺明仰に隨ひ。甲を脱ぎ高紐にかけ。鎧の引合より疊紙を取出だし。箙なる矢立の筆を墨に染め。願書をかいて奉る。抑も此覺明は。本は南都の住侶にて。法相儒學の其外。和漢の才覺ありしかば。水を流す如くに。願書をかいて讀み上ぐる。木曾殿よろこびおはしまし。御鏑矢を寶前に。まゐらせさせ給へば。御供の兵ども。上矢の鏑を一つづゝ。かの寶前に捧げて。南無歸命頂禮。八幡大菩薩とて。皆禮拜を參らする。さるほどに夜に入れば。敵に大勢と見えんために。千頭の牛を集めて。皆角の先に火をともし。追ひはらひ給へば。光虚空に滿ち〳〵て。五月闇おぼつかなくも暗き夜も。暗からぬ星を集むれば。敵大勢と心得。左右なうかゝり得ざりしに。今井の四郎六千餘騎。追手より鯨波を作れば。後の林の五萬餘騎。一度にときをどつと合すれば。敵取る物も取りあへず。倶利加羅谷にばつと落つ。馬には人人には馬。落ちたり〳〵七萬餘騎は。倶利加羅谷の深きをも。淺くなるほど埋めたりけり。

吉野

粉川寺

吉野山の花見の行幸には。妹背の中をはなれ。須磨明石の月に休らふとても。三年の日數を徒に過し。其後筑紫筑前に下り。朝倉の里といふ所に。暫く御座をなし給ふ。茅茨根を切らず。柴椽削らずして。黑木に作る宮柱。立つ木の枝も自ら。すなほになれば君が代に。住む事安きためしとて。其まゝ住ませ給ひしかば。それより名づけつゝ。木の丸殿と號すなり。世につゝむべき事なり。唯人の如くすべらぎや。豐の明の風すごく。忍びて住ませ給ひしに。參る人は必ず。其名を名乘り歸るべしと。論言の趣き。和歌の浦波朝倉や。木の丸殿に我居れば。名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ。かやうに詠じ給ひしかば。其後まゐる人は。事問はず名乘りけりげにやかしこき世語の。遠きたとへは恐れあり。我等もいざや名乘りつゝ。名乘りのためとゆふつけの。取りあへぬ御酒もり。いざうたひかなで遊ばん。

大刀堀

されば味方には無勢にて。多勢をほろぼすべき。其謀をめぐらすに。木曾殿の御陳より。東の方を見わたせば。比は壽永二年。五月半の事なるに。夏山やしげき青葉の陰よりも。朱の玉垣ほの見えて。片そぎ作りの社壇あり。問へば當家の御氏

をも作れり。唯人は。亂舞歌道に交りて。心をのぶることぞ。萬年の齡なるべし。

更級

悲しきかなや惡業は。山よりも高く。善根は塵ほどもたくはへず。かく三途の故鄕にかへつて。本願の臺に至らざらんは。歎の中の歎。かなしみの中の悲しみたり。草露ことごとく春を迎へては。花葉共に綻び。松風に先だつ山櫻は。はやく無明の夢覺め。月に落ちくる曉は。別離の雲にや沈むらん。花橘の香をとめて。昔の人を尋ぬれば。親疎幾何か去りぬ。かゝる思ひの深み草。妹とわが寢る常夏の。花一時の夢の世と。知らでや人の迷ふらん。

東國下

抑も此盛久と申すは。平家譜代の侍。武畧の達者たりしかば。鎌倉殿まで知ろしめしたる兵なり。是にてはからひがたしとて。關東へ渡し遣はさる。花の都を出でしより。音に鳴き初めし加茂川や。末白川をうち渡り。粟田口にも着きしかば。今は誰をか松坂や。四の宮河原四つの辻。關の山路のむら時雨。いとゞ袂や濡らすらん。知るも知らぬも逢坂の。嵐の風の音さむき。松本の宿に打出の濱。湖水に月の影見えて。氷に波やたゝむらん。越を辭せし范蠡が。片舟に竿をうつすなる。

抑も大和島根のうちに於て。百千の君の政を助けしより。明らけき時に必ず是を起し。治まれる世には頻に。これを集め給へり。げに目に思ひ心に見て。うつしあらはす言の葉の。直きを先として。其僻なきが如しと。歌人も詠吟しけるとかや。難波津の流は淺くして。底をはかりがたく。淺香山の道は又。狹くして際を知らざりき。水無瀨川の霞の中には。秋のあはれを忘れ。高圓山の風の前。雲なき月を望みつゝ。おどろが下葉を踏み分けて。道ある世を知らせんと。閨の衾のさゆるにも。藁屋の風を憐みの惠なれや大君の。御心内に動き。言葉外にみつとかや。立田川のもみぢ葉は。濃きも薄きも錦にて。吉野の山櫻は。嶺にも尾にも雲の端の。かゝるながめはつきぬ世の。君も人身をあはせ。心をのべて花衣。野邊のかづらのはひかゝり。林にしげき木の葉の。天長く地久に。幾萬代の道ならん。

倭國

さればにや畜類も。歌を詠ずるためしあり。濱の眞砂を歩みゆく。蛙の道の跡見れば。住吉の海士のみるめにあらねども。かりにぞ人に又訪はれぬると。水に住む蛙まで。和國の風俗。神の御代より始まれり。さればにや。大國に詩を作る諸人は。三界をながむるに。花鳥風月松風の私語。鼓は波の音。笛は龍の吟を以て。舞樂

の花を宮路山。わたうと今橋うち渡り。雲と煙の二村山は高師の名のみして。野里に道や作らん。波の滿干の汐見坂。れうかい天に連りて。雲に漕ぎ入る沖つ舟。吳楚東南にわかれて。乾坤日夜うかべり。歸らんことをしらすかに。しばしおりゐる水鳥の。下安からぬ心かな。夕汐のぼる橋本の。濱松が枝の。年々に。幾春秋を送りけん。山はうしろの前澤。夜は明方の遠山に。はや橫雲の引馬より。天龍川も見えたり。衰へはつる姿の。池田の宿鷺坂。旅寢にだにもなれぬれば。夢も見附の府とかや。岸邊に波を掛川。佐夜の中山なか〳〵に。命のうちは白雲の。又越ゆべしと思ひきや。うき事をのみ菊川や。旅の疲れの駒場が原。かはる淵瀨の大井川。河邊の松に事問はん。花紫の藤枝の。幾春かけて匂ふらん。馴れにし旅の友だにも。心岡部の宿とかや。蔦の細道分け過ぎて。着馴衣を宇津の山。現やゆめになりぬらん。湊にちかく曳く網の。手越の川の朝夕に。思ひを駿河の國府を過ぎ。清見が關のなか〳〵に。とまらぬ旅やうかるらん。薩埵山より見わたせば。遠く出でたる三保が崎。海岸そことも白波の。松原ごしに眺むれば。梢によする海士小舟。西あまりに袖やぬらすらん。由井蒲原をも過ぎしかば。田子の浦囘も近くなる。天唐土扶桑國。ならぶ山なき富士の根や。半天の雲を重ねらん。浮島が原を過ぎ

五湖の煙の浪の上。かくやと思ひ知られたり。昔ながらの山里も。都の名をや殘すらん。石山寺を拜めば。是亦救世の悲願の。世に越え給ふ御誓ひ。たのもしくぞや思ゆる。勢田の長橋かげ見えて。長虹波に連れり。浮世の中を秋草の。野路篠原の朝露。おきわかれゆく旅の道。いく夜な〳〵を重ねらん。露も時雨も守山は。下葉殘らぬもみぢ葉の。夕日に色やまさるらん。古へ今を鏡山。形を誰か忘るべき。いさむ心は無けれども。其名ばかりは武佐の宿。まだ通路もあさぢふの。小野の宿より見わたせば。斧斤を磨きし磨針や。番馬と音の聞えしは。此山松の夕嵐。旅寢の夢も醒井の。自ら結ぶ草枕。誰か宿をも柏原。月もまれなる山中に。不破の關屋の板庇。久しくならぬ旅にだに。都の方ぞ戀しき。垂井の宿を過ぎ。行けば。靑野が原は名のみして。皆夕霜の白妙。枯葉にもゝる草もなし。かゝる浮世に靑墓や。捨てぬ心を株瀨川。洲の俣海馬の渡りして。折津茅津打過ぎて。熱田の宮に參れば。蓬萊宮は名のみして。刑戮に近き此身の。不死の藥やなかるらん。蘆間の風の鳴海潟。干汐につるゝ。捨小舟。さゝで沖にや出でぬらん。さゝがにの蜘蛛手にかゝる八橋や。澤邊に匂ふかきつばた。在原の中將の。はる〴〵來ぬと詠ぜしも。今身の上に知られたり。猶行末は白眞弓。矢矧の宿赤坂。松にかゝれる藤がえの。稍

の小篠原一夜かり寢の宿はなし。蘆の葉分の月の影。かくれて住める昆陽の池。生田の小野のおのづから。此川波に浮寢せし。鳥はゐねどもいかなれば。身を限りとは歎くらん。千山の雨に水まさり。濁れる時は名のみして。晒すかひなき布引の瀧つ白波音立て丶。雲のいづこに流るらん。五千舟の名殘に。五百の舟を作りて。貢を絶えず運びしも。武庫の浦こそ泊なれ。福原の故鄕に着きしかば。人々の家々も。年の三とせに荒れはて丶。梟松桂の枝に鳴き、狐蘭菊の草むらに。隱れ住みなれし。名殘も波風の荒磯やかた住み捨て丶。唯海士の子の住所。宿も定めぬ假寐かな。相國の作りおかれし所々も荒れはて丶。古宮の軒端月もり。金玉をまじへし粧ひ。花の甍を集めしも。唯今のやうに思はれて。昔ぞ戀しかりける。釋迦一代の藏經。五千餘卷を石に書き。蒼海の底に沈めて。一居の島をつきしかば數千艘の舟を止め。風波の難を助けしは。ありがたかりし形見なり。世をうき浪のよるべなき。身の行末ぞ悲しき。かくて主上を初め奉り。皆御舟に召されけり。習はぬ旅のうき枕。思ひやるこそ悲しけれ。南殿の池の龍頭鷁首の御舟ぞと。思ひながらも寒江に。釣の翁の棹の歌。まだ聞き馴れぬ聲々に。冲なる鷗磯千鳥。友よびつれて立ち騷ぐ。風帆波にさかのぼり。櫓聲は月をうごかす。和田の岬をめ

しかば。左は潮水波よせて。蘆花淺水の浮島の。上毛の霜をうちはらふ。右は蒼海はるかにて。漁村の孤帆かすかなり。頓教智解の衆生の。火宅の門を出でかねし。羊車鹿車大牛の。車返しは是かとよ。伊豆の國府にも着きしかば。南無や三島の明神。本地大通智勝佛過去塵點の如くにて。黄泉中有の旅の空。長闇冥の巷までも。我等を照し給へと。深くも祈誓申しける。雪の古枝のかれてだに。二度花や咲きぬらん。

西國下

壽永二年の秋の頃。平家西海におもむき給ふ。城南の離宮に至り。都を隔つる山崎や。關戸の院に。玉の御輿をかき据ゑて。八幡の方を伏し拜み。南無や八幡大菩薩。人皇始まり給ひて。十六代の尊主たり。御裳濯川の底清く。末をうけつぐ御惠などか捨てさせ給ふべき。他の人よりも我人と。誓はせ給ふなるものを。西海の波の立ちかへり。二度帝都の雲をふみ。九重の月を詠めんと。深く祈誓申せども。惡逆無道の其積り。神明佛陀加護もなく。貴賤上下に捨てられ。帝城の外に赴く。何となり行く水無瀬川。山本遠くめぐり來て。昔男の音になきし。鬼一口の芥川。弓胡籙を携へて。駒にまかせてうちわたす。馴れし都を立ち出で丶。何處に猪名

たる事はなし。漕げや漕げとよ渡守。〳〵。押しに押せとよ渡舟。利生方便の朝霞。喜水波盜賊の恐れなく。災難を去りつゝ。牛馬眷族豐にて。眞實たのしかりけり。喜びも命も。年々に四方鏡。幸も榮も。より〳〵に滿つ汐の。むねのかどをたよりにて。利生の門に入りなんや。〳〵。

弓矢立合

桑の弓蓬の矢の政。まことにめでたかりけり。あら有りがたや〳〵。いざや我等もげいやうが射術を傳へけん。弓張月のやさしくも。雲の上まで名を上ぐる。弓矢の家を守らん。〳〵。武士の八十氏川の流まで。水上清しや弓張月。あはれめでたかりける。治る御代の時とかや。釋尊は〳〵。大悲の弓に智慧の矢をつまよつて。三どくのねむりを驚かし。愛染明王は弓矢を以て。陰陽の姿をあらはせり。されば五大明王の。文珠は養由と現じて。れいをとつて弓を作り。おんせいをあらはして矢をなせり。又我朝の神功皇后は。西土の逆臣をしりぞけ。民堯舜を榮えたり。應神天皇八幡大菩薩。水上清き石清水流の末こそ久しけれ。

思妻

昔は鸞鶴の衾の上に。比翼の語ひ睦しかりしに。今は翡翠の衾の下に。連理の契

ぐれば。海岸遠き松原や。海のみどりに續くらん。須磨の浦にもなりしかば。四方の嵐も烈しくて。關吹き起ゆる音ながら。後の山の夕煙。柴といふものふすぶるも。見馴れぬかたの哀なり。琴の音にひきてめらると詠じけん。五節の君の此浦に。心をとめて筑紫舟。むかしは上り今下る。波路の末ぞはかなき。かたぶく月の明石瀉。六十餘りの年を經て。問はず語りの古を。思ひやるこそ床しけれ。船より車の乘り移り。しばしこゝにと思へども。須磨や明石の浦づたひ。源氏の通ひし道なれば。平家の陣にはいかゞとて。また此浦を漕ぎ出だす。汐瀨は浪も高砂や。尾上の松の夕嵐。舟をいづくにさそふらん。室の泊り苫舘。風は隙もる夕月夜。遊女の歌ふ歌の道。うき世を渡る一ふしも。誠にあはれなりけり。習はぬ旅は牛窓の瀨戸の滿汐心せよ。げにあらけなき武士の。梓の弓の鞆の浦。賑ふ民のかまどの關。夢路をさそふ浪の音。月落ち鳥鳴いて。霜天に滿ちて冷しく。江村の漁火もほのかに半夜の鐘の響は。客の船にや通ふらん。蓬窓雨したゝりて。知らぬ汐路の楫枕。かた敷く袖やしをるらん。荒磯波の夜の月。枕みし影はかへらず。

舟立合

名所はさま〴〵多けれど。海邊殊にすぐれたり。乘物多しと申せども。舟に過ぎ

はいかでまさるべき。中に祇王は好色の。其名にめでゝ參殿の。はじめよりも色深く。比翼連理の其契り。天長く地久し。漆膠の約と聞えしに。時に佛と號しては。獨りの遊女あり。名にし負ふ佛神の御感應か。人心うつればかはる習ひか。かれに心掛帶の。引きかへて舞の袖。げに面白く花やかに。見るこそやがて思草。言の葉もなか〱。耻かしき餘りなりけり。

富士山

頂上は八葉にして。內に萬池を湛へたり。神仙人氣の境界として。四季折々を一時にあらはし。天地陰陽の通道として。希代の端驗他に異なり。凡富士の根は。年に高さやまさるらん。消えぬが上に積る雪の。見れば異山の。高根〱を傳ひ來て。富士の裾野にかゝる雪の。上は晴れて青山たり。何國より降るやらん。雲より上の白雪。然れば此山は。仙境隱里の。人間に異なる。其端驗はまのあたり。竹林の王妃として。皇女に備はりて。鏡に不死藥を添へつゝ。別るゝ天の羽衣の。雲路に立ち歸りて。神となり給へり。帝其後かくや姬の。敎に從ひて。富士の根の上にして。不死の藥を燒き給へば。煙は半天に立ち昇りて。雲霞迪風に薰じつゝ。日月星宿も。則ちあらぬ光をなすとかや。さてこそ唐土の。方士も此山に登り。不死藥を

朽ちはてゝ。うつろふ人の秋の色に。身を木枯の森の露。亂るゝ蓬が閨のうち。ひとりながむる月影も。涙に曇る此秋かな。春は佐保姫の。霞もかゝる花の雪散りかひくもる朝草に。鳥きゝ籠めて朝鳥狩。夏は鳥屋ぎはの。鷹に雌を忘れ飼。鳥屋飼ふ隙もかけ鶉。ねり雲雀取小鷹がひ。秋はもみぢ斑の。鷹を取りかふ草むらの。小鳥を付くる荻薄。亂るゝ野邊を狩衣。冬は野されの鷹狩の。鳥の疲をぬすだつを。押しつれて行くまで。羽に沓を結びて落草の。露の契りも忘れつゝ。野邊を栖に鷹飼の。心は空に楢柴の。馴れぬ歎きをこりつみし。昔を何と忍ぶ身の。思ひ亂るゝ夕暮は。誰か塒の雪とだに。消えぬ浮身の後の世の。妄執を助け給へや。

祇王

一去不來の名殘。相離涙別の袂に。いづれの日を經てか乾すことを得ん。誰あつて終日を語らはんや。あはれなりける。世の中の夢現。昨日に替り今日に覺め。まぼろしの夢も幾程ぞ。我等苟も。遊女の道をふみ初めし。心はかなき色好みの。家櫻花しぼみ。唯埋木の人知れぬ。世の變りや葦垣の。まめなる所とて。初花薄露おもみ。穗に出でがたき身なるべし。こゝに平相國。淸盛の朝臣とて。今の世の武將たり。誰かは恐れざるべき。金玉玉殿に美女の數を集めては。漢宮紫臺も。これに

禁中にうつし、主上此木に向はせ給ふによつて。玉簾に木向といふ紋をあらはす。かほどめでたき櫻の德。誰かは仰がざるべき。中にも此櫻は。舊院の御愛木。花のあらたに開けし日は。初陽のうるほふ事を。喜ばせおはしまし。鳥の老いて歸る時は。薄暮の曇れるを。悲しみ給ひしに。無常の嵐吹き來り。花より先に散り給ひぬ。何ぞ心なき草木といふとも。歎きの色に出でざらん。此春ばかり墨染に。咲けとの詠歌はづかしさに。花色の袖をかへ。墨染櫻老木とて。もとより着たる苔衣。皆人は花の衣になりぬなり。苔の袂よせめて何ど。乾かざらんや雨とふり。嵐にも誘はれ。日數にも散るあだ櫻。うき世の春を隱家と。墨染衣二月の。佛の御弟子に。なるぞうれしかりける。

元服曾我

げにや人の親の迷ふ事。まことに闇にはあらねども。子を思ふ道にはたどるといふ。雲井の鶴は月影の。さやけき空と思へども。是れも子をのみ思ひの闇に。聲をかはして鳴くとかや。我等はまた親の跡に。殘りて物を思ひの露の。雨ともふり涙ともすぎ。何時かは晴れん心の闇の。名をや埋まん苔の下。朽つるは浮世の袂かな。龍門原上の。土に身は成るとも。屍の跡を思へたゞ。惜しみても惜しむべ

求め得て歸るなれ。これ我朝の名のみかは。西天唐土扶桑にも。ならぶ山なしと名を得たる。富士の粧ひ。誠に上なかりけり。

内府

されば潁川の水にて耳を洗ひ。首陽山に蕨を折りし賢人も。勅命をばそむかず。其上心地觀經の文を見るに。世に四恩いふ。天地の恩國王の恩。父母の恩衆生の恩。其中に。最も重きは朝恩なり。普天の下。王土にあらずといふことなし。さればにや。十善萬乘の御位は。もろ〳〵の神たち。結番し守り給ふとか。神だにものがれ得ぬ。王位を侵し給はんは。神罰も恐ろしや。此上は事の由をうかゞはせ給はゞ何ど聞しめし直されて。嵐の山松の。幾久しさも限らじな。其上これにより君と臣とを比ぶるに。親疎をわく事なく。君につき奉ることそ。忠勤の法と聞くものを。道理と僻事をならぶるに。いかで道理につかざらんと。涙を流して宣へば。我子に諫められ。心ならずもとまりたり。

墨染櫻

それ櫻は諸木に勝れて。水を生ずる德あり。是によつて火炎の恐をなす事なし。さればにや。帝都を花洛と號し。陽花殿月花門。左近の櫻に至るまで。此花の德を

小野小町は衣通姫の流なれば、強からぬ歌の風情にて、春風の吹き乱したる青柳のいとよわ〳〵とよむとかや。大伴の黒主は、山人の薪はとらでいたづらに。花に心を留めて。木蔭に日をや暮すらん。戀の心の何とてか。歌の種とはなりぬらん。

小侍従

本よりの身は幻の假の世に。かたり出づるも時の間の。契の末はかれまさる。忍の軒も荒れ行けば。朝には鸞鏡の影を惜しみ。遠山の眉ずみは。匂を忘れ夕には。鴛鴦の衾のひとへなる。河さぎの影うとき。獨の床ぞ物うき。よしや何事も。常に住むべき世の中の。道ぞと恨みとにかくに。絶えぬ思ひをいへばえに。岩根によりて終に身は。底の水屑と成り果てゝ。其まゝ通ふ三瀬川。歸らぬ道を歎きしに。思ひの外なる吊ひの。逢夜の鳥は物かはと。いひしにまさる言の葉を。殘して頼む後の世を。歸るべき道芝の。露をや結び置きけん。

近江八景

あれに見えたる比良の山。小松が原に吹く嵐は。山市の晴嵐も。かくやらんと思はれ。眞野の入江の洲崎の眞砂は。雪かと見えて。江天の暮雪に異ならず、あら面

きは後名の嘲されば大國に。千里をかける虎は。一毛を惜しんで。吹き來る風を含みて。其身をかへて死すとかや。日本の弓取は。其名を末代の家に惜しみ。一命を輕んずるも。是皆めいけいに。本文を思ふ心なり。身は一代名は末代。理りや世の中は。電光朝露石の火の。あるにもあらぬ草の露。消ゆる境は夢なれや。今の我等が有樣を。思ふもうき命の。惜しからぬ身なれども。本望を遂ぐるまでを。賴むたよりや兄弟。主從共にすご〳〵と。髮を生やして祝言の。言の葉そふる初元結。行方はめでたかるべしや。親孝行もかくばかり。さこそは草の蔭に。我等を守り給ふらん。

室君

裁ち縫はぬ衣着し人もなきものを。何山姫の布晒すらん。佐保の山風長閑にて。日影も匂ふ天地の。開けしもさしおろす。掉の滴りなるとかや。然れば春すぎ夏たけて。秋すでに暮れ行くや。時雨の雲の重りて。峯白妙に降り積る。越路の雪の深さをも。知るやしるしの掉立てゝ。豐年月の行末を。はかるも掉の歌うたひていざや遊ばん。

山本小町

ほどに縁のなき子をば。何したにたび給ふぞと。故もなき文珠に。向ひて恨みかこちて。せめて我子の沈みし。一所に身を投げて。淨土の縁となりなんと。思ひ切りたる我等なり。導師も憐みて。我跡とひてたびたまへ。

鴛鴦

されば鏡には影。月には雲水には波。我に境界の念あり。さても拙き浮世ぞと。思ひ知れども捨てやらぬ。妄執の縁こそ恥かしけれ。獨刈る蘆の丸屋のさびしきを。誰かは問はん哀しる。鴛鴦の衾のいたづらに。荒れにし床や涙ちる。露と答へて。消えぬぞ恨なりける。水に住み雲井にかける心にも。浮世の網は離れえず。契りの末かけて。殘る心の有明の。月は五障の雲晴れて。空も緑の柳にて。花は紅も隔てなき。木々の梢の其まゝに。草木國土皆。佛體と知るぞうれしき。

浦下部

いかにあれなる道行人。其先へ若き男の修行者つれて行きけるに逢ひたるか。何其方へも見えぬとや。急ぐとすれど年寄の。足弱車やりかねて。同じ道をやめぐるらん。先だつ心は足引の。山路は雪に隔たれども。通ふ心は親子の契り。追ひつき袖に取りつきすがりつゝ。うたてや老が身を。捨てゝ何國に行き給ふと。恨

白やと見るほどに。いとゞ心のすみ渡る。堅田の浦の釣舟の。沖より家路に急ぐをば。遠浦の歸帆かとうち詠め。雲の一むら殘れるは。夜の雨の名殘か。扨比叡山の鐘の聲を。遠寺の晩鐘かと打聞き。それ辛崎の洲崎に。翅を垂るゝ沙鷗。平砂の落雁に之をなぞらへ。扨洞庭の月には。鏡の山をたとへたり。誰を漁村の夕照に。釣垂るゝものとは思ふべし。釣垂るゝものと思ふべき。

丹後物狂

我等も元は此國の。近きあたりに住みしなり。態と其名は申すまじ。子の無き事を歎き。彼御本尊に祈りをかけ。獨の男子を設くる。たま〳〵あひなす一子なれば。挿頭の花。掌の玉。袖の上の蓮花と。又たぐひなき餘りにや。惡まざるも叱り。思はざるに勘當せしは。これぞ狂亂の初めなる。子は幼き心に。諫むるをば知らずして誠に惡むぞと心得。夜にまぎれて家を出で。彼橋立に立渡り。浦の波間に身を投ぐる。父母後悔千万にて。せめて變れる姿をも。あひ見ばやと思ひて。果てし所を尋ぬれども。水泡の波間に消えて跡もなし。思ひの餘りに。心空にあくがれて。狂人と成りぬれば。夫婦共に家を出で。國を廻りて尋ぬれど。其面影の無ければ。いとゞ涙の故郷に。二度立歸りて。此橋立にまゐりつゝ。恨めしの御本尊や。か

人此由を。紂王に申せば。怒り給ひて西伯をに羑里縛め置かれたり。西伯の臣下どもこれを愁ひ歎きて。名高き美女や其外。かず〴〵の寶を奉る。大きに喜び給ひて。此一人の美女にても。西伯をゆるすに足りぬべし。況んやさま〴〵の寶をやとて。則ち囚を免し。剰へ弓箭を司る。征伐の職を給はりぬ。西伯は猶又洛西の地を奉り。炮烙の法を今より止められよと望みしに。是をもやがて免されぬ。悦びをなして歸りつゝ。いよ〳〵政事正しく。其名四方に聞えしかば。諸侯皆來りつゝ虞芮の訴人間かずして止まり。畔を讓りし樣しは。末の代までもありがたし。さて後夷の國々を。數多從へ豐邑に。都を作り住み給ひ。百歲齡を保ち給ひし跡を。我そのまゝに受け繼ぎて。太公望を師としつゝ。周公旦を輔佐となし。いよ〳〵國家を靜めんと。思ふ心の行末。天に叶ひし故やらん。八百の諸侯從ひ。紂王を伐たんといひしを。我未だ天命を知らずとて。諸の軍を引き具してまづ歸りぬ。

人麿

それ人間に於てをや。尊き賤しき人每に。生死のいかで無かるべき。彼歌の大祖柿本の太夫。石見の國にありし時。いかに問へど名を明かさず。やがて奏聞申し

むるもなか〳〵。涙に咽ぶばかりなり。

日本王代記

凡人皇の御次第。神武綏靖安寧懿德。孝昭孝安孝靈。孝元開化崇神十代。垂仁景行成務仲哀。神功應神仁德履仲反正允恭二十代。安康雄略清寧顯宗。仁賢武烈繼體安閑。宣化欽明三十代。敏達用明崇峻推古。舒明皇極孝德齋明。天智天武四十代。持統文武元明元正。聖武孝謙癈帝稱德。光仁桓武五十代。平城嵯峨淳和仁明。文德淸和陽成。光孝宇多醍醐六十代。朱雀村上冷泉圓融。花山一條三條後一條後朱雀院後冷泉院七十代。後三條白河堀河鳥羽崇德近衞後白河。二條六條高倉八十代なり。安德後鳥羽土御門。順德後堀河四條後嵯峨後深草。龜山後宇多九十代。伏見後伏見後二條。花園後醍醐。光嚴光明崇光後光嚴後圓融百代。後小松稱光後花園後土御門。後柏原後奈良院。正親町後陽成院。仙洞までは百九代。當今までは百十代四海波靜にて。萬民時を仰ぐなる今上皇帝の御代こそ久しかりけれ。

武王

然るに我父の西伯。此事を深くいたみて。人を憐み民を撫で。遠きをなつけ近きを惠む。其德あまねく廣き故に。天下三つにして其二つは西伯に歸服したり。或

されば春夏秋を經て。草木の花に戯るゝ。胡蝶と生れて花にのみ。契りを結ぶ身にしあれど。梅花に縁なき身を歎き。姿をかへて御僧に。言葉をかはし奉り。妙なる法の蓮葉の。花の臺を頼むなり。傳へ聞く唐土の。莊子があだに見し夢の。胡蝶の姿うつゝなき。浮世の中ぞあはれなる。定めなき世といひながら。官位も陰高き。光源氏の古へも。胡蝶の舞人いろ〳〵の。御舟に飾る金銀の。瓶にさす山吹の。重の衣をかけ給ふ。花園の胡蝶をさへや下草に。秋まつむしはうとく見るらんと詠めこし。昔語を夕暮の。月もさし入る宮の内。人目まれなる木の下に。宿らせ給へ我姿。夢に必ず見ゆべしと。夕の空に消えて。夢の如くなりにけり。ゆめの如くにちりにけり。

不斷櫻

然れば代替り時移りて。寺の炎上せし時に。其灰の中より。一本の櫻木生ひ出でたり。程なく葉を垂れ枝を並べ。何時も櫻の咲く故に。不斷櫻とは申すとや。其後稱德天皇の御宇かとよ。絶えず櫻の咲く事を。君聞召されつゝ。度々の勅使あつて都に移し植ゑ給ふ。雲の上人とり〴〵に。色に染み香にめでゝ。南殿の御遊。淺からずこそおぼえけれ。然るに春宵一刻の盛をなし。一夜に枯れて見えければ。

ければ。叡慮に叶ひ敷島の。便の櫻三芳野の。花を雲かと詠めしは。治まる御代をたとへ。歌の聖と木綿四手の。神の再來なりけるを。後にぞ思ひ白玉の。幼き人の御行衛。波の千鳥のうたかたに。須磨のかり寢の夜の月。かたぶく影に、身をつくし。覺束なしやみるめ苅る。あまりつゝむも心なし。何國より御入りぞ。名乘り給へ少人。よし〳〵名のり給はずとも。風の便あるならば。花の行方は有るべしやと。夕暮になりにけり。いざ諸共にひれ伏さん。

豐干

人あつて借問すれば。隨時の二字を答へて他の語なし。樂しんで獨こうをすつぎ。則ちさいすひに是を添ふ。曾て虎に乘じて松門に入れば。各衆僧驚懼する。ある時豐干たま〳〵。山行せしに不思議やな。兒の啼聲を聞きしかば。立寄て委しく端倪を問ふに。舍なうして孤なりと答へ申せば。誠にあはれを催し。拾ひ得たりと心得。拾得と彼を名づけつゝ。豐干樣々養育す。かゝりける所に。何國より來りけん。拾得の如くなる。寒山といへる童子來り。常に遊樂の戲れの。淺からざりし有樣は。から〳〵大笑して。言語も更に常ならず。

胡蝶

の殿造。三葉四葉に立並ぶ。庭の石木も村雨に濡れて涼しき窓のうち。架上に積める書千巻。書院の飾り硯墨の。古き代々かけて。うつす鏡は銅雀臺。南蠻かんばんのかつらばち。白砂青石は長へなるしやうびりやう。薫風にひゞく風鈴。ちゞむとう〳〵と。東西南北の風を問はず。中央のしよくのはくさんに。煙たえ〴〵殘りつゝ。扨大ひらの本尊は。牧溪和尚の觀音。同筆の龍虎鳥だすき。たすき香爐に三具足。青磁の色ひえて。橘の色繪下草は。胡蝶の夢の內。南苑に遊ぶ樂。つきぬ座敷のかず〳〵に。見所多き眺望の。馬瑙殿渡殿泉殿。樓につゞける落間には。ちゝふかんだうの引物。かけいやうの山水。違へる棚のうちはへて。てうしやうが筆と打ち見え。菓子の數をや集めけん。さうかんの水さし。一瓢の水もおのづから。せん〳〵のつくすつぼやどり。どうへきの比にかけ添ふる。れいしつるつきつるつぼ。きちんのちやはにせいしつようへんゆてきけんさん。當世見ゆるはいかづきや。くわいとうとめんの。數ならぬひげのもておそび。

乙平

抑も當寺は。用明天皇の皇子に聖德太子とて。佛法通達の智者たりき。衆生の惡業の重なるを。悲しみ給ひつゝ。攝取悲願の御方便。四方に廻らす所に。守屋はこ

帝不思議に思召し。御製をなされ。再びかへし給ふぞありがたき。誓ひありいつも櫻の花なれば。見る人さへや常盤なるべしと。詠じ給ふぞかたじけなき。猶も奇特を都人。月の夜すがら待ち給へと。いひ捨てゝ姿は。花の木陰に陰れけり。花の木陰に陰けり。

地主

地主の櫻は散るか散らぬか。見たか水汲。散るやら散らぬやら。嵐こそ知れさゝんざ。濱松の音はさゞんざ。堅田の網は夜こそは引よけれ。晝は人目の繁ければ。都の人か春の野に。駒かけちらす中にも。えいさらえいさと網を引く。花の錦の經緯。知らぬ人をも心して問へば迷はぬ戀路など。通ひなれて迷ふらん。生きてよも明日まで人のつらからじ。此夕暮を訪へかしな。君を千里に置いて。今も酒を飲み。我と心を慰むる。花の錦の下紐は。とけてなか〳〵よしなや。柳の糸の亂心。いつ忘りよぞ。寢亂髪の面影。

座敷飾

見わたせば柳櫻をこきまぜし。花の都もしげりあひて。綠樹の重陰四隣におほふ。かげを市中の陰家と。送る月日も廻り行く。物見車にさそはれて。さし入る門

場に着座して聽聞の聞法。心耳を澄ます終夜。則ち佛說いていはく。汝は如何なる國。如何なる世界の客なれば。爰に來れるぞと。尋ねさせ給ひしに。穆王答へて宣はく。我は震旦の主なり。相願は速に。大聖世尊は三世の覺母の御法世に深し。授け給へや同じくは。治國の法味をと。冠を下げて低頭す。然れば一天の皇子とて。御誕生の砌には。攝籙宮殿にまゐりつゝ。忝くも此文を。天子に授け給ふとか。されば勅も。萬乘の其御影。千代万代と菊の葉に。うつすや妙なる御法の。花の露苔の雫積り／＼て年を經。淵ともなるや流れ行く。末万民に至るまで汲む人も汲まざるも延ぶるや千年なるらん。

菊慈童

其後慈童は。帝の御寵愛限りなかりしあまりにや。誤つて皇帝の。御枕を越えし科により。酈縣山に流さるゝ。彼山と申すは。帝城を去つて二百里。虎狼牙を磨ぎて。人間の通ふ事なし。帝憐み思召して。普門品の二句の偈を。慈童に授けおはします。されば忘れじと。酈縣山の谷川の。菊の下葉に書き付けて。終日に結び居て。此文を誦して日を送る。其後路菊に置ける露。此菊水に落ち添ひて。不死の藥となりしより。流を汲んで齡を延ぶ。されば誰とても。飲めば壽も活藥。靈山の妙法

れを猜みつゝ。日夜に法を妨げ。逆心をさしはさむ。是によつて合戰たび／＼に及びたり。或は戰場に命を捨て。ある時は落ち行く木の葉の雨の。守屋が軍にはくして。左右無うさうに順はず。太子通力を出しつゝ。軍に利を得給ひしより。諍も中つ國の。治めし四の海。難波の寺に立歸り。舞人と召すなれば。我等が先祖御前にて。花やかに柳櫻。折りかざす扇の手に。七德の舞ぞ勝れたる。

七夕

然れば唐土にけいといふ國あり。彼國に遊子伯陽とて。夫妻の田夫ありしが。唯曉月に嘯き。高山に登つては。月の入るを惜しみ。秋の夜すがら小莚の。眠を覺ますばかりなり。遊子とは彥星なり。伯陽とは織女なり。先の世の其妄執の故なれや。月を望めば天に生れ。牽牛織女の。二つの星となるとかや。然れば前生の。農作の跡を殘して牛を引く。織女も其まゝに。猶五百機を織る布の。秋さり衣誰爲ぞ。待ちえたり。彥星の。妻も袖もつく夜なり今日の日の遲さよ。日の暮るゝかげの遲さよ。

枕慈童

然るに穆王は。八疋の駒に召され。法の道末遂げて。靈山の會座に連りし。法味の

波に歌を寄す。それは漢朝の古へ。是は本朝今の世。彼は雲路のうはの空。是は汐路の海の面。たとへを聞くも今更に。古事の忍ばれて。猶もほされぬ袂かな。

箱崎物狂

大舜は孝故。大象諸鳥の情を得る。丁蘭幼くして母に後れ。母のかたちを木象に作り従ふなり。曾參が薪。王褒は親の墓所にて悲しむ孝行。姜詩江河の水を汲む事。揚香は命を虎にまかす。董永天津織姫と契りし事。郭巨金釜を堀り出だす。王祥が氷の内の新魚朱壽昌は幼なくして母に別れ。孝故母も廻り逢ふ。剡子父母の兩眼故。鹿に身をそめ孝をなす。蔡順は。母に孝ある人なり。瘦點妻は。父の煩ひに身を碎く。呉猛衣を脱ぎ。親の蚊帳にはりたり。張孝張禮これ又母に孝あるなり。田眞兄弟三人は。孝ゆゑ樹木を愛したり。山谷が孝行。陸績が。橘。孟宗が筍。黃香は。四季をわけて孝行せり。唐夫人が乳味。何れをわけん方もなし。

横笛

昔原在の業平は。二條の后を忍びかね。月やあらぬ春や昔とうち詠め。又柏木の衛門督は。女三の宮の契り故。煙くらべに燃えまさる。思ひの薪に身を焦がし。終にはかなくなりけるも。わりなき戀のためしなれば。はかなかりける世の中か

酈縣の菊に止まり。不老の藥となるとかや。君菊水を聞召し。壽命長遠に。天下を治め給へや。

卒都婆流

然るに胡國の軍破れ。或は討たれ或は生捕らるゝ中にも蘇武はかひなき一命殘り。ゐるも假なる小田に出でゝ。落穗を拾ひて身命をつぐ。田面の雁は人馴れて。人近をも去らざりければ。指を切り玉柏に書き。翅につけて放ちけるに。かひがひしくも田面の雁。秋は必ず南國に。通ふや天つ雲の上に。折節帝は。南殿の御遊ありしに。行く雁金の數一つ。半の雲に飛びさがり。翅につけし玉柏を。庭上に落し飛び去りぬ。奇異の思ひをなし。鳥の跡を見給へば。古への蘇武が譽の跡なれや。昔は岩窟のうちに籠められ。今は又一足を切り廣き野中に放さる。たとひ草路に朽つるとも。魂は立歸つて。君邊に仕へん。子卿が狀と書き止む。無慙やな今までも。蘇武は此世にありやとて。此度は蘇武が子に。揚季といへる大將に。百万騎相添へ。胡國に攻め遣はさる。此度は引かへて。胡國の軍破れつゝ。廣野に住める我父を。伴ひかへりける事。翅につけし文の德。それより文を雁書といひ。使を雁使と名づけたり。されば唐土の蘇武は旅雁に文をつけ。本朝の康賴は。汐路の

宿木の深き葎の東屋の。床も涙に浮舟の。思ひ焦れし面影は。唯かげろふのとばかりも。書きだにとめぬ手習の。筆のすさびも愛でなれて。戀しき影も終に見ぬ。夢の浮橋かげ絶えて。うき瀬〳〵をとゞめおく。宇治の巻々これなりけり。

丁固松

我見ても久しくなりぬ住吉の。岸の姫松幾世經ぬらんと。詠みしはめでたき言の葉の。作者はさま〴〵分明なり。然りとは申せども。石上男丸が。歌とのみ知るべし。されば此男丸は。住吉の化現にて。我見てもとや詠じけん。又住吉の岸の姫松。幾世經ぬらんと詠みけるは。忝くも此神は。高貴徳王菩薩の。御垂跡と申すとかや。おもたかの尊とて。景行天皇の。御宇よりしてぞ此浦に。聖廟を立て置き。御跡を垂れ給へる。其神の代を思ひ出で。住吉の。岸の姫松幾世經ぬらんと。詠みし歌の心なり。

長柄

或は難波津の國の。深き雪にも冬ごもり。又淺香山。淺からざりし人心。種となり行く言葉の露に。もれぬ草木も更になしげに〳〵かゝる名所の。歌人の道となるとかや。花に鳴く鶯。水に住める蛙の。其聲聞けば世の中に。生とし生けるもの

な。諸行無常の鐘の聲。けふも暮れぬと告げわたる。是生滅法まのあたり。目に遮れる有樣の。浮世の嵯峨の秋の法。紅葉の色に移ろひ。紅色も水の泡と消え。井堰にかゝる波までも。涙の波の大井川。暮るればすごき千鳥が淵。泣く〳〵死骸を引上げて見れば平生の顏色は。水中に變じ。芳體あらたの姿は。唯眠れるが如くなり。あはれなりける横笛に。音を添へて泣かぬ人こそ無かりけれ。かゝるためしは又も世に。たぐひ嵐の山櫻。散るこそ惜しき姿なれ。

總角

さる事ありて其比は。世に數まへられ給はざりし。身をうき物に思ひ取りて。奥山住も遂げまほしく。心一つにしめ給へども。子は三界の紲にまとはれ。世を宇治山の假庵に。優婆塞ながら行ひ給ふ。法に心を示す人は。折々此宮にまゐり通ひて法文の。尊き事どもを。尋ね問ひ給ひしに。いつその夜半のよすがに。轉びあひにし末遂に。結ばゝれたる白露の。恨をかけて橋姫の。心を汲みて高瀬さす。竿の雫に濡るゝ。袖の本意も遂げばと思ふゆゑ。立寄らん蔭と賴みし椎が本。空しき床に我ひとり思ひを結ぶ總角の。尋ばかりなるうき契り。其まゝ消えしはかなさよ。せめて亡人の。形見にすめる早蕨の。手を折りていつまでか。殘る我のみ

然るに世の中は人間萬事塞翁が馬なれや。隙行く日數移るなる。時去り時は來れども。終に行くべき道芝の。露の命の限りをば。誰に問はましあぢきなや。などされば是程に。知らばさのみに迷ふらん。驚けとてや篠目の。眠りを覺ます時もりの。打つや皷の數しげく音にたゝば待人の。面影もしや御衣の。綾の皷とは知らずして。老の衣手力添へて。打てども聞えぬは。もしも老耳の故やらんと。聞けども〳〵。池の波窓の雨。何れも打つ音はすれども。音せぬものは此皷の。怪しの太皷や何とて音は出でぬぞ。

露

年の内よりも。急ぎし花の時を得て小夜の春雨ふりすさみ。曙匂ふ有明に。夢か現かとばかりに。露けき花の朝じめり。其まゝしげき陰は皆。青葉も色深き。匂や露と氷るらん。又は秋深き。花の千種に亂れ臥し。風の上なる白玉か。何ぞと人の問ひし時。露の命のはかなくも。消えを爭ふ世の中の。見はてぬ夢よりも。現の露ぞはかなき。鶴の林の古への。心をさしていひがたき。一枝の花の露の間の。微笑の心を。誰かは知らん白露の自然無心の曇りなき。宿りは山野草木の。色を色にて聖人も。淚を落す露の玉の。あはれも此原の。露こそ限りなりけれ。

として。何れか歌をよまざらん。野中の清水いさぎよき。秋萩の下葉のながめ曉の。鴫の羽掻を數へ。富士の煙に人を戀ひ。誰松虫の音を忍ぶ。男山の女郎花の。一時をくねるをも。和歌の心と知るものを。是は殊更おだし世の。長柄の橋の橋柱よしなき舌の囀りを。さも恨めしく思ひとり。口はこれ咎の門。舌は禍の本たり。物言ふことよしなしとて。三年が間鴛鴦の。聲立てざりし女こそ。此老翁が娘なれ。親子長柄の橋ともに。罪を浮べてたび給へ。

北野物狂

誰かいつし春の色は。東より來れども。南枝花初めて咲くと。詠ぜしも此梅に。かぎれる春の花とかや。又は同じ枝も。分きて木の葉色づくは。西こそ秋の初めなれと。詠みしも梅が枝に。かつ色見する花紅葉の。春秋のしるしにも。梅花を以て先とせり。然れば神慮にも。叶ふ惠の末通り。草木心無けれども。信心花に動じつゝ。東風吹かば匂おこせよ梅の花。主なしとて春な忘れそ。むかへの紅埋む天雲の。影不知火の筑紫路に。天飛ぶ梅の花と成つて。西の宮寺の神木の。天照る星の北野の宮。光も四方に天滿てる。神のあらたさを。誰かは崇めざるべき。

綾皷

これは小野の山に住む。炭燒の翁なり。我等が姿を御覽せよ。手馴るゝ故に其色は。炭の如くに黑けれども。髮の白さは雪に似たり。されども消えぬ命かな。思へども思ひしものは老の波。よるとも身には知らねども。老いもて來ぬ此炭の。住處は山家の奧なれど。訪ひ來る人もあらしの。花獨の。名殘とや散りぬらん。霞がくれに行く月の。世の中の明暮に。厭はいやのあらましの。末も通らぬ山道を幾度行歸るらん。幾度行きは歸るらん。

北山

今は思ひをふり捨てゝ。ひとへに彌陀を願ふならば。時をもかへずして。極樂世界に。我諸共に生れあひて。人を待つべき暮もなく。又別るべきあしたもなし。同じ榮花に有明の。盡きぬ契りとなるべしや。此世は夢とよ。幾程そひは果つべき。安樂世界と聞く時は。安く樂しむ所とて。命は無量の境にて。限りも知らぬ樂しみの。朽ちもせぬ金の。寶の池の自らも。同じ蓮の緣となり。幾久しさの際もなし。そひはつる契りなるべしや。さりとては姬君。此戀とまり給へや。

水無月祓

水無月の〳〵。名越の祓する人は。千年の命延ぶとこそ聞け。輪は越えたり。御祓

陀羅尼落葉

其比柏木衛門の督と申し丶人。折しも春の暮つかた。風吹かずかしてき日影など興じつ丶故ある木立の花盛り。はつかなる萠黄の陰に亂れつ丶。挑み爭ふ鞠の數暮れ行く庭に思はずも。手飼の猫のまとはりし。小簾の外もれし面影の。耳に添ふ絆となりたるぞや。戀の奴となりはつる。思ひや延びんとばかりに。ゆかりの露を結びしも。契りの中は身に染まで。本よりしみにし方こそ。猶しげり行く草の名の慰めがたき姥捨にて。もろかづら落葉を何に拾ひけん。名はむつましきかざしなれども。かくいひし言の葉の。我身におふぞ悲しき。其後折を得て。契りの末はなよ竹の。一夜結びし手枕を。かはすほどなききぬ〴〵の。袖にあまれる白露の。おきて行く空も知られぬ明暗に。いづくの露のか丶る袖の。思ひの色をさすがとや。人の哀の露かけて。あけぐれの空に浮身は消えな丶ん。夢なりけりと見てもせめて。慰むべきといふ聲を。聞き捨て出でし魂は。我を離れてさながらに。人にとまれる心地して。現心も涙のみ。其身をかへて絶えし人に。我身はかなき契りこと。消えしにまさるつらさなれ。

炭燒

て歸りしは、七世の孫に逢ふとかや、我等二人は生々の父と頼みし君に今逢坂山のさねかづら、人に知られでかくばかり命の中に二度、生を替へたるうれしさに、悦びを夕ぐれの、月の盃とり〴〵に、手の舞足の踏むところ、覺えず落つる涙かな。

白路

それ文は學者の執見によるとは聞きつれども、諸教の中の所讃は、多くは彌陀に有りとぞ。他家の祖師だに宣ひ、禪あつて淨土あるは角をいたゞく虎の如くと智覺禪師の頌にもあり。さて眞宗は相頓にしてしかも理性の頓教に越え。上は信住行向菩薩、下は天人群生および蜎蜚蠕動に至るまで、願を發して往生すること、雨點塵末の如くとかや。されば佛も古へ、三部の妙典御附屬の中に彌勒に對しては、爲得大利、無上功德と說き給ふ。入滅の其後は、七百に龍樹菩薩、九百に天親菩提流支三藏、これ天竺の祖師なり。其後菩提流支は後魏に渡りて曇鸞に、觀經を傳へてより、道綽善導まで、唐土の祖師となる。晋に廬山の遠公も、彌陀に歸依まし〳〵、念佛を勸め去り給ふ。こゝに白居易は、賢愚なく貴賤なく、必ず彌陀を念ぜよといひ、又東坡居士も願はくは、我および衆生の住家には、西方と

の此輪をば越えたり、眞如の月の輪の謂れをも知らで人な笑ひそよ。よし惡しき友あらば、拂ひのけて交らん。身に拂ひのけて交らん。輪こえさせ給へや。此輪越えさせ給へや、名を得てこゝに賀茂の神〳〵に。參らせ給はゞ御祓河の波よりも。此輪を先づ越えて身をも清め給へや。千早振神の齋垣も越えつべし。もと來し方の道を尋ねて。迷ふ事はなくとも。異方な通り給ひそよ。今日は名越の。輪を越えまゐり給へや。神山の二葉の葵年ふりて。雲こそかゝれ夕かづらの。神代今の世押し並べて。今日は名越の祓ひなごめ納めて。心ぞ清き御祓河の。波の白和幣。麻の葉の青和幣。何れも流し捨衣の。身を清め心直に。本性になりすまして。ひざや神に參らん。此賀茂の神にまゐるらん。

信夫

元よりの浮身ながらも捨てやらぬ。世を秋の野の藤袴。兄弟共に立ち出づる。身を浮草の根を絶えて。何國と誘ひ行く水に。數かくよりもはかなきは。思はぬ人を賴みつゝ。當國に賣られ來ぬるなり。習はぬ業を菅の根の、長き日暮し山に入り。薪を採つて歸り來る。彼黑主は徒に。花の陰に休みしと。いひしを殘る歌人の。名にはかはりて花も無き。木の下岩の硲にて。しばし休らふ山人の。斧の柄朽ち

舍と申すは。雷鳴の壺の事なり。萩の戸陣の座瀧口の戸。鳥の曹司縫殿兵衛の陣。左は宣陽門右は陽明門。日花月花の兩門は。陣の座の左右に向へり。大極殿小安殿。蒼龍樓白虎樓豐樂院清暑堂。五節の淵醉大嘗會は。此所にて行はる。中花院は中の院。内教坊は雅樂所なり。御修法は眞言院。神言食は神嘉殿。眞弓競馬をば。武德殿にして。御覧せられけるとかや。朝堂院と申すは。八省の諸寮これなり。右近の陣の橘は。昔を忍ぶ香をとゞめ。御階にさける竹の臺。幾世の霜を重ぬらん。在原の中將の弓胡籙を身に添へて。雷鳴さわぐ夜もすがら。あばらなる屋に居たりしは。官の廳の八神殿。光源氏の大將の。しくものもなしと詠じつゝ。朧月夜にあこがれしは。弘微殿の細殿。江の相公の古へ。越路の國へ下りしに。旅の別を悲しみて後會期はるかなり。纓を鴻臚の曉の。涙にうるほすと。長篇の序に書きたりしは。羅城門の南なる。鴻臚館の名殘なり。鬼の間直盧鈴の綱。荒海の障子をば。清涼殿に立てられたり。賢聖の障子をば。紫宸殿にぞ立てられける。東の一の間には。馬周房玄齡。杜如晦魏徵二の間には。諸葛亮遽伯玉。張子房第伍倫。三の間には管仲鄧禹子產蕭何。四の間には伊尹傅說。太公望仲山甫。西の一の間には李勣。虞世南杜預張華。二の間には羊祜揚雄。陳寔班固三の間には。桓榮鄭玄蘇武倪寬。

彌陀の尊容を自ら繪に書きて讃をなすなり。上宮太子は欽明の御爲めに念佛。御執行ありし以來倭國の流布も數多にて。代々の歌にも詠めこし。中に源空山より。圓頓の奥儀を傳へて。諸法を悉く撰擇し。彌陀の弘願は末の世の衆生のための法なれば。淨土一門のみあつて。通入すべしと弘めにし。かゝる貴き敎へあり。時にだにゆけ極樂の。道に迷へる世の人と。虫の跡ある歌までも。今更思ひ知られたり。他力ならでは。いかで淨刹に至らん。

大内裏

抑も大内裏と申すは。秦の始皇帝の都。咸陽宮の一殿を。うつして作られたれば。南北三十六町。東西二十町の外。龍尾の置石をすゑて。四方に十二の門を立てられたり。東には陽明大賢都芳門。南には美福朱雀皇嘉門。西には談天藻壁殷富門。北には安嘉偉鑒達智門。此外上東上西二門に至るまで。交戟の衛伍を守り。長時に非常をいましめたり。三十六の後宮には。三千の淑女粧ひを飾り。七十二の前殿には。文武の百司詔を待つ。紫宸殿の東西に。清涼殿温明殿。北に當りて常寧殿貞觀殿。此貞觀殿と申すは。后町の北の御匣殿なり。校書殿と號せしは。清涼殿の南の弓場殿なり。昭陽舍は梨壺。淑景舍は桐壺。飛香舍は藤壺。凝華舍は梅壺。襲芳

建長に爲家。續古今同じき勅文永に。融覺行家光俊。續拾遺龜山。弘安に爲氏。新後撰後宇多。嘉元に爲世玉葉。伏見正和に爲兼。續千載は又後宇多。文保に爲世續後拾遺。後醍醐正中に。爲藤死後に爲定。風雅萩原の御自撰。新千載は後光嚴延文に爲定新拾遺。同じ代貞治に爲明。新後拾遺は後圓融。永德に爲重。新續古今後花園。永亨に雅世撰じつゝ。正木のかづら長き代に。傳はる例はいつとても。絶せぬ御代のしるしなり。

松浦鏡

昔上代の事かとよ。佐提比古といつし遣唐使。大君の勅に從ひて。此松浦がたに下り。しばしの旅宿ありし時。國の釆女の色に染む。花の香衣袖ふれて。宿も一夜の假枕。あだし契と思へども。幾夜の數とも知らざりけり。其名を佐用姫と聞くからに。小夜の寢覺の睦言も。盡きぬ心のほど見えて。山風吹きゆく松浦がた。心づくしの秋なれや。木の間の月もほのかなる。朝顏朝寢髮。うちとくる友寢なりけり。かくて契もほどふるや。時節もはやく日比へて。唐舟の纜を。解くやよき日の門出とて。すぐに旅宿を出で給へば。佐用姫いつしかきぬ〴〵の。恨をそへて松浦がた。前の渚に立つ浪の。聲も惜しまず鳴く田鶴の。蘆邊にさすらひ松が根

四の閒には。董仲舒。文翁。賈誼。叔孫通なり。畫圖は。金岡が筆。筆賛の詞は。小野の道風が書けりと申すなり。

風草

甕のほとりの竹葉は。春を得て熟すとか。階のもとの薔薇は。また夏に入つて開くとか。今は又秋更けて。籬の荻花は林葉の。陰に起臥す草莚。心をのぶるばかりなりけりにや我宿は。菊賣る市にあらねども。四方の門邊に人さわぐ。樂しみ數々にまさり草。幾萬代の末かけて。其名を聞くも竹葉の。松の林に戯れ。鶴も立舞ふよそほひの翅を垂れていろ〳〵の。幾千代までぞ萬木の。風は吹けども。山は動かぬ御代とかや。

撰集

凡そ和歌の撰集は。萬葉は奈良の帝の勅撰。撰者は諸兄家持。古今は醍醐延喜五年。貫之友則躬恒忠岑。後撰村上天暦の比。伊尹は和歌所の別當。能宣元輔順時文望城。拾遺長德に花山の御自撰。後拾遺白河應德に通俊。金葉も同じ勅。大治に俊賴。詞花崇德仁平に顯輔。千載後白河。文治に釋阿。新古今後鳥羽元久に。通具有家定家家隆雅經。萬葉の外八代集なり。新勅撰は後堀河。貞永に定家。續後撰後嵯峨。

ん。

碇被

さるほどに此浦の合戰。今は頼もなかりしかば。新中納言知盛二位殿に向ひ。今はこれまでに候ふ。御痛はしながら行幸を。波の底になしまゐらせ。一門供奉し申すべしと。涙を押へて宣へば。二位殿は聞召し。心得て候ふとて。しづ〳〵と立ち給ひ。今はの出立と覺しくて。白き御袴のつま高う召されて。神璽を脇に挾み。寶劍を腰にさし。大納言の局に。内侍所を戴かせ。皇居に參りひざまづき。いかに奏聞申すべし。此國と申すに。逆臣多き所なり。見えたる浪の底に龍宮と申して。めでたき都の候ふ。行幸をなし申さんと。泣く〳〵奏し給へば。流石恐ろしとおぼしけるか。龍顔に御涙を浮べさせ給ひて東に向はせおはしまし。天照太神に御暇を申させ給ひ。其後西方にて。御十念も終らぬに。二位殿歩みより。玉躰を抱き目を塞ぎて。浪の底に入り給ふ。恨めしかりし古への跡弔ひてたびたまへ。

落葉

中にも此落葉の宮と申すは。女三の宮と枝を連ねし。女二の宮の御事なり。其比時めく柏木の。衛門の督と申しゝ人。落葉の露を置きながら。女三の宮を思ふか

の磯枕草莚。しきりに臥し沈みつゝ。領巾山にあらねども。こゝもひれふる有様を。松浦姫といはれしも。佐用姫の異名なりげに恥かしき世がたり。

明靜

拙きかなや。常に恩愛のきづなにまとはり。淨業を企つといへども。悪縁に破れ。他人の非をば辯へて。身の上の科をかへりみず。無益の言葉は。喧しといへども。佛道の事を談ぜず。一度泥利に沈まば。曠劫もいかで出づべき。地獄の苦しみ無量なり。四面に猛火充塞の。熱鐵を地とせり。涼しき風を願へば。火焰來りて身を燒き。冷水を求むれば。鑊湯涌いて。百節の骨頭より火を出だし。一日の其内に。萬死萬生たり。これ殺生の科なり。餓鬼は人天多けれど。食を願ふに與へず。百葉林に結べども。取らんとすれば悉く。刀林となつて手を裂き。足に刀山踏むときは。劍樹共に解すとかや。これ慳貪の業なり。畜生は其形千品にて苦しみあり。飛蛾は火にて身を滅ぼし。蛛網に命を捨て。互に相噉食す。貪欲愚痴の科なり。修羅は瞋恚をふくんで。天帝と爭ひ。我と身をきる紅波は猛火となつて肝をやく。人間無常世界にて。榮ゆるものは衰へ。天上の快樂も。夢の中にて五衰あり。六の岐を離れえぬ。十惡の輩も。一念彌陀の誓あり。御法の舟に身をうけて。皆彼岸に至ら

これをいかにと悲しみ。繪がける人を語らひ。皆賂を饋りつゝ。御約束のありしゆゑ。されば寫せる其姿。いづれを見るも妙にして。柳髮風にたをやかに。桃顏露をふくんで。色猶深き姿なり。中にも昭君は。並ぶ方なき美人にて。帝のおぼえたりしなり。それを頼める故やらん。唯うちとけてありしに。畫圖にうつせる面影の。あまり賤しく見えしかば。さこそは寵愛甚しと申せども。君子に私の言葉なしとや思しけん。力なくして昭君を。胡國の民に遣はさる。

松山鏡

唐土に陳氏とて。賢女の聞えありけるが。世の習思はずも。夫遠行の仔細ありてれや限と思ひけん。形見の鏡破れて。猶。光ぞ殘る三日月の。宵に待ち明けて恨み。文も絶え主も來ず。浮年月を故里の。軒端の荻の秋更けて。風の便の傳きけば。夫は其國の主となり。あらぬ妹脊の川浪の。立歸るべきやうもなし。さては逢ふ事も。形見の鏡我ひとり。涙ながらに影見れば。半月の山の端に。打ちかたぶいて泣ならで。せん方もなき折節に。いづくよりとも知らざりし。鵲一つ飛び來り。陳氏が肩に羽を休め。飛び廻り飛び下り。舞ふよと見しが不思議やな。ありし鏡の割となり。元の如くになりにけり。滿月の山を出で。碧天を照らす如くなり。これや

どうかりし人の言の葉に。もろかづら落葉を何に拾ひけん。名はむつましきかざしなれども。詠せし人の御名なり。さるほどに此宮の御母。物の氣にいたく惱みて。知る所ありとて。落葉の宮ともろともに。此山里に住み給ひ。いと物哀れなりしに。夕霧の大將の忍びて通ひおはせしに。行馬も足曳の。山路といひ秋といひ。さびしさゝぞと山住の。事語らへばほどもなく。日も夕暮になりぬれど。歸らんとだにもし給はで。山里のあはれを添ふる夕霧に。立出でん方もなき。心地してと口ずさみ。籬の鹿も虫の音も涙催す瀧の音。名のみ音無の瀧つ浪も。あやにく音するや。物思へ此秋の空。時雨も袖とひて。山風いたく身にしめば。夜や曉になりぬらんと。大將は此山をすご／＼と別れ出で給ふ。

昭君

然れば胡國の軍强うして。従ふ事期しがたし。されば互に和睦して。其しるし一つ無からんやとて。美人を一人遣はすべき。御約束のありしに。そも漢王の宣旨には。三千人の寵愛。何れを分くる方もなし。もろ／＼の宮女の。行跡高位の姿を。賢聖の障子に似せ繪にこれを顯はし。中に劣れる樣あらば。則ち彼をえらびて。胡王のために遣はし。天下の運を鎮めんと。綸言ならせ給へば。數々の宮女たち。

し奉り。劔を提げ細を持ち。我等を睨みて。立たせ給ふが惡ければ。走りかゝりて御首を。打落さんと申せば。兄の一萬これを聞きて。いまくし如何なる事ぞ佛をば。不動と申し敵をば。工藤といふを知らざるか。さては佛にてましますかと。抜いたる刀を鞘にさし。免させ給へ南無佛。敵を討たせ給へや。

濱川

就中此國。人皇に於て第一や。神武の聖代。甚だ以て尋常ならず。神の代移り皇に於て始めぬれば政穏かに。四海の浪も靜にて。改まる宮崎や。あまねき跡を垂れ給ふ。抑名を問へば。日向の國の明らけき。月の御舟の幽なる。浦遠き夜かげに海士の漁のかげやらん。燈火の殘れるを。仁王御覽じて。そもたが火ぞと宣旨あれば。舟の上浦遠く。さだかに誰も申さねば。それより不知火の。筑紫潟とは名づけたり。又國の名をさへ。日に向ふ國と改め。今も日向の國とかや。光鸚鵡の舞奏で。親子の道を祈らん。

大蛇

然るに此少女は我子なり。名をば櫛稲田姫と申す。かやうに歎く其故は。先に我子八人の少女あり。年毎に簸の川上の大蛇に呑まれ。今又此姫取られんとす。免

賢女の名を磨く鏡なるらん。

雪鬼

在原の業平は。君の仰に隨ひ。此原に下り終日に。御狩のありしに。三冬の末つかたや〻降り送る山颪の。冷やかに吹き落ちて。手馴の駒も堪へかぬるや。雪を添ふる鷂の。たなさぎの羽も。白斑に見ゆるばかりなり。其時業平は。ぬれぬ宿かす人しなきと。口すさびありしに。一人の女來りつ〻。一夜かり寢の草枕。契をこめし心故。やがて伴ひ都路に。歸るや年も立春の。女に心惱しく。萎る〻花の色なうて匂も絶ゆる顏の。衣ほし〳〵となりはて〻。日影に消えし女こそ。交野の雪の鬼なれや。業平の妹と脊に。雪のなりける不思議さよ。

望月

こ〻に河津の三郎が子に。一萬箱王とて兄弟の人のありけるが。五つや三つの比かとよ。父を從兄に討たせつ〻。既に日逝き時來つて。七つ五つになりしかば幼かりし心にも。父の敵を討たばやと。思の色に出づるこそ。げに哀には覺ゆれ或時兄弟は。持佛堂に參りて。兄の一萬香をたき。花を佛に供すれば。弟の箱王は。本尊をつく〳〵と守りて。いかに兄御前聞召せ。本尊の名をば我が敵。工藤と申

旦國の思禪師にて、渡らせ給ふ故。出離の佛像に應じつゝ。今日城に至るまで。佛法最初の御本尊と顯はれ給ふ御威光の。誠なるかなや。末世相應の御誓。然るに當寺の佛閣の。御造の品々も。赤栴檀の靈木にて。塔婆の金寶に至るまで。閻浮檀金なるとかや。

る丶によしなしといふ。其時素戔烏詔して宣はくげに理や老人の。歎く心を憐みの。惠ぞ深き川上の。大蛇を從へ。治まる國となすべし。少女を我にたび給へと宣へば。老人は喜悅の色をなし給ふ則ち少女を奉る。やがて尊は稻田姬を。湯津の妻櫛となりして。鬢づらにさし給ふ。其まゝ治まる國つ神。こゝに宮居の二柱。立つや八雲の妻こめて。八重垣つくる言の葉の。三十一文字の。詠歌のはじめなるべし。

弱法師

金堂の御本尊は。如意輪の佛像。救世觀音とも申すとか。太子の御前生。震

る世のためしこそ。げに道ひろき治なれ〳〵。

また

祝ふなる心ぞしるき曇なき。天つ日嗣の貢物。はこぶ街や都路の。すぐなる御代を仰がんと。關の戸さゝで千里まで。あまねく照らす日かげかな。〳〵。

また

一花ひらくれば天下みな。春なれや萬代の。なほ安全ぞめでたき。

老松

松が根の岩間をつたふ苔清水。敷島の道までも。げに末ありや此山の。天ぎる雪の古枝をも。なほをしまるゝ花ざかり。手折りやすると守る梅の。花垣いざや園はん。梅の花垣をかこはん。

また

天滿空も紅の。花も松も諸共に。よろづよの春とかや。千代萬代の春とかや。

廣基

流にひかるゝ盃の。くるり〳〵。くる〳〵くる。〳〵。くる〳〵。くるり〳〵。くるくるくると。めぐるも遲き春の日の。くもらぬ御代ぞめでたき。

万代に澄める龜井の水までも。水上淸き西天の。無熱地の池水を受けつぎて。流久しき世々までも。五濁の人間を導きて。濟度の舟をも寄するなる。難波の寺の鐘の聲。異浦々にひゞき來て。普き誓滿潮の。おし照る海山も。皆成佛の姿なり。

（小謠）

高砂

ところは高砂の。〳〵。尾上の松も年ふりて。老の波もよりくるや。この下陰の落葉かく。なるまで命ながらへて。なほいつまでか生の松。それも久しき名所かな。〳〵。

また

四海波しづかにて。國もをさまる時つ風。枝を鳴らさぬ御代なれや。逢ひに相生の。松こそ目出度かりけれ。げにや仰ぎても。こともおろかやかゝる代に。住める民とてゆたかなる。君のめぐみぞ有難き。〳〵。

難波

難波津に咲くや木の葉ふゆごもり。今は春べに匂ひ來て。ふけども梅の風。えだをならさぬ御代とかやげにや津の國の。なにはのことにいたるまで。ゆたかな

折り枝折をしるべにて。奥も迷はじ咲きつゞく。木陰に並み居て。いざ〳〵花をながめん。

また

おん物笑の種蒔くや。言の葉しげき戀草の。老をな隔てそ垣ほの梅、さてこそ花の情なれ。花に三春の約あり。人に一夜をなれそめて。後いかならんうちつけに。心そらに楢柴の。馴れはまさらで。戀のまさらん悔しさよ。

八島

釣の暇も波の上。かすみわたりて沖ゆくや。海士の小舟のほの〴〵と。見えて殘る夕暮。浦風までものどかなる。春や心をさそふらん。〳〵。

若葉松

神まつる今日あら玉の年ごとに。初日くもらぬ君が代を。なほことぶくや此時に。松に小松を取りそへて。千歳の末を萬代と。枝も盡せぬ綠かな。〳〵。

鞁瀧

よろづよの花をふくむや若綠。なほ萬歳の春のそら。君の御陰も筑波嶺の。このもかのもに立ちよりて。老を忘るゝながめして。春も榮行く山路かな。〳〵。

竹生島

緑樹かげしづんで、魚木にのぼるけしきあり、月海上にうかんでは、兎も波をはしるか。おもしろの島のけしきや。

右近

ひをりせし右近の馬場の木の間より、影もにほふや朝日寺の、春の光も天滿てる。神の御幸のあとふりて、松も木高き梅が枝の、立枝も見えて紅の、初花車めぐる日の、轅や北につゞくらん〳〵。

雲林院

をしむも乞ふも情あり、二つの色のあらそひ、柳さくらをこきまぜて、都ぞ春のにしきなる〳〵。

田村

白妙に雲も霞もうづもれて、いづれ櫻の梢ぞと、見わたせば八重一重、げに九重の春のそら、四方の山なみおのづから、時ぞと見ゆるけしきかな〳〵。

鞍馬天狗

花さかば告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍、鞍馬の山のうずざくら、手

西行櫻

百千鳥さへづる春は物毎に。あらたまりゆく日數へて。頃も彌生の空なれや。やよ留まりて花の友。知るも知らぬも諸共に。たれも花なる心かな。〳〵。

采女

はこぶ歩の數よりも。つもる櫻の雪の庭。また色そへて紫の。花を垂れたる藤の門。明くるを春のけしきかな。〳〵。

熊野

四條五條の橋の上。老若男女貴賤都鄙。いろめく花衣。袖をつらねて行末の。雲かと見えて八重一重。さく九重の花ざかり。名におふ春のけしきかな。〳〵。

西王母

三千年になるてふ桃の今年より。花さく春にあふことも。たゞこれ君の四方のめぐみ。あつき國土の千々の種。桃花の色ぞ妙なる。

羽衣

風むかふ雲の浮波立つと見て。釣せで人やかへるらん。待てしばし春ならば。吹くものどけき朝風の。松は常盤の聲ぞかし。波は音なき朝和に。釣人おほき小舟

羅生門

ともなひかたらふ諸人に。御酒をすゝめて盃を。とり〴〵なれや梓弓。やたけごゝろの一つなる。兵士の交はり。たのみある中の酒宴かな。

若菜

道なしとても踏みわけて。野澤の若菜今日つまん。雪間を待つならば。若菜ももしや老いもせん。嵐ふく森の木陰。小野の雪も猶さえて。春としも七草の。生田の若菜つまうよ〳〵。

二人靜

木の芽春雨ふるとても。猶消えがたき此野邊の。雪の下なる若菜をば。いま幾日ありて摘まゝし。春立つといふばかりにや三芳野の。山もかすみて白雪の。きえしあとこそ道となれ〳〵。

桃海

春風の吹けどもなどやさゝ舟の。とめぬ洲先にうごきなき。鷗白鷺むれあそぶ。浦の干潟ぞ面白き。桃の花さく山とほく。ながるゝ瀧も曲水の。彌生の空ぞたゞひなき〳〵。

とけて中々よしなや。柳の糸の亂心。いつ忘れうぞ寐亂髮のおもかげ。

地主

春やくるらん糸柳の。おもひみだるゝ折節に。風もろともに立ちよりて。木陰の塵を掃はん〳〵。

昭君

あはれ一枝を。花の袖に手折りて。月をも共にながめばやの望はのこれり。此春ののぞみはのこれり。

泰山府君

さくら川せゞの浮波しげゝれば。霞うながす信太の浮島の。うかべ〳〵水の花。げにおもしろき川瀬かな〳〵。

櫻川

さかりにひかれて苗代の。水に心のたねまきて。散ればこゝもや櫻田の。雪をもかへすけしきかな〳〵。

淡路

躑躅

かな〳〵。

寐覺

日も夕暮にほどもなくなるや彌生の空なれば。月もおぼろにさしいでゝ。山の端しろき松の風。枝を鳴らさぬ木の本に。しばしやすらふ旅寐かな〳〵。

藤波

幾春の花のさかりを松が枝に。久しくかゝれ宿の藤。さきぬる時は津の國や。住の江かすむ春もはや。すぎゆく名殘をしまるゝ。落ち散るや花の名は。うすむらさきと人はいふ。

花衣

又や見ん交野の御野の櫻花。雪と散りしく木のもとを。立ちさりがたき花の袖。きぬ〴〵に飽かぬ別の鳥の音は。ものかは春も今日のみと。夕ぐれ告ぐる鐘のこゑ。ゆふぐれ告ぐる鐘のこゑ。

佐保山

玉かづら來る年のをの春ごとに。霞の衣ぬぎうすき。糸のみだれも天つ日の。のどけき色に染めなして。なは白衣のうらゝなる。空や雲間にはふらん〳〵。

やけき影に來て。君萬歳と祈るなる。神に歩を運ぶなり〳〵。

七夕

秋さりごろも誰がためぞ。待ちえたり彦星の。袖も褄もつぐ夜なり。今日の日のおそさよ。日のくるゝ影のおそさよ。

東方朔

秋きぬと目に見ぬ空はおのづから。音かへて吹く風の。袖もすゞしき夕まぐれ。なびく稲葉の色までも。千歳の秋のはじめかな〳〵。

三井寺

月は山。風ぞ時雨に鳰の海。波も粟津の森みえて。海ごしに幽に向ふ影なれど。月は眞澄の鏡山。山田矢走の渡舟の。夜はかよふ人なくとも。月のさそはゞおのづから。舟もこがれて出づらん。舟人もこがれいづらん。

野宮

秋の花みなおとろへて。虫の聲もかれ〴〵に。松ふく風のひゞきまでも。さびしき道すがら。秋のかなしみもはてなし。

殺生石

岩つゝじ折りもて見れば妹が着し。紅染の色香とも。和泉式部はながめしに。外山の峰のつゝじ原。下照るかげも日の本の。からくれなゐの色ぞかし。酒くみて人々。この花にめでたまへや。

加茂

御手洗の聲もすゞしき夏陰や。糺の森の梢より。初音ふりゆく時鳥。なは過ぎがてに行きやらで。今一とほり村雨の。雲もかげろふ夕づく日。夏なき水の河隈。汲まずともかげはうとからじ。〳〵

鐘引

春秋のながめも夏の庭の面。千代の陰ある松が枝に。あらそひまじる深緑。茂る森木も常盤なる。御代をあらはすけしきかな。〳〵

源太夫

時は三伏の夏の日の。熱田の宮路浦づたひ。近く鳴海の磯の波。松風のこゑ寝覺の里。きくにもこゝろ涼しく。老の身も夏やわするらん。〳〵

弓八幡

松たかき枝もつらなる鳩の峰。くもらぬ御代は久方の。月の桂の男山。げにもさ

しや。どころは住吉の。松ふく風も心して。旅人の夢をさますなよ〳〵。

砧

月の色風のけしき。影におく霜までも。心すごき折節に。砧のおと夜あらし。かなしみのこゑ虫の音。まじりておつる露涙。ほろ〳〵はら〳〵〳〵と。いづれ砧のおとやらん。

玉葛

ほのみえて色づく木々の初瀬山。風もうつろふ薄雲に。日影もにほふ一入の。さぞなけしきもなく川の。浦回のながめまで。げにたぐひなや面白や。川音きこえて里つゞき。奥ものふかき谷の戸に。つらなる軒をたえ〴〵の。霧間にのこす夕かなきりまにのこす夕かな。

雨月

をりしも秋なかば。三五夜中の新月の。二千里の外までも。心しらるゝ秋のそら。雨はまた瀟湘の。夜のあはれぞおもはるゝ。

通盛

うきながら心のすこし慰むは。月の出汐の海士小舟。さもおもしろき浦の秋の

ものすさまじき秋風の。梟松桂の枝に鳴きつれ。狐蘭菊の花にかくれすむ。この原の時しも。ものすごき秋の夕かな。

紅葉狩

げにや谷川に。風のかけたる柵は。ながれもやらぬもみぢ葉を。わたらば錦中絶えんと。まづ木のもとに立ちよりて。四方の梢をながめて。しばらく休みたまへや。

三輪

秋さむき窓のうち。軒の松風うちしぐれ。木の葉かきしく庭の面。門は葎や閉ぢつらん。下樋の水音も。苔にきこえてしづかなる。此山住ぞさびしき。

卒都婆小町

月もろともに出でゝゆく。雲井百敷や。大内山の山守も。かゝるうき身はよもとがめじ。木がくれてよしなや。鳥羽の戀塚秋の山。月の桂の川瀬舟。こぎゆく人は誰やらん。〳〵。

梅枝

西北に雲おこりて。東南にきたる雨の足。はやくも吹き晴れて。月にならんうれ

戀松原

げにや花ならば。さかぬ稍もまじりなん。なべてふりにし白雪の。ながめを何にたとへん。

雪山

拂はじ拂はで。そのまゝに受くる袖の雪運びつみて雪山を。千代に降れど作らん。雪山を千代に作らん。

和布刈

春の野にいでゝ摘む若菜。おいゆく末のほどもなく。年はくるれど緑なる和布刈の今日の神祭。心を致しさま〴〵に。君のめぐみを祈るなり〳〵。

舎利

月雪の古き寺井は水すみて。庭の松風さえかへり。ふけゆく鐘の聲まで。心耳をすます夜もすがら。げに聞けや峰の松。谷の水音すみわたる。嵐や法を稱ふらん〳〵。

富士山

西天唐土扶桑にも。ならぶ山なしと名を得たる。ふじの山のよそほひ。まことに

けしきかな。ところは夕波の鳴戸の沖に雲つゞく。淡路の嶋やはなれえぬ。浮世のわざぞかなしき〳〵。

藤袴

秋風にほころびぬらし藤袴。つゞりさせとて草村に。露うちはぶき鳴く虫の。こゑもよわりゆくは。夜寒にやなりぬらん。

定家

庭も籬もそれとなく。あれのみまさる草村の。露のやどりもかれ〴〵に。ものすごき夕なりけり〳〵。

葛城

しもといふ葛城山に降る雪は。間なく時なく。おもほゆるかなとよむ歌の。言の葉そへて大和舞の。袖の雪もふるき世の。よそにのみ見し白雪や高間山の。峰の柴屋の煙。松が枝をへて焼かうよ〳〵。

阿古屋松

げにや雪ふりて。年のくれゆく時までも。つひに朽せぬ松が枝の。老木になれども年々に。又わかみどり立つ枝の。いく春のめぐみなるらん。

其三　小歌

小歌は當時流行せし短篇の歌曲なり。今こゝに載するは。謡曲または狂言の中に散見するものを拾ひ集めたるなり。次に掲ぐる近つ世の小唄と比べ味はゞ人情風俗の變遷知られて面白きこと多からん。

餅酒

あらん目出た。そも〳〵酒は。百藥の長として壽命を延ぶ。そのうへ酒に十の徳あり。旅行に慈悲あり看經に衣あり。推參にたよりあり。さて又餅は萬民にもちひられ。しろがねこがね所領持。しろがねこがね所領のうへに。榮ゆる御代こそめでたけれ。

雁金

あら〳〵目出たや〳〵な。いづれの詩歌をひきあはすれど。雁といふも雁金といふも同じ名の。かりがねといふもおなじ名なれば。榮ふる御代こそ目出たけれ。

また

上なかりけり。

養老

袖ひぢて結ぶ手の。かげさへ見ゆる山の井の。げにも藥とおもふより。老の姿も若水と。見ることそうれしかりけれ。

志賀

都鄙圓滿の雲の下。四海八洲の外までも。波の聲萬歲の。ひゞきはのどけかりけり。

春榮

なほ喜の盃の。かげもめぐるや朝日影。伊豆の三島の神風も。ふきをさむべき世のはじめ。いく久しさとも限らじや。嘉辰令月とは。此時をいふぞめでたき。

土車

一天四海波を。うちをさめ給へば。國もうごかぬ荒金の。土の車のわれらまで。道せばからぬ大君の御陰の國なるをば。ひとりせかせ給ふか。

末の松山。さゞら浪はこすとも。御身と吾とは千代經るまで。

いとものほそき

いともの細き御腰に。太刀を佩き矢をおひ。虎豹を踏む御足に。藁沓をめされて。くゞれば笠と成り候。賤が柴垣えせもの。

宇治のさらし

宇治のさらしに。嶋に洲崎に立つ浪をつけて。濱千鳥の友呼ぶ聲は。ちり／＼やちり／＼。ちり／＼やちり／＼と。友呼ぶ處に。嶋かげよりも艪の音が。からりころりからりころりと。漕ぎいだいて釣する處に。釣つた處が。ハアおもしろいとの。

七つに成る子

七つに成る子が。いたいけな事いうた。殿がほしと歌うた。そもさてもわごりよは。たれ人の子なれば。定家葛かはなれがたやの。／＼。川舟にのせて。つれておじやろにや神崎へ。／＼。そもさてもわごりよは。踊をふが見たいか。をどりをふが見たくは。北嵯峨へおじやれの。北嵯峨の踊は。つゞらぼうしをしやんとして。踊るふりがおもしろい。芳野初瀬の花よりも。紅葉よりも。戀しき人は見たいもの

あら〳〵めでたや〳〵な。年のはじめのおいはひの御物。山海の珍物とり〴〵の御肴。參る人も民も田主も。秋の田の雁金。鴈くゝひ錦鳥も參る。千年の鶴のよはひをたもちて。上一人より下萬民まで。下萬民まで。榮ふる御代こそ目出たけれ。

若松

あら〳〵目出たや若松の。ことしよりも殿も德若民も豐かに松もろともに。千代かけて。榮ふる末こそ久しけれ。

掛川

こゝをどこじやともし人問はゝ。此處は駿河の府中の宿よ。人に情を掛川の宿よ。雉子の雌鳥ほろりとおといて。うちきせてしめて。しよの〳〵いとしよの。ハア。そぞろいとしゆて。やるせやな。

小山伏

京から下る小山伏。肩にからかさ御手に數珠。腰に螺の貝。袂に戀の玉章。御客僧受け給ふ。柴垣でしにもの問はう。

末松山

つゝと立つたは杉の木。屈うだは松の木。松の枝の下り枝が。あちへこちへすじりもじり。もじつたる中に。藤の花がたよ〳〵と。咲き亂れてきりゝと廻つて。はひかゝつたが。面白いとの。

鎌倉の女郎

鎌倉の女郎は。すそだけのつめたに。おりものゝておひ。うつのみやがさを。きりゝとめされて。おりやらしませ。おりやらしまして。あさいはひさしませ。

住吉

爰は住吉のお前でござる。いざや人々宮めぐりを。はじめて神をすゞしめの御酒參らせう舟方。松のひまより海面を見れば。霧に交はる淡路の嶋山。漕ぎくる船はおもしろや。船方。

春雨

春雨にさす傘の柄漏して。腕枕して空見て。日はおじやるろ。しよぼとぬれたもよいものを。かまへて乾さいで能い日にも。

海道下

おもしろの海道下りや何と語るとつきせじ。加茂川白川うち渡り思ふ人には

じやところ〳〵お参りやつても疾う下向めされどがをばいちやが負ひ申しよ。

京土産

いたいけしたるものあり張子の顔や塗兒。しゝやむすびに笹結。山科むすびに風車。瓢簞にやどる山雀。胡桃にふける友鳥。虎まだらの狗兒。おきやがり小法師。振鼓。手鞠や踊鞠小弓。

十七八

十七八は。竿に乾いた細布。とりよりやいとし。たぐりよりやいとし。絲より細い。腰をしむれば。い。かアたんと猶いとし。

寳瘤取

あらんめでたき。まづ初春の。蓬萊にかざる。年も若狭の小濱の昆布。千代の蔭そふ。松前昆布の。濱のまさご。盡せぬ。妹脊の中の數の子に。だい〳〵野老ゆづり葉の。次第に榮え海老腰になるまで。壽命長遠。四方の藏に。金銀珠玉はんだわら納む〳〵。榮ふる御代こそ。めでたけれ。

杉木

刀さいて太刀の鐔に手打ちかけて往うよ戻ろようよと。いうてはたもとにとりついた。いなうともどろうとも。何ともわごりよの御計らひと。いうては小腰にだきついた最愛者には。きりんのきりん〳〵。かぎりゝんのもりゝんの。手も力も無いもの。

春日殿

奈良へ参りて。春日殿を拝うだ。屋根は檜皮のとしふきて。けづゝたまゝのかとふぎに。朝日をおはふかまおふぎ。しひて拝してよく〳〵見れば。たるきでがはしらじや〳〵。

柳下

柳の下の御稚子さまは。朝日に向うて御色が黒い。御色が黒くは笠をめせ。笠もかさ。一きよとがりがさをそりがさ。城に笛ふくが。ふもとに聞ゆる。それは推したうらに来いとの笛の音。裏道こいとの笛の音。

おきやがり小法師

京に〳〵流行る。おきやがる小法師。よい殿みれば。殿さへ見れば。ヤヨハ。合点か〳〵つい轉ぶ。

粟田口とよ。四の宮河原十禪寺。關山三里を打ち過ぎて。人松本に着くとの。見渡せば。瀨田のからはし。野路篠原や霞むらん。雨は降らねど森山を打ち過ぎて。小野の宿とよ。摺針峠の細路。今宵は此處に草枕。假寢の夢は。やがて醒が井。馬場をふけば袖寒む。伊吹颪に。不破の關守。戶ざゝぬ御代ぞめでたき。

番匠屋

番匠屋の。娘子の。めしたりや帷子。肩に番匠箱。腰に小鑿小手斧。細槌や鋸。わすれたりとよ墨さし。裾にかんな屑。吹きや散らした。和女に名殘は惜しけれどもよ。瀨戶や浦のとまり船が。急ぐ程の。ホオイ。やがて來うぞよ。

石引

石子藤五郎殿は。石を引きやるの。石に飾りの。衣を着せて引きやるの。我殿子は。先から二番目の。大紋の襠着て。太刀をはいたが。殿子よ扨も。引いた引きふり。先は引いた引きふり。人目だに思はずは。つる〳〵と走りよつて。いとし腰をしめうに。

曉明星

あかつきの明星の。西へちろり東へちろり。ちろり〳〵とする時は。扇おつとり

人の妻みて。我妻みれば。〳〵深山のおくの。こけ猿めが雨にしよぼぬれてつい
つくぼうたにさも似た。

さぎのはし

時雨の雨に。ぬれじとてさぎの橋を。わたした。鵲の橋を。わたしたりや。そうよの。

大原木

あの山見さいこの山見さい。戴きつれた。大原木。

春日山 （末廣に出づ）

傘をさすなる。春日山これも神の誓とて。人が傘をさすならば。我も傘をさゝう
よ。げにも然あり。やよがりもそうよの。

ざゝんざ

ざゝんざ。濱松の音はざゝんざ。

くせもの （謠曲花月に出づ）

來しかたより。今の世まで。絶せぬものは。戀といへる曲物。げに戀はくせもの。く
せものかな。戀こそ寐られね。

根白の柳 （謠曲藤永に出づ）

みだれごゝろ

綾のにしきの下紐は。解けてなか〳〵よしなや。柳の糸のみだれごゝろ。ひつわすられぬ。

月ほそく

はる〴〵と送りきて。面影の立つかたを。かへりみたれば。月ほそく殘りたり。なごりをしやの。

きりぎりす

いとゞ名の立つ。をりふしに。誰ぞや妻戸を。きり〴〵す。

人ふたり

雨の降る夜に。誰がぬれてこぞの。誰ぞよと咎むるは。人二人待つ身か。

燈暗うして

燈暗うして。ものゝさびしき。をりふしに。君が來ろにや。

月夜烏

こゝは山陰。森の下〳〵。月夜烏はいつも鳴く。しめておよれの。夜は夜中。

我妻

る、げにまこと忘れたりとよ。こきりこは放下にもまる、筑子の二つの竹の。世々を重ねて。打ち治まりたる御代かな。

猿歌

（靱猿に出づ）

猿山王。まさるめでたい。まつきおろしの。春の駒が。鼻をつるべて。まゐりたるぞや。白がね黄金御知行。まさるめでたきましよ。ひんだの踊は一をどり。一

川岸の根白の柳。あらはれにけり。そよの。あらはれて。いつかは君と。君と我と。我と君と。枕さだめの。やよがりもそよな。

花の都

(謠曲放下僧に出づ)

面白の花の都や。筆に書くとも及ばじ。東には祇園清水。おちくる瀧の。音羽の嵐に。地主の櫻はちり〴〵。西は。法輪嵯峨の御寺。廻らば廻れ水車の輪の。臨川堰の川波川柳は水にもまる〻。しだり柳は風にもまる〻。ふくら雀は竹にもまる〻。都の牛は車にもまる〻。茶臼は挽木にもま

來る嫁が刈らうぞよの腹立や。松の葉ごしに月見ればしばし曇りて又さゆる。〱。ひん田の跡は是までぞ〱。一の幣立二の幣立三に黒駒信濃を通れ。船頭殿こそ勇健なれ。とまり〱をながめつゝ。なほ千秋や萬歳と。俵をかさねて面々に。たのしうなるこそ目出度けれ。

御田（謠曲加茂に附屬せるもの）

シテ「田植ゑい早乙女。うゑい〱早乙女。立衆「目出度き御田植に苗代におりたち。シテ「おりたちて〱。田植い早乙女。笠買うて着せうぞ。立衆「笠買うて給ふならば〱。猶も田をば植ゑうよ。シテ「いかに早乙女。富岡山に白玉椿の。花のさいた見よかし。立衆「八千代をかさねて。さきたるぞめでたき。シテ「早苗とるとて。手を取るぞをかしき。立衆「取りたらば大事か。若き時のならひよ。シテ「早苗とる山田の筧もりにけり。立衆「引く注連繩に露ぞかゝりたる。シテ「五月の早女房と春の鶯と。立衆「こゑくらべせう春の鶯と。シテ「いかに早乙女。懸想文が欲しいか。

立衆「懸想文を給ふならば。さぞうれしからまし。シテ「懸想文とりたりと。何にせうぞ醜婦。立衆「つらにくい夫の。言ふことの。腹立。シテ「まことに腹が立つならば。水鏡を見よやれ。立衆「早乙女の影うつす。苗代のすみ〴〵の。水は鏡かは。シテ「鏡

をどりこなたの御庭を今朝みれば。〳〵。黄金の桝で米を量る。〳〵。三日月なりの鎌はしや。〳〵。妻もろともに。草を刈らう。〳〵。舟の中には何と御寝るぞ。〳〵。苫を敷寐に檝を枕に。〳〵。一の幣立て。二の幣だて。三の黒駒信濃踊俵をかさねてめん〳〵に俵をかさねてめん〳〵に。樂しくなることそめでたき。

また

猿が〳〵まゐりて。おんざる目出度能仕る。踊が手舞と立ちまはり。肩に小腰をゆゝり合せ。しづやかに舞うたりけり。八つの鞨鼓はらりと打てば。十二の樂も揃うたり。夫音樂の鈴の音は。よせくる波にも喩へたり。筑紫下りの西國船。艫に八挺艫に八挺。十六挺の櫓械を立てて。下人々の寶の中に。綾や綾羅金襴緞子。練や朽葉唐織物。かゝるめでたき寶の中に。火取玉水取玉。ひん田の踊はおもしろや〳〵。さても目出度の蜻蛉洲や。黄金桝にて米はかる〳〵。お庭に〳〵花が咲きいの。花は白銀實は黄金〳〵。船の中には何とおよるぞ。苫を敷寢に檝を枕に。檝を枕に。夜さの泊は何處が泊ぞ。なばかしやごしか室が泊か。〳〵。いとゞ名の立つ秋風に。誰そよ妻戸をきりぐ〳〵す。〳〵。いとし殿子の御座るやら。犬が。犬が吠えい四辻に。〳〵。ひん田の横田の朝苗を。しよんぼりしよぼりと植ゑ給ふの。今

上に漏れたるものを此に集め載す。

戀しの昔 (宗長日記所載田樂謠)

戀しの昔や。立ちも返らぬ老の波。いたゞく雪の眞白髮長き命ぞ恨なる。

矢部の善七 (義殘後覺所載)

矢部の善七大名ならば。竹の二俣世は不思議。

織田の源五 (同上)

織田の源五は人ではないよ。お腹めせ〳〵めさせておいて。我は安土へ逃ぐるは源五。正月二日に大水出でゝ。織田の方なる名を流す。

一にうき事 (甲陽軍鑑所載)

一にうきことと金が崎。二にはうきことと志賀の陣。三に福島野田ののきぐち〳〵。

德川樣は (武者物語所載)

德川樣はよい人持よ。服部半藏は鬼半藏。渡邊半藏は鎗半藏渥美源五は首取源五。

は見たりとも顏はよごれたり。立衆「顏はよごれたりとも。思ふ人は持ちたり。シテ「いかに早乙女。このところの山々に。花のさいた見たるか。立衆「げに急度みたれば。黄金の花もさきたり。シテ「おう目出度や。立衆「めでたや。シテ「げにめでたかりけり。まことにめでたかりけり。立衆「めでたき御代には。千町萬町富降れり。ふれりや〳〵富ふれり。

枕物狂

シテ「枕ものにや狂ふらん。地「まくらものにやくるふらん。寢るともねられず起きもせず。理や枕の。おとより戀のせめくれば安からざりし身の狂亂は。木まくらなりけり。シテ「ありや筐の張枕。地「ありや筐の張枕の。主ぞ戀しかりける。乙御前ぞ戀しかりける。シテ「逢夜は君が手枕。地「こぬ夜は己が袖枕。まくらあまりに床廣し。よれ枕こちよれ枕。まくらさへ疎むかげにもさありやよがりもそうよの。

其四　雜曲

第四編 ちかつよぶり

おほよそ足利氏の末期より徳川氏の盛時を經て現今までの歌謠を集め載す。

其一 小唄

主として三味線に合はせ歌ふ短篇歌曲の總稱なり。その種類は本手組、端手組、裏組、長唄、隆達節、弄齋節、戀慕流、ほそり、片撥、投節、繼節、土手節、籬節、加賀節、滑り、柴垣節、丹前、道念節、古今節、清搔、歌念佛、歌祭文、小室節、伊勢音頭、一節切小唄、小六節、上方唄、潮來節、めりやす、大盡舞唱歌、四竹節、門說教、讀賣、木遣、大津繪節、江戸長唄を始として現今おこなはるゝ端唄、都々一の類も之に屬す。此内あるひは名のみ存して曲節の絶えたるもなり。曲節のみ殘りて唱歌傳はらぬもあり。大方は唱歌のみ見る時は何節にも流用せらるゝが多く。概して言へば唄ひぶりこそ違へ歌詞の調さしては相似たるものなれば今之を一々に分類せずして小唄の名の下に纏め載せたり。然れども出來るだけは時代の順序によりて掲ぐるを主としたれば。語調と思想との漸次に移りゆく沿革の面影をば讀むがまに〳〵味ひ知るを得べきなり。

○本手組

石村檢校虎澤檢校等の作りたる曲なり。琉球より傳來せし三味線の手を

焼野の雉（小田原記所載）

我は焼野の雉われは焼野のきゞすおもひ出でゝはほろと鳴く。

人の若衆（犬つれ〲所載）

人の若衆をぬすむよりしては首を取らりよと覺悟した。

とても立つ名が止まばこそ。こちへ御寄りやれのう。柴垣ごしに。もの言はう。

其五

大原木買はひ〳〵。黒木めさいの。てうりやうふりやう。ひゆやりやにひやるろ。あらよひふりやうるり。ひようふりやう。

鳥組

其一

鳥も通はぬ山なれど。住めば都よ。わが里よ。

其二

わが戀は。千本小松の枯るゝほど。鯛が水干て。ほこりたつほど。

其三

見る目ばかりの。戀をして。千賀の鹽竈。身をこがす。

其四

言へば世に舊る。いはねば心が。もだ〳〵と。

其五

御目と目と目を。見合はせて。離れ難なの。そのおもかげを。夢にも見もせず。現に

直し改めて作りしものゆゑ琉球組などの名ありと云ふ。これを三味線小唄の濫觴とす。

琉球組

其一

比翼連理よのでんに照る月は。十五夜が盛りの君さまは。いつもさかりよの。

其二

思を志賀の松の風ゆゑに死なでこがるゝ〳〵。

其二

深山おろしの。小笹の霰の。さらりさら〳〵と。したる心こそよけれ。嶮しき山のつゞらをりの。かなたへ廻りこなたへ廻り。くるりくる〳〵とした心はおもしろや。

其三

とろり〳〵としむるめの。笠のうちよりしむりや。こしがほそくなりそろよ。

其四

其三

雨はふるとも雪ふるなさ。しのぶ細道の。笹のたわむに。

其四

成ると成らずと。文をばつくせ。心強やつれなや。とにかくに。われは數ならぬ。身じやほどに。君來うか。〳〵行こか。來ずはもどろに。

其五

一夜二夜と。なれそめて。明日は舟出る何とせうぞの。うらめしや。

其六

いやと言うたもの。かきくどいてのう。なんぞやそなたの。一花心。おもへや君さま。叶へや我戀。あらうつゝなの。うかれごゝろ。やもまいの〳〵。さゞらもまいの。

我等も若い時は。殿にもん揉まれた。

不祥組

其一

若いがふしやうで。おひまゐらせうかの。せどしはがきのゆぶれたを。

其二

なりとも逢はせてたもれ。あはねば心がもだ〳〵と。思のたねや。あこがるゝ身を何とせうぞの。

其六

京では一條。柳屋が娘。よつわり帶を。たすきにかけて。いかにも腰が。しなやかな〳〵。

其七

いざ參ろ六地藏へ。佛に隔は。なけれども。さりとてはではの。しはやが立てた六地藏。えいそれ。しはやが立てた。六おぢざう。

其八

忍の殿樣に。ふらんとさけさしよ。えんのあるゆゑ。よねんがないよの。

腰組

其一

腰にさげたる。巾着は。これも憂き人の。縫じやはをに。

其二

道で見たりとも。わすれまい。しだれ柳の。ふりじやはをに。

弓矢八幡。ねはせねど。寝たとおしやらば。何とせうぞの。

其二

ひとつこしめせ。たぶ〳〵と。ことに御酌は。忍妻。〳〵。れんぽれれつのれいぴしよ
ひやうにそはゞれつのれ。

其三

これのちよぢよが。かみわげは。しちくこだけに。四つのふし。加賀や越前。美濃尾
張。越後京。根來粉河坂本で。所望めされた。

其四

明日は出づもの。舟が出づもの。おもたげもなく。御寝る殿御や。あゝれよるとの
ごや。飛騨のをどりを。ひとをどり〳〵。

其五

船のなかには。なにとおよるぞ。苫を敷寝に。楫を枕に。ひんだのをどりを。ひとを
どり〳〵。

忍組

其一

思ふまいとの。かねをちんからころりと。打てば罰やら。なほ思はるゝ。

其三

橋に我身を投げかけて。渡らせうよの。とろ〱〱と。やれ渡らせう。

其四

月の夜に打つ砧のおとのえい。はら〱ほろ〱。はらほろと。またしても驚くよもあるに。ひとり寢よとはなにごとぞ、思はざなきそ。増す花ぐるひせうずものわざくれ。

其五

わざと來んとは。おしやれども。しんじつ思へば。耻も人目も。おもはくも。れもひだされぬ。ものじやもの。しかしながら。きみはたゞ增す花の。あるゆゑ。

其六

十七八は。うんえいころり。なげしのはてり。みなとのたちの。めにいりた〱。目にいりたらば。藥師へこもれ。やくしのまへで。めぐすししよ〱。

飛彈組

其一

浮世組

其一

たれも浮世は假の宿。さのみ人目をつゝむまじよや。きみしやらり。

其二

文もやるまい。びんぎもせまい。返事さへせぬ。うさつらさ。君をば人に。おもはせて。かほどにつらき。ものぞとおんもひ。おもひしらせて。とはおもへども。身のうへになれば。さらにおもひきられぬ。

其三

とても立つ名に。寢てござれ。ねずとも明日は。ねたと算段しよ。花のをどりをのう。はなのをどりを。ひとをどり。

其四

われは小鼓殿にしらべよ。革をへだてゝのう。革をへだてゝ。ねにでざる。花のをどりをのう。はなのをどりを。ひとをどり。

其五

いとし若衆と。ふつゝみは。しめつゆるめつしらべつゝ。寢入らぬさきに。なるか

ひよしのび〳〵て。こゝろうれしや。むめにさへづる。うぐひすの。よるは梢に。やどるとも。

其二

思ふまいよの。やれそれはどに。顔にもみぢの。立田山。

其三

暇乞には。きたれども。碁盤面で。目がしげゝれば。まづ御待あれ。柴の編戸も。押せば鳴る。おはれ霰が。はらほろと。降れかな其間に。おゝ笑止や立つ名や。せうしとたつなや。しのびをどりは。おもしろや〳〵。

其四

戀をせば〳〵。二十三夜の。月を待て。月のいつはり。なきものをてててからこ。しやんぎしや。かんこはらり。ついやひよつ。ひや〳〵つやに。ちやうらゝにやうつほゝ。しのびをどりは。おもしろや〳〵。

其五

わが戀は。もどのふくろに。色小袖。なにと包めど。色に出でそろ。逢ひ見てのちは。なにとせうぞの。もどろやれ。しやなら〳〵と。

其三

われが殿御はどう五郎どのしゆじやが粟田口より。ひしまた引きやる。えいややころさ。にやつというて引きやる。おてゑきくさへ。よふしがな。ゆるまして添うたら。死のずよの。

其四

君と我とはのや。わくの糸の。きれてはなれて。またむすぶ。

其五

忍んだりやな。しのばれたりやな。裏の細道。小藪から。

其六

思ふまゝなるのや。こよひかな。月は朧に。妻はきて。もみおばを見よ。こひはちる。

葛の葉

其一

さてもやさしの。いよゝ葛の葉や。何をたよりに。はひかゝる。いよえい。はひかゝる。

其二

君を松島。小島の海人の。袂ひがたき。わがなみだ。いよえい。わがなみだ。

ならぬか〳〵。

其六

みやまやるまい。みやな瀧のみづは。うちやうていつく。ちやうど打てば。うちやうていつく。つく〳〵しん。たんたらつく。ちやうど打つ。若衆をどりをのう。わかしゆをどりを。ひとをどり。

○端手組

本手組に續いて起れるものなれば之を新曲とも云ふ。柳川撿校の作なり。

待つにござれ

其一

まつにござりた。いとしのきみやのう今夜でござらで。こがれ死なう。

其二

とても緣なき。なかならば。などやはじめの。つらからん。いとゞはげしき。吹上濱に。鳥をかぎりに。かのさま待てば。さむき嵐も。身にしまぬ。

其三

門に立ちたは。八もじさまか。夜風身の毒。うちござれ。

其四

いつの何時。そなたを見初め。われが身はたゞ。磯邊の千鳥。鳴かぬまもなや。きみゆゑに。

其五

こゝは三條か。やれかまのざか。一夜とまりて。しげりまゐらしよ。われが殿御は。奈古屋にござる。さても御留守は。ものういものじや。えい〱さる〱。のう石を引く。えい〱やつと。いうて引くには。ゆめたんべいの。えいというて引けば。お靡きやるかのう。いよやつというて。えいとへ。えいさらえい。

長崎

其一

みやいちがよれた〱。しよじよがなさけ。

其二

ながさきの鳥は。時しらぬ鳥で。眞夜中に歌うて。〱。きみをもどす。

其三

みやま清水は。底からすむが。君の心も。そこからか。

其四

山で小柴を。しむるが如く。こよひ其樣と。しめあかす。

其五

あさきちぎりに。あひなれそめて。深きおもひは。あゝさて淚が。きみにあふせを。待つばかり。あゝさて。まつばかり。

其六

こんどござらば。もてきてたもれ。ぎふの御山の。檜のえだの。うきよがゝりの。おもひばを。

比良や小松

其一

比良や小松の。あさがよひ。褄がぬれそろ。磯うつ波に。

其二

鹽津海津に。あるときは。のぼりたいよの。坂本へ。

このほどは戀ひつ戀ひられつ。こよひは忍の初でござり申すよの。さあいよへいよへ。うちとけてゆら〱と御寢れのうさ。まだ夜はよなかよ。しげれとんときみさま。さあいよへ〱。

其二

まことやら。鹿島の湊に彌勒の御船がついてござう申すよの。さあいよへ〱。帆ばしらは。黃金の帆柱。帆には法華經の。五のまん卷物。さあいよへ〱。

其三

甲斐の國なる。信玄さまのな。一度もござらぬ。二どもござらぬ。おちよぼしのぶにむつのくが候。まづ一ばんに。雨に霰に夜露に。柴垣のうさて。犬のゐだぼえ。それ月はなは。月はのうさて。月はえせもの。

其四

しのぶ細道に。松と胡桃は植ゑまい。待つ夜に其身がくるみでもなし。なよさてまことに。くるみでもなし。

其五

去年の竹とよ。今年の竹とよ。しどろでもどろで。のうさて。節がそろはぬ。なよさ

其三

くれなゐの。三尺手拭。かたみに見よとて。おいてゆく。

其四

くれなゐは。うすくなるとも。そもじとわれとは。一期ちぎるべい。そよもさしらがに。こえたのさくと。ちぎるべい。そよもさ。

其五

むかしよりいまに。わたりくる黑舟。緣がつくれば。鱶の餌となる。さんたまりや。

其六

おもはぬ君に。おなさけはむやく。うきみやついて。なげくわれらに。おちさせられぬ。

其七

名所さまゞゝ。おほけれどゝゝ。吹上のはまは。和歌のうら。さあ天神たまつしま。布引のまつやま。いくちよゝゝと。和歌山の。まづおまゐりわれの。紀三井寺。

下總ほそり

其一

やこの染殿。戀しやのう。

其三

眞の暗にも。なよはぬわれを。あゝさて其樣の。まよはする。

其四

更けよ松風。あがれよ簾いまの小唄の。主見たや。

其五

花とならばなよ。たんだ御身は、紅葉のいろよ。のうさて。日數にそひて。いろまさる。

其六

梅のにほひを。櫻花に。やどらせて。青葉のまゝに。ながめばや。

其七

尺八の。一節切こそ、音もよけれ、君と一夜は。寢も足らぬ。あら心なの。きみさまや。

其八

そちとこちとは。松に藤の。下り枝のごとく。黄昏時にかゝる。かかるななさけが。身にまとはるゝ。

てまことにふしがそろはぬ。

其六

たれでござり申す。壁越のまたねずなき。今宵は殿御のおとに寢てきく。ねてもきけとよ。起きてもきけとよ。こよひの夜がさて。おすの夜になるとも逢はずはもどるまいよの。なよさてまことに。もどるまいよの。

其七

さてもつれなの。きんぎんさまや。きんぎでござらざ。ぬめりてくらそ。それをたれぞと。たづねてきけば。六條下の町の。わかやまさまの。うちの山の神が。さいたらば。たけ〳〵たけりやろものを。

京鹿子

其一

これは京鹿子。いろもよや。目結手際もよや着よや。おら都こひしやのう。みやこのしてたち。戀しやのう。

其二

これは京小袖。いろもよや。紋がら手ぎはもよや着よや。おら都こひしやのう。み

賤の身なれば色にはださぬ。わたゞ心のうちにこがるる。

其二

たちよりむすぶ。山の井の。わかれずわかぬ。中はな。松の二葉よ。千年ふるまで。

其三

筆で書くとも。畫に寫すとも。さらにつきせじ。松島の。波にうつろふ。月のかげ。嶋のかず。しん知らぬ。

其四

たんだ人にはなれまいものよ。なれての後は。るゝんるゝ。身がだいじなるもの。はなるゝが。うい程に。

其五

かづいた水が。ゆり／＼たぶつき。こぼるゝげなものを。うつゝなや。殿は都に。

錦木

其一

神のおまへの。御注連繩。そよふく風にもなびけばなびく。つらき心を。うちすてゝ。ものぐねにな。なめされそ。そふふりわるや。うちとけよ。くすみてもせんなや。

端手片撥

其一

笛に寄る鹿は。妻故に死する。われらも樣にやれ。命捨てうずよの。

其二

ありがたの。利生や。おありがたの利生や。佛まゐりの。りしやうで妻に行きあうたのう。

其三

朝間とくおきて手水瓶をみれば。わが置かぬ花の。あるも不思議やな。

其四

不破の關の。板間に。月のもるこそ。やさしけれ。

○裏組

端手組に續きて起れるもの。これも柳川檢校の作なり

賤

其一

青柳

其一

さてもそなたの。たちすがた。春の青柳。糸ざくら。こゝろがたよ〳〵と。

其二

文もやりたし。びんぎもしたや。面影に立つ。そのおもかげを。忘られもせで。身にそひそゞろに。うかれきて。うきやうこつや。しやうだいなしや。うきや戀のとまらぬ。たゞとにかくに。うらめしや。

其三

枕にかゝる。亂髪。いとゞこゝろの。みだれ〳〵て。やるせなや。よしや其身が。何とならうぞの。

其四

縁なき思に。身ははれて。朝顔の花の。露よりもろき。身をもちて。さのみこゝろな。つくさせそ。

其五

十七八は砂山の躑躅。寝入ろとすれば。ゆりおこさるゝ。

其二

山雀が。籠のうちでの。うらみごと。籠が小籠で。もんどりうたれぬ。

其三

七里小濱のな。砂のかずほど。おもへども。縁が薄いやら。そひもせぬ。

其四

夫は錦木。とりもちて。鎖いたる門を。たゝけども。内に答ふる。蟲の音の。思ひ切ろやれ。戀のみち。きりはたりちやう。〳〵。

其五

忍べども。おもふ君にはあはずして。村雨は。はら〳〵ほろと。ふるほどに。思ひ切ろやれ。戀のみち。きりはたりちやう。〳〵。

其六

とても御捨やる。もののゆゑに。去りがたいとて。口口りようか。浮世のなかの。さんだんに。さいひつことよのと。いはりよよりも。なまなかいちやは。まゐるまいよ。いや〳〵いやなら。はじめにいやとは。おしやらで。いまさら何と。ならうぞのう。おもはざなきぞ。増す花ぐるひ。せうずもの。わざくれ。

其四

花は咲いてものう。梅は開いても。はなさいて。むやくのあだばなよ。

其五

これがいとまなふみてにはとらいで。なまなかに。

其六

山じや谷間の。深谷おろしの。木葉うづもれのう。柴の庵も。またのんえいそれな。つみやてなれどものう。旅はうや。

其七

沖の引く汐に。竹に油を。ぬるやうに。とろり〳〵と。歌うて名のりて。こぐや舟方は。えい上様の。御座舟かまたのんえいそれ。櫓ではやらいで歌でやる。

其八

おちよぼちよぼさまの。なりはむくどりじや。聲は鶯じや。しゆくしやか。むくしやか。さんばか。しんばか。しんからきうたか。ずんばいぼみめが。よござれば。聲も言葉ものう。しなやかな。

其九

其六

曇鏡か。われが身は。おもひまはせば。ときはしや〳〵。

其七

あすは殿御の砧打。おかた姫御も。出て打たい。きぬたをどりは。おもしろや。きぬたをどりは。ひとをどり。

早船

其一

いはひめでたの。のうれし。めでたのうよう。若枝もさかゆるのう。葉もしげる。

其二

ながの長崎の。ながのるすんの。留守すれば。おもひいだすことは。宵と夜中とのう。あかつきと。なごややまだよのう。肥後じや八代。熊本じや。鳥もえ通はぬ。山なれど。住めば都よわが里と。

其三

四角柱ののう。しかくばしらの。またのんえいそれかど。かどのないこそ。そひよけれ。

沖を漕いで通るは明石の浦のげんざが本船かさて櫓ではやらいでうたでやる。

其十六

一の枝引けば二のえだなびくなびけや小松いちのえだつりりんり〳〵。

八幡

其一

月は八幡のまだ空にも往の往のとはおもへどもあとにてゝろがとゝまりて。

後髪がひかるゝなんぼ戀には身が細ろう榜の帶が三重まはる。

其二

立つか御茶には泡立たでわれが浮名はむら〳〵に立つむら〳〵に立たば立てのうまことのこゝろ解けすは所願じや。

其三

あの山かげをすぐに來るだに遲いになよしんじつ恨でとさしおいてなづ口口ておよれのうなよしんじつ。

其四

宮へは三里へ。のうえい。三里も近三里。はつかゝいちの。げんざが塗物は。漆では塗らいで。くちなしばかりで。さつと一は。えいそれ。はつたらずんでんどう。そのやうな。ぬりものは。たゝは呉るゝとも。おらはいや〳〵。いやでそろ。やがてはぐるに。

其十

猿澤の池の。水ではない。戀がすみそろ。身の池に。

其十一

篠竹の。小篠竹の。窓のあらしにめが。君もおよらず。われも寢ず。

其十二

櫻木に。鶯がとまりて。琴のひゞきに花がちる。

其十三

先の月の廿五日に。さだゆたるには似ぬ。照るも曇るも。冬の日も。

其十四

山は雪じや。麓はあられ。里は雨。うらへまはるも。其樣ゆゑ。

其十五

のこゝろねや

其四

かついた水がゆりこぼるゝも浮世のならひさてもつれなや生體なしや憂きや憂や鳴らぬは割れた尺八かのう。

其五

竹がな十七八本ほしやなうきなやもちさじのなかごにくも。

其六

割れた尺八手なかけそとてもなるまいものゆゑにわれた尺八手がござるじいいじとしむればなるものをとりて吹きてみたれば節がちやうとしたれつろいつろつりよれつのれがつれつろ。

なよし

其一

なよしなよしはなよしなしのあだ花なよしなりはしもせでなると名の立つなよし。

其二

おもふ門には竹を植ゑて。雪のふりたる。あけぼのを。つれなき人に。見せばや。なびく笹の葉。

其五

人の嫁御と。竹にさく花。よやとおもへばやへ。曲もない。さまじやせんない。しやもしやも。もちくなにしよ。そうでなにしよ。それしよしやなにしよ。若衆をとりをのう。わかしゆをとりを。ひとをとり。

翠簾組

其一

翠簾の面影。ものごしに。見そめ聞きそめ。うか〱と。戀をして。瘦するは人のしらずして。夏瘦をするとやれ。すいめさるゝ。

其二

露にみだるゝ。糸すゝき。そよ〱と。吹きくる風にも。なびきそろ。うつゝなや。生體なや。とはおもへども。そもじとわれとは。萬代までも。千代までも。

其三

風にまかする。浮雲も。吹くかたへ行く。めでしめば。引くとおもはれ。つれなの君

山のしろきを雪かと思うて見れば卯の花しむりやこしが細くなりそろよ。

其四

武藏野に荻と薄が戀をして。荻はそよめくのう。薄は穗に出て。みだるゝ。

○隆達節唱歌

文祿の頃隆達の作りたる曲なり。隆達は自庵と號す。もと日蓮宗の僧なりしが還俗して商となり。常に音曲を好みて遂に一種の節を謠ひ出だしぬ。世に之を隆達節と云へり。

其一

末の松山。さゞなみはこすとも。御身と我とは千代をふるまで。

其二

思ひ切れとは。身のまゝか誰かは切らん。戀の道。

其三

雲折竹を。そのまゝつねに世は入の。いひなし。

其四

さゝら小竹に。おらねども。更にさら〳〵。更に知らぬもの。ともすれば何ぞよ。そなたのものゝくねり。何となりと。御好みや。鉦を打とかのう。

其三

しんきはりよやれ。濱へ出て。沖の島々を。見てなりと。あれに見ゆるは。志賀の浦々。辛崎一つ松。田舍くだりの。道すがら。〳〵。

其四

田舍下りの。旅の殿。名所の月が。ながめしやんとのう。しやんとながめたりよさ。そゞろいとしうて。やるせなや。

千代の惠（此曲は作者を知らず）

其一

千代のめぐみよの。柳はみどり。花はくれなゐよ。人はたゞ情それ。梅はにほひよの。

其二

荒野になりと。君にそひなば都なるもの。〳〵。

其三

たのはだも、寝ならし。

其十一

逢ふは稀よ。一人寝は繁し。あの君故に。あらぬ名の立つ。

其十二

逢ふときは。秋の夜もはや明けやすや。獨ぬる夜の。長の夏の夜。

其十三

緣さへあらば。又も廻り逢はうが。命に定め。ないはどに。

其十四

野分山おろしも。身にしまぬ。よひ〳〵ごとに。君を待つには。

其十五

比翼連理の。語らひも。心かはれば。水に降る雪。

其十六

思はゞ君よ。汐ひる間にも。かならず浪の。よるとなく。

其十七

誰かつくりし、戀の道。いかなる人も、踏み迷ふ。

月夜烏は。ほれて鳴く。われも烏か。そなたにほれてなく。

其五

ふしんならば。鉦打たう。いやかねもむやく。只振にて。知る物を。

其六

そなた故にこそ。浮名の立つにのう。おどろけよの。まづはおよる夜の。

其七

いや〳〵は。思のあまりのうら。逢はせてたまふれ逢はせてたまふれ。とにかくに。

其八

千度百度。おしやるとも。なるまじものを。うつゝなの。そなたや我に主ある。思ひ切れとよ。

其九

忘るゝものを。又ふりかゝる。かたびらゆきとの。消えもせで。

其十

帯をやりたれば。しならしの帯とて。非難をおしやる。帯がしならしならば。そな

獨寝もよやの。曉の別思へばの。

其二十六

獨寝はいやよ。あかつきの別ありとも。

其二十七

竹はぞすぐなる。物はなけれども。雪々積れば。すゑはなびくに。

其二十八

月もろともに。立ち出でゝ。月は山のはに入る。別は妻戸に。

其二十九

亂れ初めては。人目もいらぬ。なれぬ昔に。思案せうずもの。

其三十

忍ぶ身にさへ。悋氣をめさる。忍ばぬ身ならば。さて何とあらうぞの。

其三十一

そなた忍ぶと。名は立ちて。枕ならぶる。間もなやの。

其三十二

花を嵐の誘はぬさきに。いざおりやれ。花を三吉野へ。

其十八

誰か再び花咲かん。あたら夢の間の露の身。

其十九

獨およらば。まゐらうず物を。とすに雨ふり。眞の闇なりと。

其二十

しんきの花は。慾にさく情の花の。一夜さかぬか。

其二十一

なるの枕に。ひろのしとねや。あけぬはやさて。捨てらるゝ憂き身は。

其二十二

生るゝも。そだちも知らぬ人の子を。いとほしいは。何の因果ぞの。

其二十三

夏の夜を。寢ぬに明くると。いふ人は。物を思はぬか。物を思はぬかの。

其二十四

のかいはなさい。帶がとくる。いまにかぎらうか。あはうものを。

其二十五

其四十

せめて言葉をうらやかにの。今かへる我に。何の恨ぞ。

其四十一

夢はへだてず。海山を越えても見ゆる。よな〳〵に。

其四十二

月待つ月は。冴えもせで。君待つ月は冴ゆるよの。

其四十三

思ひよらずの。會釋のふりや。恨のことぞ。はたと忘れた。

其四十四

面影は。手にたまらず。又消えて。そはぬ情の。うらみ數々。

其四十五

雨の降る夜の。一人寝は。いづれ雨とも。涙とも。

其四十六

引かば靡けとよ。いとすゝき。枯野になれば。いらぬ憂き身を。

其四十七

其三十三

花を嵐の散らす様な、雪に。袖うちはらひ、誰かおりやらうぞの。

其三十四

花が見たくば。吉野へおりやれの。吉野の花は。今が盛じや。

其三十五

あるはいやなり。なるもいやなり。思ふはならず。さてもよしなやな。何とせうぞの。

其三十六

見た事もあり。聞いた、事もある。我にも情あるならばいはじ。

其三十七

立たば立て。我名。君故ならば。惜しからぬ命。

其三十八

悋氣心か。枕な投げそ。投げそ。枕にとがは。よもあらじ。

其三十九

うき世は夢よ。消えてはいらぬ。とかひなふとけて。とかいの。

其五十五

曇らば曇れ。照るとても。君を思ひの。晴るゝ間もなし。

其五十六

又も逢はうすは。不慮で候。うどんげ花。今ばかり。

其五十七

逢ひも見もせぬ。とがもなき。我に悋氣めさるゝ。鉦打たうかの。そなたは。

其五十八

逢はぬはどこそ。頼なれ。今朝の別の。おものうや。

其五十九

君ゆゑに。かゝる浮名の。立田山。紅葉ばよ。只色に出て。

其六十

夢になりとも。情はよいが。人のつらさを。聞くもいや。

其六十一

君ゆゑならば。雪の野に寢よゝ。よしや此身は。消ゆるとも。

其六十二

恨みたれども、いやみのほどもなや。そうして恨も。いふ人によりか。

其四十八

しばし待て。硯のうへの。薄氷。うち解けてこそ。文も書かるれ。

其四十九

身は破笠きもせで。すげなの君や。かけておく。

其五十

時雨れそろもの。神無月。晴れては曇り。降り心。

其五十一

君かや闇には。訪ひもこで。月にはあらはれて。無き名の。立つにの。

其五十二

尺八の。一節切こそ。音もよけれ。君と一夜は。寢も足らぬ。

其五十三

情かけうもの。くやしやな。なんぼう戀には。身がほそる。

其五十四

人はよいもの。兎に角に。破車よ。わがわるび。

其七十

おもしろのお月や。口ふたりみはなを。

其七十一

君の情の深き故か。思ひしほどは。名もたゝぬ。

其七十二

寢ても覺めても。忘れぬ君を。焦れ死なぬは。いなものじや。

其七十三

夢に見えつ。うつゝになれつ。お笑止と去らぬ。面影や。

其七十四

闇にさへならぬ。月にはとても。あらどんな。お人じや。

其七十五

數ならぬ。身には思の。無かれかし。人なみ〳〵。なみに物おもふ。

其七十六

八島の磯の荒波か。そなたはよせつ。打ちのけ。物思はする。

其七十七

いやとおしやるも賴みあり。青柳よりも雪折の松。

其六十三

富士や淺間も。何ならむ。君思ひねの。胸の烟は。

其六十四

底はうちとけて。うはの空する。ふりはなほいとをしい。

其六十五

君は月。思ひ明石の。うらみねば。須磨の浦浪。須磨の海。

其六十六

只おいて。霜に打たせよ。科はの。夜更けて來たが。憎いほどに。

其六十七

思ひよらずの。腹立顏や。恨は數々。そなたよりこそ。ある物を。

其六十八

叩く妻戶は。明けもせで。松は明けたよ。ほの〴〵と明けた。

其六十九

初夜かと思うた。お憂や別の。六時じやもの。

其八十五

武藏野の。ひともとすゝき。獨寢も憂や。つれもなや。

其八十六

とても名の立たば、宵からおりやれ。よそへ忍の。歸るさはいや。

其八十七

人は知るまじ。我中を。賴むぞそばの。扇も帶も。

其八十八

とても消ゆべき。露の身を。夢の間なりと。夢の間なり、とも。

其八十九

いつも曉。鳴く鹿は。あはで鳴く音か。あうて別を。鳴く音か。

其九十

葛葉は何を。からむるの。〳〵。思ふとて。叉ふりめすな。たぶんふりより。あらはるる。

其九十一

豐後や薩摩の。殿たちに。〳〵。一夜二夜とよ。おれそめて。あすは舟出る。なごせう

ぬれてこそ。歸らう君は。朝露に。我が袂も。かわかぬ物を。

其七十八

鳥と鐘とは。思のたねよ。とは思へども。人により候。

其七十九

ふりよき君の。情の無いは。冴えゆく月に。かゝる村雲。

其八十

夢にも見ゆらんと。まどろめば。笑止と雨の口。枕うつおと。

其八十一

まどろまば。夢にも見るべきに。うつゝなや。戀には。目もあはぬ物か。

其八十二

忍ぶ中よそへもらすな。かはるとも。そはぬは浮世。名こそをしけれ。

其八十三

君の心が。かはれかし。つれなき心の。

其八十四

梅はにほひよ。木立は入らぬ。人はこゝろよ。姿は入らぬ。

いとはるゝ。恨みながらに。ねぬる夜は。枕の時雨。いくとほり。

其九十九

たとへ事には便なけれども。身の影法師に。君をなして。添はいで。

其百

夜更けておりやるを。今思ひ合せた。いとほしの君や。身がまゝならぬ。

其百一

いつも春たつ。門の松。しげれ松山。千代も幾千代。若綠。

其百二

いくたびも摘め。生田の若菜。君も千世を。積むべし。

其百三

おもしろの。春雨や。花の散らぬ。ほど。降れ。

其百四

おもしろや。春雨の。花の散らぬ。ほど降る。

其百五

花は吉野。月は更科。人ははづかし。たちどころ。

ぞの恨めしや。

其九十二

いへば世にふる。よにふるゝ。いはねば憂き人の。それと知らばや。

其九十三

此春は。花にまさりし。君待ちて。青柳の糸。亂れる。

其九十四

鐘さへ鳴れば。も往なうとおしやる。此は佛法東漸のみなもと。初夜後夜の鐘は。いつもなる。

其九十五

鐘も鳴る。夜もふける。おおきなの。わが身や。ひとりねをする。

其九十六

夢の浮世の。露の命の。わざくれ。なり次第よの。身は成り次第よの。

其九十七

色よき花の。にほひのないは。うつくし君の。情ないよの。

其九十八

其百十三

こぬもかなり夢のあひだの露の身逢ふとも宵の稲妻。

其百十四

よその梢のならひとて松に時雨の又かゝる。

其百十五

獨寝になき候ふよ千鳥も。

其百十六

雨が降れかなはら〱と獨板屋の淋しさに。

其百十七

ふたり聞くとも憂かるべし獨いたやのあかつきの雨。

其百十八

獨寝し物憂やなふたり寝しそめて憂やな獨寝。

其百十九

武藏野はなに限あり君を思のはてもなし。

其百二十

其百六

吹けよ松風。吹かねば山居のさびしきに。

其百七

君は初音の。時鳥。まつによなく。かれさうらふよ。ひとりぬるよの。さびしきにふたりぬるよの山時鳥。

其百八

庭の夏草茂らば茂れ。道あればとて。訪ふ人もなし。

其百九

木幡山路に。行き暮れて。月を伏見の。草枕。

其百十

なか〳〵消えて。露の身契あさがほ。

其百十一

霜枯の。葛の下葉の。きり〳〵す。恨みては鳴き。恨みてぞなく。

其百十二

よしや我にも。情われし。賤が門に。月は宿り候はぬか。

其百二十八

杜子美山谷。李太白にも。酒を飲むなど。詩の候ふか。

○弄齋節唱歌

弄齋は朗細とも籠濟とも書く。或は謡ひはじめたる人の名とも云ひ又は單に節の名とも云ひて確かならず。隆達節に續きて出でしものなり。

其一

逢うて立つ名が。立つ名の内か。逢はで立つこそ。立つ名なれ。

其二

思ひ出すとは。忘るゝ故よ。思ひ出さぬよ。忘れぬは。

其三

秋は夜長し。訪ふ人もなし。明かしかねたる今宵かな。

其四

なげきなる世も。月日を送る。さても命は。あるものか。

みくさ山より。出づる柴人。になひきぬれば。これも焼物。

其百二十一

待つはなぐさむ。ものなるに。鳥はものかはと。誰か云ひけん。

其百二十二

神ぞ知りける。わが中を。千代萬代と祈りさふらふ。

其百二十三

風の吹き候。なよ竹の。靡きがほして。折心もな。

其百二十四

人がらは。たをやかにして。なよ竹の。折るに折られぬ。心づよやの。

其百二十五

宇津の山邊の。うつゝにも。夢にも人ぞ。逢はぬよの。

其百二十六

問へば恨むる。問はねばもとより。さてなにとよかの。

其百二十七

なほざりの。ほどこそ。はづかしめ。もりなばもりよ。我涙。

ゆふべ〳〵に。身は浅草の露を踏みわけ。おのよしはらに。しどろもどろと君ゆゑたどる。れんぼれ丶つれ。

○投節唱歌

貞享元禄の頃京都よりはじまりて三都に流行りたる一種の小唄なり。一名を撫節ともいへりしとも云ふ。歌詞は箕山といふ粋史家の作り出だせる由かたりつたへたり。

さるおんかた

其一

松の葉でしの磯邊の月は。千歳ふるともかはるまい。

其二

さしも知らじなかくとは君に。つ丶む思ひのもゆれども。

其三

思ひ亂れて蘆屋のさとに。海士のたく火か飛ぶ螢。

其四

其五

よしや嘆かじ。叶はぬとても。定めなきこそ。浮世なれ。

其六

よしや今宵は。曇らば曇れ。とても涙で。見る月を。

其七

つれてござれや。いづくへなりと。たとへ荏が。宿なりと。

其八

住めば浮世に。思の増すに。月と入らばや。山の端に。

○戀慕流唱歌

尺八の曲より出でしものかといふ。寛文頃までは行はれたり。

其一

君は五月雨。おもはせぶりや。いとゞてがるゝ。身は浮舟の。波にゆられて。島磯千鳥。れんれつれつれ。

其二

更けて碪の音より聞けば月に落ちくる我涙

其五

せめて宿れよ小簾もる月も日頃もどめし憂き涙。

其六

渡りくらべて世の中見れば阿波の鳴戸に波もなし。

其七

こゝろ〴〵の世の中なれや花のうてなの露のいろ。

其八

紅葉焦るゝ色とは聞けど末の落葉を誰か知る。

其九

松の時雨に夢うちさめてよその哀れが思はるゝ。

其十

涙くらべん山時鳥我も浮世のつらければ。

けいせい

其一

たつる錦木かひなく朽ちてそはで年ふる身ぞつらき。

其五

我は菖蒲の音にこそ泣かめ引くな袂の露けきに。

其六

海士のたくなる藻鹽の烟人の立居のしほとなる。

其七

あられ降るらし外山のかづら色に見ゆるを如何せん。

そう

其一

よそになしても問へかし人の月は誰ゆゑ袖にすむ。

其二

月を見ばやと契りし人も今宵袖をやしぼるらん。

其三

問はゞ問へかし此夕暮をゝおすの命も知らぬまに。

其四

其九

はせは雲井にへだつるとても。心かはるないつまでも。

其十

殘るかたみの鏡にうつる。月のさそひし面影は。

其十一

恨みながらも又うち向ふ。月はゆかりか憂き人の。

其十二

いつの夕に袖振り別れ。もはやあさおもせにあまる。

其十三

通ふ心は雲井のよその。なかに過ぎ行く月日かな。

其十四

ひとつ枕に沈みしなかも。憂きは別れの袖の露。

をさこ

其一

花の曙ゆふべの秋も。くらべぐるしき我心。

廓はなれて罪なき月を。いつか都の空に見ん。

其二

憂しや此身は親はらからの。爲に沈みし戀の淵。

其三

涙ならでは哀れを聞はじ。深き思ひの袖の色。

其四

宵の口說のしらけたあとを。泣いてとはるゝや時鳥。

其五

君はつらくと恨みはせまじ。心がらなる身の憂きを。

其六

消えぬ心の半は雲に。通ふ嵐をよすがにて。

其七

もはや命も絕えなば絕えよ。住めば恨めし同じ世に。

其八

人目忍べば其名もいはで。思ふあたりのことぞきく。

まれに逢ふ夜は人目を忍び。語りつくさん我思ひ。

其十

雨の降る夜は一入ゆかし。いつにおろかは無けれども。

其十一

幾世ふるとも洩らさぬ水の。したに通ふや岩根文。

其十二

別れぬる夜のつらさを問はゞ後の朝の文ばかり。

其十三

ゆふべ〳〵のその移香は君が袂のゆかりとも。

其十四

なませなまなか馴れずばかはど。ものは思はじさりとても。

其十五

歸る野道の淺茅にやどる。露にそへたる我涙。

其十六

君に逢ふ夜は埴生の小屋も玉のうてなに優るもの。

いかにへだてしおぼつかなさぞ。しめてねる夜もあかぬ身の。

其二

蛙鳴くさへ恨みのあるに。まして寢ざめの時鳥。

其三

袖の湊の寄る瀨を知らば。うれしかるべき淚かは。

其四

逢はで寢る夜は袖ひちまさる。夢は枕のいとまなや。

其五

行くも歸るも忍ぶの亂れ。限り知られぬ我思ひ。

其六

通ひなれにし朱雀の野邊の。露はものかは我淚。

其七

うちやうたれし枕のふちも。いまは幾瀨の飛鳥川。

其八

其九

さても寢られぬ曉憂しや。過ぎし今宵のしかもいま。

其二十五

色に沈みて消えゆく身なら。ひきは歸さじ捨小舟。

其二十六

幾重かさなる山川なりと。心へだつな旅衣。

をんな

其一

逢はぬつらさを焦れしよりは。逢うて別るゝ憂き涙。

其二

衞士の焚く火は夜こそもゆれ。胸に焚く火の絶えやらぬ。

其三

心細くもともしび更けてまつは命の消えもせず。

其四

今は使の文さへ絶えつ。なにゝ命はかけてまし。

其五

其十七

思ひ重ねてくるしや今は。逢はで命も絶えなまし。

其十八

月のあけぼの此村雨に。いまは忘れぬ時鳥。

其十九

露の玉の緒限りはありと。うつる面影かはるなよ。

其二十

野邊に蛙の鳴く聲聞けばありしその夜が思はるゝ。

其二十一

かくと知らさで消えゆくならば。つらき報のありやせん。

其二十二

磯の松が根なみうちかけて。立つなわりなき戀のふち。

其二十三

今は亂れてうき山鳥の。長きつらさの思はるゝ。

其二十四

其十三

忍ぶ心を色には出さじ。ものや思ふと問ふばかり。

其十四

思ひあまりてまみえし夢よ、さめて涙のほかぞなき。

其十五

まだき我名の立ちたるとても。思ひそめしを一筋に。

其十六

聲にあらはれ鳴く虫よりも。いはで螢の身をこがす。

其十七

幾夜しをれて貴船の川も。袖の涙に玉ぞ散る。

其十八

人の滿干の心も知らで。底なげなる我涙。

其十九

あだな契りを結びて今は。我身ひとつの憂き思ひ。

ほうし

いとゞ淋しき寢覺の床に。涙なそへそ時鳥。

其六

幾夜ねざめの涙の淵瀨。なみのうね〳〵浮枕。

其七

殘る移香枕にそひて。いとゞ忘れぬ閨のうち。

其八

我が思ひはあの浮雲よ。いづこ行方ぞ定めなき。

其九

人目忍ぶの草葉に結ぶ露の玉虫ねにぞなく。

其十

ものや思ふと問ふ人あらば、せめてかたりや慰めん。

其十一

身をば何せん誓ひし人の。命のみこそ惜しまるれ。

其十二

絕えてしなくはなか〳〵人も。身をも恨みじ我心。

雲の旗手のそなたを戀ひて、住ゆは住む身でわびきなき。

其九

難波入江の身は捨小舟、岸にはなれて便なや。

其十

來ぬ夜あまたの山時鳥、降るは村雨わがなみだ。

其十一

憂き身うきくさ沈みも果てぬ。そこの心を月やしる。

其十二

思ひあまりて折り焚く柴の、けむり淋しき夕まぐれ。

其十三

これもさすがに哀れをそふる、小田の蛙の暮の聲。

其十四

春よ垣根の雪にはあらで、消えぬかぎりの下思。

其十五

泣いて寢顔のなかばは雲に、見えてこぼるゝ袖の月。

其一

雪の外山の曙つらや。かやが軒端の鳥の聲。

其二

今は身に知る愛別離苦の憂さを思へばなか〳〵に。

其三

せめて閨洩る月影なりと。しばし枕にとまれかし。

其四

逢はで歸ればこゝろの闇よ。月はさゆれど道見えず。

其五

花におく露小笹の霰こぼれやすきは我涙。

其六

思ひつゞけて涙の時雨。定めなきこそ浮世なれ。

其七

月は人目の關路もなしや。西に流るゝ夜半の空。

其八

扇ならでも身はふるさるゝ。秋のながめよ露ばかり。

其二十四

逢ふも別れも皆糸による。涙つらぬけかたみにも。

同じ空なる

同じ空なる影かとおもて。見ればあやしや。月さへ様と。共に見ぬ目で。かはるげな。……烏丸光廣卿作。

○古今節唱歌

元祿の頃古今新左衞門といふ歌舞伎役者の歌ひ出だして一時流行せしものなりといふ。

謎の唄

そこな船頭に。なぞ〳〵なに。てちやなぞ知らぬ。納戸の鈎金。はづすが大事。ういもつらいも。淀長縄手。身すきなりやこそ。船も引け。船をひくとて。なぜ袖ひいた。如何に己等が。田舍もので。しんらぬ知らぬと。思やろけれど。目元でも知る。乗合船の。船頭休みやれ。おゝへつとしよ。しわい女郎衆や。いやならおきやれ。おかい

其十六

忍ぶ袂の色見えそめて。心にも似ぬ我涙。

其十七

過ぐる月日は我のみ知りて。かひもなき身をうちなげく。

其十八

限りある身にさりとは人の。とほき行方を思へとや。

其十九

あまの捨舟よるべも知らで。一人涙にふし沈む。

其二十

さらば面影はなれもやらで。人のつらさに増鏡。

其二十一

あふさきるさに亂れて今朝は。尾花がくれに立ち留る。

其二十二

宇治の橋守哀れと人は。いはで年ふる袖の色。

其二十三

朝夕がとぼしければ。ことゝひかはす。人もなく。ひとりじゆんぎに交らねばなぐさむ方も。更になし。たまく列座に連りて。心はかうでうに。人にすぐれて。見ゆれども。重の衣がうすければ。かたみしよぼらで。口惜しや。世をも人をも。葛の葉の。恨むべきやう。あらざれば。袖を顔に。押しあてゝ。唯さめぐ。と泣き居たり。

隅田川

吾は都の者なるが。人商びとに。いざなはれ。吾妻にくだる。玉鉾のさもあらけなき。武士が。歩めくと。打つ杖に。おゝ父母の戀しやと。泣くより外の事ぞなき。いたはしや。幼子は。今を限りの下よりも。父は吉田の少將よ。名は梅若と。まうすなり都の人の。戀しやと。西にむかひて。手を合せ。南無阿彌陀くくくく。

富士の嵐

富士の嵐に。艪械を取られく。獨こがるゝ田子の浦、さん山椒めが。胡椒を女房にせうとおしやる。唐辛子がなかうど。やれ蓼穗がりんきする。どうでも山葵は。鼻をはじくへ。

三嬉敷

うれしくがみうれしござる。初手にござつても。ふられぬうれし。宿の首尾さ

で何としよ。事は缺かぬぞ。こちの船。蒔繪に書きし。船のうち。みつこやかゝまや。こんぴくにん。御出家庄屋殿。拔参り。こはうらいかくどいた。戀慕のやみの。くらがりに。あかゞり足を。さし出した。樣じやござらぬ。奴の上鬚さ撫でた。ごめんでめん。十めんつくりて。叱られた。鬚がはげたら。猶でめんなれ。

小栗

いかに鬼鹿毛。よく聞けよ。牛は大日。如來なり。馬は馬頭。觀音なり。けげん化生の。ものなれど。あまた有りける。其中に。汝殊更。人まぐさを。はむゆゑに。畜生の中の。鬼ぞかし。駒も生ある。ものならば。耳ふりたてゝ。よくきけよ。口に佛名。となふればいきながら。佛になる。鬼かげよ。如是畜生。發菩提心と。きく時は。汝もたしかに。聽聞せよ。其時鬼かげは。畜生とは。いひながら。戀の哀を。きゝわけて。兩膝折りて。居たりしは。人間ものは。知らぬなり。

朝伊奈

朝伊奈いかにと。叱りける。無念なるかな。世の中の。それ天人には。五衰。人間には。八苦とて。八つの苦のある。其中に。貧ほどつらき。ものはなし。貧苦とだにも。なりぬれば。うとき人には。いやしまれ。旦暮に衣重ねゝば。夜寒さいとゞ。たへやらず。

有馬の松

松になりたや。有馬の松に。藤にまかれて。寝度ござるまかれて藤に。藤にまかれて。ねとねとござる。情ありまの。花のえん。

伊呂波

子ども〳〵よ。髪結てとらしよ。いろはにちりぬる。をわか我世。たれぞつねなら。むうゐの奥山な。今朝こえて。あさきゆめみしゑひもせす京。宵にや和讃。夜中にや法華經曉おきては。融通の念佛。紙子〳〵。安倍川紙子へ。

天の川

天の川には。水こそまされ。逢てもへんれ。逢ふことならぬへ。橋をやんれ。掛きよやれ。かさゝぎの。天竺の。天の川に。しろい〳〵。樋が流るゝ。奉公するとも。豆腐屋にや厭よ。それなぜに。七時起して。豆みが〳〵。七つおきして。豆みがく。

山郭公

花の散るときや。初郭公。山郭公。月は三日月。片破楕圓。まるい長月。くる時雨月。雪をながむる。火桶の。あぶない窓の。むかし呉竹。幾夜の枕。戀に寝ぬ夜は。二夜三夜。

稻荷參

へ首尾さへ嬉し。うらが港にや。はだすくうれし。うれしへ。軒の玉水。とく／＼でざれしげくござれば。こざればしげく。人が人がしる。

鼠の晝寝

鼠めが。さんの野中に。ひる寝してな猫に子とらりよと。夢を見たな。守よかけさへ。除の守をな。晝寝の寝言いうた。をかしさはいの。うちのなへし。かまもふすばり。くわんすもだらうりや。かくみなこがねへ。

老ぼれ枕

年は寄るまい。うらが部屋へば。猫もこずもの。おいぼれ／＼こちよれちと／＼。抱いて寝ずもの／＼。だいてちと／＼。によずもの。

牛の綱

引いたりな牛の綱をへ夫は引きやる。ことじや殿御の名草刈ざしよ。鎌もよくかれ。千草もなん靡けなびけやれ。

郡内八丈

山の上には。白豆青豆枝豆。白い袋は。秘藏の椎茸。芋の葉の露。ぶりしやりと。これのおさつに。機織らしよ。ぐんない八丈。小倉縞。／＼。郡内八丈。小倉縞。

ずる〳〵弁才天なむ薬師のお地藏。彼みめのよい。女郎樣の。そばにそつと。ねたるは。雪か霜か霙か。村雨か雨か霰か。吉野の初瀨の。散りかゝるやうで。おいとしうて。ねられない。已等がやうなる。みめのわるい。しやつ面がそばに。ぐわさりとねたるは。毬栗ぎつくり。天神ひげ。今朝うちおろしの。荒莚がんぎやすり。さめはだ。突くやうで刺すやうで。いつくにばつくに。寢返り打つて。ねられない。

賽の川原

こゝにあはれをとゞめしは。賽の川原と聞えしは。二つや三つや。四つ五つ。十さへ越さぬ。みどり子が。砂子を束ねて山となし。小石をひろうて。塔に積み。一重つんでは。父のため。父の恩と聞えしは須彌山よりも高うして。言葉に何とも。いひがたし。南無阿彌陀佛〳〵。南無阿彌陀。二重つんでは。母のため。母のめぐみの深き事。蒼海よりもなほ深し。三重つんでは。鄉里兄弟。わが身の爲と。回向するなむあみだ〳〵〳〵。先母の。胎内に。十月がうちの。苦痛を受け。やう〳〵此土に。生れいで。四とせ五とせ七とせ待つや。待つや待たずに。みまかり出でゝ。又いつの世に。此恩を。おくりかへさん。童部と。さん〴〵に。呵責なし。いづちともなく。失せにけり。しよじのあはれと。聞えける。なむあみだぶつ。〳〵〳〵〳〵〳〵。

ひけや〳〵。ひけや〳〵。牛のもう〳〵綱をへ。柴に櫻を。折りそへて。させいはうせい。てりやどうだ。稻荷まゐりの。まゐりの稻荷。振袖床し。友禪模樣で。そんれいへ。おかた四十に。娘は十五。對の模樣で。床しへ。さいかち山へのぼるとて。あらい風が。もつけな。吹いて來た。脛の白さで。えいとこな。うんとこな。白さで脛の。〳〵しろさで。日をくらす。

浮世言葉

浮代言葉に。寄へて問うて。とかく浮世じや。戀の道。うらが氣儘なるなら。ほんに。とはおもへども。人の口。有事ない事。おつしやります事。聞けば松は。小藤と寢たといふ。小藤は松と。ねぬといふ。あのうそはいの。寢たりやこそ。われなやれ。ひつたりと。そのよな事は。なけもない事よ。聞けば嬉しや。思草。たゞうつゝなや。人にいはれぬ。我涙。それとは知らで。思ひねの。かわくまもなき。我涙。羅綾の袂をも。引かばなどか。切れざらん。

茶飲時

起きていなんせな。明日の夜もあるに。今しばしぞや。又寢の床。〳〵には。ねるゝも袖。東がしらむ。やがて御婆々の。茶のみ時。しゆんだらまんだら。福徳ゑびす。べ

る、露の。その玉かづら。かけてより。忘るまもなき。我思ひ。空にうかる、。あの薄雲に。夕霧か、る。その月のころ。人まつよひの。物淋しさを。誰に語らん。みよしの、。たのもたよりも。つきはて、。恨涙に。袖しぼる。いろは八入に。染めなし置いて。紅葉散りしく。高尾の山の。嵐につる、。むらしぐれ。幾度ぬる、。我袖。ひろはゞ消えん。玉笹の。あられ初雪。降らばふれ。われふるつまは。〳〵實からいとし……

以下十二曲佐山檢校作。

まさみち

とるや小袖の。つまゆゑに。歩みならはぬ。道芝の。露におきふし。しをれつ、。いくさみだれの。事なれば。嵐ぞつらき。花のまへ。ちり〳〵になる。身のゆくへ。まさみちの。御手を取り。たどろ〳〵と。のんきで。まことに君ゆゑなれば。はるかにおとを。見かへれば。ありし所に。立つ烟。いたはしやな。わがつまの。何とかならせ。給ふぞと。そなたの空よと。ながむれば。涙の雨の。たましまや。はや入合の。鐘が崎。いたはしや老の身の。さぞや物うく。おぼすらん。われが思に。みだれ髪。ゆひかひもなき。身なれども。南無や宰府の。御神。いにしへの。うきをまもらせ。たまへやと。ふかく祈誓を。掛帶の。むすぶちぎりの。くちせずは。つまにはやがて。逢ひに相あふ。松

○長唄

本來の長唄。上方唄。江戸長唄その他これに類似のものを此に集め載す。本來の長唄は佐山、市川、朝妻、小野川、爲澤、生田、野川、松岡、北澤、藤島などいふ檢校勾當たちを始め。其他諸大家の作れるものにて元祿の頃もつとも世に行はれたるもの。上方唄は京大坂の小唄にして本來の長唄に繼いで出で。江戸長唄は元和の頃狂言師杵屋勘五郎といふものゝ唄ひ出だしたるものにて今も世に普く行はる。

わかみどり

春は初子の。松が枝。ひきて君が千歳を。八千代と思ふ。其ときはぎの。若緑。梅の花垣。かをるより鶯きて。ふとさへづりかはし。吉野の花も。櫻木ふぢえ。いろなつかしき。たそかれに。山ほとゝぎす。音づれて。あけやすき夜の。ならひには。夢の浮橋。なかたえて。文も通はぬ。戀の道。蜘手にものを。思ふこそ。かの八橋の。かきつばた。若紫や。こむらさき。ゆかりある身に。賴をかけて。緣を結ぶ。いづみ川。いつあひなれて。藍染川の。あだ波かゝる。ぬれ衣の。たもとすゞしく。秋たちて。荻ふく風に。亂

げんこしう

花は櫻よ。かをるは梅よ。初音ゆかしき。山ほとゝぎす。月は高尾の。紅葉をてらす。雪の膚に。なれ〳〵馴るゝは。斑女が閨の戸。〳〵ゆきて三浦の。まがきのうちに。花のいろ〳〵。そのこむらさき。きくに初音の。うぐひす袖をひく手。いくたび忘れもやらで。千代の思を。〳〵。誰に語らん。げんでしう。いとしげんしうに。逢ふ夜さは。さんさ鳥もなく。いそ夜も明けそ。さんさ寺々。ほろりん〳〵のう。ようら〳〵〳〵〳〵。小寺のしてゝんてんちんから。ころりよの。おゝぽつとりぽとりのぽとつぽんぽと〳〵〳〵。しととら太鼓も。つん釣鐘も。のうこのいよそれのうさて。撞くな。鳴らすな。げんでしう。

さんやをざり

今度初めて。お江戸に住めば。てんがかゝやく。光をくれて。きれよさがれよ。振袖だてを。〳〵。駿河の富士。はくさんぞ。だてな若いもの。さんやへかよへ。忍ぶ畔道で。虻めが我に。おてをつた。かつにくけれど。君がためなりや。つらさもういこんだ。浮世忍の。深編笠の姿形で。若きは見ゆる。篠の薄で。末とげぬ。よしなの思じやな。たれもすいたる。お江戸の風や。いくたこやのゝ。敦盛さまが。熊谷笠には。竹杖

こそうれし。かゝりけれど。語りなぐさみ。ゆくほどに。蘆屋のせきにぞ。つき給ふ。

ふじまうで

宿の首尾よく。つくろひおきて。浮かれこがるゝ。二てうだちに。打ち乘りて。思ふ君をば。はや三俣の。うへの茶屋より。わけよしがまねく。氣の毒に。いよのほんは。わがえだも。さんよへ。このいよこのへ〳〵。はんもひちやさと。兩國橋まで。乘りつけて。花火〳〵を。めせさせかはんせの。よい〳〵。そのや磯邊に。うつ浪の。よせくる。遊山舟が。さわぎ集まりて。しやぎりの音の。おひやりこひやり。ひやりこ〳〵。ひやりひやりらんら。らゝりつるんろ。るゝりやちやらゝるろ。かねがまた。かしこを見てあれば。富士詣の。行人たちが。懺悔〳〵。六根罪障。ざんぶりどんぶり。ずぶどぶひよひよんに。ひよ瓢箪を。腰につけて。水あそびもござんす。右は無縁寺。いつもより。今朝打つ鐘の。音のよさ。鉦をたゝいて。佛にならばさ。土手の道鐵は。氣のとはつた佛じや。すいた佛じや。あれを見よ。さんちや通の。やほすけが。駒を早めて。乘つたりや。とをりんばう。おうたりや。おそまきさつて。土手のきはにな。れんばはらりと。飛び下りて。よい羽織かづいて。顏うちかくし。まがき〳〵を。そろりと見れば。あれどれ。振袖が。袖がのう。袖がの。ほんのほんへ、

らこれまで。えいや八橋。さんまさら〳〵。さつと太皷をたのんで。くどきすまいたりや。うきちの大夫さんまなさけは參州。さかたにまんよに。小太夫まささに櫻木。初花のやどや雪にはひねつてしなつて。笑つて歩んで。くせは何も浪花じや。無いこそは道理なれ。京のぶらと。大坂のぶらと。お江戸のぶらと。三千人の。ぶらどもが。よりあひ談合で。つくりつけたる。おこたち。いかなとんてきども丶。有頂天の。やぼすけなりとも。ふん〳〵深くは。あはうか。逢ひますまいか。いやたゞ深くは。なりそろまいと。言つたら口舌になりましよ。あいのやのおちは。合點かよ。もとづんなよへ。やんれ打てや打て。つゞみ太皷鞨皷手拍子に。碁雙六に。おん百姓。いよ莚旗に。田畑。よざが米を。搗杵。砧加留多に。じやうせんが。こつくいしよろりが。むちは鹿の角。ちよこ〳〵打つは。けいひき鍛冶屋てつこのしゆ。からりころり。ちん〳〵からりの。槌の音。打つたる狸の。腹つゞみ。正月は節分。豆ぶり〳〵に。かきだま七艸なづなよ。なじよ〳〵かきよせて。ほと〳〵と叩いた。いとしけりやこそ。しと丶。打て。にくか打たりよか。やつてりや。〳〵〳〵。手がそれた。おひかけしめかけ。聲をかけ。もとづんなよへ。されば僧正遍昭の。名にめで丶。折れるばかりぞ。女郎花。われ落ちにきと。人に語るな。おひかけなかの。綱から見ごとによ。

二つ。もんのちんちりめんの。べんべを着せて。せんせかしよ憂き身の。寢亂髪を。いつにわすりよぞ。さても差いたる長刀。お氣のとはつた。お若衆さまの。いづくにく。ちめだまが。はなされ申さないだても浮氣も。命のうちよさ。やがて死ぬく。ひつひけうんのめ。さわげ明日をも。知らぬ身に。

雲井弄齋

山の端。いかな夜もよも。人こそ知らね。閨は涙の。淵となる。よしや嘆かじ。かなはぬと。ても。定めなきこそ。浮世なれ。我ふりすてゝ。一聲ばかり。いづくへ行くぞ。山はとゝぎす。

木遣

やれ浮き立つは。春の日の。霞のうちの。梅の花。一重ばかりか。さくら花。にほひふくみて。咲ける梢を。折りたや。なかの枝から。見事にようさ咲いたやれ。香る袖をへ。えいやく。ちらばかひあらじ。やれものうきは。秋の夜の。君を松虫くつわ虫。一夜ばかりかきりくす。二夜も三夜も。君をこはろぎ。おひかけ中の綱から。みでとよそろうたやれ。さきのつんなを。えいやく。ひかばなびきやんれの。皆様も御存じやが。じがのしらたま。花のに。かつらからさき。うすぐもたなびく。われか

九重にこそ。にはふらめ。ならさかた。小太夫柏木。ふたりとは。兎にも角にも。たのまじものを。わけよきを知らぬは。異國者かなど。から辛崎の。笑顔。目元にやしほがへ。目元のしほに。なれごろも。かの狭衣の。袖ぬれて。涙の玉の井。うらむる小唄の。そのふじえよしだの。おもはくや。どうもならぬにの。

さよごろも

きぬ〴〵に。かはす形見の。小夜衣。妻こひかねし。鹿の聲に。亂れ亂るゝ。糸萩の。結ぼれやすき。玉の緒の。よる手ひく手に。もの思ふ身を。せめてあはれと。しばしなりとも。忍山。忍び兼ねたる。人目の關を。道しるべせよ。忍ぶぐさの。いつそ露とも。消えなば消えよ。だいじかさ。あるにかひなき。捨小舟。底こそ知れね。袖の海。かわく間もなき。枕のなぎさ。立つあだ波は。しげしとまゝよ。それを便に。あはねばならぬ。明日までよもや。露の身はあらじ。この夕暮を。とはゞとへかし。

もしほぐさ

千代はふるとも。かはらぬ色よ。ときはの山の。岩躑躅。いはねば人の。こひしきものと。思ひしよりも。硯にむかひ。よしなしごとを。心に任せ。書きてぞ送る。もしほぐさ。胸にたく火の。烟は空に。なびくならひに。いよの。末は逢瀬の。波枕。ひとりこ

そろうたやれ、さきの綱にへえいや〳〵。屋敷出た時や、うかれて出たが、今はまがきあたりを、小唄ぶし、おうはちさま〳〵。はちざまを見たか、今は思の種となる。

こひころも

あだなりと、名にこそ立てれ、櫻木の、初花染の、戀衣、若むらさきや、濃紫、ゆかりもがなと、夕霧の、立ちまよひにし、薄雲や、うはのそらなる、君たちを、なにとて思ひそめがはや、身は浮橋の、うきねにも、せめて夢には、うちとけよ、閨の月さへ、枕に通ふ、ひとりこがるゝ、夜はながとの、その東雲の、鳥の聲、亂るゝ露の、たまかづら、いつ逢坂と、心はせきしう、とめて幾夜も、かをるは初音、瀧の白玉、淚の淵よ、しづむ思は、いづみ川、いつみきとてか、こよしかるもの、うたひしは、よしや嘆かじ、かなはぬとても、定めなきこそ、うき世のならひ、氣の毒に、いよのとは思へども、すてがたき人を、人を初瀨の、山の井の、結ぶ契の、利生のあらば、勢至千手の、その一座、いまやきてうと、まつがえときは、千歲八千代の、もののおもひ、情をかけて、八橋の雲井の西を、ながむれば、はつやま外山の、峯の紅葉ば、色ふかき、より〳〵四方に、うき名は〳〵、高尾山〳〵、思ひにぬるゝ、我たもと、あれみつしまの、花のころ。

白露。花ごとに。うちはらふにも。千代はへぬべし。

ふゆくさ

いとはじな。玉ゆらやどる。人の盛。身をしる雨の。初時雨。さだめなきかな。浮雲の。月のにほひもかげ寒き。鴛鴦の浮寝の枕さへ。氷柱の袂。とけやらで。床の浦回の。敷波の。濱風さえて。鳴く千鳥。思へば夢の。世を知らで。やがて枯野の。朝霧と消えなんものを。誰かのこりし。菊の香の。八重紫に。うつろひて。袖の昔も。いつしかに。逢見しことを。数ふれば。むら〳〵見ゆる。冬草の。うへにふりしく。白雪の。道ふみ分けて。誰とはん。松のおもはん。はづかしの。森のこがらし。たえ〴〵に。涙たばしる。玉あられ。朝日まつまの。うき身の命。ながれの末の。われらさへ。もしもやさそふ。水しもあらば。戀のしがらみ。せきとめよ。

四季

誰か初めし。戀の道。いかなる人も。ふみ迷ふ。長の縄手の。行通ひ。四季をり〳〵の。たえせぬは。春は芳野の。花さくらぎや。その一ふしも。まちがはなる。初音ゆかしき。うぐひすの。梅が香をとめ。青柳の。うきねの寝亂髪は。いつに忘りよぞ。夏は涼しき。狭衣をきても三吉野。おんかはよばな。わひそめがはの。流こそ。清き流と。思

がるゝ。身は浮舟の。よるせ定めぬ。このうさつらさ。知らせたや〳〵。夢に見んとて。片敷く袖に。なく音淋しき。きり〴〵す。つれなき人を。松虫の。草のまがきの。ゆふべになれば。ものこそ。しんぞ思への。さりとはうき世や。つさいつさて。御見はとにかくに。

さくらづくし

わかでのみ。花に心を盡す身の。思ひあまりに。手を折りて。數ふる花の。品々に。わきて楊貴妃。伊勢小町。たが小櫻や。稚兒櫻。百の媚ある。姥櫻。われや戀ふらし。面影の。花の姿を。さきだてゝ。ゆくへわけてし。三吉野の。雲井にさける。山櫻。霞のまより。ほのかにも。見そめしいろの。初櫻。絶えぬながめは。九重の。都がへりの。花はあれども。なれし吾妻の。江戸櫻。名に奥州の。花には誰も。浮身をこがす。鹽釜櫻。花の振袖。八重一重。下には無垢の。緋櫻や。樺に淺黄を。こきませて。わけよき縫の。糸櫻引手あまたの。身なりとも。せめて一夜の。たはぶれに。思をすゝむる。熊谷の。たけき心は。虎の尾の。千里も通ふ。戀の道。忍ぶにつらき。有明櫻。君の情の。薄櫻。よしや思を。桐が谷。うき世を捨てし。墨染櫻。昔を忍ぶ。家櫻。花の局の。淋しきに。月の影さへ。遲櫻。やみはあやなし。紅梅櫻。色こそ見えね。折る袖も。にほひ櫻や。さく櫻。花の

さあへ紫の。色に心は。わらねども。ふかくぞ人を。思ひそめ。かひも渚に。我袖しぼる。人め〳〵忍の。そのかよひぢの。舟にうちのり。おてきたちは。來ぬかの。うちのせよせつ。いくたび思ふ。宿の首尾とは。思へども。只一筋に。此わけ知らぬ。人ならば。たとひ萬に。いみじきとても。玉の盃。手にふれよ。しやんとさせ。底はいよ〳〵。知られぬか。君に逢夜は。待乳山。手にふれて。いつしかも見ん。むらさきの。ねに通ひ行くうたゝねの。きみの〳〵ぬれこそ。じつとは見えね。しんぞこのみは。しんぞこのみは。涙もらうて。ういぞつらいぞ。枕もうくばかりへ。わけの〳〵。よひには。いよほださるゝへ。しんぞ此身は。〳〵。涙もらうて。ういぞつらいぞ。枕もうくばかりへ。

はるこま

世もうらやかに。園生の花の。春駒は。夢に見てさへ。心もよきに。まして舞うたら。千秋樂よの。いつもいはらぬ。若水の流の末の。我らさへ。浮かれ雀の。ひよつと浮かれ出でゝ。あのいろざとにきても奥州。名は高橋の。歸るさを見たれば。まづはなさきに。梅がかしほの。ふりも吉野の。花のおもかげ。うつす住の江。筆染川の。深き中をば。たが夕霧や。ぬれたわけある。連唄を。かの思はくの。三味線に。梅が枝香

ふにぞ。いとゞ思は。ます鏡。曇らぬ空に。秋は來にけり。いつのまに。ことにいろある。紅葉ばの。その名は四方に。高尾山。のわきも今は。紅葉して。とても濡りよなら。なまなか時雨はいやまの。冬のながめは。駿河の富士よ。雪になりたや。此身は消えて。いまの思を。えいさんさ。知らせたや。よしなやと。思ひつゞけて。かくばかり。戀せずは。人は情の。あらましものを。あはれみたまへ。賤がうき身を…………

……以下十曲市川檢校作。

やへむめ

梅が咲けかし。いよやへ。梅が枝を。えだを手折る。ふりして。必ずでざせとさ。さまをまねく。必ずでざせと。さまを招く。夢になりとも。逢ひたや見たや。夢になりとも。うき世じやな。まれに逢ふ夜は。うつゝか夢か。稀に逢ふ夜は。語るまもなき。さんさ短夜や。よしなの思。

かすがの

春日野の。若紫のすりごろも。忍のみだれ。かぎり知られぬ。我思ひ。おく露の。しづ心なき。秋風に。うつろふ人の。こむらさき。花紫の。萩が枝に。亂れ亂るゝ。心のつらさ。その。繰言の。またの世に。君ならで。よん〳〵よそにはさあへ。いろには寫さじ

の玉川。岸根の蛙。いまや鳴くらん。うき世の中に。我とひとしく。もの思ふ身の。おらば語らん。うさつらさ。戀の山路をたどり行く。こひ〳〵て戀しき人を。まつち山。ほのかに見えし。木の間より名もなつかしき。ほとゝぎす。今一聲の。おとづれに。昔の人の。しのばれて。袖に涙は。夜の雨。くさのゆふさき。わけてこし。隅田川原の荒れたる宿に。水鷄ならでは。扃をたゝく。人はあらじな。待つよひに。枕投げそ。投げそ枕にとがもなや。武藏野に。なべての草は。なつかしや。若紫の。いろ〳〵ありし。御見にかはせしことの。むげにかはらぬ。こゝろぞならば。しんぞうれしさ。なにゝかまさる。ものをかず〳〵。思ふ身を。誰かあはれと。思ひはやらで。ゆかし君こそ。松の綠よ。いつも心をなぞへたや。千歳をもまたかけてへ。千歳をかけて。やつさかはらぬ。なかとよ。のうさてな。

鎌倉八景

まだ夜をこめて。有明の。月も宿かる。むさし野の。空も一つに。契りこし。妹脊の中をふりすてゝ。かく立ち出づる。我つまの。心のうちこそ。恨めしや。うらみながらも立ち出でゝ。ふりさけ見れば。ほの〴〵と。霧にへだたる。安房上總。出で入る舟のかず〳〵は。遠浦の歸帆。これならん。汀の鳥も。つがひ〳〵。羽を休め。寄せ集り

るに。うぐひすの。初音はいとゞ。しほらしや。どうもならぬにいよの。とかく君ゆゑ。身は八橋の。花濃紫。かきつばた。さわぎたてられて。ぞく／＼あひとて。なりませぬはと。まがきながらも西をきつと三笠の。月のかつらの。男立かや。日本もろこしきり／＼ときはして。花松がえの。藤江かなをも。藤波のえ。入江によせつ。もの思へども。浮橋のなかよかるもの。泉川。幾夜千里の。月は更科。おひかけ仲の町で。見でとにさ。誰ゆゑころんだ。ころびやせぬもの。手をついた。おことろ君のな。君じやないものの。つらにくや。にくか打たりよか。せんよも千代の。勢至千手は。悉皆。彌陀か菩薩か。たゞし吉田の。神ならば。つなぐ利生も。あれかしはぎの。ゐてくわかやま。こちの朝の。よねたちは。いきもはりも。つよいはいのきんぴらだんべい。さかた櫻木。さつても名譽の。太夫しゆ。この君たちの。手にのせられてはいかな。笙の岩屋の。御聖さまも。三昧にのせての。一節は。末もてながと。春駒は。千秋樂なる。御世ぞ目出度さ。

たまくら

照りもせず。曇りもやらぬ。月はおぼろの。春の夜の。夢ばかりなる手枕に。君が浮名や。かひなくたゝん。兎角人目の。しげ／＼なれば。忍ぶ山みち。忍びて通ふ。井手

よする雄波が。どう〳〵と。どうと打つては。さつと引き。日本無双の名どころや。これぞわらはが住所とて。雪の下にぞ。つき給ふ。

わかくさ

世の中の。人の心は。いろ〳〵に。うつろふものは。花の色。梅が香をとむ。うぐひすの。谷より出て。まだ里なれぬ。野邊の若草。ねよげに見ゆる。面影の。人目つゝめば。色には出さぬ。袖にはもれて。むつましく。思ひそめたよ。若紫の。筆にまかせて。かきつばた。夏は涼しき。池水に。すむ川竹の。捨小舟。こがれ〳〵て。昔を忍ぶ。草のまがきに。涙をそへて。なく〳〵や。五月のたそがれどきに。誰を待乳の。〳〵。やよや山ほとゝぎす。君は五月雨。思はせぶりよ。我は螢火。思ひにもゆる。この夕暮の。ものあはれさに。なく〳〵ね。淋しき。蟲の音。秋はきにけり。われ訪ふものは。荻が上葉に。みだれ〳〵て。風そよぐ。よそにもおくや。袖の露。月のうつろふ。かげ見えて。のこる松さへ。あらしとともに。人目も草も。かれ〴〵に。いつもながらの。冬は憂や。落葉も霜にうづもれて。木の下露に。ぬるゝ夜は。いとゞ淋しき。床のうち。枕ならでは。白雪の積る思ひにふししづむ。

はるかぜ

てふはと立つや。がんかもめ。平沙の落雁。おもしろや。あれに見えしは。ありがたや。いく千代々々の。神かぐら。鈴の森。嵐こがらし。さつと吹け。笠にや笠に。木の葉が。はら〱と。はりいよ〱はら〱と。江天の暮雪。まのあたり遙に高き。御山は。いつも鹿子の。富士の山。どれ〱それ見て〱。から〱見てから。戀がまします。かず〱のおことばに。はつとだまされた。それで寢もせで。迷ひ行く。思ふ願は。神奈川の。沖にたゞよふ。海士小舟。苫もるしづく。もろともに。涙にわかす。舟のうち。これやまことに。瀟湘の。夜の雨とも。言ひつべし。雨も晴るれば。網を引く。ひくになびかぬ。つれなさよ。君を思へば。かく忍べども。かひぞなき。つれなき松に。ふる時雨。情にへだては。なきものを。忘れまじ。つきせまじ。思はつん〱。釣の糸。引いてしやくるところは。釣つたところは。おもしろや。漁村の夕照は。うつすらんげにも長閑けき。海のおも。一首はかうぞ。詠じける。東路や。野島が磯の。濱風。に。わが紐ゆひし。妹が顔のみと。詠じすてゝぞ。ゆくほどに。山市の晴嵐。おもしろや。千兩取るとも。まだ〱馬方。いやよ〱。腰にや馬柄杓。手にや又烟管。月の都をふらねばないよさ。どうしたしんでいしはがない。日も早西に。入相の。極樂寺の晩鐘と。きゝしにまさる。八景や。由井が汀に。よする波。みねの嵐に。もみあはせ。

つと妻戸の。時雨は憂やの。袖の涙は。露の亂髪。いふにいはれぬ。我思ひ。

らつひ

我は都の。らつひ洛外寅薬師。しかも我等は。もうし子でな。うかれものでござる。思ふ方には。過ぎし頃より別れて一人。いとゞ淋しき。ねざめの床に。涙な添へそ。ほとゝぎす。涙と共に。無常を觀じ。とかく浮世は。かしがましと。思ひし頃より。山路に入りて。小柴々垣。ひき結び。世にありがほに。月をながめてふけて。礎の音かと。我は聞けば。つきぞ知らする。我涙。思ひつゞけて。わしびきの。牡鹿の鳴く聲に。夢さめて。我をば誰か。訪ひこんと。いとゞ寢られぬ。秋の夜に。ものを思ひの。眠をさます。その古へは。女郎衆とあれば。舞うつ歌うつ。あだくらべ。うき世の中を。思ひ出づれば。心も亂れ〱たりよさ。あまりゆかしさに。琴の調子を。しらぶれば。をりしも松風が。あなたの峰の。かたよりも。こなたの琴に。通ひきて。ひきて合せたは。何よりもつて。おもしろい。あふぎ雲井に。須磨に桐壺。薄衣に雲の上。四季の亂か。おつちりなずおりもおりて。えれくりだしたる。輪舌すがゝき。おもしろや。花橘の袖のかに。鳴くは何鳥時鳥に。鶯。水鶏の鳥の。たゝきおとし。おとづるゝ。柴のとぼそのけしきをひきて。きみたちに。やつこの見せて聞かせたや。よい〱

咲いた櫻に。吹く春風は。のほんへ。花のあたりを。よぎてふけ〳〵。こぼれてかゝる。花の露。みやまがくれの。身ははとゝぎす。のほんへ。人は知らねど。なきあかす。〳〵。よひ〳〵ぬるゝ。我袂。なげく涙は。妻戀ふ鹿よ。〳〵。荻や薄に。〳〵。おく露の。〳〵。くるればいろの。袖しぼる。こずゑ〳〵は。花かと見えて。〳〵。雪のあしたは。のほんのんほのういよ。かせいとふ〳〵。霜夜にぬるゝ我袂。春の夕暮に。山々を見て。あれはをりしも。春風に。櫻の花が。ちりかゝる。ちり〳〵はつと。花の散りたるは。空に知られぬ。雪かと見えて。おもしろや夏は。時鳥うの花に。菖蒲草。牡丹芍藥。あつちりなこつちりなすじりもじりて。えりくりえんじよの。奥山のかげ。牡鹿の鳴音。蟲の聲々。秋はな名にある。月にうつろふ。紅葉のいろ。とりやあつめて。あはれさまさる。冬は時雨に。雪か霜かと。消えてたまられぬ。

さごろも

獨思ひを。枕に語り。せめて頼みの。夢さます。麻の狹衣。うちさめて。いとゞ寢られぬ。秋の夜に。ざりとは月ふけて。いつさて蟋蟀。寢もせで松蟲。ふくれば鈴むし。ずんどふかければ。せきやるはういよ。轡蟲。いとはぬ心に。てんとゆうた髮を。のぞみなら。根からふつつときり〳〵す。泣かぬまはござせんよ。すこしあはれみ。さ

に。やどりきな連理の契り。浅からず。深く語れど。かねて別れの。思はれて。さりとてはなれぬ昔が。ましじやもの。かはす枕は。数重なれど我も忘れじ。君も又。思ひ出せよてよひの契はなれ〴〵の。むら雲見れば。あすの別れも。あのごとく。あたゞしんきや。もんきや。さりとては。戀にははてなやゞいかゞせん。………以下十五曲

朝妻撿挍作

かさでら

いかにせん。とすれば恨み。かくすれど。ありがひ知らぬ世の中に。江戸をば厭ひ。出づれども。是ぞまことに。大磯や旅で憂いものは。入相の鐘よさ。山路を行けば。鹿の聲。富士のお山を。後におきつ。前には滄海。まん〳〵と。はてもなく。あらしにつる丶。夕波のうちのけよせつ。立つ波に。末をいづくと。遠江。濱名の橋を。うち渡り。左手や右手のながめして。七瀬や八瀬や。八十瀬川ふかき思ひは。みのをはり。來てこそ見たれ。笠寺やげに古へも。我ごとき。物憂き旅の。口ずさみ。一首はかうぞ。詠じける。げに今日ばかり。くもれ近江の。かゞみ山。旅のやつれの。顔のみゆるに。涙の雨の。もりやま。露にしつぼり〳〵。ぬれてこそゆけ。草津の宿よ。つれもなぎさの。捨小舟島かげより。櫓のおとが。からりころり。志賀のかん辛崎の。まつづ

ずんと。ぬれませうよ。

こひづくし

思ひねの。心からなる。ゆめしんか。又はうつゝ。か。うつゝ。なや。ちらとばかりの。面影を。御簾の追風。さらさらに。わすれもやらぬ。身ぞつらき。戀はさまぐ〵。多けれど。逢戀待戀忍戀。恨の戀に。別の戀。こそものうけれ。我は本國草深き。吾妻わたりの。ものなるが今度初めて。都へのぼり。ゆきの振袖。ちらとまた見そめ。しづ心なく。戀にして。文玉章を。かきくどき。やればお情の。返しに必ずこよひ。逢瀬とわりしを。いと嬉しくて。やへむぐら。しげれる軒

其様ゆゑにぞ。亂髪ときし下紐。かず重なりて。無理に實から。いとしゆてならぬへ。やくともすれば。閨のうちより。手をたゝいては。水くれよ。夜は何時ぞ。歸らにやならぬ。せかせことばの。むいきの時は。しんぞつらいは。つとめの此身。心をくばりて。氣を取りて。限りもあらぬ。玉章を。夜明けぬ中に。認めて。こゝやかしことやりくるつらさ。恨みられては。恨みもしたり。あらおそろしの。誓ひの言葉。この行末を。なにとせん。かはゆがらんせ流れの身。

いくはる

いく春の。ながめはいつし。かはらねど。わきて長閑に。照日かげ。契は竹の。よゝこめて。君と二葉の。松もろともに。枝も榮ゆる。若緑。あふぐにあかぬ。時をえて。さればわやしの。賤の男女。さま〳〵の。つくり花。いろをつくして。さゝげけり。まづ咲き初むる。梅の花。いとよわく。にほひも深き。花ごろも。八重一重。咲き亂れげに。こゝのへに。たぐひなき。色も異なる。櫻ばな。よそほひゆゝしく。見えにけり。さて其次の。島臺に。松と竹とを。植ゑませて。千代をさへづる。雛鶴が。みぎはのかたに。巢をくひて。谷の流れに。龜遊ぶな。賤の緒環。くり返し。夜來い〳〵。よるこい様よ。人のなさけは。夜にこそあれ。

るきづるからりころりと。こぎ出して。釣するよしのやつさ。釣つたところが。おもしろや。なにが〳〵へ。そなたは瀬田の長橋。眞弓槻弓。日を重ね。矢走の浦にぞ。着き給ふ。

やまづくし

戀の山路に。入りそめしより。人目忍の。山とはつらや。まれに逢ふ夜は。くだかけさへも。時しらぬ山。〳〵は名のみして。おくるわびしき。かづらき山よ。夜の御見にことばのこりてわかれ。さらば〳〵に。のうかへる山。君が心の。知られはせねど。亂れて今朝は。黑髮山に。つたふ淚の。袖ふれ山よ。袖をふる〳〵。ふりやるはよいが。わけのわる身の。袖ふるな。ふるつまいとし。

ゆふされ

うれしたま〳〵。袂にかゝる。さくは小藤の。花の露。つゆに心の。いつしか亂れ。秋にはあらぬ。春ながら。いとゞ思ひは。いやまさり。亂るゝものは。青柳の。糸はものかは。なか〳〵に。花におきふし。しをるゝ此身。この夕されの。一さかり。折らば今折れ。散らぬまに。

かはたけ

りよなら。もろともと。深き逢瀬の。浪枕。かはすばかりの。荻の上風。萩の下露。

たなばた

夏はつる。扇と秋の。白露は。何れかさきに。おきぬらん。年毎に。逢ふ夜まちえし。たなばたの。逢はで寢るよは。袖のみ濡れて。ふるは涙か。身をしる雨か。かけし情は。かさゝぎの。渡せる橋に。おく霜の。げにおもしろや。こよひしも。月はさえゆく。秋の夜の。千夜を一夜に。なせりとも。名殘は盡きじ。今更に。言葉殘りて。鐘がなる鳥も鳴き候。わたゞしんきや。氣の毒や。兎角うき世は。まゝならぬ。

ひきぐるま

さらば挽かんと。夕露の。濡れた鳥なり。さらりとやりて。引かばお靡きやれ。えいさらにさ。よいゝいえ。花とならば。散りかゝれ。おん身は紅葉の。いろよのう。日影にうひて。いろまさる。えいとなさて。世の中は。な世の中は。定めなき身の。浮草の。引かば靡きやれ。散らぬさに。やんれ引く〳〵。引くはたゞ。濱で網ひく。山で引く。は。大石胡弓三味線。鳴子の繩も。引くとの。さまがさわずみ。やれ袖をひく。都の牛は。車を挽きやる。〳〵はよいが。思うたふりして。袖引くな。かたりつゞけて。行くほどに。よその見る目も恥かしや。

はなのえん

よしや吉野の。花より我は。その夕暮の。折からに。垣間見えにし。面影を。忘れもやらで。うか〳〵と。移る心や。むらさきの。いろにいでたよ。恥かしながら。花によそへて。やる文を。見よかし〳〵。ちらぬまに。いとゞ心の。いよ筑紫舟。やるかたわかぬ。もの思ひ。ふみの返しも。いつとなく。まちしかひある。今日の日も。はや入相の。花の宴。逢うてぞ今宵。新枕。心とけたよ。はやいつのまに。一夜ばかりか。桐が谷。八へもせんよも。しんぞかはるな。かはらじ我も。花にはあらし。よしや吹くとも。吹くとも。契りたえすな。

なみまくら

五月まつ。花橘の。かはよばな。見るに心の。深見草。深き思ひの。憂さつらさ。色に出さじと。忍ぶ。さ。忍ぶかひなき。いよ陸奥の。壺の碑。かくぞとも。いはねの山の。いはつゝじ。いはねど人の。戀しきものゝ。恨みながらも。月日を送る。さても此身は。あるものか。しんぞつれなき〳〵。命かな。さあ〳〵なにかへ。とは思へども。情にへだつる。袖あらば。賤が伏屋に。月は宿らじと。ゆふべにそよと。まがきの露。ふく風の音づれに。つたへしかひや。荒磯海。ちん〳〵ちり〳〵。いそうつ波に。とてゝ濡

れば。手になれぬ。蓮の浮葉よな。情に染まぬ。露のなさけに。

うきね

浮寝の床に。ことゝふは。枕にかゝる。涙なり。せめては夢になりとも。まどろめば。みじか夜に。山時鳥。音づれて。はや夜が明けた。しんぞつらいよの。こがるゝうき身の。きえもせで。さても命は。ながらへて。晝は終日。泣きくらし。夜は夜床に伏し沈む。槇の扉を。打つ村雨や。梢にそよぐ。松風か。ちぎりおかねど。はかなやな。君がとうかと。おどろかされて。いとゞ涙に。目がくれて。壁に背ける。ともしびの。影かすかなる。あかつきの鐘の聲。つく〴〵と。きく時は。兎角かなはぬ。夜の中に。ふつゝと。おもふまいとは。思へ〴〵ども。またすてがたき。過ぎし別れに。逢瀬といひし。言のはを。忘れまい。此世はさておき。後の世も。のうさてな。あひみての。後の心にくらぶれば。かほどものをば。思はじものを。昔戀しやな。いまの身や。

こむらさき

君こずは。閨へも入らじ。こむらさき。我もとゆひに。霜おくと。またのたのみを。夕ぎりや。いなばの山の。峰よりも。移しや植ゑし。辛崎の。松の緑も。こながとや。身は浮舟の。波の紋。巴の君や。こがるらん。西を遙に。ながむれば。日影かたぶく。森みえ

東山八景

見渡せば。東山の。春のけしきや。祇園林に。ふくあらしは。山市の晴嵐と。うたがはれ。河原面の。眞砂のいろは。江天の暮雪も。かくやらん。おもしろの花の都や。地主の櫻に。しくはなし。加茂川の。流れの末に。ゆく舟は。遠浦の歸帆か。さえわたる。清水寺の。鐘の聲。遠寺の晩鐘のひゞき。それ白河のすさきに。つばさの散亂すは。平沙の落雁とも。いひつべし。さて靈山の。月影は。洞庭の。あきの。これにはよもまさらじ。さてまた漁村の。夕照は。釣たれて。あげまきに。あそぶものを。

なつくさ

夏はゆふべの。身の思ひなる。いろに心は深見草。露は袂の。いとまもなしに。うらやましくもうき戀のよは。知られつ知らぬ。かはよばな。たちもはなれぬ。君が面影。あふさきるさの涙の川に。あやめもわかで泣き沈む。底の玉藻の。いはでしげるも。よそめ〳〵忍ぶの。小車に。通ひ通はゞ。關守も。一夜はゆるせ。手枕の。塵をはらはぬ。常夏の。からくれなゐの。袖の香も。花橘に。とがは逢瀬の。とかく人こそ。つらけれど。恨の葛の。玉のをの。絶えなば絶えよ。さても命は。あるものか。たそがれどきの。軒のつまに。あまりてかゝる。夕顔。花をしるべに。たづねんと。ものいひよ

丹霞花儈。上は薫り須磨明石。十五夜隣家夕時雨。手まくら有明雲井くれなゐ初瀬寒梅。二葉早梅霜夜。七夕寢覺篠目。薄紅薄雲上り馬。とかく伽羅の烟と命のきみは。とめても幾代。いくよとめても。とめあかぬ。

しぐれ

楢松の葉の。落ちそめて。夕影しろき。待乳山。時雨〳〵に。なく鴨の。聲もこはるや。干潟道。えもんざか越えて。鐘の聲。いでそのころは。神無月。くるわ〳〵ずまひは。涙でくらす。野分つれなや。吹きや散らしたる。あつたら小萩。小薄。花に醉ひまた。紅葉には。さめてたどりし。土手おろし。春にかはりて。袖さむや。提灯くらく。行き通ひ。みしりでしなる。かすりうた。諸人のなずむは。いろ千とせ山。雲はうす〳〵西をのそらに。入日なほ照る。虹のきよはしう。いおよろう。霜も霰も。ひつちこないて嵐につよき。柏崎。かをるくらべん。東と京と。いづくはわれど。陸奥の。千賀のせんせい。それにはかはり。こにしやまとが。藻鹽垂れ。おりたつ田子の。うらめしやけかよおじやろうぞ。足音荒く。聲うはがれ。大門いまだ。さゝずして。茶屋の半部みだれの格子。誰が羽織かづいて。よねくどく。女郎くどく。うけぎりどうぎり。ひとつがい。せうしなるかならぬか。こひの中の町。……以下六曲小野撿挍作。

て。金龍山とは。われとかやほまれ名高き。異國までも。楊貴妃虞氏君。李夫人もこれにはいかで。まさらんと。思ひよるべの。波枕。君に逢瀬の。波枕。かたしく袖の。かわくまもなき。沖の石。難波入江の。身は捨小舟。沈む思ひは。我一人。それはへあかぬ別に。袖引きとめよ。宵のなさけに。えいうかれ。河内通ひに。いこま山。その名高尾ののう若楓。見んとばかりに。契りつゝ。たきのこしたる。薄雲や。伽羅のけぶりの。かをるはしんぞおもはく。かをるはしんぞおもはく。姿を見れば。清原や。ふかやぼなりし。おてきたちうき世を忍ぶ。めせき笠。雨は降らいで。戀がふる。こひが降る身は。八橋の。さわやかにきなすもすそを。かいとりて。われふるつまは。いよなはいとしやれなはいとし。こがれこがるゝ。身は對馬笛。戀の音取のおのづから。君と我との。中とをし。兎角八目の。繁ければ。まがきながらの。御げんといへと。とがめられては。なりませぬういことく。そりやさうさ。江戸やつさ。ういてきた。

香盡

六十一種の。名香は。法隆寺東大寺。逍遙三吉野。紅塵枯木。中川法華經花橘。八橋園城寺。似たり不二の煙は。菖蒲般若。鷓鴣斑青梅。楊貴妃飛梅種ケ嶋。漂滔月龍田紅葉の賀。斜月白梅千鳥や法華。老梅八重垣花の宴。花の雪名月賀蘭子卓橘花散里。

ふりによばれししんざうの髮そこ〳〵に。結ひなして。八聲にちかき。揚屋入り。枕取るまに。あけぬべし。あくびがちなる。閨もわり隣座敷の。ふと〳〵きちざに。ものもうがござる。どれからござつたいのさんちやまちから。まゐりたが。おうけぎりをとりましよそれはいつの。ことかといの。十二月の事じやいの。つがもないこと。ゆつてくるゝな。かきたてゝきたれど。せんぎばかりでの。ほゝん〳〵のんほのう。いよ〳〵らちがない。夜が明けた。不首尾じやひの歸るさつらや。太皷がどんで。おとさへうたのねを打ち出いて。またまゐろ。

あだまくら

あやにくのやもめがらすに。朝ざめてたれを待乳のやよや麓川。みつろふたつろ。舟もよひ波はしたなく。過ぎがてに。また睦言の。うすなまり。枕の床の。寝覺唄。耳にとゞまり。ものがなし。あだにはせまじ。移香の。おゝ形見なる。あだなれごろも。たびごろも。日數重ねて。駿河なる。賤機山の。をりにふれ。ついでおかしき。安部川や。こぬよ契らん。彌勒町。また神風や。かみかせの。伊勢の古市。八十瀬川。こゝも戀草。芝屋町。泊るや鵙の撞木町。鉦をたゝいて佛にならば。などよ〳〵。きつだなるかは。ならずとなると。阿波座新町。越後町。一夜ふた夜の堺のつもり。あくるわ

つきみ

あるひは白良、吹上和歌の浦住吉浪花高砂の尾上の月の。曙を。ながめて歸る。人もあり。我はそれには。ひきかへて昔がたりと。名にたちし。色の村田の。中將の。かちでやれしりよ。はせをりかよひし。道のべ。ざりとる池の。水鏡。片枝枯れたる。さいかちもやれ〳〵戀に痩せたか。そちや異なすがた。稲荷の岡に。馬はあれども君を思へば。のう手編笠。土手の松原。誰ゆゑの。ほんはかよふ。ひんてころびびつて引き〳〵。ゆくほどに。てのもかのもの。仲の町。逢瀬〳〵に。かはらじな。知るも知らぬも。秋の夜の。月まつほどの。今宵しも。かゝすいしやうして。欄干の。よるべ〳〵の。契かな。揚屋の燈。かずてりて。母屋にかさねし。折髭籠。薄にいだす。銀月も。ものずきふりて。またおかし。晝の御座に。いぎたなく。醉ひ伏す男。月知らず。行水がへり。待ちうけて。白波男立田山。忍ぶ心の。おやにくや。曇れと月を。かこつらん。能登屋にはこぶ。ものしげく。間遠にあめる提灯も。今宵はなくて。過ぎよかし。くつはのくれの。まりすぎて。やりてのやどの念佛講。二丁目あたりに。菅搔たえて。はつね三井寺。唄ふらん月は照るやら。曇るやら。身あがりくらき。女郎の。仇目にかゝる。流星。約束なしの。うかれ人。とものうかれに。うかれきて。どれでも〳〵。

花の香に。衣はふかく。なりにけり。木の下風の。風のまに〳〵。八重の霞に。いや高き。めぐみに何か。上野山。花と戀とに。にくまれて。ほんに〳〵。ほに〳〵なにおふよすが。鐘つきぼんさま。見よや濁世の。やぼすらに。しめさんために。御佛の。ぬれありがたき。御姿。なかばは花に。かくれます。風にたゞよふ。幕の內。てりうそてりぬかてりまして。鳴く音かはゆき。山雀の。おのが秘曲の。羽もかろく。よい〳〵よい〳〵やさ。ひよくりひよ。おやおが腰に。瓢簞ひつつけて。ひよ〳〵ひよつとうかれた。花ゆへに。ひよくりひよ。峯の嵐となつれだち通ふ。ひてそ女房は。だてこき〳〵で。小褄かいとり。しやら〳〵行いて。これこちの人。おう見ゆるかの。よう拔申す。小笹篠原。根笹やかくい松のとぐいでな。足つきたてゝ。うづきづき〳〵。うづきにうづき。卯月八日の。花よりだ。御名をば。え申まいまのじやん〳〵〳〵とさいたる長刀。花か蝶かと。うちむれて。櫻散つむ。菅笠やさし。ほんにゆかし。おそばに引きそふ。とぎびくに。紺に鬱金に。淺黃に鹿の子。地紅や地紫。けんたいぐんない。鳶八丈。これのこよねに。とんとつとんと。ほだされた。やすい事。そちでお打ちやれ。ちよん〳〵おけさ。沖のとなかに。とんととらんと。ぞつこいいよすて。捨小舟の。すて〳〵られては。たち申さぬ。さてそれ〳〵の。幕のうち。茶の湯まつ

びしきふくろまち。おつとさしこめ御舟。兵庫のふろめ。たち別れ。室の泊に。うき身をよせて。鞆の浦よね。そこ〳〵に。われからぬらす。袖の海。安藝の宮嶋。みやびして。難波くづしの。三の糸。しんき〳〵。しのだけな。かけて思ひを。さしよよりも。だいり小島の。さゝれ魚。うきをまじりの。櫻魚。さでしいとより。こち〳〵と。呼べばしほのめ。をなぞうる。波の枕や。下の關。なほ行く先は。不知火の。心筑紫に。こひわたる。唐船の。よるとなく。ひるともわかぬ。遊女の。玉のたすきの。花をどり。柳の眉の。まんまるござれ。まんまるござれ。十五夜の月の輪の如く。あゝうつゝなや。仇枕。遠くもきぬる。ものかなと。過越しかたを。都には。官位も。それ〳〵に。みせば大袖。ゆきみじか。ひつこきがみや。二つをり。また二つ櫛。しどもなく。雪の素足の。花ふんで。おなじく惜しむ。きぬ〴〵や。また朝ごみど。いり亂れ。そつちの客衆ど。こつちの客衆が。くるとやしち一丁の二丁の。三丁の早駕籠。鸚鵡とりもち。やんれ嚊づれ。おふむうさつらさ。誓紙誓文。じつを見しよに。しつとん〳〵。しつとん〳〵。とん〳〵〳〵〳〵。とうからないしやう。吹きこんだ。戀の嵐に。ばつと吹きわけ。大盡じや。さつてはそれから。それしだい。うかりひよんなる。寝覺かな。

はなみ

くり聲して。呼子鳥。おぼつかなしや。かくしぎみ。その數なりし。もろ人も。名のみ殘りて。今は又昔を忍ぶ。夕まぐれ。顔に扇の。いやらしく。目にいる色の。風俗と。時のなかだち。さそひくる。流れのまことと。くみて知る。茶屋のしなづま。じつとも知らで。花のひかりも。いさぎよく。見る目にぬれし。汐衣。海士のしわざも。ないものか。何ぞのやうに。さりとては。宿も定めず。はしたなく。宵の睦ごと。よそになり。氣は短夜の。なが枕。しかけ言葉の。口舌ども。よそに下紐。解けぬ心の。あれかしこの身を捨てゝ。あはふに。たいこ不首尾の。かりねして。月を越しても。にくからぬ。とがをばさけに。おふせの末。そらおぼれせし。きぬ〳〵に。八聲の鐘と。とりさわぐ。五てうのてんの。おかつきに。かへるさしげき。遊男の。おのがさへづり。さま〳〵に小唄淨瑠璃。だてらしく。げにかず〳〵の。たはぶれも。聲ち り〳〵に。別れゆく。われ通ひきと。吹く嵐。よそには告げそ。朝がらす。

いろか

定めなき。色香にうかれ。國あまた。かたい枕も。垢づく衣も。なりやつれたる。身の行方。懺悔に語り。申さん。そも〳〵江口。神崎は。名のみ殘りて。風俗なし。野上の里は。草枕。朝妻舟は。かぢまくら。誰こがれけん。あとしらず。つかひあげたる。島原を。

風。染模樣。難波に刈るや。よしあしの。土佐をかたらぬ。幕もなし。都のつての。一ふしは。柳櫻を。こきませて。淺黃かたびら。黑小袖。おなじ岡部の。松にはあらで。その里人の。風俗も。なは懷かしき。やりしゆやりむめ。姿形は橫ぶとり。みどりたよりが。髮結ひかへて。やぼに身をなす。かゝへ帶。禿それ〱。かもじが落ちた。〱落すも。浮名のあられ。根笹根引の。末たのむういこの〱。身の行方。江戶やつさ。見附箱崎。そつちの客衆と。こつちの客衆が。くるとやしゝ。櫓械をはやめて。一丁の二丁の。三丁の早き御舟。色のみなとへ。やんれ押せやれとえもん。江戶やつさ。あらし待つまの。花よりも。しつとん〱。しつとん〱。しとんしとゝん。しとゝん〱〱。〱〱。時めく里の。家櫻。けふも暮れぬと。つげわたる。〱。恨重なる。おどふの鐘。人は散りゆく。むらがらす。我はねるとも。いよ花の雨。その小櫻の望月の。いつそ消えたや。花のした露。

たまくしげ

玉くしげ。二つの色の。まことうそ。分けうる里の。よすがとて。あだし言葉の。もしは草。けぶりかすかに。とび亂る。螢の宮に。あくがれし。その玉かづら。かゝりに今。いかなる筋の。糸による。ものならなくに。わかれあふ。戀慕のしらべ。ほのかにも。つ

り〲に。数へ数ふる。手まり梅。落ちて溢れてばら〱とうらに知られぬ。霰梅。ふりさけ見れば。をちこちの。野梅山梅。咲きそめし。初音ゆかしき鶯の。羽風になびくしだれ梅。雪かわらぬか。白梅の。はつはなごろも。八重梅や。誰が袖ふれし。匂梅はるや昔の。おもはく深き。たにがは梅よ。さりとては。心づくしの。豊後梅。こがれ〱て。ゆく舟の。泊り定めぬ。しま梅や。海士の刈る藻に。捿む虫の。我から梅の。色懐かしく。思ひつゞけて。書く玉章の。便にとめて。やり梅や。おひを隔つる。かきは梅。ながめえならぬ。庭梅の。花の面影霞のまより。はのかに見ゆる。朝日梅。色をも香をも。知る人ならば。よしやとがめん。枝は折るとも。……鶯澤撿挍作。

小笹

しなへやしなへ。小笹も風に。そなたしのべば。人が知る。おゝよそにはとがもないものを。見しよりも。おこがるゝ。及ばぬ戀に。ひとゞ思ひは。いやまして。こぼる涙の。明暮に。かわくまもなき。〱我涙。文玉章の數をつくせど。つれなき君に。見せたきものは。風になびける。鹽屋の煙。荻萩すゝき。まだもござるよ。えい女郎花。ひくになびかぬ。草木もないに。見せたや庭の。柳のいとの。柳のいとの。えい風になびくをの。かなはぬ浮世。雲にかけはし。及ばぬ戀に。思ひ亂れて。えい何しよぞ

都の西に。入日影。移る心に。たきつけの。芝屋町には。火もたてず。けはひかはりし。つじぎみを。はる〳〵こゝに。三越路や。鹽津海津に。どれ〳〵それ。あれ〳〵はりがうら。釣する海士の。うけなれや。心ひとつを。定めかね。敦賀こまんの。吸付烟草。さつくなづめば。目もあはぬ〳〵。目がまはる。女郎と契らぬ。旅人には。夜着もかさいで。寺泊り。御草刈なら。ねまるべいとて。わさゝの酒を。しゐざかい。四の五の。つじを。出雲崎。同じ流れの。さかたのひしやく。そこしんじつから。とけてちん〳〵契りの。いくよも結ばん。常陸帯。かけまくもへ。水戸のふじから。えた川つゝじ。おすの別れにや。ちり〳〵に。おさらばへ。これ近のうち。いとしけりやこそ。しとゝ打てにくか打たりよか。何でもこれは。おいた〳〵。潮來でじまの。こんこで招き。招く袂に。文や玉章。げにふうきやうの。夜の市。とまり〳〵。宿々の。まどに唄ふ。くん女は。客をとゞめて。おつとゝす。別れあれば。待つ暮あり。品こそかはれ。遊女の。袖ふきかへす。飛鳥風。きのふと過ぎて。けふと暮れ。武藏國なる。新吉原が。泊じや。

梅づくし

君ならで。誰にか見せん。此花の。色はさま〳〵。櫻梅。やしほ紅梅。あさぎ梅。地は薄色に。鹿子梅。きなす姿は。まだいわけなき。小梅振よき。しなの梅。しなど拍子を。と

る。花橘の。夕暮に。山時鳥。鳴きつれ。ふるはなふるは。過ぎにし。さいこのは。人懐かしや。ゆかしや。七つな・まなか。なれてくやしや。なれまいものを。逢へば別れの鳥が鳴く。夜はしのゝめか。八つやまぶし姿に。さまをかへ。兜巾篠懸。錫杖を。腰にさいて。京洛中の。花盛。一重二重や。三重八重九つ。戀にきましよか。大原しづはら。八瀬のさと。柴ぬさぬか。露ふみわけて。十でとうからちらめく。星のかず〳〵。あかつきの。明星が。西へちろり東へちろり。〳〵と。するときは。扇おつとり刀さいて。太刀のつかに手をうちかけて。いよのなせ。もどろうよと云うては袂に。とりついた。いとしけりやこそ。しとゝ打て。にくか打たりよか。手がそれて……野澤撿挍作。

あきくさ

秋は常さへ。物淋しきに。思ひにつれて。亂るゝ心。露も涙も。おらそひかねて。戀の道のべ。ふみわけがたき。草の色にも。染む身はつらい。ちらと見そめし。えいさん〳〵。女郎花ゆゑ。つたなき心か。のんさて。まことにはや。思草身は朝顔の。あさましながら。せめてなびかん。こともやありと。紅葉がさねの。その薄樣に。書いてや送らん。文見草。人目忍か。我なみだには。かわくまもなき。尾花が袖も。ひかば靡き

の。兎角うき世は。氣儘がよいぞいの。勿論さうな。そりやさうさ。……生田撿挍作

さらし

槇の島には。晒す麻布。賤がしわざは。宇治川の。波か雪かと。白妙に。いざ立ち出でゝ。布晒す。かさゝぎの。渡せる橋の。霜よりも。晒せる布に。しろみあり候。のう〳〵山が。見え候。朝日山に。霞たなびく氣しきは。たとへ駿河の。富士はものかは。富士はものかは。小島が崎に。よるなみに。〳〵。月の光を。うつさばや。〳〵。見えわたる。〳〵。伏見竹田に。淀鳥羽も。いづれおとらぬ。名所かな。〳〵。立つ浪が。〳〵。瀨々の網代木。さへられて。流るゝ水を。せきとむる。〳〵。とこころからとて。もどらうやれ。しづがやれ。……北澤勾當作。

かぞへ歌

一つ人の迷ふ。戀と云ふ字は。むくつけだにも。大宮人は。いとまなき戀路。櫻かざして。この下かげの露に。濡れにぞぬれし。我さよごろも。二つふたばの。待乳山。松の嵐に。その夜の夢を。さまさせ別路の。のうきやつらさを。三つみよしの。吉野へござれ。いつもながらの。山櫻。のんやほ。四つ世の中の。人の心は。しな〴〵に分てど。五つ〳〵は。いろといふ字に。ひかれては。消ゆる命は。勿論さ。六つ昔の。袖かを

俗や。符牒ことばの。揚屋入。藤屋三浦の。ふたむれに。乘物忍ぶ。うちゆかし。問へど答へぬ。くちなしの。こは誰やらん。花ごろも。新調おそき。其中に。駒もすさめず。かゝる人も。たえて年ふる。ゆかまさへ。生先ゆかし。にゐ大夫。そのほか風雅。よしある女郎の。しぐれわだしの。名寄草。人の結びし。捨言葉。かきもらさなん。藻鹽草。いつの頃より右手は薄く。左がちなる。いろ人の。樂しみ極め。吾妻屋に兵庫。津の國はなまつや。ゆふべとゝろき。まへわたり氣をとりのぼす。菅掻や。すみなす床の。ひとかまへ。しかの投入。ちがひだな。梨子地の硯。玉くしげ。ふたり寝よとの。やよや文枕。みなくれなゐの。三蒲團。雲をたゝんで。うづたかく。一爐にたぎる。松の風。ことに色わる。三味線や。人たちかへる。床のうち。拆り敷く蓙の。かたへに。語りのこせし。みじか夜の。とても寝られぬ。浮枕。蚊幬のひとへの。薄月もるゝ。もれて淋しや。よすがら。ともになかるゝ時鳥。……武州花都行。

ゆき

花も雪も。はらへば清き袂かな。ほんに昔のむかしのことよ。我まつ人は我をまちけん。鴛の雄鳥に物思羽の。氷る衾に。鳴くねはさぞなさなきだに。こゝろも遠き夜半のかね。聞くもさびしき獨寝の。枕にひゞく霰のおとも。もしやといつそ

やれ。さりとては。くずの恨の。かずつもりきて。いつかは君を。また宮城野。の萩の下葉の露に。しつぽと濡れて。なにともなう。荻吹く風の。便をも。きくやと待ちし。戀心。亂れ亂るゝ。難波の蘆の。契はつらい。波のよる〳〵。さんさ身をづくし。思ふはくださうな。……松岡撿挍藤島勾當合作。

こひぐさ

思ひそめたよ。こき紫の。いろに出でじと。つゝむにあまる。袖に涙は。のんさてまことに。こぼれぞかゝる。れんぼれんれつれ。知らぬ昔はよそなるものを。今は身に知る。哀別離苦の。うさを思へば。のんさてまことに。なさけもつらや。れんぼれんれつれ。めせ〳〵草花。なに〳〵ぞ。つまつ夕顏。白菊の。花咲初めて。美人草に。戀草。ずんど秋風の。立たぬまに。なびかさんせ。女郎花。おさしあひは。ござんせぬかいの。ちよつと苅萱。……松岡撿挍作。

しのゝめ

しのゝめ〳〵。いつ夜が明けた。朝寢ひさしき。仇枕。おろしこめたる。蔀戸の。中の御座に。端居して。文のこしばり。かげくらく。外面にしげき。市人と。ともに賣りくる。芥子の花。江戸町はやき。身ごしらへ。地白に網の。つれ模樣。目にかゝれとの。風

何時ぞ今なる鐘は六つか七つか。時の太鼓の皮をむくのはれはどん〳〵どん。俄に吹きくる風のおとに。駒も進まず。高嘶し。いひゝんいひゝん。びり〳〵びつと。身ぶるひしてこそ立つたりけれ。そのとき馬をつゝばなし羅生門の壇上にあがり。しるしの金札立ておいて。かへらんとするところを。うしろより兜の錣を引つつかみ引つぱりけるほどに。綱はさわがず。太刀ぬきかざし。退きやれ放しやれ首ちぎらしやんな首のちぎれたは繼がれもしやうが。手々がぬけたら不自由にごんしよがのたゞしやたゞのりが望かや。童子すこしもわるびれず。おまへは私が心をば。知つてゐながらどうよくなわしやなんぼでも。これな〳〵放しやせん。綱はびつくりこりやならぬ。こりやならぬ。今はこれまでと。持ちたる片手をずぼりと切れば。あいたしこ。なんとしたたん〳〵のたんせつぼう。伯母君のみやげに。これを見せたいかな。をばきも嬉し烏丸三條さがる町の娘を。とこ〳〵とん。とのが見たさに日暮に門に立つ。いかさんさま人が。ちよがらがさせんでろも。赤い小袋に兩足ふんでんだ。おれみた般若。これみた般若。ちよこだ助六。大佛鐵炮つゝはつたといへども。どんがらりと音もせず。これにつけても茨城殿は。折角りきんだ腕を取られ。いかい骨折御大儀。

せきかねて。おつる涙の氷柱より。つらき命のをしからねども。こひしき人は罪ふかく。思はぬことのかなしさに。捨てたうき。捨てた浮世の山かづら。……………

羽積作。峰勾當調。

はな

業平にことばやあまる花の春。なんのまゝよと匂はせて。ほれた顔せぬ。あやなきそらを卯の花に。ひとりうそつきさめ。あへば心の水もすみ。すくひあげては菊のかげ。いひたひことを明日の夜と。今ふる雪を花とや見らん。紅買うて。もどるや妹が年じまひ。……芦の丸屋作。長岡勾當調。

つな

春雨のだんだと降る夜に。綱は金札首筋につんざいて。二條大宮馬のあたまを南の方へむかして。一盃機嫌で鼻唄一さし。わい〳〵のわい。酔うた〳〵とふら〳〵。道は三筋に迷うた。しんじつそうかいな。どことんうから〳〵と羅生門坂。きたれば垣の間から。白い手がぬつと出た。なんの覆面頭巾をうしろから引つぱるは。じやうよみさんの綱もどき。さつさえいこのえいこのゑい。わめきちらして酔もさめ〳〵。夜もしん〳〵とどうやら氣味がわるいながらも。もはや

らに通ふ琴のねは。たれに明かして明かして月に。月にあかして小夜千鳥。あゝ浮世じやな。千世もつきせぬ松の風。……キ文作。藤永撿挍調。

つき

庭の白菊やちよの露の。閨へも入らぬ三日の月。ぴんとすねては袖から袖へ。つい風かよふかみならで。待つ宵さへ。憂き浮雲に。私せかれても。關の岩かど踏みならし。なるかならぬは目もとのしほに。月をのせて。ほんに最中の今宵かんなや。……峰崎勾當調。

ふじ

恨は人をも世をも〳〵。思ひ思はじ唯身ひとつの。むくいの罪や數々〳〵の。うき名に立ちしも懺悔のありさま。岩もる水の思となりて。なほあだしのゝ露涙。包めどあまる世のなか。昨日の花は今日の夢。驚かぬこそはかなけれ。身のうきに。人のつらさの猶そひて。忘れもやらぬ我おもひ。せめて暫はとまれかし。梓の弓に立つ征矢の。これまではあらはれきたるぞや。あゝなつかしや今とても。忍車の我すがた。踊りくるひし有樣は。あはれとも又あさましや。世の中は廣いやうで狹いよの。にあひの。つま。つま。いとゞ太鼓のね。どん〳〵。もよし。どんどろ〳〵。どん

ぬえ

さるほどに源三位の賴政は。化生のものを平らげんと。おんりやうの狩衣に。滋藤の弓をもち。山鳥の尾の突矢二筋。猪の早太を具しつれて。南殿の大床にこそ氣張られたれ。かくて更けゆく月かげの。東三條の林頭より。黒雲ひとむら立ちかゝり。御殿の上にぞおほひける。賴政心に祈念して。眼を開きよく見れば。頭は猿。尾は蛇。手足は虎のごとくにて。なく聲鵺に似たりけり。さすがの賴政どうぶるひ。猪の早太はがた〳〵ぶるひ。賴政大きにあなどり給ひ。これしきの獸は吹矢にても吹きとるべし。なむや八幡大菩薩と。心に念じ。ふつと吹けばあやまたず。不思議や鵺のつら吹きとほし。猿の一聲きやつとばかり。たまりあへず落つるところを。猪の早太すつとより。松明にてよく見れば。鵺にはあらでこはいかに。ぶらりと落ちたる張子の虎。賴政はあきれはて。誠の變化を吹かせ給へと。又矢一筋。今度もあたつて裸のお多福。さてこそ末世によりまさは。面目(北)面の武士なりと。今の世までも名をのこす。

ゆめ

夢の浮世か。浮世のゆめか。花も紅葉も一さかり。さびしき夜半に音づれて。まく

川句當調。

つるべ

百夜かよふ車にあらでそのもとにならぶ姿のぬれかわくひまも互に波のうへうれし逢夜と心のいそも。やがて引手にふりわけられて。しんきはむらの餘も水にうつりやせじと恥かしく。顔の紅葉も汲みてしる。綱手にかよふ涙のしづく。おちておとするおとづれ。露も洩らさぬ閨のうち。……騏十作。歌木撿挍調。

おそめ

たてまつる。なにし浪花の東堀。開いて鬼門の門屋敷。河原屋橋とや油屋の。一人娘におそめとて。二八の春のなよいさよ。細眉にうちのこがひの久松と。しのび〳〵のねあぶらを。親たちや夢にも白絞。一門中の山家やへ。嫁にところ〳〵紅粉かねをつけて緣組きはまれば。久は思のたねあぶら。胸に火をたくばかりなり。おそめも同じうきおもひ。これのう久松よいさよ。わしが身は。たとへ野に伏し根芹摘み。黒木眞柴を折るとても。なぞや心のかはらんと。なげき沈みし其なかへ今當世の流行唄。門に讀み賣ることゑだ〳〵に。鳥部のゝ露と消えてゆく。見るに二人がせきくる涙。じつとこらへてこれおそめその。思ひ切らしやれもう泣か

どろどつく〳〵でんつくでんつくどんがらが。太鼓のねもよしやつとせ。にあひのつま。つま。いとゞ太鼓のね。どん〳〵。もよし。どんどろ〳〵。どんどろど。つく〳〵でんつくでんつくどんがらが。太鼓のねもよしやつとせ。踊りくるひて伏し沈む。……紀海音作。榊山小四郎戸間瀨撿挍調。

しのぶ

春と秋。つとだけちがふ同い年。菊と桔梗はどちらが妹。おなじ衣裳に對の櫛。みち〳〵話すそのわけは。宵はまぎれて暮しもしやうが。更けて待つ夜の庭潦。しのぶは。しのぶ居るかへ。しのぶその夜のたのしみに。格子へだてゝ袖扇。奥に酒宴吾妻。琴。無理な呼出し合言葉。しのぶは賣りありく。目だつ桔梗と菊の酒。雛とめませの旅すゝり。書いておくるや糸萩の。みだれみだるゝ我すがた。もはや山の端しらむのに。いつそわけなき梅もどき。……歌木撿挍作調。

よるべ

蒔かなくに。何を種とて浮草の。花にうかれし年月なびく。風のさしひく心の楫に。しめつゆるめつ得手に帆を。あげのいとまに身をぬきばなは。ほんに阿漕が浦にしき。かひどる褄のしどけなき。ゆくへはいづこ海士小舟。……ひさを作。戸

いつはりわらじ本宮の湯本をさして引く車。照手ひたちが物おもひ。さしもいぶせきがきやみの。つまにひかれて。よいさよう。うき難儀。そのおこりとて外ならぬ。つれなき伯父御のしわざにて。毒酒をすゝめはかなくも。かゝる姿の悲しやと見る目涙にくれながら。のう〳〵ひと〴〵きゝたまへ。罪業ふかき此車。一引ひかば千僧供養。二ひきひかば萬僧供養。廣大無邊の功德なり。ひけや佛の御手の糸。ながき旅路のいくとまり。湯の峰にこそ着きたまふ。……近松播磨作調。

おなつ

おきなか川は絶えぬとも。君に語らふ言の葉に。ひとかたならぬ二人づれ。故郷をあとにうかれいで。遠山おろし磯千鳥。今日のうき身に物すごく。こゝろ播磨路たちいでゝ。難波をあとによしあしを。恨妬に春秋を。おもひかさねておなつは今を旅はじめ。霜ふみしめす藁草履。引裂紙で後ぐゝり。笑のたねの草鞋や。うきが中にも清十郎。しよんぼりとした旅すがた。あづまからげのかひしよなき。そんななりでも五里十里。ゆかるゝものかとあぶなき案じも。たがひに力つけあうて。しのぶ時には邪魔になる。振袖かくす人目の關路。見つけられじとそなたなる。木かげに。しばし休らへば。説きしめす佛のちかひ跡たえず。寒き夜道に

しやんな。わしは泣かねぞそれこなさんの。い丶やそなたの。いやこなたのと。顔と顔とを見あはせて。一度にわつとなげくにぞ。聞くに二人が身にこたへ。思ひも一つ同じ名の。か丶る言の葉。われ〳〵が。冥途の使と胸を据ゑ。最期きはめし。よいさよ。をりからへ。在所の爺親藁苞に梅の早咲をりそへて。くる面影を見るよりも。おそめは忍ぶ奥座敷。これは内方おるすかや。なんじや御節においでとや。やれ久松の人でなし。親の口からこんなこと。いはうと思へば顔に火が。高いも低いも色のみち。あるならひとはいひながら。さけばおのれは内方の娘御さまをそゞのかし。嫁入の邪魔をなよいさよ。しをるげなぬかすな〳〵。さる人に。くはしう聞いてな今日ははや。お暇もらひつれかへる。旦那さまへも親どもが。まゐりましたというておけ。しかしお主の留守の間に。長居をするもいかゞぞと。つねの宿へぞ立ちかへる。久松あとを見おくりて。心のうちに暇乞。よいさよ。おそめは奥より走りいで。様子はあれにて聞いてゐた。とても添はれぬ世のなかに。死出の旅路と。つひに消えゆく春の雪。たゞ世のあはれこれまでと。うやまつて。……紀海音作。杵屋長五郎岡崎撿挍調。

をぐり

つきにける。……玉川九八作。

田にし

さて田螺どの〳〵。ござれ立田へまゐろぞや。いやで候。こりて候。烏とやらいふとりが足つゝきつゝこらばかいつゝ。そのつゝきけつころばかいたる疵が。四季の土用やくさだちに。雨さへふれば。頭痛がする。さるあひだ。さんちや村の田の畔に。年ふる田にし候ひしが。頃は三月なかばのころに。畔のはたに集まりて。日向ぼこして休みゐる。さんさよしなや。かゝる所へおそろしや。せんじゆもどりの烏めが。かあ〳〵となきつれて。此よしを見るよりも。時分はよしせしめばやと思ひつゝ。かの田にしを引つくはへ。梢はるかに上りけり。田にし心におもふやう早業の烏めに。食はれては叶ふまじ。のがればやと思ひつゝ。歌祭文にて。みしらしけり。のう烏どの〳〵。おん身のすがたよく見れば。伽羅の古木にさも似たり。おん目のうちのすゞしさは。瑠璃の壺ともいひつべし。はゞきものうつくしさ。襦子の脚半やめされけん。さへづり給ふおん聲は。春のはじめの。なあよ。梅が枝に。ほうほけきやうと鶯の。さへづる聲にさも似たり。からす大きにのせられて。助けばやと思ひつゝ。淺草川のまんなかへ。ざんぶとこそおとしけり。

修行者の。法の案内も世につれて。はでな念佛のころ〲や。稱名してぞ通りける。今のうき身にしみ〲と。無常をつぐる鐘のこゑ。清十郎なみだぐみ。なつが手をとり顔うちながめ。あゆみならはぬ旅の空ようついてきて下さりました。おなじ戀とはいひながら。御主の娘をつれてのく。これより上の罪もなし。傍輩中のそしりをうけ。親御さまのお恨を。おもへば胸がくるしいと。涙にくれてたゝずめば。おなつもそばへよりそひて。御主とは何ごとぞ。おまへは假の手代ぶん。もつたいながら人目があれば。清十郎どうしやかうしやと心でをがんでいうてゐた。まだそのやうな言葉のへだて。とゝさんやかゝさんをおもへばわしから死なねばならぬ。そこをふりすてかうしたうきめも。苦にならぬのはどうしたことぞ。お醫者さんでも神さんでも。ほれた病は直りやせぬ。いつものやうに睦まじう。言葉をかけて下さんせと。すがりなげゝばこゝろとけ。たがひに手に手をとりかはし。たゞ何ごとも思のあまり。いざ急がんと道ばかもゆきゝのとがめこりずまの。うらなつかしき冬げしき。名所〲も心なく。せめて一夜のそひぶしに。おもひ明石もほどすぎて。あるひは隱れあるひは走り。しぐれしぐるゝ袖の海。山また山のはてまでも。はなれじものとゆきくれて。兵庫の町にぞ

ぞなきことわり聞いてくちなはも。おれが伜を鳶にかけられ。世には似たことあるものと。ぞろり〳〵と立ちかへる。あと見おくり蛙はこと〳〵うちわらひ。彼奴をまんまとたばかりし。口は重寶なものと。かたへの溝へ飛んで入る。

よしの

吉野の山を。雪かと見れば。雪ではあらでん。やあこれの花のふゞきよん。やあこれの。

きせん

さめはてし。夢も新茶の一花が。ばつと其名を水莖に。かげさすかひも夏の夜の。月のかよひぢせきとめかねて。をしむにあまる雲がくれ。……繪男作。廣澤勾當調。

しをり

あやにくに。うつる思のうへなき花よ。しのぶもじずりわれながら。あやしきばかりみだるゝ露も。桐の一葉を散らす秋風。身にしむ暮にかけてしいはゞ。うすもみぢ。のこる千入の色ふかき。戀の山道しをり入らじ。しをりも入らじしをりもいらじ。心ぞしるべ人はとへ。……佳丈作。

ゐくぼ

波はこすともすつとん〳〵。水ひとへ泥ひとへ。おもふまゝにずりこんで。やあ〳〵そこな馬鹿がらす。おのれが色の黒きこと。燒ぼぐひにもさも似たり。眼のうちのそのむさゝ。鹽辛壺ともいひつべし。はゞきもとのきたなさは。古鐵火箸にさもにたり。泣聲のかしましさは。八王寺の百姓が。年貢の訴訟にさも似たり。からす大きに腹を立て。波間をめがけ飛び入ればなんぼ羽たゝきしやるとも。鵜のまねやなるまい。あんつがらすのがあ〳〵。あほうがらすの馬鹿がらすと。いひ捨てゝは。浪間に入りにけり。

かはづ

六月ごろのひる畑へきて見れば。茄子ゆふがほ白瓜冬瓜。汗をながして暑さをしのぐ。かゝる所へ草村より。蛙一疋にげ出でて。さて〳〵ひやいや危いこと。たまの命をひらひしと。悦ぶあとよりざは〳〵。草おしわけて蛇が。鎌首もつたてもつたて。舌をびらしてとびかゝれば。蛙はおどろきとびしさり。たつた一こと聞いてたべ。わしが親父烏にとられ。どうぞ敵がとりたいと。一家一類相談なかば。それをおまへに呑まれては。かゝる望も水のあわ。おはれと思うてくちなはさん。どうぞ助けてたまはれと。雨を呼ぶより聲たかく。泣くより外のこと

おふさ

ふさはそれとも白紙の障子と月のあかりにて。剃刀出だし合砥に。かゝらましかばかくとだに。ま一度顔が見て死にたいと。おもへば引かるゝ後髮。手もわな〳〵とふるひけり。さすがそれ屋の女房とて。世間ばなしに氣をゆるませ。これのふふさ。いつぞ〳〵と思ひしが。ついでにそなたに意見がある。われもはじめはつとめの身。素人のいふ事と。ひとつにきけば曲がない。心しづめてきいてたもくるわやこゝな奉公は。たのしみなうてはつとまらぬ。むげなうせくではなけれども。それにさへなはかけひきあり。かならずつま子ある人と。すゑの約束せぬものぞとよ。そうてそなたの本望ならず。いとしい人の身のひしと。一門中のにくしみうけ。そなたを鬼よ蛇よといふ。またかこはれて世をしのび。後家同前でくらすのが。それが何の手柄なこと。若木の花は一さかり。老木の枯葉いろうせて。かはるは男のこゝろぞや。よのお山しゆとはちがうて。十のとしから小がひにて。豆腐取てこい。八百屋へはしれ。駕よんでおじや。掃き掃除。戸棚のかぎまで預けしは。ちひさいからのなじみだけ。わが子のやうにおもはれて。よい客もがな出世させ。下女のひとりもつれさせてと。おもふはこちとばかりかは。み

屠蘇の香や。ひのたに水も菊の酒。くみてしれとは洩らさぬ中よ。又もあしたのつれなきしをり。にくて打たりよか夕のなさけ。あゝなんとしやう。慕ふ心はあやなき鳥の。かあい〳〵の聲きくまゝに。誰をうらみん山かづら。……廣橋勾當調。

きりこ

はかなくも。何を科とて浮草が。つもる思は富士の根の。いとしとかはる心の花が。ちりはじめけん柳の一葉。にくや秋風なみだの泉。しよせん此世の恨はつきじ。おもひきらしやれ。今宵おもひの切りどころ。……瞽者かめ調。

ろざし

母の目を。ひろうてとほすろざしより。こゝろの糸やもつれけん。そも初戀は稻妻の御簾よりもれて君が顏。する柵の色糸に。ものな言はせそ言はせたやし。のぶ逢瀨はひしがきを。願のこゝろ。毘沙門に。歩を運ぶつゞらおり。妹脊の道の大津折。うちはなうても網代形。ねしのすがたの業平菱と。緣をつなぎの龜甲を。母がいさめの鱗形。せかるゝほどは君をなほ。松皮菱の其心。せめては風のよすがにもきかせまほしき香の圖の。緣ははなれじ筒井づゝ。ほんにしんきや目をしのぶ。……藤永撿挍調。

から呼びには來る。嬉しやさきで。何事も。談合せんと今まで待ちぼうけになつたれど。一目わへばこれ本望。末たのみなき契なれば。これかぎり〳〵と。逢ふたびごとの觀念も。いまさらためていふことなし。貞女をたつるおたつさん。おさげしみも恥かしい。中ようして下さんせ。たがひに生れかはつたら。本妻さだめぬ其さきに。はやう夫婦に成りませう。いひおく事はこればかり。さわ〳〵もぞつて下さんせと。夫にひしとすがりつき。絶えいるばかりに泣きしづむ。

なのは

かわいといふことは。たがはじめけん。外の座敷はうはのそら。もとさまゐるとじめす心のあぢなさは。うへ〳〵さまの痴話文も。別にかはらぬ樣まゐる。おもひまはせば勿體なうて。言葉さげたら思ふこと。菜の葉にとまれ蝶のあさ。……

……歌木撿挍調。

あさま

うらみも戀も殘寢の。もしや心がかはりやせんと。思ふ疑はらさんたぬの誓紙をばなせに煙となし給ふ。うらめしや。胸のほむらは夜に三度。こちのおもひは日に千度。けぶりくらべん淺間山。あれ御覽せよ。あさましや。邪婬の惡鬼が身を

な親かたはおなじ事。わけもない事仕出して。むごいめ見せてたもんなや。ためのよいことあるならば。何時でもいとまくれといや。欲をはなれたこれ證據。年というてもわづかなこと。不便な目を見やうかと。案じすごしがせらるゝぞや。思ひもよらぬ憂をかけ。かならず泣かしてたもんなと。涙に顔もしめ〴〵と。のこるかたなきお身のほど。ふさは顔をもあげもせず。只あい〳〵とばかりにて。のべもいくへやしはるらん。

同おく

いとしぼや。氣をもまんす故にやら。顔にたんと痩がきた。その苦は誰がさするぞや。みんな私ゆゑど。それは〳〵わするゝ事の有るにてそ。さりながらもう苦にしては下さんすな。かういへばどうやらすねて言ふには似たれども。微塵もそうした心はなし。わしが京のとゝさんの。よしなきものゝ請にたち。明日ぎりに金たてねば。わしをやるとの判じやげな。わしはてゝへ身を賣つて。さきからつれに來るときは。二重うり二重ばん。牢舍は鏡にかけた事。ならぬ事をぐど〳〵と。思ふは愚痴のいたりなり。さきへ死なんと剃刀を。手に取りは取つたれど。內儀さんに見つけられ。死にもせずゐるうちに。下にはこなんの聲がする。向がは

くる水に消えもせで。放ちはやらじと取りつけば。霞にへだつあさましやすてしはそれぞと。思ひしらずや。思ひしれ。わしもとはよろ〳〵。よろ〳〵〳〵と。よわりはてたる釣瓶のしづく。落ちて形はなかりけり。

ねざめ

菊の香の。せめてしばしはふところに。とまるものなら此苦はせまい。わしやおまへにきらはれて。梅もどき。かはす目もとのその中に。ほれたやうでも脇道と見え。わしやおまへにきらはれて。

くきら

見たや逢ひたや山ほとゝぎす。すがたならずは聲ばかり。聲ばかり。すがたならずは聲ばかり。

さつき

長き根と。いへばみじかし菖蒲草。軒ばの露のしげ〳〵に。袖のかわかぬ五月の空の。はれぬ雲さへ紫の。こくうすくかならずとこそさて。えもん正しき立すがた。其おもかげのかほよ花。いつか御法のうてなにて。しらべん蓮の糸よりも。ほそき心や郭公。いま一こゑのきかまほし。

せめてのう。剣の山のうへに戀しき人は見えたり。うれしやとて。よぢのぼれば。思はむねをこがす。こはそもいかにあさましや。花の姿もよわ〳〵とかしこに立ち。ゆかんとすればこゝにきえ。あるかなきかの春の夜の。おぼろ月夜にはかなくも。消えてかたちは失せにけり。……中村七三郎。岩井佐源太調。

ちどり

鴨の川瀬にすむ朝千鳥。さまをおもへばいよ小夜千鳥。霜のふる夜も雪ふる夜半も。しまちどりの御羽織で。裾に村千鳥を金砂で縫はしだてな浦千鳥。戀となさけを千鳥がけにかけてめぐり。酔ひやわかさんとん友ちどり。かよふ心は千里が一里。いくよちぎりてかはらずばのう。百千鳥。

ゐづゝ

筒井筒。ゐづゝの水は濁らねど。かはせし人はおぼろ月。いるかたもなき我おもひ。たゞかはらじと一すぢに。ねてもさめてもいとしさの。あまりてもれて憎うなる。墨と硯はこひ中なれど。人が水さしや薄くなる。しんきへ。しんき〳〵は水さしや人が。人が水さしや薄くなる。その一念のつきそひて。陰にたゝずみ。あゝ日向におほひ。くる〳〵。くる〳〵〳〵〳〵と。くるしき胸のはむらの火の。わき

勾當調。

ほのか

ひとり樂しむ糸筋を。むすぶ縁のいつまでもかはらぬ中の思ひぐさ。なびく尾花の秋霧に。誘はれゆくや友なし千鳥。見るめは遠の波まくら。夢かうつゝか小夜時雨言の葉のみやのこるらん。……西村勾當調。

きぶす

雉子なく。野邊の若草つみすてられて。人の嫁菜といつかさて。こがれてがるゝ苦海の舟の。よるべさだめぬ身は蜻蛉の。おづまが顔も見わすれて。うつゝないぞやこれのう男。われ虫さへもつがひはなれぬ、揚羽の蝶。われ〳〵とても二人づれ。粹な同士のなか〳〵に。はるにもそだつ花さそふ。菜種の蝶は花しらず。蝶はなたねの味しらず。しらずしられぬ中ならばうかれまいものさりとては。そなたの世話になりふりも。我身の末の放駒。ながき夜すがら引きしめて。昔がたりの飛鳥川。……加茂川のしほ作。島野勘七若村藤四郎調。

たぬき

小夜しぐれ。しぐれふる夜も笠きて通はんせ。神無月にもたゞ通ふかみ。文で待

おはつ

戀中は。墨と硯の二おもひ。筆の命毛こよひが限り。われは此世にすてられて。夏の梅田のはかないことは。せめて一日夫婦というて。おかしくらしてねた夜半もなし。おすは我身のよしわしを。のせてうたふか。つらにくの十八。おゝそれわしは十九の厄年。思ひ合うたる縁はつたなさ。身は朝顔のうちしをれ。こゝぞ浮世の。別の辻よ。はやう御座れと手をとりて。見るにかなしやせきくる涙。じつとおさへてこれのうやいの。思ひきらしやれもう泣かしやんな。わしは泣かねどいやこなさんの。いゝやそなたのいやこなさんのと。顔と顔とを見あはせて。一度にわつとなげくにぞ。なみだの露の玉の緒も。絶えなば絶えよ二人ゆく道。

れんり

梅が香の。連理の枝に里なれし。聲ものどけくうぐひすが。春に後れし花のえん。あかずながめて心のみ。うかるゝ庭に羽をやすめ。園の胡蝶にたはむれを。しのぶ思ひは吉野川。ふかき流に散るさくら。たとひうき名をながすとも。底すみわたる丸木橋。ふみかへされし紫の。ゆかりと筆にかきつばた。たゞ水莖にいはせても。人の心と秋風に。ふかるゝ身とて埋火の。下にてがるゝ閨のうち。……藤谷

はどもなく、いさまぬ駒の鈴が森。見る人そでをやしぼるらん。

あをば

こはなさけなの仕業やなさのみ人につらかりそ。かなしみの涙まなこにさへぎりて、西も東も白波の。よるべさだめぬうたかたの。いつそ泡とも消えもせでこがれこがるゝ身のゆくへ。青葉〳〵と。よべども濱の。濱の松風おとばかり。まつかせはまのはまの松風おとばかり。そよとばかりの便もがなと。うらみなげくぞあはれなる。……芳澤春水作。杵屋長五郎薦山四郎兵衛調。

あづさ

三つの車に法の道。ゆふがほの宿の破車。あらはづかしや我すがた。梓の弓の末弭にあらはれ出でし面影の。むかしわすれぬとりなりを。おれわれを見や。蝶は菜種に菜種は蝶のつがひはなれぬ妹脊の中を。見るにねたましく又うらやまし。われは磯邊の友なし千鳥。わくらはにわくらはに。とふはうれしやさりとては。とはれて今ははづかしの。もりて浮名の手束弓。さいた白羽の矢はだてすがた。人のめにつくいたづらがみの。なんぼいはれし中なれど。いまは秋田の落し水。五月雨ほど戀ひしのばれて。さよへ。なほ〳〵つきぬ恨ぞや。どもに那落のくる

てとや待たるゝ。よりも。待つがつらいか煙がういか。しんき枕の空寝入。口說しらけて暫がほどは。軒ば〳〵の下ゆく水も。ほんにうき身のすみどころ。……

堺屋方舟作。鶴山勾當調。

ひるね

夏の日に。晝寝のたねとなるものは。月の口說か螢のりんき。そよ〳〵風にだまされて脛もあらはに寝亂の。裾に袷のすがたはにくし。ほんにえ。ものずきすぎた世の。たとへ言葉のかず〳〵も。夢の世なりし枕蚊屋。……青瓦作。歌木撿挍調。

おしち

むかしより。戀にうき名をたてまつる。よを。いろはさま〴〵あるなかに。わけてあはれを。とゞめしは。八百屋のむすめお七こそ。戀慕のやみのくらがりに。よしなきことを仕出して。親のなげきはいかならん。戀に目もくれ夜も日もわかず。うつら〳〵と來ぬ人を。まつはの浦の夕なぎに。やくや藻鹽の身をこがす。わしが思ひと迷ひのたねじやいな。たすけたまへや南無妙法蓮華經〳〵。せめて一日わが世帶。夫婦といはれ死ぬならば。未來の罪もいとふまじ。わしが思ひと迷ひのたねじやいな。たすけたまへやなむめう。ほうれんげきやう。〳〵。羊の歩み

き我つまの。あしかれと。思はぬ山の峰にだに。人のなげきも生ふなるに。いはんや年月。おもひに沈む恨のかず。つもりて執心の。鬼となることわり。いで〳〵恨をなさんと。笞杖ふりあげ後妻の。髪を手にからまいて。打つや宇津の山の。夢うつゝともわかざる浮世に。因果はめぐりあひたり。今さらさこそ悔しかるらめ。さてこりや思ひしれ。ことさら恨めしき。あだしをとこを取つてゆかんと。伏したる枕に立ちより見れば。おそろしや幣帛に。三十番神まし〳〵て。魍魎鬼神はけがらはしや。出でよ〳〵とせめたまふぞや。はらだちや思ふ夫をば。とらであまつさへ神々の。せめをかうむる・悪鬼の神通。通力自在の勢たえて。ちからもよわ〳〵と。足弱車のめぐりあふべき。時節と待つべしや。まづ此たびは歸るべしと。いふ聲ばかりはさだか聞え。いふ聲ばかりは聞えて姿は。目にみえぬ鬼とぞなりにける。

やしま

釣のいとまも波のうへ。霞みわたりて沖ゆくや。海士の小舟のほの〴〵と。見えてぞのこる夕ぐれに。浦風さへものどかにて。しかも今宵は照りもせず。曇りもやらぬ春の夜の。おぼろ月夜にしくものはなし。西行法師のなげゝとて。月やは

しみ見せんと。あなたへ引けばこなたへ引く。ゆきてはかへり。かへりてはあら。なごりをしや。戀は曲物いろ〳〵の。花や紅葉にうつり氣の。をとこはいやよさりとてはほんに辛苦もいとはぬ惡處。そこの心は水くさい。ながれのわしが辛抱を思ふて見さんせあたどうよくな。いやとよそれは空言よ。袖のしぐれは誠の血鹽染めし誓も僞ならず。二人かはせし契も今は。あだとなりゆく妬のほどを思ひしらずや思ひしれど。鐵杖ふりあげちやう〳〵。打つや現の手にも取られず。露か螢かちら〳〵〳〵。このてがしは手にむすびし水も。笹の葉に又たちよるを。幣おつとつて。謹請東方。南方北方西方。おの〳〵守りの冥府の神佛ましませば。怨靈いづくにとゞまるべきと。祈り祈られ。かつぱとまろぶと見えけるが。今より後はきたるまじと。よばゝる聲は雲にひゞき。いふ聲ばかりは雲にのこつて。姿は見えずなりにけり。この曉に空ふく風。〳〵。夜はしら〳〵とあけにけり。

かなわ

忘らるゝ。身はいつしかに浮草の。ねから思ひの無いならほんに。誰をうらみんうらぎくの。霜にうつろふ枯野の原に。ちりもはてなで今は世に。ありてぞつら

かせん

かゝれとてしもうば玉の。戀の暗路の野邊の草。むべ山風にちる露を。あれは何ぞと問ひかけられて。世を宇治山といふ人の。こゝろの花の鏡やま。いざ立ちよりて見てゆかん。その粧の六つの花。……近松播磨作調

すゝき

露は薄とねたといふ。すゝきはつゆとねぬといふ。いや寝たといふ。ねぬといふ。ねたらこそ。すゝきは穗に出てあらはれた。……藤永撿挍調

さらし

槇の島には。さらす麻布。賤がしわざは宇治川の。波か雪かと白妙に。いざ立ち出でゝ布さらそ。かさゝぎの。わたせる橋の霜よりも。さらせる布に白みありそろ。のう〳〵山が見え候。朝日山に。霞たなびくけしきは。たとへ駿河の富士はものかは。〳〵。小島が崎による浪に。こじまがさきによるなみに。月の光をうつさばや。〳〵。見わたせば。〳〵。伏見竹田に淀鳥羽も。いづれおとらぬ名所かな。〳〵。立つ浪は。たつなみは。瀬々の網代にさへられて。ながるゝ水をせきとめよ。ながるゝ水をせきとめよ。所からとてな〳〵。布を手ごとに。槇の里人うちつれて。もど

物を思はする。暗はしのぶによか〳〵。うなゝせでたぞ。きそ〳〵くもれ。また修羅道の關のこゑ。矢叫の音。震動して。今日の修羅の敵は誰そ。なに能登守のりつねとや。あらもの〳〵しや手並は知りぬ。思ひぞいづる壇の浦の。その舟軍今ははや。閻浮にかへる生死の。海山いちどに震動して。舟よりは關の聲。陸には波の楯。月にしらむは劍の光。潮にうつるは兜の星のかげ。水やそら。〳〵ゆくもまた雲のなみの。うちあひさしちがふる。舟軍のかけひき。浮き沈むとせしほどに。春の夜の波よりあけて。敵と見えしは群れゐる鷗。關のこゑときこえしは。浦風なりけり高まつの。朝あらしとぞなりにける。……藤尾勾當調

ねはん

蓮の葉に。露のうきしは。釋迦の涙かありがたや。所へ蛙がひよいと出て。これはわたしがしゝでそろ。

ねみゝ

ひとりねの。さめて驚く川おとの。ながれ〳〵と呼ばるゝ末を。海か山かは白糸の瀧の岩壺なさけもふかき。心の底と汲んだが無理か。それにそなたが浮かれてゐては。わしが願も皆水のあわ。よしや世の中ゆめならば。……藤永撿校調

あみだぶつ坊師の御坊には知らせじと。檀特山の昔のことをつたへきゝたる行力の。奇特をいで〳〵見せんずと。用意のいらたかおしもんで。さら〳〵さのさつと祈ると見えしが不思議や。今まで胸をこがせし。思ひの煙も雲霧も。はれて眞如の月をながめん。めでたき鶴のゑひらひや。ちん〳〵鴨のいれくびに。ふたり手に手をしつほり、と。打ちだす太鼓もろともに。どん〳〵〳〵晝寢の夢の。さめて今まで。有りつる拍子も笛のねも。人松蟲のこゑ〴〵に。花野の花となりにけり。はなのゝ花となりにけり。……松葉屋某作。松永撿挍調。

きぶね

蜘蛛の網に、おれたる駒は繋ぐとも。二道かくるその人を。いかに頼まんあだしのゝ。あだし此身はまゝにはならぬ。月日はへてむかしのわけを。思ふもぬるゝ。我袖の。湊へかへるあだなみの。よる〳〵ごとに立ちいでゝ。ふりさけ見れば大原や。御室にちかき小鹽山。たゞすの森の木の間わけ。かよひ車の黄昏見れば。くるまの〳〵たそかれみれば。つゝむつらさと袂にあまる。わけを友禪ひだの腕もゝにすけさま命とほりし。其睦言もいつしかに。かはる淵瀬となげいた。海士の捨舟我ひとり、こがれ〳〵て行く水の。かげさへきよき鴨川や。やゝつれはて

ろうやれ。賤が家へ。……深草撿挍調。

さかき

天地と。久しかるべき秋津洲の。中に光りを天てらす。神の御國は千尋ある。竹のためしも色かへぬ。松の操もとり〴〵に。かぎりもしらぬ常世もの。おはきが中に千早振。神をなごむる榊葉の。香をかくばしみ神垣に。思ひをかけて八雲立。その八重垣を妻ごめに。さしもつくりしますら男と。おもひしものをあさましや。心ひとつを定めかね。ゆふつけ鳥のいつまでか。音にたてましと今更に。四手のかず〳〵取りつけて。榊のかげに身をかくしつる。

きりん

さりとては。まゝならぬこそ浮世なれ。おもき身にしも君ゆゑに。かゝるき出たちのかるわざよ。戀路の暗をたどり來る。娘心の一すぢに。わたる綱さへあるものを。ぬしのこゝろは。三本竹か四つ綱か。わけのしれぬが戀のまことよ。身ひとつを二俣竹に。むすぶ縁とおもひし事も。人の化けたるこんくわいに。だまされし身のうらめしや。心も髮も逆立の。いまさら何と道成寺。鐘の龍頭に手をかけて。七巻まきし鐘なきや。あらはれ出でし鐘樓堂。これぞ碁盤の曲ならん。されば南無

小ぎりしま。牡丹つゝじの色とほく。さつませんよの花ざかり。夏山かけてかをりくる。その花ぐるまあいらしく。いとくれなゐにとびいりまんよ。まがきつゝじの花の露。手にや結んで我袖に。くれゆく春をしばしとゞめん……佐山検校調

うきね

浮寝の床に事問ふは。枕にかゝる涙なり。せめては夢になりともと。まどろめば短夜に。山ほとゝぎす音づれて。はや夜があけた。しんぞつらいよの。こがるゝうき身のきえもせでさても命はながらへて。晝は終日なきくらし。夜は夜床にふししづむ。槇の戸を打つ村雨や。こずえにそよぐ松風や。ちぎりおかねどはかなやな。君が問ふかとおどろかされて。いとゞ涙に目がくれて。壁にそむける燈火の影かすかなる曉の鐘の音。つく〴〵と聞くからに。とかくかなはぬ世の中に。ふつと思はじ。とはおもへ。とは思へども。又すてがたき。過ぎしわかれに逢瀬といひし。言の葉をわすれまい。この世はさておき後の世も。のうさてさてな。あひみての後のこゝろにくらぶれば。かはど物をば思はじものを。昔戀しや今の身は。……朝妻檢校調。

いろか

たよ我顔かたち。かくは見すてそよしなやな。三尺袖を。年がよりたら何振に。しやうがいな。ふれ。やふれ古妻いとしわれふるづまをへ。えい〳〵。あとにみぞろの池波に。ひよ〳〵と鳴くは鶺鳥。小池にすむは鴛鴦。濱千鳥がちゝりんな。ちゝりんな。ちちりんちゝりちちん〳〵。ぢつとしてさてな。えりくりえんじよの。岩間〳〵をつたふ。足は千鳥足。にしは田の畔あぶない。あぶない〳〵。〳〵〳〵〳〵。あぶなうてならぬへ。細道あせみちを。くゞり〳〵〳〵て。くゞり〳〵〳〵て。松の嵐に。さつ〳〵と。たぎりて落つる鞍馬川。戀の淵瀬とたどれども。猶も思は丑の時。つきだす鐘ともろともに。貴船の社につきにけり。……

……小谷立静作。藤谷撿挍調。

つゝじ

さなきだに。春風ゆかし三吉野の。里にながるゝ櫻川。花とは見えじたに〴〵の。雪こそ見ゆれ紅しぼる。八重紫やこむらさき。ゆかりの水の吉野川。朧の月のひま〴〵に。せめて一本折いれの。花のなさけの其奥を。たづね〳〵て奈良坂や。このて柏の二おもて。とにかく物を思へとや。岩根の山の岩つゝじ。嵐の山の峰の高松。時雨にさへも。染まで幾年すごす身を。げに春ごとに咲きそむる。大霧嶋や

とすぎて今日とくれ。武藏の國なる。新吉原が泊じや。……西鶴作。小野川撿挍調。

わがみ

そなたとばかり難波江の。蘆の刈根のふしのまゝ。きのふと過ぎて今日と暮れ。着てしは輕き夏衣。三つのしらべにひきかへて。園の蚯蚓の連節きけば。秋まつ虫のしのびごゝ。轡はたおり鈴虫も。まだ手に入らぬ聲のあや。いとゞさびしき妻戸をたゝく。水鷄の鳥の音づれに。たつた一こゑほとゝぎす。すがたは月にしげく飛ぶ。軒の螢とたくわが身。……いづ新作。政島撿挍調。

つきみ

住吉難波たかさごの。尾上の月のあけぼのを。ながめて歸る人もあり。われはそれにはひきかへて。昔がたりの名にたちし。色の村田の中將の。うちでかよひし道のべの。沙利とる池の水かゞみ。片枝枯れたるさいかちの。やれ〳〵戀に。瘦せたかそちや異な姿。稲荷の岡に馬はあれども。君をおもへばのう手編笠。土手の松原たれゆゑの。ほんほかよふ。びつこ引き〳〵ゆくほどに。このもかのもの仲の丁。おふせ〳〵にかはらじな。しるもしらぬも秋の夜の。月まつほどの今宵しも。家々醉賞して欄干に。よるべ〳〵の契かな。あげやの燈火かずてりて。母屋にか

さだめなき。色香にうかれ國あまた。かたい枕も垢づく衣の。なりやつれたる身のゆくへ。懺悔に語りまうさん。そも〱江口神崎は。名のみ殘りて風俗なし。野上の里は艸まくら。朝妻舟は楫まくら。たれこがれけん跡しらず。つかひあげたる嶋原を。都の西に入る日かげ。うつる心やたきつけの。柴屋町には火もたてぬ。けはひかはりし辻君も。はる〲こゝに三越路や。鹽津海津に。どれ〲それ。あれ〱はりがうら。釣する海士のうけなれや。心ひとつを定めかね。つるがよねしゆのすひつけたばこ。きつくなづめば目があはぬ。目があはぬ目がまはる。女郎とちぎらぬ旅人には。夜着もかさいで。寺泊。おくたびれならねまるべいとて。あさゞのさけをしひざかや。四の五の辻を出雲崎。おなじ流れの酒田のひしやく。そこしんじつから。とけてちん〱ちぎりを。いくよかむすばん。いくよかむすばん常陸帶。かけまくもへ。水戸の藤川えだ川つゝじ。あすの夜あけはちりおりに。おさらばへ。これ近のうち。いとしけりやこそしとゝ打て。にくか打たりよか。なんでもこれはあいたいな。潮來出嶋にこんでこでまねく。まねく袂に文や玉章。げに楓橋の夜の市。とまり〲宿々の。窓にうたふ群女は。客をとゞめて夫とす。別れあれば待つ暮あり。品こそかはれ手弱女の。袖ふきかへす飛鳥風。昨日

西尾のそらに。入日なほ照る西のきよはしうい女郎。霜もあられもしんしこないて。嵐につよき柏崎。かをるくらべん東と京と。いづくはあれど陸奥の。ちかの㙮盛それにはかはり。こにしやまとが藻鹽垂れ。おりたつ田子のうらめしや。足もとわらく聲うはがれ。大門いさださゝずして茶のはしとみ垂殘し。たれじや羽織かづいてよねくどく。女郎まねくうけぎりよこぎりひとつがひ。笑止なるかならぬか。戀は中の町……知扇作。小野川撿挍調。

ねのび

千代をかさねし常盤の松は。猶も御代をば仰ぐなり。君が代は治る國や四つの海。岸うつ浪ものどかにて千歳をすぐる雛鶴がすぐなる枝に巣をくひてめぐみもふかき玉川の。流れにすめる我等まで。こゝろ浮木の龜あまた。萬代までも幾千代とげにをさまれる國かなと。君にひかるゝ松がえの。だちよるかげはいつまでも。老いてもくちぬ常盤木と誰かいひけん水垣の。ひさしき世々を祝ひこめ高き屋にのぼりて見れば煙たつ。民のかまどは賑ひて。をさまる門のめでたさよ。

きやり

さねし折鬚籠。薄がいだす銀月も。物ずきぶりて又をかし。晝のおましにいぎたなく。醉ひ伏すをとこ月しらず。行水がへり待ちうけて。白波をとこ立田山。しのぶ心のおやにくや。くもれど月をかこつらん。のとやにはこぶものしげく。まどほにわめる提灯も。今宵はなくてすぎよかし。くつわにくれのまりすぎて。やりてのやどの念佛講。二丁目あたりに清掻たえて。はつね三井寺うたふらん。月は照るやら曇るやら。身あがりくらき女郎の。あだめにかゝる流星。約束なしのうかれびと。友のうかれにうかれきて。どれでも〳〵。ふりよによばれし新造の。髪そこ〳〵に結ひなして。八聲にちかき揚屋いり。枕とるまもあけぬべし。あくびがちなる閨もあり。……秀松軒作。小野川撿挍調。

しぐれ

楢松の葉の落ちそめて。夕かげしるき待乳山の。しぐれ〳〵に鳴く鷗。こゑも氷るや干潟みち。衣紋坂こえて鐘のおと。いで其ころは神無月。くるわ〳〵ずまひは涙でくらす。野分つれなや吹きちらいたは。あつたら小萩小薄。花に醉ひ又もみぢには。さめてたどりし土手おろし。春にかはりて袖さむや。提燈くらくゆきかよふ見しりごしなるかすり唄。諸人のなづむいろちとせやま。雲はうす〳〵

は鹿の角。ちよこ〳〵打つてはけいびきかぢやてつこのしゆ。からりんころりん。ちん〳〵からりの槌のおと打つたる狸の腹つゞみ。正月は節分豆。大ぶりぶりにかきだま。七草なづなを。かきよせて。ほと〳〵たゝいた。いとしけりやこそしとゝ打て。にくか打たりよか。やれこれはの手がそれた。おひかけしめかけ聲をかけ。もとつなんよへ。されば僧正遍照の。名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花。われ落ちにきと人に語るな。おひかけ中の綱から。見ごとによふそろた。やれ先の綱をへ。えいや〳〵。屋敷でた時やうかれて出たが。いまは。いまは思の種となるよへ。おゝはちさま〳〵。はちさゝんまを見たら。まがきわたりを小唄ぶしよへ。とかく思ひの種となるよへ。おゝはちさま〳〵。はちささんまを見たら。とかく思ひのたねとなるよへ。……佐山撿挍調。

ひなぶり

戀の重荷のな島のうち。送り迎ひにかく駕の。たれであらうとしてこいな。棒鼻にくゝりつけたる提灯の。ひがらの約束して來たな。高いも低いも色のみちなへ。立てる立てんの息杖も。つきぬたのしみえいさつさ。さつさおせ〳〵夢の通路なへ。……芙木要助作。八百六伊八調。

うきたつは春の日の霞のうちの梅の花ひとへばかりが櫻木か八重もせんよも今がさかりよ。折りたや中の枝から見ごとによう咲いた。やれ袖のかをるへ。折れさ手折れさ。散らばかひあらじ。ものうきは秋の夜の君を松虫くつわむし。一夜ばかりはきり〴〵す。二夜も三夜も君はこはろぎ。おひかけ中の綱から。見ごとにようそろた。やれ先の綱をへ。えいや〳〵。引かば靡きやれの。皆さんまも御存じの。じがの白玉はな野に。かつら唐橋うす雲たなびく。あれからこれまで。えいや八橋さんまさら〳〵さつと太皷をたのんで。くぜきすまいた。松がえの太夫さんま。情は參州さかたの。まんよに小太夫。まさきに櫻木はつ花じや。宿屋入にはひねつてしなつて。笑つて歩んで。癖はなんにも難波じや。ないこそは道理なれ。京のぶらと。大阪のぶらと。お江戸のぶらと。三千人のぶらども。がよりあひ談合で。つくりたてたる子供たち。いかなとんてきばうの。有頂天のやぼすけなりとも。この君にはふん深くは。逢はうか逢ひますまひか。いやただ深くは逢ひいまいと。いふたら口說にあるまいか。あいのやのじが。合點かもとつなんよへ。たんだ打てや打て皷。太皷羯皷手拍子。碁双六にとびやくしやういよ。むしろ機に手ばつた。いよさま。よねを搗杵砧かるたにちよせいがこくい。そろりが鞭

ぎす鳴く音くらべんうき涙枕の草の露深く夢さへ心にまかせんとなはなつかしき移香の深きなさけの數かさなりていかに誓ひてむすびてし指の紙捻のしどもなやにくやにげなや柴の戸の風のかをりし花あやめそのいにしへのわけびとも名のみのこりし月の輪に庭の木賊のさゆるにも君まつほどの物うさをかこつかたなき閨もあり。……連川撿挍調。

さんかつ

常盤の松とちぎりしもあだな金ゆゑ身を書入の金のかはりに女房になれどせがみたてられ返事もならずいとしをとこと談合すればかよひなれにし二人が中も親にもれつゝ不首尾となりて金のさいかくなりにくければ思はざりにし身の耻辱しよせん浮世を捨草の露とさえなばうらみもせまいそなたばかりは万年までも金のかはりの男とそやとうらみがほにて立ち出でければさんかつとりつきのうなさけなやさきのをとこと添ふ心ならなんのかうした話をしましよわしが心を知らぬかなんぞのやうにつれない事をと涙をながす親のためとてよしなき手形書いてくやしや言譯たゝずひとりある子をふりすておいて死ぬる心をかあいと思うてしんだあとにて回向をたのむど。

かつらめ

雪にしたひ。雨にこがれて一えだの。梅を命の春さへも。浮世の夢とちりはてゝ。なんの事やら袖の露。またも此世に初ざくら。たま〳〵椿そひぶしの桂女もあるやらん。くめのさら山さら〳〵に。こちは浮氣でないものを。……歌木撿撿調。

あやづる

うきよとは。たがならはせしすね言葉。宵の妹脊は一重の帶か。肱をまくらにあやづるよ。蟬のなくねに尾花がまねく。わしやいやいなと駒下駄の。音はいくせのうき名にひゞく。そのかねごとも。おゝ肌しみ〴〵と。かあいとかけて。いとしと返事。をなご氣にして男氣の。むすぶ緣のうちかけさへも。脫ぎてながめん千代見草。……田中菜作。歌木撿撿調。

しまだい

ところ千代ませ島臺に。げに友白髮尉と姥。ときはのかげに。枝もさかゆる松と竹。鶴と龜とが舞ひあそぶ。よろづよろこぶことぶきに。げにものどけき春の空。

はざくら

つく〴〵と。思ふ夕べの葉櫻に。雨のおとせし淋しさの。うきを訪ひくるほとゝ

の年霜月七日つゆときえゆく夜あけの烏。かあい〳〵とよそごとに。宵の口說はみなあだしのゝ露の此身はおなじ夢。たはぶれあそべえ。

さんかつ（中の巻）

あとは二人がさしむかひ。たがひに語る睦言や。まことにひよつと言ひかはし。一日あはねば百日に。かつたかやもほろぶとや。このごろ絶えて文もこず。うちの首尾などわるいかと。あけくれ案じくど〳〵。思ひかさねし此つかへこれ見さんせと手を取れば。そこにおぢよさいが有るものか。そなたが案じてゐやるより苦になるおれが身になつてたもるがよい。これ幸ひと玉子酒。さいつさゝれつ盃の。おくそこもなき酔心。重荷もおりてどつかりと話のうちに高いびきゆすれど起せど分ちなく。三勝は目もあはず。くつたく酒に胸いたみ。薬のまんと紙入をあけて見ればこはいかに。こよひかぎりの書置あり。さんかつはと涙ぐみ。もはやこれが暇ごひ。死んでふたゝびたちかへり。ものいうた例はない。さりとてはのう半七さん。あのしら〳〵しい顔はいな。かくして死ぬるが心中か。どんなことでもかくすまい。知らせませうと言ひかはし。誓文たてしを忘れはせぬ。かくして死ぬればわしが身も今までは生きてはゐぬ覚悟。輪回に迷ふはた

さいた脇差ひきぬきければ。半七はつとおどろきて。よしやよしなき恨のことば。これも何ゆゑ身の貧からよ。ひがむ心をゆるしてたもれ。もはや國へもいなれぬ不首尾。そなた死にやらば一所に死なう。それは誠かうそではないぞ。さてもうれしやいとしき人と。共に消えなん事こそねがへ。はやう御座れと夜半のころに。夫婦たがひに。念珠をくりてなまいだ。念佛を道の力にて。ゆけばほどなく千日でらの。鐘のひゞきに夜は何時ぞ。八つでもあらうか。いつもおつうが目をわく時分。母よ〳〵とたづねて泣こが。死ぬる命は惜しからねども。さすが親子のわかれのきづな。切るに切られぬ事こそかなし。あとを見かへりあゆみもやらず。のう〳〵夜が明くるやらはや晨朝の回向のかね。あらありがたや。いざや最期を急ごというて。ぴやの東のさいたらばたけ。露よ時雨よ身を雨か。笠屋三勝ふくさを出だし。つまとつまとしつかとくゝる。をとこ涙をはらりと流し。さてはそなたを殺しておいて。逃げ走りもしようかと思うて。つまをくゝつておきやると見えた。さんかつ涙にくれながら。なんのそうした心でしましよぞいの。とても此世はえそはずとも。未來はいふにおよばず。こんどの〳〵。つゝとこんどの未來の世までも。夫婦とならん。それをこの世のなごりの言葉。すぎし亥

れかし。心をのせてわはふに。かぎりある身の。かぎりを知らで。かひもなき世を打ちなげき。なんの因果に娑婆にきて。末までそはるゝ身ではなし。月を見ばやとちぎりし人も。こよひ袖をやしぼるらん。……大石うき村松たんすい小野寺ぼくたん同作、岸野次郎三調。

きつねび

あだしこの身を煙となさば。せめてくるわの里ちかく。くるわの。くるわのせめて。せめてくるわのさとちかく。なにをおもひにこがれてもゆる。のべの狐火さよふけて。きつねび。きつねび野邊の。野邊のきつねび小夜ふけて。………岸野次郎三調。

かげろふ

その濱荻は冬がれて。みやこの空に八雲たつ。ふたり柳の玉ゆらの。花によそめの涙の色は。宵の顔みせくれなゐの。もすそあらそふ燈火の。影にふけゆくむつごとは。いとしかわいとしめてねて。すゑ白川の水きよみ。ほんに世上は耳なしの。山のくちなし人ならば。はだにおぼえの名もたゝじ。……荒木某作。歌木撿校調。

ものかは

れゆゑぞ。あの義理しらずうそつきと。うらむも泣くも露の身の。おき所なき白玉の。あはれ消えなん所存なり。

あさって

さだめなき。嵐もそひて同じ枝に。花かと霜のおきてもひとり。鳥の鳴くころ春には似ても。おちばいろ〳〵落葉がなかに。すいた銀杏にとりあげ髮の。いへば姿も大阪といふ。在所うまれの梅のはな。

こゝぶき

あけわたる。空のけしきもうら〳〵かに。あそぶ糸遊などりの雪と。なぞを霞にこめてや春の。風になびける靑柳すがた。みどりの眉か。朝寢の髮か。すいた枝ぶり慕ひてかをる。すかいで是が梅の花。やどるうぐひす氣の合うた同士。かはらで共に祝ふことぶき……鐵重作。政島菊永兩撿挍調。

きつねび (前唄)

月はつれなや。はや曉の鐘のころ。さらば〳〵の。聲もたえゆく小田の原。おくりかへせば。比叡のやまかせ身にしみて。菜種の花のうらがれ。今朝のわかれに。月をたもとに殘いて。あるかなきかの。首尾を思ふが命さ。戀の小車。まはる男のあ

たまづさ

まことに文は閨のとも。いよゝ御見と書いたるは。ほだしのたねか花ずゝき。はんに誓文いとしさに。いくよの夢をむすびぶみ。かたさまゐる梅よりと。おもひまゐらせ候べくの。わけのさかづき色見えて。わけていづみのおもはくは。たゞわひましてく。又の御見をまつかしく。……小野川撿挍調

ゆふぐれ

嵯峨のあたりにあらそふ秋のかずく。淺茅生になく。君こほろぎくく。すゞむし松虫はたおり。くれなゐくゝる小牡鹿。雲わけて雁がね。琴柱におつる荻の葉。穗にでゝまねく花ずゝき。すてがたの夕ぐれ。……深川撿挍調。

同替唄

須磨のうらわに。かよふ千鳥のこゑく。夜もすがら鳴く。そてかけじやく。よそに聞くさへうるさや仇波。枕もしらぬ獨寢。くみわけて訪へかし。汐干ぬ石のいつしか。それともわかでこの身は。捨小舟こがるゝ。

鬢はり

たわみては。露おもげなる糸ずゝき。すぐな心をたれゆゑに。胸のほむらの火に

逢ふときは。かたりつくすと思へども。かず〳〵のこる言の葉を。思はでつらき鐘のこゑ〴〵。きこゆる。それのみなるかくだ鷄の。まだきに鳴きて夜もあけば。狐にはめなどかこちつゝ。おふさきるさのもの思ひ。とかく逢瀬のなみだ川。袖のしがらみせきとめん。なほも思ひはまさりぐさ。葉ずゑにおける露の身が。もろき命は知らねども。またいつ〳〵と言ひかはす。言葉のうちにきぬ〴〵の。わかれををしむ東窓。わけてくやしき玉手箱。

こすのこ

うきくさは。思案のほかの誘引ふ水。戀がうき世か浮世が戀か。ちよと聞きたい松のかぜ。問へど答へず山ほとゝぎす。月やはものゝやるせなき。癪にうれしき男のちから。じつと手に手をなんにもいはず。二人してつる蚊帳のひも。…………

歌妓首のぶ作。峰崎勾當調。

たまごこ

さよなかと夜はふけぬらし秋の夜の。月かたむきて風さむみ。枕におきし玉琴の二十あまり五つの糸のつら〳〵に。初雁の鳴いてわたれり。まこと初雁の客人ぞきたれる。さよなかと更けぬる夜半に

ほうらい

明けまして。よい初春やせうはくしゆ。かの浦嶋がおとたれて。八千代をいはふ蓬萊の松の位をうつしてん。竹の園生も遠からぬ。雲井をこゝに土器の。土も木も。我大君のお流れを。いたゞきますと手に早う。まはりかけたる酒きげん。うそじやないかよ穂俵。柑子てうきな立花の。色香になづけかしますと。熨斗の附けたいどこやらを。とこからとてよろこんぶ。おの餅花の柳さへ。それ春風が吹くわいなだい〳〵かさね伊勢海老や。齡の腰のかゞむまで。かはりたまふなかはらじと。ながき縁を搗栗や。ふることながら縁もよし。よしむつでとのいつまでかつきせぬ眞砂かぎりなく。夜はほの〴〵と日もおしも。はや山草に出でにけり。……松卯作。廣橋勾當、城菊同調。

むらさめ

むらさめ〳〵晴間をしのぐ。人目づゝみの草葉のはたる。胸にたく火のたぐへてもゆる。われは消えなん消えなんわれは。われは消えなんいつかへ。……倉橋撿校調。

同替唄

かけてうらみよがしに幾筋か、とけぬ思ひの黑髮ながら、そつとすくうて張弓さして。月のいるさの山のはに。むかふ鏡の宵化粧。

あきぞら

月のむかしか。むかしの月か。ゆかしがられてわだづみの。ゆたのたゆたの別れもうきに。霧立ちわたる秋空。あゝしんきの朝あらし。花はかみにもおさるゝものを。雁はかはらず來るものを。……秋蕋木作歌木撿挍調

あかつき

手枕に。夢ばかりなる曉に。かなたこなたに鳴くうぐひすや。宵の秋風はげしき聲に。もしや散りにし花とはん。……峰崎勾當調。

かんきく

年のうちに。春や來にけん玉つばき。折知りがほの。梅の花びし香にめでゝ。つらしにくしも來しかたの。ゆくへはいつそいつまでも。ちぎりは盡きじ神かけて。引くや梓の。弓張月の夕げはひ。さとの酒宴人にさへ。いはぬ色なる寒菊の。さびた葉ささは誰ゆゑぞ。君とそひねの小夜あらし。つれてよするや。汐の干潟の眞砂地を。今はよそめに三の濱。……藤永撿挍調。

春の夜のゆめおどろかすくだかけの。そのきぬ〴〵の物おもひ。又あふことのいつかはと。深き心のかこちぐさ。根引にせんといひかはす。身は捨草のすてられて。ながれし此身は淀川の。なにをたよりに浮草の。波にゆらるゝうたかたの。あはぬは君がなさけなや。ねたましや。それは若草身をうらみぐさ。あきもあかれもせぬなかなれど。後にのこりてつたなき此身。せめてあはれと思へかし。おくりかへせばさびしや閨も。いまは枕に。香ばかりのこるうきおもひ。なほうらめしき鐘のこゑ。下ゆく水のおもひ川。そこのこゝろは白糸の。みだれて物を。おもへとや。鳥がうたへばもいのとおしやる。さあのほんゑ。月夜がらすめはいつもなくよしよんがへ。暫とまりてくれよかし。……澤村長十郎岩井左源太作。山下龜之丞調

まんざい

徳若に御萬歳と。御代もさかえましまず。愛敬ありける新玉の。年たちかへる朝より水もわかやぎ。木の芽もさきさかえけるは。まことにめでたうさふらひける。京の司は關白どの。おりゐのみかど。ひのもと内裏。王は十善神は九せん。よろづやす〳〵。うらやすがこのもとに。正月三日寅の一點に。あれます若恵比壽。あ

うらかせ〳〵夜さむのころに。袂くちなん心の月を。かぞへ〳〵て降りくるなみだ。袖は朽ちなん朽ちなんたもと。袂くちなんわがなみだ。

はなのか

ながゝれと。何おもひけん世の中のうきを見するは命なり。おもへば夢の世を。しらでかひなくすむ月の。うつゝの暗に見る花の。おぼろ〳〵と見もわかぬ。おけてちりなん。暮れてちりなん。ちればぞ花の色も香も。いづれはかなき春かぜ。吹かぬそのまの一さかり。をしやしばしの花のえん。なごりを雲に吹きとぢよ。とめてかひなき花の香を。袖につゝめど小笹のあられ。こぼれやすさよ我なみだ。ともに鳴きつれ歸る雁。よそに見なして思ひこそやれ。などや心のなかるらん。……坂田兵四郎調。

うづみひ

わかれこそ。城の外つぐ寒山寺。唐も難波もうききぬ〳〵を。なんのがつたるをとこづら。つらいつとめのよそにのみ。いやさえたはのさやすのと。月かなんぞの獨ごと。よせておくれと伏籠をば。炬燵にかこつ埋火。……戸川勾當調。

よごがは

軒毎に。色をかざるや三つの朝。すげなき松も盃がほと見えて。風に袖ふるさとことば。かわいらしさと花の香を。とうて見たいは八重がすみ。思ひを包むあけぼのに。心のなぞをかけて見る。こぬ夜はひとり思ひねの。こがるゝ胸のふくわかし。神のとしこし末ながゝれと。七の社の七草を。はやしそやされ唐鳥の。わたらぬ先にしばしがほども。たつた一言のちにと。いうてわかるゝ宵ゑびす。きみが約束たがへずにまゐりましたと後から。脊中たゝいてたはむれも。酒のきげんの千代萬。かぎりも戀もうちとけて。なほ奥ふかく契りける。鶴山勾當調。

いさゝめ

つくばねの。峰よりおつるみなの川。戀ぞつもりて淵となりぬる。つもりてこひぞ。こひぞつもりて淵となりぬる。……今川勾當調。

ほゝづき

秋風に。吹かるゝ身ともなりやせん。きえもえやらでなまなかに。燈籠草の名にしおふ。ゆふべ〱にうたがはれ。いひわけのまもうつせみの。單のきぬを脱ぎすてゝ。やぶれかぶれのとてのうち。せりふの種をくりだして。いつそ言葉は夏もみぢ。おからむ顔の薄皮や。水ももらさぬ實のなかを。世の口のはにかゝるも

きなひ神といはゝれ玉うて。あきなひ繁昌と守らせ玉ふは。まことにめでたうさふらひける。やしよめ〳〵。京の町のやしよめ。賣りたるものはなに〳〵。大鯛小だひ鰤の大うを。あはびさゞい。はまぐり〳〵。はまぐり〳〵。はまぐりめさいなと。賣りたるものはやしよめ。そこをばうちすぎ。そばのたな見たれば。金襴緞子。緋沙綾緋緒縮緬。繻子緋じゆす。縞じゆす繻珍。いろ〳〵結構に。かざりたてゝさふらひしが。まち〳〵の小娘や。お年のよつたる姥たちまで。うりかふありさまはげにもをさまる御代なりときなり惠方の御藏にずつしり〳〵。ずし〳〵〳〵。寶もをさまる。門には門松せどには脊戸松。そつちもこつちも。幾年の御祝と。御代ぞめでたき。……城志賀調。

だいぶつ

大佛の。妹脊は京と奈良ざかや。兒手柏の二おもて。窓から窓の垣間見に。さゝやく聲もこたまして。聞いてゐるとも耳塚に。なんの遠慮も太敷柱。たがひに手に手。のばしあはして。穴を忍路くゞらばくゞれ。烏鳥はものかは鈎鐘さへも。つかぬ夜あけてまだ蒲團きて。ねたるすがたや東山。……室新作峰崎勾當調。

まさづき

旅立に。日のよしあしを撰ばねは。落人の身の常なれや。女夫が世話に薄雪姫。足はむかふへと歩めども。こゝろはもとの京にゐる。舅の言葉もちひずば。縁を切るぞとおどされて父上の御いかり母様のおなげき。しらぬかち路を道しるべ。右よ左よ妻平が。半ちや合羽も苦勞せし。在所の妹いもと聟に。かゝる身のうへたのまんに否は言はじや去りながら。三年あまりは音づれも。たへまをさしてゆく道の。心づかひぞことわりなる。かゝらざりせば何として。いつかはこゝに郡山。日はくるれども町なれば。一夜ながらもとまられず。小泉とても同じこと。宿かろよりもさいはひに。衆生を救ふ辻堂の。地藏格子をおしあけて。やどりを假の蓐には。うすき合羽も妻平が。わつき忠義の夜のもの。女夫が左右にとのゐして。寝まいとすれど氣くたびれ。ゆめや人目を守るらん。神ならぬ身は是非もなや。かくぞとも。しらで園部の左衞門は。つもるおもひの大和路に。いづる月さへおぼろにて。身のいひわけも晴れやらぬ。かつら男の妻平がしるべをもとめよるならば。都のつてもたづねんと。おもふ思ひはますらをが。やたけごゝろも恩愛に。まよふ夜道のはかどらず。今はあだなる小泉の。こひしき人は辻堂に。おりともしらでゆきすぐる。本意なさいはんかたもなし。姫は夢さめ走りいで。左

つらやずいな手にもまれ〳〵て。末は根引のさとばなれ。

すりばち

海山を。こえて此世にすみなれて。比翼連理とちぎりしなかも。けぶりを立つる賤の女が。こゝろ〳〵にあはぬ日も。あふ日もよるはひとりねの。くれををしみて松山かづら。ひるのみくらす里もがな……里石作。油屋茂作調。

同替唄

わくらはに。問ふ人あらば須磨のうら。その行平のいにしへを。たづねて今は磯馴松。こゝろ〳〵に姉妹の。賤の手わざのやさしくも。松にふりくる村々時雨。袖うちはらふ事もがな。

たはむれ

春はたゞきのふもけふも定めなく。老もわかきもたはむるゝ。高根の雪と見る花に。こゝろをうつすやるせなさ。あゝしんき。言の葉ぐさも縁となり。手に手をむすぶ誰袖の。その移香にさそはれて。月もおぼろに踏みまよふ。花のおもかげ夢かとも。そこはかとなく暮れてゆく。春のわかれやにくからん。

うすゆき

てらし。なんじやいな。うたふ唱歌も身にしみて。うすゆき涙にくれながら。過ぎしわふ夜のむつごとに。二世や三世はおろかな事よ。ずつと今度のさきの世までも。かならずやいのといふたれば。うそじやないかやほんにかと。のたまふ時のうれしさを。よろこぶ間もなう二人がうき名。立田の河をうちわたり。裾をからげて抱へ帯。むすぶとすれどしやらどけの。ばつとも裾をわやくな風に。衣もんりゝしくぬぎかけし。片岡山のかた／＼におとや先なるうき思ひ。しばしも袖にひるめなく。なみだにつゞく町も過ぎ。やがて當麻につきにけり。

なでしこ

朝顔のさくとそのまゝ隙ゆく駒ののりもゆるしかむらさきの。雲のそなたはなつかしや。女郎花ならおちやさんすまい。わたしはもとより撫子の。ともにさかえをいのりし人は。そらに咲いても花はものいはぬ。いとしねじめのむしどころきこえませぬと神さんの。せなかたゝいて夜もすがら。…泉明作。戸川勾當調。

かごまつ

君が代はつくや手鞠の音もがなはやす拍子の若菜艸。につこり笑顔や門にまつ。ものもどうれ。よき春でござります。福や徳若。でまんざい。まてとにめでたき

衞門さまはいづくにと。よべをさけべをゆきすぎて。それと答へも泣くこゝろに。夫婦はおどろき抱きとめ。背なでさすりいたはれば。やう〳〵にこゝろづき。さては夢にてありけるか。どころは何處としらねども。園部さまの仰には。明日はおはんとのたまひしを。うつゝのやうに思ひしぞや。ゆめに僞りなきならば。はやう逢ひたい〳〵と。かこち涙に妻平も。ともにしをるゝ氣をとりなほし。必ずなげきたまふなよ。やがて逢はせまゐらせん。ひまどるうちに夜明のからす。かあい殿御に逢ひたい思ひ。いとしい姫に逢ひたい思ひ。思ひはおなじ道筋を。一里へだてゝゆきこす園部。此うき旅を世に出でゝ。大和めぐりといふならば。ふるき名所もたづねんに。今は都へつてもがな。ふたりの親たち姫のこと。あゝ尋ねたや聞きたやと。たちどまりてはあと見かへり。足もしどろにゆきなやむ。なみだにつゞく町もすぎ。やがて當麼へつきにけり。……峰崎勾當調。

同　奥

(あしもしどろにゆきなやむよりつゞく)里の子どもがてゑ〴〵に。文は妹脊の橋とはいへど。くせつのはしになる鐘は。なん時じや。明六つ。えゝにくてらしなんじやいな。月は忍ぶにつらいといへど。しめてぬる夜はおどろかず。たれさんじや。鳥の聲はにく

の幾世かさねし情のすゑは。うらみこがるゝ身は戀ごろもせめて一夜はきても見よかしなたとひ逢はずと文さへ見れば文はいもせのふみは妹脊の橋となる。花は折りたし梢はたかし。心づくしのこゝろづくしの身は一つ。かよふ嵐の夜もすがら……杉山勘左作。柴崎勘六調。

まんぎく

宵は待ちわびわくせきと。ふけて見れどもまだ酒ごとの間は愛相のものよと思ひ。無理もいうたり言わけしたり。ほんに心のやるせがなうて。ねても丸寝はひとへがよいに。ふたへ三重帶とくにもしんき。戀といふ字を言葉の糸で、むすんでその下でゝろ。くれにこひとは戀慕とかへす。言葉はかりにもいやよとても此身はまゝならぬ。……佐野川萬菊作。永島庄左衛門調。

ふところ

やまぶきや。傾城に子はありながら。子は傾城にありながら。いはぬ色なり淵とも瀬とも網代木や問へどこたへも底ふかき。井出のしがらみせきとめかねて。ほんにつれなき春の雨。みの一つだにさだめなき。人も小島の夕がすみ。………
井上巴洞作。猷木撿校調。

千代の春。……村住勾當調。

こりおひ

君がすむ。あたりの草にやどしても。見せばや袖にあまる白露。晩稲の田をも刈りしほに。色づく秋の村鳥を。麻生の浦ぶねこぎつれて。あれ〳〵見よやよその舟にも。打つ鼓〳〵。しどろに聲たてゝ。日を暮し夜をあかし。思ひみだるゝ我心。そらに鳴子のむらすゞめ。稲葉の雲とたちさりて。ゆくへも知らぬ身のほどを。あはれとさへもいふ人の。なみだの數そへて。いやしきわざを忍びねに。笛とつゞみの聲もろともに。追うつ追はれつ幾たびか。鳥おひ舟の浮しづみ……南枝作。

みちづれ

どこへじやへ。わしは丹波のさゝやまへ。わしもつれてゆかしやんせ。女のみちづれいなぬもの。はてどうよくな和尚さん。そんなら來いと手をひいて。梅田づゝみを眞直に。ゆけばほどなく丹波なる。さゝやまにこそつきにけれ。……近松東南作調。

きぬ〴〵

きぬ〴〵に。明の睦言今さらに。うきな別れの袖のうみ。などしまぬ昔ましじやも

しくまたおりきせて、たきていなんせな。あすの夜もあるに。そんな別れのそのあとさへも。まゝのかはでもせはかはれども。花ぞむかしの都のたつみ。今朝のねざめにさめては路次の。しはせのおとの呼子鳥。……二斗庵作。玉岡、豊賀兩撿挍調。

かさゝぎ

あさがはの。虫にくはるゝ花の運。それさへあるに秋きぬと。目には見えねど心のそよぎ。いつそ世界がみな天ならば。今にそはれぬ七夕も。久しいものとめでたかろ。しろがねの河も妹脊の中に。おつる花火も空はどこへたく。さりとてはかさゝぎの。むれてせはせしそのあまり舟入橋までわたしなば。また山崎へ星くだり。……戸川勾當調。

あやぎぬ

鶯も。都の春に合竹と。氣は淀川へのぼりぶね。さゝへられたる北かぜに。身はまゝならぬ丸太ぶね。岸の柳にひきとめられて。あゆみならはぬ陸路をも。のぼりつもどりいくたびか。一夜を明す八軒家。ざこねをおこす網嶋の。つぐる烏か寒山寺。つきぬ話のたねとなりけん。……藤谷勾當調。

やまうば

あいぜん

ばけものゝ。手を離るれば枕こぶ。雲井のそらも山中も。子をしこむ姉でゝろ。二つぬはせし儒珍のまくら。一つは君へ揚羽の蝶。笑ふ其間を。來年へ。のばせば叶ふ戀もあり。一つは君へ揚羽の蝶と。わらふそのまをらいねんへ。のばせば叶ふ戀もあり。鬼となおぼし玉ひそ。……雨鳳作。歌撿挍調。

おもひね

かぎりある身のかぎりを知らで。かひもなき世を打ちなげき。なんの因果に娑婆にきて。生きてそはるゝ身ではなし。とはうらみ。かくはいふものおもひねの。たゞすの水のおゝそれよ。戀せじものと木綿だすき。かけぬ日もなき神いのり。受けずと神のこゝろまかせと捨ことば。うはきもじつもよそごとに。つまつじあはぬ氣がねより。例の合の手かさゝぎの橋。かよふ七夜のしんき星。……升三作。藤谷勾當調。

くちきり

白雪の。はつねは木々にありやせん。色のなまりは見るめのくせか。さればそのことい まさらに。花のとがぞと知るは初瀬よ。まだも吉野の古さと寒く。衣かた

すぐに。讃佛乘の因ぞかし。あら御なごりをしや。暇まうして歸る山の。山はもと山。水はもと水。塵泥つもつて山姥となる。春は花さき紅葉も色こく。夏かと思へば雪もふりて。四季をり〳〵を目のまへに。万木千草も一時に花さけり。おもしろや〳〵。鬼女がありさま。見るや〳〵と峰にかけり。谷にひゞきて今までこゝに。あるよと見えしが。山また山に山めぐり。山また山に山めぐりして行方もしらずなりにけり。……紀海音作。澤野九郎兵衞調。

しらいこ

いつはりのなき世の里の四つ門に。泣いて別れて心もすまず。煙草のんでも煙管より喉がとほらぬ薄けぶり。よそへなびくもみんなたれゆゑ。けふは東の人の月。あすはつくしの人の花。あゝさてうたての娑婆世界。おもうて見さんせ白の。むかしがまじやなまなかに。そめてしんくの糸のむすぼゝれいまくやし。はしごあげやのわかれざか。……茨木屋幸齋作。山本嘉市、若村藤四郎調。

まはりぎ

月はとがなやあの水底の。海松和布刈とのおほせにまかせ。あぢなところに氣がついた。露のなさけや朝の野邊は。たれをつれねに亂るゝ芒。あぢなところに

山のはに。心もしらでゆく月は。うはの空にて影やたえなん。見しもきゝしも花ごゝろ。色をも香をもすてざりし。ふたりそひねの長まくら。こちよれ枕。身にそひそめし移香の。にくうはないもの。そちの心がかはらねば。こちの木枕ひとすぢに。これこゝに疊枕や文まくら。口にまかせて塗まくら。おとやさきなる言葉の端を。くゝりまくらのない人さんが。縁か因果かかあいらし。そなたおもやこそ。四つの太鼓を合圖にくるに。よひは何くに隠れて拔けて。鐘の鳴る時いまさたか顔で。ようしると思はんせ。にくいしかたと思へども。かほ見りやいとし。ほんに浮世がまゝならば。うそつく男が中よかろ。うらみがちなる神ほとけ。待宵は。三味線ひいてしんきぶし。泣いて別れしきぬぐの。袖よ袂ようらみわび。すゑはどうなる事じややら。よいやさ〳〵。こつちにさはりのないみさを。たゞ一すぢに糸まきの。しめくゝりせし合の手も。逢ふ時ばかりひきよせて。よいやさ〳〵。いとしかあいもみな嘘の皮。ばちあたれとは誓ひてし。よいやさ〳〵。びんとすねては見すれども。ついあやまつて張よわき。なぜ女子にはうまれたぞ。よいやさ〳〵。よしや世の中いたづらに。山めぐり。一樹の蔭や一河のながれ。みなこれ他生の縁ぞかし。まして我名を夕月の。浮世をわたる一節も。狂言綺語の道

はるさめもよけれど花を碎かんす。戀なればこそ。女子におやまる男山。戀なればこそ。女子におやまる男やま。それが春野の糸柳。……神原賴母作。紙屋永三調。

くろかみ

黑髮の。むすぼゝれたる思ひをば。とけて寢た夜の枕こそ。ひとり寢る夜はあだ枕。袖は片しくつまじやというて。ぐちな女子の心はしらず。しんと更けたる鐘のこゑ。ゆふべの夢の今朝さめて。ゆかしなつかしやるせなや。つもると知らで積る白雪。……繼出市十郎調。

まつかぜ

なつかしや。行平の中納言。三年はこゝに須磨のうら。都へのぼりたまひしが。このほどの形見とて。おん立烏帽子狩衣を。のこしおきたまへども。これを見るたびに。いやましの思草。葉末にむすぶ露のまも。わすられぱこそあぢきなや。かたみこそ。今はあだなれこれなくは。わするゝひまもありなんと。よみしも理りや。なほ思ひこそ深けれ。みだれ髮。亂れ心や狂ふらん。われが姿ははづかしや。髮は荊をいたゝきて。日蔭をまちし夕がほの。蔓にはなれし破れ車。よしや思ひはいとしさの。つきそひめぐる小車の。にくかれとは神かけて。おもはぬつまをはな

氣がついた。

そへぐし

花をしむ今年の寒さ裾におく。ものも若草いろそふ今日の舟はあゝ心にまかせると。おきなか川のかあいとぢきにぢきにかあいと。いはで添櫛そへかゝる。……山田屋平助作。外屋三郎兵衞調。

かやりび

筆のさやたいて待つ夜の蚊遣火に。むつまし中の言の葉に。我は思に身をこがすむねは烟の富士なれや。袖は涙の淸見がた。うすきちぎりに淺はかき。硯の海のよるべさへ。なんとしがらむ緣の綱。……戀出市十郎調。

錦機空

その春のなごりの霜をふりかへて。置くといふなる白露のさゆるひかりやのう月影に帶もひとへの立待すがた。見つゝふりにし枕のとめき。いたうこがるゝ思ひの種の。ゆかりを繡の檜扇に。せめて朝顏やうつしみん。……………………李鱗作。豊賀撿挍調。

はるさめ

しらゆき

花は散りても春はさくゆきてかへらぬ道もなしまよふ戀路のむごやつらや道慾やようも見すてゝ其かなしさをいまぞ語らん涙川いとし男のその言の葉にかあい〳〵と僞言をまことゝ思ひわしや一すぢにつらいつとめもそれはその粗略にならでくるわはなれてつみなき花をいつか〳〵ときのせくこともおゝ皆あだ花とうつろふ此身いまさく花に目がくれてようは見捨てし心のにくさまゝにならぬもさりとは浮世うしと見し世の戀しとは見しよのうしとうしと見しよのこひしとはわが身のうへに白雪のこるつもる思ひは戀の山

いざはぎ

柳はみどり花はくれなゐ中のよいのが當世すがたつとめもよそになる浮世北へゆく雁南へかへるほんにほんにまことかいつはりかしよんがへいつはりならぬよしやよしひのかみの神の緣の末かけて

はぎのさ

秋萩の花さきにけり高さごの尾上の鹿は今や鳴くたゞ散りやすきもみぢ葉

ちやる。心のうちこそはかなけれ。さはさりながら一念の。嗔恚となつて。思ひ知らずや。思ひしれ。うらめしの心やな。いまさら何とのたまふとも。そなたは忘れじ松風や〳〵。たちわかれ。いなばの山の峰におふる。まつとしきかば歸りこん。あらたのもしの御歌や。それはいなばの遠山松。これはなつかし君こゝに。須磨の浦わの松のゆきひら。たちかへりこば我も木陰に。いざたちよりて磯馴松の。なつかしや。松にふきくる風も狂じて。すまの。浦波どう〳〵。どう〳〵どつとはげしき夜すがら。妄執の。雲にまぎれて失せにけり。……佐渡鳥傳八作。岸野次郎三調。

あらたま

ことぶきを。いく千代かけて。祝ひまゐらすあらたまづさの。筆にあゆみのおもはゆさ。まばゆき日影のどかなる。わが君が代ぞめでたき。……五百作。大和屋彦三郎調。

ひとりね

色見えで。うつり香おはき世の中に。人目しのぶの戀の山。おもひもうしやさりとては。ひとり寢られぬ床のうち。ともし火きえて我姿。見えぬ寢覺の夜もすがら。いつそ明けなばあけよかし。……綱代屋長左衛門作調。

ん立たぬぞへおゝしんき。それで寝もせで迷ひまよふ、人のこゝろと川の瀬は。
さだめなや、春の山路はおもしろや。

むつのを

下露の萩は染めたりそめられて。おくは露やら扇やら。おもしろいことうき事のうき世がらんす一年の。たちしや烏帽子。この面影のよう匂ふ。伽羅や紅塵とくはつけ。雲井でもないなんたらよりも。おつる柴舟のぼり馬。仕合よしの花の宴。……二斗庵作。松本撿挍調。

うそがへ

いやかおうかは不知火の。心づくしの神さまも鷽をまことに替へさんす。ほんうそがへ。おゝうれし。……四端道人作。

たまがは

やましろの。井出や見ましと駒とめて。なほ水かはん山吹の。花の露そふ春もくれ、夏きにけらし見わたせば。波のしがらみ掛けてげり。卯の花咲ける津の國の。里に月日を送るまに。いつしか秋に近江なる。野路には人の明日もこん。今をさかりの萩みえて。色なる波にやどりにし。月のみそらの冬ふかみ。雪げもよほ

を。風にまかせて見るよりも。はかなきものは命なり。つひにゆく道かねては聞きし。きのふけふとは思はざり。朝露きえし世の中も。御法の山に獨ゆくらん……

……泉屋さゝ作。藤永撿挍調。

むすぶ手

汲みて知れ。身にしむ秋の風にはあらで。遠ざかりゆく難波潟。人はわしともいふならめ。われもよしとは思はねど。うき世の義理は是非もなや。わが身ひとつはもとの身の。春にもならば梅が香の。やみにもかよふ袖の露。いとゞ思ひやまさるらん。……首のぶ作。藤永撿挍調。

はるごま

目出たや〳〵。春のはじめの春駒なんど。夢に見てさへよいとや申す。〳〵花のやさかりのやたてくらべ。品よき風を太鼓の拍子にな。うちつれひきつれ。春の小町のよそほひなんども。夢に見てさへよいとやまうす〳〵。おゝそれよ〳〵さ。筆にばかりを文とはよまぬ。ことばの返事がよいとや申す。おゝそれよ〳〵さ。九十九夜くよくどかば落ちよ。情ないぞやあたどうよくな。どうぞ暫しは靡かんせ。眞實誓文でのう。ござんすかまあうれし。せんどだまされたからは。一ぶ

ればまた千夜。それ〳〵それじやそれがまことのさ。ほんに浮世がまゝならば。何をうらみんよしなしごとを。桔梗かるかや女郎花。われは戀路に名は立ちながら。ひとり丸寢のながき夜に。おもしろや千草にすだく虫のねの。機おる音は。きりはたりちやう。きりはたりちやう。つゞりさせてふ蜩きり〴〵す。いろ〳〵の色音のなかに。わきてわがしのぶ松虫の聲。りん〳〵りんとして。夜の聲めい〳〵たり。すはや難波の鐘もあけがたの。あさまになりぬべし。さらばよ友人なごりの袖を。まねく尾花のほのかに見えしあとたえて草ばう〳〵たる阿部野の塚に。虫のねばかりやのこるらん。虫のねばかりやのこるらん。……

……藤尾勾當調。

ざんげつ

磯邊の松に葉がくれて。沖のかたへと入る月の。ひかりや夢の世をはやう。さめて眞如のあきらけき。月のみやこに住むやらん。今は傳だにおぼろ夜の。月日ばかりはめぐりきて。……峰崎勾當調。

ゆふぞら

筆のさや。たいて脊子まつ蚊遣火の。うはのそらにや立ちのぼる。水にかずかく

すゞされば。汐風こして陸奥の。野田に千鳥の聲さびし。ゆかし名たゝる武藏野に。さらす。さらす調布さら〳〵に。むかしの人の戀しさも。いまはたそひて紀の國の。氣の毒なるは忘れても。汲みやしつらん旅びとの。高野のおくの水までも。名にながれたる六つの玉河。……穗積頼母作。國山勾當調。

みつのを

幾年か。あだにしらべし三の緒の。いとしかあいと根じめの口說。のくののかぬと。すねたせりふは心の手ごと。あいそづかしは言はぬが花よ。花もこの身も。いまや世にふるながめせぬまに。おいそれよ。いつそ五つの湖に。掉さしとめん海士小舟。……ひら善作。

むしのね

思ひにや。こがれてすだく虫のこゑ〴〵小夜ふけて。いとゞさびしき野菊にひとりみちは白菊たどりてこゝに。たれを松虫なきさ面影を。したふ心のほにあらはれて荻よ薄よ。ねみだれ髮の。とけてこぼるゝ淚の露の。かゝる思ひをいつさて忘りよ。とかく輪回のつたなき此身。はるゝまもなき胸の暗。雨のふる夜もふらぬよも。かよひ車の夜ごとにくれど。あうてもどれば一夜か千夜。おはでもど

雨作峰崎勾當調。

さごろも

ひとり思を枕にかたりせめてたのみの夢さへも。麻の狹衣うちさえて。いとゞねられぬ秋の夜の。ふけて砧のおとかと聞けば。月ぞ知らする我なみだ。かたしく袖のちゞにかなしくながめしに。我身の秋は。さつと妻戸の時雨はいやよ。袖のなみだの。露のみだれがみ。いふにいはれぬ我おもひ。……市川撿挍調。

せうくん

咲けばちる。ならひといへどうきはまた。たぐひ嵐の風だにも。ひかりのどけき九重の。春に色香をあらそひて。花のおもかげいつしかに。鄙の旅路にやつれはてしをるゝ袖に白露の。かゝる姿を水茎に。かねてやしりて寫しけん。手馴の琵琶の音にたてゝ。かきならしつつなげくにぞ。今はかひなき四つの糸。……………

宇野部調。

いつきう

夢かよふ。道さへたえぬ呉竹の。伏見の里の雪の下折とよみしも風雅の道ぞかしげに世の中は割竹の。わりだけのさゝらなれば。夢の浮橋もたえぬべし。千秋

枕のしたは戀ぞつもりて今日の瀨に。身はうきくさのねいるまもなき。あゝまゝならぬこそまゝならね。……宇野都調。

きさらぎ

かざしゆく。道ゆき人の袂まで櫻ににほふ二月のそら。わかぬながめは夕ぐれ。つれかへる鐘のね。……繼橋勾當調。

なゝくさ

天皇の。わが代もつきじ石川や。瀨見の小河のたえじとおもへば。〳〵。おとすめる。鈴菜すゞしろ神さびて。雲のうへにもはこべらや。結びし水もへだても波の。ほとけの座よ。天地ござやうやはらぎて。ひかりのどけきちりわかぬ。なづな芹つむ賤の女も。もらさで祝ふ千代やちよ。……河野對州作。津山勾當調。

くわげつ

ところから。尾花が露に照りまさる。かげもはてなき武藏野の。うき名のみ。なほ立ちそひて錦木の。千束にあまるつらさをぞ。ときさ砧のおとにさへ。うちも寢られず。慕ふ夜な〳〵。あふことを。身にはいつとも白雲の。よそにへだてゝ咲くをまち。散るををしむ世の人の。春のこゝろを花につくして。……油屋茂作、市朝

まどろむ夜なきこそをかしけれ。世の人の心まどはすこと、色欲にはしかず。久米の仙人のものあらふをんなの脛の白きを見て、通をうしなひけんは、まことに足膚なんどのきよらに肥えあぶらづきたらんは、ほかのいろならねばさもあらんかしされば女の髪筋をよれる綱には、大象もよくつながれ、女のはける足駄にてつくれる笛には秋の鹿、かならずよるとぞいひつたへはべる。みづからいましめておそるべくつゝしむべきはこのまどひなり。……音島四度調。

しうせん

まゝならぬ浮世のちぎりぞ恨みなる。よそほひあつき我あふぎ、月よ花よとおふがれていとも涼しき君が手をはなれもやらぬ縁にもつらや嵐の時しも秋風に、ふきわけられてかれ〴〵なれど、すぎし扇にのこる文、そらに嵐がなきならば、いつもかはらぬ袖の移香。……峰崎勾當調。

よつのを

立ちかへりまたも來て見ん松島や、小島が崎の夕がすみ、たなびきわたす三つ四つの緒のたえぬ調をあらする波に、浪の春風磯ふけば、花も渚にはら〳〵はらと散るかとするを、又かきかへす片撥の半の月にやどれとや。ぬれにぞぬれ

萬歳のえいぐわはちくのうちのたのしみぞ。おちきなの浮世やな。ゆめさへ見はてざりけり。……島川撿挍調。

みなかみ

みなかみのいづいはむらに草むさず。つねにもがもな。昔こひしき戀しきつねに。つねにもがもな。むかし戀しき。人ぞ戀しき。……島住撿挍。

たけのは

竹の葉に衣をかけし古への虎のたぐひに身をなげうたば。〱。虎のたぐひに身をなげうたば。さかとばかりもとはんとぞ思ふや。おもふやさかと。さかとばかりもとはんとぞおもふ。さかととはんや。……松島勾當調。

つれ〲

徒然なるまゝに。日ぐらし硯にむかひて。心にうつりゆくよしなしごとを。そこはかとなく書きつくれば。あやしうこそものぐるほしけれ。よろづにいみじくとも。色このまざらん男子は。いとうさう〲しく。玉の盃の底なき心地ぞすべき。露霜にしほたれて。どころさだめずまどひありき。親のいさめ世のそしりを。つゝむに心のいとまなく。あふさきるさに思ひみだれ。さるはひとり寝がちに。

わがゆふべもこちへきて折角たのしんでゐる。細魚を引いていにおつた。せんども皿割りをつた。こちらではお鍋が。これまうし太郎兵衛さん。おまへのところの太郎吉さんが。いつでも雪隠にたれかけておいて。掃除にこまりますと。黄色なこゑで腹たてる。それから皆が。たちさわいで大喧嘩。家守のあいさつで静まつた。又酒になりすまいた。……和風作。

ひなづる

ひなづるが。そのえだ／＼に巣をくひて。君もゆたかに。我もゆたかに。すめる民とて久方の光のどけき春の日に。しづこゝろなく花のちるらん。げに散ればこそ／＼。いとど櫻はめでたけれ。ちらぬは待たぬ春がすみ。たれかしのばん鶯の。谷より出づる聲さえて。野のすゑ山のおくまでも。おなじめぐみに合竹の。よはひ久しき松はなは。君に引かれて萬代やへん。……藤林撿挍調。

いくはる

いく春のながめはいつしかはらねど。わきてのどかに照る日かげ。ちぎりは竹の世々こめて。君と二葉の松もろともに。枝もさかゆる若みどり。あふぐもあかぬ時をえて。さればあやしの賤の女が。さま／＼の造花。色をつくしてさゝげけ

し海士の袖。ほさば恨みん雁がねの。おのが翼もしほたれて。そらに連なる琴柱のかずの。十とかぞへて三年へにけり。……南郊作。松島撿校調。

ゐどがへ

七月の。七夕ごろにはおしなべて。いづくも井戸替すること。例年のきはまり。裏借家には。路次の口から隅までが。うちよつて井戸がへする。月行司は心配。ふれてまはれば。てんでに釣瓶をひつさげ。立ちいでゝ我おとらじと。水をば汲みこみ。桶やたんご。行水盥や。擂盆かけたのまでに。たつぷり汲みこみ。それからは。親父分が釣瓶にかかつて。聲をば張あげて。ひいたりオヽイヽけつまづいたり。こけつまろびつ。すべりまはりて。引いてはゆるめ。引いては水を汲みあげ。どうとう替へ干して。それから月行司へ。よりあつまりて酒になり。さいつおさへつ。さて醉がまはれば。つね平生。思ふてゐる。不足や述懐。八兵衛がいふには。さて路次の口にいつでもたれてある。犬の糞の掃除は。おれがせねば。するものがござらぬといへば。しやべり婆々がしやく〱りでゝ。此ごろ宿替してきた。つんぼどのゝ。路次番には。行燈がくらい。初夜にもならぬに。消えてしまふ。ゆふべもおそこの番じや。はやう消えてゐるといへば。口のちよち兵衛が。これ婆さま。そちの猫

かすよひ〳〵濡るゝ我たもと。夜ごと〳〵にあはれをそへて。夜ごと夜ごとにあはれをそへて。なくは虫のね。おくは涙か白露か。しらつゆか。ぬれにぞぬるゝ我たもと。木末〳〵は花かと見えて。こずゑ〳〵は花かと見えて。雪のあしたは一しは一しは。〳〵わかぬ。ながめにさす日うらみて風いとふ〳〵。はらへどぬるゝ我たもと。春のゆふぐれに山々を見わたせば。をりしも春風に。さくらの花が散りかゝる。ちり〳〵ぱつと花のちりたるは。空にしられぬ雪かと見えておもしろや。夏はほとゝぎす。又卯の花に菖蒲草。牡丹芍薬花ちりなん。すぢりもぢりて。ゑりくりゑんじよの。おく山のかげに牡鹿のなく音。虫のこゑ〳〵秋はな。名にある月にうつろふ紅葉の色どりや。あつめてあはれさまさる。冬はしぐれに。雪や霜やとさきえて玉あられ。……市川撿校調。

はるくさ

雪きえて。しな〳〵出づる春草の。あを〳〵として。露もしづくも一しはに。なは浮きたつや袖の色。わきてゆかしき鶯の。聲もゆたかにさへづりて。青柳の若葉に。そよぐ風のおと。いとしづやかに。をさまりなびく人ごゝろ。たゞ我となく打ちとけよ。たはむれあそぶ内こそは。げにまことかな。知るも知らぬももろとも

るまづ咲きそむる梅の花。いとよわく。にほひも深き花ごろも。八重ひとへ咲きみだれ。げに九重にたぐひなき。色もことなる櫻花。よそほひゆゝしく見えにけり。さてそのつぎの島臺に。松と竹とを植ゑませて。千代をさへづる。雛鶴が。みぎはの方に巣をくひて。谷のながれに龜遊ぶな。倭文の苧環くりかへし〳〵。よるこひ〳〵よるこひさまよ。人のなさけは夜にこそあれ。……朝妻撿挍作調。

わかまつ

もゝにかよひの春たつ霞。四方の山風いとしづやかに。枝をならさぬ高砂の。松のみどりも今一しほに。色も若松。野邊の小松を引きつれて。かへる山路にうぐひすのこゑ。朝な〳〵に。なれてぞきぬる梅の花。岸の姫松ちとせの春に。おはぬちぎりもけふ解くる。氷にかへてむすび松。身は老松の。雪をいたゞく翁草。磯馴松の葉ちりうせもせず。正木のかづら長き日の。おかぬ色香を君が代の。年のかずをも白砂に。濱の眞砂と敷島の。和歌の浦波おもしろや。……野川撿挍調。

はるかぜ

咲いた櫻ふく春風はしばし。花のあたりをよぎてふけ。よぎてふけ。こぼれてかゝる花の露。深山がくれの身は時鳥あけくれ。人はしらねどなきあかす。なきあ

秋は常さへ物さびしきに。思ひにつれて亂るゝ心。露も涙にあらそひかねて。戀の道のべ踏みわけがたき。草の色にも染む身はつらや。ちらと身そめし。えいさんさ。女郎花ゆゑ。つたなき心に。のんさてまことに。はや思草。身は朝顔のわさましながら。せめて靡かん事もやわると。紅葉重のその薄様に。書きておくらんや文見草。人目しのぶの我なみだには。かわくまもなき尾花が袖を。引かば靡きやれさりとては。葛のうらみの數つもりきて。いつかは君を又宮城野の。萩の下葉の露に。しつぽとぬれてなりとも。荻ふく風のたよりをも。菊やと待ちし戀でゝろ。みだれみだるゝ難波の浦の。蘆のはの見し契もつらや。浪のよる／＼さんさみをづくし。おもふはくだそうな。……松岡藤島二勾當調。

ふゆくさ

いとはじな。玉ゆらやどる人のさかり。身をしる雨の初時雨。さだめなきかな浮雲の。月のにほひも影さむし。鴛の浮寢の枕さへ。氷の袂とけやらで。床の浦わの敷波に。濱風さえて鳴く千鳥。おもへば夢の世を知らで。やがて枯野の朝露と。さえなんものを。誰かのこりし菊の香の。八重紫にうつろひて。袖のむかしもいつしかに。逢ひ見しことをかぞふれば。むら／＼見ゆる冬草の。うへに降りしく白

に。その名を慕ふ山ざくら。八重も一重もさきみだれ。霞につゝむ山々のけしきはいとゞしほらしく。わかぬながめは千代までも。かはらぬ色を松がえの。みどりはなほも面影を。のこして久しき一ふしに。かぎりなきこそおもしろや。……小堀遠州作。野川撿校調。

なつくさ

夏は夕べの身のおもひなる。色に心は深身草。露は袂のいとまもなしに。うらやましくもうき戀の世を。知られず知らぬかはよ花。たちもはなれぬ君が面影。わふさきるさの涙の川に。あやめもわかで泣きしづむ。底の玉藻のいはで茂るもよそめ。よそめしのぶは小車の。かよひかよはゞ關守も。一夜はゆるせ手枕に。塵をはらはぬ常夏も。唐紅の袖の香に。花たちばなに科はおほせぬ。とかく人こそつらけれど。うらみの葛の玉の緒の。たえて煙となるならば。せめて。せめてあはれと見よかしな。黄昏時の軒のつまに。あまりてかゝる夕顏の。花をしるべにたのまんと。ものいひよれば手になれぬ。蓮の浮葉よの。なさけに染まぬ露のなさけに。……秀松軒作。朝妻撿校調。

あきくさ

は白雪のつもる思ひに伏ししづむ。……市川撿挍調。

こひぐさ

思ひそめたよ濃き紫の色にいでじとつゝむにあまる。袖になみだは。のんさてまことにこぼれてかゝる。れんぼれんれつれ。はじめおもへばよそなるものを。いまは身を知る哀別離苦の。うきをおもへば。のんさてまことになさけもつらや。れんぼれゝつれ。めせ〳〵艸花なに〳〵ぞ。妻待つ夕顔いつ白菊の。花さきそめて美人草に戀草。ずんど秋風の立たぬまに。なびかしやんせ女郎花。おさしあひはござんせぬかいの。ちよつと刈萱。……松岡撿挍調。

たまくら

照りもせずくもりもやらぬ。月は朧の春の夜の。夢ばかりなる手枕に。君がうき名やかひなく立たん。とかく人目のしげ〳〵なれば。しのぶ山道しのびてかよふ。井出の玉川岸根の蛙。今やなくらんうき世の中に。われとひとしく物思ふ身の。あらば語らんうさつらさ。戀の山路をたどりゆく。こひ〳〵て。戀しき人を待乳山の。ほのかに見えし木の間より。名もなつかしき時鳥。いま一こゑの音づれに。むかしの人のしのばれて。袖になみだは夜の雨。草の庵崎わけてこし。隅田川

雪の。道ふみわけて誰とはん。松のおもはんはづかしの。森のこがらしたえ〴〵に。涙たばしるのう玉あられ。朝日まつまのうき身の命。ながれの末のわれらさへ。もしもやさそふ水しもあらば。戀のしがらみせきとめよ。……嵯峨隱士作。深草撿挍調。

わかくさ

世の中の。人の心はいろ〳〵に。うつろふものは花の色。梅が香をとむうぐひすの。谷よりいでゝまだ里なれぬ。野邊の若草。ねよげに見ゆる面影を。人目つゝめば色には出さぬ。袖にはもれてうつゝなき。おもひそめたよ若紫の。筆にまかせて杜若。夏はすゞしき池水にすむ川竹の捨小舟。こがれ〳〵て昔をしのぶ。草のまがきに涙をそへてなくや五月の黃昏時に。誰を待乳の。たれをまつちのややや。山ほとゝぎす。君は五月雨おもはせぶりよ。われは螢火おもひに燃ゆる。この夕ぐれの物あはれさに。鳴く音さびしき虫のね。秋はきにけり我とふものは。荻が上葉にみだれみだれて。風そよぐ。よそにもおくや袖の露。月のうつろふ影見えて。殘る松さへ嵐とともに。人目も草もかれ〳〵に。いつもながらの冬空や。落葉も霜にうづもれて。木の下陰の寒き夜に。いとゞさびしき床のうち。枕ならで

かも見ん紫のねにかよひゆく轉寢の君のおもせは實とは見えぬ。しんぞこの身は〳〵涙もらうて憂いぞつらいぞへ。枕も浮くばかりへ。わけのわけのよいにはいよはださるゝへ。しんぞこの身は。しんぞこの身は。なみだもらうて。うい ぞつらいぞへまくらも浮くばかりへ。……西鶴作。市川撿挍調。

やへむめ

花にあらしも。よいぞのうきよちらぢ。櫻もあきでゝろらちざ。さくらもあきでゝろ梅がさけかしな。いよ八重梅が。えだを手折るふりして。かならずでざせときざまをまねくへ。かならずでざせとさ。さまをまねくへ。夢になりとも。逢ひたや見たや。ゆめになりとも。ゆめにうき名は。さんさよも立たじよ。よしなやさ。うき世やのまれにあふ夜は。かたるまもなき。さんさ短夜や。よしなやさ。うきよやの……市川撿挍作調。

しらぎく

山人の折る袖にほふ白菊の。またうつろはぬ秋のいろ。かたみとだにも契りおく月もたゆまず小夜ふけて。訪ふべきやどは白露の。里遠からぬ草むしろ。げにあだきなきいそがぬ旅の枕さへ。かへすほどなきうたゝね。の。よその砧に夢さ

原の荒れたるやどに。水雞ならでは扃をたゝく。人はあらじな待宵に。枕な投げそ。投げそまくらに科もなや。武藏野に。なべての草はなつかしや。若むらさきのいろ〳〵。ありし御げんにかはせし言の。むげにかはらぬ心ぞならば。しんぞうれしさ何にかまさる。ものをかず〳〵思ふ身を。たれかあはれと思ひもやらで。ゆかしき身こそ松のみどりよ。いつも心になぞへたや。千年をまたかけてへ。千歳をかけてやつさかはらぬ。なかとよ。のんさてな。……嵯峨隱士作。市川撿挍調。

かすがの

春日野の。若紫の摺衣。しのぶのみだれ限り知られぬ我おもひ。おく露は。しづこゝろなき秋風に。うつろふ人の花紫の萩が枝に。みだれみだるゝ心のつらや。そのくりことの又の世に。君ならでよん〳〵よそにはさあへ。いろはうつさじさあへ。むらさきの色に心はあらねども。ふかくぞ人を思ひそめ。かひもなぎさに我袖しぼる。ひとめ。人目しのぶの我かよひぢを。舟にうち乘りおてきたちは來ぬかの。うちのせ。よせついくたび思ふ宿の首尾。とは思へどもたゞ一筋に。このわけ知らぬ人ならば。たとへよろづにいみじきとても。玉の盃手にふれよ。しやんとさせそこはいよ〳〵。しられぬか。君にあふ夜は待乳山。手につみて。いつし

ある三味線や人たちかへる閨もありをりしく蓙のかた〳〵にかたりのこせし短夜のとても寝られぬうきまくら。蚊帳のひとへの薄月。もるゝ〳〵。もれて淋しき夜すがらともに待たるゝほとゝぎす。……晋其角作。花都十三歳調。

はるのよ

あふと見し夢もみじかき春の夜のさめてはもとのつらさにて。枕ながるゝうきなみだまたぬ夕や增ならん。なさけのまどるいつはりに。こぬ夜ふけゆくわが袖のうらみにしめる燈火もうすき契りと思草。煙のかずに小夜ふくれども。枕ひとつを其まゝにすてゝもおかれず。よしやよし。かはる心とならべて見ても。ものいはぬこそあゝしんき。あゝしんきやとひとりごといひ。待ちこがれたる折ふしに。梅が香からす春風の妻戸ほと〳〵音づれて。それかとばかり出で見れば。しくものぞなき朧月。ひとり見るこそ物うけれ。……深草撿挍調。

なつのよ

なつの夜は。伏すかとすればほとゝぎすたゞ一聲のおとづれに。はや明けぬるといひおきし。人の言葉もあるものを。いでや今宵はふけぬまにすぎし別れにのこるなる。その睦言を岩代の濱の眞砂のかず〳〵を。つきぬなさけの下紐を。

ゐて。あはれは夜半のものなるに。身にしむものは。朝あらし。吹くにつけても小野の里。花すりごろも。いまはうつらぬ春のいろ。霜夜の秋のしるしぞと。深山がくれの紅葉々をふきくる風のたよりにぞきく。……歌木撿挍調。

しのゝめ

しのゝめ〳〵いつ夜が明けた。朝寝久しきわだまくら。おろしこめたる蔀戸の中の御座に端居して。文の腰張かげくらく。そともにしげき市人と。ともに賣りくる芥子の花。江戸丁はやさ身ごしらへ。地しろに網のつれもやう。目にかゝれとの風俗や符牒ことばの揚屋入。藤屋三浦の二むれに。乘物しのぶうちゆかし。とへどこたへぬくちなしの。こは誰やらん花ごろも。新丁おそきそのなかに。駒もすさめず刈る人も。たえて年ふるゆかまさへ。生先ゆかし新太夫。その外みやびよしある女郎の。しぐれわだしの名寄草。人のむすびし古言は。かきもらさなん藻鹽草。いつのころより。右手はうすく。左がちなる色人も。たのしみきはめ東屋に。兵庫つのくに花まつや。ゆふべとゞろき前わたり。さをとりのぼす。すみなす床の一かまへ。しかも投入違棚。梨子地の硯玉くしげ。ふたりねよとの文まくら。皆紅の三つぶとん。雲をさそひてうづだかく。一爐にたぎる松の風。ことに色

に塵ひぢのつもる思ひは荒磯海の濱の眞砂のかず〳〵を。いひもはるけず起わかれ。又もとへかし訪ひてんと。かたみに袖をしぼりつゝ。末の松山。波はこすともかはらじと。かためしを中の誓言にのこる燈火かげきえて。心ぼそくも立ちいづる。たが跡つけし棚橋の。霜いと白き冬の夜は。川瀬の千鳥なきわかれ。ともにあはれのそひぬらん。……深草撿挍調。

たなばた

夏はつる扇と秋の白露は。いづれかさきにおきぬらん。年ごとにあふ夜まちえし七夕の。あはで寝る夜は袖のみぬれて。ふるは涙か身をしる雨か。かけし情はかさゝぎの。わたせる橋を今宵しも。たのむ契りは久かたの。月もさえゆく秋のよの千夜を一夜になせりとも。なごりはつきじ今さらに。言葉のこりて鐘がなる。鳥もなきそろ。あゝたゞしんきや氣のどくや。とかくうき世はまゝならぬへ。……朝妻撿挍調。

露の蝶

世の中を。何にたとへん飛鳥川。昨日の淵は今日の瀬と。かはりやすさよ人ごゝろ。今は此身に愛相もこそも。月夜の空や鳥がねを。恨みしこともあだまくら。う

ときて心のおくまでもうらなく見せん薄色のかとりの衣を打ちはへて烟管にくゆる煙さへ。つもるおもひのたく火かと。おもふもさすが方さまに。つねならなくに飛鳥川もしや逢瀬のかはりやせんと。うしろめたさの我こゝろから。よそのすぐなるこゝろをもひきて見る氣はにくからじ。よしや思へばまゝならぬ。つらいつとめはいつまでぐさの。いつまで。……深草撿挍調。

あきのよ

秋はつねさへ物さびしきに雲井の雁の四つ五つ。つげわたるにぞうきことに。をりしも四方の小夜更けて妻戀ふ鹿のこゑにつれ。ひとゞおもひのまさりくる。それさへあるにそよ〳〵と。荻のうは風おとづれて。たそや砧の音はせし。せめて閨もる月だにも。しばしは宿れたがせかぬ。かれ〴〵すだくきり〴〵す。なはや彼方をしのびねのかこちてもよし何かせん。いつそ枕も投げすてし身を……深草撿挍調。

ふゆのよ

鳥も聲する。茅が軒端の月かげ。さすがこのほど。あはで過ぎにし夢がたり。つきぬおもひに弱る身は。淺茅が庭のきり〴〵す。涙ひまなき床の上。はらはぬまゝ

らす嵐のさそひきて閨をよびだすつれ人をとこ餘所のさらばもなほあはれにてらちも中戸をあくる東雲おくるすがたの一重帯とけてほどけて寐みだれ髪のつげの黄楊の小櫛もさすがなみだやはら〳〵袖にこぼれてそでに露のよすがのうきつとめこぼれてそでにつらき夜すがのうきつとめ……大石うき作。岸野次郎三調。

はないかだ

語るにつけて悲しきはこのおさあひが身のうへよ父は播磨のなにがしとて人に知られし武士よ母は室津の女郎のはてかりに難波に住居して此子をまうけたまひしがすぎにし秋の末つかたわれに此子をあづけおきいたはしや此おさあひは父よ母よと戀ひこがれ晝はひめもす夜は又夜あけの鳥ともろともにまどろみもせず泣きあかす目もくれ心みだれつゝ身もよもあらぬ不便さに母のきちやうへ渡さんとさてこそ室津へ着にけり……津打次兵衛作。葉山岡右衛門蔦山四郎兵衛調。

異見曾我

春雨に障子あくれば南に梅に鶯たはむるゝ羽風に花のちる風情これや二月

きを知らずや草にねて。花にあそびて朝には。露にやしなふ蝶々の。身もうらやましあだきなや。おもひきりなき女子氣の。涙にひたす袖まくら……東都ゑてふ作。歌木撿挍調。

かよふかみ

田ごとにうつる月影ならで。夜ごとにかはる枕のかずの。中にすいありぶすいありすまぬてゝろにすむ月の。何がしんきの種じややら。しりめづかひもよそにして。まかせぬ首尾をわけあるやうに。ぐちなせりふが戀の實。末は野となれ山水の。神に縁をまかせなん。……馬宥作。歌木撿挍調。

なつごろも

慕ひ來てしたひよるべの螢さへ。妹脊かはらで逢ふ夜半を。かさね扇の風かをる。にほひをつたふ蔦かづら。ながき契りや九十九髮。つい手枕のうつゝにも。わすれぬ人を今さらに。さらぬ別れのしやらどけを。やがて結ばんいはた帶……
荒木菜作。宮岡撿挍調。

里げしき

、更けてくるわのよそほひみれば。宵のともし火うちそむきねの。夢の花さへ。ち

りの小夜がらすなくね更けしと夕がほのかぶろが目もとしよぼ〲とすぐに蚊帳に入りにけり。……蘭洲作。河東調。

誓詞曾我

夜もすがら。寝られぬまゝのたはむれに。いとしかあゆき方ざまに。見はなされん白露の。葉ずゑにむすぶうき身ぞや。いつがいつまでこのつとめ。おもへば月日ぞや。十とせばかりは光陰の。なにはつけて忘れぐさ。春にもならばかならずと。子の日の若菜君がため。をしからざりし命のうち。わが世帯をも世話やかば。うれしさはやま〲。二つにはまた母さま。およばずながら朝顔の。露ばかりなる御孝行。それのみならず弟ごの。御勘當をもよきやうに。おわび申してそのゝちは。きゆる命もをしからじ。ことさら今日はよき日がら。いでや互に堅いこと。日の本の神おろし。そなた女房よこちの人。思へば深きえにしぞや。かはりたまふなかはらじと。またねの床には假まくら。夢もむすばぬ轉寝に。業の鳥の告げわたり夜はほの〲とぞあけにける。……傾城高尾作。蘭洲調。

烟草曾我

宵の口說のよいなかを。たがひに引き見ん悋氣酒。まださめやらぬ閨たばこ。煙

の雪ならん。あれ〳〵御覧さふらへと。少將五郎が手をとりて。おん身さまとみづからは。鶯宿梅のちぎりぞや。そのつれ〴〵を申せしもげにもろこしの東坡居士。たのしむ人のことばにも。一夜を千夜といはんした。唐にも粹のあるものを。十郎さんのしほらしさ。酒ぶり又は扇の手。にくみたうてもにくまれぬ。ちと兄さまの風俗を。見ならひたまへ五郎さん。疊ざはりのその荒さ。いつぞや和田の大よせに。障子けやぶり三方を。みぢんになして二王立。折からの御一座は。みな御一家のことなれば。おとは笑になりしかど。ほめたことではござんせぬ。たゞなにごとも。なにごとも。本望達したまふまで。虫を死なせてゐさしやんせ。たしなみたまへとありければ。さすがにたけき時致も。少將が黒髪に。つながれながら膝枕。手ぬき出だいてをがみゐる。……

月見曾我

仲秋三五の日がらとて。いつにすぐれて虎御前。身仕舞はやく下着まで。あらためかけて。滿月の。桂男子や祐成を。待ちまうけたる大磯の。ところ〴〵けしきまで。おなじ月みる人でゝろ。思ひはかはる秋なれど。こよひの月に隈もなし。荻やすゝきに露もみち。雄鹿雌鹿のありさまは。ふすまさながら秋の夜の。月見もぞ

ちら向いたが戀の意地。せなかどし寢てあかつきの。空のしらむにこゝろせき。をれそゝくれてひとりでと。くせつした夜はそれなりに。泣きはれた目のまばゆくてかざす手のうらかんざしの紋はうきなの菊ながし……石上甘吉作。八重崎撿挍調。

橋づくし

はしりがき謠の本は近衛流。野郎帽子は若むらさき。惡所狂ひの身のはては。かくなりゆくと定まりし釋迦のをしへもあることか。見たし憂き身の因果經。翌日は世上のことぐさに。紙屋治兵衛が心中と。あだ名ちりゆく櫻木の。根ほり葉ほりを繪草紙に刷する紙のそのなかに。おりとも知らぬ死神に。さそはれゆくも商賣にうときは報と觀念す。とすれば心ひかされて。あゆみなやむぞ道理なる。ころは十月十五夜の月にも見えぬ身のうへは。心の暗のしるしかや。今おく霜は明日消ゆる。はかなきたとへそれよりも。さきへ消えゆく閨のうち。いとしかわいとしめてねしうつりがも。なにとながれのしゃみ川。西に見て。朝夕わたる此橋の天神橋はそのむかし。菅丞相と申せし時。筑紫へながされ玉ひしに。君をしたひて太宰府へたつた一とび梅田ばし。あと老松の綠橋。わかれを歎きかな

くらべん富士淺間。のぼりつめてはいとしさの。あまりていとゞせきくれば。こたへかねつゝ。十郎が。持ちし煙管を取りなほし。お腹が立たばよしやよし。芳野たばこのよしや身は。灰になすとも君がため。をしからざりし命ぞと。いへば心もたよ〳〵と。なれどもさすがいひがゝり。しばしはふりてなかなほり。これやまことの戀草と。ふかき契りを幾千代も。二葉の松葉煙草ぞと。ちかひしこともうそなくて。戀路の手本となりにけり。……坂本半太夫作。

きくながし

玉の緒よ。絶えなば絶えねながらへば。しのぶにつらき思草。まばらにのこる淚の糸の。もつれてとけぬなれそめは。おなじ座敷の立居にも。ふつと目につく顏と顏。殿づけでよぶつきあひも。わざとすげない負をしみ。いつそれとなく打ちとけて。人のそしりも指ざしも見えでせぬ氣を知りぬいて。ゐながらおこす癪は。いつもの無理と知りながら。いひわけせねば氣もすまず。どうじや心ははらぬか。なんのかはらう嬉しいと。末の末までいひかはす。七の社のまじなひも。神や佛の世の中に。おらんかぎりはたのめども。皆さんがたにおだてられ。義理で立てずにゐる腹を。のくののかぬの口くせは。ほつた煙管の消えしだい。お

の世でこそは添はねども。未來はいふにおよばず。こんどの〳〵ずつとこんどの。其さきの世までも夫婦ぞと。ひとつ蓮のたのみには。一念一部の夏書せし。大慈大悲の普門品。妙法蓮華京橋を。わたれば至る彼岸の。玉の臺に法をえて。佛のすがたに身を御成橋。野田の入江の水けぶり。あけがたちかくほの〴〵と。はや寺々の鐘のこゑ。かう〳〵としていつまでか。とてもながらへあらぬ身を。最期いそがんこなたへと。手に百八の玉の緒も。なみだの玉にくりませて。南無網島の大長寺。すくひとらせたびたまへと。籔のそとものいさら川。ながれ身なげし樋の上を。こゝぞ夫婦が最期場と。終にはかなくなりにけり。

貝づくし

天のはら。ふりさけ見れば風むかふ。雲のうきなみ立つとても。釣せでかへる海士ごろも。頃もすゞしき三保が崎。沙頭に印をきざむ鷗。沖洲にすだく浦ちどり。汐の干潟をゆく船に。松ふく風かざいんざの。蛤ふみや。はまぐりふみや。すそやたもとにしよぼ〳〵ぬれて。ひろひし貝はなに〳〵ぞ。寄居小贏子あさり貝。汐吹上の簾貝。ちらと見そめし姫貝に。一筆蠣て。おくりたいらぎいたらがひ。名たてがましき移香も。梅の花貝さくら貝。ねもせでひとり赤螺の。たれを馬刀とや。

しみて。おとにこがるゝ櫻橋。いまに話にきゝわたる。一首の歌の御威德。かゝるたつとき現神の。氏子とうまれし身をもちて。そなたも殺し私も死ぬ。もとはと問へば。分別の。あのいたいけな貝がらに。一ぱいも無き蜆橋。みじかきものは我々が。此世のすまひ秋の日よ。十九と二十八年の。今日の今宵をかぎりにて。二人のいのちの捨てどころ。老翁と婆々との末までも。まめでそはんと契りしに。まる三年も馴染まいで。この災難に大江ばし。あれみや難波小橋から。船入ばしを濱づたひ。これまでくればくるほどに。冥途の道が近づくと。なげゝば女もすがりより。もう此みちが冥途かと。見かはす顏も見えぬほど。おつるなみだに堀川の。橋も水にやひたすらん。……近松門左衞門作。富岡撿挍調。

同　おく

北へあゆめば我宿を。一目に見るも見かへらん。子どものゆくへ女房の。あはれを胸におしつゝみ。南へわたる橋々の。かずもかぎらぬ家々を。いかになづけて八軒家。たれと伏見の下りぶね。つかぬうちにと道いそぐ。此世をすてゝゆく身にはきくもおそろし天滿橋。淀と大和のふた川を。ひとつ流れの大川や。水と魚とはつれてゆく。我も小春とふたりづれ。ひとつ刄の三瀨川。なにをなげかん。こ

をつぐる鳥かぶとわくる檜扇末ひろう翁草まですみれへ……淺村勾當調。

あれねずみ

釋迦に提婆や鯨に鯱月に村雲花に風國にぬすびと家には鼠宵は天井ぐわら〳〵と。仲間ねずみを呼びあつめ相撲とるやらをどるやらちゆつちゆでせい。五百七十七まがり猫のねの字はいやでそろ。まづはうつばり越えたへ中にも鼠の大將は。板天井の透間より下のやうすをうかゞへば夜もしん〳〵と更けわたり人もしづまる行燈もしめるさらばこれから座敷へおりやうみな來い〳〵と打ちつれて柱障子でそぐ〳〵ぐ。でつそりでそりとおりそろへば。大將耳をよぢふつて。こりや〳〵手下のねずみども十四五疋は。茶の間料理場臺所。山葵おろしに近よるな走のもとに水壺あり。緣をつたふとすべりこむ。かならず〳〵わすれても棚な道具をひきくづし。飯たき婆々をおこすなよ。さてまた齒ぶし達者なものどもは納戸へはいり簞笥長持かぢるべし。尾長のはげは行燈部屋。油德利に尾入れてずゐぶん油をねずるべし。扨豆ねずみのやつばらは。格子の上に釣つた唐辛子かぢるべし廿日鼠は化粧の間いつもの鬢臺かぢるべし。われはこれにて休らはんと違棚へぞあがりける。爰にごり〳〵彼所にごと〳〵。

人のみるかひ忘貝。わがふたりねの床ぶしは。身に蜆がひ月日がひ。かぞへ〳〵ていくとせか。雪をいたゞく富士のみね。いや我こそと三保の松。よはひ久しき深見草。見る艸うきの水草も。いそべにこそは着きにけり。

戀づくし

猿丸太夫おくやまに。もみぢふみわけいよなく鹿のつまをたづねてわけゆく戀路。かの傾城の遠山が。松のくらゐも四郎次郎ゆゑに。今はやりてと身をなす戀路。……元隣作。朝妻撿挍調。

おきなぐさ

きのふこそけふこそ秋よ荻の葉の。露草はどもいつはりの。おるかなききかは白菊の。どこなつかしき夕月夜。かやつり草の奥ざしき。ねぬ夢にきく。踊草。あやめもわかぬ夕がほの。その睦言の縁だに。いつから葵そめたやら。つい一年か二年に。三年をまつや小車の。めぐる月日をたのしみに。桔梗誓詞をかきつばた。仙臺萩のわづまより。高麗菊のはかまでも。たつた一人の女郎花。かあいらしいが美人草。うつす姿の鏡ぐさ。すいた男は石竹と。うきなたねとやうき艸の。勤のうちの忍草。口說した夜の思草。虎の尾を踏む夢でゝろ。釣鐘草のこゑともに。わかれ

ののべかゞみ……歌木撿挍調。

そでづきん

夕あらしさむさいとはぬ袖頭巾。つゝめど人目たちばなの花のかをりも。空にふく櫓太皷の呼びだしを。ちよつと中戸へ知らすのは。どういうてよかろやら。思ひなほせどかこつ身を。いのれど更に神さんも。ほれた同士は是非がない。たゞ世のなかは戀ぐさの。たねと眞砂は盡きせめや……吉田屋武左衞門作。八重崎撿挍調。

もじがのこ

花がいふ。雲と人目にいひなましても。雪とふるのが櫻のならひ。香のけぶりが假名かくさへも。とけてむすんでむすんでとけて。にくや裳裾をわやくな風の。あらしのこたま散りゆく空に。つれぐくさのたねやこぼれん。……村住勾當調。

いさすゝき

朝がほの。晝間は異見聞きすぎて。また夜にいれば。あだな氣になる筆のえん。人の見ぬまにあさひらけ。人の見ぬまに咲きみだれ。誰がいうてもしばらくは。さ

ぐわつたり〳〵て、にごり〳〵かしこにごと〳〵。ぐわつたり〳〵。かゝる所へ二三疋。息を切つてかけきたり。さわ〳〵大事がおこりそろ。わたくしどもが料理場の。肴戸棚をかぢるうち。臺所に大騒動。ちよつとのぞいて候へば。赤まだらの大猫が。尾長が首すぢ引つくはへ。きゆつと一こゑ鳴いたばかり。おとはごり〳〵おそろしや。片時もはやく落ちたまへと。申し上ぐれば大將胸さわぎしてようこそはやく知らせたれ。まことのちう〳〵と。いひすて二階へあがりけり。

したつゞみ

萩の戸へ。たちやすらひし忍ぶ月。さらぬ別れのあとしたふ。かよふ嵐にみだれてとけて。尾花が袖も。雁のまくらの夜もすがら。しよせんつれなやあだなることゝおもひまはして舌鼓。しよせんつれなやあだなることゝ。おもひまはして舌つゞみ。ゆかりと問へば影の菊。……尾崎屋園瓜作。歌木撿挍調。

みまゝがみ

浮寝の床の花はとゝぎす。蟲のね雪と聞かばながめん。うつる月日やあゝ苦界。いやな男をさすつていなし。すいた男をたゝいてかんで。とめて添寝がつとめかへ。ぽんにそこらがつとめかへ。ずきわけさした櫛まきがみも。とけて身まゝ

なじ道咲きみだれたる花すがた。花の夫婦とちりはてん。むら〳〵しぐれ秋時雨。しぐれづたひにあゆみきて。浪花ぞ戀のたまり水。…今宮学栖作。鶴山匂當調。

つこのゆき

ひるは人目。よるは通路ぞめきうた。きてゐたゝめし袖とそで。雪も時雨もいとはずに。小褄からげのしどけなや。かゝへもとけてつやでとの。枕にのこるつとの雪。さぬ〳〵をしむ里の松。……しんさい作。歌木撿挍調。

大江山

ころは彌生の末つかた。かの大江山に年へたる。酒顛童子をせしめんとて。頼光保昌綱公時。四五人づれにてどいやどや。丹波をさしていそがるゝ。童子このよし聞くよりも。べら〳〵飲んでゐられじと。閨七島の大廣袖。一丈二尺の鐵棒つゝぱりすつくと立つたるありさまは辻法印よりおそろしさ。頼光いはほに腰をかけ。こいつてびらぼうではいけんとて。大黒屋の諸白に。まちんをちつくりかげんして。辨當持に持たせつゝ。童子が門にたゝずみて。ものもうどうれ。しんと新左衛門を。おくりべいとひげは。いまそこへ出られた。お出過分にござりんす。童子大きに笑坪に入り。こいつゑらいといふまゝに。もとより望む大さかづ

かねばならぬゝはでくらべ傾城の晝寢ぬほどに思ひつめそれがこうじてひとりでと。せなとせなとをあはしては。どちらぞいつそをれて出て。ものいへかしのねすりでと。枕ふとんにとがをきせ。毎夜苦をやむ女郎花。くねりやれさ〱。ひきわけがたに。いつでもなはるふたおもて。つとめのつらさうきつらさ。われはくるわの菜種さへ。町のさくらはさぞやさぞ。おもひすごしは糸すゝき。

……歌木撿　作詞。

ぬれあふぎ

夜をこめて。鳥の空寢を忍びいでこゝろの末も深草やふかくもちぎる草まくら。たちならびつゝ裳裾ふむ。しのぶ思ひや稲荷山。いづれうき世を薄紅葉。青かりし葉も嵐ふく。秋のよすがののべかゞみ。ちぐさ百艸いろかぎり。露をふくみし虫のねもなくはわれをやとふやらん伏見の里をよそに見て。鳥羽の戀塚こひゆゑに。いづこさだめぬ玉章を。そらとぶ雁に古郷へ。ことづてもがなあくがれてこゝろの花か。蘭菊の。狐川にもうろ〱と。草のたもとも我袖も。思ひぞつもる山ざきの。なさけにむすぶ水の緣。かの貫之が一時を。くねると書きし水莖の。淀の川瀬の妹脊浪。月のかつらの男山。さもあらばあれ我々も。おなじ心にお

ろをしるべにて。ながれみなぎる加茂川の岸をのぼるこそものうけれ。まだそのころは若みどり。並木の松の根もたかく。姉の手車さきにたて。おとゝはあとに辰若が。重荷に小足あゆみかね。よろめく道の夏草や。つりがね草の音もなく、手折ればぬるゝ水芙蓉。かわかぬ袖のひるむしろはかなき浮世うきぬなは。まだ半びらきの花。菖蒲刀やかきつばた。しつかとくゝるちゝのくび。おきな草とも祝ひしに、身は小車のはかなくも。いま撫子の手向ぐさ。そのかはら菊をりそへていま来しあとの道しばし。とまればとまる川をさかうてしたひゆく。しどけなきふり裾わらは。上帯たかく見あぐれば。花の清水もみぢの高尾。雪の北山よそに見て。皇子の御所にぞつきにける。……佳川撿挍調。

閨のひま

誰が蒔きし。さらし菜種の咲くそらを。蝶は知らずや鳥はうつゝか。問はずがたりは心にこたへ。夢とみなせの川風が。ちらす柳の小枝にゆかし。いくつねざめてまたふけぬ夜を。わすれたいので。又ひとつてうど受けたは助けさす下地。むりも形見の薄色ごろも。それさへ今はくらなしにして。……二斗庵作。豊賀撿挍調。

獅子踊

きざんぶと受けてはつゝと乾し。六十四五杯のむほどに。目のしたいき〳〵腰ふな〳〵。のさばりかへつて伏したるは。すさまじかりけるしだいなり。時分はよしと人々は。竹の皮をとり出だし。用意の鳥黐ぬりつけて。童子が伏したる枕もと。茶碗のうへにぞおかれける。かくてその夜もふけがたの。風も笛吹くもがり竹。保昌すゝんで大音あげ。なんぢ何とか思ふらん。土も木もわが大君の國なれば。いづくか鬼の住むべきぞと。太股ふつゝりつめられて。びつくり飛びのく張合に。かの鳥黐にへばりつき。ちう〳〵ないてゐるところを。頼光たちよりそこらでちよきりこ〳〵だんのかま首うちおとせば。ふしぎや其首まひあがりたてものせうんかう吹きいだし。兜の鉢にわんつくつ。これはさておき八百屋のむすめ。小性吉三が手をひいて。みなひと〴〵にいざござれ。みやこをさしてのぼられしは。身の毛もよだつ物がたり。……更紗屋新兵衛調。

こもちごり

いとけなき子の友千鳥。啼いてぞいそぎをしへおく。父のことばも身にかゝる。露ふみわけてになひもつ。親のくびかせ子でゝろに。いつなんどきも粟田口。兄弟やかたを忍びいでですゑ白川の橋こえて。皇子の御所はそなたぞと。思ふこゝ

みゐかしかねたる夜もちり〴〵に柳ばかり成りにけり。……二斗庵作。政島龜島雨撿挍調。

しのぶづち

なのかつら二つゐる。その二つ目に。ひとりわりきのまゐをとこ。かぎりしられぬなゐゐつづけに。ゐとにすもりの。かぢまくらにちりつもり。そでも露けき秋かぜに。すて丶ゆかれし小山田の。立つて見ゐて見ゐかしかねたる長き夜。……扶永作。八百六伊八調。

よぶこごり

わがつまの。振袖しらぬ妹脊こそ。ゐしのうらべにつきまとふ。ふかきちぎりといふなるを。ほかの雌鳥に羽うちかはし。ねぐらさだめぬゐと〳〵を。たづねて誰をつくもがみ。よその見る目は呼子鳥。……扶永作。小野村撿挍調。

橋の霜

大黑の。いたとめでにし身も塵除の。悔いても今はかへらぬ道に。つねなき風のさわぐもつらや。寒聲を。せめては殘せかたみの霜に。おくらんいなば。稻葉おくらん誓の舟も。粹の替名の流れによせて。三つの川瀬の渡りぞめ。

あらたまの。年のはじめに硯にむかひて筆をとる。ゑいそれ。ずゞりに向ひて筆をとる。かきそむる。君がたもとに八千代かさねて。いつまでもゑいそれ。八千代かさねていつまでも。

同替唄

朝がほの。花のうへなる露よりも。うすきなさけやゑいそれ。露よりうすきおなさけや。身をやつす賤がおもひを。ゆめにも君に知らせたや。岡崎女郎衆〳〵。をかざきおよろしゆはよいおよろしゆ。〳〵。

閨のふみ

夜やさむき。衣やうすき獨寐の。夢も破れてうつとりと。硯ひきよせする墨の。おとさへしのぶ閨の文。一筆そめて顔あげて。きのふは恨み今日はまた。こひしゆかしきとりどりを。何からさきへおいしんき。文だに身にはまゝならぬ。ましてうき世はことわりや。……大裝作。八重崎撿挍調。

そらいびき

肌さむみ。そぼふる秋の月かげに。高入道や小坊主に。ばけられもせず。おいしんき。花におらしや狸に月夜。さはりある身はまゝならぬ。出るにでられぬ負をし

ぎて夢おどろかす城南の。かねのこえだの橋ばしら。よもの山々しろたへに。雪をみがくや朝あらし。……佐々木勾當作調。

菊のつゆ

鳥のこゑ。鐘のおとさへ身にしみて。おもひだすほど涙がさきへ。落ちてながるゝ妹脊の川を。とわたる舟のかぢだに絶えて。かひもなき世と恨みてすぐる。おもはじな。あふはわかれといへども愚痴に。庭の小菊のその名にめでゝ。晝はながめてくらしもなろが。よる〳〵ごとにおく露の。露の命のつれなやにくや。いまはこの身に秋の風。……ふくしん作。廣橋勾當調。

袖のつゆ

村雨や。われのみぬるゝ袖ならじ。そのうつり香を忘れもやらで。ふたりねる夜はをなごどし。比翼連理とちぎりしことも。あだしなくらのうきなみだ。あゝしんきなと夕月の。そらさえわたるあの雁がねの。文のたよりもなき跡に。のこるこの身をいかにせん。……鶴山勾當調。

鶴のこゑ

軒のあめ。立ちよるかげは難波津や。葦ふく宿のしめやかに。かたりあかせしか

しぐれづき

神さんのつい來月が戻り月。わしが心はすめやらぬ。難波の蘆をよそに見て。花の都へかへり咲。花のみやこへかへりざき。しんじつ誓文で。なごりををしむ。まゝならぬ身はうき世かへ。

のぼりぶね

漁火の。影くらうして波を燒く。四手をおろす網島の。目に守口の里ばなれ。若菜つみなんかすが江や。長柄わたりのたそがれに。舟こぎよする見馴棹。蘆かきわけて引く綱の。手まづさへぎる煙草。みじかききふしの難波潟。人顏さだかならねども。げにも宮居は神さびて。梅をちかひの御神や。和光のかげも川舟に。とめて逢瀨の波まくら。江口の君の身ながらも。あつたことかは知らねども。厭ふまでこそかたからぬ。かりの宿りを惜しむとの。をしまぬ帶の枚方に。せめて一夜は天の川。枕に塵や芥川。つもり〳〵て山崎の。名のみ關戸の宿こえて。宇佐の八幡にかけまくも。かしこきむかふの神垣や。桂男の山のはも。風はなぎさの空はれて。月三島江や鵜殿の里。うらみくずわと聞くときは。狐わたしに火をともし。たれを尋ねてくる〳〵と。淀のくるまや鳥羽なはて。二つ文字。牛の角文字。けさす

ひ。いつか根びきの色まさる。はだへの雪の下紐とけて。竹の子までもまうくるならば。ほんにおまへもうれしかろ。あゝしどけないのが若竹の。すいたどうしは節もなく。いく千代てめし竹の緣。

さはのつれ

淺澤にぎつ夜つもりのうらみをば。いはじやきかじ猿澤の。波のうねく影みがくれぬ。玉藻にひとし寢ぐたれ髮の。かつらをとこの水くさ。あゝいなんの。そつとこゝろに千代かけて。廣寒宮のそこひなき。玉の盃すゑ廣澤に。秋の名殘を惜なば。嵯峨にたどりて幕あけよ。月の座元のあらし山。…天馬狸山作。音島四度調。

べつせかい

ふうりんりんの。おあしもとりて時の用。花もうし。月もよしなしたゞひとりのいて長者にならぬがまこと。いたゞいてゐてもあきのない。大事のく男の名でも。いれぼくろには樣つけず。腕にしみこむ藍あがり。いま奥さまといはれてゐたら。こゑであらふものこれのうやいの。とゝとかゝとでくらすがましよ。勝山はときはらげ髮。長髷やめてぼつとせに。形はききさんじ。氣は高う。すいのとまりの別世界。…油屋茂作。近松播磨作。峰崎勾當調。

あいとは。うそかまことかその言の葉に。鶴の一こゑ幾千代までも。末はたがひの友白髮。……玉岡撿挍調。

しばをぶね

つゝいつの。うまれかはりて初櫻。くる年々をおゆびで折れば。うそと誠をあらはしきぬの。なれし衾の夢をつらぬくかんざし。おくるすわしの氷のくさび。あさけの嵐しぐれの雪とうかりしことも。もはやむかひの駕まつわかれ。さとのすがりの柴小舟。たかぬさきよりまづこがるらん。むなつぼらしいなごりをむねで。胸ではどいて心ですてゝ。あゝなんとしよわすれ霜。……千原寒山作。富岡撿挍調。

竹のえん

川竹のながれも深き戀の細道たどりきて。君がよすがは白竹の。笛を合圖の一ふしに。こゝろのたけを吹きこむ簾の。ひまもる風もしみ〴〵と。戀のしがらみ人目の關に。身はなよ竹のうきおもひ。日も呉竹をまちわびて。やたけごゝろに忍ぶつらさの。つもり〳〵て。雪折竹よ。千里の竹に虎すむとても。わしがおもひはくま笹や。すぐな節を立てゝこそ。ふたまた竹に。むすぶえにしの願ひもかな

はおりづま

袖ひぢて。むすびしなかも薄氷。とくと合點はしながらも。まだ春さむき雲行は。たれにあたつて武庫山おろし。いたくな吹きそ身は捨小舟。あしとよしとはな。よしわるなかよ。おゝそれさへふしのまに〳〵。口說がたえぬしよんがへ。ひなとはしとはな。まれなるちぎり。おゝそれさへきつとまもつた。誓詞のおもて。あだしこゝろはないわいな。……羽積、鶴男兩作。菊島勾當調。

夕すゞみ

日にぬれて。月にほしけん夕すゞみ。里のけしきもいろ〳〵に。うはきとじづを染めわけて。なさけをかざる御所もやう。いたるこゝろや面かげの。身にしむ風や秋の夜の。ちよを一夜になせりとも。言葉のこりて寒山寺。鐘のおとにてもういのとおしやる。惜しや枕の寢みだれがみの。よその見るめもはづかしや。……

歌木撿挍調。

糸のえん

つれもなく。かへらぬ酉の月なれや。はそき縁のそれさへも。むすぶかひなきあだくちぐ〳〵に。鳥がなけどいらへなき。明の寢すがた聞くさへつらく。はかなき

いかにせん。都の春もをしけれど。なれし難波にちる花も。玉の塵とはたがつけて。ひとゝせぶりに又めぐりきて。つぼみのにほひ吹きのこす。あらしの音をきくにつけ。寢ざめさびしき夢のゆめ。……峯頭將六作。峰崎勾當調。

夢のゆめ

四季の花

青柳の。みどりの糸をくりかへし。くりかへしても思ふこと。いはぬ色なる山ぶきや。淺澤沼のかきつばた。ひく手あまたのそのなかに。なびくか花の葵草。ふたばにおらぬ二世かけて。結ぶえにしの女郎花。すゝき尾花にまねかれて。日ごとにかはる秋風の。あだにくらせしあだしのゝ。はるかに見ゆる遠山や。樹々のもみぢも照りそひて。ちぎりしすゑの世々まで。春まちがほにふる雪の。匂ひをつゝむ早咲の。ながめにあかぬ玉つばき。

夜半樂

千代くれなゐの置綿に。君が黃金のゆびがねならで。さゝにむすぶが文よりうれし。裾野の梅のうつり香に。在所むすめとなんのまあ。をのへの松も床のうちめにて結びしいはた帶。……泉明作。戶川勾當調。

やと。神にかこたん袖扇。……廣橋勾當調。

あづさゆみ

あづさゆみ。ひけば本末我かたに。よるこそまされ戀の道。野にも山にも春がすみ。立つ名いとはじさりとては。なびきたまへとありければ。いゝや曇らじ胸の月。われは戀慕のやみ〳〵と。戀死なん身はをしからじ。おもうたてのおん事やと。はらへど猶も離れじと。袂をとつて引きとむる。ひかるゝ袖もひかふる袂も。おもきがうへの小夜衣。かさねてきたらせ給ふなど。ふりきる手には思ひのたけ。心あまりて言葉なく。よみ人しらずとかへらるゝ。……近松播磨作。鶴澤文三調

雪の花

霜ときえ。雨かなみだか愚痴なこと。無常の鐘の告げしらせたる。おとはかう〳〵つく〳〵と。おもひまはせば吉田なる。兼好さまは四十といふに。おもひあはせば六十は。百日かずなる光陰の。はやき此世や世はなんの。すぐはなこそは釋迦如來でもはゞからぬ。はでなこゝろにうき〳〵と。うき世の夢とちりはてん。幕ひきよせて彼岸へ。ほんに芝居の果太鼓。……巴十作。

川ちごり

夢のしのゝめにめぐりきて。われ自安寺の鐘さゆる。此川竹のながれにそひて。焼野の雉子なく音はいづこ。とへどこたへぬまぼろしの。猿のなみだを乳房にそゝぐ。都の空をちら〳〵〳〵と。峰の嵐か松風か。雲ふきはらせ琴のねに。……辰忠作。藤永撿挍調。

いるまがは

いとしいを。にくいとすねて入間川。戀のくせつはをかしかろ。うれしいをりはなみだぐみ。腹のたつのは笑顔で知らせ。二世はかはさず三世はいやよ。末はわかれてくらそというて。じつとにらんだ入間樣。……近松播磨作。

かはげしき

難波がた。夜でとにかよふ船長の。川べの戀のかおまくら。秋の千草の花すりごろも。桔梗のいろのそのきやう荻の葉すごき月夜にうかれ。苫をあぐれば明烏。……辰三作。藤永撿挍調。

そであふぎ

ながき夜も。明けやすき夜もつとめかな。くになる人をたのしみに。ないてくらすがうさはらし。そうじやへ。きのふの夢のそのあとを。せめて見にゆく首尾も

へしつゝゆきゝの人のわらふともなんのまゝよさまゝのかはこれも川邊につきにけりいざやわたらん向ふの岸とおもひわたりてよく見れば袖にあとなきぬれごろもわれは戀せぬ身なれどもうきなをながすこの川の名もいまさらにうらめしききよしやながれもはてしなき底なる我をすくはん川はさまぐおほけれど伊勢の國にては御裳濯川のながれには天照大神のすみたまふ熊野なる音なし川の瀬々には權現みかげをうつしたまへりひかる源氏のいにしへ八十瀬の川となかめつる鈴鹿川をうち渡りて近江路にかゝればいくせわたりも野洲のかはすのまたあせかくんせ川そばは淵なるかたせ川おもふ人によそへては阿武隈川もなつかしやつらきにつけてくやしきはあひそめ川なりけり墨染の衣川衣の袖をひたしては岸陰や眞菰の藻くづのしたをおしまはしかづきあげすくひあげ見れども〳〵わが名はさらになかりけり。……村住勾當調。

澤の友

ちよかけて。ひのりし事のつらしたか。せまひうき世と今までは。へだてられにしわが中のうらみしこともみな夢と。むすぶの神のすいどうし。なさけの縁に

ころは五月の梅雨ばれに。池の浮木の下ほとり。あまたの泥鼈よりあつまり。ぶつ〱泡ふき或はじやぶ〱。つらをいだして世をにらみ。水をにごして遊びけり。中にも執心ふかさうな。すんぽん出でゝ申すやう。近年世上のひと〱は。われ〱を食ひはやし。あそこの川ばたこゝの橋下。新地〱のさとはづれ。また市中には萬壽寺。三條通や丸太町。まるのまの字もおそろしや。ころいり切りごみ刻み葱。鍋の苦患ものがれまじと。なみだは淵の水まさる。その子のすつぽん申すやう。おろかの父のなげきやな。それ魚は人にくはれて成佛す。まして鱗無きわれ〱。水の藻屑とならんより。人にくはれて西のをか。畑の肥ぞありがたや。かくて諫のそのうちに。久しぶりにてお月さん。くらべたまふもはづかしと。みな水底に入りにけり。

名取川

陸奥の。しのぶもじずり誰ゆゑに。みだれそめにし思ひをも。せめてしばしは忘草の。それにはあらで我名をば。わすれんことのはづかしと。袖にうつしてゆく道の。ひとりの旅の名はふたりづれ。なぐさみながら一ふしの。踊拍子のかけごゑや。ひんだのをどりはおもしろや。おゝそれよ。わが名は何とくりかへし。くりか

秋のたび

されば世には〻ならぬが浮世。浪花にのこすをみなべし。くねる浪路の船のうち。月はしんきのたね。たねじやいな。……千茜作。繼橋撿挍調。

同替唄

西さく花みなみで開く。北野にまれなほと〻ぎす。いまの一こゑ松島の。月はしんきのたね。たねじやいな。戀しゆかしは夜ごとにまさる。それよりほかのしがらみは。あかぬ中さへま〻ならぬ。どうでしんきのたね。たねじやいな。

名古屋帶

逢うて立つ名が立つなのうちか。あはでこがれて立つなこそ。實たつ名のうちなれや。おもふ中にもへだてのふすま。あるにかひなき捨小舟。おもや世界のをとこのこ〻ろ。わしは白波うつ〻なき。夜のねざめのそのむつごとを。おもひだすはどいとしさの。ぞつと身もよもあられうものか。しめてなごやの。ふたへの帶が三重まはる。深山うぐひす鳴くねにはそる。我は君ゆゑこがれてはそる。我は君ゆゑこがれてほそる。あ〻うき世。昔しのぶの戀ごろも。……嵐三右衞門。山本喜市調。尾形撿挍改調。

あゝうれし。此身を御推もじあれ。あけくれに。おのがまゝとや舞ひうたひ。ともに。ともに遊ばん鶴と龜。……鶴友作。廣橋勾當調。

風のおと

あけぬれば。くるゝものとは知りながら。心のやみが身をせめて。月日はあれど晴れやらぬ。したひよる身は漁火や。庭の砧の身にしむさへも。うつゝうか〱うかれぶねよさ。はやきぬ〱を音に泣きつれて。こゝろはあとに松風のおと。

さくらばな

親は他國に子は島原へ。さくら花。はなかやちり〲に。花かやさくら。さくら花。花かやちり〱に。

にしき鳥

千代の色。かはらぬ空とみづぐきや。かよひくるわのわのうちに。ならぬ矢はずのもんそれよ。賤の小唄に茶はえんどころ。初寢の床のうみふかく。なみもこさじとちかひし誓詞。行末ちぎる松山の。まつにかゝりし蔦のもん。かげとひなたはおませんものを。ながれの身にし戀草の。しげるしげのやさかきばの。神も知るらん手枕の。みだれごゝろのうつゝにも。うれしさたえぬにしきどり。

き人のあだなるうはさずいなやうでも心のまよひ。山といふ字のふりわけすがた。をりにふれては言葉にも。はりもてぬひしおくりもの。戀の綱手の切れもやせんと。おのがえにしをくゝりざる。……しざん作。歌木撿挍調。

二王門

はづかしや。年月かさねうきつとめ。ふたり軒端にたちわかれ。人目まがきにせきせかれ。ひとゝせぶりのちぎりもあるに。つひにねゝせぬ妹脊中。親がなづけてかうしたことか。草履草鞋を店にだし。ともにかせぐも二世三世よ。口にいはねど香にはにはふ。むすぶの神のぶすいなか。ふたまた竹にむすんだ緣。むすびなほしてすいたどし。だがひにしりぬで顏とかは。いはぬ心を御推もじ。……歌木撿挍調。

ふたつもん

二世かけて。かはす誓詞のちぎりさへ。しばしはわかれもありそうみ。などやむかしのまゝならぬ。こひしゆかしは日に千たび。さゑ。人のめだつもいとはずに。よしなき夜半のむら雲に。へだてられたるうさつらさ。いつそかうかとことごさに。せきとめん心はあれど川竹の。ながき月日をかぞへつゝ。うきをわするゝ

ねがひ曾我

燒野のきゞす夜のつる子をかなしまぬはなきものを。ましていはんや人として。親子のあはれを白糸の。血筋をわけし親のかほ。似たりや似たりかほよ花。わかむらさきの花がたみ。わすれがたみと撫子の。露とがもなき御勘當。どうよくともつらいともあけていはれぬ箱根山。わたくし雨に袖ぬらす。虎がなみだや少將の。よるのふしどに聲たてゝ。なくやふたりの川津の子供。兄のすけなり身ちかくくらす。おとゝ時致かあいやはゝきゞに。あはで果てうよりなまなかでろ〳〵と。なく聲もなつかし父のおもかげ。……坂本半太夫調。

沖の舟

うらみわび。ほさぬ袖とは今ぞしる。君はつながぬ沖の船。風がさそへばよる身じやものを。われは磯邊の海士こども。ふねよ〳〵とさけべども。つらい浮世の山おろし。よその浦回へ吹いてよる。ひるともわかでわすられぬ。なじまぬさきがましじやいな。……田中泰翁作。久米崎撿挍調。

くゝりざる

しぐれは見るか聞くものか。月さび鐘はそく。おもひかさねて人ゆかし。ゆかし

つの太鼓の八つのたいこのことばじち……一物けいかう作。歌木撿挍調。

みすのうち

ちりかゝる花とや人のをしむらん戀のながれの今出川すゑ白河のたよりもきれてのこるひとりの兒櫻ひとりのちござくらかたみと見るもあだなれや。いつそ此身はかうしてすまそとはおもへども名にたかき花のにほひの姥櫻までつとめする氣はないものをかみにいのりの伊勢ざくら見し玉だれのうちぞゆかしき。

けしぐるり

子の日せし松によりにし寄生木のとみしかつらも露にぬれしぐれの雲におふと見しあらしの木の葉塵塚にちりもとまらぬ三瀨川なれしいとにはにざりけりなみの紋日のおとものすごき山彥さらにむなしきちぎりさへかわかん袖のけしぐゝり。むすぶ淺茅におく霜の。春におはめや。法におはめや……紙屋源右衛門作。鶴山勾當調。

むかしの夜

雄鹿なく岡邊の早田穗に出でどとはおもへども妻ごひの聲のよすがについ

二つ紋。つらい二人が。よゝいさよ末かけて。おつくんぐ。くるわのまぶぐるひ。よそめにおまるだてもんど。……すいかう作。繼橋撿挍調。

五大力

一筆かきそむるは。なつかしさのまゝ。にちく　におもひまゐらせそろべくど。わかれより。ほどはあらず候へど。おもひねにするひとりねのわれは。こゝろもすみて目もおはず。たばこ戀艸えんとなる。さりしごげんにうつりのみくらし候。をりからの。おつやさむやのおきふしに。風など引かせたまふなよ。さゝをひかへて身の養生。これ第一にたのみいる。よしなしぐさのよしやよし。なまなかまみえものおもふ。たとひせかれてほどふるとても。緣と時節のすゑをまつ。なんとせう。たがひの心うちとけて。うはべはとかぬ五大力。さはさりながら。かはる色なきおん風情。やがて逢ふぞへかたるぞへ。をしき筆とめそろかしく。……

季丈作。白川撿挍調。

こさばじち

江戸むらさきの濃むらさき。かおいさめぐるさかづきの。わかく　しくも葉がくれに。こゝろがすゝぐ風呂浴衣。算木くづしの羽織をも。露にぬれなす隱藝。八

き露の身とかこちなみだにくれてゆく心も空もさみだれなかば。月のくまぐまとぼし／＼と。ふみしむれどもあぢきなや。夫もおなじうきことの。あだなちぎりを米屋町。本町すぢの軒ふかく。思ひしみたる中なれば。けぶりとなさばもろともに、うづまばなどか安土町。いつか生れてまたこゝへ。婆婆のたよりを備後町。ながき未來を瓦町。いつのむくいを身にうけて。おなじうきめに淡路町。くやむは愚痴と平野町。とはおもへども捨つる身に。なにとてこはき犬のこゑ。道修町すぢときつく胸も。八つか七つか現のやみぢ。たどるは夢か伏見町。高麗橋もいつのまに。浮世小路の縁うすき。親の歎きをたがひに口で。いはぬあはれや見る目になみだ。尼が崎町。過書町。はや北濱や中の島。こえていそぐや梅田の野邊の露もあとなき夏草がくれ。人目づゝみをこゝかしこ。はや東雲とつげわたる。

……富岡撿挍調。

雪げしき

雪げしき。おもしろの。四方の山べの白たへに。見わたす空のうすがすみ。雲と見しは白雪の。しら雪のはらへどはらへどふりつむ花。と見まがふ。こずゑ／＼もしほらしや。いづれも白妙に。ながめ／＼て。雪や氷もみながらに。袖をかざして

さそはれて。もとの最中の小夜かせ。身にしみとほる月。はるゝは窓の。うちわかしたる心のそこを。なんの人には露ほども。いはじいはぬとかたみにちぎる。すゑの松山なみこさじ。……今宮屋新五郎作。吉村撿挍調。

夏のつま

木の下闇の手枕に。ひとゝせぶりの中なほり。身はまかせても物いはぬ。もたれかゝればなよたけの。節をこめたるうきおもひ。心がとはゞなんとせう。………城大炊作。松谷勾當調。

繪そらごと

かりの世に。かしにゆく身の苦をぬけて。人だちおほき春の野に。しのぶがはなるいつまでも。かはらぬ色は常盤木の。えだにたとへて誓ひしことも。閨の扇の繪空言かや。おもひのますわいな。あふぎのねやの。ねやのあふぎのゑそらごとかや。思ひのますわいな。ほんにかはれば又かはたけの。しづむ心を引きたつる。酒はうき身のわすれぐさ。……藤谷撿挍調。

梅の雨

名のむかし。うたふも古き道具屋の。おかめといへどよろづ世に。あらではかな

うきねの鳥の流れしだいの斜に横木梅の姿見身じまひにはふ年のこなたに上着もやうの襟かきあはせ妻戸きりゝとおしひらき火取香爐のかをりにうときはんにすねるじやござせぬぞへいたかづらかけてもつれてほどけてむすぶ無理いはぬ夜の雪のおと。……吉川撿挍調。

こまりぶね

苫のすきまにもる日かげ。たよりなき身のたよりになれば。人の言葉は。のう力ぐさ。むすぶ常陸の紐とけて。ぐちなせりふも戀の花。さかりも今日か明日の夜になさけわづける心のにくさ。いうて恨みを泣きわかす。千鳥のこゑもわが袖も。浪をまくらに泊りぶね。……政島撿挍調。

小川ぶね

今さらに。三つの浦わをふりすてゝ。いぬ雁がねのうらめしや。うらみも戀もうらにしき。なれにし人を松がえに。そよとばかりの風そよぐ。ならの小川の夕暮に。みそぎぞ君がかたみなるらん。……大坂屋某作。豊賀撿挍調。

秋のふじ

浦々かけて。吹くはあらしの色さそふ。あづまあそびの七浦三うら。日本堤の秋

立ちよれば。それは木々の花。きりくべてたのしまん。酒にいざやあそぶべき。まづ冬木より咲きそむる。窓の梅の北面は。雪封じてさむきにも異木より先だてばまづ。梅をきりやそむべき。梅はさま〴〵ある中にさ。はやざき梅のわつさりと。わつさりと。色よし品よし信濃梅。おもひこがれて書く玉章を。たよりもとめてやりうめや。あなたへとんととほり梅この。えだがさはらば御免なれ。ふりふつてふりふつて。ふつて〳〵。〳〵〳〵。ふりふつた振袖の。たが袖の香のにほひ梅。初音ゆかしきうぐひすの。羽風につれて。ふはとみだれふはとみだれ。みだれみだるゝしだれうめ。しなと拍子をかぞへ〳〵て。それ。〳〵。〳〵そてらでしめろ。まかせておけろのとんと。〳〵。〳〵はづんだ手鞠梅。ひいふうみいよういつむうなゝやあの。音はあの。おとはしとゝんとん。しとゝんとん。しとゝんしとゝんしとゝんと。ちよど百ついたおもしろや。かず〳〵のさかづきは。どこぞこへまはつた。ちやうにちやう次で長三郎。ちよろ〳〵めきの長四郎。はなしよしの長太郎。ずうわんばうにわ入道。はやしたてゝあそんだ。ざん〳〵ざん〳〵ざ。濱松のおとは幾千代。御代は萬年。……深川挍挍調。

雪のおこ

てきえなば消えしだいこの世をかりのやどゝさだめん。……みづしま作。鶴山勾當調。

みだれがみ

すいた櫻や梅さへあるに。柳にうはき。亂髪なんのいけんを聞こぞいな。すゑはようてもわしや氣がすまぬ。つまらぬすゑのすいたどし。なんのいけんをきこぞいな。思ひつめては夜も日もかよふ。うきめを見てもせかれても。なんのいけんをきこぞいな。いやなところでわしや齒を染めて。すがたをかへて墨衣。なんのいけんをきこぞいな。……深草撿挍調。

花のきみ

いでやこの夏のけしきはをかしけれ。月のながれにその身をまかせ。くるわがよひや蝙蝠の。あはですご〳〵かげ庭潦。ぬれにぞぬれし丸木橋。ふみはよまねどこれもまた。おなじ濱邊の花のきみ。あやしのをのこもろともに。うたひ〳〵て南へもどろ。月も南をめぐるは夏の。小夜ふけわたる道のつゆ。……久米崎撿挍調

春のかな

かぜに。淺茅がつゆと消えし身の。いつか難波にかへりばな。きくこともなきうかれ舟よのさ。二てうたてたるだて女房。にはかなまりのゑちやへ。つらやはかなやおぼつかな。ふじの園生のゆふべなつかし。……鴻池宗羽作。攤橋調。

秋のころ

まちわぶる。身には雨さへたゝかるゝ。おとにありたけうらしまと。明けてくらさに戸もほそめ。たゝきかへそも。その面影のありやなし。まよふ心がまだしもの。おきどころなるつとの手の。よしなき夜半のかねもふけ。おもひなほしてねて見ても。つめたうあまる長枕。

しづのここ

我こゝろ。心が問はゞ心できけよ。ほんにこの世のはる〴〵ごとに。見るにつきせぬ櫻さへ。物をおもはず遲櫻。どうでちりゆくうき世のならひ。おもふにせまるわが心。辛苦がうつす水かゞみ。あゝまゝよ。その日かぎりの朝顔さへも。そらのくもるをたのしみに。竹をつたうて日をおくる。この身はいつがいつまでも。あゝかはらぬ月さへ暗はある。あるにあられぬ思ひごと。松風さへも胸さわぎ。心ぼそきは誰ゆゑぞ。とはおもへどもいつはりの。昨日のしぐれ今日の雪。とけ

も二世のえん。一期はなれぬ心ぞや。うれしかなしうござんする。こちのしやうだいなしが。つじでかぶろをくぞくとさ。つれたちに見つけられて。笠をかむつてゆくとき。戀がしやうばいなれば。にくむてとではなけれども。金山にまぶがついて。うき名たつるが迷惑。かよふまいぞや。わつくんくるわのなじみはな。たゞ我身のあだの花衣。きてはたもとの雨や雨。……文耕堂作。山本喜市調。

こりべやま

ひとりきて。ふたりつれだつ極樂の清永寺の鐘のこゑ。はや初夜もすぎ四つも告げ。九つ心のやみぢをば。照すやいなや稻妻の。ひかりしあとのくらぎこそ、我ら二人身のうへよ。いまはなまなかながらへだてをしたらうき身にあいそもこそも。つきた浮世やいざ鳥邊野の。露ときえんと最期の用意。女肌には白むくやうへにむらさき藤のもん。中着緋紗綾に黑じゆすの帶。年は十七はつはなの。雨にしをるゝ立すがた。をとこも肌は白小袖にて。黑き綸子に色あさぎうら。二十一期の色ざかりをば。戀といふ字に身を捨小舟。どこへとりつく島とてもなし鳥邊の山はそなたぞと。死にゝゆく身のうしろがみ。ひく三味線は祇園町。茶屋のやましゆがいろざけにみだれてあそぶさわぎあり。あのおもしろさを見

花のまぎれにかゝりそめの。いろはにほへどちりぬるを。うき名もらすな夕がすみ。わがよたれぞつねならん。心のしをり露ふかき。うゐのおくやまけふこえて。まよふならひの思ひねに。あさきゆめみしゑひもせず。けふ九重に十重百重。千代も萬代もつきせじ。……吉村撿挍調。

閨のつゆ

いつしかに。わが寢覺をもさそひけん。妻こふ鹿のこゑうはがれて。秋にあふてふ淺茅原。あさい心と思ふがうそか。枕に問はしやんせ。ほんに答も空吹くかせの。風にみだれし玉くしげ。はらげがみして。あふ夜もありし。うつりなつかしゆかしや袖に。袖にひまなき閨のつゆ。……近藤忠藏作。鶴山勾當調。

あひの山

もとはうはきでおひそめ川の。深うなるほど逢はれはせいで。こすにこされぬ人目の關よ。寒の十二月も日の六月も。つらいつとめに日をくらしやるが。顏にほそりがかわいや見ゆる。思や二人がいきながらへて。ゐるもふしぎのうちぞかしひさしぶりにて合の山。あひに來たさにみつゝぎの。さほはちぎりのたがやさん。今はひとつにそはれもせぬが。どのかみごまのばちあたり。三はきれて

たる下紐のにくやをとこのおてことを開いてゐるさの障子より。もれ出づる。月はさゆれど胸のやみ髪のおくれのばら〳〵〳〵と。ともに亂るゝ親でゝろ。鴛鴦の片羽のとぼ〳〵と子にまよひゆく小夜千鳥。ないてくどくこそあはれなれ子をすつる籔におりたつむらがらす。ちゝよはゝよと鳴きからす。森の子烏夜の鶏。うつゝのやみにちる雪の。思ひなき身にくらべこし。さつと淺黄に染めうよりもとの白地がましじやものさるにてもうしやつまの。にせむらさきの色わるうやつれがは見るかなしやと。しぼる袂の露なみだ。野邊のいくへをとはすらんやりての高がこゑとしてまた火を見るとねむるかと。聲はしたなくのゝしりてまゝ子づめりにあとつけし。子はやすかたの安からぬ。おやは空にて血のなみだたが節つけて世をうたふさてこそ賣られやすかた。……水木辰之助作。山本喜市調。作川撿挍改調。

かづき面

まよひゆく時もたがへず丑滿の。秋かぜさむく身にしむも。嫉妬の念の晴れやらず。よな〳〵ごとにおそろしき。すがたかはれば心もかはり。人はそれともいさ白衣に鬼女のおもてをかくしもち。庭のたまりの泉水に。うつす姿は我身か

るときは。染どのそなたとそれがしが。去年の初秋七夕の座敷をどりをかこつけて。しのび逢うたことおもひ出す。羽織かづいて茶屋ぞめき。ふたせのたまに見つけられ。めいわくするを見るときは。そなたにわしがむりいうて。くせつしたことおもひだす。祇園林のむらがらす。かあい／＼の聲きけば。父母のことおもひだす。なみだに道のはかさへゆかぬ。思ふまいとは思ひはすれど。こゝぞうきよのわかれの辻よ。はやうござれと手に手をとりて。ゆけどあゆめど目に見るごとに。今をはじめのをはりより。追手のものやきたらんに。さあ／＼最期いそがんと。鳥邊野の露ときえてゆく。見るに二人がせきくるなみだ。じつとおさへてこれおそめどの。おもひきらしやれもう泣かしやんな。わしは泣かねどそれこなさんの。いゝやそなたの。いやこなたのと。顔とかほとを見合せて。いちどにわつとなげくにぞ。一足づゝにきえてゆく。つひにこの野の花ふる雪や。をりからにはや寺々の。鐘もつきやみ夜はしら／＼と。鳥邊山にぞつきにける。……

近松門左衛門作。潮出金四郎調。岡崎撿挍改調。

いもせがは

口說は宵の夢なれや。ふたつ枕の妹脊川。そでから袖へ手を入れて。じつとしめ

し。土筆とつたり虫さゝに。きたりし野邊もいつのまに。かはればかはる身のうへと。おとを見かへり立ちどまり。しばし涙にしよんぼりと。げにもあはれな立ちすがた。いや／＼かくてはとてもはてしなしと。思ふこゝろをとりなほし。びらりぼうしや紫の。色にかよひしをりもあり。三年以前にたれやらと。しせきとわしがいひあはせ。汐干まゐりもはやむかし。思ひいづればなつかしや。のうのう道頓ぼりへゆく人か。心のうちにわくせきと。頼みましたきことあれど。筆にことかく硯墨やもたず。もしも皆さまなあ。わが二親にあふことあらば。こゝまで無事にきたりしと。いうてたまはれ。どんといはずにすますまいぞや。ゑいてのさんさ。駕のすだれをおとづれて。ふるは時雨か。あられ松原うちすぎて。うき世のさがのうきさかひ。しつらふ宿のこなたなる。一間のうちにぞ着きにける。

袖香爐

春の夜の。暗はあやなしそれかとよ。香やはかくるゝ梅の花。ちれどかをりはなほのこる。たもとに伽羅のけぶりぐさ。きつくをしめどそのかひも。なきたまでろもはんに。まあ。柳はみどり紅の。花を見すてゝかへる雁。……飾屋次郎兵衛作。峰崎勾當調。

らぞつと身の毛もたちまちにほにあらはるゝ糸ずゝき菊のしげみをつたひゆく。つもる恨のかず〳〵をいつか晴らさん今宵のうちに。おもひしらせん思ひしれ。おひ見し時はわれならで。枕はほかにかはさじと。いひしも今はあだ波の。水にうつろふ月さよが。なじみははるかおそざきの。菊のみばえの種まきのこす。三月四月は袖でもかくす。もはや七月あらはれ月よ。おもひおもはれ思ひのかづら。みだれがみばらり〳〵ばら〳〵。おそはれおそるゝ小車のめぐる因果はくるりくる〳〵。くるしきこの身。かづきし面はそのまゝに。うまれついたる二つの角。おのれとうごくばかりにて。わが身もあきれてこはいかに。とるにとられず。ぬげどもはなれぬ執着の。めいどうするぞあさましき。……城志賀調。

みつのうら

花はちりても春はさく。二世と兼ねにし言の葉も。われがちぎりはこの世から。はなれ〴〵の。ものおもひ。どこへとりつく嶋もなし。東ときけば遠けれど。それにはあらぬあの江戸ぼりを。ふかきちぎりとかよはす文も。海嘉きりかやあとたえて。どうかかうかとよろめく足をふみなほし。難波をさして見わたせば。むかふの森は今宮の。野べの鳥の。つがひ〴〵はあるものを。我はさだまる妻もな

調。

あけのかね

だまさうとおもうてもみる身はましよ。いつその罪にあらしふく。そらおろしや末かけてかはす枕のいつほどか。いやになりたる身のつらさ。何にたとへん秋の日の照り降りなしに通はんす。あたゝめてやるとこのくだ。そのかねごとのあるものを比翼のちぎりつげわたる夜はしやん〳〵と明のかね。……繼橋撿挍調。

四つの草

ほどちかき戀の道のべあるものを。にくや嵐にふきまとはれて。あぢな道すがゆくとも知らず里に見なれぬ笹りんどう。野ぎく艸藤うつぼぐさ。ちよと見んきも花の露袖をかへせば夢むすぶ。……象牙屋次郎右衛門作。菊永撿挍調。

ちごせぐさ

うらわかき幼遊のよねんなくはづむ手鞠の。かずはひいふうみいよう。いつもかはらぬ常盤木なはぎ呉竹千世をかさねて。民もゆたかになびく草木も四季をり〳〵の春をむかへて開く梅が香君がためとてつむや若菜のいろもとり

冬の月

花はちりても春はさく。ゆきてかへらぬ道もなし。まよふ戀路のむごやつらや。道慾や。ようも見すてしそのかなしみを。いまぞ語らんなみだ川。いとしをとこのその言の葉に。かあい〳〵といつはりごとを。まことゝおもひおりや一筋に。つらいつとめもそれはその。

はつがらす

氣はれては。風あらたなる柳髮。くしけづり。こやかつやまなんぞ。そのからうたはむかし〳〵。鬼も二八の綠の髮に。とくるひざがしらてけてふとても緣と袖。そでとえんとの。ますからひげも。洗ひおといてすいとなん。黑きものはくろきぞよけれ初がらす。……小野村撿挍調。

うかれてふ

おふてとの。なき世なりせば世の中に。にくいつれないそのあおをしらぬ菜種のうかれ蝶。ぎりにたちより遊ぶもをかし。つひに其身も秋かせと。ふきしくあとの心としられ。はや室咲の紅梅も。かほに露うつ朝日かげ。ぬる〳〵ゑもんな雪どけの。つめたい水の汲みわけて。あだにしのぎし心ぞつらや。……堂島平善

同替唄

色もなさけも。知らぬ昔がましじやいな。とても知ろならねからそこから知れかしな百夜かようて。やつれをとこはおもしろや。あはで消えたがなほうれし。ねても丸寝は。ころりとしたがよいわいな。

わすれみづ

ゆく水の。ひと夜どまりの薄氷。とけてのあとはいつはりと。噂もよしや三吉野の。花も雲ぞといひしもそらごと。そのむくいはたがきるのじやへ。軒からにらむ鬼がはら。露のなみだをこぼすは名のみのこりし女郎花。

其羽積

雨あられ。雪や霙とかはれども。とけては同じかはいゝと。にくいに落つるみなのがは。戀の渡になさけの筏。義理とまことのかすがひで。組んでしぐんでしぐんでくんで。一期はなれぬ中じやいな。いちでかはらぬ中じやいな。……松島撿挍調。

竹の雪

ふびんなるかな月若は繼母ににくまれて。あはれや父の留守のまに。まゝ母にい

〵。三つば四つばと年をかさねて。いはふ七草。神をいさめの鈴菜すゞしろ。芹なづな。蝶は菜種の花にあそびて。すみれつく〴〵し。たけてすぎ菜や。夏はすゞしき池水に。菖蒲さつきと。檜扇かざして。やがて葵とおもだか。菊に姫百合。顔にもみぢの照りそふ秋に。山のにしきもけふあらためて。松も八千代を祝ふたい〳〵。たから山草たちばな。かうじ〳〵の。軒の柊。鬼もじぎして。福は内へと。いはひをさむる。御代は萬歳。つきせぬやどこそめでたけれ。

ちりもみぢ

霜柱。をれてはかなきあしたはの。日かげのもみぢちり〴〵。その色としも山鳥の尾の。ながれも黄なる泉川。うれしいづみや捨小舟。こゝろさびしき秋さへあるに。空見がちなるこの冬の。ゆふさるゝ野やこゝろあらば。高野のおくのしばなく鳥の。こゑ吹きのこせ山おろし。

はなもみぢ

花も紅葉も散りしはがあるとの。とても散ろなら風にまかせて散れかしな。雨にしをれて。枝に朽ちなば色もなや。鳥のふみしくなをつらや。露もにほひも。さらりとしたがよいわいな。……小林撿挍調。

らやむだにくらせし月日のほども。いはでおもひの涙の雨に。いとゞくちなん四つの袖。……霜米作。鶴山勾當調。

里の風

ものおもふこゝろも空の霞かな。はれてのなかはにくからぬ。われは妻まつ有明になくかないたかはとゝぎす星ばかりなる夏の夜のやみを縫ひ行くほたるさへ手に手をとりて草のとこまくらへかよふ初あらし。てがるゝ身には色かへぬ松の葉ごしに一ふしの。ちぎれ／＼や冬の月。たれにすねてかあゝなんのそんな中ではないものを。……鍵屋佐助作。鶴山勾當調。

かくれんぼ

朝顔のさかりはにくし迎ひ駕。夜は松虫ちん／＼ちろり／＼。見えつかくれつかくれんぼ。ゆく末は。たが肌ふれん紅粉の花。あんじすごしを枕にかたれ。髪いはぬ夜のをみなべし。いうてもおくれの小夜あらし。……歌木撿挍調。

かたしがひ

世をうしと。しのぶ山路の花もちり。しんきつれなや同じ身に。おなじおもひを浮む瀬に。うきてたゞよふかたし貝。あはぬはずなら夜ごとの夢にほんになま

ひつけられ。あたりの竹の雪をはらひ。身に着る衣は芭蕉葉の。破れし袖に風わたり。雪寒うしてはらひかね、かへらんとすれば門をさし。あけよとたゝけど音もせず。あらさむや堪へがたなやな。かくて更けゆく月わかは。つもれる雪にうづもれて。遂にむなしく成りにけり。ほんの母親きゝつたへ。姉もろともにはしり來て。子のわかれぢをかなしみて。竹の雪かきわくる。すはや死骸の見えたるは。いかに月わか「母うへよ。姉こそわれとさけべども。こたふる聲はなかりけり。

ぬれつばめ

妹と脊の。ちぎりたがへぬ燕は。人の軒端に世帯をまうけ、小兒をば生んで。西よ東と餌食をもとめ。さもうれしげにその日をおくる。我らふたりはいつしかに。不破の關屋の關の戸に。せきとめられて稲妻や。ありとは見えてそれぞとも。あけていはれぬ胸のうち。つゝむにあまる袖の雨。紋は三つの傘に。ねぐら貸さうよ濡れつばめ。……近江屋作。藤永撿挍調。

四つの袖

うき中の。ならひと知らばかくばかり。花のゆふべのちぎりとなるも。はじめのなさけ今のあだ。いつそあはねばかうしたことも。ほんにあるまいよしなやつ

この身雲井にちかき我つまの縁のきれぬの藤ばかま。ゆかりの色や花むらさきの。今は袂も墨ぞめに。そめてかひなきうき身ぞや。九曜の星のそれならで。のこる下着の三つの星。……鴻池宗羽作。繼橋撿挍調。

あだまくら

身にかへて。おもふ人にはたゞまさかに。おもはぬ人のしげ〳〵にくるわのさとのうきつとめ寢てもさめても苦になつて。かわいをとこに逢とて見とて。はまりやすきはすいの淵。しづむものぞと思へばさいな。ほんにぶすいがましじやもの。心しらずや秋のそら。……歌木撿挍調。

はでゆかた

かよふ神。うき名のたゝぬ文月に。百夜のまつのひかりさへ。さすさかづきの影うつる。笛のねいろもはな〳〵し。十郎さんや待ちかねん。虎が戀路の枕より。はなれまいぞとたはぶれに。たのむ佛のかほよりも。思ふをとこのはで浴衣。……離佛作。歌木撿挍調。

おぼこぎく

色そめぬ。おさなき庭のもみぢ葉を。風が吹きあげ落葉の帯を。結びさげたる松

なか見えぬがよいに。うつゝうか〳〵人目(ひとめ)の關よ。余所(よそ)にはひの梅の花。見るをよすがにながらへて。こゝろにかすむ袖(そで)の月。春やむかしと訪(ど)ひこし人の。せめてたとへのなりふりなりと。ひとりかこたん肱(ひぢ)まくら。……千苗作。橋繼撿挍作。

はくさいし

月にそひ。連理(れんり)にとまる鳥さへも。立つ朝がすみきぬ〴〵の。妹脊(いもせ)の山のおびやせん。螢(ほたる)にひとし賤(しづ)の女(め)が。いくせ濱荻(はまをぎ)の浪こして。ちとせちぎりをのべざはや。ひく鹽釜(しほがま)の名のちかさ。ごげんとむすぶへだてがみ。……やぶたつ作。歌木撿挍調。

沖(おき)の石(いし)

まだ寢(ね)もやらぬ手枕(たまくら)に。袖もないこと思ひわびう。つら〳〵と更(ふ)けてさへ。寢卷(ねまき)のきぬのはだうすし。つらいぞういぞなんとせう。かなしみの。涙はいとゞせきかねて。ふかきおもひの淵(ふち)となる。見るにつけ聞くにつけ。胸にせまりしかずかずの。袖もかわかぬ沖(おき)の石(いし)。……永島庄左衞門尾形撿挍兩調。

三(み)つの星(ほし)

世のうさは。戀とや義理(ぎり)とにまかす身の。なにはの梅の實生(みばへ)より。都(みやこ)の風にちる

花もちりぬればこずゑのかひもなきものをおゝそれなきものを。わたら月日にあだまくら里のかのきにすむ虫の野でも山でもなきはせで。きみとわれとがその中をきり〴〵す〳〵となくはいのるかつらにくや戀路のやみに晝さへくらし。見えがくれからじやはてまい。これのうやいの。……文耕堂作、由木喜市調。

暮の鐘

花のえん。むすぶの神のなかだちさん。たのみやんす拜みやんすかならず。せめて一夜は來ても見よかしな。むりなことゝは思へどほんに。にくましやんすも皆道理じやに。だうりのないはわしひとり。かわいというて暮の鐘。つく〳〵物を思ひ川筆と墨とになる思ひをこめて。まことあかせどそれとは知らで。しんき〳〵の一さかり。……岸野次郎三作調。

くれのまつ

つれ〴〵と。世のさま〴〵をのこしけん。つらさうきめはしのぶれど。さだめないぞや。心のもつれ。いふにいはれぬ歸花。桔梗の紋の三つ輪ちがひと。おもひすごしは身のあだかへみやこの名をもすてられて。かの貫之が筆のあと。土佐や

の蔦。しぐれ振袖かざしもせいで。顏にてりはの山櫻。にくみたうてもにくまれぬ。……菁瓦作。留都調。

春の鳥

夢の世に。ゆめとやいはんうつの山。蔦の紅葉の錦はむかし〳〵。雪のはだへを故鄕にのこすほど時しらぬ富士のそら。あたら月日をたゞ一年。枕にかたる里げしき。業平ふうの。はでなをとこの二人づれ。かけて思へば武藏の鐙。その名につれてむさし野に。鳴きそな鳴きそ春の鳥。……鴻池宗羽作。纖橋撿挍調。

つくばやま

逢ふは別れとかねては知れど。今朝のきぬ〴〵いつよりつらや。なれに逢ふ夜は飛びたつばかり。どうかかうかと心のたけを。言はう〳〵と思うてゐたに。むすぶの神に。見すてられたかわけもなや。今は命も絕えなばたえね。住めばうらめし同じ世に。たうがねのな。茂右衛門女房はよい嫁御。あれ見さいな。筑波の山の橫雲。よこぐものな。下こそわしが親ざと。さとのつとめを。いつかはなれて心のまゝに。末のおちはを誰かしる。……多門庄左衛門作。柴崎助六調。

あひのやま

ほつながれて解けやらぬ。心のわけは巻筆の。いふにいはれぬ亂髪。……吉村撿挍調。

こゝろいき

梅はさかねど鶯の。をり〳〵通ふこゝろいき。そう。じやといな。

同替唄

軒の木の葉のばら〳〵と。しぐれになしたてゝろいき。そうじやといな、

なたねざこ

まゝならぬ。身にまゝならぬ透額。髪のほつれがなさえさゆる。川かせさむし鴨川や。きよきこの身をにごすよの。人はすいなきつとめとも。思ひながしてすまさばすまそ。西ふく風のあだわらし。あだし夕べになびくもつらや。柳にぞめく二つ櫛。……加賀屋宗因作。繼橋撿挍調。

かへりざき

さらにまた。つむともよしや初雪の。なんのわけかは白糸ばかり。とけぬ遊びは黒髪に。むすびすてたる人ごゝろ。さとのみちとせ別れもしばし。しばしよせく波かせに。のぼる夕べの氣は村ちどり。泣く〳〵に泣かれぬ噂を聞けば。じつに都の

田舍のうかれ舟。いつかぎりとは白波の。またながれゆく戀のふね。……鴻池宗羽作。繼橋撿挍調。

さくらがは

年をへて。花のかゞみとなる水は。ちりかゝるをや曇るといふらん。あだにちりにし花ならば。おちても水のあはれとは。いさ白波のあだし身は。はかなさはどをうらやまれ。つゆと霞をあはれみなげく。末のしがらみ誰か知る。……聽十作。藤永撿挍作。

よしのがは

月に村雲花にはあらし。さはりある世のならひもつらや。心くらべに年ふる身さへ。しのぶもじずりみだれてん。ものおもひがはじやと問はるゝたびに。袖の下樋もせきかねて。人目づゝみもあゝまゝよ。よしや世の中妹脊のやまの。なかにながるゝ吉野川。すゑはどうかも白浪の。たつもいとはじいとふなあだ名。花のちぎりもそをだに後の。いろになりゆく戀ごろも。……吉村撿挍調。

なさりがは

さとによぶ。その名は同じ名取川。瀨々のうもれ木あらはるゝ。身をうき舟の。な

たさに引きたてられて。しどけなりふりはら〳〵と。ゆきつもどりつ合圖もつきて。のぞく門口いくへのまがき。あはねばかこち。逢ふ夜半は。いつもうれしき一こと。を。いはず語らず一つ夜着。……一本亭作。吉村撿挍調。

こひばなし

をりふしに。そらもおやなしおぼろ夜やしのびてかよふたちぎゝも。しづまじくらの戀噺。すいた男のうはさして。ねるもねられぬきまゝざけ。なさけにぎりはあるものを。ひくにひかれぬさみせんの。いちでそはふと二世かけて。でうしあはする三さがり。あへば嬉しいかほ見るけれど。わかれ思へばあはぬがましよへ。あはぬがましよ別れおもへば逢ぬがましよへ。初めあらずばなか〳〵に……大和屋宗右作。

あさねがみ

あやめぐさ。ひかるゝころをえてもがな。たれがためにと人とはゞ。のきのつまなるあさねがみあさかの沼はにごるとも。ひとりすめりひきやする。……馬宥作歌木撿挍調。

やなぎがみ

歸り咲き。

きんごらう

笠屋町すぢ千度もゆきてはまた。もどりつゆきつ立ちどまり。坂田藤十郎杉山勘三。さては玉川半太夫などの。聲をにせつゝ合圖で知らす。小さんははつと心にこたへ。客のすきまに格子へ出でゝ。見ればかなしやふる雪の其中に。よにしよんぼりと立姿。見るに身もよもあられうものか。もうし〱と小聲になりて。ひとつふたつとさゝやくうちに。おくへかりましよ二階へかろと。すぎが呼ぶこゑ耳つきぬけば。せひも涙を袂につゝみ。のちにまいちどちよと逢ひましよと。いうて入る月わかつきの鐘。さては芝居の一番太鼓。聞いてもどらぬ夜半とても。なさけないぞや金五郎は。せつなき戀に身をやつし。雨のふる夜も風ふく夜半も。兜頭巾で顏おしかくし。かよひ〱のかずつもりきて。しはす廿日のあけぼのに。しのびなみだに伏ししづむ。……竹島幸左衛門作。增井勾當調。

戀のくせ

よひ〱に。さだめぬ枕かず〱の。うきが中にも戀といふ。その二文字が癪のたね。すいたをとてはまゝならぬ。をんなごゝろのすいはどせまき。おひたさ見

になこがれしまりも逢うてわかるゝ鐘のこゑ。いつかくるわをはなれてほんのめうとゝいはるるならば。今をむかしの語りぐさ。

のべかゞみ

青柳は風のすがたをのべかゞみ。見えつかくれつ月さえて。清水にかよふ雲のあし。夕陽てらす螢火も。人のもぬけの魂と見て。今宵ふたりがゆくさきの。死手のみちづれ頼むぞや。あとに心の思ひきるとも言ひ合せ。此世はとても後の世で。どりになぞらへ。日にちぎり。いつそむすばんつまとつま。なみだは道の手向ぐさ空にはわらぬくだかけの八聲にしらむ東山。あすのうはさはいかならん。

……青瓦作。鶴山勾當調。

江戸づきん

人目しのぶの袖づきん。うはきも今ははんになり。土手をしつぽり雪の鷺。たゞひとりかよひくるどこやらの女郎しゆがかわいをとこをまつかひなすかぬ。こちらがしこなしは。もはやごしんにすまぬやれ。さらばわれらはかへりましよならんぞへさりとは男氣の。あはゞどうしてかうしてと。よすがもねむいめをしのぎ。なさけないはどいやまさり。こちのこゝろは。そうじやないものをい

風といふ。をとこになびく柳髪。とけぬ思ひのもつれさへ。しんき辛苦の投島田。いつ元結のねをからみ。たけながゝれと誓ひしも。鬢のもつれのばら〳〵と。涙にうくや花の露。はなのえにしのかた〴〵に。せめては何と黄楊の櫛。さす月かげの夜半のそら。……戀出市十郎調。

うらおもて

うしと見し。世はさらになし幾年か。あだにうらゆくてにはのいろか。散るか散らすかあだなる雪を今日はおもてにつもる雪。鴛鴦の毛衣かとりのきぬよ。うはきをとこはあるにあらでと。おもふまよひをまたうそつかぬ。人はさびしき枯野におなじと。かたにしなだれ。袖の口紅粉ちぎりのしるし。なほえにしあるかつらをの。……田中某作。歌木撿挍調。

しぐれがさ

おもひには。どうした花のさくことゝ。身にぞ知らるゝうやつらや。いかにならひじやつとめじやとても。いやな客にも逢はねばならぬ。やぼならかうした憂き目はせまい。いとしをとこのあゝまゝならぬ。首尾を合圖やてくだのまくら。むりなことでもどうやらかあい。なじみかさなりたのしむ中を。あはぬつらさ

寺のかねてはおもひいるさきの矢走の風に比良のゝ雪のくれまことなれどもいたづらがみのいふにいはれぬ世の中の人のうはさも七十五日うき名きのぞく山はとゝぎすはてそうじやわへはてそうじやわへ末は一つのもとの水。

あづさゆみ

あふことを待乳の山の夏の月すむほどもなきみじか夜にしづみはてにし隅田川今はこととふ鳥もないありしうはさを歌占のあづさにかけてせめてだにとはぬかたもや明暮におもへばはでな衣紋つきうたのゆふべのちぎりさへ花火とともに消えてゆく水のあはれやいま武藏野の草葉にあまる露なみだ。……權橋勾當調。

秋のいろ

色に染み香にめでし身の年月をあやなくすぎし村すゝきそよぐ秋かぜつれ〳〵なりとせめて妻戸に音もしつよしたのまれし世の中の人のこゝろは花のいろしのぶとすれどよそには見えていつの日あてにうつろひし色はその身ぞ知りつらんよしなしごとを菊といふ草につれだつ耳なしぐさうらみて

なしやせぬ。風に柳のしほたれて。酒がとりもつ笑ひがほ。口說しらけて月のかほ。……撫琴子作調。

緣の綱

かちびとのわたれどぬれぬ緣あれば。また逢坂の關の戶を。こさで其身のゆくすゑを。むすぶの神と岩本の。かたい顏して油斷させ。ほれたこゝろを見ぬいてすねて花わり實も在原の。昔がたりの緣の綱。……淺村勾當調。

ますかゞみ

妹脊の緣といふものは。たとひしばしはわかれても。末はたがひに大井川。うき世のさがはをとこゆゑ。せくなやりての玉ふぢの。うきみのむしのたうらうと。さぞややつれて音もほそく。ちんちろり是非もない。あゝふたつにしやんとわげて。かみきりむしと。いつそ此道きりぎりす。なほも思ひは增かゞみ。

みづかゞみ

人目も知らぬをとこなら。恨みも戀もあるまいものを。なませ近江の水かゞみ。うつして見れば水底は。かたい堅田の石山に。きつうのせたにわしやのせられて。思ひすごしはわれ辛崎の。一つ前帶しどけないふりよ。たとひ逢はずと三井

澤改調。

夏のふじ

年月をあけぼのをしむ身のうへにたつ旅ごろも胸あはぬ今日は浪花の梅の雨明日はあづまの薬ざくらやなれにし人は夢のまの袖とたもときぬ〴〵ににかいの坂の下り口もまたこゆべきと思ひきやさよの中山なか〳〵に蚊幮の釣手もあさのつきみすはおちても夏のふじ……鄕橋撿校調。

棹のつゆ

よるべさだめぬ舟なれやいづくとまりと白波のうつゝにすぐる身のほどにつけて戀しき故鄕の風のつてだに思ひねの枕は花にかをれども夢ははかなき春の夜の明けて垣はの卯の花もあやめもわかぬ五月やみはなたちばなの香をとめてむかししのぶの摺ごろも袖のみぬれてはしかぬる棹の露にもなみだにも玉のをかけてたのみつるちぎりし人は文にのみすくせいかなるむくいかはよしやよしのゝよしや吉野の花も雪も雲も波もあはれ世にあはゝや

……柳里恭作。吉村撿校調。

萩のつゆ

もなほはかなしと。ひとり丸寢の手まくらに。しなだれかゝる猫のつま。もし戀ひ死なば三味せんの。かはいやこれも時のまの。あだなる色にひかれなん。とかくたのみし神々たちは。夢をむすぶの神かいな。

みをづくし

吹きわくる。あだと實との二みちを。北と南の川口に。ながれて水のうたかたの。なにみをづくし難波がた。蘆分小舟よるべなき。しんきなぎさの友ちどり。すゑの談合なるもあり。またならぬとて世にあまる。をんなをすつる島もなし。をとこひでりのせぬやうに。たゞ神風にまかせなん。……きかく作。吉崎勾當調。

たかせぶね

木津川の。ながれもせまき身は高瀨舟。あさきは戀のまへかたよ。そこの心を知らせたや。みだれみだるゝ川柳。松につながる引舟の。よるべさだめぬうきおもひ。なんの空ふく松の風。身にしみ〴〵といとをしく。やりてかぶろのうきつらさ。閨をひきだす東雲に。おくるすがたの一重帶。またのさらばといふまでは。ほんに逢ひたし逢はねばつらし。きのどくや。なみだの玉の緒も。おもひにたえなばたえよかし。それさへ心にまかせぬは。どうもならぬへ。……辻甚左衞調。城

はちたゝき

佛もとはおもはくに。戀路のきづな結んでは。ともに涅槃の長まくら。買はさんしたと聞くものを。ましていはんやわれ〳〵が。夢の浮世の假橋に。おくや霜夜の鉢叩。あれ〳〵西方島原へ。さんまいがたでゆく雲の。そらさだめなき流れの身。夜ごと〳〵にあだまくら。煩惱すなはち菩提心。宵の口説はあだし野の。露と消えてはむつましく。さいつさゝれつ朝酒に。ひさごをならしたはぶれの。里のくれ。雪の素足の八文字。ひろもなさけも勿體も。ほんに心の。まことをすゝぐきよ川に。ほかのつとめはいや〳〵いやよ。いや〳〵いやよ。いやらしと。毎夜出口にわしやたちばなの。花のちぎりのなさけ知る。などみつぼねのさよがうし。淺黄かたびら黑小袖。おゝそれそれじやまことにさ。いつ來て見てもにくうはないもの。おゝそれそれじやまことにさ。村雨の。ふる夜こひしと四すぢの町を。かよひくるわに名をたてられて。八つの太皷のかぎりもないて。わかれゆく身はなは白紙の。文にさま〴〵心をつくし。月のや入舟みなとにむかふ。なみの。なみのひら〳〵。またくにのまたくにの。くにの。まつもやさんさ見ゆる。こひし古鄕の。暮の鐘のね。……藤屋某作。増村勾當調。

萩の露。こぼれやすきに月はすむ。ちかひし人はもろともに。世にすみながらまゝならず。文はあれどもたよりなし。あはれうき世に川がな二瀬。おもひきる瀬ときらぬ瀬と。逢うてつらさをかたりたや。

ほとゝぎす

宵の口説のしらけたあとを。啼いてとはるやほとゝぎすへ。松のあらしに夢うちさめて。あすのわかれがおもはるゝ。

鄙のみち

花ならば。都や鄙の道のべに。いろをふくみし傾城の。みばえにうゑしかぶろ菊。さくをり〳〵にいやましの。おもひをつもる冬のそら。雪につゝみし言葉さへ。心の氷とけやらば。なんのこの苦はせぬものを。……知水作。藤永撿挍調。

かのこおび

ひとすぢに。おもひそめたる鹿子帯。むかしをしたふ一念の。今こゝに。來るといさや白拍子の。すめば顔もいとしらし。かほに櫻がちんりちり〳〵ちりかゝる。いよほんにへほんぼんに。たしなんで見てもまゝならぬ。うきよなんとせう淵はわが身の瀬とかはる。

見れど、とても京とはいはぬよの。あゝわけのしれぬでもてたもの。……竹作作。稲葉春斎藤谷勾當調。

うらもみぢ

降れや降れ。わくる時雨の神無月。いまはかたへに照るもみぢばの。かげにこがるゝ池水に。名を鴛鴦のねの戀しくば。下には思へ思羽の。ながれよるせをたづきにて。かけし月日に指もたゆく。しんきしんきてゝろの初むらさきの。色にもいづな出でじゆめにもうつゝにも。……富岡撿挍調。

蔦もみぢ

雲がいふ月はくまなきものとは知れど。あだとなさけとうき世の義理と。三筋にわかる清水の。いとしかあいの行合は。品こそかはれなみだの雨に。ぬれがきますしるしを見せて。引く手あまたと鼠なき。顔はてらした蔦紅葉。……周南。銀獅雨作。菊崎撿挍調。

玉のこゑ

たえぬごげんのいたましく。ゆたのたゆたの磯こくごとく。どんでものさへ手につかず。せめてながくはならずとも。つきそふことのなるならば。そのうれし

うすごほり

戀となさけは義理あるものよ引くに。ひくに引かれぬこの三味線の。一期そはうと二世までかけて。調子あはして引く三下り。あへばうれしき顔見るけれど。わかれおもへばあはぬがましじや。あはぬつらさはなか〱に。

雪見酒

ゆく水の。ながれは苦界はてしなき。いとしをとこのためにとて。思はぬ人を焼筆の。命毛かけて誓文の。撥にかゝりし三味線の。二十二三の宵のやみ。かくれしのぶによけれども。あゝ顔が見にくのこれもよき。よにある人はいひなづけ。わしはおまへの前髪の。ながきちぎりもわしがこの。なほさぬ額このまゝに。見たり見せたり離れじと。たがひに手に手を鳥の聲。かあいがられて今ものおもふ。わしやそふ中に。雪見酒なら。さては思ひのよさひとつ。わしやそふ中に。そめぬ白地のもとしのぶ。……坂田藤十郎作。若村藤四郎山本喜市調。

假名の留

主やたれ。問へど答へずくらなしは。遠くしぐるゝ横山あらし。きつてからんでしやんと荷にしたその梅も。はだへの室でぬくみやせぬ。すめば都というては

そむる。今朝だにも。今朝だにも。ところはあともなかりけり。西は田の畔あぶないさ。さ。谷みねしどろに越えゆく。あの山こえて此山こえて。こがれこがるゝうきおもひ。……多門庄左衛門作。岸野治郎三調。

花の旅

春の風に。なびく姿や淺みどり。すいた仕打にさそはれて。おもひたつ名の出口の柳。都をすぎてこゝかしこ。八町三所かきちらす。ひと風かはる大津繪の。七つ道具の武藏坊。かたい石場の間より。ぬるり〳〵と瀬田うなぎ。長い旅路をふみわけて。草津の里の姥が餠。つく〳〵杖のしたくゞる。目川の水のしのぶ戀。なんぼ石部のおまへでも。こゝろたがはずそのてくだ。ざしきさわぎをかこつけて。をどりこ汁は水口に。うまい首尾じやとのぼりあふ。坂はてる〳〵鈴鹿とあひの。あひの土山。雨にしつぽりと。大竹小竹さかの下。こゝろのたけはつくされぬ。筆捨山のそのなかを。關にせかるゝ椋本の。むすめごゝろの一筋に。津の町とはる阿彌陀笠。人目かまはぬ旅のそら。雲津の河をたかゝらげ。またのとまりを松坂と。柘植の櫛田もとほりすぎ。髮の油のくち上手。煙草入うる小林屋。おちもをばたも買うて。ゆくかずはつもるに限りなき。神のめぐみの山田へ。……油屋茂作

さもあらんかと。まかせぬわれを思ひねの。君におもひのうつゝなき。もぬけの蟬のやるせなく。こゝろのいかで通ずらん。祈らぬ日とてなきものを。逢ふうれしさ別れのつらさ。きにも妻こふ鹿のねの。身にしむやうに思はれて。いとゞうきよのあぢきなき。なにとてかくは思ふらん。

狐會

いたはしやな母うへは。花のよそほひ引きかへて。しをるゝ露の床のうち。智恵の鏡もかきくもる。法師にまみえたまひつゝ。母をまねけばあと見かへりて。さらばといはぬばかりにて泣くよりほかのことぞなき。野こえ山こえ里うちすぎてくるはたれゆゑそさまゆゑ。たれゆゑ〴〵くるは。くるはたれゆゑそさまゆゑ。君こひし。ねてもさめてもさ。わすられぬわがおもひ。わが思ひ。それおもんみれば。春の花ちりて。秋のもみぢも色づく。世のなかは。電光石火のゆめのうち。捨てゝ願へよさ捨てゝねがへよさ。なむあみだぶつなむあみだ。君はかへるか。君はかへるか。うらめしや。いのうやれ。我すむ森にかへらん。いさみにいさんでかへらん。わがおもふわがおもふ。こゝろのうちは白菊。岩がくれ蔦がくれ。篠の細道かきわけば。虫のこゑ〴〵おもしろや。ふりそむるやれふりそむる。やれふり

葉(は)か。あゝやよまゝの河(かは)ちどり。……高津いさや作。峰崎勾當調。

しのびごま

くちきりの。ねじめやさしき忍(しの)びごま。こゝろはどうかこほろぎの。壁(かべ)にうき身を立つうき名。知らずしわぶき空耳(そらみゝ)に。つぶしたいほどつぶされて。あゝわしやはんぼにさりとては。戀(こひ)の止長(しちやう)にかゝりぶね。その高砂(たかさご)の松こそにくや。つらや軒端(のきば)にあこがれて。うらみごころの夜(よ)もすがら。……油屋茂作。市朝兩作。峰滴勾當調。

なみのつて

おもひそめし。その年月(としつき)はつもれども。へだゝる戀の中たえて。たよりも遠き雲のなみ。海士(あま)の小舟(をぶね)のよるべして。うらみながらもある夜(よ)の枕(まくら)。夢かうつゝか寢てかさめてか。かはす言葉(ことは)のしどけなく。もはやわかれの移香(うつりが)を。とめてまつ身のちぎりひさしき。

はで手がた

わが庵(いほ)は。みやこのたつみしかぞすむ。世(よ)を宇治川(うぢかは)のまさご道。槇(まき)の島影(しまかげ)さく草の。いろになさけに入墨(いれずみ)は。ひきいせりふかなんぞの。歌のねじめのはで手(て)がた……一草舍藪貫作。廣橋勾當調。

秤屋九兵衛作。峰崎勾當調。

花の友

みよしのゝ。こゝろの奥の山ざくら。淺澤ならぬかきつばた。高雄のみねのもみぢ葉も。いまは難波の室ざきと。なりてたのしき物がたり。つきせぬながめ千代かけて。いつもかはらぬ花の友。……大津屋彌三郎作。桑村撿挍調。

ちりむしろ

こゝろの駒に。手綱ゆるして乘りかけて。われ落ちにきと。人にかたるなをみなべし。その花衣うらふかき。井筒のそこにかげやさすけはひ。かゞみのおもはくさへ。くもる雨夜に猿なく。みねに反響や打つ斧の。おとは妻木をこりずまの。海士の鹽釜けぶりたつ。來し方を思ひ出に。ひとりかたしく塵莚。……松島勾當調。

まるのえん

鶏かなく。あづまのはても長崎も。べつにかはらぬすいたどし。緣は異なものあぢのよい。えならぬにほひに心ときめき。かほみづぼねのその日より。こんな緣はあらざけと。ぬる夜の汗を引きかへて。かく玉章の百ひろや。まるでいはれぬ包む名の。ごぞんじよりをあらけなく。地の田舎のと蔭口も。根が泥ゆゑの言の

だつれど。おちてはおなじ谷川の。むかしをとこといはれても。ぬめたなことは顏に似ず愛染さまはこはけれど。一向わいのこゝろゆゑ。比翼連理のちぎりをも。つらきうき世のたのしみに。まこ。とをかけて祈るべし。……龜笑作。藤永撿挍調

里の春

鳥がなくあづまそだちのこの身も。今は。いまは春べとさくや此。花の難波に年ふるのみか遠い千里のまだそのうへに。十もかさねし。名ははづかしや。天飛ぶ鶴の一聲をいかにうつさんよすがも波に。出で入る船の大湊かはらぬ色を松かげに。たのむ追風や春のかせ。……南郊作。藤永撿挍調。

初ざくら

つゝむに何と白波の。ながれの末のおもかげを夜ごとにかはるいたづらの。中にまことは有明の。つき出しのむかしより。なじみがさねの白小袖宵にわかれのな。かねならば。袖のはるさめな。かわくまも。泣きそな泣きそ。せめて鳥のこゑ。月ならば十三夜。花ならば初櫻。さかりある花も入相の。鐘にちるらん。花やちるらん。……若村藤四郎作。山本喜一調。

さよちどり

里がすみ

をしめども。どうで一度は花だにも。風の中なる世の中と。ひと〴〵さんのいさめをばがてんしながら道もせに。どこの軒端かたか〴〵と。おや鶯の鳴くこゑに。ふつと思はず立ちどまり。無理なこと〻はおもへどりんきつぶてくれたさ里がすみ。

里の松

ふりつもる。雪には白き里の松。傾城にまことなしと世の人の。わけしらず。なさけしらずのことばぞや。たとへ命のつゞくたけ。ほんのまことをおかしても。をとこのかたよりそれぞとも。たよりをせねば遠ざかり。おもはねかたの宿の花と咲くときは。はじめのまことと後のうそ。勤ばかりに逢ふ客さんの。かさなるまくらや色ぎぬの。つひのよるべとなじみては。はじめのうそも皆まことと。縁のあるのがまことなり。あるのがえんの。縁のあるのが實なり。なにと問はれて夕月夜。……嵐小六調。

さゝのあい

つれ〴〵にすいとは何をいふやらん。うき川竹のながれの身。雪やあられとへ

身をすつる里あればこそ浮む瀨の。あるをたのみに憂きつとめ。わたりくらべて名をながす。夜ごとにかはるはだ〳〵の。實とうそとを問ひかけられて顏にもみぢする。まことなれども逢はねばうそよ。しんき心のやるせなや。うらみられしもうらみし人も。ともにやれ。消えゆく春の雪。さだめないぞや櫻の花は。一しは首尾の色にあかさん。……巴友作。

室の梅

春といふ。名のみばかりや朝には。なれにしねぐら鳥屋出せし。そのうぐひすとともなきに。待ちえし花のさかりにも。あはでぞもとの故鄕へ。かへらぬむかし堪へしのぶ。……松宇作。菊島勾當調。

春日影

ときはなる。松のこずゑに雛鶴が。みぎはの龜ともろともに。千世をたのしむ春日かげ。

筆の鞘

筆のさや。燒いて待つ夜の蚊やり火に。むつましなかの言の葉に。われはおもひに身をこがす。胸はけぶりの富士なれや。袖はなみだの淸見潟。うすき契りに淺

つゝむにあまる袖の雨。晴るゝまもなき胸のやみ。いふにいはれぬわしが苦の。はなれぬ鴛鴦の思羽は。なんのむくいか。神のちからにも。こりやまあどうじやぞいな。父よ母よと鳴くこゑきけば。つまに鸚鵡がうつせし言葉。えゝなんじやいなつがもない。世には因果なものならわしが身じや。かあいをことにいくせのおもひ。えゝなんじやいなつがもないしのびねに鳴く小夜千鳥。

鶴のはし

二世や三世とことばでいへど。水のうたかたそりや空言よ。うそにも指が切らりようか。いかいお世話のわるじやれおいて。爪のかはりに鶴のはし。それをたよりのうきつとめ。

あねいもこ

花鳥の。名にくらぶれば梅はまづ。花の姉ぎみ櫻はいろの。春を深むる山はとゝぎす。いま一こゑと待つ閨の戸も。たゝく水鷄に明けゆく空の。野邊になまめく女郎花。菊の下つゆ汲む川水に。鴛鴦のおもひば妻とふ千鳥。千代の契りはなよ竹の。姫松いまはろうてう。名に立つまでも。立ちまじるこそ都なりけり。

春の雪

難波獅子

君が代は。千代に八千代にさゞれ石の。巖となりて苔のむすまで。たちならぶ。やつをの椿八重櫻。ともに八千代の春にあはまし。たかきやに。のぼりて見ればけぶり立つ民のかまどはにぎはひにけり。……繼橋撿挍調

都獅子

たけき身にしも心のやさし。君が園生の牡丹になれて。おのが富貴の花とのみ。めづる姿はにくからぬ。瀧のしらべの音そへて。おつる白玉千代のかずうつやうつゝに更科の雲か雪かとうたがはれ。をんどりあがり〳〵。みだれみたるゝ糸竹のこゑあやしげに奏する曲。神はきらくの臺にも。天つ少女のたはぶれん。今日こゝのへの花の宴。……河野對州作。津山撿挍調。

八千代獅子

いつまでも。かはらぬ御代に合竹の。代々はいく千代やちよふる。雪ぞかゝれる松の二葉に。雪ぞかゝれる松のふたばに。……藤永撿挍調。

吾妻獅子

むかしより。いひならはせし東くだりのまめをとこ。したふ旅路や松がえの。富

はかき硯の海のよるべさへ。なんとしがらむ緣の綱。……龜丈作。

たまつばき

春をとなりに笑ひかけ。いとゞ咲きたい玉つばき。みやまづたひも厭はねど。瀨にせかれつゝ谷川の。年のうちにも。ちよつきりてつきりと。合圖のふみや玉ゆかし。ふみやたまゆかし。……朝三作。

たまかづら

君ならであげまじものと思ひつめ。かぞへて年もふりわけの。髮のむすぶの蝶花形。ぬるまの夢か手枕に。かゝる緣をかんざしの。かざしの櫻にほひさへ。ふかくも心くれなゐの。ほんにそのわげくゝりのすや鹿子の末ながく。……嬉蝶作。津山撿挍金山勾當兩調。

はなごろも

花の紐。とくやこひしきい糸ざくら。ながき緣とむすびしも。いまは雲井にちる花の雪ときえゆく春のかぜ。あはれを染めしむらさきの空も色かや花ごろも。あゝその花ごろも唐衣。あかぬにほひに面影の。花のすがたをいま一度。見たし見まほし庭のさくら木……朝窓作。金山勾當調。

有馬獅子、

風の手にうつゝや鼓の瀧波に。松のしらべの音そへて。かりだす獅子のかず〳〵は。雲に妻戀ふこゑ〳〵の。紅葉の色にひるがへる。旗さしものや飛道具弓は袋に太刀は鞘。をさまる御代に合竹の。千代も八千代もつきぬ言の葉。……銀獅作。峯崎勾當調。

吉野獅子、

霞たなびく吉野の山の。春のけしきのそのおもしろさ。見ても見あかぬ。花のたもとに置く露は。とにかくわすられぬ。夏きにけりと吹く山かぜに。牡丹の花の今やさくやとすゝんでいづる獅子のいきほひ。いさましうとにかくおもしろや。千代もやちよも。かはらぬ宿のちぎりにぞ。園生におふる竹の子の。このこの子まで生ひそひで。榮えゆくこそめでたけれ。……藤永勾當調。

薩摩獅子、

ふたばしら。遠津御祖のあとたれて。逆矛立てしその峰に。絶せぬけぶり千代かけてあらしに晴るゝ霧島の神のみすゝもことふりて。まことに天のかごしまの足駄のおともたか〴〵と。つるの丸山いたゞきの。あかきは花の櫻じま。磯の

士の高嶺に白妙の。花の姿に吉原なまり。君が身にそふ牡丹になれて。おのが富貴の花とのみ。やたけごゝろもにくからず。おもひおもふ千代までも。なさけにかざすきぬぐに。糸竹のこゝろみだれがみ。うたふ戀路や。露そふ春も呉竹の。かざふ扇にうつす曲。はなやかに。みだれみだるゝ妹背のみちも。獅子のあそびていく世まで。かはらぬ色やめでたけれ。……峯崎勾當調。

越後獅子

越路がた。御國名物さまぐなれど。田舍なまりの片言まぜり。しらうさぎなる言の葉に。おもしろがらしそうなこと。なをゐい浦の海士の子が。七つか八目うなきまで。うむやゐみその綱手とは。戀のこゝろも米山の。當歸うはきで黃蓮も。なに糸魚川いと魚の。もつれもつるゝへさうらの。あぶらうるしとまじはりて。するゝ松山の白布の。縮は肌のどこやらが。見えすく國の風流を。うつし太皷や笛のねも。彈いて歌ふや獅子の曲。むかひ小山のしちく竹。枝ふしそろへて。きりをこまかに十七が。もろのこぐちに晝寢して。花のかゝるを夢に見てそろ。ゆめのうらかた越後の獅子は。牡丹にもたねど富貴はおのが。すがたにさかせ舞ひをさむ。すがたに咲かせ舞ひをさむ。……峯崎勾當調。

おもひぞつもる胸のはな。なみだにしぼる藤かづら。をんなの心の亂髪。ゆひかひなく〳〵戀ごろもの。そのうつり香をきぬ〴〵の。形見と今は烏兜。おもき思ひをいだきてくるひいづるぞ。はかなく消えし草葉の露と。のこる此身をいかにせん。戀しやゆかしやいとしやと。あるひはなげき笑ひつゝ。戀しこゝろはきやう〳〵〳〵。狂氣となつてうつゝなく。太鼓こそ〳〵。うせにし人の敵なれ。おもへば〳〵腹立や。うしろに呼ぶは夫のこゑ。前には敵の關のこゑ。打てや〳〵と攻鼓撻天樂を舞はうよう。歌へやうたへ梅がえに。風ふかばいかにせん。花にやどる鶯。もちたる桴をば劍とさだめ。もちたるばちをばつるぎとさだめ。嗔恚のほのほは太鼓の烽火の。天にあがれば雲のうへびと。まことの富士おろしに。たえずもまれて裾野の櫻。四方へぱつとちるかと見えて。花ごろも差す手も引く手も。伶人の舞なれや。富士がうらみもろともに。踊りあがつてちやうど打つ。うれしや今こそは。思ふかたきを打ちをさむ。打たれて音をや出だすらん。げにや女人の罪ふかく。五常樂を打たふよ。さて又千代やよろづ代の。千秋樂を打たうよ。民もさかえて安穩に。太平樂を舞はうよ。日もすでにかたむきぬ。日もすでにかたむきぬ。これまでなりやひとゞ〳〵よ。伶人のすがた烏兜。みなぬぎすてゝ

おさのり岩波のながれに洗ふ薩摩櫛。とけてさかしき奮進の獅子のいさみや亂れがみ。影をうつして飛びかけり。むぞうらしげに百丈のたけき上より蹴おとしつ。こゝろをはかり代々をつぎ。其隼人の手ぶりぞと。いはでめぐみの深見草。いよもゆたかにことぶきは千世になほ八千世はふるともやうごきはせまいの。君がをさむる國じやほどになほ。……藤永撿挍調。

いなむしろ

いなむしろ川そひやなぎ水ゆけば水行けば。起き伏しすれど其根はたえず。おゝみづゆけば。おきふしすれどその根はたえず。……玉川撿挍調。

神樂はじめ

千早振。神代のはじめ素戔嗚の。おしきこゝろをにくませて。天てる神のおんいかり。岩戸にかくれましませば。常闇の世となりにけり。よろづの神のなげきつゝ。岩戸のまへにおつまりて神樂を奏したてまつる。これぞ神樂のはじめなる。ときに天照太神宮。すこしうちゑみたまひつゝ。岩戸を開きましませば。人のおもて白々と。見ゆるこゝろのうれしさを。面白きとは申すなり。……吉村撿挍調。

富士太鼓

も面しろき片雄波……桑村撿挍調。

梅の月

うたがひの。雲なき空や二月の。夕かげに折りつる袖も。くれなゐにほふ梅の花笠。ありとやこゝに鶯の。なくね折しる羽風にはらり。ほろりとふるは涙か花か。花をちらすは嵐のとがよ。いやあだし野の鐘のこゑ。……峰崎勾當調。

やまごぶみ

君が代は。つきじとぞ思ふ神かぜや。みもすそ川の澄まんかぎりは。されば神代をはじめにて。末久かたの君の道。いまも絶えせじいにしへは。いまだ天地わかずして。雌雄のかたちもわかたねば。まだ鳥の子のごとくにて。くゞもりきざしふくむなる。すみて清きは天となり。おもくにごるは地となる。ふたつの神のあらはれて。みとのまくばひありしとや。天てる神の此國へ。くだりまします天皇の。すゑたえぬ世ぞかしこけれ。天照神のそのむかし。岩戸にてもりたまひしに。あまたの神のなげきつゝ。岩戸のまへに舞ひうたひ。神樂を奏し給ひける。神はその時おもしろやと。岩戸をひらきたまふより。月日のかげもあきらかに。峰たかき春日の山に出づる日の。くもる時なく照らすべらなりと。よみしもさらに

わがこゝろ。みだれ笠みだれ髪。かゝる思ひをわすれじと。また立ち歸り太鼓こそ。うき人のかたみぞと。あと見おきてぞかへりける。……藤尾勾當調。

四季の雪

そも〳〵天のうるほひに。雨露霜雪の四つを見せ。おなじく雪月花の。三つの德をわかつにも。雪こそことにすぐれたれ。まづ春は梅櫻。咲くよりちるまでも雪をわするゝ色はなし。夏はさみだれの。ふるやの軒は暮れながら。庭はくもらぬ卯の花の。垣根や雪にまがふらん。夜寒わすれて待つ月の。山のは白きかげまでも。ふらぬ雪かとうたがはれ。冬野にのこる菊までも。また初雪とおもしろき。山路のうきやわするらん。山路のうきやわするらん。……岡山勾當調。

和歌の浦

紀の海や。沖つ波間の雲はれて。ゆきかふ舟やとまりぶね。かゝるなぎさの眞砂に夏も。霜おく月の。光やはらぐ玉津島。うき世の塵にまじうても。すゞしき神の御こゝろに。めでたまひける浦なみの。よせくる方に友鶴の。蘆邊をさして啼きわたり。夜はすがらに音を鳴きて。明石も須磨もはかならぬかは。なぐさ山名草の濱。うらの初嶋ながめやり。ふるき御幸も思ひでの。和歌の浦松ちりもせず。名

のえん。ちりてものこる心の花に。おもひみだるゝうき身にも。またくりかへすこの春も、くむや泉の大井川。うかむ筏のゆくすゑは。人の手活となる花を。うらむやおいが遂をば。はらふは法の御ちかひ嵯峨の寺々。まはらばまはれ水車の。りせんせきの川波。川なやぎは水にもまるゝ。さくら雀は竹にもまるゝ。都の牛は車にもまるゝ。茶臼は挽木にもまるゝ。われは色香にもまれ〳〵て。玉のをも。たえねばかりにおもひ川。どこに淵なす夜半のきぬ〴〵。……松浦撿挍調。

宇治めぐり

よろづ代も。つむや茶園の春かせに。ことぶきそへて佐保姫の。にぎはふ袖の若みどり。人目をなにと初むかし。かすみもわけて青山の。小松の城やあやのもり。千年さはりもなしむしに。よはひ老いせぬ婆々むかし。たれにも年をゆづりはの。千代のみどりも松の尾の。神代のすゑの後むかし。ひかりをそへて園の梅。なは白梅のいろかにも。ふかくぞうつる川柳。こすいこすだに宇治のなみ。初花見する山吹の。花たちばなの匂ふてふ。夢をむすぶのをりたかや。小鷹の爪に枝しめて。木陰もおほき一もりの。喜撰の庵の夏のみね。瀧の音をも菊水の。朝日山の端うすもみぢ高雄のみねの雁がねの。おさるころ〴〵かさどりの。かずまんぞ

ことわりや。寶祚はいく代なほも絶えせじ。……津山撿挍調。

かはがすみ

高瀬舟。さすがに人をみなれざを。とる手ばかりのちぎりだになし。……田原屋後室作。大澤撿挍調。

やへがすみ

八重がすみ。たちへだつれどきつゝなく。こゑはまがはぬ春のうぐひす。花になごりはをしけれど。かへろやれ夕ぐれ。……繼橋撿挍調。

たまつばき

見るたびに。あかぬ色なり足引の。片山椿いまぞ咲く。花に心を越の雪。その初あらしあかしれん。また青柳の。いとしほらしき玉水の。さきぶりもよき都紅粉。ふみからいそのいつくしま。たがひに峰の雪とけて。千年もちぢる鹿のまつ。みちさえわたる照明の月。ときはやま。やつをの峰の玉つばき。いろもかはらで幾代へぬらん。……峰崎勾當調。

嵯峨の春

去年見にし。やよひなかばの嵯峨の春。あらしの山の山ざくら。いろか妙なる花

はるがすみ。霞みていにし雁金は、去年のうつゝか昨日のゆめか。今日はその日もきさらぎや、梅ちる軒になほ照りもせず。くもりがちなるおぼろ夜の。月にこがれて立ちやすらへば。庭の教のしらべにかよふ。松の春風いまさら〳〵に。君がおもかげ。三筋のいとゞなつかしや。ひく手さす手も又たがために。花のさかづき汲みてすゝめん。そらさへ花に醉ひごゝろ。百の媚ある佐保姫の。春のすがたやこれならん。なびく柳の玉かづら。よそほふ袖は。さくらがさねか山吹の。いはぬ色をも音づれのなきて恨みよ鶯蛙。春のゆくへはいづくとも。いさや白藤ながく〳〵し日も。あかぬ色なる花のたそかれ。……南郊作。藤永撿挍調。

秋の山

名にたかき。高雄の山に葉を染めし。木々のながめの幾しほや、霧立ちのぼる山のはに。夜のにしきの色ふかく。もみぢふみわけかひよと鹿の。しかの鳴く音に旅寝のとこの。秋のあらしの身にしみ〳〵と筧の水の音づれをきけば心も清瀧の。ながれにすめる後の月。……松葉屋楽作。藤永撿挍調。

そでしぐれ

などやつれなき心とこゝろ。袖はしぐれの時しもなきに。しぐれはそでの。そで

ころ面白や。こゝろをすます老らくは。いはひのしろと歌ふ舞鶴。……松浦撿挍調。

四つの民

かぎりなくしづかなる世やふく風も。勿來の關の山ざくら。鎧の袖にちりかゝり。花摺衣みちのくに。駒をすゝむも君がため。弓も袋を鋤鍬や案山子を友と野べのわざ。菜摘み水ひきみつぎとり。たきゞに肩をかしてなる。木の間の月をたのしみて。山路のうきをわすれめや。あめ露霜をしのぐ身の工は墨とかねてより。大宮づくり殿づくりゑぼし素袍も花やかに。賤が軒端も立てつゞき。にしきおるてふ機ものゝ。夜さむ厭はじ綾鳥のきぬ。染めて貴賤のいろわかぬ。同じながめと白妙や。雪はひとしほきぬ〴〵の。なさけ商なふにぎはひに。すがた言葉はいやしくと。心ばかりは皆やさしかれ。……松浦撿挍調。

たまがしは

あらたまる。春や三筋の糸しらべ梅が香つたふ。軒の初東風うつくしう番の雉子おとづれて。氣輕き人の歌のやすらか。月の晝圓居ほどよくふけわたり。露男郎花つゆをみなべし。

はるがすみ

ばな八橋園城寺似たり富士のけぶり。菖蒲般若鸚鵡斑あを梅。楊貴妃とびむめ。たねが島みをづくし月たつた紅葉の賀。斜月はくばい。ちどりや法華。臘梅やへがき花の実ははなの雪。名月賀蘭子。卓立ばな花ちる里。丹霞花筐うはがをりすまあかし十五夜隣家ゆふしぐれ。手まくら有明雲井くれなゐ。はつせ寒梅二葉早梅霜夜たなばたねざめしのゝめ。うすぐれなゐ薄雲のぼり馬。とかく伽羅のけぶりと。いのちのきみはとめてもいくよ。とめてもやよやとめあかぬ。……朝妻検校作調。

關づくし

人しれぬ。わがかよひぢの關守は。よひ〳〵ごとにうちもねで。戀のながれのしがらみとなりて人目の關しげきしのぶの山の露なみだ。かゝれとしても烏羽玉のよる〳〵ごとにおだまくら。ひとりかたしく衣の關路。ゆふべ〳〵に海士人のぬれて刈りほすわたづみの見るな逢ふにてやみてたゞ。それとばかりのなこその關路霞が關のかごとにも秋風ぞふく白河の。せきぢの鷄ははかるとも世にあふさかの關の戸は。あけてなか〳〵ゆるさねば。おもふおもひを我ひとりなはせきかねて胸は富士袖は淸見がせきなれやけぶりも波も立たぬ日

はしぐれの。時しもわかで。……今川勾當作調。

むめづくし

君ならで。たれにか見せんこの花の。いろはさまぐ〵さくら梅。色しは紅梅あさぎ梅。地はうすいろに鹿子むめ。きなす姿は。まだいわけなき小梅。ぶりよき信濃梅。しなと拍子をとりぐ〵に。かぞへかぞふる手まり梅。おちてこぼれてはらはらと空に知られぬあられ梅。ふりさけ見ればをちこちの。野梅山梅さきそめしより。はつねゆかしきうぐひすの。羽風になびくしだれ梅。雪かあらぬか白梅の。初花ごろも八重梅や。たが袖ふれしにほひ梅。春やむかしの思はくふかき。谷川梅よさりとては。こゝろづくしの豐後梅。こがれぐ〵てゆく船の。とまりさだめぬしま梅や。海士の刈る藻にすむ虫の。われから梅の色なつかしく。おもひつゞけて書く玉づさを。たよりもとめてやり梅の。おひをへだつる垣穂梅。ながめえならぬ庭梅の。花のおもかげ霞の間より。ほのかに見えし朝日梅。いろをもかをも知る人ならば。よしやさがむな枝は折るとも。……佐山撿挍作。爲澤撿挍調。

香づくし

六十一種の名香は。法隆寺東大寺。逍遙みよし野紅塵枯木。なか川ほけ經。花たち

からむうちに。志賀からさきの松かさや。いつのまにかは磯馴まつ。いろもふかき松がさねの薄様にかきおくる。ふみとかりねや曽根のまつ。つきぬ眞砂のたとへよる。つきせじものは海松の。位もたかき松山に。橋立ならぬ松嶋や。三保のまつばら吹く風が。琴のねさそふうたかたや。花にさきだち紅葉におくれ。月にやどかすおばしま。葉がへぬ松の世々にさかえて。……藤永撿挍調。

瀧づくし

おとにきく。よしのゝ瀧のその末は。いもせの山の。中にはや立つ龍門の。ながれも那智のまさなきに。しのぶ千鳥のおとなしや。花のかゞみの音羽山。みだるゝ瀧の白糸をくりかへしつゝ青柳に。さくらまじへし都のにしき。呉服漢服の織姫や。おまつをとめが夏ごろも。雲井にさらす布引の。瀧津瀬もこすさみだれにいづれ菖蒲かかほよ花。ひく手あまたの身なれども。いなにはあらぬ有馬山。にしにも名のみわげまきや。鼓の瀧のそのおとは。たえずとうたり翁が瀧の。おもてや箕面うらみなる。それはあづまぢ日の光。月に玉しく嵯峨野の露や。戸無瀬に落つる大井川。くだす筏にふる雪は。ちりかふ花と見まがひて。山しづかなる峰のゆき。ゆたかにつもる養老の。なはも齢をますいづみ。……飾屋次郎兵衛作。小

ぞなき。戀にしなぐ〳〵さはりがでざる。しのぶその夜の月かげや一つ。わかれおそしと鳴く鳥のこゑ。あはで立つ名や逢うてのうき名。いづれおもひのたねぞかし。……藤林勾當調。

きれづくし

いく千代と。みどりをそへし相生の。松と八千代の大內桐。民も富田の春ごとに。雲に宿とふよしの山。さきそむる。花はさながらうづもれて。雪と見つらん花うさぎ。おちくる瀧のきよみづに。ながれをむすぶ逢坂の。その在原の筒井より。倭の錦おとたれし。藤谷ぞこのさびしき嵯峨の。定家かづらやよれまとふ。をしのおもひの二重鶴。かよふてゝろぞ荒磯の。なびくすがたや。たが染めかけしうゑ柳。ふたりしづかにしのぶ夜に。わかれをさそふ雁がねの。夜も本能寺建仁寺。おとや印金けん太鼓。くれ竹屋町ふしこめて。君に引かるゝ笹鶴の。若えをうたふ鶴が岡。……かドや七兵衛作。歌木撿調。

松づくし

松かざる。軒に五葉のみどりして。まだ若松や姫。小松。常磐木祝ふ千代かけて。子の日とことよの松のえだ。こゑ住の江にさつ〳〵の。さつき木のまの春がすみ。お

れ。二世とかねにしむつごとを。あだにはなさじ三瀬河。比翼のちぎり連理の枝。なに不足なきわが戀路。とはおもへども長町に。たねまきのこすわすれぐさ。正月はありながら。母に縁なきふびんさよ。さりながら。おやはなけれど子はそだつよしおもはじと思へども。袖はなみだに道は雲。つるぎ植ゑたる山もあり。修羅の太鼓のどろ／＼と。なれば浪花の芝居がはこゝにあるかとうたがはれ。一さし舞うつ一をどり。本町二丁目をとん／＼／＼／＼。ハッア。とんとことんとんとことん。とほりたうはないかの。いとやのむすめは廿一はたち。はたちやつしつし。上手／＼と。ほむるは風かほとゝぎす。冥途の鳥とつたへきく。いまはもろとも我々も。めいどの人となるからは。ほとけ／＼とうらわらひ。小歌まじりの御念佛。すいた男やすいた妻。すかいでこれが死なれうか。あゝくだばかりくだかけのなけばうき世の夢さめて。西の國にぞつきにける……家都作。野川撿挍調。

さよごろも

きぬぐ／＼に。かはすかたみの小夜ごろも。つまこひかねし鹿のこゑに。みだれみだるゝ糸萩の。むすぼれやすき玉のをの。よる手ひく手にものおもふ身は。せめ

野村撿挍調。

池づくし

池みづの底の玉藻のみがくれてなびくこゝろのたれにかはよせんかたなのひとりねの鴛鴦の妻こふよるかの池に姿かゞみのかはの池うつる日かずもながゐの池とおもひ増田のみをづくししのびあふ夜はたまさかの池うきを猿澤きよすみのつもる思ひをいはねの池とふたりならびの池のおもにくやくだ鷄なほ鐘のこゑきかずがはなる耳なしの池またの逢瀬とそのきぬぐの袖になみだをおさへの池よかゝるえにしは飛鳥のふちとかはるこゝろやたよりも十市わきへ生田はふたみをかけしからひとのつらや我身のあきのいけときしも月のてりそふにくもるこゝろのあぢきなく蘆間をわけて鳴く鴨のおのが友よぶ昆陽の池ましてみどりの池よりもすゑながさはの池までといつか手いけにしのばずのゆめになりともまた大澤とゆめになりとも大澤とまくらばかりを手ずさみにひとりいぶせき閨のうち……深草撿挍調。

まひあふぎ

世はさだめなやうつゝなやおゝうつりかはるや死出の旅これ幽靈の二人づ

常盤ちとせや千代のものおもひ。なさけをかけよ八橋の。雲井のにしをながむれば。はつやま外山の。みねの紅葉ば色深きより。峰のもみぢ葉色ふかきより。よもにその名は。よもにその名は。高雄山たかをやま。思ひにぬるゝ我たもと。おれみつしまの花のいろ。九重にこそにほふらめ。奈良坂や。小太夫柏木。ふたりとも。とにもかくにも。たのまじものをわけよきに。しらぬはいてくものかなと。から〳〵さきの笑ひがほ。目もとにしほがへ。目もとのしほになれごろも。かのさごろもの袖ぬれて。なみだの玉の井。うらむる小歌のその。藤江吉田のおもはくは。どうもならぬにの。……元隣作。佐山撿挍調。

もしほぐさ

千代はふるともかはらぬ色はへ。ときはの山の岩つゝじ。いはねば人のこひしきものと。おもひしよりも硯にむかひ。よしなしごとを心にまかせ。かきてぞおくる藻鹽草。胸にたく火のけぶりは空に。なびくならひはいよの。末はおふせの波まくら。ひとりこがるゝ身はうきふねの。よるせさだめぬこの憂さつらさ。しらせたや。〳〵。夢に見んとてかたしくな袖に。なくねさびしききり〴〵す。つれなき人を松虫の。草のまがきの夕べになれば。ものこそしんきおもひの。さりと

てあはれを。しばしなりともしのぶ山。しのびかねたる人目の關を道しるべせよしのぶぐさ。いつそ露ともきえなば消えよ。大事かさ。あるにかひなき捨小舟。底こそしれぬ袖のうみの。かわくまもなき枕のなぎさ。たつあだ波はしげくとまゝよ。それをたよりに逢はねばならぬ。おすまでもよもや露の身はあらじ。このタぐれを訪はゞとへかし。……佐山撿挍調。

こひごろも

あだなりと。名にこそ立てれさくら木の。初花染の戀衣。わかむらさきやこむらさき。ゆかりもがなと夕霧の。たちまよひにし薄雲や。うはのそらなる君たちを。なにとておもひ染川や。身は浮橋のうきねにも。せめて夢には打ちとけよ。閨の月さへ枕にかよふ。ひとりこがるゝ夜は小長門の。そのしのゝめの鳥のこゑ。亂るゝ露の玉かづら。いつ逢坂とこゝろは石州。とめて幾世もかをるはつねね。瀧の白玉なみだの淵に。しづむおもひはいづみ川。いつみきとてか。戀しかるものうたひしが。よしやなげかじの。かなはぬの。とてもさだめなきこそ浮世のならひ。きのどくにいよへ。どはおもへども捨てがたき。人を初瀨の山の井の。むすぶちぎりの利生のあらば。せいしせんじゆのそのいちご。いまや几帳とまつがえ

ずゝのたはぶれも。聲ちり〳〵にわかれゆく。われ通ひきと吹くあらし。よそにな告げそ朝がらす。……知泉作。小野川撿挍調。

こむらさき

君こずは。閨へも入らじこむらさき。わが元結に霜は置くとも。またのあふせに夕ぎりや。いなばの山のな。峰よりも。移し植ゑし辛崎の松のな。みどりもこながとや。身はうきふねの夜のなみ。ともゑの君やこがるらん。西をはるかにながむれば。日影かたぶく森見えて。金龍山とはあれとかや。ほまれ名たかき異國まで。楊貴妃虞氏ぎみ李夫人も。これにはいかでまさらんと。おもひよるべの波まくら。かたしく袖の。かわくまもなき沖の石。なには入江の身は捨小舟。しづむおもひは我ひとり。それはへ。今朝のわかれに我ひきとめよ。宵の情にゑひうかれ、河内がよひの生駒山。その名たかをの若かへで。見んとばかりにちぎりつゝ。たきのこしたる薄雲や。伽羅のけぶりと。かをるはしんぞ思はくじや。すがたを見れば清原や。ふかやばなりしおてきたち。うき世をしのぶゆせき笠。雨はふらいで戀がふる。身は八橋のさはやかに。着なす裳裾をかいどりて。われ舊妻はなほいとし。やれなはいとし。こがれこがるゝ身は對馬ぶね。戀のねとりのおのづか

ては。浮世じややつさ。いつさて御げんのとにかくに。……佐山撿挍作調。

玉くしげ

たまくしげ。二つのいろのまことうそ。わけ賣る里のよすがとて。あだし言葉の藻鹽草。けぶりかすかに飛びみだる。ほたるの宮のあくがれし。その玉かづらかりにいま。いかなるすぢの糸による。ものならなくにわかれあふ。戀慕のしらべほのかにも。つくりごゑして呼子鳥。おぼつかなしやかくしぎみ。そのかずなりしもろ人も。名のみのこりて今はまた。むかしをしのぶ夕まぐれ。顔に扇のいやらしく。目にいる色の風俗と。ときのなかだちさそひきて。ながれのまこと汲みてしる。茶屋のしなづま實とは知らで。花のひかりもいさぎよく。見る目にぬれし汐ごろも。海士のしわざもないものか。なんぞのやうにさりとては。宿もさだめずはしたなく。宵のむつごとよそになり。氣はみじか夜の長まくら。しかけ言葉の口説とも。よそに下紐。とけぬ心のあれかし。この身をすてゝ逢はうに。たいこ不首尾の假寢して。つきおこしてもにくからぬ。どがをば酒に仰のすゑ。空おぼれせしきぬ〴〵に。八聲のかねととりさわぐ。後朝の天のあかつきに。かへるさ繁きたはれをの。おのがさへづりさま〴〵に。小歌淨るりだてらしく。げにか

摺ごろも。井筒によりて玉の井の。ふかきこゝろの水かゞみ。くもらぬかげは大君の。行幸またなん・大原山。青葉にもるゝほとゝぎす。初音をけふぞん龜菊や。うたふ長歌ながゝれど。ちぎる妹脊の床のうち。またの縁を大町と。名殘ををしむひとたけを。袖にをとめの明がたは。薫る立花いにしへを。しのぶもじずり奥州に。こがね花さくあらかねの。上もうごかぬ萬代と。ちかひてたのむ玉かづら。かゝるおもひをわかくらの。なさけに幾世大橋の。淀の川邊の浮舟も。ながれゆくへは和歌浦や。七浦かけてながむれば。あづまの方にこぐ舟の。ともに櫓拍子舟歌に。こゑきよなぎさまぎのもり。あとに鳴海のはる〴〵と。きつゝなれにし言の葉を。花むらさきの八橋も。それは東路こゝはまた。都にちかき難波がた。さんでにまさるけしきをも。筆に染めたいかくばかり。

春の幸

天の原。あかねさし出づる日かげには。春のいたらぬくまもなく。雪間のくれのわかやかに。いろづきそめし朝より。まづあらたまる皆人の。心の花の紐とけて軒端の梅にかをりあひ。みかきが原の姫小松。引かでも千代のいろ見えて。雪消の澤に摘む若菜。のべの早蕨をりはへて。みやこぞわきて佐保姫の。なさけをつ

ら。君とわれとの中とほし。とかく人目のしげゝれば。まがきながらの御げんといへど。とがめられてはなりませぬ。ういことそりやそうさ。江戸優者うい出來た。……湖十作。朝妻撿挍調。

花のえん

よしや吉野の花よりわれは。その夕ぐれのをりからに。かいまみてにし面影を。わすれもやらでうか〳〵と。うつる心やむらさきの。色に出でたよはづかしながら。花によそへてやる文を。見よかし見よかしちらぬまに。いとゞ心をいよ筑紫ぶね。やるかたわかぬ物おもひ。文のかへしもいつとなく。まちしかひある今日の日も。はや入相の花のえん。逢うてぞ今宵新まくら。こゝろとけたよ早いつのまに。一夜ばかりか桐が谷。八重も千代も。しんぞかはるなかはらじ我も。花には嵐。よしや吹くともちぎりたえすな。……朝妻撿挍調。

松のえん

みよしのゝ。よしのゝ峰の薄雲は。花かとまがふ初春の。空にぞ遊ぶ千代鶴や。雛の羽風ものどかなる。三月のころを三千年にさくてふ桃の今年より。なほぞにぎはふこの里の。常盤の松に色そへて。かゝれる藤は春日野の。わかむらさきの

やうひらく。大原野の花地主の櫻。近衞どのゝ糸ざくら。さながら雪を庭にしく卯月になれば賀茂日吉の。みそぎ祭をことゝせり。五月五日は端午の節句。軒の菖蒲やよもぎふの。つゆ葺きむすぶ藥玉は。いく千代かけていはふらん。なほそれよりもおもしろきは。京しらかはの童部ども。にたり太刀つくり刀。菖蒲兜を結搆し。四條五條の河原にいでゝ。手ごろの石をおつ取つて。打ちつ打たれつ追ひつ追はれつ印地のていさながら見せたき遊びなり。さて六月は祇園の會。上下京の山くるま。かたるもつきせぬ見事なり。七月七日七夕の。あふ夜妻まつ星やかた。河瀨に車をあらそひしも。乞巧奠をいはふなり。田面の雁と一つれも。おもひの色は見えねども。露むすびたる玉章は。よそにゆかしきちぎりの中。なほそれよりもおもしろきは。重陽殿のおさまつり。名酒のかずをとゝのへて。南陽の菊の名をかざり。ひと〴〵きこしめさるゝ重寶の酒。めぐみによれるわれらまで。飮んで榮花にほこるなり。おつぱれその酒がな。いつぱい飮ませて汐汲まそうよ。わすれたり。今ひとかへり汐くまん。おそくかへらばたのみつる。お主の氣にもたがふべし。いざ濱ならし汐くまん。

なみまくら

くすころなれやさくらをかざす宮人も。花のたもとを花にまた。かさねてにはふ華頂山。花よすがたよとり〳〵に。色音もふかき百千鳥。ころにたぐへて春かせも。かすみ吹きとく絶間より。なびきぞわたる青柳の。糸もてながき君が代を、くりかへす春もつきせじな。……今木勾當作。小林撿挍調。

冬の幸

君が代の。ちとせのかずも蘆田鶴に。よはひしあればかぞひとりて。和歌のうらわの夕あらし秋なき波の花もまた。冬ぞさかりのいろ見えて。ふりしく雪はとみくさのみつぎものとやみそなはし。なほ天皇の御代さかえ。こがね花さくあづまぢのみちのく山もよろづよと。三たび呼ばふや五たびに。かへすたもともそのかみの。よしのゝ宮にをとめこが。ことぶきそめしためしとて。豊の明の篝火も。神代のひかりかげとめて。天つめぐみの深みどり。千尋の竹も千代の松もげに年さむき風のまへに。おのがよはひをあらはして。難波の春のこの花も。まだ冬ごもるほどぞゆかしき。……今木勾當作。小林撿挍調。

はまならし

たとへば都のおもしろきといつぱ。いつもながら春の頃かとよ。西山東山の花

とゝぎす鳴きつれ。くるはな。くるは過ぎにしさいこのさ。人なつかしやゆかしや。七つなまなか。馴れてくやしや馴れまいものを。あへばわかれの鳥がなく。夜はしのゝめか。八つ山伏すがたにさんまをかへ。兜巾。篠懸錫杖を腰にさいて。京洛中の花盛。ひとへふたへや三重八重九つ。戀にきん〳〵きましよか。大原しづはら八瀬のさと。柴めさぬか。露ふみわけて。十でとうからちらめく星のかず〳〵。おかつきの明星が。西へちろり東へちろり。ちろり〳〵とする時は。扇おつとり刀さいて。太刀のつかに手をうちかけて。いのうよなせ。もどろふよと。いうては袂にとりついた。いとしけりやこそしとゝ打て。にくか打たりよか手がそれた

……野川撿挍作調。

あさがへり

あさがへり。なほ夜あらしのなごりある。局の扃さしこめて。まだむつごとやのこるらん。のぼる。畷のよこぎりに。橋は大路の家遠く。かはらいとなむうすけぶり。宵にたかくまきのぼり。草かふ駒のいなゝくや。牛の童の聲たかく。宵にむすんでおしたにたゝむ。土手の番する身はやすし。それしだい。人みなかくのことわり。沅湘日夜ながれさる。川にまたゝく早小舟。いづれの人のうつり香ぞ。蒲團

五月まつ花たちばなのかほよばな見るにこゝろの深見草。ふかき思ひのうさつらさ。色に出さじとしのぶぐさ。しのぶかひなき。いよみちのくの。壺の石文かくぞとも。岩ねの山の岩つゝじ。いはねば人のこひしきものと。うらみながらも月日をおくる。さても此身はあるものか。しんぞつれなき。しんぞつれなき命かな。さあ〳〵なにがへ。とは思へども。なさけへだつる袖あらば。賤が伏屋に。月はやどらじと。ゆふべにそよとまがきの。露ふくかせのおとづれて。つたへしかひや荒磯海。ちん〳〵ちり〳〵磯うつ波に。とても濡りよならもろともに。ふかき逢瀬の波まくら。かはすばかりの荻の上風萩のしたつゆ。……朝妻撿挍作調。

かぞへうた

ひとつ人の迷ふ戀といふ字はむくつけだにも。大宮人はいとまなき戀路さくらかざして木の下かげの露に。ぬれにぞぬれしわが小夜衣。ふたつ二葉のまつち山の。松のあらしに。その夜の夢をさまさせ。わかれぢとうきとつらさを。三つ三吉野のよしのへござれ。えゝござれ。いつも長柄の山櫻。のんやほ。四つ世の中のひとのこゝろはしな〳〵にわかてども。五ついつゝにて。色といふ字にひかれては。きゆる命はもちろんさ。六つ昔の袖かをる花。たちばなの夕ぐれに。山は

をわけて。ゆくはうらめし飛ぶ雁金の中にすこしは都のそらに。なごりをしくもあるかと見えて。十や十一十二や三や。おのがさまざまむれゆく中に。こゑもかわいくおくれて飛ぶに。しばしやすらへ文ことづてん。やがて紅葉の照りそふ秋に。こゑを帆にあげ皆つれだちて。わたれ都の池水に。……小野川撿挍調。

和琴

初秋風の草まくら。ゆふしの山の木のもとに。おつる一葉の夕露も。身にしむこころの宿とひて。まどろむ夢に誰としも。しらで見えくるたをやめの。おもへばありしいにしへに。きゝつる桐の和琴。なほも思ひのくちずして。あらはれけるか。いかにあらん日の時にかも。こゑしらん人の膝のへ。わが枕せんと。一首の心をのべたりし。やがてかへしの言葉にも。ことゝはぬ。木にはありとも。うるはしき。君が手馴の琴にしあるらし。それは幾年ふることを。めづらしや定家卿の。戀のこゝろによせたまひて。むかしきく。君がたなれの琴ならば。ゆめにしられて音にもたてまし。それだに今はとほき世を。なほかたらんといふがうちに。秋の夜ながきかりのとこ。桐にしたゝる軒の雨。琴のねにやと聞きなせば。夢は昔にさめにけり。……深草撿挍調。

いふせくうちかづき泣きみ笑ひみ物がたり。戀の友どち打ちねもやらで。いつか見附に着く舟の。おけゆくまゝにひましろく。旅だつ駒の鈴のおと。今朝も逢うたよ淺草橋で。うれし〳〵。なねつそれたよやよやの舟でしにうれし〳〵。おるひはふかく寝まどひて。日もはやはるかにたけのぼり。びんはしたなくおをざめて。人めまばゆき垣のうち。かくては首尾もいかゞぞと。心誓文いくちたび。ゆきてかへりて又いそぐ。むかへばかはる人ごゝろ。いづれ戀にははてしなや

……市川撿挍調。

新子の日

今日は子の日のあそびといへば。思ふ友どち皆つれだちて。ゆくや小鹽のみち〳〵見れば。賤がしわざのいとまと見えて。こゝに羽根つくかしこに手鞠。たまやぶり〳〵春めきわたる。たれが垣ねもゆかしく見えて。しだれ柳のいと青やぎて。風にたよ〳〵波よるかげに。ひばり山雀ひよどり頬白。おのがとり〴〵調子をわけて。こゑものどかにさへづるもとに。ながき日かげも暮方ちかし。いざやかへらん我やどへ。春は越路へかへらんころを。いつの年よりたのみやおきて。かゝるさかりの花さくころの。こゝろのどけき都の春をすてゝ幾重の波路

もさつゝなれにし在原のなりもかたちもすきびたひ。月の眉ずみむさし坊。なゝつ道具の七ばけど。かはれどおなじ色のみち。しばもておそぶ(芝衒)在所ながらもさがみの海士のゑがほもよしや難波津に。うら〱までもかけて見る。此一軸の朱鐘馗さんは。國を守りの神かけて。さかゆる春こそめでたけれ。……百喜作。津山松島雨撿挨調。

風のつて

花の香をたぐへし風もそれかとよ。筆にこゝろの色にほはせて。ひと夜あはねば鶯の。ねになくばかり來ぬ人を。さそふしらべにやるせなう。夕しほ待つとなつかしく。かくもそゞろの里のふみ。……下駄源作。松島撿挨調。

八重の霧

玉ぼこといはるゝものか戀の道。まよふはてしもなか〱に。よその見る目にたらちをの。うき名立たうとなんのまあ。はもしにそむるゑにさへ。うれしおますのかずつもり。かりにきたへと菊の露。丸寝はせまじ着せ綿の。ふかさもわかぬ八重の霧。……茶ト作。松島撿挨調。

おこしぶみ

三つのいと

うき世とは。いへどもかゝりの世なりけり。夢路をたどる道草に。花も青葉も紅葉も雪も。こゝろにうかべ心にはらふ。ゐかゝぬうちはそむかずも。われにまかする三つの糸。とりてしばしは三さがり。また二上りのあだしらべ。此道しらぬ人はたゞ。ふたつまくらのかずかさなりて。うらみられしもちぎりぞや。いつをさだめぬ玉のをも。人なみ〳〵の夜までは。つなぎ留めうと留めまいと。こゝろ一つにあるぞかし。……深草撿挍作調。

いつみがは

見わたせば。みどりの若葉しげりつゝ。夏きにけらし白砂の。卯の花がさや。むすぶ手すゞし遣水の。風情ありけるさゞれ石。いはほとなりて苔のむすまで。いきのまつ千枝にさかえて。長生殿の月日もおそくめぐりきて。くめどもつきぬ泉川。なみさへたゝぬ御代ぞめでたき。……烏丸家女房作。深草撿挍調。

江戸みやげ

假そめの。ゆめも浮寝のあだまくら。むすぶちぎりは深見草。花にたはるゝ越後獅子。笛や太鼓の拍子よく。つく杖たよりに都をさして。のぼる法師のからころ

りおはき人ゆゑにおたらうき身を筑紫ぶね、こがれうかれて今こゝへ。人目も恥ぢずまよひくるそれじやゝ。まあそれじやわいな。それ粋なごしんぢう。さて氣の通らぬうらめしいせめてなさけの捨ことば。岩根の松に年をへて。ちぎらば何かおもはんと身を恨みかこち艸露よ時雨よしのゝめよ。せんかたなみだに伏ししづむ袖の契もうたひし歌も縁と月日を松の風……山本喜市調。

花づくし

けしと見し若木の楓きりしまや川の柳におもだかの萩より椿をみなべし。おもはぬ草にさきとめられて今は野山の一つまつ。さくら小手鞠あやめにつゝじすむはゆかりの藤のかげしのびてうつす宿の梅ひろい世界に植ゑながら。狹うたのしむ牡丹とぼたん。こんな雞頭が唐にもあろか。花さく里のあるならば。人もたよりてうらやまし。

風呂入曾我

雨のつれ〴〵大磯ゆかし。君戀し。われはうかべる雲のうへ。明日をも知らぬうき身ぞと鬼王をちかづけて。今日は長者の風呂日なり。こひしゆかしきその人とふいつふかれつ或はまた。煙くらべん富士淺間。のぼりつめたる戀の山。もし

いづかたへないてゆくらん時鳥。まくらの山の迷ひみち。きくたび〳〵にめづらしき。いつも初音のこゝちして。かあい〳〵の忍音も。盡きぬなごりの有明に。きつゝ鳴いたは朝がらす。……幸作作。松島撿挍調。

はながたみ

梅のゆのすきはかをりの癖でもあろか。ふかいあさみの糸ゆふかけて。櫻は花に咲きやいづとも。ちりなんかねてもひやくつねの嵐のきさらぎつらや。今朝はあだなれ。あゝあだなる露と。おきわかれにし常世の國へ。花にいにしかつゝいつか。……馬田江作。山本喜市調。

くるわたゝき

戀の奴がまゐりそうで。やどかろとまうすやどしかねたるわが心。やるかたなさにな。かきくれて。これまではまゐりた。あはれと思へ日に千たび。かよふ心のものいはぬ。そなたからとの傳を待つ。さてもきこえぬほとゝぎすないて明せしなみだには。石のまくらも朽ちぬべし。こなたばかりに思へとは。いつそ死ねとのかねごとか。とても君ゆえ戀ひ死なん。命のほどはをしからじ。むくはん君がかなしさよ。とにもかくにも世のなかの。をんなごゝろのまてとなし。いつは

鬢になにの撥鬢そりさげは。まゝにかざらねそゝけびん。四方がみから結ひたてゝ。ぎんだしさへもないやうな。たとへつぼねへ下髪の。ひつてき髪のつとなくとせみをり／＼のあはせづと。思ひあうたるたけながの。またの世までも。かはらぬ色の長かもじ。鶴のかうがい千代よろづと。ゆひたてがみの太元結。むすぶの神にかけもとゆひのすゑかけて。……坂本半太夫調。

おちや乳母

おちや乳母の癖として。せなに子をおひ寝させておいて。ゐんのこゐんのこというたものは。目なかけそよの。花のをどりはなさて。はなのをどりを一をどり。こゝな子はいくつ。七つになる子が。いたいけなこというた。殿がはしとうたうたてもさてもわごりよは。誰びとの子なれば。定家葛かはなれがたやの。はなれがたやの。川舟に乗せて。つれていのやれ／＼神崎へ／＼。てもさてもわごりよは。踊子が見たいか。をどり子が見たくば。北嵯峨へござれの。きたさがのをどりは。つゞらぼうしをしやんときて。踊ぶりがおもしろい。吉野初瀬の花よりも。もみぢよりも。こひしき人を見たいものよ。ところ／＼おまゐりやつて。どう下向めされ。どがをばいちやが負ひまゐらせう。

母うへの十郎はと。おんたづねあるならば。秩父殿より内談の。御事ありてと其ほかは。汝が日頃の智恵出だし。よきに御きげんはからへと。そゞろことばもそこ〳〵に。あわてながらも世をしのぶ。頭巾は時のかくれ笠。羽織はかりのかくれ蓑。曾我の里から大磯へ。いろにひかれてなへ。まよひゆく。かの深草の少將は。木幡の里へ徒歩はだし。それはやう〳〵九十九夜。我たねうゑし戀艸の。三年七とせ後の世も。おなじ蓮とちかひてしゆけばやう〳〵鳴たつ澤の。やどがよければ首尾もよや。……金屋金五郎作。玉川半太夫調。

髪すき曾我

みだれし髪をすきかへし。いとし男のためにとて。おもはぬ人に誓文の。罰もあたらば三味線のびく手になびけ黒髪の。わしはおまへの前髪の。ながきちぎりと筋たてゝ。九十九髪二世もさんせも。かけてむすんでおくれの髪に。かたき油をつけてすけ。つねに辛苦の。つねにしんくの。心そゞろに茶筅がみ。うつればかはる髪の色。はね元結のびんしやんと。ところふうなる鹿兒島を。まことに駿河ののんこ髷。とけぬ髪筋はてしなき。わしもこゝろのたけをりに。みぢんじよさいは投島田。水にゑをかく鷗づと。かわいがらすの黑かみを。ゆひたい事じや糸

れに。袖うちおはひいそぎゆく。心も足もとび田のはか。ひとむら二村うちすぎて。こなたを見れば大江の岸。岸の姫松いく世かも。しのび逢うたる戀草の。むすぶえにしやこつまのさと。はや思はずも天下茶屋。しのゝめ近くなる鐘はげに住吉や淺澤の。たつときき寺ときくからに。おさゝはならぬおやく\の。ふかきめぐみも水のわわ。死んだらさぞやかなしかろ。ゆるしてたべとくどきなく。蛙の聲もあはれそふ。……さんし作。鶴山勾當調。

くるわのさが

この里に。わけくれかゝる身のほどを。たれ白雲のよそからも。くるわのさがとうたはれて。おもひきつても今さらに。かあいをとこにあひたいと。見たいはやまぬ山かづら。……羽積作調。

くもゐのそら

たらちねのゆるさぬ人を戀するは。をうなの本意にはあらねども。雲井の空にめづらしい。青いつむりでしやんとして。おんな殿御につかうまつりてぞ。さぶらはゞ。ひごろに汲んで見たかりし。おはしたの持つ振釣瓶。水むすびあげ袖ひぢて。うちまき炊て供御たいてと。たのしみしかひもなう。戀に上下のへだては

つまぐれなゐ

春草の。をを〳〵として一しほに。わきてゆかしき琴の音の。四方にひゞきてかをいらし。つまぐれなゐにすみそふる。おくる小弓にかくはちがはじ。

しぐれの松

くれてゆく。あやめもわかぬ五月闇。こよひ一夜を千年とも。ほんの夫婦とおもひ川。わたりかねたる川竹の。身はまゝならぬ身なれども。死ぬる覺悟でをちこちの。みちの案内は知らねども。あと見かへらぬ死出のたび。はてし長町うらづたひ。こゝろ細道ゆく野邊に。月も見えねば戀のやみ。たがひに手をとりかはし。あゆみならはぬ二人がしよてい。とりなりしどけなく〳〵も。つひかゝへ帯ひきしめて。水ももらさぬ鴛鴦の。つがひはなれぬうきおもひ。あれ〳〵むかふに今宮の。廣田の森とながめやる。身にしみ〳〵と小夜あらし。うき名ところと名もたかく。世にもうたひし藻鹽草。をんなの袖の縫紋も。もとゝいふ字をみつもんじ。やつれすがたのはら〳〵と。をとこもおなじ振袖の。年もあひおひ鶴と龜。松竹ぬひの上着のもやう。ちぎりは千とせ百とせに。かはりはてたる身の上とたがひによりそひちかよりて。人のみぬまのさゝめごと。なみだの雨やさみだ

物がたり。……住吉屋嘉兵衛作。伊勢屋みほ調。

をんな手前

世の中にすぐれて花は吉野山。もみぢは龍田茶は宇治のみやこのたつみそれよりも。さとは都のひつじさる。数寄とはたれか名にたてゝ。濃茶の色のふかみどり。松の位にくらべては。かこひといふはひくけれど。なさけはおなじ床かざり。かざらぬ誠わかしあふ。それや人目の中くゞり。中立いらね口切と。のちはうき名の下地窓。かげもる月のさしつけて。それといはねど世の人の。口にさる戸もたてられず。あうて立つ名が立つ名のうちか。逢で焦るゝ池田炭。すみを雪かといふたが無理か。その白炭を雪と見て。ゆきにはあらで霰灰。くだけてものを思ふ夜は。ゆめさへろくに水こぼし。水さす人にふは〳〵と。のるは三羽のからはづみ。かるいはいやと飛石の。すわらぬ胸のうらおもて。帛紗さばけぬ心から。きけばおもはく違棚。あうてどうして香合の。ひしやくの竹はすぐなれど。そちは茶杓のゆがみもし。くせつに解けし茶筅がみ。にくいあたまの鉢たゝき。瓢箪ならぬ炭とりの。ふくべの花は夕がほの。それは棗のたそがれに。五條あたりや四畳半。よしや氣長に待合はし。茶臼のめぐる月と日の。あらば花さく花活には

ない。賤が伏屋にもる月と。下々もうたふじやないかいのと。くれなゐの袴ふみしだき。二十四の袖ふりたてゝ。おんむつかりの。そともに鐵棒雜色の聲。あはや人よとおしいれの。から紙かたくまもれども。鬼一口にくひてげり。……石上甘吉作。稻葉春倉調。

いさしきはだ

磯まくら。苔のころもにあらねども。あづまぐゝりに合紋の。袖にせまいと心の起請襟や袂へたゝんでくけて。なんの氣がねもいとしとはだに。はだにいとしとしめしあふ。ことばの糸のひんむすび。とけて待つよを緣のはしづめ。……青瓦作。八重崎撿挍調。

桐の一葉

はじめあり。をはりあるも浮世かな。めぐる月日と來る秋も。朔日あしたの山かづら。桐のひとはの露ときえ。もつたいなやな御佛は。あだしの雲とたちのぼる。あらしのあとは空蟬の。もぬけのからはいさしらず。この日の本に聞く人ごとに。ぽんにこゝろの本意なさを。ふたゝび拜まん御奉公。田夫野人も花にすむ。みやこの人もとも力。一佛じやうの因緣ぞ。千艸にをしむ虫のねの。今をむかしの

るこそあはれなりけれ。

新こゞぶき

くれなゐも。にはふすがたの糸柳。みどりを垂れて昔をしのぶ。みどりをあげて千年をまねく。經ぬらんの松といふ字を縫紋の。山のゑくぼに殘んの雪の。かあいらしいじやないかいな。お月さんはいくつ。琴の緒に。ひとつます〳〵ことぶく、糸の。ねん〳〵ころりころりんと。かぎりあらじな新玉の。春にかへる。暦も千代のしをりかな。……大坂屋都友調。

いつゝがしは

關の清水のかげふかく。むすぶ手に。かさね柏のもみぢ笠。しぐれそめにし宵暗の。やみはあやなし晴間まつ。やどりにはよし松のもと。なほ幾千代もかはらじと。ちかひしこども人はいさ。のちの。契りは黒髮の。なが〳〵しくもあけやせん。

……堂島海彦作。上板揄揆調。

くさずりびき（一名おごけそが）

和田の一門。九十三騎を引き具して。長者のもとにうちよりて。こくどの魚のいおりぐひ。あとはら病ますの大遊山。よひ三日の酒盛は。事に乘じておもしろや。

なれぬ火防よりそひて。うきもはなしも初昔。むかし斷のないばゝと。なるまで釜のなかさめず。緣はくさりの末ながく。ちよ萬代もへ……伊勢屋みほ調。

かれいのいさ

かきくれて。心の闇や乙月のすゑの三日の夜半の風。身にしゞみがはしのびいで。死出の晴着のしどけなく。顏は見せじとおしつゝむ。わたなべ橋を打ちわたり。こゝろもうはの空色に。こよひ命はちりぬんの。上着もすいな黑繻子の。帶ときそめてはどもなく。縁ゆゑ死ぬるうき身なら。たれかとめ野が捨ことば。たゞこのうへは彌陀たのむ。西横堀を一とすぢに。あゆめど足もたよ〳〵と。男はさすがさむらひの。愚痴といふ名もにくからぬ。かくごきはめてなみださへ。ながう長堀ほどもなく。むねは早鐘つくごとく。はや初夜もすぎよつばしを。もしや追手が何ものと。問ひと問はれつするときは。露とこたへてきゆる身に。なんのゑびすの橋かけて。さいはひ町をいのらんと。おもひ切れども切りかぬる。えんは因果な二人が中。こひし幸七と。なくは冥途の鳥もなく。夜はほの〴〵とあけゆけば。あれみや今宮ふゆがれの。けしきとゝもにくちはてゝ。未來は一つ蓮葉で。たのしむならば遠慮なく。廣田の森の木蔭をば。これが此世のさかひ屋と。な

兒。わげたる手本が百六つ。小謠わはして十六番。されども御坊の御恩にきず。すつぺりかへしてなんにもなし。おとにのこるものとては。水一石に千人力。小粒にくだいて左右に入れ。ふるした帯のもの、げに。がんぢがらみにからげつけ。そつとたしなみ候ぞや。三枚の草摺の早緒が切れて。水のむか茶の水、まゐれ水まゐれ。有馬殿よりもらつたる。蠟燭箱を踏んぬいで。三里せつ骨すりむくか。二つに一つはじやうのものとびつくともせず居たりけり。朝比奈其時身ぶりをかへぎよとうがとうのふでぐるひ。ちからがみをがんぢとかめば。どうのすぢがひたいにあがり。任脈すぢがこぶしにさがり。あれたる骨は巖のごとし。きうてうの藤かづら。松をからんで木枯に。もまれて立てるが如くなり。朝比奈象の怒をなせば。五郎は虎のきをはつて。たがひにえいやと引く力に。三枚の草摺きれて。左右へばつとぞのいたりける。いやえいぢよき〳〵。さるによつて今の世に。靈佛靈社の繪馬に掛け。扇うちはのばさら繪にも。腕押くびやき草摺引うでの骨くびの骨。どれこれ〳〵かいてお見しやれ。びりこくたいしはかたわう。鬼を茶のこのきんぴらだんべいはゝ。おつかない勇力やど。いまにのこりし力こぶ。……男徳齋作。若山五郎兵衛調。

かゝるところに障子のあなたに。金物の音がからりとした。百雷電の雲はづれ。無間那落の底ぬけて。鍋の鑄懸はをりないかと。間の障子をさらりとおくれば。びんぼあふれの荒五郎。大腹巻を着ながし五尺八寸の大太刀。片岡風にさしてなし。なんにも食はねど高楊枝。そらつふいたるありさまは。さてもてあつかうたる客來なり。朝比奈が申すやう見すけなりもましませば。ちつと座敷へおとほりあれ。ついでに力を引き見んと。つか〳〵と立ちより。草摺三枚引つつかんで。こりやどうでんすの懸物よ。時致にんがりともせず。いやだ。びやくえで候御めんあれ。朝比奈聞いて。ゆつても彼奴は若輩なり。下手にかゝつてそゝりおくれ。小歌ぶしでやつてくりよ。なんぼかくしても。曾我五郎は知れる。こゝろこんみじかうて。脇ざし刀はながうて。色はまつからかいで。こわだかに。どつこいどこいどこのゐなかのお若衆ぞ。ひらに一座をたのむによ。此うへは是非に座敷へ出ださんと。えいやつと引いた。ちつともさらにはたらかず。日本無双の朝比奈が。二王にまさる力瘤。左右の腕くび節だつて。むねにおはるいかり毛は。碁盤の面に銅の。針すりならべたる如くなり。時致につこと打ちわらひ。うさみくずみ川津にて。だいおちからと呼ばれたる。川津おやぢが懐子。箱根別當のほとり

どんに。むかふの長押のなが長刀は。誰がなげしのながなぎなたぞ。兵部がまへを刑部がとはる兵部が屏風を刑部にかはせて。ぎやうぶが持たずは。ぎやうぶが坊主の屏風にしよ。むかふの山の。つる〳〵〳〵〳〵つる〳〵くびは。白つるくびか黒つるくびか。眞黒くろ〳〵黒つるくびを。ひつたてふりたて祈れども。すこしも奇特はなかりけり。僧はおはきに赤面して。かさねて奇特を見せんとて。袈裟もころもゝおつとりおいてな。殿樣のながばかま若殿さんの小なが袴。武具馬具ぶぐばく三ぶぐばぐ。これをあはせて六ぶぐばぐ。折敷に箸百八十せん。天目百ぱい茶百ぱい。棒八百本たてならべ。せきたてもみたて祈れども。も奇特はなかりけり。僧はおはきに怒をなし。げにわれとても上方僧。書寫山社僧の總名代。今日の奏者はしよしやじやぞ〳〵。所在も世帯もこれまでかと。錫杖がら〳〵がらりつと。ふりたて〳〵いのれども。ちつともそつとも驗はなし。いで法華經にていのらんと。妙法蓮華經。だらにはんだい二十六。いのりける。げに御經の功力にや大願成就。ありがたしと。僧はくゞりにくいくゞり窓。くゞつて庭の古胡桃の木の。ふる切小口のふる枝の。ひきぬきにくいを引きぬいて。新茶たてう茶たてう。濃茶たてう茶たてう。青茶たてうと。はつはのしようちはら

新あしかり

名にたかき。難波の浦の夏げしき。風にもまれし蘆の葉の。さは〳〵〳〵も音にきく。こゝには伊勢の濱荻を。よしやあしとは誰がつけし。われは戀には狂はねど。戀といふ字にまよふゆゑ。さりとては白鷺よ。とゞまれとまれと招く手風に。ゆきすぎて。またも催す濱風に。蘆もさはだち磯も波。松かぜこそはざゞんざ

こんきやうじ

さるほどに。こんきやうじの。こんきやう勤行法印が。座のまん中につつと出て。こんきやうじの。こんきやうごんきやうはふいんが。法力をあらかた御目にかけ。かけたてまつる御寶前に。やがて壇をぞかざりける。百八の燈明の油には。白胡麻殼やら黒胡麻殼やら犬でまがらやら胡麻がら〳〵ひでまがらまでまがらの油を立てられたり、さてにうもくにはめづらしや。ひつぺぎ長へぎ乾はじかみ。なた豆つみ蓼つぶざんせう。野なでして野ぜきちく。菊桐〳〵みききり。これをあはせて六きくきり切つてかけたる幣帛は。大奉書中奉書小ぼうしよ。さてまた本尊にかけられしは。のら如來のら如來みのらによらい。むのらによらい。これをあはせて十二の如來。またそれをあはせて二十四のら如來の。しん

あふぎ蝶々菜種の花さきみだれ。すいな嵐に假寢の枕。ぱんとすねたる外の花。水はなさけの中なほり。しどけないのが蝶のくせ。とんで枝葉の葉がくれは。かあいらしいじやないかいな。

同かへうた

一夜あはねば。〳〵案じられ。いやな座敷も勤のならひ。野邊のへだてをかんざしに。むすんで見たり辻占を。無理にあはした疊算。ねずみなきする心根は。かあいらしいじやないかいな。

みつのくるま

三の車に法の道。火宅の門をや出でぬらん。夢か現か朧夜に。月毛の駒に片手綱。ひきとゞむれば春の雪。とけてみだるゝわがおもひ。あまりてにくい其人を。たれにそはせんねたましや。袖にながるゝ血のなみだ。色となさけの二おもひ。ふかき心のつね〴〵に。おかりあかせし戀艸の。穂にいでそめし面影に。すがりつけば八重櫻。風にみだれし亂髮。いひがひなくもころされて。身はあだしのゝ露霜と。消えにし事のうらめしと泣くより外の事ぞなき。さいた櫻になぜ駒つなぐよのうえいさ駒がいさめば花がちる。いさめば駒が。こまがいさめば花がち

りるれろ。

千年もの

いろかへぬ。松にみどりと子の日しして。千世とかけなば八千代とてたへ。嬉しがつたりがられし袖に。つゝむはむかし今は身に。あまりてふかき瀧つせの。玉ちる水ともろともに。のぼりやすらん淀の魚。……鯉吉作。峰崎勾當調。

新秋の夜

あだしのゝ。萩のすゑこす秋風に。こぼるゝ露や川竹の。ながれぞ深き戀の細道たどりきて。河邊の霧の中わけて。ほのかに見えし月かげに。もしやそれとも白川の。ほのふく風もしみ〴〵と。戀のしがらみ人目の關に。かはるまいぞや千代見草。……唐金茱作。藤永撿挍調。

一つくづや

ひとつく〴〵家に。〳〵四季の花。すいな水仙むろざきの梅。いとしかわいと撫子の。よれつもつれつ糸ざくら。かきね卯の花かきつばた。柄竿唄夫婦わひ。かわいらしいじやないかいな。……東都茱作調。

同かへうた

蝶戀花

さしながら蝶の羽色になかへるものは、空にちらすとあおに見なした人はわしやいや〳〵よ。車のこまの名にたつとても。いとはじ馴れこしほどの花の苧環くりかへし。春の柳の糸にむすばん。

夕の雨

見たい逢ひたい。かくてもすぐる身ぞつらや。いつそ絶えなば絶えよかし。三筋の糸に。せめてはうさを忘れやせんと。しばしむかへば忘れはやらで。松風ならぬ面影かよふ。とかく戀路は夕べの雨の。晴間しられぬわがおもひ。……吉村撿挍調。

清平調

八重がすみ。君がよそほひ思へばいくへ。花が負けたというたが無理か。露にくだけてぬるゝは袖よ。玉のかんざしさす月影の。ともにかくして唯ひとり。うつし心の秋かぜも。草のかりねの枕ゆふ。かれ〳〵の夜はなかりけり。……米陸作。鶴山勾當調。

長想思

る。あさましや堪へがたや。煩惱邪淫のくるしみに。鐵石たつこと一由旬。おだと
なさけも心の鬼。のぼれと責むる劍の山。くるり〱くる〱くる〱。おつた
てられては岩根にとりつき。岩根にとりつき。のぼりて見れば。下より猛火を吹
きあげて。てはなさけなやかなしや。たすけたまへと夕ぐれの。月もかすかに影
くもる。聲ばかりして失せにけり。……淺尾重次郎作。杵屋長五郎大和屋甚兵衛兩調。

松の二葉

松の二葉はあやかりものよ。青葉はまして落葉さへ。妹脊かはらぬちぎりとは。
うれしからうであるまいか。……山田屋平助作。升屋三郎兵衛調。

同かへうた

暮の時雨はゆかしきものよ。あふ夜はまして獨寢を。忍び車のちぎりとは。うれ
しからうであるまいか。

楢のひろは

楢の廣葉を舟じやとおしやる。漕手いかにと夕べの露を。波と見なしてのりて
は見せよ。こゝろを帆にあげ月まつころは。これぞまことの日ぐらしよ。月まつこ
ろは月まつころは。これぞまことの日ぐらしよ。……堂上方某作。深草撿挍調。

かぶとさきがけしたる武者一騎。ぎやう〳〵しくも出たばかり。そりや動かぬは引けやとて。かの念力にあらはれし例の鐘巻き道成寺。いのらぬものゝふわ〳〵と。なんぼうおかしい物がたり。これは娘氣これはまた。くるわをぬけた頰かぶりおやまのあとのいろをとて。たちどまりてはあぶなもの。見つけられたら淡雪のうき名も消えてもとの水。ながれ〳〵む身にあらねども。かはるつとめの大鳥毛臺笠立笠挾箱。みな一樣に振りいだす。列をみださぬ張肱の。堅いは實にも作りつけ。さてそのつぎは鬼の手の。ぬつと出したは見る人の。笠つかむかと思はるゝ。それを笑ひの手拍子に。切狂言は下り蜘蛛。うらよし日よし道しるべ。よいことばかりへ。

里のなごり

ひとりゆく。去年はみなとに。身をよせて。いまは見られつ三つ巴。はなれ〴〵の軒の露。なんの昔のわしならば。今のこの苦はせまいもの。泉ながれてまた蜆川。なれしくるわを秋のかぜ。見おくる禿のすがたさへ。かこちがはなるうき涙。なじまぬ里の苦界もつらき。中にたのしむ血筋と血筋。おもひつきせぬ歌起請。……

……鶴山勾當調。

にくからぬ。ものとていとゞわびしきは。ひとりながむる閨の月。草の庵の夜の雨。山ほとゝぎすの一聲。ゆめばかりなる手枕の。下着にのこる移香。……柳里恭作。吉村撿挍調。

さゝやきだけ

しのぶとは。たが言ひそめて戀すてふ。人しれずして思をかける。唐人もおなじ身の。うきふししげきさはりもあれば。とほくへだてゝさゝやきだけに。そつと吹きこみ吹きこむことを。耳に口。見かはす顔の目もとが否の返事して。すいな心が知るわいな。……一本亭作。政島撿挍作。

扇づくし

花のいろは。うつりにけりないたづらに。これ見よかしと殿中で。たがひにぬれし袖扇。顔は檜扇袙扇。名も岩本の御社に。口説あふぎの貴嶺扇。なか四座あふぎ八重一重。千代の舞鶴うつし繪や。扇のかずは盡せねど。一花開けば天がした。みな春なれや萬世の。なほ安全ぞめでたけれ。……鶴卯作。菊崎撿挍調。

からくり的

おもしろや。人のゆきゝの景色にて。世はみな花のさかりとも。的のちがはぬ星

通る不動坂。文もかよはぬ丸木ばし。なごりなさけも横ぶきの。あらしに木の葉ちりはてゝ。こゝろ細道つく杖の。おりつあがりつ行くさきを。問へど岩根の松かげに。しばしやすらひ給ひけり。

つなでぐるま

糸による。岡の柳の綱手縄。引けや〳〵引けや此くるまえいさら〳〵。さらに思はやすまらぬ。片輪車の引綱も。こゝろもつれや有明の。月のみやこを立ちいでゝ。四方の春べの。淺むらさきや東路へ。人目せき笠やれ扇。かくれ笠にもあらざれば。親は空にて血のなみだ。あとにのこせしはゝその森の。もりてや袖に春かせの。かわくまもなき車坂。一引ひけば千僧供養。二ひきひけば万僧の供養の場と聞くからに。えいさらえいと引く車。ひくや佛の御手の糸。藤澤寺の門前に。しばらく車をとゞめける。……東都某作調。

立田川邊

立田川邊に舟とめて。尾花かぢとる秋のかぜ。秋風とは。身にしむといふすねことば。くせのあるこそ女はよけれど。もろこし人の歌ふうたかた。あぢによるべを言ひかけられて。なんの答もないのが返事。をみなべしにも男のあればたれ

月のまくら

空さだめなき秋の夜の。月はかくれに入る雲か。月をかくすのか。こがれ〳〵て逢ふ今宵。なぜおまへはそのやうに。そむいてひとりねやんすへ。まくらばかりがかあゆいか。そらさだめなき秋の夜の。……柳里恭作。歌木撿挍調。

戀のたびち

風さそふ。はつねの床のなさけより。そゞろにまよふ心もふかく。約束の。日をばくるわのわのうちに。ならぶ矢筈の紋どころ。ぬふてふ鳥の翼もはしき。いつそからかと言草に。露の玉章しげ〳〵の。たよりもいとゞなつかしう。おもひまゐらせいべくとの。しめしはあだに煎じ茶の。かはらぬ色と千代こめし。松にかゝれる蔦のもん。しのびていづる谷の戸と。とく帯の。えにしや夢の夜のちぎり。…茶卜作。藤永撿挍調。

いしごうまる

いたはしや石童丸。かゝる難所をたど〳〵と。こゝろも空に浮草の。根ざしの父の顔しらず。名のみしるべに尋ねゆく。袖のなみだぞあはれなる。おもひ高野の谷川や。左手は岩間右手はあまのゝ山おろし。峰にけぶりの一むすび。見あげて

とや、消えはてゝゆく。あとにのこりし其おやの身は。さかさまなりし手向山。紅葉ふみわけ小牡鹿の。かいろとなけど歸らぬは。死出の山路に迷子の。かたきは鹿の卷筆によ。せめて回向を受けよかし。さへ。ころは三月の末つかた。よしなき鹿をあやまちて。ところの法におこなはれよ。莟をちらすあだ嵐さへ。野邊の草葉におく白露の。もろき命ぞはかなけれ。父は身もよも有られうものか。せめてわが子の菩提のためと。子ゆゑの闇にかきくもる。こゝろは眞如の撞鐘を。一つ撞いては。ひとり涙の雨や雨。二つついてはふたゝびわが子を。三つ見たやと。四つ夜ごとに泣きあかす。五つ命をかへてやりたや。六つ報はなんのとがめぞ。七つなみだで。八つ九つ心もみだれ。どふも語るも戀しなつかし我子の年は。十一十二十三鐘の。鐘のひゞきを聞く人ごとに。かあい〳〵と共泣きに。なくは冥途の鳥かへ。……近松門左衞門作。劍田金四郎山本喜市兩調。

別の鐘（一名つきだし）

つきだしの。はじめよりまづあひ馴れそめて。春秋いくつ越路のかたを。よそに梨子地の硯箱。あけていはれぬうきことさばかり。そのきぬ〴〵の曉に。わかれの鐘とにくみしが。いま身のために鳴る鐘ならば。かあいかろうにまゝならぬ。た

に遠近たつきも知らぬ。山は鹿の音この里ごとの。はでに見せぬもなさけの花の。菊のさかづき千代めぐれ。……山田屋平助作。吉村撿挍調。

をしのなごり

あたら夜の。あけゆく空にものおもふ。冬のなさけに心の紅葉。染めて錦のちぎりもしばし。夢とちりても眞おもかげに。いつの戀草ふゆがれて。鴛鴦の浮寢にあはれを添へつ。しぐれ〳〵し袂も朽ちて。いまは浮世に袖なし羽織。……卜鄕作。富岡撿挍調。

ながさきごり（一名かりまくら）

こゝろこそ。心まよはす我こゝろ。いまはこの身にあひそもこそも。月夜の鳥となきあかす。明のわかれの鐘なるごとに。つらやにくしと今朝までおもふ。あだなかねごとつく〴〵ひとりのう。花の紋日につひ假まくら。長崎きのな。とりは。雞は時しらぬ鳥で。眞夜中になう。たうて。まこと時しらぬ鳥はしゆらよ。たもとにこぼれ春雨の。はてしなき身はかぎり知られぬ。……芳澤春水調。

十三がね

昨日は今日の一むかし。うき物がたりと奈良の里。この世を早く猿澤の。水の泡

ねよなら。はてもろともに。縁は朝顔あさくとまゝよ。せめて一夜はねてかたろ。のちはぞしのび申すべし。むすめ實とうれしげに。一間のうちにぞ待ちゐたる。扨其後に。しすましたりと客僧は。夜半にまぎれて出でゝゆく。さいはひ寺をたのみつゝ。しばらく息をぞつぎゐたる。ところへ娘はしりきて。えゝ腹たちや腹たちや。われをすておきたまふかや。のう〳〵いかに御僧よ。いづくまでも追つかけゆかん。死なばもろとも二世三世かけ。のがすまじとておつかくる。をりふし日高川の水かさまさつて。越すべきやうもあらざれば。川の上下。あなたこなたとたづねゆきしが。毒蛇となつて川へざんぶと飛びこんだり。さかまく水に浮いつ沈みつ。くれなゐの舌をまきたて。ほのほをふきかけ。ふきかけ〳〵。なんなく大河をおよぎこし。男をかへせもどせよと。こゝの面廊かしこの客殿。くるり〳〵とおひめぐり〳〵。なほ〳〵怨靈ゐだけだかに飛びあがり。土をうがつてたづねける。住持もいまはせんかたなく。釣鐘おろしかくしおく。たづねかねつゝ怨靈は。鐘の下りしをあやしみ。龍頭をくはへ。七卷まいて尾をもつてたゝけば。鐘はすなはち湯となつて。つひに山伏とりをはんぬ。なんぼう恐ろしものがたり。……岸野次郎三調。

とへどうした憂き目にあふが。鬼すむ里のつとめであろが。をとこゆゑならそりや苦にならぬ。二八十六で踏みつけられて。二九の十八でついその心。四五の二十なら一期に一度。わしや帶とかぬ二十なら四五の。四五の二十なら一期に一度。わしや帶とかぬ。かへらぬむかし戀ひしのぶ。

道成寺

むかし〳〵このところに。まなごの庄司といふものあり。かのもの一人の娘を持つ。またそのころ奥よりも。熊野へ通る山伏あり。庄司がもとを宿とさだめ。年月くらす。庄司むすめを寵愛のあまりにや。あれなる客僧こそ。なんぢがつまよ夫とたはぶれしをば。幼心に誠とおもひ。あかしくらしておはします。扨その〻ちに。夜ふけ人しづまりて。衣紋つくろひ鬢かきなでゝ。しのぶ夜の。さはりはさえた月かげ。ふけゆく雞がね。それにいやなは。犬の聲ぞつとした。人目しのぶはうやつらや。せきくる胸をおししづめ。かの客僧のそばへゆき。いつまでかくておき給ふ。はやく迎へてたまはれと。ちかづきよれば。せんかたなくも客僧は。よれつもつれつ。常陸帶。二重まはりに。三重四重五重。七卷まいて。放ちはせじと。引きとむる。切るに切られぬわがおもひ。お馬つなぐはそりやうそつきよ。とても

しよとて紅粉鐵漿つきよぞ。みんな主への心中だて。おゝうれしおゝうれし。末はかうじやにな。そうなるまでは。とんといはずにすまそゞへ。誓詞さへ。いつはりか嘘か誠か。どうもならぬほど逢ひにきた。ふつつふりりんきせまいぞと。たしなんでみてもなさけなや。をなでにはなにがなる。とのご〳〵の氣が知れぬ〳〵。悪性な〳〵氣が知れぬ。うらみ〳〵てかこちぐさ。露を含みし櫻花。さはらば落ちん風情なり。面白の四季のながめや。三國一の富士の山。雪かと見れば花の吹雪か吉野の山。ちりくる〳〵あらし山。あさひ山〳〵を見わたせば。歌の中山石山の。末の松山いつか大江山。いくのゝ道の遠けれど。戀路にかよふ淺間山。ひとよのなさけ有馬山。いなせの言の葉。飛鳥木曾山まつち山。わが三上山。いのり北山いなり山。えんをむすびし妹脊山。ふたりが中のこがね山。花咲く。えいてのこの〳〵。をばすて山。みねの松風おとは山。入相の鐘を筑波山。東叡山の。月のかほばせ三笠山。たゞたのめ。氏神さまがかあゆがらしやんす。出雲の神さんど約束あれど。つひにねまくら里に。戀すれば浮世じやへ。ふかい中じやといひたてゝ。こちや〳〵〳〵よい首尾で。にくてらしいほどかはゆらし。吉野初瀬の花もみぢ。いつも色よくな。さきそめて紅粉をさすが。品よし形よし。あゝ襷のの字

かねがみさき

鐘にうらみがかず〳〵ござる。初夜の鐘をつくときは。諸行無常とひゞくなり。後夜の鐘をつくときは。是生滅法とひゞくなり。晨朝のひゞきは生滅々已。入相は寂滅爲樂とひゞくなり。聞いておそろく人もなし。われも後生の雲はれて。眞如の月をながめわかさん。いはず語らぬわがこゝろ。みだれし髪もみだるゝも。つれないはたゞ移り氣な。どうでも男は惡性もの。さくら〳〵と歌はれて。いうてたもとのわけふたつ。つとめさへたゞうか〳〵と。どうでも女は惡性もの。東そだちははすはなものじやへ。戀のわけ里武士も道具を伏編笠で。はりといきぢのよしはら。花の都は。歌でやはらぐしき島原に。つとめする身は。たれと伏見の墨染。煩惱菩提の撞木町より難波四すぢにかよひきつじに。かぶろだちから室の早咲。それがほんに色じや。ひいふうみいよ。夜露雪の日しもの關路も。ともに此身をなじみかさねて。中は丸山たゞまるかれと。おもひそめたが縁じやへ。梅とさん〳〵櫻はいづれ兄やら弟やら。わけていはれぬな花のいろ。菖蒲かきつばたは。いづれ姉や妹やら。わきていはれぬ花のいろへ。西も東も。みんな見に來た花の顔さゝへ。かはゆらしさの花むすめ。戀の手習ひ見習ひて。たれに見

す。一日あはねば百日に。かつたかやもはろぶとやいふに。此ほどたえてたより
なし。あるはいやなり思ふはならず。そふにそはれぬ身とならばへ。どうせうぞ
いの。さればそのこと。しばしながめてのちの月。鴨のながれの。みづしらずさへ。
かあい〳〵となくはしのゝめ。

起請文

まづ起請文の事とりかはす。たとひくるわの夕まぐれ。間の中戸はせかずとも。
あふまい見まい語るまい。遠山鳥の狩ごろも。なれてやひとり音をや鳴く。つが
ひ離れぬ。はなれぬいく日かず。ゆめうつゝにも淡雪の。つもれや〳〵胸のかす
みの散し書。もしや嘘ならその。そのゝちの世々かけて。うき身にしづみ申さん
と。いまをかぎりの一言が。名はくれなゐの色ふかく。花紫の誓詞のわかれ。ばち
があたらばあゝまゝよ。三昧の調子のくるふらん。……大和屋甚兵衛調。

末のよるべ

末のよるべはいさ白波の。沖にたゞよふ捨小舟。かひなやつらや吹きながされ
て。すいた泊をまゝならぬ。いやな嵐をひらきてうけて。ほのじがはするうきつ
とめ。あたしんきなと口くせに。いうてなぐさむ心のそこも。ふかいあさいのわ

の賤かわざ。しほらしや。田長鳴く。五月さみだれ早乙女々々田植歌。さうとめ〳〵たうゑうた。すそや袂をぬらした。さつさ花のすがたの亂髮。ふしぎや此かねの。ふしぎやこのかねのわが一念のこゝろのきづな。胸のほむらは明王の火焔の。黒煙を立てたるごとくにて。おもへば此鐘うらめしやとて。龍頭に手をかけ飛ぶぞと見えしが。引きかづいでぞうせにけり。

黒い羽織

くろい羽織は。えいえやさ。はおりはくろい。くろいはおりは。こゝにあるとよへ。

對の烟管

戀ぐさの。露だに秋はおくものを。しばしへだてし一重帶。むすびなほしてよ玉の緒の。わらぬかぎりと千代かけて。つきぬちぎりやたがひの心。對の煙管のだきおもだかに。まどろむひまさへ波まくら。よい殿御じやとおもひ羽の浮寢にあそぶかほよどり。……青瓦作。小村撿挍調。

二つ井筒

あだな此世を假ざしき。身じまひうすく洗ひがほ。ふたつ井筒の名もふかい中。せいてあはせぬ親かたの。きついは戀のものおもひ。かりそめごとにいひかは

うちわすれ。人目しのべば恨みはせまいためにしづみし戀の淵。こゝろからなる身のうさを。やんれそれは〳〵へ。まことうやつらや。ためにしづみし戀のふち。こゝろからなる身のうさを。やんれそれはそれはへ。まことうやつらや。花に胡蝶のきつれてつれたくせもの。くせものよるべ。よるべや浪の立つ名もまゝよ。くどけど君はつれなさよ。おゝそれ。それじやまことにさ。おもひまはせばむかしなり。牡丹にたはぶれ獅子の曲。げに石橋のありさまは。笙歌の花ふり簫笛琴箜篌。夕日の雲にきこゆべし。目前の奇特あらたなり。暫く待たせたまへや。影向の時節も。いま幾ほどによもすぎじ。獅子團亂旋の舞樂のみぎん。しゝどらでんの舞樂のみぎん。牡丹の花房にほひみち〳〵。大きんりきんの獅子頭うてやはやせやぼたんばう。黃金の蘂あらはれて。花にたはぶれ枝に伏しまろびげにも上なき獅子王のいきほひ。なびかぬ艸木もなき時なれや萬歲千秋と舞ひをさめ。萬歲千秋と舞ひをさめ。獅子の座にこそなほりけれ。

鬢のほつれ

鬢のほつれは。まくらのとがよ。まくらのとがよ。くもりなき身をうたがはれ。はてなんとしよ。

けこそかはれ。どうで戀路のみをづくし。あゝくい〳〵とおもふまい。……大和屋

彦三郎作藤永撿挍調。

石橋（つがひ獅子）

われも迷ふやさま〴〵に。四季をり〳〵のたはぶれに。蝶よ胡蝶よ。せめてしばしは手にとまれ。見かへれば。花の木かげに見えつかくれつ。羽をやすめ。すがたやさしき夏木立。こゝろづくしのな。この年月をへ。いつか思の晴るゝやと。こゝろ一つにあきらめて。よしや世の中みじか夜に。ゆめはあやなしその移香を。にくて手折か圭なき花を。なんのさら〳〵。さら〳〵さらに。さらに戀はくせもの。つゆしのゝめの。草葉になびく青柳の。いとしほらしく。ふたつの獅子の身を撫でゝ。頭をうなたれ耳を伏せ。花にやどかる浮世のあらし。あなたへさそひこなたへよりつ。園の胡蝶にたはぶれ遊ぶ。おのが友よぶ獅子のこま。花によるてふつれだちて。おひめぐり。おりつあがりつ。そばへ揚羽のしはらしや。おひめぐり。おりつをりつあがりつ。そばへあげはのしほらしや。おもしろや。時しも今は牡丹の花の。さきやみだれて。ちるは〳〵ちりくるは。ちるは〳〵ちりくるはちれ〳〵ちりかゝるやうで。おいとしうて寝られぬ。花みてもどろ。花にはうさをも

うぐひすのやどりの梅の實生より。難波四筋にすみながら色音もふかき三味線のいとしかわいの調子さへ。しらぬこの身を我背子が。すゝめにしらべならひなば。人待つ夜半の友とせん。

葵の上

げに世にありしいにしへは。雲上の花の宴。春のあしたの御遊になれ。仙洞のもみぢの秋の夜は。月にたはぶれ色香に染み。はなやかなりし身なれども。おとろへぬれば朝がほの。日かげ待つまのありさまに。たゞいつとなき我こゝろ。ものうき野邊の早蕨の。もえいでそめしおもひの露。かゝるうらみにうき人は。なにを歎くぞ葛の葉の。もつれ〳〵てなあふ夜はほんに。にくや〳〵は鳥がねばかり。ほかにねたみはなきそな泣きそ。なん〳〵菜種のかりねの夢に。我は胡蝶の花すりごろも。袖にちり〳〵露なみだ。びんとすねてもはなれぬつがひ。おゝ。それよ。まことにはなれぬつがひ。しんきむかしのあだまくら。このうへはとて立ちよりて。いまの恨はありしむくい。瞋恚のほむらは身をこがす。おもひしらずや思ひ知れ。うらめしの心やな。あらうらめしのこゝろやな。人のうらみの深くして。うき音に泣かせたまふとも。生きてこの世にましまさば。水くらき。澤邊の

人しれぬ。おもひはいとゞ涙より。ほかにまことはなきものと。たのしむ中を吹く風が。心のほどを知りもせで。ほんにしんきな亂れがみ。いはぬつらさを見る夢の。なにが戀やらなさけやら。うつり氣のなき床のうち。……湖岸作。作山勾當調。

秋のしぐれ

白露のおきてわかれし明の聲。鳥はものかはことゝはん。またの逢ふ夜はいつそのことに。桂をのこも思ひやれ。心はくもる月はすむ。しのぶたもとの藤ばかま。誰がぬぎすてし秋の野に。まねく尾花や裏ふきかへす。いろなき風も紅葉して。ともにしぐるゝ妹脊やま。……扇屋つぐ作。吉村撿挍調。

京小袖

これは京小袖。ゆふべ〳〵に解く帶の。むすぶひまなく。横にむすびしかんざしの。花車男子におふときは。すかんにくいはうかれのつねよさ。まそに手枕そひねの夢を。比翼の鳥におこされて。なんと答をあら〳〵かしく〳〵……川崎屋源兵衛作。歌木撿挍調。

難波の春

里のみやこ

秋くれて雁もわびしき聲立てゝ、きよきうらみを聞きわけて、いんだも無理か妻琴の廿五すぢの糸よりも、もつれもつるゝ藻鹽のけぶり、雲にたはぶれ、雨にしたひがはるまいぞと誓ひの枕、高い低いもないみちを、ほんにつれなや、あゝゆめつけどりのおかねわかれとなる鐘のへだてられにし共なみだ、松に音するならひもあらばそよと吹きこせ里あらし……堂島平小作。

閨の扇

閨の扇はなみんな繪空事、あはねつらさをこがるゝよりも逢うてわかるゝ事こそつらや秋の扇と捨てられて、秋のあふぎとすてられて、わしやどうもならぬへ、なんと思うてくだんすことじやへ、ゆるまぬように要がだいじへ、そうじやへ、しはくのふでのしほらしさ。

硯の海

いく千代と、ちぎり逢ふ夜は鳥のねをうらみしこともいつしかに、今日わかれゆく袖の露、ぬるゝたもとは清瀧の、糸くりかへす苧環に、しるしの筆のあとゝめて、その玉章は薄墨の、常石堅石にくれなゐの、むらさき山にはひまとふえに

螢のかげよりも。ひかる君とぞちぎらん。わらはは蓬生の。もとあらざりし身となりて。葉末の露ときえもせば。それさへことにうらめしや。夢にだに。かへらぬものをわがちぎり。むかしがたりとなりぬれば。なほも思ひは増かゞみ。そのおもかげもはづかしや。枕に立てる破車。うちのせかくれ行かんとぞ。いふ聲ばかりは。松ふく風。いふ聲ばかりは松ふく風。さめてはかなくなりにけり。……木本屋巴遊調。

八聲の鳥

ものかはと。いひしながらも更けゆくまゝに。待つはもしやとたのみもあれど。つらいは八聲の鳥まへ。世にはゆるさぬ人目の關よ。しのびあふ夜は語るとすれど。のこる言葉ぞこゝろなき。鳥鐘しらぬ里もがな。……住吉東大寺僧作。繼橋撿挍調。

花のなごり

暮れてゆく。春のかたみか村しぐれ。花はちりても春にさく。とはおもへども今は世の。かずならぬ身の友ちどり。なくねに立ちし琴の糸。廿五とせは槿花の夢と。さめては風のつてもがな。

の川瀬。おもひながせど

な。また吹く風に。さゆる

月さへ。かげ心に耻ぢて。

かげふかぐ〳〵とわびて

見ん。………歌木撿挍調。

瓢の神

善き光ぞと影たのむ世

の光ぞとかげたのむちやのきよの佛のきよひ

よん。御寺たつふね。きよひよん。會津のさと鄕は

陸奥のくにあり。きよひよん。ぺうたんふくべに

緒をつけて。をり〳〵風の吹くときは。ひよひよ

しゆかりはのこれども。もし秋風や吹かぬかと。こゝろ。こゝろは文字の關路なるずゞりの海に打ちむかひ。千里をかけて雁がねの。たよりを松の言のはや。かりのたよりを松のことのは。

秋のうらみ

雲に衣裳の思ひをこがし。花にかたちの思をこがす。つらや是非なやなみだ

やよ。時や知らぬ妻ごひの。かしにおいでたゞゆふ寺にてうでんすとはくるわの言葉。すいにならんせ土人形。うまれかはりし卯の花月の。うぶ湯は甘茶花のかず。芥子やげんげの殿づくり。……茶卜作。津山検校調。

猩々

酒をいざや汲まうよ。客人も御覧ずらん。月星はくまもなし。ところは潯陽の。江のうちの酒盛。猩々舞を舞はうよ。蘆の葉の笛を吹き。波の鼓のどうど打ち。聲すみわたる浦風に秋のしらべやのこるらん。そも茶と酒と酒と茶は。二つに文字はわかれども落つればおなじ谷の水。酒といふ字はさんずゐに日よみの酉を書くどかや。月雪のながめには。下戸も上戸もへだてないぞや。さゝめせ〳〵。さんざゝ。やなぎとうたうた。たはふれ瀧のみひきうけて。さら〳〵さらりとたのしめん。のめば心もいそ〳〵〳〵とうかれ〳〵てをどりいで。はやいておもしろや。〳〵。さけはたゞだんぶ〳〵とのまねばすまぬ。のめば明石の浦の景。おれ〳〵。見さい。月はてる〳〵。なん波間に〳〵。ちらり〳〵。酔うた蘆邊の千鳥足。みだれ飲めやうたへや。ざゝんざ〳〵。めぐる盃いつまでも。酔うたおもしろや。たのもしや〳〵萬代までの竹の葉の酒。汲めども盡せず。飲めどもかはらぬ秋の夜

らひよん。汐路の風のさむき山野に。三界を家と。はしりてめぐる鉢叩が。精々がたにかけて。後生ねがはゞ。など佛にならざらん。のう五郎三郎。田舍へおくだりあらうするなら。ふくべなりともおいてゆけへ。小ふくべなりともおいてゆけそれはやじよろ。やすき間のことなれば。諸國はやじよろ。でつくでつくとたゝかうするなら。ふくべなうてはお笑止や。よしや君たゞ。ねてもさめても忘るゝなよ。たゞ一念は念佛なりけり。おもへば浮世はゆめの世ぞかし。榮花は是みな春の花。名利のこゝろを思ふなよ。それ一代敎主。釋迦牟尼如來の說法は。華嚴阿巖。方等般若法華涅槃や。律宗法相。なんぞゝいへる。こむつかしいことゞもわれらがやうなる。ぐたむちさんなは。おもひもよらず。あなたの方ではひよい〳〵〳〵〳〵。こなたの方ではたん〳〵から〳〵。ころりとうちならして。ねがふ後生は。茶筌めせ〳〵。ちやせんめせ〳〵。佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。柳はみどり花はくれなゐの。いろ〳〵なれば。いそいで後生をねがふべし。ありがたし〳〵と。よろこび夢はさめにけり。

晁殿司

呉竹の。伏見に世々をかけまくも。涅槃の肇のあとたれて。なれに問はまし猫も

まりて一つ二重の腰のかげはづかしく。をしや名殘をのこして末の。千代の古道たづね見ん。……非夫作。三橋勾當調。

墨繪の月

露そむる。野邊のにしきのいろ〳〵を。ふみわけゆけばかすかなる。あやしの竹の編戸のそともに。もれてうつらふ山の井の。水手にむすべば月またやどる。つらき野分に吹きささそはれて。墨繪に書きし松風の。おとや砧を添乳の夢に。なれてながむる人ごゝろ。なれてながむる人ごゝろ。などさめかねつ更科や。姥捨山にてる月を見て。……房崎勾當調。

三段獅子

八千代ふるともかはらぬ色はへ。松に藤枝のそのおもかげを。みるに一しほ。二しう三しうしはらしや。とにかくおもはるゝ。花は吉野よ紅葉は高尾。松は唐崎霞は外山。いつも常盤の。ふりは。さんさしはらしや。とにかくおもはるゝ。……佐山撿挍調。

萬歲獅子

君が代の。ひさしかるべきためしには。かねてぞ植ゑし住吉の。松の二葉はおや

のさかづき。をさまる御代の松が枝に。雛鶴舞鶴よるのつる。いろねをそろへて。いろねをそろへてきりはたりちやう。ちやう〳〵。ちやうど受けたるさかづきの。さす手ひく手に舞のそで。つきせぬ宿こそめでたけれ。

もんでの風

難波津に。梅のくらゐの初音そふ。鳥もつねなき。つねなき風に。あれつれだつて雲水の。いつもどらんす事じややら。十符の菅薦。みふに寢よとの其むつごとも。あらしのこたま嵯峨野のつるの。おくれていまは。名のみのこりしあととめて。花の都に老木のしづく。ふるき軒端につたふらん。……藤永撿挍調。

黑丸子

まつ夜あまたの山ほとゝぎす。逢へばつもりのいひたい事を。かさね小袖のうらみもきかず。にくい男じや見すてゝいんで。鏡ぶくろをあけゆく閨に。ひとりおさゆる胸のうち。

山下水

世にひくき。山下水のほそ〴〵と。ながれゆくへを川竹の。ふかきめぐみのあいそもこそも今はつきなんたよりの杖に。のぼり〳〵し老の坂。かずも六十にあ

のたより知らせよやよ時鳥。……島川撿挍調。

松のあらし

寝覺する。小夜の枕の年月を。いかでしのぶの。軒の松風。風身にしみて。いとゞつゆけき袂なるらん。

四季のながめ

梅のにほひに柳もなびく春風に。桃の三月の花見てもさる。ゆら〳〵と夕がすみ。春の野かげに芹よもぎ。つみかけたるおもしろさ。里の卯の花田面の早苗いろ見えて。しげる若葉のかげとひゆけば。まだきの初音の山ほとゝぎす。ひところに。花のなごりもわすられて。家づとにかたらばや。草葉色づき野菊のさきて。秋ふかみ。野べの秋風つゆ身にしみて。ちら〳〵と村しぐれ。よしやぬるとも紅葉ばの。そめかけたるおもしろさ。野邊の通路人目も草も。冬がれて。落葉しぐるゝ木枯の風。峰の炭竈けぶりもさむし。ふる雪に。野路も山おも白妙に見わたしたるおもしろさ。……松浦撿挍調。

深夜の月

山の端に。一列見ゆる初雁の。こゑもさびしくいたづらに。あだし言葉の人でゝ

かりものよ。青葉はまして落葉さへ。妹背かはらぬちぎりとは。うれしからうであるまいか。松のよはひをかさねかさぬる。松のよはひをかさねかさぬる。

三つのしらべ

琴笛の。なかに上なきしらべなり。名こそ東と落ちくだれども。それは六の緒これはまた。人の國よりつたへきて。いま世にひろく。三筋のしらべだぐひなき。いくその人のいくそたび。汲むさかづきのをりをりや。手ずさみなせば身のうさを。わするゝ草の種として。千代に八千代によはひのばへん。

魂のゆくへ

きのふまで。よそにおもひし菖蒲草。おもはぬ宿のつまともならで。枯れにし秋の花かづら。ながき音をなくみじか夜のゆめの。牡鹿の角の束のまも。あだしあだなや玉のをの。つなぎもとめず今日のこの。いきはかなくも消えけるぞ。つゆちぎり。いつしか絶えぬ中なれど。きゆるときけば。きゆるときけばさらにかなしき。そよや夕べの小笹の螢。われといはんも一人かな。二人そひねの蚊屋釣草に夜半の鼓のかぎりをうらみ。あるは明けゆくかねごとか。羽やならべん枝やつらねん。花たちばなの袖の香に。むかしを問はゞやなや。やよほとゝぎす亡き魂

いでし戀の實こゝにまことにあゝしんき。いふもさらなり。あまたの糸のその曲をたみのいちとて。たゞ一筋に思ひつめ。うそもまことも手にふれて。しらべの色音きぬぐ〳〵の。いはんかたなきそのむつましさ。またとたぐひのなき糸の曲。

月花雪

月になりたや十五の月に。まるう世界かまはりたい。花になりたや吉野の山の。すゑのすゑまで咲かせたい。雪になりたや高嶺の雪に。ひろう世界に降らせたい。……鶴卯作。菊崎撿挍調。

都の夢

旅のそら。草の庵の夜もすがら。かゝれる月の影さえて。ひかりに庭の霜かとも。うたがふ心とけやらで。ふりさけみればあの山の。千年の松に月もはや。春づき入るやもろともに。また手枕のうつゝにも。都の夢やむすぶらん。……音島日度調。

嵯峨八景

げに萩こそあはれは見すれ。おもひみだるゝ白露よ。下葉の色のうつろふは。よたよりことにかはるためしか。とても浮世の嵯峨野なら。いつそこの身は嵐山。

ろ。おかぬわかれのかなしさは。夢うつゝにもその人の。知らぬおもひの涙川。うつす姿や鐘のねに。そらとぶ鳥のかげなれや。それならぬ。こひしき人は荒き風。うき身にとほるはげしさは。君にうらみはなきものを。小萩におつる白露の。くだけて落つる袖たもと。おもふこゝろのたえ〴〵に。虫のこえ〴〵さへわたる。なく音ふけゆく秋の夜の月。……松浦撿挍調。

椿づくし

つら〳〵つばき春秋の。名は千里まで鷹が峰。その本阿彌の花のいろ。しろきを後の寫繪も。いかでおよばん妙蓮寺。うすぐれなゐに濃き紅粉は。おなじ花形の因幡堂。まだきしほりの秋の山。さがはつあらし身にしみて。露しぐれなるころよりも。すきもてあそび埋火も。春にうつれば天が下。にぎはふ民のけぶりたつ。それは鹽釜千賀の浦。汐くむ海人の腰蓑の。あづまからげや東路や清洲のさとの散椿。さきものこさぬすみのくら。藪のなかなるかうのものぼくはんわびすけから椿。八千代つきせぬはなのす。……洲濱作。松島撿挍調。

糸の曲

世はなさけ。戀のいきぢはあぢなもの。うそじや〳〵といふそのうち。うそから

手あまたの身なれども。せめて一夜のたはぶれに。醉をすゝめよ熊谷の。たけきこゝろは虎の尾の。千里もかよふ戀のみち。しのぶにつらき有明ざくら。君が情はうすざくら。よしや。思は桐が谷。浮世をすてし墨染ざくら。昔をしのぶ家ざくら。花の扇の。さびしきに。月の影さへ遲ざくら。暗はあやなし紅梅ざくら。色こそ見えね折る袖も。にほひざくらや。菊ざくら。花の白露花ごとに。うちはらふにも千代はへぬべし。……佐山撿校調。

紅葉づくし

秋ふくる。深山楓の小夜しぐれ。手染の糸の立田姫。織りだす錦しな〴〵に。その名も高尾小倉やま。行幸またなん飛鳥川。かはるこゝろは薄もみぢ。からくれなゐの立田川。ながれてとまるしがらみに。紅葉の波のはるかなる。千里の外のからにしき。わが敷島の道しるべ。もみぢがさねの名取川。君松が枝の夕ぐれに。月の影さへ通天の。をちこち人も陸奥の。しだれ紅葉や糸もみぢ。よる年波の水かゞみ。うつろふ色の二おもて。わすれがたみは朝つゆに。雁の玉章蔦もみぢ。また二月の花よりも。ます紫のひとしほに。酒あたゝめし唐歌の。むかしをしのぶ須磨のうら。青葉の笛のしかもみぢ。つまぐれなゐや青海波。夜のにしきは故郷の。

やがて紅葉の梢のいろと。袖とくらべんいそげや急げや。しぐれまたれぬ月を。渡すためとて。たが掛けそめし。いざわが中を渡せや渡せ。逢瀬に〳〵渡せ浮橋。たれか戸無瀬の。糸のはつれのはてしなや。秋のながめは。秋のながめは一しほに。つらいといふもなか〳〵。月はさゆれど小倉の山よ。峰に鳴く鹿それにはあらぬ。鹿子の帯をむすびながらもいくよのしんき。それがとけたら。清く涼しき御寺にも。天竺震旦我朝の。三國一じやしやんと木のきれさ。竹の端。なにをおもひにくひ〳〵と。……一時軒作。繼橋撿校調。

櫻づくし

あかでのみ。花に心をつくす身の。おもひあまりに手を折りて。かぞふる花のしな〴〵にわきて楊貴妃いせ小町。たが小ざくらや兒ざくら。年も若木の姥ざくら。われや戀ふらし面影の。花のすがたを先かけてゆくへわけこし三吉野の雲井にさける山ざくら。かすみのまよふはのかにも見そめしいろの初ざくら。たえぬながめは九重の。みやこがへりの花はあれども。なれし。なれしあづまの江戸ざくら。なに奥州の花にはたれも。うき身をこがす鹽釜ざくら。花の振袖やへひとへ。下には無垢の緋櫻や。樺に淺黄を色ませて。わけよき繡の糸ざくら引く

すこのごろの夕しぐれこそたゞならね。岩根ふみたれかは訪はん楢の葉の。そよぐは鹿のわたるなるらんと。詠せし人の心まで。いまさらおもひしられたり。世をいとふ身のために。里ばなれこそすみよけれ。……堂上方作。津山撿挍調。

岩根の松

君が代は。天の羽衣まれにきて。撫づとも盡きぬ岩根松。常盤のいろも春くれば。今ひとしほに増かゞみ。くもらぬ御代に住みなれし。土の車のわれらまで。ゆたかに住める武藏野に。月のいるさの山もなし。草より出でゝ草にてこそ。入間の氷みよしのゝ田面の稻葉かずつみて。民の竈もにぎはひて。朝な夕なにけぶりたつ。霞が關をもらさねば。名はかりそめに白眞弓。ゆみは袋に有明の。月のどかなる玉川に。さらす調布さら〳〵に。絶せぬ御代こそ久しけれ。……市川撿挍調。

千年の秋

千代松虫のねもつきじ。いつまで草のいつまでも。かはらぬ御代は久方の。月の夕べや紅葉のあした。ときはの松のかげ深く。ながめにあかぬ山のけしき。麓に近き道のべの霜かと見ゆる白菊の。花をかざして誰もみな。千年の秋をやおくるらん。……永井の尼作。深草撿挍調。

風のたよりも神無月。かずは八入か九重に。十二單の裏紅に。薄柿鬱金いろ〳〵を。かぞへ〳〵て幾しほか。秋のなごりをながむならまし。……津山撿挍作調。

山路の菊

久かたの雲のうへにて見る菊は。天つ星とぞあやまたれぬる。さればもろこしの。かしこき人のいにしへも。東籬に菊を愛しつゝ。南山を見るしのゝめの。こゝろあてに折らばや折らん初霜の。おきまどはせる白菊の。花はあやしき風情まででげにおもしろきながめなり。そのうへ菊の雫まで。不死の藥となるとかや。奥山の深谷のもとの菊の水。花をあらへるながれを汲みて。齡を延ぶる仙人の。折る袖にほふ菊のつゆ。うちはらふにも千代はへぬべしと。よみしすがたの老いもせず藥と菊の下露も。よもつきじ君が代の。いく久しさもかぎらじな。……田中撿挍調。

山家の秋

八重むぐら。しげれる宿のさびしさに。人こそ見えね秋は來にけり、げに山里は。さらでものゝさびしきに。秋のけしきはことさらに。荻の上風おとたてゝ。露ふきみだす萩が枝に。花もうつろふ淺茅生や。草葉にすだく虫のねも。涙もよほ

ゝ事こそつらや。秋の扇とすてられて。わしやどうもならぬへ。なんとおもうてゐさんすことか。ゆるがぬやうに要が大事へ。さあそうじやへ。手折りもやせん人でゝろ。ながれの水にさそはれて。うき氣にひゞく里の鐘。きけばこゝろもすめやらぬ。宵の口説に無理なさゝめごと。いはずかたらず胸せまり。かねてのかうとおもうてゐさんす心かいな。そうかいな〳〵。ぬめた男のつらにくや。えゝすかぬ。おゝすかぬ。

住吉まうで

住吉へ。一筋道ぞ梅の花。雪かと見れば晴れわたる。日本橋すぢ永き日に。春のけしきのうら〳〵と。せなかたゝいて此神は。いつの御代より今宮の。こゝも新家とたが立てそめて。天下茶屋の。のぼりやすな〳〵すなづゝみ。戀といふ字を籠字にかいて。こひし〳〵をよごとに詰も。振のたもとも。出てまぶ軒端。どうで嫁入にや打たるゝ身じやに。石の鳥居の。おゝ門出もよし。岩田帶して誕生石の。殿はなはよし。姫小松でも。千代やひくらん萬代やへん。……音島四度調。

身がはり音頭

冥途の旅へゆく鳥と。娑婆にのこれる親鳥の。なみだにしぼる袖のつゆ。さえし

東げしき

飛鳥川。淵は瀬となる人ごゝろ。すむも濁るも波風も。きかぬ山路の奥ずまひ。とはおもへどもまゝならず。こりぬこりきにたきつけられて。よきもわるきも浮木と。見流す川のよる瀬をたのみ。こゝに木屋町しのびてすめば。人のこゝろのよい裏ざしき。たれにか見せんあれ宮川の銚子とるても見えすくけしき。月のながめは。陀羅尼のかねや。かう高臺寺子安寺。あれは大佛弓射の堂。八坂はこゝに清水や。こゝは丸山祇園町。だても四條のはしたなく。よばはる木戸の寄太皷。つれてにくきは石垣づたひ。蟹がづしより出づるもあり。なほ夕ぐれの町げしき。梛さくらをこきませて。都のにしきいろ〳〵の。けいはくこゝにとゞまりて。やらふかたなき盃は。やんしうをかけてこゑ〴〵に。さわぎたつるもおもしろや。また三味線の音にたてゝ。よねの一ふし色ふかく。戀の白無垢。うつゝながらにしら〳〵と。わりわけ月のよすがら。わが身の夢もさまされて。よそにこがるゝ高瀬ぶね。……深草撿挍調。

閨のあふぎ

閨の扇はな。みんな繪そらごと。逢はぬつらさをこがるゝよりも。逢うてわかる

あひの山伏

夕あしたの鐘のこゑ。寂滅爲樂とひゞけども。聞いておどろく人もなし。花はちりても春はさく。鳥は古巣へかへれども。ゆきてかへらぬ。死出のたび。野邊よりあなたの友とては。金剛界のまんだらと。胎藏界のまんだらに。血脈ひとつに數珠一連。これが冥途の友となる。

八丈曾我

雁は來る。燕はかへる秋のそら。さらでもものゝさびしきに。いく島守と身はなりて。汐馴衣いくつゞり。荒和布若和布の衣裳つぎ。おのづからなる立髮や。鬢にもつるゝ海松ぶさの。一つ二つはむつかしと。ひろふ心のみだれ貝。磯山おはふ雲霧や。たゞ引幕のよそほひと。思ひいづるもうたてくて。故鄕のかたを見わたせば。ひとゝせ曾我の祐成と。よばれしこともあだなれや。時致こひし虎こひし。こひしきかたのかず〳〵を。せめては夢とまどろめば。濱松風のおと。目には見えねど藻にこもる。虫の音すがら泣きあかし。あまりの憂さに立ちいでゝ。かなたこなたとさまよへば。かゝる中にも世をいとふ。いでそよ人のさゝの屋に。たなばた人を織女ども。色なる糸をくりかけて。五百機立つる窓のうち。まことと結

むかしの物がたり。踊子衆も父上も。きいてあきらめたまへかし。かたるもおなじなみだぞや。いにしへ多田の滿仲の。ゆめまぼろしの世を觀じ。おとの若君美女ごせん。墨の衣に。染めて染まらぬ御怒。美女が首打て仲光と。主命のがるゝかたもなし。むざんなるかな仲光は。斬れとあるも御主なり。斬りたてまつるも御主なり。とかくわが子の幸壽丸。おん身がはりと思ひこむ。親のこゝろを子は知らず。手ふり袖ふり踊りぶり見るにきえ〳〵弱るこゝろを取りなほし。斬つてかへたる末世の手本。武士のかゞみの露塵ほども。こゝろのこすな我ものこさじ。いまが思ひのきりどころ。おもひのな。きりどころ。……歌本撿校調。

在郷げしき

梅のさかりは在鄕もにほふ。牛の脊にまで移香のせて。のせてくる〳〵。碓のかよひの風もあり。やぶね引き出す櫓櫂の音に。雉子なきたつ軒端もちかし。すだれ模樣の顏にうつろふ。化粧どころの朝日かげ。戀しがられてすむ日もあるに。てゝはこがの二丁目のむすめ。あぶらさとろ〳〵つけて。くしまでつけて。櫛のひかりで夜をあかす。とろ〳〵つけてくしのひかりで夜をあかす。……堂上方作。岸野次郎三調。

きはおつくんくるわのでひぐるひよたゝりをなすなよごきねんとうやまつて。……宇治加賀椽作。枠屋長五郎調。

芥子人形

玉子のふは〳〵の閨なれや。烏の空音ははかるとも。ゆるさぬものは大晦日。もはや十二月も。廿日あまりのことなれば。いづくを見ても物おもひ。申したのみいりそろ。どなたよりの御出ぞや。ひしやのものにて候なり。ない〳〵申せし黒羽二重の代銀を。おんすませたまはれかし。女郎はまがきにもたれしは〳〵と。なにとぞ〳〵年のうち。おん待ちありて給はれかし。商人おはきに腹を立て。とやかくのたまふうち。はや七年にまかるなる。このごろ聞けば伊勢町あたりの大盡に。おんあひそめなさるゝよし。女郎かさねてのたまふ。大じんにはあひぬれども。ないだいじんにてそろゆゑ。金銀はたまはらず。芥子人形たゞふたつ。これにてはあはぬなり。商人かさねて。まつたうけたまはれば。いづみ町の役者におんあひなされつゝ。むらさきの調べをもらひたまふと聞く。女郎きいてのたまふまく。調べはもらひさふらへども。宿の亭主にとられつゝ。蚊屋の釣手とまかりなる。とてもならぬに春まで待ちやれ。質の流の身とてうやつらや。さは

ぶの唐糸ならば。たぐりよしよもの我そでに。みだれあを。よしよもの袖に。たぐりよしよとはなんのこちやへ。なん〳〵波路もはてしなく。なにとなるうき身へ。……堂上方作。小野川撿挍調。

出口のやなぎ

たてまつるよ。奈良のみやこの八重櫻さい。今日九重にうかれきて。二度のつとめをしまばらの。よいさよ。出口の柳ふりわけて。こひと義理との。よいさよ二重帯。むすぶちぎりはあだし野の。よをつゆのうき身をたれゆゑに。さい。世わたる舟のかひもなや。よるべさだめぬ海士小舟。岸にはなれてたよりなや。島がくれゆく磯ちどり。しのび音になくうきなみだ。顔が見たさに又こゝへ。きつぢの里のあさごみに。菜種や芥子の花のいろ。うつりにけりないたづらに。わが身はてれのう此すがた。つれなき命ながらへて。また此頃やしのばれん。しのぶにつらき目せき笠。ふかき思ひぞせつなけれ。いまは太皷も鳴りやみて。もらひし文のかず〳〵も。つきぬあはれを。よいさよ。身にうけて。せめて旦那の御恩德。報ぜんためのあひの山。あはせましたや若さまに。わかれたまひし心根を。思ひやられて今とても。むかしわすれぬもらひ泣き。かゝるあはれは又の世にきたるまじ

刈童の名に立ちし。色のみかどの陵とやうちこえゆけば誉田のさと。甲斐の黒駒たけくともしこなして乗る武士や。花の臺や紫の。雲と詠せし藤井寺。順禮がなさけをも。ひとへに大慈の誓ぞと。思へばいとゞ袖しぼる。なほゆくさきは津の國や。なにはの蘆の節のまも。まだはだなれぬつまゆゑに。諸事せわながらまよひゆく。いかにまさきよ。あれ〳〵満ちくる汐も戀すかや。女波男波のわるものを。佐太枚方をあとになし。くずはの森に色どりの。ねぐらもとむるやさしさよ。男山には女郎花。荻の葉風のたよ〳〵と。ふらでなびくはやぼらしや。淀や伏見の舟呼ばひ。いとし殿なら。いとし殿なら我もねん。あないぶかしや松かせの。吹かでしらぶる琴のねか。かすかに三味線きこゆるは。こゝはいづくぞ時ならぬ。ほとゝぎすの一聲を。きかまほしやとおほせける。まさきよが申すやう。さればすぎにし梅さくころ。都づかひのをりからに。下部のものに聞きけらし。伏見の宿のいろざとなり。なに撞木町とかや。ついでをかしきことながら。うきが中にも物とはん。指きり髪きり入ぼくろ。よねのならひかいやほんに。まつにかはらで心せば。たれがちぎりをよそにせんとはと口ずさみ。今に清水寺にぞつきたまふ。……佐山撿挍調。

ど難儀したはゞ。年の内は待ちまうさん。春は早々くすましたまへ。なにがさてさてさらばおさらばさんさらば。もはやおちついたにはつと鹽水ばつ〳〵。またたのみましよ。どなたよりの御出ぞや。いや最前のものにて候。さて〳〵くどき人かな。年の内は待ちたまへ。いやさにてはさふらはず。雪駄がかはり申したと。二度の物思ひにはつと鹽水ぱつ〳〵。うちをさまるぞめでたき。

淺黃帷子

ほの〴〵と。夜明烏もいはゞ聞け。きのどくの山こえかねしに。順禮がなさけにて。鬼一口をまぬがれて。まさきよ一人おんともにて。たどり〳〵も道芝の。すそは露やらなみだやら。時しも秋の夕まぐれ。千々の草葉も紅葉して。錦かと見る谷かげに。木こりは簀に家づとの。花はなに〳〵藤ばかま。桔梗かるかや我木香。門田の稻葉かりそめて。竹の丸屋の賤の女が。月にむかひて打つ砧。こゑをかしくも拍子どる。名にのみ聞きしうぐひすの。關こえすぎてながむれば。すねてしげりし松山の。かのわけ法師がそこはかと。かきあつめにしつれ〴〵に。綸子鼻緒の足駄にて。作りし笛には鹿もよるかたなん。すぎにし黑髮のよれる綱には。大象もつながるゝ習かや。玉代の姫を戀ひそめて。いつし帝位をふりすてゝ。草

でにし秋もはや。夜寒しらるゝ夕ぐれに。あくる朝は近くとも。ながめは月の名には似ぬ。遠里小野の落雁は。寫繪だにもおよばじと。見ゆるこなたの御寺に。あゆみをはこぶ諸人の。たのみをいとゞかけまくも。鐘やうき身をはこぶらんと。御法たふときいにしへは。三十二代のすべらぎや。御代のをしへも今こゝに。天王寺の晩鐘と。ひゞくその名は高津の宮。雪の白木綿くれかけて。木ずゑながらやたわむらん。きぬがこゑ〴〵すみわたる。嵐につれて音たかく。ふくや平野の晴嵐と。名におふ八つのけしきをば。およばぬ筆の口ずさみ。……廣橋勾當調。

新金五郎

くるふとも。おもはでおもはですがたこそ。戀にやつれし金五郎は。人目をしのぶ笠屋町。千度もゝたびいてはまた。もどりつゆきつ立ちどまり。それと知らする聲色を。きくに小さんが心にこたへ。のべのかたおり立ちどまり。さしくるあいのもつれをも。よそに見なして格子へ出でて。見ればかなしや降る雪の。中にうづもれ立すがた。もうし〳〵と小聲になりて。ひとつふたつとさゝやくうちに。おくよりかけし人梯子。はなす言葉の返事にまぎれ。のちにまいちどちよたあひましよと。あとに心をのこしおき。なさけないぞや金五郎は。軒にしよんぼ

里のくだかけ

かねてより。うかるゝ浪や鴨川の。ながれの里の夕げしき。しらぶる糸の音にひかれ。かよひくるわもなさけの道に。踏みはたどらじ迷はじと。おもひながらもあぢきなや。あぢなこゝろに鳴る鐘の。そのきぬぐの別路を。かくやうらめし告の鳥。いつもきくこそうたてけれ。

お庭八景

名にたかき。その近江路の八景を。うつしてこゝに津の國や。ながめを四季にかたどりて。見わたすそらもうらゝかに。かすみ立ちそふ川の瀬の。夕日かゞやく風景は。よそに長柄の橋ばしら。下ゆく水もくれなゐに。てりそふ影のいつしかと。ながめに春もはやたけて。花のなごりも蟬の羽に。うすき衣を今日よりは。きつゝなれにし故郷を。はるかへだてし山のはに。一村きほふ浮雲も。田蓑の島の里人は。名をばかざしに降る雨を。いとはず過ぐる夕風も。はれてすゞしくかよふらし。げにおもしろやこの浦の。ながめもよしや蘆の葉に。やどれる露のかげそへて。四方にくまなく白妙の。ながめ難波の秋の月。ひかりさやかにところから。心はなほも住吉の。浦より浦にこぎわたる。歸帆はげにもたぐひなや。月にめ

新ちりもみぢ

わりしひぶみのすゞりよすゞりよ。梨子地の松の淡路島。かよふ千鳥はやつれもせいで月はいづくに江も名にしるき。藻にみがゝる玉がしは。ひかさしやんしてやう〱ご世帯なれたら枕さへ。はづれしだいもうれしいものを。花も紅葉も三繼の手なれの棹のうたかた。……菊嶋勾當調。

新縁の綱

春はいつ。笠にふらるゝ雪よりもつれなき人のつめたさを。六つの歌仙もよみわびて。やたけでゝろに戀すてふかざすや金のかんざしの。さす手ひく舟磯へもよせず。沖にゆら〱由良の戸のおつと取楫合點じやえいかあゝようそろのんこ。帆をまきたての舟歌は。丸に三引戀風や君に扇の替紋は。色のつかさをもとめん手管。中をへだつる笆の菊咲きしもにくや夕照に。顏はもみぢの戀の緒に。丹波大江の山よりもまさる思や八雲たつ。出雲八重垣つまごめは。どこへ結ばん縁の綱。……由良来馬作。峰崎勾當調。

身がはり音頭

霧に埋もるゝ遠寺の初夜。母は今宵ぞ名殘の音頭。これやこの。七月の十六日は

りたゞひとり。袖なる雪をながめては。雪は消ゆるといふものゝ。おりもやするにわれはまた。きゆる思ひの踏みまよひ。もはや夜明の鐘のこゑ。さてもまかせぬうきつとめ。今宵の逢瀬はかなはぬなあ。かの深草の少将は。九十九夜めにこがれ死に。われは三百六十夜。でかんの冬の夜さむさに。おてられたりしゆゑやらん。かるき枕もあがりえん。たのみすくなき世の人の。うはさを聞けば胸せまり。この身がまゝになるならば。朝夕そばにつきそひて。藥の水のにごりなき。こゝろ一つの看病に。せめて一日半日なりと。このてがしはの二おもひ。伊勢や八幡やお多賀のやしろ。さては高津の日しんさまへ。たのみをかけし題目の。一萬遍の功力にて。つまの金五郎いのちをも。せめてわたしがこの里の。年のおひだの此世のきづな。つなぎたいぞや鐘の緒に。いのるしるしは定紋の。がくの小さんとかきつけし。提灯の火もほそ〴〵と。心も次第にしめりゆく。冥途の道に二つなく。つひにはかなくなりにけり。

雲にかけはし

雲にかけはし霞に千鳥。およびないとてほれまいものか。賤が伏屋の月を見や。よいやな。

説かれたり。わが子はざいにんならねども。踊は宵の夢のうち。このあけぼのは死出のやま。さぞ父こひし母、こひし。こひし〳〵となくは冥途の鳥かへ。

新袖の露

佛の慈悲。那落の底の罪人も。呵責のほのほ休ませて。じうまんごくわんによしやうれうちと。うたひ踊りてあそべども。十七日のあけぼのは。もとの那落にくるしむと。盂蘭盆經に

みつにんぎやう

およそ昔のちぎりわすれぬ。のぼりつめては上もなし。雲井のよそに有明の。つき出しよりのなじみとて。それと見るより妹脊鳥。とびたつばかり死なざ止むまい我おもひ。ふたり添寝のなが枕たばこ戀草伽ともなりて。ほんに烟管の跡の月ほかに惡性はせまいというて。この文はなんぞいな。にくいおさんがあるわいな。よう知ると思はんせ。さりとては。いかに男のくせなればとて。むりな口說に夜をあかし。ふつつりりんきせまいぞと。たしなんで見てもなさけなや。さりとては。いかに女子のくせなればとて。うらみがちなる神はとけ。われは白雪。ふられてとけし下心見るたび〳〵やな。聞くたびに。にくてらしいほどかあいさのわしはかうした流れのつとめ。そのかひ渚の千鳥やさんさなくねふられてとけし下心見るたび〳〵やな。きくたびに。にくてらしいほどかあいさの。わしはかうしたながれのつとめ。そのかひなぎさの千鳥やさんさ。なくね夜半のそら……中村慶子作。吉澤春水調。

雉の雌鳥

雉子の雌鳥す〳〵きのもとにつまをこがれてほろ〳〵うつていしよほろ〳〵うつ

白糸の。たえしちぎりを人とはん。つらさに秋の夜ぞながき。あだに訪ひくる月はうらめし。月はうらめし。あけがたの枕にさそふ松虫の音もたえ〴〵にいとゞなほ。荻ふく風のおとづれも。聞くやと待ちてわびしさの。涙の露のおきて思ひ。ふして丸寢の袖にかわかん。……村住勾當調。

拍子あふぎ

うき中を。しのぶもおぢずり陸奥の。ちかの内とは別れのたびに。夕ざれば。袖に波こす濱千鳥。紋は比翼のこゝろを汲みて。しる人ぞしる思の海よ。深い淺いは戀のくせ。すねてなにをか紫の。ゆかりの色と仕方で知らせ。見かはす顏の罪なくも。月の都にわびずまひ。……洲濱作。峰崎勾當調。

すみよし手形

立ちならぶ。四つの宮居のあらたにて。世に住吉の神さんも。はい駕やろか〳〵。雨はふらねどごろ〳〵せんべ。日和片棒でゆく蜘蛛のいと。小紙鳶懸かとのぼされて。中にもぱいとはじき猿。はやま卷かける卯月の茅卷。口三味線でつゝてんが茶屋。白湯まで湧きてたゞにぎはひぬ。日も竹馬を土産の手がた。麥藁細工ぶら〳〵と。半夜をかけて下向みち。……茶卜作。藤永撿挍調。

にとめきらの淺きかをりや香具屋の花となりしと聞くよりも涙のしぐれ古手屋のあだとりんきをときわけてうすきちぎりを八郎兵衛が妬のつるぎ研ぎたてゝ。われと身を裂く鰻谷。親のいさめや世のそしり耳をつきぬく入合の。鐘もろともに忍びいで。秋風さむく身にしむもいまのうらみは長堀と。人目をつゝむ頰かぶりにくし腹立彌兵衛を。今宵のうちにやつきりきり〳〵なきりころしうき世の夢や鮫鞘の。鯉口くつろげ落しざしはや初夜の鐘ゆびをれば。一つ二つや三つや四つ。四つ橋四すぢ四辻をふきや濱邊と濱びさし。あがりつおりつ幾たびかやもめ烏のうろ〳〵とおんご烏とだまされてうかれ烏と笑はれんながき玉の緒きれはてゝくらき闇路の闇の夜烏かあい〳〵と言の葉になくは冥途の烏かへ……嵐三右衛作。廣橋勾當調。

六段戀慕

松の枝にはな雛鶴巣だつ。谷のながれに龜あそぶながれにながれに谷の。谷のながれに龜あそぶ。沖の石とはな。おろかの沙汰よかわくまもなき袖の海。おろかのなおろかのさたよかわくまもなき袖の海。戀ひ暮し戀ひ明し。松に時雨は。眞葛か原にうらみしに。いまはな。うれしやな。なびきあふ夜の。わかぬちぎり

つまをたづねてほろゝうつていしようさましやうよがない。

秋の七草

生ひゆく末は。われのみぞ見ん標結ひし。わが撫子の時まちえたるさかりうれしき女郎花。花車なすがたを思ひのたねに。まねく尾花が袖の露。乾さでかたしく身はいつか。ねての朝顏なほゆかし。たが脱ぎかけし藤ばかまぞと。問へば紫ゆかりをとめて。うつりやすきを宮城野の。萩の下葉の下こがれ。うらみがちなる心のそこを。ほんに葛花いろをも香をも。しる人しらぬ朝ぼらけ。……今宮屋耕五郎作。吉村撿挍調。

雲井ろうさい

山のはに。いかな夜も。夜も。人こそしらね。閨はや。なみだの淵となる。よしやなげかじの。かなはぬとても。さだめやないこそ浮世なれ。われ振りすてゝ一聲ばかり。いづくへ行くぞ山ほとゝぎす。……佐山撿挍調。

八郎兵衛

うき名をながす堀江川。ながれに淀む捨小舟。つながぬ緣は是非もなや。戀路の鬼か丹波屋の。つまにかよひしかねごとも。きのふは今日の飛鳥川。いたづら髮

はゝ梅の名どころ。君が代のにごらで絶えぬ御溝水。すゑ澄みけらし國民もげに。ゆたかなる四の海。千年かぎれる常盤木も。いま世のみなに引かれては。幾世かぎりも嵐ふく音。枝もさかゆる若緑。生ひたつ松に。巣をくふ鶴。ひさしき御代を祝ひ舞ふ。秋はなほ。月のけしきもおもしろや。葉ずゑ〳〵にさす影の。ふしどにうつる夕まぐれ外面は虫のこゑ〴〵に。かけて幾代の秋に鳴く。音を吹きおくる調べにつれて。そよぐは窓のむら竹。……三橋勾當調。

三段きぬた

糸によるものならなくに別路の。心ぼそくもおもはゆるかな。ものとはなしにわかれぢの。山もわらはに木の葉ふり。のこる松さへ峰にさびしき。ものとはなしに冬のきて。山もわらはに木の葉ふり。のこる松さへ。のこる松さへ峯にさびしき。……島住勾當調。

浮舟ばなし

愚僧が住家は。京のたつみの世を宇治山と。人はいふなり。ちや〳〵くちやちやえんではなす濃茶の緣の橋姫。ゆふべの口說の袖の移香。花たちばなの小島が崎より。いつさんばしりにもどつて見たれば。內のおかゝが悋氣の角文字。牛も

は千代もかはらじ。……大石うき作。岸野次郎三調。

名所みやげ

水無月の初旅ごろもきて見ればこゝはす住吉あをによし奈良坂こえて夕ぐれの空もしづかに寂滅爲樂と告げわたる。これぞ名におふ大佛の。かねでともれて高圓のよそにうき名や立田山。三輪の山路を裳裾の糸の。いとゞ故郷かすがのゝ。社にしばし此手をば。合鏡の底きよく。あれ〳〵南に雲のみね。あつさしのぎの三笠山月の七瀨のあすか川。かはるや夢の數そへて名所〳〵の都のたつみ。宇治の川面ながむれば。遠にしろきは岩こす浪か。さらせる布か雪にさらせる布にてありそろ。賤の女が脛もあらはによそねじま。なれし手わざも玉ぞちる。波のうね〳〵白玉ぞちる。あらおもしろの景色やな。あらおもしろのけしきやな。われも家路に立ちかへり。つとにかたらん花の家土産にかたらん。

松竹梅

たちわたる。霞をそらのしるべにて。のどけき光あらたまの。春たつ今朝は足引の山路をわけて大伴の。三津に來鳴くうぐひすの。南よりわらひそむ。かをりにひかれ。聲のうら〳〵か。羽風に散るや花の色香も。なほしはえある此さとの。なに

又巽は宇治の里。八幡山崎たからでら、松の尾かつら梅の宮。お室にちかき小鹽山。嵯峨や高雄あたご山。うづまさ北野たゞすの森。鴨川貴船くらま寺。岩倉芹生八瀬のさといたゞきつれし大原木や。薪に花を折りそへて。おもふまゝにはいはれねど。いともやさしき賤がわざ。吉野はつせの花よりも。都ぞ春のにしきなる。……長岡勾當調。

關寺小町

思ひ出づればなつかしや。人の恨の積りきて。いつの頃よりうかれいでゝ。たのむものには竹の杖。泣いつ笑うつ物狂と。人はあだし野ゆめなれや。訪ふはうらめし昔は小町。いまは姿もはづかしや。たれは留めねど關寺の。庵さびしきをりをりは。都の町にうかれ出で。ゆきゝの袖にすがりつゝ。うきことのかず〳〵を。見たまへや人々。春は梢の花にのみ。心をよせて短夜の。ほとゝぎす雪見草。淺澤のかきつばた。おやめ藻の葉もかれ〴〵に。ほたるもうすく殘るあしたの。名も廣澤の月影。かこちがほなる我なみだ。落葉しぐれにぬれそめて。われながらはづかし。百夜しのぶの通路は。雨の降る夜も。降らぬ夜も。ましてや雪霜いとひなく。てゝろづくしに身をくだく。一夜を待たで死したりし。深草の少將の。その怨念の

涎をながるゝ川瀬に。くだけば落ちあひ我からてがるゝ。螢をあつめて手くだの學問。唐も倭も。さとの戀路は山吹ながしの。水に照りそふ朝日の御山は。たれでもかれでも二世のちぎりは。平等院とは。さりとはうるさいてつたはゝい。…

……松島句當調。

京めいしよ

てとさらかしてき君の御政事。關の戸さゝぬ折ふしに。洛陽御見物申すべく候。みかどの御宮造は。まうすもなか〳〵おろかなり。まづ音にきこえし東山。吉田とかやは天照らす。御神をはじめとして。日の本六十餘州の御神を。勸請ありし靈地なり。左手に高きおん山は。和國無双の比叡山。傳教大師の開基にて。もろこしの天臺山をうつされたり。中堂講堂戒壇堂。ふもとに山王二十一社。甍をならべて立ち給ふ。右手は黒谷眞如堂。若王神社永觀堂。あづまくだりの道こえて。祇園のやしろ清水寺。地主權現の花ざかり。音羽の瀧の白糸を。くりかへしつゝうちながめ。大佛殿は盧遮那佛。歌の中山せいがんじ。今熊野のをも打ちすぎて。いつも秋にはあらねども。東福寺にて名もたかき。通天のもみぢ稻荷山。咲きみたれたる藤の森。うづらなくなる深草山。伏見の竹田。淀鳥羽までも見えて候。さて

季にめでたき妹とせの。ふたり結ぶの數へ歌。……島原領城長歌太夫作。深草撿挍調。

清水まうで

名にしおふ。音羽にちかき地主の春。櫻はまだき梅ちりて。その二月の半すぎ。ひらく御帳の千手の糸。みちびく法のめぐみには。枯れたる木にも花姿。かうした利生は外ではないぞへ。袖をつらねて色の一むれ。いだき玳瑁てりもよく。銀かんざしさしもぐさ。もえたつ緋裏縫裏の。たもとゆたかに裾ふかき。かへすとちうたいな。いろをみせばのかゝへ帶。むすびさげたる黑繻子緞子。だんもひいふう三年坂を。お手に手ひきあうてとろ〳〵と。十と五つ四つ五つ。いつか止みなん我戀でゝろへ。とめて〳〵幾夜か。寢ぬ夜の月をへ。ながめ難波の蘆のかず。三十一文字また一もじは。おゝつがもない。おくへおくへと。ざそふ御厨子のちかひたのもし。……繼橋撿挍調。

春のことぶき

初春やかすみの衣たちそめて。見わたす空の朝風に。まださえながらいともはやたもとにかをる梅が香に。さそはれ來鳴く鶯の。聲にのどけさ正木のかづら。ながき例は祝ふその。子の日のあそびゆきかよふ。野邊の小松や汀の池に。鶴と

つきそひて。かやうに物を思ふぞや。あなたへ走りこなたへ走り。ざらり〳〵ざら〳〵ざつと。乞ひえぬ時は惡心。又狂亂のこゝろつきて。聲かはり。けしからず見ゆれば。すご〳〵と關寺の。いほりにかへるありさまは。山田の畔の案山子よの。秋はてたりな我すがた。……岸野次郎三調。

長唄づくし

高麗もろこしの廿五絃。十三絃に日の本の。琴の糸筋みちすぐに。琵琶の四の緒三の糸。引く薄霞しのゝめに。はつ梅づくし盡しなく。なほ幾春も久方の。月もおぼろに春日野や。若草あをく吹きわくる。春風のこゑ水のおと。波もあやなす糸竹の。節にいづれかもれざらん。貫之の。雪ちりかゝる。こずゑの櫻つくしとる。袴の色か濃むらさき。春草もやゝ夏草も。たけゆく君が年月の。晴れる間もなき戀衣。なほさらしたる玉むすび。おもひかけでを筑紫がた。浮寢の筆や藻鹽草。はかなくおくる心根を。一夜手まくら波まくら。うつゝの夢の小夜ごろも。返しありやと待つながさ。ころも砧の更けわたる。空も秋草霧ふかき。われが涙の玉くしげ。蓋なき閨の姿見に。うつせばさてもやつれしな。身は冬草のかれ〴〵に。をぐしみだれてちら〳〵〳〵と。菊に尾花に。時雨ざき。こがるゝ末はうちなびき。四

んちうどころと名もたかき。松にいもせやむすぶらん。……鶴山句當調。

五尺手ぬぐひ

五尺いよこの手ぬぐひ。五尺手ぬぐひ中そめて。たれにいよこのくれうより。たれにくれうより。やどにおけ。やどがいよこのよければ。やどがよければ名も立たぬ。佐渡のいよこの越後は。佐渡と越後は筋むかひ。橋をいよこの掛けうやれ。橋をかけうやれ舟橋を。はしのいよこのしたなる。橋の下なる鵜の鳥が。小鮒いよこのくはへて。小ぶなくはへて。ぶりしやりと。

おさん茂兵衛

當代めづらしの染いろや。色よき花のうすもみぢ。はや二月のころよりも。おさん茂兵衛はかくわらん。いかに茂兵衛どのおさん様。あすは丹波へ落ちても見ましよ。しづかにござんせそろ〳〵と。おさんと茂兵衛どの。丹波へおちらるゝ。あとにつゞいて追手のかた〴〵。おさん茂兵衛はのがれはないぞと。からめとつてひつとつて。みやこへわたした。

おやま人形

あゝおろかなり甚五郎。しばし心はくれはどり。あやなく涙おさへつゝ。すぎし

龜との齡をこめて。盡せぬ宿こそめでたけれ。

妹脊の秋草

戀草の。しげれる峰に八重葎。ろのくさ〴〵のえんによる。萩の下着に桔梗の上着。荻と薄はまことの夫婦。露の情を世にうけながら。契りもうすき朝顔の。さかりにたらでゆく野べの。草になみだやそゝぐらん。虫の音にさへあはれそふ。袖は露やら涙やら。ほんに浮世であるわいと。たがひに顔を見あはせて。そもや二人がなれそめは。いふはたがひの迷ぞや。ほんに世界のならひとて。義理はどつらいものはなし。心にまことのあるものは。かならず愚痴のあるものと。おもへばうれしいそなたのこゝろ。ならふことならながらへて。未來のために夏花つみ。香花とつてたもらぬか。それも無理にといひはせぬ。わるう聞いてたもんなと。いへば女はすがりより。ことをわけての御言葉を。わるう聞くではなけれども。いかに男のくせじやとて。あんまりむごいと夕顔の。花さかせとはどうよくな。身は空蟬のうつゝなく。いはずかたらず我心。みだれし髪もみだるゝも。つれないはたゞ移氣の。もみぢも今は葉をそめぬ。まだ白菊のうらわかき。わたしにものをおもへとか。かこちなみだ秋そよぐ。今宮は。虫どころなりつんぼなり。し

じやよほんよ〱ほんよさうは〱〱〱〱うはき旦那うとくだんな。とかくうき世は〱。……佐山撿挍調。

新道成寺

花のはかには松ばかり。暮れそめて鐘やひゞくらん、くれそめて鐘やひゞくらん、鐘にうらみがかず〱ござる。まづ初夜の鐘をつくときは。諸行無常とひゞくなり。後夜のかねをつくときは。是生滅法とひゞくなり。晨朝のひゞきは。生滅々己いりあひは寂滅爲樂とひゞけども。われは後生の雲はれて。眞如の月をながめわかさん。道成卿はうけたまはり。はじめて伽藍たちばなの。みちなり興行の寺なればとて。道成寺とは名づけたりや。山寺の春の夕ぐれ來て見れば。入相の鐘に花やちるらん。入相のかねに花やちるらん。さるほどに〱寺々のかね。月おち鳥鳴いて。霜雪天に。滿汐ほどなく日高の寺の。江村の漁火も愁に對して。ひと〱ねむればよきひまぞとて。立ち舞ふやうにてねらひよりて。つかんとせしが。おもへば此鐘うらめしやとて。龍頭に手をかけ飛ぶかと見えしが。引かづいてぞ失せにける。

小袖物狂（一名戀風）

彌生の雛の日よ。お姫さまじやと知るならば。なんのほれましよふと見そめ。すいな浮世のおもひ出に。せめて一夜と身はうきしま原へ。うかれ出口の柳髮。ゆふべは客のあとにそひ。こゝの格子やまがきのもとを。たづねありけどうたかたの。あはぬ昔がましじやもの。おもひかへせど濡衣や。きるにきられぬ姫君に。魂うつす人ぎやうも。戀路もきりてお身がはり。お主の恩はいとゞなほ。高嶺の花や見たばかり。……石津某作。松島撿挍調。

ほうさい念佛（一名浮世ほうさい）

いちかはの。よねしゆわいのう。お手が荒れそろさあへ。道理かないち川は。なはのをところさあへ。東金の町屋にかけた塗笠。さあへ。これをこそうき人に着せて見せたや。さあへ。しんてうのきやうしうはいの。わけを三人もつたとさ。のんはへ。三人目の。なかの〳〵花ざきは。いちのうは〳〵うはきですいたへ。かさいのけんろくどのはいの。嫁を三人もつたとさ。のんほへ。三人目の中のよめは。ずでんとはらんだ。さて〳〵いちぼつとりものじやよの、のうほんへ。いちのぼつとりものじやよ。ほんよ〳〵ほんよさ。うは〳〵〳〵〳〵うはき旦那。有德のだんな。三人目の中のよめは。ずでんとはらんだ。さて〳〵いちのぼつとりもの

言の葉を。おもひやるさへかなしけれ。ふけゆく鐘も別れの鳥も。ひとりぬる夜はさわらぬものを。柳の糸のみだれごゝろ。いつ〳〵わすりょ。いつの春風花のえん。花のえんや。まれにあふ夜は寺々のかねづくに寝られぬ。いとゞさびしき旅の空。よさの泊りはどこがとまりぞ。草を敷寝の肱枕。ひぢまくら。葉越の〳〵幕のうち。むかし戀しき面影や移香の。そのむつごとの露ふかく。たちより見れば荻薄。尾花まじりに招く手を。拂ひのけてはかしこにしげる。榊のえだに。かたみの小袖うちきせ。あれ〳〵。枝にゆかしき人は見えけり。うれしやとて。のぼれば榊のえだは身をとほし。愛着は胸をこがす。こはそもいかに淺ましやと。せんかた涙に伏ししづむ。

屏風怨靈（一名あしたの原）

いとしさを。おもへば影にそふものを。まよふが中の迷ひとは。千々にものこそやるせなや。逢うた月日をわすれもやらで。すいも思ふといふ一言の。なじむ程なほ勤もよそに。ほんに世界のつまともなれば。男ひとりを守の神の。綱さへ切れて。こよひ〳〵と待つ身はあけて。今朝はむかしの鐘のこゑ。なほも戀慕の闇路は闇きくらまぎれ。こゝにあらはれかしこに立ちまち。立ておきし屏風は舟

戀よ戀。わが中空になすな戀。戀風が。來ては袂にかいもつれ。おもふ中をば吹きわくる。あら心なの嵐につれて。うら吹きかへす形見の小袖。見るに思ひの增すゆゑにこそ狂はすれ。くるふは誰そや我はそも。安倍の保名が安からぬ。むねにせまりしかず〲よりも。いづくをさして和泉路や。よるべの水のうたかたに。たゞよふ姿みだれがみ。素袍袴ふみしだき。うかれありくぞうつゝなき夢にもさらに知らぬ芙蓉の花の。かほばせ姿は及びなき。よし野初瀬の遲ざくら。更科越路の月ゆき。もなかはるか下照衣通。神のえにしの榊とは。わが戀人のあだし名か。あだなちぎりの

こぶ重箱は。姥が餅かとくち〲に。坂は照る〱鈴鹿の茶屋に。花を一本わすれてきたが。おとでや。おとで咲くやらそれ開くやら。よいやな。あひの土山あめと見て。曇るさしひを迎駕。人目の關に門立の。赤まへだれの夕照に。おじやれ〱の手を引いて。おつと泊りの床とれば。ねむる禿の波まくら。七里も乘らぬ引舟に綱手かなしむうきおもひ。一間にこもる琴の音の。をかざき女郎しゆかはし女郎衆一夜妻から東路に。夜も赤坂のきぬ〲に。かざ。す扇の裏道を。見付こすほどおそろしき。おとにきこえし大井川。岸の柳の寢みだれて。こゝは島田の逗留かいな。されば いな。つもるなさけの雪の日は。不二に雲助ぶら〱と。格子のそとの轉寢に。ゆめには三島。はこね山。のぼりくだりの戀の坂。飛脚の文のかな川やでぞんじよりの土產には。江戸むらさきのへ。……勢川某調。

六段菅掻

琴の音に。峯の松風かよふらし。いづれの緒より調べそめけん。松は常磐よ。松はときはよ。いつもかはらじ。言の葉ごとに。……尾形撿挍作。深草撿挍調。

鎌倉八景

まだ夜をこめて有明の。月もやゞかる武藏野の。空も一つにちぎりこし。妹脊の

の山にひとし。おつたて〳〵。おつたてられてよぢのぼれば。あぶな〳〵つきおとされ。なほ一念のせめかけ〳〵。すはやくるわのざしきも明方の。あさまにや
なりぬらん。などりの袖を引きとむれば。ほのかに見えしあとたえて。たゞ茫然とあしたの原の。たゞ茫然とあしたの原の。おもかげばかりやのこるらん。おも
かげばかりや殘るらん。……初代瀨川菊之丞調。

丹頂の鶴（一名舞鶴）

かず〳〵のさかづきに。千代萬代と。かさね〳〵てめぐらする。銚子もとり〳〵
糸竹の。聲もにぎはふ颯々の松のかぜ。丹頂のつるは。庭上に舞をかなで。齡をさ
ゝぐる君が御代。つきじつきせじ。よむともつきじ眞砂のかず。一つ二たつ三つ
のはま。四つの海なみしづかにて。ゆたかにをさまる御代ぞめでたき。……今西
一音作。深草撿挍調。

道中雙六（一名五十三次）

筆のさや。たいて待つ夜の蚊遣より。香のすがりはかんざしの。算木もすてゝ車
座に。めくりはじめる雙六は。五十三つぎ手のうちに。なげ出す賽の目くばしに。
かべにまじ〳〵大津繪の。ふり出す鎗手先拂。ざしきをどりの中入に。仲居がは

晴嵐おもしろや千雨とるども馬方いやよむまかたいやよ腰には馬柄杓手にや又きせる月のみやこをふらねばないよさどうした心底しはがない日もはや西に入相の極樂寺の晩鐘ときゝしにまさる八景や由比がみぎはによする波峰の嵐にもみわはせよするを波がどう〱とどつと打つてはさつと引き日本無双の名どころやこれぞ妾がすみかとて雪の下にぞ着きたまふ……虎屋榮閑作。胡妻撿挍調。

女猩々

うかむ瀬は潯陽の江の小さかづきかずかさねても色かへぬ松の位のいつまでも老せぬや〱。女郎の名をも菊の水。大さかづきも浮みいで、飲めどもつきずかはらぬはきりころからころおもしろや御酒と聞く名もことわりや秋の夜の吹けどもさらに寒からぬは身あがりの身のことわりや。ことわりや白菊のきせ綿ならで白粉の面色はさらにかはらぬは宵のけはひのくまもなき。ところは晨朝の鐘きゝまでの酒盛に猩々舞を舞うよくしのはの笛を吹き浪にはわらぬ舌鼓うつゝか夢か。それかわらぬか亂足をりしも紅の裏風に朝のしらべやのこるらん千草の冬枯に雲のわなたに春やきえて風にとびかふ雪

中をふりすてゝ。かく立出づるつまの心の。うちてそうらめしや。うらみながらも立ちいでゝ。ふりわけ見ればはの〳〵と。霧にへだゝる安房上總。出で入る舟のかず〳〵は。遠浦の歸帆これならん。みぎはの鳥も。つがひ〳〵羽をやすめ。よせあつまりてふはと立つや。雁鷗。平砂の落雁おもしろや。あれに見えしはありがたや。いくちよ〳〵の神かぐら鈴の森。あらし木枯さつと吹け。笠にや笠に木の葉がばら〳〵と。はりいよ〳〵ばら〳〵と。江天の暮雪まのあたり。はるかに高き御山は。いつも鹿子のふじの山。どれ〳〵それ見て。見てから見てから戀がましまず。かず〳〵の御言葉に。はつとだまされた。それて寢もせで迷ひゆく。おもふ願ひを神奈川や。沖にたゞよふ海士小舟。苫もる雫もろともに。なみだにわかす舟のうち。これやまことに瀟湘の。夜の雨ともいひつべし。雨も晴るれば網をひく。ひくになびかぬつれなさよ。君をおもへば。かく忍べどもかひぞなき。つれなき松に降る時雨。なさけにへだては無きものを。わすれまじ盡せまじ。思ひはつん〳〵釣の糸。ひいてしやくるところを釣つたこゝろは面白や。漁村の夕照うつすらんげにものどけき海のおと。一首はかうぞ詠じける。東路や。野島が磯の濱風に。わが紐ゆひし妹がかはのみと。詠じすてゝぞゆくほどに。山市の

煙草さんぞんふいていつまでかまう〳〵として十念のつとめの地獄極楽も。ゆめのいろ〳〵に柳はみどり。鼻の下から出しだいを。一字不說といひさいて。夜わけの鳥へ……伊勢屋みほ改調。

梅の芳兵衞

心も空も闇のみち。わやなき梅の芳兵衞は金がかたきかにくからぬ。つまのおとゝの長吉を。むざんながらも手にかけて。殺す刄の主おもひ。夫おもひにかきくれし小梅はせめておとうとの。望もかなへ明けぬ間と。なんのしがくも亡骸を。かくす人目の澁荷桶。さしになひたる諸涙。夫婦は肩を入ちがひ。右と左の手には珠數。くりことながらとぼ〳〵と。心ばかりの野邊おくり。小橋をさして行く道はづまさき上りたかはらに。煙をつゝむ瓦がまわかりのたらぬわれ〳〵と。咽びてくゆる胸のうちいづれはかなき野あらしの。吹かぬその間の身にしみて。惜しや誓の薄き緣。なごりの淚せきかねて。步みなやみつ行きなやむ。とかう言葉もないじやくり。かたと〳〵に響きつゝ。胸にこたへて身もしびれ。どつとまろびてどつさりと。おろす澁荷はあだし野の。露ときえにし長吉が。死骸に取りつきすがりつき。夫婦は顏を見あはせて。なみだ四筋のたでの緒に。したふ

の花。ちり〳〵たゞよふ。君が袂につもるは思ひ。千々にこゝろは亂れて。みだれ盃かぞふれば。宵から卷いたくだ鷄の。聲もはら〳〵明けかゝる。空に酒星桝星に。酒の泉のよもつきじ。よもつきじ。よろづ夜あけの床とれば。ふとんに這ひ立つ足もとはよろ〳〵と。よわり伏したる枕の醉の。さむるとおもへば。銚子はそこにさめやらで。あたゝめ酒の燗鍋に。ぱつと咲いたる酒中花を。散らすなよそへ。……伊勢屋みほ調。

ちょんがれ一休

世のなかの。すゞしきものは蓮の花。その臺からこけおちて。まめぞう坊主の一休や。みなさん聞かんせ釋迦といふ。親方どのが世にいでゝ。彌勒とやらよろくとやら。わけさへ知れぬすゑのこと。二佛の間は雨夜の星よ。西も東もへだてなく救ひとらるゝ旅人は。關の小まんに濡地藏。開眼せうと鉢卷させ。答へがない。ないと思ふが悟りのたねようゑて見よかし佛には。心もならず水草の。さそふものならいなんとの。めんどうくさい立姿。ちらと見そめし戀でゝろ。達摩は後目つかはるゝ。六祖のうそはかねてより。鐘がなるのか撞木かと。なるかならぬは目もとで知れる。比丘尼の歌も一切の經もあくびも同じ道。ひまな女郎の長

の字はくはぬきさきより見性のさとりの眼ちら〳〵と目星の花のちりかゝる。ところへ。ぞだらく山の大山伏。むしやら頬髭不人相。こくぞのべにをぬりちらしでじまばんかうのけかづら。太布の衣の尻からげ。ぞうがねまきの大鍋づる。尾かしらかけて五六尺。こんがうてつきの八角棒。たじやくむほふにつきちらし。一休和尚に立ちふさがりて。づかうびしぎのえせ高聲。これ御坊。修行は法師のわざと聞く。修行成就いたいての。利德はいかにとたづねける。一休おしやうは聞こしめし。それ三界の大導師。釋迦如來のいにしへは。檀特山にこもりゐて。阿羅々仙人を師とたのみ。三十成道とげたまふ。愚僧なぞも修行をとげ。さて成佛の道とはる。おの〳〵の如くなる。山伏たちはいつが峯入。五月六月盆のころ。腰に螺貝ひつゝけて。金剛杖をつきつれて。ちからにまかせておせささ。おゝさゝさ。さけ〳〵六ばい飲んだら。煮染に初茸こんごり蒟蒻。ふし汁千ばい大食上戸。一食一菜なわにしよにや大事かさわ。えいや〳〵。役の行者のあとをつぐ。大みね葛城釋迦が嶽。霞をくゞり霧をわけ。雲に起き伏す。兜巾もはづれてころり。ころ〳〵やつてころり。こけの行。びつこ引き〳〵金峯山。木根にとりつき〳〵たぐりつき。よぢらすぞつこい。よぢらす腰をよぢらす檜木笠。一ののぞきのう

雫の雨や雨。さめ〴〵涙にくれけるが。あゝおろかなり芳兵衛どの。こなたが手をかけ殺さいでも。どうでこの子はその金ゆゑ。死ぬる合點と末期の言葉。たとひとくしんせぬとても。だいじのだいじの御主のため。おとゝ一人にかへはせぬ。かあい夫が苦にやんで。才覺ならぬ手づめの役に。たつて死だら私やうれしい。かへらぬことを兎や角といふまにもしや世の人に。見とがめられては長吉が。こゝろもむそく迷のたね。おれも泣くまい其方もと。諫められても立ちかぬる。夫を先へおしたてゝ我が思ひの後影。見するつらさにあとかたも。かきみだしたるもつれあし。おもひの露のばら〳〵と。おちてぬらせる袖たもと。ともに泣きつれ行く野邊の煙ともせず墓原の。土にもなさでこもり井の。そこかこゝかと畔道を。あねがかたせや小橋へど。たどり〳〵て急ぎゆく。……岸野次郎三調。

寛活一休

もとよりこの身は本來の。一物もなき假の世に。斗擻行脚の身をなして。はじめてこゝに紀の路なる。高野さんにぞ入りたまふ。堂塔門院古事古跡。をがみめぐりてそののちは。花にもひたし首の骨。あらおもしろや小ひだるやげに本來の空

開さつゝはらり〳〵とはらひたまへば。さしもの大雪。朝日に霜とぞ消えたりける。山伏おほきに腹を立て。こゝがくさりの一ぱい入。つゝきの行力見せ玉へ。さんげ〳〵ろこざいしやう。おしめにはつだい金剛どうじ。うなゝせおしめにはつだいこんがうどうじ。たゝきだされな。猶も行力見せ玉へと。あかでのこつぼうすりむき〳〵。へゞにへゞてぞへゞたりける。かゝるところへ不動の尊體。花火のしかけであらはれたまふ。それ見たかおゝえいとな。一休拂子ふりあげて。なんぢ不動け。なんぢふどけ。くわつくわくわつくわら。くわつくわらくわのくわと唱へたまへば。不首尾じまひに不動は目黒へおかへり。さばへさてやまうりかなやまうりかな。けゝらけいわんてゝんがう。いまどきその手をくふべいか。さあしやつともいうて見ろ。山ぶしはつきと我を折つて。たゞ平蜘と見えければ。一休すこし人がらにて。こは現銀なる御慇懃。かやうに申すも拙僧本意にあらねども。今日の釋迦の御弟子とおぼしめせ。みす〳〵それがしは。佛ぼさつの化身とて。もろ〳〵のうそ八百つきちらし。この後かならず沙汰なしぞと。わらつて左右へぞかへりける。……佐山撿挍調。

傾城にまことある文

らかべ谷。倶梨迦羅峠やさぐり坂。さぐり〳〵て頂上へこれ。のぼりつめたる行者なり。なか〳〵御坊のごとくなる。新發意小僧の晝念佛。もの丶かずにはおらねども。おくびがちなる春の日の。ねぶたざましに生灸。いで行くらべをいたすべし。一休は聞こしめし。祈りて行のそのしるし。まづ見せたまへとのたまへば。いで〳〵奇特を見せんとて。いらたか球數をおしもんで。一祈りこそ祈つたれ。えい〳〵〳〵。神のおまへにやれ井戸ほれば。水は湧かいで金がわくな。ぞつくり〳〵ぞく〳〵〳〵。かんぷららん。はるたんいんでんによ。ながさきさくらんだばじりこていみん。よしこれにてしるしもなきならば。七の夕の星まつり。鹿島三しま諏訪熱田。貴船は五社の大明神。たかきお山は愛宕さん。大ごんげん。鞍馬の山には僧正坊。さぬきに金毘羅。いづなの三郎やま〳〵の。大天狗小てんぐ。たゞいま奇特を見せしめたまへと。せめにせめてぞ祈りける。あら不思議や。晴れたる空より大雪ふつて。やま〳〵谷々おしなべて。みな白妙とぞなりにける。山伏いさんで。いつかにいかにと申しける。一休このよし御覽じて。こればかりの小雪をすつてふともすつてうべい。そんびくともそびくべい。しりからてこさを引つかけて。しやくりびきに引いてくりよ。えいや〳〵えとな。扇をさつと

こちごと。うらみを誰に夕霧が二世とかけ地をつく〴〵と。もたれかゝりし床ばしら。おもひにしづむ戀か浮世を。なんじやぞいな。だるまさん。戀事しらぬ殿たちは。玉のさかづき底がない。おまへの裾も本來は。滅つてないのでありそなものを。せう事なしの戀しらず。……近松門左衛門作。近松東南改調。

福神出端

そんもめでたい。いはひ申すよ。ゑびす三ぶ殿と大黑天が。どつかと踏んだ俵に。中にやよねたちを思ふやうにいれて。戀する人のやしなひ〴〵。にゝにどつこいさ。にゝにどつこいさ。につこり〳〵にこ〳〵ともさ。お笑あつたにさ。福の神じやよ。しつかい在所の庄屋殿だんべい。ゑびすよい〳〵三ぶ殿は。釣竿をかたげて。烏帽子狩衣しやんと着て。御酒に醉うてよろ〳〵。足元はよろ〳〵〳〵〳〵〳〵と。船こぎ出て釣を垂るれば。あらおもしろや。引くは〳〵。引いてしやくる所を。つゝとあげて見たれば。さてこそでつかいよい。おめでたいじやの。大黑殿はいなよい〳〵。寶くらべの白鼠。袋のうちはごそ〳〵。打手の小槌に鈴のおと。しやんこ〳〵〳〵や〳〵。六つ無病そくさいに。七つ何事ないやうに。八つ屋敷を新地にぐわらりと廣めた。九つ小藏を立つる〳〵。地形をえいや〳〵。えい

けいせいにまことなしと。世の人の申せども。それはみな僻言。わけしらずの言葉ぞや。まことをもうそも本一つ。たとへば命なげうち。いかに誠をつくしても。男のかたよりたよりなく。遠ざかるそのときは。こゝろやたけにおもふとも。かうした身なればまゝならず。おのづから思はぬ花の根引にあひ。かけし誓ひもうそとなる。又はじめから僞りの。つとめばかりにあふ人も。たえずかさなるときは。はじめのうそもみなまことゝ。とかくたゞ戀路には。いつはりもなくまこともなし。緣のあるのがまことぞや。あふ事かなはぬ男をば。おもひおもうて思がつもり。思ひざめにもさむるもの。つらやしよざいと恨むらん。あゝ恨まば恨め。いとしいといふ此やまひ。つとめする身の持病かと。戀にうき世を投首の。さけもしらけて見えにけり。……近松門左衛門作。近松東南改調。

夕霧文章

何九年苦界十年花ごろも。きまゝにあそぶ鶯の。梅にくるわの戀風や。その扇やのかな山と。名に立ちのぼる全盛の。松にしがらむ藤かづら。なれそめて濃い紫の。あけの烏のそれなりに。鐘もにくまぬ。寢みだれがみのむすぼゝれ。すいた同士の中さへも。あだにわかれて丸一年。二とせごしに音づれも。ないて明してか

りたうはなけれどなまだこつかんだ頭を見たかゝくまの小びくにんがちとくわん〳〵くわんともなるは夜明の鐘はつん〳〵つらいかづんでんとうから櫓太鼓の音によりくる。……嵐三右衛門作。

東道之記出端

きのふは袖に包みけりけふ九重に旅のそら。ふりわげみれば鹿の子まだらにちら〳〵〳〵と雪間に見ゆる富士の山。やう〳〵爰に清見潟空にもせきのあるならば月をとゞめて三保がさき名にのみ聞きし菊川に夢も結ばぬ假枕。小夜の中山なか〳〵に濱松がえの若緑さしでの岩を荒井の宿さゞれ女浪がよせてきて岸の小草にをゝぬれかゝる思ひうら有る二川やげにいさぎよき道のべの。

雲のはだてに戀しき人のこひしき縁なつかし。たゞ獨寢の斑女が閨の戸〳〵。西をきつと見たれば月はな月は出もせで磯に男浪がなん。ひえのな比叡のおろしが磯に打つとなん浦々とまり〳〵を打ち過ぎて大津のうらに着き給ふ。

……七村七三郎作。

右出端の跡遠目金

〱〱ともつきたつる。難波入江の三の浦風。……嵐三右衛門作。

藤内だんじり出端

藤内次郎殿わいの笛吹のや役で。紫竹漢竹の。やつこのはこりをさ。さつ〱ともはらうてのとうらいの〱。人の物はとらいの。我物はやらいのと。ふいたるはさつても吹いた笛吹と。どつとはめてとほした。だんじり打つてはやした。だんじり打つた見さいな。藤内三郎殿は小鼓の名人であかふの胴に加賀革。くれ紅のしらべを。をんどりがけにかけさせ。ちゝつちゝ。ぷつぽ〱。たつぽゝつたつた〱〱〱。うつたるはさつても打つた小鼓と。わつとはめてとほした。だんじり打つた見さいな。だんじり打つた見さいな。藤内四郎殿はいの。太鼓のやく〱でしつたんに。しつたん〱〱。しつたんつくるおん百姓。明年は八たんじや。三明年は十六たん〱。しつたんつくる丹波の國の御百姓と。打つたるはびやくらい上の町下の町。どつとはめてとほした。藤内五郎殿はいな。太鼓打のやく〱で。大まいの太鼓を。おそこらもとにおかせて。金の撥を手に持ち。つく〱〱つてん〱てれつく〱にはづんでんどんてれつく〱つつてん〱。とんからつとんとうつはれた。なるかならぬか戀の中の町。なかの〱中の町を。通

〳〵とめぐりあふせの待つ夜はほんに。なぜにちよろは出て待たぬぞ。さても〳〵見事や。いたいけしたるものあり。張子の顏や塗兒。千種むすびに笹むすび。山科むすびに風車。瓢簞にやどる山から。胡桃にふける友鳥。虎まだらの犬の子。とるやよもぎの八幡山。……中村七三郎作。

椀久出端

たどりゆく。今は心もうかれそろ。誰かいく野を引きぬきしより。いつの頃よりあひなれそめて。通ふ心の幾世の思ひ。忍ぶ妻戸を。ほと〳〵敲くは椀久か。さりとは〳〵。請けうかの。忍ばかの。そつてでうけだせおもはくを。これ〳〵。うけたもの。わのや椀久は。これさ〳〵。皷の皮かのうほんへ。しんぞ心は。これさこれさ。うちぬいたほんほへ。しんぞのうほんへ。とかく戀には身をやつす。………

大和屋甚兵衛作。

難波津壺論

難波津に。咲くや木の花冬でもり。今をはるべと咲きそめて。さかゆる葉も茂るよの。幾夜かさねて葉も茂るよの。君がよはひは萬代の。久しかるべきためしかや。國もゆたかに民榮え。玉の盃手に持ちて。飲めやうたへやさゝんざの。聲すみ

あづまも京もたえせぬは。戀といへるくせものゝ。げに戀はくせもの。あの君のめしたる。こん〳〵小袖の袖の海。沈みはつべき我思ひ。よしや吉野のはん花よりも。〳〵。あのや君さまのおもはせぶりに。忍び通はゞ亂れ逢瀬も有るやらん。げにはづかしき初戀に。夢うつゝにもいふにいはれぬおすがたを。たゞせきとめて通路に。ふたり枕を川嶋の。橋をかけたやあの里へ。飛び立つほどに思へども。へだつる中の悲しやな。とかく戀にはやるせなや。……中村七三郎作。

八幡諸出端

げにいさぎよや心よや。だてな姿の〳〵男山。引手あまたの梓弓。やたけ心に我戀の。岩ほと成りていつまでも。君が八千代はつきすまじ〳〵。とかく捨てぬは女郎花。むすぶ契りは千年山。花の情は猶つきじ。色はさま〴〵信濃梅。八しは紅梅あさぎ梅。地は薄色に鹿子梅。まだいわけなき小梅ふりよや。拍子も品もとり〴〵に。君が手なれし手まり梅。おちてこぼれてはら〳〵と。空にしられぬあられ梅。我が思ひを。筆にさかせてかきは梅。文をば君にやり梅。よどの川瀬のなんな。どつこい。やれさて〳〵〳〵〳〵水車。たれを待つやらくる〳〵〳〵と。めぐりあふせの待つ夜はほんに。なせにおよろは出てまたぬぞ。誰を待つやらくる

んと打ち納めゑいやつとも聲をせ。いさみににぎはふ門の松竹。……大和屋甚兵衞作。

梅揃石切

おもしろや四方の山邊も白妙に見渡す空のうす曇り雲と見しは白雪の。白雪の白雪の拂へどふり積る。花と見まがふこずゑ〳〵のしほらしや。何れも白妙にながめ〳〵て。雪も氷も其まゝに。袖をかざし立ちよれば。是は木々の花さかり。くべて樂のさけにいざや遊ぶべし。先冬木より咲きそむる。窓の梅の北面は。雪封じて寒さにもこの木よりもさきだてば梅を切りやそむべき。生れ在所は石切のしやうでんなものもちとかくこさん用もするかへ。何所の袖かげんで。女房も持たぬへ。梅はさま〳〵。有るが中にさ。早咲梅ぼつとりと〳〵。しな物〳〵しなの梅。思ひこが〳〵こがれてかく玉章を。たよりもとめてやり梅や。そなたへとんと飛梅や枝がさはらは御めんなれ。ふりふつて〳〵〳〵。ふつてふつてふつてふりふつた振袖の。たが袖の香のにほひ梅。初音ゆかしきうぐひすの。羽風につれてふはとみだれ。〳〵〳〵〳〵てしだれ梅。しなと拍子をかぞへ〳〵て。それ〳〵それ〳〵。それ〳〵〳〵そこらでしめろ。まかせてなけろの。とんと〳〵。と

わたるめでたさよ。我もかはらぬ嬉しさよ。こゝな殿御はないくつ。十三七つ。わらまだわかや。さても／＼わごりよは。誰人の子なれば。しほらしやをどれ／＼。こゝな子をどり出せ。見事てん手拍子もそろ／＼た／＼。そろ／＼／＼。月の笑顔の。照つたりや。もみぢがさ。そりやかゞがさよ／＼。しんさ篠竹。根笹に霰。はら／＼／＼／＼。落ちてみだれて。夜でとにかよへさ。さまがふりだす形ふり見れば。さてもそなたはいとしゆてならぬ。さてもそなたはいつもどんど。どつこいどんど。どつこいどゞんど。どんどとござれ。ゑいさつさ／＼。ゑいさゑいさ。ゑいさら／＼／＼ゑいさござれ。どんどゝ打てばひゞくへ。こやのゝ宿の遊女が。袖をじつ／＼／＼ともひかへて。今様朗詠しぼりはぎを歌ふと。おさへて酒を強ひられた。此酒にたべ酔ふ。べろり／＼べろつく。くだまきやるか。小ふなじやわいの。のめのよい上戸衆のそばにそつとゐたれば。雪にひやかかん。呑みかねおかゝるかいな。そもおそろしうはをんじらない。うららがやうな底もない。蛇の介が。なんでものまんとおもへば。いまりかせとかなんきんざら。けさ打ちわられのすりこばち。ねるやうでねもせいで。しつくりがつくり寝がへりしては。ねられない。はや明方の時太鼓。十打つのどん／＼。十打つのと

なびけど戀をするいま當代の戀のみち。こうばこい。こずはまゝよと。やあよや。戀をする。鳥羽のあなたにこひぢがござる。〳〵。はつちやさゆるしてさねこが三味ひく。鼠がうたふ。これもおもひはやつこりやさ。やつこつこりや〳〵〳〵。これにくや。いふも枕がうくばかり。戀と思ひを笹舟に。のせておせさゝさ。おゝさゝさ。かぢをまくらに。ねてこがるゝ〳〵。ひとりねになく戀のにくさよ。……

勝井長右衛門作。

山崎がよひ

おもしろの。山ざきがよひや。行くも山路。戻るも山路。心のとまるも山崎。かの里のぢよろと。一夜寝たれば。ずはらめいたと。いはれたんがらがといのう。伊勢の御前でゑひしてせひ。たまづさを拾ふたへ。ゑひしてせひ。おんなかおぢぞの。おんくじおんとりおんみれば。一にや二がおり。二にや三がおりる。ゑひしてせひ。さても玉章はおめでたいぞや。ゑひして。あれしてこれしてせひ。そこでかさもて。かん五兵衛づきんのもてこい。編笠もてこいない。五丁町のたからじや。千丁万丁おくれ〳〵をかへるさは。とらさになつておくれ〳〵を。ありやんりやりやしつ〳〵うぞゝんぞへもひとつしてこい。五丁まちのたからじや。千丁万丁。お

んとはずんだ手まり梅。ひいふみいよ。五六なんなや。ことは〳〵。しとゝんとん〳〵。とん〳〵とろ〳〵。とろ〳〵ちやうど百ついた。おもしろや數々の盃は。どこ〳〵へまはつた。長二長七長三郎。ちよろ〳〵めきの長二郎。はなしがひのぐい太郎。ずくわんぼうがわ入道。はやしたてゝわそんだ、……大和屋甚兵衛作。

關東小六

閨の戸〳〵。扇車の。ゑい〳〵くる〳〵〳〵と。めぐりあふせの波まくら。さんやれ。小六ついたる竹の杖。小六もとは尺八中は笛。小六末は女郎衆の。やつてりや。妻戀ふ鹿の筆。いとし君さまと寢たる夜は。小六寺々のほろりん〳〵。大鳥小鳥の羽ぶしを叩いてぽと〳〵〳〵〳〵。ふら〳〵さがりのばん太郎。おやおがしてゝん。太鼓ののほんほゝ。さまの面影わすらりよか。どこで見た。ぞつとした。とよへいとよへい。君は春咲く梅の花じやが。とよへい〳〵。君は春咲く梅の花じやが。とよゑい。かをり床しきなりふりは。おりやゝこりやゝ。ゑい〳〵さつさゑいさつさ。さつつさふり袖床しなつかし。……嵐三郎四郎作。

戀の風流

むかしの人の戀するは。命も絶えよと戀をする。さて中ごろの戀のみち。草木も

ばしお待ちやれ連になろ。おまちやれしばし。しばしおまちやれつれになろ。君と我とはれんぼれんれつれ。みそめし月日は多けれど。しかも元日初春に。ちよつと見て。ころ〳〵とぼけて。うか〳〵と。すそやだん〳〵袂にとりつき。ひつつきくどいたれいの〳〵。れん〳〵れんぼの。ふかましやと。しれた二世のかねてと。さつさ振袖。さき手の行列ぼつたてろ。こゝではやるさ。さつさよいさ。三十振袖四十しまださ。さつささよいさ。だてな振袖床しなつかし……竹島幸十郎作。

祭文

萬代の神のみことの二ばしら。仰ぐもおろかなり。げに世のはじめ。其みなかみは閼伽の水。きよめ奉るまづ人間の初月をば。不動明王の受取り給ひて。本來空の一物これぞかや。祓ひ淸めたてまつるの。つぎをばいかにと尋ぬるに。本心の靈心わたくしなくば。じゆでめいとくと名づけたてまつるの。二月めには。獨鈷のかたちのおりはれて。これをたのしと名づけ奉るの我朝にては神りよと仰ぎ名づくる所はへだつれど。文珠菩薩のうけとりたり〳〵太鼓つゞみ。どんどんがら〳〵。どんからがつと生れた若ゑびす。顔みせ代々の笑ひがは。おもし

くれ〳〵をかへるさは。とろさになつて。おくれ〳〵を。ありやんりや〳〵。しつ〳〵うど丶んどへ五丁にて。さんこのかたちにそなへ給ひ。晝夜まもらせ給ふとかや。つぎをいかにとたづぬるに。五月めには。六根手足をさいしきて。五體殘らずれんぞくし。此時に至りて。地藏菩薩の御まもり。寵愛ことに淺からず。ちやうち〳〵わわ丶。かぶり〳〵しほのめ。しやくぢやうに打ち乘つて。いんじんしよ〳〵いんじんしよど。いさみ給ひて。つぎをいかにと尋ぬるに。六月めにもなりしかば。好む處。欲する處。自然に長じ。母の乳味を吸ひ取る事。申さばいはゞ。およそ三石六斗なり。つぎつぎ〳〵は。あしく彌勒の御まもり。當る十月は大日の御守り。四方にくわつと廣め給へば。梵天帝釋八百萬代の御神。かぐらを奏し給へば。神樂の鈴がりん〳〵〳〵。りん〳〵〳〵〳〵。りん〳〵〳〵。うつまちのたからじや。振つた奴の床しなつかし。……勝井長右衞門作。

成相

鎌倉の。御所のお庭で。十七小女郎が酌をとる。ゑひそりや。十七小女郎が酌をとる。いたり姿でういい事いうた。よういうた〳〵。思ひ寝ぬ夜は底心。實から待ちや明した。浮世通もの伊達者のすがた。そなたゆゑこへいきやる夜更けてからに。し

まんなか。……生島新五郎作。

狐會出端

石に精あり水におとあり。つゞみは瀧浪袖は白妙。雪をふるふりもよし。ふりかへる山更にかすかなり。また或時は織姫の。いほはた立つるまでにいりて。人をたすくるわざをのみ。ましてや我名も。いふ聲ひく袖のながめなり。そなたのそらは白雲。われこそ大原や小鹽山。今は古巣へかへる山。此神の德を告げしらしめんとあらはれ出でゝはづかしや。われが姿のまことをあらはし。又は國土を垂跡の方便ころは雪ふりなれや。木々のこずゑもうづもれて。梅もいろそへ松とても。名こそ老木の若みどり。空すみわたる神かぐら齡をしらする此神の。行末ひさにと我神託の德をあらはす御代ぞめでたき。……生島新五郎作。

曾我五郎

我は石川や。濁らねども人が濁すよのか。けふにはなにとしんまねらしよ。かつやまが髮のゆひぶり手がはりにこのへ君ちとせ山。それや昔のさゞれ石。岩はと成りていつまでも。替らぬものは常盤木の。葉色に迷ふ人でゝろ。地を走るけだもの空をかゝるつばさも。戀にはたれも身をやつす。いや〳〵わらは必と拍

ろや。……竹島幸十郎作。

市野屋

京の土産に何々もらうた。蒔繪のさし櫛きりのたう。わゝもんつくつ。おれに一代そふ身じやとても。おだしての身はどうもせ。心ときぐし命じや。戀風ふかば。ゐいゐいな。わけある方へ。誘はゞさそへ行く水に。川嶋あいをこがれいで。舟は朧に影見えて。うきを身につむしば〱も。かひもなぎさの濱千鳥。ちりやちり〱〱。ちりとんたさ。嵐にみだれ。さつとちりぬるおもしろや。立田川邊に舟とめて。をばなからじとうれば。日が暮れそうよの。鳥がなきそろよの。鳥がなことまゝよの。余町の殿子と。ねたる時のうれしさは。さて鳥も鐘もいとはぬ。こりやどつこいどつこい〱都風流。せかいのな。なん〱中に。色といふものこりかたまつて。ひとつの戀と楢柴の。柴の戸ぼそもやれ玉だれも。戀にわつてはたまらぬ〱。戀はさまざ〱あるが中にさ。小野の小町はさ。わけを百夜かよへとのんほへ。其中に。百夜めのな。忍ぶ夜はなさけを。百夜かよへとのんほへ。とにかくに。戀路のな。心うわ〱〱きで。たまつた事ではないたんた。たんたふれとは。なか〱ぬれた戀のやつこりや〱〱よい〱。とかく浮世はぬれの

ゝのかゝの〱。とゝのよい子をまうけてたもれのう。上下なれてよい殿を。〱。婿がくるやれ婿が來る。婿殿小袴何色に染よぞ。ゑい〱花色々々。褐袴着して。きりきり〱。じんじやうに。奥の座敷に。おんも〱と寢てかたろ。おうそのおくの。出居から。四間ので。居間でさん〱さんさぐり。まはれどはんな嫁にはさんさぐり。わたらでひげつら男にさんさぐりわたつた。はつちやこわもの。なんとしよぞ。りんとはねられ。たんと氣の毒。しやら〱しやら〱や。さつさしやらの戀路の心根や。……多門庄左衛門作。

若松風流

めでたの若松さまは。よんの榮ゆる。はもよはゝんは葉も茂る。よんの枝も榮ゆる。葉もよはゝんは葉も茂る。よんの福原の。里のよねくろは。小松ばらかよひ十八の〱。君となる君と子の日の。まつ夜はよねくろ。どこで見た。見ゆるとさ。さつさ。見ゆるとさ十八の〱。君と子の日の。まつよはよねくろ。どこで見た。見ゆるとさ。さつさ見ゆるとさ。わけの前髪。ふと元結のしかくまき。はでな小粧衆は。どれどれ。われはそれは。ぜゝんどへ。さまのおすきとて。ちん縮緬に。のんはゝんはゝ肩には唐梅や。唐松に唐獅子を縫はせて。裾や袂は。うらふく紅がひら〱ひ。

子。一がんさそくやつとん／＼。二がんさそくやつとん／＼。さきのちからにや。よれつもつれつ。やつとん／＼。とん／＼とん／＼。うけてながして袖返し。棒は宮口戸田小坂。そちがおもへばこちも思ふよ。ほんにさせいもんしやたらはん。誠につい／＼の。つい我等も思ひそろ。思と戀はがつてんか。君が盃つく／＼つつてん。つけざし三ばいのめやうたへやとかく世の中。……山下才三作。

京の名所

須磨といふも浦の名明石といふも浦の名須磨や明石も外ならぬ。花よ紅葉よ。月雪のあけぼのは筆で書くともつきせぬ都ぞおもしろや。北は黄に。南は青く東白西くれなゐにそめいろの。山は都の富士なれや。麓につゞく市原や。おぼろの清水に。影は八瀬の里人。大原しづはら鞍馬や貴船。あの奥山の柴といふもの。をり／＼をり／＼をり／＼。折りてたばねてきり／＼とむすんで。しやんといたゞきつれた大原木を。こい／＼小女郎。なぜに小女郎はいでゝ待たぬぞ。小女郎こそ來れ山ごしに。いたゞきつれた大原木を。さてもそなたは春の花。麻の中なる糸蓬。思ひそめたははづかしや。思ひそめたりや浮世もしらぬ。／＼。やれさて／＼／＼／＼。浮世もいらぬ。ゑんでそろものちとをどろ。と

ばうさまと二世三世。死なば諸共。五世までも。夫婦の契約致すこと。又一つ外のにとこに假枕。かはす言葉の其品々を。つゝまずわかし申すべし。爰にまことの一つわり。重ねてうそにも勤にも。起請血判の。おし申すまじき事と。書いておいたはこりやどうじや。人にはうそをばつくとまゝ。せめて神には恥ぢよかし。…

……澤村長十郎作。

大阪上りの道行

たてなとりなり。つひ思ひたつ旅姿。人目をつゝむ。笠ふかぐ〳〵とおもはゆく。五條の橋の霜柱。思ひ出だせば。故郷なにはもなつかしやと。いとゞ心はよわ〳〵と。行けば程なくこれやこの。宮川筋を上りつゝ。はや立つ風呂の浴衣がけ。さすがをなでの京めいて。ちよこ〳〵いそぐゆたかさよ。東にむかへば。清水寺。大悲のちかひありがたや。枯木に雪の花も咲く。誰松原の橋すぎて。鴨の流の水せい〳〵。堰關に遊ぶ友千鳥。ぱつと立つては。ひらり〳〵〳〵ひら〳〵〳〵。飛びつれ〳〵。飛びつく飛び行く有樣。たとへていはん方もなし。つゞく川風かみわらひ。さすて引く手に。しなはこばなし。戀ばなし。比良の雪風も肌さむござる。裾も小褄も。ちよとからげて。しやんとからげ。さん〳〵さゝなみ。男波にもまれ。

さつさ振れ〳〵床しなつかし。……岩井左源太作。

濱川風流

今年わたりの伽羅ではないか。とめて寝巻の染小袖。ねまきのとめて。とめてねまきの染小袖。濱川の女郎は。お手があれそろなよゑ。道理かな。濱川縄の。でんでんでん出所なよゑ。我戀は〳〵。丸きおごけに角の蓋。あひま隙間を合せども。逢はぬ夜の。じやてんはちまつかせ。さまがくるやら帆が見ゆる。そこすけて丶すけ。がつてんか。苫を敷寝に。楫どつてい。かぢどつてい。枕よゐんのござれ。沖津のほ丶んに。ほんにさほほんに。ほんにさほんに。ほんにさほんに〳〵〳〵さ。ござ沖津のどつてい。わかれの野でしげろ。たんだふれ〳〵戀のにくさよ。……近松勘之助作。

契情夜明烏

今は昔と飲む烟草。何を便に身は浮草の。ういて流れの情なや。うそもかざりも。一座流れのつらにくや。ようも〳〵書いたぞ起請文。叩く煙管にとがもなや。しやくりのみ〳〵。流す涙の袂をひかへ。誓文くされしんぞ。これにはあのいひわけか。はてまづ聞けば恥知らず。生畜生。ふたりが中の。起請を見よ。まづ一つ。その

と。深き心にかこう草。根引にせんといひかはす。身は捨草の捨てられて。流れし此身は淀川の何を便りに浮草の。波にゆらるゝうたかたの。逢はぬは君が情なやねたましや。それは若草身をうらみ草。なんのそなたにおいたではなし。おきもわかれもせぬ中なれど。受け出す金のつるにはなれて。拙なき我身。せめてあはれとおもへかし。おくりかへし。淋しや閨の。今は枕に。かばかりのこるうき思ひ。猶うらめしき鐘の聲。下行く水の思ひ川。そこの心を白糸の。亂れてものを思へとや。鳥がうたへばもいのとおしやる。さのへ月夜烏はさ。いつも鳴くよ。しやうがへ。もいのとおしやる。さのへ。月夜烏はさ。いつもなくよ。しやうがへ。しばしとまりてくれよかし。……山下龜之丞。澤村長十郎。岩井左源太作。

契情多賀の大秡

またとなに。たのまぬ中の別路を。いまはの空の山かづら。言葉でからむ葛の葉の。うらみかこちてかひぞなき。水に繪をかく男氣を。たのむ力ぞ便りなき。狂ひかけだす心の駒よ。とめてくれかし情のあらば。情たつなや緣の綱。たぐりよせばや引きよせて。ともにねた夜は花をやろ。ねた夜は花を。ともにねた夜は花をやろ。とけぬ思ひのあだ男のう。かしはぎばかりはいとしうて。うちには水がつ

女波にもまれ。遊ぶしらかみ。さんさ〳〵ちらしてゑをかしくもいさぎよや。西は法輪愛宕山。みこし高山がゝたるは。三國一の比叡おろし。我念願をはらさせ給へと。一心に祈誓かけ。歩み〳〵て今ははや。ふたうる茶屋にぞつき給ふ。……

……中村千彌作。

傾城因幡の松

だまされて。おもふことをば寢言いふ。我つらい男にくひつき齒切する。其心の罪つくる。おぶら火とろ〳〵影法師。爰につゝくり面影みする。うそのかず〳〵つく男。ねてはびつくりする夢をみせてなりともあの性惡。〳〵しやうのわるいはすいからおこる。口に任せて目でころす。女心のはかなさよ。空誓文に乘せられて。うそにもほれたといふ事は。あまり嬉しゆてにくからじ。髮をすきたて百姓髷戀をしこなす男つき。そんなたならでは外にはないとさ。うた詞の。よい〳〵嬉しさに。逢うてくやしや恥づかしや。……瀧川六三郎。藤村半太夫。坂田藤十郎作。

淀川所作

春の夜の夢おぼろかすくだかけの。其きぬ〳〵の物思ひ。又逢ふ事もいつかは

長枕。かたりあかさん朧月。煙草引きよせ飲む睦言に。おれもそなたも。しらぬ昔がよいわへ。とても知るなら根から底から知れかしな。いつの物日になれ〳〵そめてきそはじめ。わけある戀の種まきそめて。中よしかみよし心よし。ふたりまろねに。ころりとしたもましじやへ。明方の鐘は。つくかすの響に。あたら夢を忘るへ。上門のしらせは。おかへりとおこされ。あたら床をわかるへ。おそい〳〵〳〵の。おかへりとおこされ。あたら床をわかるへ。をしやねたまし春の風。……

松本重巻。大和山甚左衛門作。

奈良名所盡

三笠山名に高く。もろこしにても仲麿が。ふりさけ見ればと。よみし名所の其昔。今も雲井にすむ月の。久かたの。天くだります宮の神杉。木の間すかしにながめあり。とはせ給へや教へ申さん。嬉しや扨は尋ね申さん。あれ。あれは名におふ奈良坂や此手を合せて伏し拜む。東大寺には大佛の。釋迦はやり。彌陀は導く一すぢに。後生前生の御寺とかや。おうそれ。そこの高根はつゞら山。のりかけ馬の徒歩路の道を。行けば左へ戻れば右へよ。ほいほ。すぐに通へば。一里十八丁。まはらば三里よ。ほいほ。それをば行きすぎ。花の初瀬の山つゞき。興福寺と申せしは。藤氏

くかいの死ねなら死ねと假名書によめるやうにはいひもせで。あだにとられし命ぞと。たぶさにすがりむしりつき。ひつきつめり涙ぐみ。疊たゝいて泣くばかり。……岩井玉之江。中村四郞五郞。津川半太夫作。

契情誓湖

花は散りても春は咲く。死してかへらぬ死出の山。迷ふ戀路の。むごやつらやとうよくや。ようはころした其苦しさを。今ぞかたらん淚川。いとし男の其言の葉を。かわい〳〵と。いつはりごとをまことゝおもひ。おりや一すじにつらいつとめも。それはその〳〵。そりや苦にならで。くるわはなれて罪なき花を。いつか〳〵と氣のせくことも。皆あだ花とちり行く此身。今くる花に目がくれて。ようはたのしむ心のにくさ。とかく死んだか。さりとは因果。死んで花實の咲かぬとは。花實の死んで。しんで花みの咲かぬとは。我身の上に白雪のこる。積るうらみは戀の山。……大和山甚左衞門。山下龜之丞作。

多賀御傳來孫嫡子

うつゝ男の姿にまがふ。さらば面影離れもやらで。我身一つのうき思ひ。同じ思ひにしづみし中も。いとゞ忘れぬ閨のうち。いざ床とらん春の夜に。こちよれ枕

かゝ麓にといゞろき猿澤沙竭羅。八大龍王龍燈さゝげ池の青波けたて〳〵て雲にのり。大地をかつぱとふむ拍子の御神惣じて奈良は七堂伽藍。八百やねぎ九重十重都の石ずゑ社の數が一萬八千。通りものめがはめておいたる。名所舊跡。互に問うつ問はれつゝ。春日の宮居に着き給ふ。……竹竹中吉三郎。山村勘三郎作。

吉田小女郎

あらあさましやつれなやな。われからなせる思ひの種。身の末世一代敎主の如來も生死のおきてはのがれ給はず池水に底の心は通へども岩にせかれて落ちあはぬ。あきてはかなき浮世ぞと。思ひ捨てゝも捨てられぬ。

昔の人の戀せしは。命もたえよと戀をする。さて中ごろの戀の道。草木もなびけと戀をする。我は思へどそなたはつらや。磯の流れ子の片思ひ。さはりせうがのやれかたおもひ。磯の流れ子の片思ひ。さはりせうかとはおもへども。いとゞ戀しき折々は。人目も耻もつゝまれず。せめて閨もる月だにも。別れを急ぐ遠寺の鐘や。梢の嵐は物すごやの。

戀の山。ねるも寢られず目も合はぬ。身の狂亂は誰故ぞ。問ふにつらさの增鏡。い

の御願所にて。大織冠な御身をやつし。面向不背の玉をとらんと思召し。賤しき海士の礒枕。いもせ言葉の末かけて。女も命捨小船。こげやえいさら。八十島鷗の立つよの。たゝせ給ふは志度寺の觀音。南無や薩埵の力を合せてたび給へとて。大悲の利劍の額にあて。龍宮の中へ飛び入れば。空は一つに雲の浪。煙の浪を。かきわけかづきわげ。又どう〳〵と。おちくる男波のひまを。つゝとくゞるや唐紅の綱は腰繩命のきづな。しつかとひかへよ。御船のうちにも心得。えい〳〵と纜の。のぶるを便りに。走り入り。かの寳球を盗み取つて。にげんとすれば。惡龍追つかけ。兼ねてたくみし事なれば。持ちたる劍を取りなほし。乳の下をかき切り玉をおしこめ劍を捨てゝぞ臥したりける。龍宮のならひに死人を忌めば。あたりにちかづく惡龍なし。約束の繩をうごかせば。人々喜び引きあげ。玉は面向不背の寳。あの御本尊の眉間にこめしぞ。拜ませ給へや旅の姫。二月堂には觀世音。牛王は彌陀佛板木の御板。井筒のいのりに。鈴錫杖は。からから〳〵。ちんから〳〵〳〵　唐獅子の。ふむらん拍子やしつたん〳〵。たん〳〵たのむや。たん〳〵他力。他力功力のたきもんじゆ。わかさみかさにわかさやと。洒水の印をぞ結ぶなり。結ぶや誓ひの常陸帶。鹿島の御神當社にうつるや。高きお山は本社のいら

朝うちおろしの荒莚がんきやすりこめはだついつくにばつくにねられぬ。誓文のつつたて申すべい。弓矢八幡。腰骨こみぢに打つて。かばねはかきにさらすとも。きのうらにによ。わぶないこんださ。かはりはてたよしよだいなや。……竹島幸左衛門作。

西國八景

別れて泣く音高砂や。室津に通ふ市人は。山市の晴嵐いまこゝに。うつしぬるかとおもしろや。それより沖の海士小船。八十島かけて漕ぎ出づる。こなたは尾上鐘の音に。霜にさえつゝきこゆるは。遠寺の晩鐘あはれなる。一村雨の降りくれば。苫もる雫に。身をそばめ。てがれたゞよふ其風情。これや誠に瀟湘の。夜の雨よとおもはゆれ。繪島ヶ崎は雲晴れて。なは洞庭の秋の月。心をなぐさむ便りとなり。夜もほの〴〵と明けゝれば。いとゞ船長力を得。楫とりなほし帆をあげて。波にたゞよひこがれゆく。淡路の島の朝霧に。群れゐて遊ぶ雁金の。我は古郷の戀しさに。常世の寒さ如何なれば。古郷捨てゝ來るやと。問はばや平沙の落雁に。そふかいにしへ思はるれ。沖のつゝん釣船なる。櫓拍子の音はからころり。つるえりつるろ。雄鶴雌鶴。夜のつゝん〳〵鶴めが妻思うて。なく音にいざやくらべん。くら

つまでかくはながらへて。うきは數そふならひにて。身は捨草のいたづらに。おらうらめしや〳〵。心もなげに立ちのぼる〳〵。くゆるけぶりはほの〴〵と。おとには戀の淵瀬川。せどがはのさわの〳〵。さむき嵐にひよつとうかれて。川原おもてに浮名をさらす。おもはじ〳〵とんとすちよ。そも戀は何のむくいぞ。〳〵
……嵐三右衞門。市川香織。芳澤菖蒲作。

公時酒の醉

峯の松風通ひ來て。琴のしらべこうたがはる。一の人大臣は。しよだいない人で得踊らぬ。我に踊れとおしやる。踊りでふりを見せまゐらしよ〳〵。くわんこや〳〵。くわんこ〳〵。くわんこやてれつゝに〳〵。からりちんにちんからり。しやつきしや〳〵。しやつき〳〵。しやつきしや。こゝをあけさい。あけずはもぜろ〳〵。忍ぶ其夜の通路に。かならずござせとさ。さまの面影深山の奥を。通りて見れば。いたいけしたる花わり。荻萩薄苅萱紫苑龍膽かずの花。おりせたらおほくせおうて。藁で髮を結うて。腰に鎌さいて。ついつくぼうてかいつくぼうて。つい〳〵とりなりは。柴刈る男のなりふりは。みめのわるいしやつつらで。そばにころりころ〳〵り。〳〵〳〵。ころ〳〵りとも寢たるは。いがぐり頰髭天神ひげ今

た。波にもまれて行く鷗。浮いつ沈んづ沈んつ浮いつ。ぱつと立つては。ひらり〳〵ひら〳〵と。おるゝありさまは。たとへていはんかたもなし。便り求めて行く程に。七重七嶋の壇の浦。眞砂をはつと拂ふ風のまは。笠かぶりかたむけて。身をかこち。人まつ澤に腰をかけ。旅の休息なされける。異國は知らず。我朝に。ためしまれなる所存やと。ほめぬものこそなかりける。……竹島幸左衛門作。

花軍

うどんげの。花の開くを待ち兼ねて。散らすな花のあるじをば。こがれ〳〵て。つれて都へやのぼらんと。音にきりころ〳〵。音に聞えし大原の里は。菊の名所と便りを求め。杖にすがりてかぞへて見れば。白菊の紅菊の。小手鞠寒菊。さくきり〳〵。きりきりまはる水車。くるりすますにでらず。よほほんにさ。くん〳〵くん〳〵〳〵。まはる車菊まはりまはれば芹生の里。じんじやかうはもたねども。にほうて來るはたきもの。大原木〳〵買はい〳〵。黒木めされの柴めさいの。ちやうりよふりよ。ひうやらに。ひやらろひやらろに。るろるりちやらるろう。心うかれて。さつても〳〵。おもしろや。〳〵。りやうじん互に心を合はせ。菊の精をみかたになせば。菊のつぼみをさつと開かせ。をんどりあがりてとびあがり。手重

べこし。暮れかゝりては浦々の。沖の釣船我さきにと。入江〳〵に歸りしは。遠浦の歸帆是なるべし。遙に見えしは一の谷。誠に古へ源平の。いくさ亂れし跡も有明の。月にしらむは劒の光。水にうつるは兜の星。打ち合ひさしちがふる軍勢の。其有樣。ひくは潮に滿つるは又。八重の鹽路のはる〴〵と。西海四海の波の上。たつたみかけ〳〵。ぼつかけぼつかけ戰ひしは。はな〴〵しくこそ聞えける。あら面白のながめやと。勇みにいさんで行く程に。明石の浦にぞ着きにけり。……竹島幸左衞門作。

鎌足道行

このてがしはの二おもて。いつかならべん長枕。わかれて行くやたゞひとり。勅諚おもき御意を得て。四國の浦へと急がるゝ。心の中こそたのもしき。はや山城に打出の里。月の横川の峰つゞき。ゆんでは比良の。めては愛宕の山颪。峰の煙の一むすび。袖打ちはらふ古へを。思ひ出だせば。古鄕の空もなつかしや。猛き心もよわ〳〵〳〵〳〵と。しどろもどろの志賀の里。須磨の若木の櫻花。嵐につれて散るは〳〵。ちりくるの。ちりくる〳〵。をしき櫻は散りはつる。思ひ明石の浦過ぎて。室の泊りに。身を寄せて。海まん〳〵と見わたせば。こなたは四國の淡路が

べのう父母と呼ぶ聲の聞ゆれば。夫婦はいとゞ悲しくて八聲の鳥の音を立てゝ。人間の水は南。星は北にたんだくの。あまの海づらよき雲の。たちそふ聲もかすかに聞え夢かのうつゝ。夢か幻の世ぞあはれなる……中村七三郎。花東妻作。

傾城淺間嶽

怨も戀もこらねど。もしや心のかはりやせんと。思ふ疑ひ晴らさんための誓紙をば。なぜに煙となし給ふ。うらめしや。胸のほむらは夜に三度。こちの思ひは日に三度煙くらべん淺間山。あれでらんせよあさましや邪淫の惡鬼は身を攻めてのうつるぎの山の上に戀しき人は見えたり。うれしやとてよぢのぼれば。思ひはむねをくだく。こはそもいかにおそろしや花の姿もよわ〳〵と。かしこに立ち。行かんとすればこゝに消え。有るか無きかの春の夜の。朧月夜にはかなくも。消えて形はなかりけり。……中村七三郎。岩井左源太作。

關東小六青葉

こは情なきしわざかなさのみ人にはつらかりそ。悲しみの涙眼にさへぎり。西も東も白浪の。よるべ定めぬうたかたの。いつそ泡とも消えもせで。こがれこがるゝ身のゆくへ。青葉〳〵と呼べども濱の。濱の松風音ばかり。松風濱の。はまの

の菊のいさみをなし。あつぱれてん〳〵てがらやと。ほめぬものこそなかりけり。……竹島幸左衛門作。

名古屋山三

なく淚雨とふらなん三瀨川水まさりなば歸りきて此有樣を見給へのう。夫婦は目もくれ心きえ。てはそも夢と立ちよれば。妄執の雲のへだゝりて。今まで見えしは姿もなし。是は夢かやうつゝかや。夫婦互に手を取りて。わつと泣いては抱きつき。あきれはてゝぞゐたりける。

光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨。南無阿彌陀〳〵。袖のみなとの浪風も。聲そへて。南無阿彌陀。聲のうちよりまぼろしに。迷ひ出で。さも苦しげによろ〳〵と。歩みより。あら情なや母上樣。のんどがかわきて苦しきに。水を手向けてたび給へ。苦しやと。たえ入るやうに泣き居たる。夫婦は夢の心地して。げに道理なりいとほしと。器ものに水を入れ。よらんとすれば忽に。猛火盛に燃えあがる。母はあまりの悲しさに。抱きとらんと。立ちよれば。ふしぎや俄に風吹き來り。眼くらんで降り來る雨の音はそも。篠を束ねてさら〳〵〳〵と。雨か淚か。陸路にどうど伏しまろび。てだまにひゞく聲ばかり。あらかなしやたへがたや。助けてた

れてさびしき夜すがら。ともになかるゝ時鳥。つゝみかねてはくい〳〵と。水鶏の鳥の物思ふ。今宵ばかりはうすなさけ。さのみつらくはのたまひそ。いつの月日に見そめてさても。思ひきられぬ身ぞつらや。心からなる我涙。とは思へどもうらめしや血すなは深紅の網をはり戀を結ぶの神心。我身の戀はいかでかは。憎しと思ひ給ふらん。あらうらめしや其人の。思ひ亂るゝ新枕。誰かとくべき常陸帯思ふもつらしねたましと。蚊帳のうちへ入りぬれば。こは悲しやと走り出で。わな〳〵ふるうておはします。のう情を知らぬ姫君や。たとひ何國へ逃げ給ふとも此戀わだになすべきか。思ひ知らせん腹たちやと。蚊帳の外をくる〳〵〳〵。くるり〳〵くるり〳〵と苦しげにつく息は猛火となつて此身をこがす。わゝ曲もなき御仕方と。蚊帳につゝみしつかといだき。こくうに向つてつく息は鬼ともなれ蛇ともなれ。我ながら我すがた。人目はづかし淺ましと思へどもられぬ輪回のきづな。あはれにもまたおそろしや。……中村七三郎。山本歌門作。

行平道行

げに幾秋を。ふべき御代なれ住吉の。かねて植ゑ置く。松の千とせは。盡すまじ。時しも秋の夕まぐれ。里の砧に月さえて。千々の草葉に鳴く虫の。聲も涼しき鈴虫

松風音ばかり。そよとばかりの便りもがなと。恨み歎くぞあはれなる。……芳澤菖蒲作。

關東小六自然居士

よせては岸をどうとは打つ。天雲迷ふ鳴神の。どゞろ〳〵と鳴る時は。小笹の竹のさゝらをすり。あなたへざらりこなたへざらり。ざらり〳〵ざらり〳〵ざつと。吹き來る風は戀風か。わだしのゝ草葉における露の身なれど。是も。これもかりなる世のつとめ。どかく世の中につらいものは何々。忍ぶ妻戸に。妻戸に忍ぶ。忍ぶ妻戸に。鐘のこゑよんの。禪僧の戀するは。まづ文をやりて見て。やりかけ〳〵やりて見て。きたろにやだいてもねしよね。もしこずは。袷の片褄片袖を。打ち敷いて。此恨ねにもしよね。波の立居も何故ぞ。かりなる宿に。心とめずば浮世もあらじ。別路も嵐吹く。花よ紅葉よ。月雪のふる事も。あらよしなや假の浮世に。……中村七三郎作。

男道成寺蚊屋の段

君こふる。涙をうくる盃に。思ひ切るせと切らぬ瀨の。中に流るゝ妹脊川思ひこがるゝみじか夜は。とても寢られぬうき枕。蚊幮のひとへの薄月もるゝ〳〵。も

碎かれて。風に木の葉の如くなり。助け給へや人々よ。懺悔に罪も消え失せて。ねがひのまゝにやすくと。弘誓の舟の川岸に。至り至らせたび給へとて。涙ぐみてぞ語りける。……中村七三郎作。

松茸狩

稲舟の。おすにおされぬ樫枕。ねもせでながき夜のつらさ。語り慰む片糸の。折敷御座のかたくに。ねられねばこそ夢も見ず。さそはれ出て道のべの。千々の草葉に鳴く虫も。思ひ亂れて糸薄。せめてそれかと我問ふものは。荻の上葉に亂れ亂れて風そよぐ。よそにも置くや袖の露。どれく月のうつろふ影見えて。殘る松さへ嵐につれて。いとゞ心は。のうさんさ。物わびし道しるべせよ忍草。しげき思ひは秋霧の。あだ名たつともいとはじな。宵より閨に引籠り。まてど暮せど其人の。そよとばかりの音信も。早九つの鐘がなる。扨も思はぬさはりあり。今宵の逢瀬は。やれさて叶はぬな。よしくかこつもやぼらしや。いつそ夢こそましならめ。枕一つをたのしみて。戀し床しき床のうち。……中村七三郎作。

稲荷塚四門

翠帳紅閨に。枕ならぶる床の内。なれし寢卷の夜すがらも。四門の跡。夢もなし。さ

や。君をこほろぎ轡虫。忍ぶ夜さむは松虫も。荻が上葉にねもしなん。猶行く先は姫小松。難波の蘆に初雁の。おのが友よぶ聲そへて。詠めつきせぬ道すがら。身にしむ風に空はれて。いくちはつたけうらわかき。薄に繫ぐ賤わらは。磯のみるめもはづかしと。思ひつゞけて行く程に。松の木陰に物とはん。……中村七三郎作。

行平地獄物語

かたるに罪も消えぬべし。語るにつけて恐ろしや。呵責のせめも音高く。振りあぐる鐵杖は。天地も響くばかりなり。罪をあらはす淨玻璃の鏡に惡をうつせば。八萬奈落明らかに。天をうつせば非想非々想。天までくまなく見えたり。さて又大地をかゞみ見れば。まづは地獄道。罪をあらはす罪人の呵責。打つや鐵杖の數々。こと〴〵く見えたり。こはそもいかにと立ちたれば。紅蓮大紅蓮の氷にとぢられて。あたりを見れば。猛火大地にみち〳〵たり。無間地獄の苦しみは。熱々たる焰の中へ。まつさかさまに落つる事。みつばのそや。下より猛火吹き上げる。とがは上より落つる所を。さつ〳〵と吹きあげて。ひまなく苦患を受くるなり。阿鼻大地獄の苦しみは。鐵石を立つ事一由旬。劍をひつしぎ植ゑならべ。罪人を追ひまはし。岩石背に結ひつけられて。峯よりどうとつき落さるれば。骨は微塵に

……中村七三郎作。

傾城花筏

語るにつけて悲しきは。此をさあいが身の上なり。父は播磨の何某とて。人に知られし武士に。母は室津の。上臈のはて。假に難波に住居して。此子をまうけ給ひしに。過ぎつる秋の末つかた。我に此子を預け置く。いたはしやをさあいは。父よ母よと戀ひこがれ。晝は終日夜はまた。夜明の鳥ともろともに。まどろみもせず泣き明かす。目もくれ心きえ〳〵と。身も世もあらぬふびんさに。母のきてうに渡さんと。さてこそ室津へ參るなり。……葉山岡右衞門、蔦山四郎兵衞作。

彌陀たのむ

彌陀たのむ。人は雨夜の月なれや。雲はれねども西へ行く。なまみだ〳〵。いとし我子もせめてさて。彌陀の御國へ行くなどゝ。便りのあらば如何ばかり。嬉しかるべき我心。そなたいとしけりや。のうやれ。我子もいとし。それな世に。いつそ子もなけりや。なけりやこそ。思ひもないよさ。よしやよしなや迷うたり。のうさて。なまみだ〳〵。なまみだ〳〵〳〵。鐘の響に夜は何時ぞ。八つでもあろか。いやのう。われ〳〵夜がわける。やらはや。晨朝の回向の鐘のあらありがたや。いざや我

るにても我妻の。秋よりさきにかならずと。おだし言葉の人心。そなたの空よと詠むれど。それぞと訪ひし人もなし。夏もはや杉窓の。秋風ひやゝかに吹き落ちて。よしや思へば是とても逢ふは別れなるべし。世をも人をも恨むまじ。たゞ身のほどを。おもひつゞけて我ひとり。丸寢の床こそ淋しけれ。……中村七三郎作。

稻荷塚狐會

蘭菊や。小菊白菊小手鞠や寒菊。君を待つ夜は。くる〳〵〳〵と車菊。よしやなげゝど慕へども。秋の朝ぞら霧とおて。露なき草にこがくれの。杖を頼みにやすらへば。身にしむ風に。褄も袂もふは〳〵〳〵と吹きあげて。我とは見えぬ水かゞみ。うつす姿は月影のくもりみはれみ行く雲の。空さだめなき山々の。木々の梢に鳴く鳥は。山雀こがら四十雀。鶸や鵯鳥めうない雀。鳴子ひくねに驚かされて。數の小鳥がむらだちさわぐ。にくや〳〵小鳥が。我をおどすはつらくや。えいこのえいこの。えいこのえいこの〳〵。えいこのへ。簑と頼むよいや又笠と。笠と頼むは小池の蓮の葉。かくは草かり。たすく男は。よいやさ。えいこの〳〵〳〵〳〵〳〵。えいこのえ。木の葉の雫はら〳〵〳〵。風にもまれて。秋の小蝶のたはぶれて。峯の小松に。しなだれかゝる蔦かづら。よれつもつれつ。離れがたなき我思ひ。

たましや。あら腹立やと立ちたるは。あはれにもまたおそろしや。……岩井左源太、上村吉三郎作。

女仙人

そちが思へばこちも思ふよ。いづれ思ひはかはりはせねど。何時もながらの御げんもたえて。今はなかく逢ふ事ならぬ。なぜないつはりがちなる心ど知らで。つらきながらも籬に立てば。つての文さへ。やれさて叶はぬ浮世どやへ。よしく。かこつもやぼらしや。いつそ死んだがましならめ。さてはかなはぬ浮世やと。思ひつめたる其けしき。身につまされていとしさまさる。たとひ萬里を隔つとまゝよ。かはる心がく。なけれども。逢ひとて見たうて。語りたうて來たおれに。なぜにそなたは顔ふりやる。さてもく。そなたはげに戀のかたきよと。うらめしそうにうちながめ。すがりついては泣くばかり。一樹の蔭の一やどり。又は一河の流の身。枕ならべしむつごとも。假の浮世のならひぞや。あはれはかなきみづからは。たまく受けがたき人身の受けたれど。ためしすくなき川竹の。流れの身となる悲しさよ。さきの世のむくいまで。思ひやられて悲しやな。少しあはれと思召し。機嫌のなほしてのうこれこれ。ちと笑ひ顔が見とござる。戀も口

子の菩提のために。なまみだ〳〵。宵にや和讃夜中にや法華經。南無地藏大菩薩〳〵。心が亂れての。じぢろんもぢろん。〳〵。そなたへは行かぬか。こなたへは行かぬかと。傍なる人に。とへど〳〵。〳〵こたへぬ古塚の。夢かうつゝかまぼろしか。我子戀しや。……芳澤菖蒲。今村久米作。

傾城佛の原

いつの間にかは秋風の。吹くや越路の山越えて。波の三國のわけある里へ。惡性通ひのつらにくや。ひさげの水は湯となれど。まださめやらぬ我思ひ。つらしねたましわら腹立やと。すがりついては泣くばかり。おれとそなたは。なんなんなん七つ八つ。十で殿子を見そめてほれて。人こそ知らね振分髮の。そなたならでは。誰にか見せん此黑髮を。今はあだなる亂髮。亂れ心か。あゝ〳〵〳〵。逢ひた見たさにきたぞやれ。つらや〳〵と思ひはすれど。まだすてられぬ。にくさあまりていとしさまさる。さても命はつきないものよ。君つらや。いきて思ひは哀別離苦の。死んで又來て。その〳〵〳〵。其さきの夜で。思ひ知らしよぞ思ひ知れ。袖の港の戀の淵。渡りくらべん涙川戀の一念さかづきの。影くらき世に瞋恚の毒蛇。くる〳〵〳〵。くるり〳〵〳〵。くるわがよひもふつゝりと。思ひ切れ〳〵ね

くやねたましや。思ふ人をはいたづらにとらでわまさへ神々の。責を蒙る悪鬼の通力。力もたよ〳〵よろ〳〵と。足弱車のめぐり〳〵て又取るべしと。よばゝる聲もかすかに聞え〳〵。松風ばかりや殘るらん。……山下又四郎作。

廿四孝狐會

見るめまいものうか〳〵〳〵と浮れ心か烏羽玉の夜ならで。晝はこがるゝ我思ひ。寢ても覺めても忘れもやらで音をぞ泣く〳〵。君をおもへば。なんな〳〵。篠薄や尾花の中をくゞりくゞつたなんぼくゞりにくいぐゞり〳〵〳〵。どやるまいぞ〳〵どつこいそつこいやるまいぞ。さまを見かけてはしりこきりこきり〳〵こ。こきり〳〵〳〵や。月の夜もゆく闇もゆく。雨か霰か露か木の葉か。はらり〳〵〳〵。しどろもどろとあの山越えて。今朝のきぬ〴〵あらはれそうな。〳〵いのよもどろよ。我古塚へかへらん。おれが思ひは包むにあまる。〳〵。ものふくさに紅梅小袖。包めど〳〵。何とつゝめど色にでゝ。人目はづかしやるせなや。……山下又四郎作。

傾城善の綱

筒井筒。井筒。井筒の水は濁らねど。かはせし人は朧月。入る方もなき我思ひ。たゞかは

說も一さかり。假の浮世の夢なれや。經文まじりになまうだ。なも〳〵なまうだ。語る間もなき閨の內。はやきぬ〴〵に引きわかれ。首尾さへあらば重ねてと。あらば〳〵〳〵〳〵ばやと。裾や袂に取りつけば。戀しき人の面影は。見えつ隱れつ幻か。消えて跡なき夕まぐれ。……多門庄左衞門、出來島小三郎、山本歌門作。

女仙人怨靈

それ三界は夢なれや。三つの車に法の道。火宅の門をや出でぬらん。月は東の山より出でゝ。西の山の端にかくれつゝ。世上の無常はかくの如し。何の上にも報いあり。浮む事なきみづからは。邪淫の惡鬼と身はなりて。えい〳〵さつてもさつても。未來えい〳〵くる〳〵〳〵と。いやつきそひて。我にうかりし其人の。いきて此世にましまさば。水くらき澤邊の螢の影よりも。我が思ひも胸の火は。火燄となつて此身を燒く。無念や腹立やと。しもつと振りあげおひめぐり。髮をくる〳〵〳〵〳〵〳〵と手にからまいて打つやうつ。うつの山邊の夢の世に。めぐりくる〳〵。因果は今ぞ思ひ知らずや思ひ知れと。飛びあがりてはまろび伏し。雲にうち乘り波を蹴たて。飛行するてそすさましけれ。おそろしやみてぐらに。三十番神まし〳〵て。魑魎鬼神はけがらはし。出でよ〳〵とせめ給ふ。つらに

し難義あり。院宣令旨なくしては。諸軍の催促あるべからずと。助殿あぐみはて給ひ。我にたのむと有りし時。それこそやすき事どもと。即時に津の國きやうの島。ろうの御所にかけつけて。みつよし卿を頼みつゝ。ゐんせんりやうじを請ひ受けて。又立ちかへる浦波の。〳〵。磯をつたひ。山を越え。蛭が小島に成りしかば。院宣を取り出だし兵衛殿にいたゞかせ。それより義兵をあげ給ひ。源氏の御代となす事も。ひとへに愚僧が恩ならずや。せめて廿日は待ち給へ鎌倉に走せ下り。此一左右をせんまでは。かならず〳〵頼むによな北條殿と言ひ捨てて。衣の裾の高からげ。破笠腰につけちよこ〳〵〳〵。走りて出られしが。又立ちかへり文覺は。北條殿に打ち向ひ。是にも承引なきならば。我生ながら魔障と成つて。高野。横川。金峰山。白山。立山富士の嶽。此山々の天狗ども。さつ〳〵と招きよせ。車軸の雨に劍をませ。非想非々想天までたゝきあげ。海に浮ばゝ。六代七代八大龍王。山神水神恒河のうろくづ。八方よりもたゝりをなさせ。れいの天狗のそらつぶて。一時が間に打ちひしぎ。味方のせいうん。日輪月輪しやうふを吹きやはらげ。〳〵暫時に本望とげん事。なんの子細のあるべきと。をんどりあがりはねあがりひさみに勇んで申せしは。頼もしきとも中々。申すばかりはなかりける……

らじと。一筋に。ねてもさめてもいとしさのあまりて漏れてにくうなる。墨と硯は濃い中なれど。人が水さしや薄くなる。しんきへ。しんき〳〵。水さしや人が。人が水さしや薄くなる。しんきへ。其一念のつきそひて。陰にたゝずみ。あゝ日向におはひくる〳〵くる〳〵〳〵〳〵と。苦しき胸のはむらの火。わきくる水にのう消えもせず。かすかに隔つあさましや。すこしはそれと思ひ知れ。足もとはよろ〳〵。よろ〳〵〳〵と弱りはてたる釣瓶の雫。落ちて形はなかりけり。……芳澤菖蒲作。

文覺上人

その時もんがく膝おしたて。はづかしながら某は。源氏譜代の侍なり。先年義朝。野間の浦にて生害あり。其首やがて六波羅の。川原にこそはかけられしを。愚僧ひそかに盗みとり。菩提の道に修行者の。首にかけたる頭陀袋。あけぬ暮れぬとせし程にはや三歳の光陰は。矢よりも早き武士の。守の神ともなし給へと。しやれたる頭を取り出だし。助殿に奉れば。さてはうたがひあらかねの。土に屍はくつれども。名は末代に有明の。月の都にせめのぼり。絶えて久しき白旗を。深山颪に吹きなびかせ。おごる平家を平げんと。頼朝今はいさまれしが。いやましてしば

けやぶり。さしとほし。十方むぢんの捨刀。さつとひゞいては。互に言葉をかけかはし。是ぞ軍の花盛。吉野龍田の花紅葉。嵐につるゝ青侍。にぐるやつばらおつさま捨斬むかうてかゝるは唐竹割。らんびらんぐわいとらばしり。まくのそうだてそうのこて。蜻蛉がへしに水車。磯打つ浪のまくりぎり。つらぬき捻首人つぶて。死人の山をつかん事。たゞとる山の時鳥と。勇みに勇みし有様は。めいぼくたいしはくた王。我朝にては將門純友。入鹿のあれしもかくやらんと。おそれぬ者こそなかりけり。……竹島幸左衛門。同幸重郎作。

山居の僧

あまりに山を遠く來て。雲又わが里を埋む。皆これ人間妄執の雲霧の引きはかへさじ梓弓。安からぬ身の假の世を。思ひすつるに身こそやすけれ。我はなまじひに弓馬の家に生れ來て。かごうを捨てゝうもんに入る。月を東に里を見てけはしき山路なければ。岩根に取りつき〳〵〳〵〳〵。苔路を踏んで薪をこり。水音すごく底深く。谷にさがりて水むすび。其雪山の昔を問へば。唯一心のおきどころ。背かば正に。三惡道は免るまじ。多き地獄の其中に。無間地獄の苦しみは。熱々たる焰の中に。まつさかさまに落つる事は。三津葉のそやしたより猛火吹き

竹島幸左衛門作。

富樫

さる間武藏坊熊井太郎。たゞ一筋に思ひきり。さしも大勢待ちかけし。とがしが城へ入りたるは。人にかはりて覺えたり。山伏の法なれば。れいしせんぼうを讀むべきに。武藏なにとか思ひけん。高念佛をとなへつゝ。大門よりつゝと入り。とがしが城のていを見るに。表の櫓十三ヶ所。脇の櫓九所。二重三重櫓をあげ。北の表を見てあれば。くらおき馬の數しらず。それぞといはゞ引き出さんと。用心きびしく見えにけり。扨又後の要害は。表は山高うして一片の雲の如し。谷深うして飛ぶ鳥だにもかけりがたし。山峯一丈さがつて空堀ほつて。つゞらをりなる難所なる。東の方の尾さきには。川を要害とし。靑苔かすみなめらかに。足そばだつに便なし。此關所を越えん事。韓信が術を學び。富留那の辯にてたばかるとも。さて中々思ひもよるまじき。されども武藏が智惠の程。百千万に碎きなば。やはか通らでおくべきか。それにも運命つき弓の。巧みし智略もあらはれて。さしもの大勢。前後左右より取り巻かば。かげろふ稻妻水の月。むでにはいかで取らるべき。かしこにおつぶせ引つくんで打つ取るべし。或はうづまきせんぎが中。か

はづぶりづぶ〳〵とも。沈んださ。何がさ。……竹島幸十郎作。

柴刈風流

山がつの薪を折りて數々の。思ふまゝにはいはれぬや。殊更風をいとふなる。柴に櫻を折りそへて。柴刈る女のいやしき身にも〳〵。沈や麝香は持たねども。匂うて來るは薫物。ちやうりやうぶりやうひやらにひやらろ。ひやらろにるろうるりちやるろ。戀といへる曲者。くせものかんな。身はやつれそろ。にくや〳〵。つらやうらめしや。月には雲に花には嵐。嵐つれなやよぎて吹け。忍ぶ夜の嵐。さても〳〵いやいや。山田にをりし早乙女の。しかも近江のなりよい笠を。しやんと着ないて拍子を揃へ。田植ゑるは面白いが。ぐる〳〵まはりがうかないさ。あうかない。十七八はねごいもの。梅の木のさがりの枝を。さくらにおよりたか。およりもうせ。さあいよさあいよ〳〵へ。此へ〳〵。しよんぼり〳〵と植ゑた袖。よゑその袂は田植にぬるゝ。誰ゆゑぬるゝわが袂。うちながめ。あゝ賤の女の。重荷の柴も苦にやならぬ。歩む程なき道すがら。とある所につきにけり。……上村今吉彌。袖島市彌作。

江近八景

あぐる。たとへば數千丈の谷よりも。まくりたて〱吹きまはす。嵐にひとしくとがは上より落つれば。さあ〱さつ〱と吹きあげて。ひまなく苦患を受くる故。無間地獄と名づけたり。あら恐ろしや〱。阿鼻大地獄の苦しみは。鐵石をたつ事一由旬四方にして劍をひつしとならべ。とがある者を追ひのぼし呵責する罪人。とがを歎くと雖ども。叶はぬは地獄のならひにて岩石背にゆひつけられ劍の峯よりつき落され。骨は微塵に碎かれて。歎き悲しむ淺ましや。苦樂のさかひは說くもとかれず。いふもいはれず。風吹かばふけ我庵の。佛の寺に絶えぬ燈火。……荒木與次兵衞作。

名馬揃

あつぱれ御馬ざふらふや。よき馬の吉相や。おつさまむかうよてはたばり。ししあいはねぶしよめのふし。おゝつくりつけたる如くなり。尾は千反の布をはへて。百丈の瀧の落つるに異ならず。右の眼左の眼。振分髪に。ちらり〱ちら〱と鞭はなに〱。紫竹漢竹唐竹若竹。本から末から根から葉から竹のきりきりなきり〱。きんきりよのやれたまり水。澄まず濁らず出ず入らず。人の心もそれによそへて。何も柳にさらり〱とも。やらせて輕いがよござんす。思ひ

擲やりたや炭そへて〳〵。頃もしはすの暮なればゆづりは門松をめせ〳〵召され候へと。商ふ風情げに誠。これ江天の暮雪なり。向を見れば。堅田の浦の海士小舟。釣して歸る有様を見るに我身もいとなみの。釣の糸さへしなへてもつれて。竿持たずに。ひく〳〵はひくは〳〵。引いてしやくる所を。釣つた所の面白や。入日の影と諸共に風に任せて帆をあぐる此召されたる船こそは。遠浦の歸帆もまのあたり。あれ唐崎の一つ松。老若貴賤布引の。ひきわけられぬ宮まゐり。如何なる上手の筆なりとも。是にはいかでか勝るべき。日もはや西に入相の。提燈とぼす小夜嵐。吹き來る空に雨おこり。村雨頻にふりくれば。濡れに濡れたるとりなりも。しつぽりしつたり。わにのみさきに船とめて。苫もるしづくもろともに。涙でぬかす舟のうち。是やまことに瀟湘の。夜の雨ともいひつべし。やう〳〵晴れる雲切に。苫おしのけて見わぐれば。あれ石山の秋の月。湖水にうつり明らけき。須磨も明石もよそならず。是や誠に洞庭の秋の月。爰にうつして水海の。更くるも知らず詠めいる。ふけ行く鐘の音きけば。あかぬ別れの鳥は物かは。鳥も鳴き鐘も聞ゆる三井寺の。時をたがへずつく數は。はや明六つの明け渡る。東近江や西近江。大津の町もとく起きて。おのがさま〳〵手業する。是ぞ山市の晴嵐と。

船をだしやらば夜ぶかに出しやれ。ゑい〳〵。帆影見ゆればなつかしや。戀には
のんゑい。それ若枝も。いよゑい。ゑい〳〵と。いるや矢橋の渡船。波は舳板を叩
きあげ。たゝく白波あら男波。靜にこげやそろ〳〵おせよ。いそいで漕げやさつ
さつとおせよ。浮きぬ沈みぬゆく船の。汀を見れば瀬田の橋。漁村の夕照まのあ
たり。ゆきゝも絶えぬ旅人の。上れば下るあひの土山雨が降る。うたふ小歌のか
ら尻に。乘打させぬ關所なり。足もとまらず行く舟の。次第〳〵に其さきは。いか
なる所と尋ぬれば。秋は堅田の落雁ぞや。いざや名所を語るべし。おりてしばし
濱遊び。あがらせ給へ人をよ。入江〳〵の蘆の葉に。そより〳〵と吹き來る風は。
夏のしるべか涼しさよ。磯におり居る雁金の。おのが友よび遊ぶにぞ。ねらひよ
り追うてまはれば。はつと立つやひら〳〵〳〵と。むれゐる雲に。竿に成つて通
る跡なが先へ先ながあとなら。かうがいとらしよ〳〵。これぞ平沙の落雁と。語
りて舟にのりうつる。のういかに船頭殿。こなたに高き御山は。如何なる所なり
けるぞ。あれこそ比良の暮雪とて。是よりは冬げしき。峯に降り積む白雪の。ちら
り〳〵と降り來る雪に。四方のな梢ものうよ。白妙に。枝もたわむやしつはりと。
積れる道を踏みまよふ。木樵山がつ柴刈が。笠も薪も埋れて。寒そうにござる。火

こと聞きや。きん〱氣がわるい。りんとはねられしやんとゆてたもれ。あかつき鳥はん鳴かいで。たるきのはなをしつかりてう。ゑいやつとふまいた。名殘なさけなの世の中や。……荻野澤之亟。西國兵五郎作。

三の車

三の車に法の道。火宅のかどをや出でぬらん。夢かうつゝか朧夜の。月毛の駒に片手綱。引きとゞむれば春の雪。とけて亂れし我思ひ。あまりてにくい此人を。これにそはせんねたましや。袖に流るゝ血の涙色と情の二思ひ。ふかき心は常々に。語り明せし戀草の。もえいでそめし面影に。すがりつけば八重櫻。風に亂れし亂髮。ゆひかひなくも殺されて。身はあだし野の霜露と。消えにし事のうらめしと。なくより外の事ぞなき。咲いた櫻になぜ駒つなぐ。よのゑいさ。駒が勇めば花が散る。あゝあさましやたへがたや。煩惱邪淫の身の苦しみは。鐵石たつ事一由旬。あだを情の心の鬼。のぼれと責むる劒の山。くるり〱。くる〱〱〱と追つ立てらるれば。岩根にとりつき〱のぼりて見れば。下より猛火ふき上げる。こは情なや悲しやな。たすけ給へと夕ぐれの。月は霞にかき曇り。聲ばかりして失せにけり。……大和屋甚兵衛。淺尾重次郎。筒井吉重郎作。

夢の樣なる其中に。四季折々のたはむれを。いま目の前に見する事。是れ龍神の惠なり。……水木辰之助作。

狂亂

薄化粧に柳顔。髪はおどろに亂したれども。花紫のゆかりある風情床しき物狂ひ。如何なる人にてましますぞ。問うてなにしよ。お問やつてなにしよ。我は親より子故に迷ふ。まだ父知らぬ撫子の。花は根にかへる〱かりがね。それは越路我は又。吾妻から出て。こがれ〱こがるゝ子故に狂ふがをかしいか。なんのをかしかろ。おかしゆはないが。我も御身におひたうて見たうて。どつく〱〱と。尋ねし國はどこ〱。せんようだうに山陽道おんどの瀬戸に播磨灘。船路遙かに紀伊の路や。玉津島ふきあげ。かいつくぼうてひつつくぼうて。尋ね〱あるいた。我らも狂ひめぐつたいとし我子の目に筑波嶺の。見ねど知らねど。筑紫のはて〱はてまでをどり出で走り出で。國々里々。伊勢の津をはりのつ近江の大津。草津いまづかいづしはつ。とつ〱〱。攝津の國には大もつの尼が崎から。海士になれとて文よこいた。あなたこなたと狂ひめぐりて。人目もしらで尋ぬる我を。なんだろつよのひてたろつよの。其よな

らく。いつそ死ねなら死にましよか。あなたへ靡けばこなたの恨み。思ひと戀と車のく両の輪になる。くるくく。寢もせず迷ふかやんれ。有りつる姿は繪にかける。我はうたゝ寢うつゝたしよの。……賀茂川野鶴。山下オ三郎。高島尾上作。

文言葉

一筆と書きそむるはなつかしさのまゝ問はせ參らせ候べく候。別れより程ならず候へど。思寢にする獨寢は。心もすみて目もさえて。煙草戀草伽となる閨の内。かはる色なく御くらしやがて逢をぞや語ろぞや筆にまかせぬ物思ひ。唯あひましてく。殘る言の葉かへすがき……高島尾上作。

定家怨靈

淺ましや。涙は生死の海の浪。死に苦しみを受け重ね。暗闇より。暗きにおもむく恩愛の。薄き契りの袂には涙を包む春雨に。つぼめる花の水ばなれ。はなれもやらぬ愛念の。添寢の床に夢もなくふたりが中の涙川。繫がぬ舟はとまれども。誰かさゝする人もないぞよ夢の世に。假寢の母が手枕よ。乳房を絞り。ひとりかこち有樣は。見るに袂もぬれぬべし。又起きあがりて走りめぐりて。褄に取りつき。のう悲しや。もはや別れの。われたへがたや。やいばの罪に修羅の太鼓。さらば

時雨の松

同じ浮世に。かけてたのまん常陸帶。取りかはしたる二世の帶。三重にまはるも戀の痩。身は蜻蛉の。有るか無きかに捨てられて。涙のしぐれ松が枝に。見えつ隱れつ戀の關。迷ひ〳〵歩くも誰故ぞ。逢はんと思ふ我男。人に逢はれてはづかしや。戀にやせたる二重の帶。三重まはる。ふたへの帶がふたへの帶が。三重まはる。さりとはかはす。誓紙の血しほの文字。猛火と成つて思ひのきづな。切つてもきれず離れもやらぬ我思ひ。しめつゆるめつ。ゆるめつしめつ二人寢の夢ばかりなる手まくらに。伏して形はなかりけり……大和屋甚兵衞。芳澤菖蒲作。

思の繪姿

世の中の人の心は。うつろひやすき物とし。君と我とが長枕夜毎にかはす睦言の。人こそ知らね神かけて。おもしき心は。おゝしんき。無いにでんとうらめしや。あゝまゝならぬ君さまはな。ひさしやいつ逢うたまゝぞ。おれもなわすれた。逢うたよさを忘れた。おれも〳〵な忘れた。逢うた夜さを思ひ出づればなつかしや。まだ肌なれしうつりがの。ふたり寢顏のつや〳〵〳〵と。なでしていまはてたへかね。君の御襟しかと取り。これのう恨めしや。我に死ねとの御事かしねな

てゞさおもかぢ取かぢ難波入江の繁昌へ。

二人わん久

たどり行く。いまは心もみだれそろ。末の松山思ひのたねよ。あのやわん久は。これさこれさうもこんだ。とかく戀路の濡衣。ほさぬ涙のしつぼりと。身にしみ〴〵とかわゆさの。それがかうした物ぐるひ。とても濡れたる暗なりやこそ。親のいけんもわざくれど。とかく耳には入相の。鐘におひづの里へゆこ。やれ〳〵さつさゆこやれ。きのふはけふの昔なりぼんさま〳〵ちとたしなまんせ。墨の衣に身は染みもせで。戀に焦るゝ身は浮舟の。よるべ定めぬ世のうたかたや。ゆかりぼうしかその一節に。智恵もきりやうもみな淡雪と消ゆるばかりの物思ひ。獨焦るゝ獨言戀しき人に逢はせて見や。兎角心のやるせなき身のはて何と淺ましやとじばしまどろむ手枕は。この頃見するうつゝなりゆく水にうつればかはる飛鳥川流れの里にきのふまで。はて。もつたいつけたへ。誓文ほんにせんせいも。我はくるわを放鳥籠は恨めし。心くど〳〵わくせくど。戀しき人を松山は。やれすゑかけてかいどり。しやんとしやん〳〵ともしほらしく。君が定紋伊達羽織男なりけり又女子なり。かた袖ぬしとながめやる。思ひざしなら武藏野で

といへば。しばしとゝむる袖振り放せば。目にこそ見えね。踏む足もとは猛火の煙。こは悲しやと。又ゆくさきも。焔の煙にむせんで恐ろしや。我には邪淫の流れのうき身。汲み流す。酒は三途の大河となり。起請神罰冥罰あたつて此身を碎く弔ひ給へ御僧様。……高嶋尾上、竹中藤三作。

地搗踊

やれおひかけ囃さぬかさあ〳〵さ。おひかけなかの綱しめてみよ。よいやさ。やれ我戀は〳〵。細谷川の丸木橋。ふみかへされては。ぬるんるゝ袖かや。おひかけなかの綱しめてよ。そろうた。やれ中のつなはへ。ゑや〳〵ゑやゑや。このさんさのへ。鳥にうらみは逢ふ夜の時よ。うたへ今宵の獨寢に。さんよへ〳〵。わのや小山に。戀風が吹くとの。身をもなげかけゆすらばおちよかの。さてもつれなのわの君や。ふるやてづまはかはいよへ。ゑいや〳〵ゑいやへ。このやてのさんさのへ。

難波入江の米船を見たかゑいぞんなゑひ〳〵ゑゑいぞんなおゝ。播磨の米が千石。淡路の米が千石万石。舟方がをさめた。月の夜ばしりにや。しもの〳〵下の關の。睦言も忘れた。おゝゑいぞんなゑい〳〵ゑいゑい。ぞんなひらいてさ。おひ

と引かば。おゝなびきやれかんまへて。よいよいぢようろの顔をしやるな。ちへでちへ。二人連れ立ち語ろもの。さと〳〵は我が家なれば。やりてかむろを一所に連れ立ち。急ぐべし遊びうれしきなじみへ通ふ。戀に焦れてちや〳〵とちや〳〵。ちやつとゆこやれ。かわいがつたりがられてみたり。無理な口說も遊びの品よくおなたへいひぬけこなたへいひぬけ。裙にもつれてしやらくら〳〵。わるじやれの。花も實もあるしこなしは。一重二重三重のおび。ふんの中ぞ候かしく。

雛鶴三番叟

とう〳〵たらり〳〵ら。たらりあがりらゝりどう。どころ千代までおきなぐさ。菊の四季咲き式三番。可愛らしさの姫小松。木陰に遊ぶ鶴龜も。ざもとの名にしおひ茂る。竹はやぐらの幕の紋。御贔負賴みあげまくや。どんと居なりに此舞臺。我等も千秋さむらはうおよそ千年のえにしは。二つ枕に結んだり。また萬代をかけし契りは。水も洩さぬ中川に。橋を渡すは。何というたらよかろやら。つるいうていふやうに。なるは瀧の水。絕へず逢瀨を松の葉の。色は替らじ只いつまでも。しやほんに。なじよの翁のおだつきは。そうもせんざいなこどして。心のたけ

なりと。なんじやおりべのうす盃を。よいさしやうがへ戀によわみを見せまじと。ぴんとすねては背むけて。くねるはなど出て見れば。女心のつよからで。おとより戀の責めくれば。小袖にひたと抱きつき。もうしわん久さん。さつても照つたりお日和さま。ふられずかへる仕合の。松にはあらぬ太夫が袖。月のもるより闇がよい。いや〳〵〳〵。こちや闇よりも月がよい。おまへはそうかとよりそへば。月がよいとの言ひぐさに。ずいな心で腹が立つわいな。しさいらしげに座を打つて。そでじやくきじやく衣紋坂。初冠のなげ頭巾。語るも昔し男山。つゝゐづゝ井筒にかけしまろがたけ。おひにけらしな妹見ざるまにと。よみて送りけるほどに。其時女もくらべこし。振分髪も肩すぎぬ。君ならずして誰かあぐべきと。互によみしゆゑなれば。筒井筒の女とも。聞えしは有常が。娘の舊き名なりそ。お茶のくちきり。たぎらす目もとにとりつけば。手持ぶさたに拍子揃へて。わざくれあんまけん。ひき〳〵。さりとはひき〳〵ひねろ。じたいそれがしは吾妻の生れ。お江戸町中けんぶつさまの。なじみ情の御ひいきつよく。あんまけんびき。朝の六つから日の暮るゝまで。さりとは〳〵かたじけない。あんま冥利にかなうてうれし。あんまけん。ひき〳〵。里のみうら女郎さま。ちえごちえ。袖をそつそ

し戀の淵。うかみもやらぬ流れのうき身。ういぞつらいぞ勤めのならひ。煙草のんでも煙管よりのどがとほらぬうす煙。泣いて明さぬ夜半とてもなし。人の眺めとなる身ははんに。しんくまんくの苦の世界。四季の紋日はをぐるまや。まづ春は花のもと。たをりし枝をたのしみて。どこにながむる春の風。そよりそよりと花吹き散らす。ちらり〳〵と櫻のかをり。野山をうつす里景色。夏のあけぼの有明のつれなく見えし別鳥。ほぞんかけたとさへづるは。しでのたをさや冥途の鳥と。あゝなき明かす。流れて血汐の桃の色。五月さみだれふられ〳〵。ふる〳〵〳〵。ふる夜は物を思はする。籠の鳥かや恨めしや。秋の夜中に牡丹花の。燈籠をどりの一ふしに。殘る暑きを凌がんと。大門口の黄昏や。いざ鈴虫を思ひ出す。つらい勤めの其中に。かわい男を待かねて。くれ松虫を思ひ出す。虫の聲々かわいらし。我が住家は草葉にすだく。露を枕にさはらばおちよ。ないて夜毎の妻はしそふに。どのご戀しきは機織虫よ。露を枕にさはらばおちよ。ないて夜毎の妻はしそふに。どのご戀しきははたおり虫よ。晝は物憂き草のかげ。はや時きぬといふ聲も。ふるひわなゝき身にしみわたり。ぞろ〳〵〳〵。仇と恨みと情の思ひ。おひめぐり〳〵。震動いなづますさまじく。むざんや高尾は世の人の思ひをかけ

をひろばかり明かして結ぶ妹脊山。さてもよい〳〵よい中としは。天下泰平國土安穩。今日の御祈禱なり。おさへ〳〵。よろこびありや有明の。月の出しほにあをきが原の。浪のこゑ〴〵打つや鼓の。まつ吹く風もさつ〳〵と。おしてすむなり〳〵。音も住吉のいくよへぬらん。夜遊の舞樂拍子を揃へて。足拍子揃へて。時も夜明の烏飛び。袖をかへしておもしろや。在原や高天が原に住吉の。四社の御前で扇を拾ふた。ぬしに扇の辻占は。そりやほんかいな逢ふとはうれし。しんぞこちやうれし。四社の御田の苗代水に。結ぶ緣の種おろし。そりやほんかいな。結ぶも嬉し。しんぞこちや嬉し。さあ住吉さまの岸の姬松めでたさよ。げにさま〴〵の舞の曲。さす腕には惡魔をはらひ。をさむる手には壽福をいだき。千秋樂には民をなで。萬歲樂こそめでたけれ。

高尾

鉦鼓のおともすみわたり。名も懷かしき宮戸川。都鳥も聲そへて。南無阿彌陀佛彌陀ほとけ。淺茅が原のそう〳〵と。風冷やかに身にぞしむ。不思議や紅葉のかげそひて。塚の後にそこ〳〵と。高尾が姿あらはれて。紅葉ばの青葉に茂る夏木立。春は昔になりけらし。世渡る中のしな〴〵に。我は親はらからの。爲めに沈み

たの日の色を朗ず。天下泰平國土安穏長久と。君を祝ひて千早ふる。ひとさし舞はふ万歳樂。おさへ〳〵よろこびありや。よろこびの玉章もらふて。初めてしよちに入りにけり。すまひの拍子からすとび。いさぎよくこそ見へにけり。さても見事や振もよし。雛の姿のかわゆらし。さまの召したる烏帽子をば。何んと申すゑぼしぞ。おはせの如く此尉が。さたる烏帽子は千代かけて。君を祝ひの立烏帽子。きりゝとしやんと風折烏帽子。みぎをり烏帽子ひだりをり。さて數々のおめでたや。十二の子寶座敷にずらりとならべて〳〵。おなはりあれかしおとよけさよ。たつまついるまつだんだらいさでに。飛びつくひつゝく乙女の袂。かへす〴〵もおもしろや。いやでもおふでも是非一さし。御舞候へ。あゝらやうがましや。さあらば鈴をまゐらせふ。其種蒔の種蒔きて。なるは驛路の鈴の音も。盡きせぬ御代の壽を。唄ふてやがて〳〵あふぎを納めけり。

ひとりわん久

今は心もみだれ候。すゑの松山思の種よ。いつの頃よりあひ馴れ初めて。通ふ心をかわいと思へ。さりとは〳〵。あのやわん久は。これさ〳〵。皷の革よのふはんにへ。しんぞこのみは。これさ〳〵うちこんだ。兎角戀路の濡衣。さても浮世はま

し涙の雨の。はんら〳〵。はら〳〵〳〵〳〵ふりかゝれば。身にしみたへて木蔭に寄れば。刄の責の煩惱の。犬も集まり牙をならして飛びかゝる。こは情なや護王のからす。觜をならして羽をたゝき。まなこを抜かんとまひさがる。實におそろしき物語。

種蒔三番叟

粧ひ飾る錦の袂。かざすかざしの手馴草。その舞扇おはやうに。隈なき月の光りかや右と左にしやんと座したは。雫やら花やらしほらしく。月雪花の樂しみを。今目の前に見る如く。今樣姿とり〴〵に。とう〳〵たらり〳〵ら。たらりあがりららりとう。ちりやたらりや女子たらしの。目元にとんとうちこんで。文は千束に及べども。いなせのないは。さりとは〳〵しんきなことぢやへ。笛の手前のはづかしく。今宵は逢ふて心ねの。成るか成らぬかのふこれこれのふ。なるかならぬか鳴るは瀧の水。日は照るとも絶えずとうたり。つねにとうたり。君の千歳をへん事は。天津乙女の羽衣よ。なるは瀧の水。およそ千歳の雛鶴は。万歳樂とうたうたり。又ばんだいの池の汀に龜遊ぶ。甲にさんきよく備へたり。瀧の水れい〳〵と落ちて。夜の月あざやかにうかんだり。なぎさのいさごさく〳〵として。おし

可愛と申す。〳〵しやんとりゝしき出立ばえ。大よせおくのゝ其かゝりくらに。伊豆と相模の殿さん方は。あいざはやぎした瀧口はうでう。かしはが峠におならびわれば。廻る盃よい中村と。名にし大場の朝歸り降るは時雨か村雨月毛。しと〳〵〳〵。めしたる駒の手綱のいろは。赤澤山しらくの竹馬。ハイ〳〵葉竹の竹馬。さきのけ〳〵。のけ〳〵。駒が勇めば心もいそ〳〵。轡の音がりんがら〳〵。ひづめの拍子がしつとんしと。寿き祝ふ花の袖。にほひこぼれて咲く梅の。枝移りして鶯の。囀る聲の拍子を揃へて。七艸なづな〳〵。これ人日の白馬の節會。春の小馬のいさぎよく。唄ひはやして祝しけり。

吉原すゞめ

およそ生けるを放すこと。人王四十四代の帝。元正天皇の御宇かとよ。養老四年の末の秋。宇佐八幡の託宣にて。諸國に初まる放生會。浮寢の鳥におらねども。今も戀しき獨住。さよの枕にかた思ひ。かわい心と汲もせで。なんじややらにくらしい。其手でふかみへはんま千鳥。通ひ馴れたる土手八丁。口八丁にのせられて。沖の鷗の二丁だち三丁だち。すけんぞめきはむくどりの。むれつゝきつゝかうしさき。叩く水鷄のくちまめぎりに。孔雀ぞめきで目白をし。みせすがゝきので

ゝならぬ。月に村雲花に風。それがさはりのたねとなりて。ほんに。千歳を結ぶ松山に。逢ひたや見たや戀しやと。願の糸の二上や。じたい我等は都の生れ。いろにそやされこんなになられた。天地けんこんとん身分。見事なさけは多けれど。聞いてびつくり。まはる三杯飲んた盃。つい〳〵のついさけにあかさぬ夜半もなし。それがこうじた物ぐるひ。昔忘れぬそのなり姿。よいこの〳〵。出たちばへよき男山。淺黄縮緬茶縮緬黒い羽織でくる〳〵くるわがよひきぬ〴〵の面影に。問へど答へもしよんぼりと。案山子に似たる姿よの。よしや戀ゆゑ深き思ひは堀江の文も。はしがなければ。渡られぬ。戀の願に阿彌陀橋。うきながばりのわざくれど。ぬれて通ふがいたちぼり。君を思へば徒歩跣。よのめ逢はねばひよつと出て。迷ふた裾や小褄に。はら〳〵ほろ〳〵くるわと云ふはの。西かの東かの。あつちかこつちか。すゞろかもじろかのふ〳〵〳〵。をしへてたべと。しばし褥の草枕。夢のよの中夢の世の中。

對面春駒

めでたや〳〵。春の初の春駒なんぞは。夢に見てさへよいとや申す。〳〵。オヽ〳〵それそれよい振袖の。梅と櫻の其中々は。姿も年もわいけうも。つゐなとゝなり

、よほ、いはい〳〵よほ、いは。芍薬牡丹。牡丹芍薬百合の花。しよんがいな。エ、腹が立つやら。憎いやら。どふせうこうせふ憎む鳥鐘。あかつきの明星が。西へちろり東へちろり。ちろり〳〵とするときは。家の首尾は不首尾となつて。親父は十めんか、はごめん。十めん五めんに睨みつけられ。いなふよもどらふよと。いふては小腰にとりついて。ならぬぞいなしやせぬ。此頃のしなしぶり。につくいおさんがあるわいな。文の便になア。今宵ごんすと其噂。いつの紋日もぬしさんの。やぼなことじやが比翼紋。離れぬ中じやとしよんがい。そまる縁のおもしろやげに花ならば初ざくら。月ならば十三夜。何れ劣らぬすいどしの。あなたへいひぬけこなたのたて。何れまろかれ候かしく。

京鹿子娘道成寺

鐘に恨みは数々ござる。初夜の鐘を撞くときは。諸行無常と響くなり。後夜の鐘を撞くときは。是生滅法と響くなり。晨朝の響は。生滅滅已入相は。寂滅為楽と響くなり。聞いて驚く人もなし。我も後生の雲晴れて。眞如の月をながめあかさん。言はず語らぬ我心。亂れし髪の亂るゝも。つれないは只うつりぎな。どふでも男はあくしやうもの。櫻々と唄はれて。いふて袂のわけふたつ。勤さへ只うか〳〵

んてつと。さつさおせ〳〵え。馴れしくるわの袖の香に。見ぬやうで見るやうで。客は扇の垣根より。しよしんかわゆくまへわたり。さあきた又きたさはりじやないか。又おさはりかお腰の物。がつてんか。それ編笠もそこにおけ。二階座敷は右か左か。奥座敷でござりやす。はや盃もつてきた。とこへ靜かにお出でなさんしたかへと。いふ聲にぞつとした。しんぞきさまは寢ても覺めても忘られぬ。せうし氣の毒又かけさんす。なにかけるもんだへ。そふした黄菊と白菊の。同じ勤の其中に。外の客衆は捨小舟。流れもあへぬ紅葉ばの。めだつ芙蓉のわけへだて。只撫子とかみかけて。いつかくるわをはなれてしはん。そふした心の鬼百合と。思へば思ふほど。氣も石竹になるわいな。末は姫百合をとこへし。其樂しみもうす紅葉。さりとはつれないぞうよくと。垣根にまとふ朝顏の。離れがたなき風情なり。ひとたきくゆる仲人の。その繼木こそ縁のはし。そつちの性がにくいゆゑ。隣座敷の三味線に。あはすわるじやれまさなごと。女郎のまこと〻玉子の四角。あれば三十日に月も出る。しよんがいな。玉子のよほ〻いほ〻いほいいよ。ほ〻いほい〳〵よほ〻いほ。玉子の四角。あれば三十日に月も出る。しよんがいな。君の寢姿窓から見れば。牡丹芍藥百合の花。しよんがいな。芍藥よほ〻いほ〻い

吉野山。散りくる散りくる嵐山。朝日山〳〵を見渡せば。歌の中山石山の。すゑの松山いつか大江山。いくの丶道の遠けれど。戀路に通ふ淺間山。一夜の情有馬山。いなせの言の葉あすか木曾山待乳山。わが三上山いのり北山稲荷山。緣を結びし妹脊山。ふたりが中の黄金山。花咲くえいこの〳〵をはすて山。峯の松風おとは山。入相の鐘を筑波山。東叡山の月のかほばせ三笠山。たゞたのめ氏神さまがかわゆがらしやんす。出雲の神さんと約束あれば。ついにいまくらさとに戀すれば。浮世じやへ。深い中じやといひ立て丶。こちや〳〵よい首尾で。にくてらしほどいとしらし。さるほどに〳〵寺寺の鐘。月おち烏鳴いて。霜雪天に滿汐程なく此山寺の。江村の漁火うれひにたいして人々ねむれば。よきひまぞと。立ち舞ふやうにねらひよつて。つかんとせしが。思へば此鐘恨めしやとて。龍頭に手をかけ飛ぶよと見えしが。ひきかづいてぞ失せにける。

英執着獅子

花飛び蝶驚けども人知らず。我も迷ふやさま〳〵に。四季をり〳〵の戲は。蝶よ胡蝶よ。せめてしばしは手にとまれ。見かへれば花の木陰に。見えつ隱れつ羽を休め。すがたやさしき夏木立。心づくしのナ此年月をへ。いつか思ひの晴るゝや

と。どふでも女子はわくしやうもの。都育ちははすはなものじやへ。戀のわけざと武士も道具を伏編笠で。はりと意氣地の吉原。花の都は歌でやわらぐ敷島原に。勤する身は。たれど伏見の黒染。煩惱菩提の鐘木町より。なにはよすぢに通ひきつぢに。かぶろたちから室の早咲。それがほんにいろじや。一二三四。よつゆ雪の日。しもの關路も。共にこのみはなじみがさねて。中は丸山たゞまるかれど。思ひ初めたが緣じやへ。梅とさん／＼櫻は。何れ兄やら弟やら。分けていはれぬナ花の色へ。菖蒲かきつばたは何れ姉やら妹やら。分けていはれぬナ花の色へ。西も東もみんな見にきた。花の顏さよをへ見れば戀ぞますへ。さよへ。かはゆらしさの花娘。戀の手習つい見ならひて。誰に見せよとて紅鐵漿つきよぞ。みんなぬしへのしんぢう立てゝ。おゝうれし／＼。末はかうじやにナ。そふなるまでは。とんといはずにすまそぞへと。せいしさへいつはりかうそかまことかどふもならぬほど。おゝ逢にきた。ふつゝり悋氣せまいぞと。たしなんで見ても情なや。女子には何がなる。とのご／＼の氣が知れぬ。／＼。あくしやうな／＼。きが知れぬ。きが知れぬ。うらみ／＼てかこちなき。露を含みし櫻花。さはらばおちん風情なり。おもしろの四季のながめや。三國一の富士の山。雪かと見れば。花のふゞきか

思ひまはせば昔なり。牡丹に戯むれ獅子の曲。げに石橋のありさまは。笙歌の花ふり。笙笛琴箜篌ゆふ日の雲にきこゆべき。目前のきどくあらたなり。しばらくまたせ給へや。影向の時節も。今いくほどによもすぎじ。獅子とらでんの舞樂のみぎん。〳〵牡丹の花ぶさにほひみち〳〵。たいきんりきんの獅子がしら。打てやはやせやぼたんぼう。〳〵。くわうきんのずゐあらはれて。花に戯むれ枝にふしまろびげにも上なき獅子王の勢ひ。靡かぬ草木もなき時なれや。ばんせい千秋と舞ひをさめ。〳〵。獅子の座にこそなほりけれ。

面かぶり

とかく子供たちやいたいけがよいものじや。はらゝとほろゝほろゝとはらゝ。めだにはむれはてちら〳〵あはゝ。かぶり〳〵しほのめ。あたまてん〳〵よ。駒鳥雀の子踊。其尾にとりつき太郎松よね松。だんだらかいつく。とつつくひつつくさはになつてこのぬふてふ鳥の。花にくる〳〵〳〵〳〵くるりと。花の振袖。いたづらや。まつりまつりちんがらこ。〳〵。爰までござれ手車に乗せて。おりやこりや。おきやがりこぼし犬はりこ。猿の角力はあがつたりさがつたり。えい〳〵〳〵いかなるわるさ盛も。こつちのてうえござれの。はつて〳〵はり人形。きん

と。心一つにあきらめん。よしや世の中みじか夜の。夢はあやなしそのうつりがの。にくてたおろかぬしなき花を。なんのさら〳〵。さらにさらに戀はくせもの。露しののめ草葉に靡く青柳の。ひとしほらしく。二つの獅子の身をなで〻。かしらを項垂れ耳をふせ。花に宿かる浮世の嵐。あなたへ誘ひこなたへ寄りつ。園の胡蝶の戲れ遊ぶ。己が友呼ぶ獅子のこま。花にうつろふ戀の胡蝶の舞の袖。戀すてふ比翼連理のかおゆらし。大宮人の庭櫻。檜扇かざす緋ざくらの。地主の櫻や瀧櫻。月の影さへ明石潟。人丸櫻袖硯筆のいのちげ墨櫻。たが小櫻や憎からぬ。姥櫻花櫻。名とりの里にひく三味の。手鞠櫻のはづみよし。思ひ初めたよ糸櫻。君の名のみきく櫻。ふたりが戀の山櫻。祈る誓もいせ櫻。色も替らぬ紫の。江戸櫻家櫻。おもしろや。時しも今は牡丹の花の。咲くや亂れて。散るは〳〵散りくるは。散るは〳〵散りくるは散りくるは。ちり〳〵散りかゝるやうで。おいとしうて寢られぬ。花見てもどろもどろ。花にはうさをも打ち忘れ。人目忍べは恨みはせまじ。ために沈みし戀のふち。心がらなる身のうさを。やんれそれは〳〵へ。まこと憂やつらや。あさな夕なに寫す鏡の。よい金性とわたしは水性で。おまへと深い。それを疑ふことかいな。さらりと柳にやらしやんせ。柳に〳〵やらしやんせ。

るい世界やすいの世に。うそとはやぼのあやまりと。笑ふ禿のしほらしや。禿々と澤山そふに。いふてくだんすなこちや花魁に。戀のしよわけや手管のわけも。をしへさんした筆のあや。よふ知ると思はんせ。オヽ恥かしや恥かし。しどけなりふりかわゆらし。文がやりたやあの君さまへ。とりやちがへて餘の人にやるな。花のかのさまの。さて花のかのさまの手に渡せ。あさのや六つから〳〵。上衣下衣ひつ重ね。禿は袖の振初め。つく〳〵〳〵には羽を突く。一二三四五へに七へに。ことは十三十四十五。手はまおく。一二三四。見よなら〳〵。松をかざして梅の折枝。それさこれさ。それすいた三味の手。梅は匂ひよ櫻は花よ。いつもながめは富士の白雪。

うしろ面

一念他生無量劫。佛の誓ひ有難や。淺ましや我ながら。たま〳〵娑婆に生れきて人をいつはることをのみ。うきわざとする畜生の。いつか流轉をのがるべし。なもうだ〳〵南無阿彌陀。打つや鉦皷の殊勝さよ。さいて佛になりたかろ。似たかのふ水鏡。うつる姿も恥かしや。我は化けたと面影を。それぞとさとる犬のこゑ。ぞつと身にしむ鳴子かせ。寒き夜嵐身にしみ〳〵と。野寺の鐘に。憎や枕を驚か

ひらだんべいさかたさくらに猿が三千ぶらりと下つて。俵轉びにころりや〳〵。やつころりとぬめらしやんすな。オヽやれ〳〵さつてもの〳〵。杖にまはるはしほらしや。子猿めが枝に戯むれ遊ぶ。鷲にとらるゝ夢を見た。まもりをさ。かけさいよけの守りをさ。かけてまゐろのゝさまへ。やよひ花月咲いたりや花盛。莟半咲き枝折りそへて。とふるかたげて誰人の子なれば。花一本たもれ。なく子にとらしよ。色も美ししほらしの兒櫻。たが袖引くとて散らすな花吹雪。坊さま〳〵と名ばかり坊さまてころもいやなり女郎衆と寝たし。それて坊さまいはれふものか。それさ〳〵そふさんせ。禿々と名ばかりかぶろ。なじむお客にちわする日元。それで禿といはれうものか。それさ〳〵そふさんせ。今の子供は口々に。加茂の競馬の膝栗毛わかがいの〳〵。しんくの手綱におをりをうつて。かけぜん〳〵のりかけとん。お馬がさんびきのりてがひとり。はいとう〳〵かけつかへしつ。いさむ足もと大手下馬先櫻の馬場に。なみうらぎはに〳〵。ざんぶとよせては。えん〳〵わい〳〵のんはのん。いよいさむ春駒。

羽突禿

戀の種蒔初めしより。色といふ言葉は何れ此里に。まてとてもりし一くるわ。ま

れぐさなる煙草さへすいはど深く迷ふのは。勤の花じやないかいな。それて其口説を止めよならとても止めよなら。めでたくかしくは。文の止め。羽織隠すは朝のとめ小袖にかとや振の袖。いく夜もとめて抱柏。こなたもとめて三升紋。互に争ふ其風情櫻の實生藤の苗。おい咲く花の顔もしやと。感せぬ者こそなかりけれ。

かきつばた

かたみの花は今こゝに。在原や跡なへだてそかきつばた。花紫のゆかりとて。かたみのかむり唐衣。身にそへ持ちし言の葉も。契りし人の數々に。よしや思ひのな。露の忍山。忍びて通ふ業平の。姿は今に見かはす面影。いとし忘れぬ心やな。戀し床しき有様を。語るも懐かしことぞかし。いとゞ色ばかりこそ浮世なれ。樂しむもはや昔男の。名をとめしかきつばた。ながめたまへや都人。まことは花の精なりと。見えつ隠れつなりにけり。

傾城道成寺

我は此世になきからの。其まゝならぬ其中に。かわい男を娑婆におき。思ひがけなき死出の山。迷ふが中の迷ひとは。ちゞに物こそ悲しけれ。佛の道にうとけれ

す。ひやく〵のいたづらや。里のわらべが石などをてゞに投げ打つてはものゝしんきしんくの苦がござる。こゝはまつちのな山中なれば。筆にやことかく硯墨や持たず。もしも忘れずお尋ねあらば。森の木陰に木の實をよせて。やがて逢はふといふてたもれさ。姿恥かし懷かしや。花のえにしのかのまにあをぞ。畔道細道まはれ〵くる〵と。鳥の羽音になるこの繩に。ひらりとくるりと腰をしなへて。踊りまふていなふよ。我が故鄕へ歸らん。谷峯しどろにくるり〵。姿見まがふ草がくれ。

帶引

新玉の年のひとよを待ちわびて。願も庚申くまは。花の小林枝振も。そだてしだいのわがまゝは。代々讓のかぶつきり。其名も朝日丸かれと。色のしよわけもちくとんばかりありや。まんすでやんすの里言葉。いつか小耳に挾箱。鎗が降つても通はんせ。禿は袖の振初め。とめた姿はいさましく。花の揚屋の初紋日。禿々と澤山そふに。いふてくだんすなこちや花魁の。あの虎さんや少將さんに。かはつていふて見よふなら。私が實のかゝさんに。お前は逢ふて末々の。約束までも內證で。文も噺のやうに書き。そはねうちから旦那へと。いふて見たいが戀の慾。忘

まんだばさらだ。せんだまかろしやな。そはたやそわか。ひだりの御手に三日三夜。右の御手に三日三夜。合せて六日に一日增して。七日の御祈禱御經讀誦も。奇特にまかせて降魔の利劍は。何のこつちや〳〵。力によりてうんたらたかんま。ちやうがせつしやとくだいちゑ。ちがしんじやそくしん成佛。祈りければ。祈り祈られ。じやむつかしい事ども。たんせいだして額に汗を。玉の珠數すりみな聲揃へ。撞かねど此鐘響きいで。ひかねど此鐘踊るぞと見えしが。程なく鐘樓に引き上げたり。朧月影もさだかにしどけなく。山吹の瀨にはの見えて。小褄とりなりはら〳〵春風。さまは忍びの朝がよひ。小川渡れば裾が濡れ候よ。つまも濡れ候よ。濡れ候よ。物にくるふや。憂き淚。まぶの男は面憎や。抱いて寢たときや我ならで。外の女郎にや逢はぬといふて。だましくさつたが悔しうてならぬ。誓文くつされだましはせぬが。引くに引かれぬ心があれば。それは寢てから其言譯をしよふぞいの。アヽいやらしい何んぞいの。昔あくしやうしたらいでのふ。今のしなしはをかしやな。是は過ぎにし言の葉の。アヽ夜晝となき苦しみは。無間の鐘のおそろしや。くるしむ苦患近づきて。〳〵。來世は六つの攻皷打たふよ。いつヽ皷は僞りの。契りあだなる妻琴の。引き離れいづくにか。わが思ふ忍びねの。や

ばつらい勤をおくる身の。月は程なく入汐の。〱。煙満ちくる小松原。懺悔に罪も晴れなんと。中山寺にぞ祭りける。嬉しやさらば舞はんとて。あれにます宮人の。烏帽子をしばし假に着て。既に拍子を初めけり。花の外には松ばかり。暮れ初めて鐘や響くらん。いろはにほへとちりぬるを。わがよたれぞつねならん。人里遠き鐘の聲。諸行無常の世の中に。戀はまことの菩提の道へ。引かるゝまでの糸竹や。我も昔は皆人ごとに。娘々と澤山そふに。いふてたもんな手ならひ。琴も覺えて物縫ひ習ひ。やがて殿御と添寢の枕。添寢のやがて。やがて殿御と添寢の枕。ふたりねがちに引きしめて。いとさう〲しき風の間に。霞たなびく峯の雲。いらかならべし此寺は。小夜の中山とうけたまはり。初めて伽藍成就の。遍く十方に輝けばとて。光明山とは名付けたり。山寺の春の夕暮きて見れば。入相の鐘に花ぞ散りける。〱。さるほどに〱。寺々の鐘。月落ち烏鳴いて。霜雪天に満ちしは程なく。此山寺の江村の漁火。うれひに對して人々ねむれば。よきひまぞと。立ち舞ふやうにねらひよつて。撞かんとせしが。思へは此鐘恨めしやとて。龍頭に手を掛け飛ぶよと見えしが。引きかづいてぞ失せにける。東方こゝにござんせ明王。西方ゐとく明王天子。北方金剛夜叉明王。中王大日不動明王。なまくさ

取られじ離さじものと。かさとしぐれと揉みあひて。おのとは云はじ君ゆゑと。獨ごちして行く程に。小町御前の住み給ふ。車のもとにぞ着き給ふ。

寫繪雲井弓

色の世の中うはきの浮世。戀と情のみなとへは。ほんに舟より三まいがたで。おせやれをのこがてんじや〳〵。くるわ通ひは皆駕籠でおす。みせすがゝきの音じめにつれて。もてるか〳〵駕籠もてます。はい〳〵〳〵えいさ〳〵えいさつさ。榮花の遊び島原や。揚屋をさして急ぐる。花の吹雪に濡れぬがましよ。濡れてはころぶ花の下紐。疑ひ深いなんじやいな。そもつき出しの初めより。つひの御げんの源三位。よりまさなこと睦言に。結ぶ妹脊や二世の緣。明しあふたる中々を。無理な口說のすねごとに。ひそらしやんすが聞えぬと。憎い男のむなづくし。鳥の鳴くまで恨みつ泣いつ。かこち涙のしどけなく。互に悋氣の角めだつ。中へきかゝる御はうらい。戀爭ひの中なはし。おふたりながらにつこりと。笑ひきよめたてまつる。色の意氣地もいざこざも。當分わしにくだんせ。兩方なんぼうてくだのやさ。女郎。西方いろごと裏茶屋小茶屋や。北方今夜のあひづは中戸で。中央大日大師の約束。さつても奇妙な御祈念と。ずた〳〵いふて祈りける。やんも

わら〳〵打たふよ。〳〵。まして冥途の修羅の巷に。劒をひづしと植ゑならべ。罪人を追ひ廻し。岩石せなに結ひつけられて。峯よりどうとつき落され。骨はみぢんに碎かれて。風に木の葉の散る如く。起請誓紙の數々に。恨みのからす集まりて。黑鐵の嘴をならし。銅の爪をとぎ立てゝ。追ひ廻し〳〵。流れの罪科地獄の有樣。花も一時。月の光も映るや夢の。〳〵。定めなきこそあさましき。

百夜車

さればにや少將は。百夜通へと夕月の。笠に降る雪積る雪。戀の重荷と打ちかたげ。淚のつらゝ解けやらぬ。君の心は浮世川。渡りかねたる砂川や。木幡の里に馬はあれども徒步跣。行きては歸り歸りては。雪に降られて行くも誰ゆゑぞや。いやふられてと云ふ心。君のわるいと言ひ直し。同じ事なら積る雪。しゞのはしがき百夜までと。通ひしに。九十九夜にもなりたりけれ。嬉しの今宵や。又はてしなの明日の夜や。明待つ鳥のなかぞらは。まだきに鳴いて山葛。雨の月笠の月。軒に洩る月時雨する。袖引きかへし傘の。これも車のわれからと。くる〳〵〳〵くる〳〵〳〵。くる〳〵〳〵くるりとふりかたげ。エゝ立つかひもなき上やしろ。行き迷ふ身は千鳥。鳴いてたつこそ哀れなり。をりふし烈しき比叡おろし。かさを

つきぬえにしの樂みと。うちかたげてぞ急ぎ行く。

吾妻丹前

げに見渡せば冬景色。木々の梢やこのもかのも。ながめにあかぬ霜の花は。入相でろも散らぬ嬉しさ。六つの花積る中にも梅櫻。春待つさまのなりよしふりよし。よしをか染のいろ〳〵に。えもんつくろふ伊達姿。しやん〳〵しやん〳〵しやんと着なした其風俗は。いとし盛りじやないかいな。おてんとおてんと。おてんとたまらぬ柳腰。どふともかふとも。いふにいはれぬつくもがみ。結ぶ縁なら神さんしだい。かわゆがらんせ頼むにへ。文のお使ひ我等に仰せつけられて。くだされかしと互に爭ふ其風情。力士の立ちしごとくなり。顏見合せて笑草。伊達を駿河の。富士のお山の化粧顏。美しさゆゑ文を遣り。おらが心を思ひやり。せめて一夜はなん〳〵なん〳〵靡かんせ。しんぞ我等さへしなをやり。兎角浮世は色と酒。醉ふたとさ醉ふたとさ。よふた〳〵千鳥足。おてりきわめて浮かれはなやり。黄昏に宿かるむら烏。もれてや影の月夜烏の。かはい〳〵と笑はれし。旅烏心なや。別れぞ惜しむ明烏。憎やのふ憎や〳〵と思へども。元日ばかり明の烏は。皆人さんが喜び烏。ありがたからぞへ。まこと〳〵を宮烏。神樂月とて〳〵。まづ新

しろや荒神の。お前を見れば松うゑて。黄金の井戸に水も湧き。松もろ共に家も御繁昌。末繁昌の千代の御神樂。千早ふる〳〵。鈴の音も床し。しやんこしやんこと彈く三味線の。いろねに浮かれおもしろの。花のくるわや世界の色のうはもりと。やぼはもまれてすゐとなる。是をきて見よかしのへ。戯れ遊べやつさ。いさみにぎはふ神樂月。

白酒賣

今朝の便りに文書き添へて。夕べまいたる玉章も。にほん目出度き里の名のわけ。吉原通ひ路の。駕籠と舟との山川や。すゑ白酒の擔ひ賣り。そも〳〵酒の初まりは。神代の昔し素戔嗚の。尊といひし大じんの。かのあしなづち手なづちの。ふたりの末社にみことのり。やしほ釀してつくるとかや。いづもやへがき妻戀に。かたいお客も葡萄酒の。お腰の物は船宿の。戸棚の中にわられざけ。さゝの一夜を吳竹の。くねるはくせの男山。ついきぬ〳〵の七つ梅。茶屋がむかひの玉子酒。濡れてゐるよとの霙酒。アヽまゝよ。いつそ伊丹の濁酒。末はもろはく諸共に。千歳ふらう酒やうめい酒。人の池田も。みりん用ひぬ氣まゝざけ。今白酒のはに出でゝ。赤きは酒の咎ならぬ。身はならはしの奈良坂や。このてがしはのふたり寢は。

の御誓願。天上界の一くるわ。てれん手管のよこばんじん。敬つて申すと戯むるゝ。君は春咲く梅の花。香り床しき閨の戸に。戀じやもの小六〳〵。小六ついたる竹の杖。もとは尺八中は笛。末は女郎衆のヤッコリャ妻こふ鹿の筆。おのが名のみをうたかたの。あはしまなりと戯むれに。人々きやうに入相の。かねてまうけの月のくれ。樂しかりけるしだいなり。

八朔梅月の霜月

歸ろと鳴くは小男鹿の。妻に引かるゝ心から。男心のつれなさは。枕並べて宵は待ち。夜なかは恨みあかつきの。夢も結ばぬ身じやものと。思ひはせいで憎らし。麻と蓬はせたいにつるゝ。襷のゝじに前垂掛けて。若い夫婦は苗代水の。水も漏らさぬ漏らさぬ水の。中に小桶がほしゆござる。晩にござらば窓からござれ。起請誓紙は反古にもなろが。さいつさゝれつ石できの。かたい契りの一夜ざけ。いつか逢瀬も七夕の。ほどいてなげてついそれなりに。濡どけあふたるくものおびさまに逢はふとてせどやへ行けば。さまにや逢はいでびんのけざゝらに。ういもつらいもしよんがへ。おでやり申してつゝふすべいとは。てんこちないこと免しやれもう。すなででめがあじやる。さきもがでんぐり。づんでるこんだに

らしきやぐら幕。心いそ〳〵老若男女。花を飾りて春のこゝちや。はなぐ〳〵しくも人の山々。花の顔見せ盛り久しき。

粟島

夕べ〳〵の品定。しきせに袖の一樣に。きつれてつれて〳〵さわたる雁の。空さへ秋の定めなき。浮世を渡る其中に。加太粟島の修行じやの。籬がもとに鈴の音の。ふられ〳〵て逢はれぬ戀も。願へば。いつか。あはしませんとの。御誓願。女郎衆の張の強いのも。ついおればりや打ち解けて。中を結ぶのしめく〳〵り猿。浮世ぶくろの花がたや。ひながたならぶ妹と脊を。結ぶの神とはこれならん。そも〳〵紀州などさの郡。加太あはしま大明神の。由來を委しく尋ね奉るに。せんせうな大じんの。初會にはまつて裏やくそく。第三會めの姫宮にて。はりさへてれん女郎と申し奉る。ほんぢは即ち。こくうむてんの御きりやうにて。丑寅の御方は。一代男を守りはぞんとかけられて。腰よりしもは地につかず。どんとはまるが浮世川。うつを舟やら山谷舟。いけんてなんの山やがとうふの。みゝに殘りし睦言かごと。言葉のあやのまきせんべい。お神樂大鼓のからみそは。おぢくひしめてのゐつゝけに。長居ふらちの病となつても。金をば水のあはしまと。つかはせんと

ろの。東山や西山。北さがの踊は。ついの帽子をしやんときて、踊る振が見事へ。花見てもどろ〳〵。花にはうさも打ち忘れ。おもしろや九重の。都歸りの江戸櫻。せがはぼうしをきく櫻匂ひ櫻や八重一重。君が情の薄櫻。そんそれはまことによふ云ふた。忍ぶ夜の月も少しはおそ櫻。有明櫻戀の邪魔。闇に照すは緋櫻や。濱で焦がるゝしほがまや、そんそれはよういふた。たとへ〳〵の末やま櫻。どらのを捿みし奥までも。ふたり誓ひしいせ櫻。起請。誓紙を墨染や。そんれはまことによふ云ふた。吉野初瀬の花よりも。紅葉よりも。戀しき人は。どれ〳〵見たいものじや。どころ〳〵たまゐりやつて。どふげてめされよ。とがをばいちやがおひまゐらしよ。しほらしや。見れば五色のおやのたけ。綾の褥もへ。君と我二人。縁を結ぶの常陸帶。天津乙女は誰が袖ふれし姿よし。驛路の鈴ふればなりもよし。いえい〳〵〳〵。十二の子寶揃へて〳〵。さ、つさしぐれか鈴の音か。日本目出度い春日の山は。みかさよいやさ。待ては甘露の日ががさ。月のかさはど開いた〳〵。秋はなほ紅葉もじがさ。それ〳〵それじやいのまことに鵲の橋を渡した〳〵。解けぬ思ひの戀もあるに。數々の文にわしやだまされて。忍ぶ其夜は闇こそよけれ。こん〳〵こぬ夜はつんつんつら憎く。我ひとり枕かたしき夜もすがら。枕並

へ〱。恥かしや招く尾花にこちや招かれて。荻のうはきな男郎花。我もかうなる思ぐさ。それそれ。〱で浮名が立つわいな。露と情にこちや濡れそめて。誰が刈萱女郎花。色も黃菊のくもりぐさ。それ〱それで浮名が立つわいな。浮名立つ。星か螢かちらちら〱。雨の木の葉が。さら〱さつと一時雨。紅葉もいつか白妙の。雪かと思へば月や花。風情なりけるしだいなり。

天人羽衣

花ふりて妙たりや。靈香四方に薫ず。おもしろの今の音樂。おもしろの樂の音。天の原ふりさけ見れば霞立つ。空もいつしか行く雲の。羨ましげにうちながめ。伽陵頻迦の馴れ〱し。聲いまさらに雁がねの。かへり行く。あまぢと聞けば懷かしや。げに乙女子の。霓裳羽衣の曲をなし。あまの羽風のひら〱〱と。雨にうるほふ花の袖。東遊のするがまい。此時初なるやらん。花の色香もよい姥櫻姿優しやはら〱〱と。二重の帶をきりゝとしやんと緣結び。おちやめのとのくせとして。背に子を負ひ寢させておいて。いんのこ〱と。ゆたもなゝなかけそよ。かわゆらしさにな愛ざかり。愛すればかぶり〱てうちしはのめ。さてもそなたは誰人の子なれば。ていかかづらの離れがたやの。〱。手車に乘せてまい

解けぬ解櫛の。男心を思ひやる。顔と顔との鏡山。人のしがからさき見えて。我身をの海白波や。同じ流れにみちのくの。忍ぶ人目も思ゆゑ。互の心みくまのゝ。神々様をなかだちに。誓文ぐづされ後の世かけて。替はるまいぞと繰言ながら。返す〴〵も頼みてし。いふにいはれぬ我涙濡れて墨散るのべがみの。あからさまにも人知らず。思ひまゐらせ候かしく。

さかづき

盃に。むかへはたがふ人心。常に恥かし戯れを。酒の力にいふてのきよ。すこしほろゑふ顔紅葉。花とならべしめうとごと。どふした縁でわしや嬉し。おまへはどふやらいやそでかなし。もうし〳〵これもうしあの〳〵まれ人さま。ほんに結ぶの神かけて。何のしよざいがあろぞいの。思ひ合ふたる此中は。枕の外に知る人ぞ。ならくの底に沈むとも。かはらぬはどにへ夢の世に。共に夢みむ夜寒の頃も暖むる夢のむつごと。

さよあらし

あひそめて。今の此身の物思ひ。晴るゝ間もなき下心誰が色染めて戀衣睦言までも羨まし。よい中どしのさだめごと。定めなきかな浮鳥の。通ふ翅のかほとめ

べてさんさゝあ。待つ夜は稀に逢ふ時ばかり。かわい〳〵とだましておいて。憎やくだかけまだ宵ながら。きぬ〴〵つげて。ほんに憎いじやないかいな。うやつらや〳〵。空も懷かし雲の波。かてう飛びかふ雲の袖。かけめぐる。かへす乙女の姿。雲の通路ちらと見た。見そめた〳〵。天人女郎衆のしなもよく。歌舞のぼさつの。遊びも愛にかくやらん。さるほどに時うつゝて。天の羽衣浦風に。たなびき〳〵三保の松原。浮島が雲の。あしたか山や富士の高根。かすかになりて天津みそらの。霞にまぎれて失せにけり。

かぶろだち

人の末。水の流れとうき勤め。禿だちからくるわに住めば。只いつとなく明暮に。暦繰出す品定め。けふはかねつけ袖留めの。もん日物日を。數へて暮す里の花。殿御待つ夜は久しうて。首尾のなる夜の短さよ。深ふなるほど馴れそめ心。おもふに添はで思はぬに。添ふも緣ならしやうことがないに。緣ならそれも。添ふも緣なら。しやうことがないに。思ひあうたる神のなかだち。

長五郎髮すき

くしげ鏡臺取り揃へ。言葉に云はぬ亂れ髮。いたづら髮のばら〴〵と。もつれて

かるゝ女三の宮の櫻をかざす檜扇や。大宮人もいとまなき戀路。移る心や紫の。色にいでそよ恥かしながら花によそへて送る文。見よかし〳〵散ぬら間も。心づくしのいつとなく。まつにかひある花の宴。

しろたへ

うしとみし。夜半に降り積む白雪の。中にしよんぼりみどり子の。かわい〳〵の聲聞けば。ちゝはゝの事思ひ出す。義理と戀路の中田圃。れん度ながしにむかへじの耳に洩れくる物哀れ。水雞の鳥の物思ふ。今宵ばかりはくい〳〵とさのみ心は有明の。つれなく見えし庭の白妙。

思の緋櫻

身にかへて。思ふ人には遠ざかり。思はぬ人のしげ〳〵に。くるわの里の憂き勤しやうこともなき仇枕。寢ても覺めても苦になりて。胸の鏡の掻き曇り。ういぞつらい辛抱は。可愛男に逢ひたうて。見たうてどうもならぬはへ。此やうにぐちになるものかいな。わしにばかりはまことゝ思ひ。はまりやすさは粹の淵。沈むものなれば思へばさいな。ほんにぶすいがましじやもの。心知らずや明の空。

糸車

て。妹背ひとつに戀の種。獨焦るゝ夜半の戸に。音信れて吹く小夜嵐。

起請

思ふ事。叶はねばこそ浮世とは。よくあきらめた無理な事。神や佛がうそつくならば。ほれた證據をどふかこふかいな。うそじや〳〵は女子のくせと。無理の言譯する墨の。馬鹿らしい程いとしゆてならぬ。浮名立つとは男の心。たとへどのやうな辛苦もほんに。何んの厭ひはせぬほどけがに。もうし〳〵これもうし。拜みやんす賴む神さん。

わかれ鳥

宵は待ち。夜中は恨みあかつきは。よそに羨む別れ鳥。憎や世界の男のくせに。逢ふ時ばかりほん〳〵に。まことらしさの言の葉を。思や憎うはないかいな。せめて夢にも短夜に。寢られねば夢も見ず。醉ふて亂れてまぎらす酒の。うつゝないぞや明の鐘。

女三の宮

花の盛は七重八重。十二一重の移り香を。朧夜月の薄化粧。優姿しや緋の袴。きたあしどりはしやなら〳〵と。野邊の春風そよ吹けば。簾の隙より唐猫の。綱に引

神かけて。はげしかれとは祈らざりける。

ふたつもじ

戀はくせもの。戀は女子の癪の種。人の思ひを今更に。我身にうけて恥かしの。もりてよそにや顔もみぢ。深うなるほど初心らし。せめて軒洩る月だにも。姿の花の香をとめて可愛といふてくれはせず。泣いてあかしてくよ〳〵と。深山に咲きし花の實の。たれ音づれん涙川。いふにいはれぬ我心。願ふ逢瀬をまつにかはらじ。

花のえん

花のえん。結ぶの神のなかだちさん。頼みやんす必ずせめて。一夜はきても見よかしな。無理なことゝは思へどほんに。わらはしやんすがみな道理じや。道理のないはわし獨。かわいといふて暮の鐘。つく〳〵ものを思ひ顔。筆と墨とに涙を添へて。まことあかせどそれとは讀まぬ。かはい〳〵もひと盛り。

疊算

うきふしの。中にまことの心ならぬ。えにし一夜は夏の夜の。夢ばかりなる仇枕。寝がへりに聞く時鳥。つい時鳥互の胸の有明は。末の世とても深草の。露虫の音に

降り積る。あはれ櫻の冬木立。いとし柳の葉も散りて。雪のけはいの白妙も。妻とはいはじ亂れ髪。枕にひゞく霰の音も。もしやといつそせきかねて。落つる涙のつらゝより。いとゞ戀しき胸の柵。

かゞみ山

忍ぶ涙の淵も瀨も。あすはなき名を白紙に。硯の海のそこはかと。書きおく筆のいのちげも。露と消えゆく憂き思ひ。袖に包みしかたみわけ。數も涙の玉櫛笥。心も曇る鏡山。うつる月影夜半の鐘。浮世の緣も薄墨と。なきながぶみの返すがき。とゞめかねたるそら結び。

袖の海

あひそめし。枕の塵のいつしかに。積りて高き戀の山。露の情のたゝまりて。今は乾かぬ袖の海。深いと人の見る目さへ。我からすまぬ物思ひ。語りあかしのかたならば。ぐちをも聞いてくれよかし。しばし心の忘れぐさ。あふてふ岸は住吉の。松はふだんのことなれど。わけて逢ねばならぬ夜と。神にあこぎの願ひごと。たび重なれば岩かどに。せかれてたへん流れの浮身。花の盛を勤でくらし。末のおちばを誰が宿へ。廣い世界にぬしならで。外にあらしの音信さへも。人を初瀬の

オヽつめた雪のわしたの別れ酒。ほのめく顔のてりそふは。日の出一流。振れやれ〳〵。ふつてふりだす初時雨。意氣地に濡れし朝歸り。まだわるじやれの。びんとしてびんと揉鬚くわんくはつ姿。さすがおいえのしくはしやう。ゆるすてがしの水仙花一もとならぬ二葉ふり。何れ劣らぬ風俗は。いくよなす〳〵名を橘の。花も實もある常磐木や。かはらぬことはいつもの戀ことば。それを便りに取る筆の。深い淺いは墨色に。問うて見や。それがうそなら假名で書いて見しよか。ふたつもじ。牛の角文字。すぐなもじ。ゆがみ文字とは君知らずや。なん〳〵情の仇枕。エヽ何んぞいな。憎らしとびんとすねられ。手もちぶさたにくゆらする。煙草はうきを忘草。口說じかけでまことの中よ。こち寄らんせお手枕。ふたりぬる夜の色くらべ。くらべこしとは井筒の女。をさなだちから見えつ見られつ。心知れずは簪の。からまさしかれ。それさこれさなるかならぬか。言うて見さんせ問はしやんせ。浮世は色の盛さん中。花の顔見せ西も東も。みんな見にきた老若男女。えいとう〳〵おせ〳〵。やつさ〳〵。櫓太皷の音はひさしき。

鷺むすめ

妄執の雲晴れやらぬ。朧夜の。戀に迷ひし我心。忍ぶ山。口說の種の戀風が。吹けど

あこがれて。いひたき心數々の。胸に迫るをいひのこす。めいきくゆらすそのふしに。忘れぬ君をたゝみざん。

嫩丹前

おさきたう〱のはなやり。臺笠立笠。對の挾箱見事にさ。振り込み〱よいやさ。ありやんりやゝ〱。よいゝ〱〱〱顔見せ。ませた奴のいちやうに。こんのだいなしねぢからげ。きせうでふれさ〱。朝の出がけにや十六羅漢や。二十四孝はさかしほ〱。けもないゝ〱。冷酒燗酒きらひはござらぬ。なんでもせいせい。よいゝ〱〱〱〱。ひつかけ三杯はろゑうた。あぶない。がてんじや。おふない。がてんじや。まかせておけろの。やれ〱さて〱。さつても揃ふた花の顔見せ。陽春の慶賀は空にたなびき。青楊の色青々と。海原のその島臺は何々ぞ。蓬萊ほうじやうえいじうの。しまにたとへ花のかは。かわゆらしさよ當世に。錦色どるうちかけの。それにはわらぬ長羽織。男とも見え。又女子とも三重の帶。しやんとさいたる大小に。戀にははまるふちがしら。人のめぬきを忍びあふ。苦界の中のまぶぐるひ。うそでも眞實川竹の。流れの里にきのふまで。もつたいつけて三味線に。ついのせられし二上りに。のぼりつめたる。戀の山路も踏み分けて。

喚大叫喚修羅の太鼓はひまもなく。獄卒四方にむらがりて。鐵杖振り上げ黒鐵の牙かみならしぱつ立て〳〵。二六時中がその間。くるりくるり。おひめぐり〳〵。つひに此身はひし〳〵〳〵。あはれみ給へ我うきみ。語るも涙なりけらし。

輿作

旅人をとゞむるも關身を忍ぶ。人目の關や戀のせき。關の小萬もその昔いろはといひし舞扇さす手引手に。招くおじやれのうき勤。跡を慕ひて都より。はるばるきぬる故郷の。松は見知りし藤波や。ひらりぼうしに染ゆかた。關路はあとに有明の月毛の駒を道しるべ。じやんとのつたる横田むら。親里さして行く道の。同じ思ひは後や先。道におくれて道芝の。させもがつゆを染手綱刀にかはる竹の鞭。不思儀の緣に繋がれし。戀の重荷をうちのせて輿作〳〵と招かれて。泊りなら泊らんせ。京へ通しか好いのを乗せた。あやかりものと夕時雨。千両取るとも馬追いやよ。寒の十二月も日の六月も。駒の手綱で日を暮す。オヽしよんがへ。昔語となりふりも。さつてもこちのしなものゝ。いだきおろせば褄からげ。道はか行かぬ女旅坂は照る〳〵鈴鹿は曇る。すゞかも我も曇る身を。晴らす持戒は觀世音。山より山に行く道は。えいさつさ〳〵。箱根八里は馬でも越すが。越すに

も笠に雪もつて。積る思ひは淡雪の。消えてはかなき戀路とや。思ひ重なる胸の闇。せめてあはれと夕暮に。ちら〳〵雪に濡鷺の。しよんぼりとかわゆらし。迷ふ心のほそながれ。ちよろ〳〵水の一筋に。恨みの外は白鷺の。水に馴れたる足どりも。濡れて雫と消ゆるもの。我は涙に乾く間も。袖乾しあへぬ月影に。忍ぶ其夜の噺をすてゝ。緣を結ぶの神さんに。取りわげられし嬉しさも。殘る色香の耻かしや。須磨の浦邊で汐汲むよりも。君の心は取りにくい。さりとは實にまことゝ思はんせ。繻子の袴のひだ取るよりも。ぬしの心が取りにくい。さりとは實にまことゝ思はんせ。しやほんにへ。白鷺の羽風ゆきのちりて。花の散りしく景色と見れど。あたらながめの雪ぞ散りなん。雪ぞ散りなん憎からぬ。戀に心もうつろひし。花の吹雪の散りかゝり。はらふもをしき袖がさや。傘をや傘をさすならば。てん〳〵〳〵日照傘。それへ〳〵さしかけて。いざさらば。花見にごんせ吉野山。それへ〳〵。匂ひ櫻の花笠。緣と月日の。めぐりくる〳〵車笠。それ〳〵〳〵。そふじやへ〳〵。それが浮名のはしとなる。添ふも添はれずあまつさへ。邪見の刄にさき立ちて。此世からさへ劍の山。一樹の内におそろしや。地獄の有様こと〴〵く。罪をたゞして閻王の。鐵杖まさにあり〳〵と。等活畜生衆生地獄。あるひは叫

の丸素袍の袖を掻きなで丶。留めるは鬼か小林の。朝比奈ならぬ優姿、女のよれる黒髪に。引かれてとまる心なら。やらじと引けば時致は。日頃の本望父の讎妨なすなと突き飛ばし。廓のじやれとは違ふぞよ。はなせとめた。とめてよいのは朝の雪。雨の降るのに往なうとは。そりややぼじやぞへ。待たしやんせ。起請誓紙はうそかいなうそにもじやれにもまことにも。よそに色増す花ながめ。そしてだましてそれそれ〳〵其顔で。こはいてといふて腹立てさんす。そちらむいてゐさんしても顔見にやならぬ。末を頼みの通ふかみ。かよわき少將朝比奈が。力は素袍の袖添へて。互に劣らぬありさまは。貴賤上下おしなべて。感せぬものこそなかりける。

娘七草

神と君との道すぐに。〳〵。治まる國ぞ久しき。若菜摘むとて袖引き連れて。思ふ友どちよい中〳〵。中のよいのをわきから見れば。どれが姉やら妹やら。よく似たなア。よく似たさつてもよく似た。しやな〳〵行けば振もよし。今くるよねに見しよずもの。〳〵。袖引き引くな若き人。あら大膽な人じやえ。春は梢も一樣に。梅が花咲く殿づくり。めざす敵は。かたきとは。いゝやかたへに鶯の。ホヽヽほう

越されぬ大井川。ナアヨ。伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ尾張名古屋はしん城でもつ。ナアヨ。上り下りに手を引き合ふて。わの人の。これの〳〵。しやんご〳〵。鈴の音。はな馬揃ふてのんはのん。いよ〳〵浮かれて〳〵三度笠。旅のうさをわすれ草。名は伊達人の輿作とて。人に知られし戀男。何んぼお前がそふいはんしても。男の心と秋の空。うそをまことにいふておき。お前ゆゑならどふなりと。命は惜しまぬ心から。此頃絶えて文もこぬ。又うるさしの仇心。わしが思ふ露ほども。届かぬお前のつれなさとつびんとすねたるもどこやらが互に思ふ戀中も。だてもはすはに振もよし。こちのおもはく。近のでげんと書いてきたきたのんし〳〵。逢ふて嬉しき其人なれど。あだし此身もまゝにはならぬ。さりとは戀の上風舟でおせ〳〵。よふかよかよかのんし〳〵。唄ふ小歌もおもしろや。つい聞きすてゝ行く道も。いちむら里村はやすぎて。日影も西に傾けば。吉原雀さながらに。留むる袖を振り去つて。急ぐ足さへ砂子道。すぐには行かぬ駒の足。横田川に。しばしとてこそやすらひぬ。

菊壽の草摺

いきほひ和朝に名も高き。曾我の五郎時致が。逆澤瀉の鎧てふ。裳裾にすがる鶴

きは翁おきなぐさ。菊のはもゝの神ありて。霜にもまけぬ花なれや。花と名ざすは櫻といへど。冬の花には何々ぞ。水仙山茶花枇杷の花。春まちかねて鶯の。かたことながら此尉が。おさへた〳〵此箱を。外へはやらじと遣水の。音もとふたり絶えずとふたり。絶えずにくるのが誠の心。てつちに如才はなけれども。そつちの心にいちもつが。ありそうな口說するのがやぼらしい。聞かずにめでたふ元の座へ。おなほり候へ。わゝらやうがましや。てなたてそ千秋萬歳萬々歳と。唄ひはやして舞ひをさむ。

布袋

諺にいふもろこしの。櫻とへば海棠や。其花の香は和國まで。隱れなむをみさんざん寺。布袋おしやうの朝勤め木魚の音も世に高き山々越えて谷水の。きよくもすめる法の道。佛の敎へ西のそら。山時鳥雲隱れ。さとればもとのつちくれや。土に巢をくふつばくらの。口をひろげて寶を見せん。とらのナア〳〵。とうざんとうざん。とうすいとうりう。とうがのとうけん。とうみんがたうかはの。さかりを見んとて。くんじゆんすんへんするといな。〳〵。をさな踊りに浮れ〳〵て。にこ〳〵。子供こい〳〵弄びやろぞ。引けや〳〵此綱。一に俵やがら〳〵小槌びん

ほけきやう〳〵と囀りても。ゑばみも知らぬくもけら〳〵。そらうそぶいて。飛びかゝつて。ハテ。氣をしづめてうちはやし。初若水の若菜の御祝儀。戀の假名文いつ書き習ひ。誓文命も。まゐらせ候べく。かしくの留袖問ふにやおちいで。語るにやおちる。さまは茨かわしやゆひかねて。そうてゐたさよいつとても。誓文命も。まゐらせそろべく。かしくと留袖問ふにやおちいで語るにおちる。さまはいばらかわしやゆひかねて。そうていたさよいつとても。睦ましと。君は知らずやみづがきの。久しき代々のためしには引くや。夜の鼓の拍子を揃へて。七草なづな。ごぎやうたびらこはとけのざ。鈴菜鈴しろ芹なづな。七草揃へて恵方へきつと直つて。じつたん〳〵。どんがらり〳〵。どん〳〵がら〳〵。どんがらがらがらがら。どんがらか。唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬさきに。怨敵退散國土安全。千秋樂々万歳〳〵。今を盛の心の花も。開くる〳〵うんなてん。天長地久も萬里が外も。うち治めたる今日の七艸。

劔ゑぼし。

思ふ心のあればこそ。あとの〳〵あとの太夫どのの。お顔の色がほに出でた。はに重ねて目出たふこそは。オイ候。今日の御祝儀を。舞ふておりそへ。寒梅の白

花の吾妻へ歸り咲き。花の顔見せ早咲の。梅のかほばせ。しんぞよいこの。〱かほばせ花の姿も。錦に飾る。色の姿のうしろ帶。しやんと小褄をとり〴〵に。きちがひよはうさいよ。〱と。わらをとまゝよ。大事の〱殿でへ。ぬふてふ袖の長羽織出立ばえよき大小も。さすが都の風俗に。靡かぬ戀もあだし野の。露も情もあるならば嬉しかろ〱ぞいな。わしにばかりに思はせて。思はぬ君が憎らしや。憎いほどなほ思ひぞますかゞみ。曇りがちなる時雨どき。ふりだせ〱奴の〱玄關まへ。宿入けばさき合點じや〱。ふりこめ〱よいやさ。花も吉野の川千鳥。心いそ〱磯千鳥。裾は村ちどりを金糸で縫はせ。伊達な浦ちどり。戀と情をちんどうがけに。かけてめぐり逢はふ〱。首尾のなる夜は粟島ちどり。烏はものかは別れ朝千鳥。戀はさま〴〵。逢ふ戀待つ戀忍ぶ戀でもそふじやいな。さまを待つ夜は。獨恨みの疊算。すぎし月見のいざよひは。おまへとわたし。が口説したこと思ひ出す。中を結びし酒ごとも。その新枕思ひ出す。縁のあるのがまことなれ。大入〱。朝はとふから〱。入り來る〱ねずみ木戸。押しあひ〱老若男女も。花を飾りて棧敷まで。やぐら太鼓の音に寄せくる。

法樂舞

と撥鯛釣竿つけて。渡す浮橋二神の。中にお顔も西の宮。惠比壽のわざはわだつみの。岩に腰うちかけだいの。ひれますいます大黒天の。うつらせ給ふ其家に憂のうの字わらがねの。槌に寶を米藏や。まつ大黒はみぐるしい。そりやなせじや。ハテくそいぞよ。聞いて見や。せいが低うて色黒く。しんき笑止なりじやへ。それなら小槌もいふて見よ。さあいふてみや。まづ惠比壽はぶせうもの。そりやなせじや。そなたもくそい。聞いてみや。波に苔むす岩に乘り。あのなまぐさい魚だいて、ほんにいやゝの形じやへ。なさな遊びもしほらしや。水晶のな〳〵。珠數のいとまは子供にうかれ。ふくら雀のはつた〳〵腹がでつかい。山坂たいぎ股がすれたで。歩きにくうでざる。歩きおふせて一息つけば。口が乾いてならぬへ。びつくりしよつくり。しんきな娑婆世界。さんざそれ〳〵〳〵。打つや太鼓のてんてんつく〳〵」どんがらり拍子どり。きけば音もよや。たん太鼓のおもしろや。朝とく起きて。おきてなむをみ。〳〵どうふ。〳〵。さとりひらいた。潔よやつぱ小太鼓笛竹の。ひいやひ。おさへ〳〵喜びゑがはや。富貴自在の福和尚。そくさい延命子寶つきせぬ御代こそにぎはしき。

枕丹前

代の。龜はみなかみ清むなる。鶴の羽重ね千秋の。〳〵えだをならさぬ御代なれや。萬歳樂とぞ舞ひをさむ。

水仙丹前

水仙の。花の姿や若衆ぶり。女子なりけり室の梅。〳〵。あらおもしろの景色かな。山も色めく花紅葉。ちら〳〵袖に。袖にちら〳〵散る紅葉情もあらばちよと一筆。書きもみぢ。まゐらせ候べく候かしく。もしやお心。こゝろ。心かはらばわしや薄紅葉。げに戀はくせもの。男出立のいたづらふうに。しやん〳〵〳〵。しやんどこぎりめに帶ひきしめて。どゝんとたつこい〳〵。どゝんど〳〵殿さまでとしよ。長い刀に長脇差を。予十文字にぼんしやりどさしてしこなし里通ひ。しぼらしや君に逢ひたくは毎日そふして通はんせ。さりとはエゝどうじやいな。忘るゝひまはないわいな。ふれ〳〵ふりこめさふりこめさ。お先を揃へて。これはとさ。おりやんりや。こりやんりやゝ。いさんでさ。進んでさ行列揃へてぼつたてろ。ゆくもやれきて通ふも戀ぶの亂れ。風が吹くやら戀風がつれてさつさ。おちよものさつさ。我里の。みなとながめんえいやらさらさ〳〵。どゝんとどんと。此身をなげかけゆりかけ。しどゝんとどん〳〵。しどゝんしだれ柳の。ぼつそりすう

やまとうた。やはらぐ風俗いつしかに。烏帽子狩衣きそはじめ。かざす袂の舞の曲。錦の袖や薫るらん。花のかんばせ。しほらしく出で立ちて。橋がゝりの欄干を。しと〳〵あゆむ柳腰。げに栴檀は二葉より。すぐなる御代ぞ久しけれ。おらおもしろの春景色。ながめはつきぬ君が代の。幾千代かけて。色はかはらじ松の葉の。末も久しきためしかな。たゞしに今は有明の。夢ばかりなる手枕に。君と我とが浮名や立たん。あゝしんきさりとは。今宵忍ぶと約束あれば。更けて妻戸の音信は。たそや誰ぞとせかれてもぼんに嬉しい浮世の中よ。ふたりぬる夜は戀の花。散らすな嵐。花のあたりをよきて吹け。開くや梅の花扇。ちよつとみあふぎ。ちらり〳〵散りかゝる。花の吹雪は憎らしや。はらふ扇のひらり〳〵〳〵。くる〳〵〳〵〳〵。扇車のしなよくまはれ。水車淀の川瀬の。水も濁らぬ君が代を。祝ひかなづる舞扇魚と水とは中よいはずよ。それなぜに。いつも離れぬ中じやもの。そんれもまことにそふじやへ。花と嵐はサンサ思はぬ中よ。それなぜに。いつも梢に障るもの。そんれもまことにそふじやへ。しほらしや。傘をさすなら春日山。これも神の誓とて。いとし殿御と。相合傘のしつぽりと。雨に濡りよなら日和に開く。それへ〳〵。げにもそふよの。やよげにもそふよの。げにまことと。岩に遊ぶや萬

瀨。濡れにぞ濡れし。濡るゝ小女郎小娘。伊達物とほめては。それ〳〵〳〵袖を引く。秋は野山の色づく紅葉。枝にさりとは。鹿も焦れて妻こふる。さりとは〳〵はんにへ。思ひ切るせときらぬせど。そこのつめたい雪の夜や。さりとは〳〵ほんにへ。さはなぐるまのよるべなきな。ふ〳〵布は色ますさらしのや。さらしてふりを見せまゐらせふ。〳〵。さつさ車の輪がきれて。何れ思ひはどなたへも。〳〵。さらす細布手にくる〳〵と。〳〵。いざやかへらん賤が庵へ。

相生獅子

花飛び蝶驚けども人知らず。我も迷ふやさま〴〵の。四季折々の戯れは。そのものごとにあはれなり。蝶や胡蝶の。せめてしばしは手にとまれ。見かへれば。花に紛れて。見えつ隱れつ色々の。姿やさしき夏木立。心づくしのな此年月をへ。いつか思ひの晴るゝやら。心ひとつにおさまるやら。よしや世の中。花に戲れ枝に臥し。雄獅子・雌獅子・の。あなたへひらりこなたへひらり〳〵。ひらり〳〵〳〵と。舞ひ遊ぶ。八しき九しきの。奮迅の亂拍子は。それで我々も。心亂れて足もたまらず。瀧の音の。下は泥梨の白波の。虛空を渡るが如くなり。夏の夕暮に山々を見渡せば。折しも松風に。靑葉すゞしく吹き誘ふ。ばら〳〵ばつと。鳥の群れ居るは。時

わり黒繻子の帶。〳〵。きりゝとしやんと。〳〵。結びしめたよやれさてなふ。花は九重。戀はさま〴〵あるが中にさわけて戀路は。逢ふ戀まつ戀忍ぶ戀。我戀は。必ず今宵はがつてんか。がつてん〳〵そなたもがつてん。我等もがつてん。あひづの手管はのみこんだ。えゝえゝいやつとも。手を拍ちいさみ。いさんでくるは大よせ。

さらし三番叟

君が代は。千代を重ねし岸の松。梢〳〵にすごもりて。鶴の羽をのすそよや。さんざゝなるは瀧の水。れい〳〵さら〳〵。あざやかに浮んだりや。天が下。戀と情は裏表。惚れて見さんせ。いとしけれともかとござる。よしやれ浮名の立田川。流れもあへぬ紅葉葉は。たへず紅葉たへずとふたり。ありうとふあり在原の。業平さんにも負きやせまい。アゝ負きやせまい。狩衣の姿繪は。そらごとよのふいたづらや。なるとならぬは袖ふる手の內。さふじやへ。しめてしやんこへ。ゆるめてにこ〳〵。逢ふ夜逢はぬ夜ちはやふる。神の昔は二柱。天の岩戸を。開くや梅の見事へ。花の姿のいとしらし。春は萬代。花のさん盛りは吉野山。お室の御所のよいさんさくら。くんじゆの中を北山。稻荷山の初午。ごんせ〳〵夕涼み。加茂川の川の

葉もともに下紅葉。夜の間の露やそめぬらん。おもしろや頃は長月末つかた。四方の梢もいろ〳〵に。錦色どる山々は。花の吹雪のそれならで。五色の雪と。降る紅葉。分けつゝ行く。や丈夫の。やたけ心の梓弓。ひくやしるべの駒の足なみ。谷川の流れ絶えせぬ紅葉葉を。渡らぬ錦中絶えん。時雨をいそぐ紅葉狩。見捨てたまふかつれなやと。袂に縋りとゞむれば。さすが岩木にあらざれば。心弱くも引き留められて。所は山路の菊の酒。汲むや流れの浮身にも。いとし可愛のよい殿御ぶり。ほんにおまへをたがだいて。ぬるでの紅葉色見草。よその戀路の妬ましや。そもやまことが露ほどあらば。二世も三世も神かけて。忘るゝひまはないわいな深いえにしも月に雲。花に嵐のことひすなる。月の盃さす袖も。雪をめぐらす舞の曲。秋の木の葉の色に出し。紅葉踏む鹿憎いといへど。戀の文書く筆となる。可愛らしいじやないかいな。秋の千草の色に出し。菊と薄はよい中なれど。露が知らせて濡れを知る。可愛らしいじやないかいな。アヽ美まし。今までこゝに色ある女。たちまち化生の形をあらはし。紅葉の梢も火焔となつて。枯木木の葉もさら〳〵〳〵。めざましかりけるしだいなり。

同

もこそあれ。ひとしほさてもおもしろや。又は時鳥。垣根に結ぶ卯の花や。牡丹芍藥あつちりなこつちりな。あちりこちりすぢりもぢりてえりくりえんじよの奥山の蔭に。戀といふものは誰も知る物を。むでやの何ものか。月も傾くほの〲鐘の。つらや恨めし別れやまさる。涙玉ちる朝ぼらけ。人目忍べば恨みはせまじ。ために沈みし戀の淵。心がらなる身のうさを。やんれそれは〱へ。まことうやつらや。〱思ひ廻せば昔なり。牡丹に戯むれ獅子の曲。げに石橋の有様は。笙歌の花ふり。笙笛やくきんくで夕日の雲に聞ゆべき。もくせんの奇特あらたなりしばらく待たせ給へや。影向の時節も。今いくほどによもすぎじ。しヽとらでんの舞樂のみぎん。牡丹の花ぶさ匂ひ滿ち〱。大巾利巾のしヽがしら。うてやはやせやぼたんぼう。〱。くわうきんのずいあらはれて。花に戯れ枝に臥しまろびげにも上なき獅子王の勢ひ。靡かぬ草木もなき時なれや。萬歳千秋と舞ひをさめ。〱。獅子の座にこそなほりける。

紅葉狩

物思ふ。たちまふべくもあらぬ身の。袖うちふりし心まで。うつろふ秋の色見えて。此身を何と夕まぐれ。しぐるヽ空をながめつヽ。浮かれ出でたる道の邊の。草

らぬ戀中の。おぼつかなくも肱枕。大じん少しも騒ぎたまはず。てんと八幡すけてたまへと。心に念じ。盃持つてまちかけたまへば。つい酔はせんと濡れてかゝるをすれ違ひ抱き付いて。ころり／＼。やころやころ／＼と。此くせつも賑やかに。門には犬の戀いさかひ。家根には猫の戀いさかひ。盃も正月もそれ／＼／＼。はやきぬ／＼の。鐘も太鼓も寺々の。たちまち別れのえもん坂。土手の秋草見ゆる東雲。

今様春駒

目出度や／＼。春の初の春駒なんぞは。夢に見てさへよいとや申す。花のや盛は色競べ。しなよきふりのおゝんを／＼。太鼓の拍子で。さあうちつれひきつれて。勇む笑顔やなりよくふりよし。せめて一夜は靡けと申す。おゝ／＼そんれよそれよさ。筆にばかりは文とは讀まぬ。言葉の返事をよいとや申す。おゝ／＼さりとはよいでさ。九十九よくよくどかばおちよか。情ないぞやあだ胴慾や。どふぞしばしは靡かんせ。眞實誓文でのでござんすか。おゝうれしい。せんどだまされた人の心と。川の瀬は定めなや。ゆきつもどりつ。花の木陰に寄り來くは。枝にうつりし鶯の。囀る聲のしほらしや。戯れ遊ぶその風情。あなたへ誘ひてなたへ連れ

あひは近ふて逢はれもせぬは。みんな男のあだ心〱せつするのもよい中としの。袖と袂をこち合せ。床より下りて夜着をぬぎ〱。ついの素足のナ。ふり出せ〱。おめずおくせぬ八文字。座敷隔てゝ待ち合せ。玉の盃そこひなき。心遣ひぞたぐひなや。よしや思へばそれとても。前世の契淺からじ。深き情の色見えて。かゝる折しも道の邊の。草葉の露のかごとをも。かけてぞ纒む行末を。契るもはかなうちつけに。人の心も白雲の。立ちわづらへるけしきかな。どふもいはれぬ夕まぐれ。ほめられて。何の益なき娑婆世界。すいもぶすいもうちこんで。飲めや唄へや。一寸先は闇の夜。吉原色の伊達競べ。名よせて遊べエ。戀の山城山路の露に。濡れてつまぎくきよはし渡る。我かよひぢを松岡と。ヨイナ誓文くづされしんぞ。ていか勝山じつかいな。えいとう〱〱。そんれはえいとうな。それえいとうな。色は紅梅小袖に包む。心都路藤紫の。また小紫あげまきと。ヨイヤウ誓文くづされしんぞ。きてうせいざんじつかいな。えいとう〱〱。そんれはえい〱。それえいとうな。それで戯れ遊べエ。花の盛はナ吉野へござんせ。我が名に立つ高尾の紅葉よの。そめて錦の褥。かつら男の月待つならば。いつかあをばと約束月夜に。逢ふて顏見りや紅葉しやうたいないぞ。そんれは〱しぞもなや。心も知

の玉柳。玉の笛の音聲すみて。菩薩も爰に影向の。天の皷か。打つなり〱おもしろや。よるべ定めぬ波枕。戀しき人の閨を出ださん。しらべも夢かまぼろしと。今は太皷のうつゝなや。うつや太皷の音もすみて。さつさめぐれや二つ太皷の音もよし。さつさどん〱と〱と〱つく〱。てんつくとんつく。どんがらが〱。これはさておき。たつた川にはちんちり紅葉を流す。我は君ゆゑナア。浮名を流す。のほんほ。さとなどさよいよへ。さあ〱。須磨や明石のまんまる月の名所。松は唐崎ナア霞は外山。のほんほ。さとなどさよいよへ。さあ〱。忍ぶ夜の〱。さまがつてかと走り出て見れば。夜半吹く風に。つん〱妻戸をほと〱きり〱〱〱。やつきり〱。峯は嵐の音ばかり。君と我とが。中は結ぶの神さましだい。鳥はものかはつらいは鐘よの。獨待つ夜はにくてらし。かはるまいとの。いふた言葉がうそかいな。そんそれもそふだかへ。浮名はまゝよ。結ぶの神さまア、しだい。鳥はものかはつらいは鐘よの。獨待つ夜はにくてらし。かはるまいとの。いふた言葉がうそかいな。そんれもそふだかへ。鐘を恨むる罪深し。げに有難き法の場。笙笛くきんくご。夕日の雲に輝きて。菩薩も爰に來迎のよそほひは。目前の奇特たへなりや。さるほどに〱寺々の鐘。月おち鳥鳴いて。霜雪天に滿汐は

て。峯の嵐のさらさらさつと。通ひ逢ふ夜は厭はで雨の。袖うち拂ひ裾ふきあげの。空色もほの〴〵と。明け行く春の山見えて。千代の梢もおもしろや。

さなきだ

つくりし罪も消えぬべし。鐘の供養にまゐらん〳〵。さなきだに。おもきがうへの小夜衣。我つまならぬ仇人に。迷ふ心の戀の淵。沈みもやらぬ物思ふ。人目を忍ぶ染衣の。戀し床しき念力の。つくりし罪もせめてさて。戀慕の闇の晴れやらぬ。月は程なく入汐の〳〵。煙滿ちくる小松原。春の日長くまだ暮れぬ。日高の寺にぞまゐりける。嬉しやさらば舞はんとて。烏帽子をしばし假に着て。扇おつとりいろ〳〵の。既に拍子を進めけり。さても名高き白拍子。天のうすめの命より。情色ねに引く糸竹の。笹の一夜の契もあろに。かわい〳〵も花一盛つらい心を露ほども知らいで。日ならば十三夜。花のえんとて思ひそめ。戀の手習つい見ならひて。深きとのごに命もほんに。三とせ四とせの思ひを捨てゝ。物もいはずにいや〳〵と。是非にいやならのきもせうぞ。もとのしらちにしてもどしや。昔思へは今更に。よしなの恨み。恨みかこつも恥かしや。花の外には松ばかり。暮れ初めて鞨鼓響くらん。彌生の頃や春風の。柳の糸のたよ〳〵と。しだれ柳か。露の添寝

の可愛らし。それ〳〵。それがまことの心なら。きぬ〴〵うれしぬくめどり。うちはやす神樂月かや。いさぎよく。中よいどしの振もよし。開くや室の花あふぎ。吾妻遊びのとり〴〵に。かざす袂のいとしらし。それ〳〵。それがまことの姿よや。見事にはでな袖模樣。いづれ雪かや霜の花。妹背わりなき戀中を。神に祈りを懸烏帽子。紐と緣との結び目堅く末かけて。歌うつ舞うつ戯むれも。治まる御代の時つかせ。わひに相生の夫婦松。祝ひかなでゝ舞ひをさむ。

介六

そのわかつきの一聲は。花川戸よりなきそめて土手の八聲の江戸町の。障子明くれば時鳥。ほどときすぎて暮六つの。かねて見馴れし風俗は。ひとつ印籠ひとつまへ。獨わるきの一流は。すいた姿のおとしざし。籬にもれし菅搔や。れんぼてくうの尺八に。浮かれくるわの戯むれは。夏きにけらし音もさえて。ういもついもこの里馴れて〳〵。逢ふを賴みに通ひくる。やんれ通ひくる。土手通ひくる。逢ふを賴みに通ひくる。れんぼ〳〵〳〵れんぼへ。心盡しを情あれかし。此鉢卷は過ぎし頃。ゆかりの色の紫や。初もとゆひのまきぞめや。とりなり床し君床し。しんぞ命を總角の。これ介六がまへわたる。風情なりけるしだいなり。

ぞなく此山寺の。江村の漁火うれひに對して人々ねむれば。よきひまぞと。立ちまふやうにねらひよつて。撞かんとせしが。思へば此鐘恨めしやとて。龍頭に手をかけ飛ぶよと見えしが。ひきかづいてぞ失せにけり。

かけゑぼし

寒紅梅の早さきがけに。負けじ劣らじ。水仙の。春待ちかねて鳴く鶯の。負けじ劣らじ枇杷の花錦いろどる戀盛。春の色は東よりきたるといへど。南枝初めて花の顏。見せつ見られつ此日頃。戀しがらせた恨みがあれど。いはでの紅葉初時雨。定めなきかな浮雲の。月の。にはひも影寒く。鴛鴦の浮寢の枕より。袖の氷の解けやらん。及ばぬ戀と知りながら。しかたで知らせ手をとりて。習ひ覺えし針仕事。手をつく〴〵と思ふほど。情ないぞや恨めしと。顏に照葉の蔦かづら。はひまとはれし風情なり。ほの〴〵あくる。翁烏帽子のもつたいらしさは。常に見てさへよいとや申す。〳〵大じん先へ立烏帽子。金風折をまきちらし。やりて末社は嬉しと申す。〳〵。靜烏帽子のとこのうち。更に口說は梨子打烏帽子。明を知らする村烏。廊下の音はとん〳〵〳〵。とんと階子を折烏帽子。出雲では神有月かや緣定め。むつまし中の戀咄。比翼の翅妹脊ぞり。思ひのたけを口うつし。あうむの鳥

かいの待たしやんせ。われは汀の初霜に。操あらはす松じやもの。しやはんになんじやいな。待たばこんとの言の葉を。こなたは忘れじ松の風。雪を見よなら須磨の浦明石。かならずまつには月のそなれ舟。すいといふのはそふしたものだ。かうしたものぞ。そてからふつゝりいたひ。眞實おゝうれし。それへ〳〵。それ〳〵。ほんかいな。千代も替らぬ夫定め。それはいなばの遠山松よ。これは美し乙女子の。昔を今に舞の曲。よその人目を須磨のせき。松風ばかりや殘るらん。松風ばかりや殘るらん。

男道成寺

亂れ心やくるふらん。花の姿の小櫻に。かをり床しき花盛。梢々を手折らんとは。恨めしの人心。にくや嵐もよぎて吹け。花のあたりをよぎて吹け。更け行く鐘をつく〳〵と。思ひ廻せば身のつらさ。人目を忍ぶ關の戸の。明けていはれぬ我が心古へに。替らぬ君が面影を。見るたび〳〵にかわゆさの。思ひはいとゞますかゞみ。曇らぬ心有明の。つれなく見えし別れより。忘るゝひまはないわいな。我が戀路ははかなのかみよ。袖もないことさあ言ひかはし。ほんに憎いじやないかいな。人の戀なれ。おいて袂の花の露。お江戸へ壹番。ふつて見事な十文字。鎗はお

舞扇

月を見ばやといでその頃は。秋の最中の盛りみゆ黄菊さへ。夜は白菊の白拍子。口笛吹いて男舞。女の身にしさも憎からぬ。匂ひ扇やさし扇。返すぐも舞の袖。げにおもしろや。春の花見にをしめども。入相の鐘に花や散るらん。野路も山路も秋の入相に。散らぬ紅葉もかわゆらし。松虫鈴虫のねいろもよしや。いさむころぐ轡虫。里がよひすいじやと。人さんがたよいと。みなおしやんすけれど。やぼなわたしはいつまでも。殿ご一人をちから草。朝な夕なに祈る心は。正しきになれや。御祝儀祝ふて喜びの。日にますぐの繁昌も。御贔負惠みの有難さ。かな日天さまかけて。お猫なりとも抱きはせぬ。君の齢の幾万年も。かはらぬぐ御代ふ心の舞扇。

汐衣

なつかしや。松に吹きくる風につれ。かをるとめきはその人の。かたみの烏帽子かりごろも是を見るたびに。いやましの思草。葉末に結ぶ露の間も。忘られはてそあおきなや。あれぐむかふに十返の。花も及ばぬ立姿。汐馴衣。しやりなりと小褄をかいとつて。ゆかふやれぐ。松に時雨の浮世にも。思ひに沈む戀の淵。ゆこ

さま。はてそふじやかへ。さいな〳〵。身にも思へば有明の月。明けていはれぬ戀。なんとせうがへ。心盡しの身ぞつらや。草葉にすだく虫の聲。松虫鈴虫我からろぎの愛とふたりがもらさぬ中は。つゞりさせてふ機織虫よ。糸繰り返し。結ぶえにしもわい着心の。切るに切られぬ輪廻のきづな。我古郷へ伴はん。なほも自在の姿となつて。爰に顯はれかしこに立ちて。天にあがらば月宮殿まで。おつかけおつつめ地にまた入らば。金輪奈落の底までも。思ひつめては中々に。恨みつ泣いつ亂菊の。花の姿も耻かしや。

新松風

あはれ古へを。思ひ出づればなつかしや。行平の中納言。三とせは爰に須磨の浦。都へのぼりたまひしが。此程のかたみとて。おん立烏帽子狩衣を。のこしおきたまひしに。これを見るたびに。いやましの思草。葉末に結ぶ露の間も。忘られればこそあぢきなや。かたみこそ。今はあだなれこれなくは。忘るゝひまも有りなんと。よみしもことわりや。なほ思ひこそは。深かりし亂れ髮。亂れ心やくるふらん。我が姿は淺ましや。かみはおどろをいたゞきて。日影をまちし夕顔の。蔓にはなれし破車。よしや恨みもいとしさの。つきそひまはる面影の。にくかれとは神かけ

家の。それおてんとてんの投鞘。又とあるまい。世界いつぱい大津鎗。石突つかんでしつかりと。えい〱〱このよいやさ。えい〱〱このよいやさ。晩にや必ず忍ぶのみだれ。更けて妻戸を。はと〱叩くは合圖の。てくだは管鎗まくらやり。千代も八千代も替らぬ。〱國の大鳥毛。あたりに目を付け見廻して。かねのありしを幸に。ひきかづいでぞ入りにけり〱。

さごろも

花の間を。千歳の里と隱れすむ。忍ぶにたへぬ亂れ咲き。菊の白露起臥の。あさげの風のそよ吹けば。尾花うなづく八重むぐら。茂れる宿のたましきの。草の枕や草莚。おきつまろびつ私語。芝蘭の友と睦しく。契るあかつき星合の。空も別れの。更くる夜ごとの鐘の聲。又は色よき籬の菊に。蝶も胡蝶も戯むれ遊ぶ。我もよねんのひとづれ。おりつあがりつひらり。おのが羽風のたをやか〱。花を土産に家櫻。野もはや暮れてひ櫻のかげ。夜更けて月も遲櫻。通ふ細道ア丶聲すごき犬櫻。ぞつとした。風に音せしつん〱妻戸。きり〱〱。ふたりが戀の山櫻。闇に逢をとは暗がりさますいさま。はてそふじやかへ。さいな〱。梅の花の香いくよかとめて。緣と月日を樂しみに。しやうがへ。わしがなかだち暗がりさますい

かゞみ。合鏡の比翼紋。玉簾の。內や床しき御所車。それへ〳〵。筆に思ひを文車。返事うつくし花車。くるり〳〵。くる〳〵〳〵花車。積る夜の。通車や雪車。それへ〳〵。忍ぶ車の音とわれ。あふぎ車や戀車。くるり〳〵。くる〳〵〳〵戀車。しはらしや。ふりこめふりこめ初雪の。中に見事な花の鎗振の袂に戀風が。よれつもつれつちら〳〵ちらと。さんさ時雨に濡れ〳〵初めて揃ふ鎗の手花の山。飾り立てたる伊達なとりなり。只いつまでも。此ぶたい。替らぬ花の顏見せや。とところ繁昌かはらざき賑ふ御代の里神樂。千秋萬歲萬々歲と。豐かにこそは舞ひをさむ。

色見草

一様に。みな色紅葉いとしらし雪の中より咲く梅の。枝をたをりて家土產に。とふで袂に。花折り添へておもしろや。いつも替らぬな。よい〳〵よい〳〵よいとの。此神垣に年ふりて。神の惠に。靡けや靡け柳腰。とんと此身は水仙の。花の姿もかんばしく。若紫や小紫。ゆかりもとめんしばし間も。かりに烏帽子をうちかづき。姿すいなり皆人心。いとも優しきうら紅葉。さきは一入あかねさす。もみいづるなる朝日影。扇取る手の要の契。さす手も引く手も。替らぬ中のながめよや。須磨と明石は。どれが月やら名所やら。どふやらかうやら。わきて色わからなく。ど

で。思はぬ夫をはなちやる。心の中こそはかなけれ。さはさりながら一念の。嗔恚となつて。思ひ知らずや思ひしれ。あら恨めしの心やな。今更何とのたまふとも。こなたは忘れじ松風の。〳〵。立ち別れいなばの山の峯におふる。松としきかばかへりこん。あら賴もしのおん歌や。それはいなばの山の松。これはなつかし君こゝに。須磨の浦わの松の行平。立ちかへりこば我も木蔭に。いざ立ち寄りてそなれ松の。懷かしや。松に吹きくる風も狂じて。須磨の浦浪どう〳〵。どつとはげしきよすがら。妄執の雲にまぎれて失せにけり。

花車

引けや引け〳〵。姿も霜の花車。しろくれなゐの染手綱。しやんと着なした戀風折の烏帽子狩衣男舞。けふ今樣の壽を。祝ひかなづる三扇。その舞扇手もたゆく。げに栴檀は二葉ぶり。冬のなかばに。山里を見渡せば。梢は霜か雪の花。冬至の梅の色さがり。かをり床しき花の袖。あなたへひらりこなたへひらり。櫻にまがふ雪景色。初戀の。人目恥かし花紅葉。忍の山の下紅葉。うすいはいやよ戀衣。結ぶえにしはかみさんの。おなかうどではないかいな。今宵逢ふとの合圖は何ぞ。妻戸叩かばたそともいはで。明けて。霜夜の睦言も。只心なき鳥鐘に。いとゞ思ひのます

〳〵。思ひ知らせんまちたまへと。いふ聲ばかりは有明の。月に殘りしよそはひは。おそろしゝともなか〳〵に。申すばかりはなかりける。

もんづくし

千代の春。花にうつろふてふ百千鳥。しはらしや。うち出で見れば白妙の。富士の高嶺の薄霞。裾野は露のひか〳〵と。朝日輝くおん威勢君をはじめ奉り。皐月下旬は我々も。はゞかりながら櫻鹿毛。陣屋〳〵に打つ幕も。染色々の紋盡し。くぎぬき松皮きむらとう。三蓋松に。しやんと手綱も繫ぎ馬。白一文字黑一文字。割菱輪違花靱。花の色香も名にしおふ。庵に帽額抱茗荷。抱澤瀉をはな。あゝ人が三鱗でも。まことは立烏帽子。その折烏帽子忍ぶ夜のではず矢筈にいやましは。月に星。笠をめしたか三本笠。さすて引く手に二つ引き。三瓶子四目結。おみの手やいたらがひ。淸き流れの水車。くる〳〵〳〵と。二巴や三巴。うつや太鼓の拍子とり〳〵。開く扇の舞鶴は。大いち大まん大吉日と。馬の乘初弓初。上覽ありておのおのも。譽を殘す富士のまきがり。

根原草摺

音に聞えし時致が。ひつさげたりし逆澤瀉に。取りつく素袍は鶴の丸。女ども又

れが月やら名所やら。どふやらかうやら。わきて色わかちなく。どれが月やら。名所やら。こちや〳〵。何のわしらが知ろぞいの。花と雪とは。どれが吉野のながめやら。どふやらかうやら。わきて色わかちなく。どれが吉野のながめやら。こちや〳〵。何のわしらが知ろぞいの。恥かしや。今を盛と花の顔見せ。

うはなり

今日は人の身あすは又。我身のうへと白菊の。露の浮世の戀無常。つら〳〵感ずる折からに。いとなまめいたる女房の。そのさま化しからぬ風情にて。妻戸のわきに彳みしは。いかなる人ぞと見てあれば。我は此世をさるかたさまが。浦山賤の折りて焚く。秋の紅葉々萩桔梗その女郎花數ふれば。年に一夜の天の川。逢ふ夜の數もちもとせの。楊貴妃の雙六も。こひめに色のつまべにも。君を慕ひて玉椿。反魂香に誘はれて。結ぶえにしの姿にも。させもが露を命にて。深き契に秋風は。いやよ逢瀬を松虫の。戀風と思はんせ。道理じやへ。月雪花の比翼紋。うそじやないわいな。ぽつとりとした袖の移香。ともにながめし月影の。うつれば替る飛鳥川。花紫の藤壺を。追ひ出さるゝは誰ゆゑぞや。思ひ知らせん其爲に。藤壺の怨靈。これまであらはれきたりたり。其面影のつらにくや。あらうらめしの浮世やな。

春雨の降るは涙か〳〵櫻花散るを惜しまぬ人やある月の木の間にこがくれて花は匂へど遠山櫻何を便に降る〳〵雪の池の氷のとう〳〵は風をおふてひそかにひらく雛に通ふ錦木の思ふてゐりやこそ恨みながらも顏見りや嬉し、ア丶いつかさて夫婦つれだちゆこ〳〵と思ふたに我が思ひはねん〳〵ねとられて、ア丶あさまだきおすの夜も昔語と名に立ちし色の村田の中村は戀にはやつすかちでやるおむかひ〳〵今は金屋も入相の十五夜の月を〳〵愛にながめ〳〵明かさん、其更科の月に劣らじ戻ろやしやなら〳〵と。

枕獅子

樵歌牧笛の聲人間萬事さま〴〵の世を渡り行く其中にためし少なき川竹の流れ立つ名のうきことばかりよせてはかへす浪枕定めなき世の中々にまことを明す戀の闇忍のぶ枕らや肱枕思ひぞ籠る新枕とんと二つに長枕されば迷ひのそのかみや天の浮橋渡りそめ女神男神の二柱戀のねざしの伊勢海士小舟川崎おんど口々に人の心花の露濡れにぞ濡れし鬢水のはたちかづらの水くささ道理流れの身じやものと人にうたはれ結ひたての櫛の齒にまでかけられし平元結のいひわけもかゆい所へ簪の屆かぬ人に繫がれて帽子おさ

男ども。ひきぞわづらふ草摺びき。牡丹にくるふ蝶々の。風にもまるゝ風情なり。時致大きにむつとして。およそ坂東八ヶ國が其中に。力自慢をするものは。朝比奈ならではおぼえなし。いらぬ妨しやうより。おいたがよい。そこをとめるがとめきのかをり。客といふ字をうの字に書いて。うい もつらいもこりや〳〵しるものを。とまらんせ。えゝ面倒な。そこ離せ。てん〳〵てん、曲手鞠や曲撥の。かずはひいふうみいよ。拍子にかゝつて引いてくりよ。ひくものにたとへては。大根胡羅蔔牛蒡じやへ。菖蒲しやうぶ杜若。これらは女子の手でも引く。引くに引かれぬ男の意氣地。雨の降る夜も風の夜も。通ひ編笠花扇。逢ふて戻れば千里も一里。逢はぬ其夜は一里も千里。あゝ何んとしやうわしにばつかり氣をもませずと。ひらに機嫌をなほさんせ。こわい顏すりや正月と思ふてか。正月は福引。いやでもおふでも引かにやおかぬ。なんじやれがこうじて。時致も。日頃の短氣に突き飛ばし。かけ出さんとするところを。又おきあがつて引きとむる。女に稀なる力量早業。時致すこしもうごかばこそ。げに目覺しき有樣やと。貴賤上下おしなべて。感せぬ者こそなかりけれ。

金屋丹前

の奇特あらたなり。しばらく待たせたまへや。やうがうの時節も。今いくほどによも過ぎじ。しゝとらでんの舞樂のみぎん。牡丹の花ぶさ匂ひみち〳〵。たいきんりきんの獅子頭。うてやはやせやぼたんばう〳〵。くわうきんのずいあらはれて。花に戯むれ枝に臥しまろびげにもうへなき獅子王の勢ひ。靡かぬ草木もなき時なれや。萬歳千秋と舞ひをさめ〳〵。獅子の座にこそなほりけれ。

柱立

やんれかつかれかゝれ。引綱頼む。かけ聲小拍子揃へて。川なみ木やりの本あげ。けふ吉日の初霜に。うき〳〵にぎ〳〵。嬉し目出度の顔見せ。ずらりと祝ひをさめた。そも番匠のいでたちは。角金きつと立派ふう。一きはすぐれて愛敬わりける。おしてがんな。素袍ははをり。懸烏帽子ひつかけ。しやんとめされた。さて棟梁の大やうは。しかし戀には濡衣。おれどそなたは手酌相酌。おさへの手元てうどのみよいかんな。巾をひつきり〳〵〳〵。機嫌上戸の口ずさみ。むかひのや。戀萬女郎わいの。鐵漿をつけたよ。サアいよへ。比翼枕はこの〳〵〳〵。よいこの茂れさゞんぎ。睦ましく。いともかしこきみことのり。ぶつかくさいしよの柱立。手斧初めの吉日や。歌にやはらぐ大内の。宮もわらやも戀のうた。破風には

への針の先。つく〴〵とふか笄の。ひそりもつるのはしたなく。階子揚屋の別れ坂。春は花見に。心移りて山里の。谷の川音雨とのみ。きこえて松のかぜ。げにあやまつて。半日の客たりしも。今身のうへに白雪の。その折過ぎて花も散り。青葉茂るや夏木立。ひんだの踊はおもしろや。早乙女がござれば。苗代水や五月雨。はつの人にもなじむはお茶よ。誰が邪魔して薄茶となる。なるならば。こちやこちやてちや知らぬ。ほんにさ。恨みかこつも實からしんぞきに。あたろとめゆめ〳〵知らなんだ。見るたび〳〵や聞くたびに。にくてらしいほど可愛さの。起請誓紙は疑ひ晴らし。オヽよいことの〳〵。朧月夜や時鳥。時しも今は牡丹の花の。咲くや亂れて。散るは〳〵散りくるは。〳〵。くり〳〵〳〵散りかゝるやうで。おいとしうて。寝られぬ。花見てもそゞろ〳〵。花にはうさをも打ち忘れ。咲き亂れたる。風に香のある花のなみ。きつれてつれて。顔は紅白薄紅さいて。くどけど〳〵。てふどはつかそう。君はつれなや。オヽそれ〳〵。邪魔ことに花ぐるま。くるりや〳〵。くるり〳〵。くる〳〵〳〵。牡丹に戯むれ獅子の曲。げに石橋のおりさまは。イヤアそのおもてわづかにして。苔滑らかに谷深く。イヤアしたは泥梨も白波の。音は嵐に響きわひ。しやうかの花ふりしやうちやくきんくご。夕日の雲に聞べき。目前

山人のいたゞり川瀬の水のあさうづや。末はみくにの湊なる。葦の篠原波寄せて。靡く嵐の烈しさは。花の安宅に着きにけり。落葉かくなる里のわらべの。野邊の遊びも餘念なく。こりやだかめづき。ちつちやこもちやかつらのは。ちんがちんが〳〵ちんががらこ。はしり〳〵〳〵ついて。先へ行くのは酒屋のおでこ後へ下るは狼狐。おまが紅つけてとゝやかゝにいはふよ。いふたがだいじかそつてくりよぽうず〳〵大ぼうず。うらのなア。裏の脊戸やの今年竹。笛にしやうもの草笛に。笛になりたや忍ぶ夜の。笛は思ひを口移し。アゝ〳〵しよんがいな〳〵。忍ぶ〳〵その身は安宅の松よ。雪のよでどの汐風に。もまれ〳〵て立つくし。ありしてこれしてしよんがいな。おもしろや。絶えずや〳〵子寶一に千石よねぐら。常陸の國の津の岡に。こがねの花が咲いたよさ。につこりはつこり。ホゝホゝ。おわらいめしたは。しつかい在所の庄屋殿だんべい。いつかい〳〵〳〵俵に酒樽。千ばい萬ばい〳〵まん〳〵ばいうつておけしやん〳〵。神の鈴はしやん〳〵〳〵と。さつても揃ふた子寶。いちぞに問へばおとよけさよ。たつまつゆるまつ。だんだらいなごにかいつくぼう。ひつゝくぼう。かいつくひつゝく。しやん〳〵。扇になじむ風の子や。風の木の葉のおり〳〵に。里をさしてぞ。ゆめゆ

げきやう蝦俣。水をかたむる亢龍の。くいなき事。匠の家の口傳なり。たかまことより神樂月。代々のはらひの神の神子。まゝらや〳〵の竈のきよめ。高天の原の神神樂。やんもしろや荒神の。神の御前に松植ゑて。まつもろともに氏子繁昌へ。おんもしろや荒神の。お釜の前で味噌すれば。みそもろともに旦那繁昌へ。あんもしろやこのしろや。小鰭もよいものじや。若いわしに鹽堅魚はよいものじやへ。河豚汁はわたゝまつてよいものじやへ。打てば響く神樂太鼓。鞨鼓はうろくはやした。御代の盛はナ。八棟造り中門ろうかく。男女かいちうまん袖を連らねて。連ねて袖をにぎはふ都。戀は世界に誰が種蒔きそめて。おゝそれ〳〵〳〵。それが定か眞定か。ふたり比翼の初枕。妹脊わりなきめうとあひ。柱のかずが三千三百三十本。まばしら小柱見つけ柱。敷居鴨居も水もたゝへるがらん組立て。百万歳の槌のおとしつていてう〳〵長久と。御代の榮ぞいさぎよき。

安宅松

旅の衣はすゞかけの〳〵。露けき袖やしをるらん。都のほかの旅の空。日も遙々の越路の末。思ひやるこそはるかなれ。東雲早く明けゆけば。淺茅色づくあらちやま。けひの海。宮居久しき神がきや。松の木のめ山。なほ行く先に見えたるは。杣

ぶしこなし。もうし文さん。いつぞは私がこなさんに。いはう〳〵と思ふてゐたが・今は返らぬことながら。あそこでは喧嘩がある、爰では拔いた切つたはと。相手替れどぬしさんは。替らぬ名のみ雁金の。文さまなりと聞くにつけ。夜の目さの目もあはざの鳥。鳴いて明かさぬ夜半とてもなし。其つらさより此つらさ。乾く間もなき袖の露。雁と燕の中よいは。行くも歸るも別れては。花の盛を待ちかねて。月に指折る深い中。戀のいろはも文と書く。しよんがへ。ほんに〳〵嬉しいへ〳〵。浮名立つ名の戀衣。翅なけれど塗下駄の。當る尺八わたるがさいで。戀慕こくうのあしらひに。君がすがゞき三味線の。きよれい無禮のよしあしも。鶴の巣籠たてひきに。秋田すがゞきいやとはいはさぬ。獅子の曲まで吹きをさめ。弱いものをばよけたがよい。強いやつをば投げたがよい。わしやそふ思ふてゐるわいな。そふだんべ〳〵。菜種に蝶のしこなしを。頼みやんすて小櫻の。ふかいあさいも末かけて。名に呼ばれたる男一流。みめよき心も花に鶯。通ふ神風ふきやてう。人のいちむら。男立よき春のにぎはひ。

釣狐

我はばけたと思へども。〳〵。只淺ましき此身なり。鳥は八聲を告げ渡る。犬はお

め疑ひ荒磯の。いさごを飛ばす土煙。梢木の葉もばら〱〱。にはかに吹きくるはやち風。天地も一度に鳴動して。岩石枯木ゆさ〱〱。ぞろ〱ぞつと山颪の。風かわらぬか其姿。見失ひてぞ立ちにける。

虚無僧

月は昔の友ならば。〱。世の外いづくならまし。風に靡く富士の煙の。空に消えてゆくへも知らぬ我思かな。なふ〱それなる御僧なふ。今の歌をば何と思ひ寄りて口ずさみ候ぞ。申しこれもうし御僧さんへ。はつち〱そう。あいたはんの所望せうし。正月しまからなんぞいの。千歳を祝ふ松の内。はつちはつちとやかましい。わんきうではあるまいし。ほんに時知らぬ虚無僧とや。オヽ時知らぬ。山は富士の嶺いつとてか。鹿の子斑に雪のふるらん。山は白妙海は綠の三保の松原。さらり〱さら〱さつと姿の花の名に寄する。大磯の里につきにけり。それは昔の西行の。江口の君と戯れを。爰にうつして難波なる。伊勢の濱荻こきまぜて。女のよれる黑髮に。大象も繋がるゝ。人はみめより只心。里のいろしの戀咄。されば難波に名も高き。戀のわけ知り花ならば。櫻と人に宵のくち。詞に色を花曇。文と異名を雁金の。靡く青柳。うそじやごんせぬ紋ところ。通ふちだねを結

が釣針のいとしさを。忘らりよものと三返りの。里も山路の春の色。かすむ梢の移香散りて。花や戀しき面影を。さつと吹きとく春風に。霞がうめる初櫻。花の色香につい移氣な。菜種の蝶も露の床。比翼の蝶の餘念なく。羽風かはしてひらり〳〵。くる〳〵〳〵と舞ひ遊ぶ。雪か櫻か花の浪。うつゝ白浪いくよか戀に。馴れし情も今ではつらや。獨寢をはんに思へば。さりとは〳〵。昔戀しき浪枕。定めなや。げにや七世の浪路を越えて。よもぎが浦に浦島が。つきぬ契を語る家土産。

喜撰法師

我が庵は。芝居の辰巳常盤町。しかも浮世は離れ里。世事でなるめて浮氣でこねて。小町櫻のながめにあかぬ。他所へ心は移らねど。人を見送る愛敬は。てんとおてんと天から降つた。アヽ天人か。わつちやいやゝの。なに馬鹿らしい。とても色にはこんな身で。成駒やならそれこそは。こつちもよみと歌右衛門。なぶりやしやんすな世は情。旅じやなけれど道連に。なると噺のあとやさき。うかれ〳〵てきたりける。よもやと知れどよそながら喜撰の花が茶の給仕濡れて見たさと手を取つて。又見なほしてどうぶるひ。浮氣ならねば耻かしの。森の烏が鷺ならせめて一つ時にオヽ嬉し。こんなぶさまも眞實は。お前のお氣に入りたさの。蟻

のれが門戸を守る。我は願ひも有明の。つきぬ思ひは畜生の。しばしは離れぬ。姿は叔父の白藏主。見えつかくるゝ細道。てゝに野末の狐釣。わなに鼠をとろ〳〵とろと。熊のあぶらや木の實のあぶら。〳〵。さアとろ〳〵。つけて鼠をかけて。あげて釣りての。よいやさ。氣をくばり。まだ秋ならぬ春の野の。かけならべたる狐罠。のふにくや恨みや獵人の。野干の性根をたぶらかし。切るに切られず拔けられぬ。煩惱の深き思ひにきづなをかけて。身にしみ渡る夜嵐に。えもんつくろひ鬢搔き撫でゝ。忍ぶ夜のさはりは。冴えた月影更け行く鳥鐘。それにいやなは犬の聲。ぞつとした姿耻かし。人目耻かし。いなんやれ。我が棲む森へ歸らん。〳〵。春の梢もおもしろや。

浦島

海原や。浪路遙かに夕なぎの。龍の都を出汐の。寄するも八十の浦島が。あとに引かるゝ戀衣。濡るゝも夢とかぞいろに。のりおの海の舟唄や。沖の洲崎に天の小舟か。たが戀風に。獨焦れてよんやさ。ゆたのたゆたのしよんがいな。磯邊離れて木曾路山。寢覺心にたどりくる。傳へ聞く。よもぎおふなる島の名の。不死や老せぬためしとて。かたみの箱の玉くしげ。二つ枕の睦言を。思へば心引かされて。我

有難い。なまいだ南無阿彌陀佛。南無阿彌陀。なんまいだ〳〵。なせに屆かぬ我思。ほんにサ愛にきはまる樂しさよ。難波江の。片葉の蘆の結ぼれかゝり。ヨイナコレハイサ。解けてほぐれて逢ふことも。松にかひあるヤレ春の雨。ヤアトコセヨイヤナ。ありや〳〵。コレハイナ。このなんでもせへ。住吉の。岸邊の茶屋に腰打ち掛けて。ヨイヤサコレハイナ。松で釣ろやれ蛤を。逢ふて嬉しき春の雨。ヤアトコセヨイヤナ。ありや〳〵。コレハイナ。このなんでもせへ。姉さんおん所かへ。島田金屋は假の間。旅籠はぴたでお定まり。お泊りならば泊らんせ。お風呂もどんどと湧いてある。障子も此頃張りかへて。疊も此頃かへてある。おねまのお伽もまけにして。鞋の紐にあだ解けの。結んだ縁の一夜妻。あんまり憎ふもあるまいが。てもそふだろ〳〵そふであろ。おもしろや。來世は性を黒牡丹。おのが庵へ歸り行く。我が里さして急ぎ行く。

白拍子

春風に。笑顔溢るゝ花の山。姿も顔も取なりも。ひらりぼうしのしをけなく。しほらしや。初音耻かし鶯の。梅のすわいを便りにて。とまるばかりか藪鶯の。囀る聲はほうほけきやうと。啼いてまつ夜がこちやしんきらし。積る思ひを枕に語る。

の思ひは天とやら。どふで女房にやなられぬけれど。せめてやさしいお詞に。おまへた女子じや。エヽないかいな。いふてもおくれな堅どうな。田舍坊主とおなぶりか。思ひ競べをしやうならば。淺間の烟と煙草の煙。やにまに惚れた正直おしやう。オヽエヽうそらしい。眞顏で人をたまさかも。ほんにそふなら山の奧。千尋の海もオヽ離れ島。ふたり暮さば都も同じ。嬉しい世界で。エヽあろぞいな。すいといはれてういたぞし。ヤレ色の世界に出家を遂げる。ヤレ〳〵〳〵。こまかにちよぼくれ。愚僧が住家は京の辰巳の。世を宇治山と人はいふなり。ちや〳〵くちや茶えんで。はなす濃茶の緣の橋姬。ゆふべの口說は神の移香。花橘の小島が崎から一散走りに走つて戾れば。内のおかゝが悋氣のつのもじ。牛も涎を流るゝ川瀨の。口說けばおちあひ。我から焦るゝ。螢を集めて手管の學問。唐もやまとも里の戀路は。山ぶきながしの水に照り添ふ。朝日のお山は誰でも彼でも。二世の契りは平等院とは。さりとは是はうるさいこんだに。ホウ歸命頂禮どらが如來。衆生手管の歌念佛。釋伽牟尼佛も床急ぎ。抱いて涅槃の長枕。睦言がはりのお經文。なまいだ南無阿彌陀佛南無阿彌陀。なんまいだ〳〵。なぜに屆かぬ我思。ほんにサ。忍ぶ戀には如來までできて見やしやんせ阿彌陀笠。こがねのはだへで

ねつた戀路でもすつかりちよんときまりやす。何の男は百貫だ。せいだせそこだぞ商は大事。どくい旦那の御贔負を。八千八聲ほとゝはつといふ字を勇みて。松魚〳〵と走り行く。

老松

げに治まれる四方の國々關の戸ざゝで通はん。これは老木の神松の千代に八千代に礫石の巖となりて苔のむすまで。松の葉色も時めきて。十かへり深き緑の内。ねむれる夢のはや覺めて。色香にふけし花もすき。月にうそぶき。身は繋がるゝ糸竹の緣に引かれてうつら〳〵と。長生の泉を汲めるこゝちせり。まづ社壇の方を見ておれば。北に嶮々たる青山に。いろどる雲のたなびきて風にひらり。ひらめき渡るこなたには。翠帳紅閨の粧ひ。昔を忘れず。みぎの古寺の舊跡あり。晨鐘夕梵の響き。絶ゆる事なきながめさへ。飽かぬ硯の筆ずさみ。爰につかさを記しけり。松といふ。文字はかはれを待つことの葉を。そのかひありて積む年にことぶき祝ふ常盤木の調べぞつゞく高砂の。名なるはとりに住吉の。松の老木も。若木を語る恥かしさ。只かはらじと深緑。嬉しき代々に相生の。いくせの思ひ。限り知られず喜びも。ことわりぞかしいつまでも。きよきいさめの神神樂。舞

解けて逢ふ夜の人てそ憎や。男心のやるせなや。戀のしよわけを數へ歌。春は櫻に夏は菊。秋は紅葉に冬の梅。匂ひうつろふ女氣は。はでなとりなり目に立つ娘人目忍べば二つの道に。わしやからまれて。いつきようとや見え隱れ。四つの口說をいつ辻占の。無理いふ風の嵐山。七重八重咲く雲の帶。解けて逢ふ夜の嬉しさを。ほんに誓文神さんかけて。妹背でとともよふてうに戲れて。山々さして慕ひ行く。

松魚賣

目に青葉。山時鳥てつぺんかけて。松魚〳〵と賣り聲も。いさみはだなるちゆつぱら。五十五貫も何のその。河岸の相場は氣ながでも。負けぬ江戶子水道の水に。洗ひあげたる生蛸の。いけていでもの店先の。算盤づくならよしなんし。ふり番頭さんそんなその。鉢卷させるじやでんせない。獅子のきをひの兄さんを。見ぞこなつたかやみくもに。高くとまつたお御堂の。鳥見えも飾りも瓢簞も。直切つちやいけねへ酒錢で。是でも晚にやアヽお客さん。ひやかし數の子の聲がすりや。長屋の姉が飛んで出る。コレよつていきなに。アイ欺されて。酒がいはする潮來節。南無妙法蓮華經。高祖日蓮大菩薩とをがみなさい。妙でごせへす。どんなひ

れゆく。末は雲間に三日の月。戀は曲者忍ぶ夜の。軒に月影かくれても。あまる思ひの色見せて。秋の虫の音冴え渡り。閨の月さへ枕に通ふ。鈴もりん〳〵振鼓。しほらしや。弓のかげかと驚きし。鳥も池邊の木に宿し。魚は月下の浪に伏す。その秋の夜も今ははや。鐘も聞えて明方の。いるさの月の影惜しき。月の名殘や惜しむらん。

懸想文

一陽に。飾る軒端の松竹は。ふせん橘紋所。きりゝとしやんと注連繩に。結びながしのしらべさへ。浮き立つ空や春景色。文このむ。梅にえにしを鶯の。雪の封じ目うち開けて。けさうぶみ〳〵。聲さえわたる新玉の。戀の重荷を擔ひ賣り。見渡す四方にいろ〳〵の。軒端の梅に初音をも。みかげが原の姫小松。いはねど千代の色見えて。雪解の澤に摘む若菜。野邊の早蕨おしはへて。都ぞわけて佐保姫の。情をかくす頭なれや。春の景色のおもしろや。忍ぶ夜は。あちらむかんせお月さん。色の世界じやにナアしんきらし。逢ふた夜は。ついておくれな明の鐘。色の世界じやにナアしんきらし。しほらしや。空色もほの〴〵と。明け行く空や山見えて。げにも長閑けき春の色。

樂を備ふるこの家に。聲も滿ちたつありがたや。松の太夫の裲襠は。蔦の模樣に藤色の。いとしかわいもみんなく〵。男はいつはりじやもの。すねて見せてもそのまゝ。よそへある夜。ひそかにつきあひの。雲の籬のかげことば。エヽ憎らしい木がくれに。晴れて逢ふ日を松の色。ゆたかに遊ぶ鶴龜の齡をさづくる此君の。行末まもる我神託の。告を知らする松の風。富貴自在の繁榮も。久しきやどこそ目出度けれ。

朝妻舟

漣や。八十の港に吹く風の。身にしみそむる比叡おろし。千船百船櫓を立てゝ。いるや岸根の柳影。このねぬる。朝妻舟の淺からぬ。契の昔りきんさう。そも羯鼓の初まりは。抹羯國より傳へきて。唐の明皇めでたまひ。そりやいはいでもすまふぞへ。濟まぬ口説のいひがゝり。つめつて見ても漕ぐ船の。あだし仇浪浮氣つら。誰に契りをかはしていろを。かへて日影に朝顔の。花のかつらの寢亂れし。枕恥かししんきでならぬへ。筑摩祭の神さんも。なぜに男はそれなりに。沖つ島山よる浪の。寄せてはかへす袖の上。露ちる蘆の花心。月待つと。其約束の宵の月。たかうなるまで待たせておいて。獨袂の移香を。かたはれ月と賴めども。水の月影。流

淺草名所

花のなみ。かすみのころも晴着して。げにもさだかに凪の空。長閑に通ふ舟の道。ゆたのたゆたに引かれ行く。ほんにわたしが身の上を。いはば語らんきぬ〴〵の。身を知る雨の服紗帶。結びすてたる淺草の。まだなどころは白髭や。身を吉原へういつとめ。秋葉の紅葉色見えて。鏡の池や向島。たしなんで見たる衣紋坂。いつみめぐりと大門や。緣のはしばもわるならば。うれしの森や花川戶。庵崎戀し墨田川。ふたつならべし枕橋。その首尾の松待乳山。そふてみのおと明暮に。日本堤の神樣へ。無理な願ひも戀のちゑ。淺茅が原じやないかいな。これこれ程に胸の闇。色をも香をも知る人を。せめて恨みて梅屋敷。ないて初音や洩らすらん。

鳥羽繪

しめたぞしめた。オットどっこい逃してなろか。おのれがおちらば三味はかちらいで戸棚飯器。おげくのはてにや。かわい女房の鼻柱。それで憎さが桝落し。ハヽハックサミとこまんざい。見をれお蔭で風引いた。外に引くものは何でもおろ。ちんりちんり。ちんばに舟かなぼう。酒がおとひく。女郎がお茶引く。よたかゞ眉引く。畠じや大根。うついあねへの袖褄引く手數多であろぞいな。はづみになむ

瀬田の橋

瀬田の橋から石山まゐり。見たり問ふたり。螢狩はといな。まつに月さへ。こすいふかいじやないかいな。唐崎の夜の雨。矢橋の歸帆。堅田の落雁。三井の晩鐘。比良の暮雪はちら〳〵と。エヽ膳所の城は見事じやへ。

雲井狂亂

いざさらば。ありし雲井の花の袖。思へばかゝる執着の。定家かづらの離れぬ中を。隔てられてもそもやそも。思ひ出すとは忘るゝからよ。何の忘りよぞいたいけざかり。さても〳〵わでりよは。踊り振が見たいが。踊り振が見たくば。北さがへござれの。北さがの踊りは。ついの帽子をしやんと着て。踊る振がよいとの。吉野初瀬の花よりも。紅葉よりも。君が面影うつゝにも。夢にも見たや。なつかしや。ふりにし事を聞くからに。比翼連理の契りさへ。花に嵐の情なや。更に別れのなかりせば。千代も人には添ひてまし。よしや草葉に忍ぶとも。色にぞ出でし。我恨み。千草も冬枯れて。雲のあなたに春やきて。風に散り飛ぶ雪の花。ちりやちりちり。たゞよふ君が。袂に積もるも。嬉し。ちゞに心も亂れて戀じや。昔床しやと。あなたへ走りこなたを慕ひ。別れの床のうてなぞと。人目もわかず伏しまろぶ。

ゆ〱らのちゆいと刎ねかへし。烏羽繪の御無理は御尤と。地口で逃げるを追ふ鼠。わとを慕ふて。

京子守

花の都のちと片ほとり。宇治は茶所茶は縁所。娘姿も人の目に。巽わがりの子守歌。わしがちひさいときや。お龜といふたがの。今はなんな村の庄屋の嫁。ねんころり。ねん〳〵ねころの後の鍛で。としよりこいよの鳩がなくへ。なくななきやるないゝ豆やろぞ。まめで達者で世帶じや。昔馴染たんべさん。負ふた子よりは抱きたい男。ぬしに逢ふべとて背戸までいたりや。背戸の柿の木のその下で。おとかにちよいとつまゝれて。ヤヤアをふすべエたまげ拂ふた。でんぼでね。はんの事じやど。もしへ。思はんせ。愛しながらの在所歌。わしとやんれおかさアと糸とつていたら。垣の間から。文よ投げこんだ。わしに當らいでおかさに當る。おかさわしよ見る。わしやおかさ見る。見るに見られぬ座頭の坊の鏡。ゆふにいわれぬ坊さまのわたま。わしも其時やをふしよと思ふた。やんれ。前の黄金の花がてんこちない。今を盛りと咲き匂ふ。でもさてもみごとな黄金花。ほしかおまそぞ一枝折りて。おゝそりや誰に。いとし此子のかざしの花に。ナオヤ戀の世の中。し

さん畜生め。擂木とるまにちゆいと逃げた。めう／＼／＼／＼。ねずみに起きて月見かな。アヽラ怪し。おやしヽの十六文で。きうくわんてうは見たれども。擂木に羽根がはえて。鳥羽繪ははんに我ながら。見るは初めておやおやおや。いでやとらへて友九にと。足を延ばしつ手をわげつ。とらんとすれば鳥はついと飛んで逃げた。ヘエあつたらものをへ。見送るうしろへ逃げたる鼠。振り向くとたん。見つけてうぬと駈け寄るを。そのまヽ膝に飛び付いて。なせそのやうに腹立てヽ。わたしを何とさしつけに。ひふも恥かしそもやまた。藁紙屑の巢をはなれ。ながしの下や膳棚で。いたづらならふた時分から。ふつと心で思ひそめ。猫や鼬の目を忍び。どんぞ抱かれて鼠とは。及ばぬ戀の身の願ひ。知らぬお前の木枕を。せめてかぢつて念晴らし。それに聞えぬ胴慾と。山椒のやうな目に涙。ないて食ひ付きかこつにぞ。エヽ畜生め。かわいお方のお聲はせいで。あがるお客のつらにくや。わるじやれかねひらいきすぎた。蕎麥や按摩の聲ばかり。其外おでんに正月や。割竹鐵棒火の用心。夜明烏の四手駕籠。アヽカゴ。アヽカゴ。アヽカゴ。アヽ掛聲に。旦那は中で空寢入。おつこちた。是にはこまり入りやした。そこらでぞつこい引いてくる。頭の黑いどぶ鼠。ますでおさへりやチウ／＼／＼。ち

ものつい覺え。在所生れのわたしでも。いひなづけすりや女房じやもの。悋氣のしやうは知りながら。いはで月日をくよ〳〵と。松に時雨のおそめさん。連れて共々駈落と。聞いて身も世もあらにくや。我つまかへせうき人は。どこよこゝよと追風に。姿亂るゝばかりなり。なんじやへ。わたしに殿御をもてとかへ。ヲヽしんき。棚の鼠はわいたしこ。更に蹴躓いてがら〳〵びつしやり。なんぞいな。桶と釣瓶のふたりが中は。朝の六つからとことん〳〵。ぬれ〳〵わしや染めるやと。汲みやれ痛いこたない〳〵。可愛らしさの亂れ咲き。泣いつ笑ひつ狂人の後よ先よと戀ひ慕ふ。花のかんばせ花吹雪。あなたへざらり。こなたへざらり。ざらざらざつと振袖の。風に柳のたよ〳〵と。亂心のはてしなや。

藪入娘

花見時。空晴れ渡る青傘に。積る吹雪か山櫻。雲の袖裏ひの色うつす。花の姿の八重一重。目元まばゆき御所櫻。戀の重荷は露もつ花よ。そんれはそふかへ焦るゝ人の手折らば嬉し散らぬ內。ヱヽしよんがいな。浮かれ〳〵て霞の間より。見初めし色の花心。梅を忍びて櫻がもとへ。通ふは憎い匂鳥。移り香散りて朝露に。濡れた袖ならしやうことがないわいな。あだなりと。名にこそ立てれ櫻木の。初花

つこいの世の中。おもしろや茶の木の枝に。くせる山雀くるみにふける。こめどりの。虎斑のえのころ。おきやがりこぼし振鼓。笛や太鼓の拍子に合はせ。木々にも六つの花や咲くらん。やんれ柿の木に蜂が巣をかけて。あしよな蜂じやと立ち寄り見れば。角が二本あつて頭が獅子のやうで。どなかゞくびれて。羽がひがよつあつて。尻に劍があつて。わしが白い股。ちよいと來ちやぶんとさし。ぶんと來ちやちよいとさし。わしも其時や。どふしやうと思ふた。やんれ二度とやんれ。いかぬもな。柳の木の下よ。やんれ恥かしや花が咲きそろ。

おみつ狂亂

うきことに。我庵崎を焦れ出で。なたねにひとり蝶々の。夢ともわかず道芝の。露の涙のかこち草。男ゆゑにや狂ふらん。結びてし。かひもあらしのいたづらに。中をさくらのうたてやつらや。ゆくへいづくと定めなき。おみつが心亂れ髮。さら〳〵さらにわくかたも。啼くは雲雀か藪鶯の。野暮とやらじやと笑はゞ花の。八重に思ひて一重に開く。こちの心は汲みもせで。あだに暮せしヤアハア仇名草。盛りもまたで散るならば。共に連れてはくれもせで。エヽ憎い程なほ。川のおも。水に中よき浮寢鳥。きこえぬわいな久松さん。はでな噂を聞いてから。癪といふ

心をやつせといふた其言の葉を忍ぶにはよき徒歩や跣で人目の關を忍ぶうる身はかうもあろかと小褄をしやんとどり〳〵さま〴〵しのぶめさんか川千鳥千鳥鷗の名所かな隅田川原につきにけり白浪の雲かあらぬか妄執の姿をこゝにおり〳〵と同じ姿のわしが在所は京の田舎の片ほとり八瀬や大原や芹生の里世を忍ぶ身は姫ごぜの身はつまからげ忍ぶ入らしやんせんかいナア買はんせんかいナア世を忍ぶ忍ぶの亂れ限りなき恨みの刄に情なや浮身もやらで其人の連れ添ふ事の恨めしく〳〵うつら〳〵とまよひきて小舟間近く立ち寄れば過ぎし彌生の月初め目見え初めと手をついてふうと見合す顔と顔いとしらしうてかわゆうて又と有るまい男振心で惚れていつしかに桃と櫻の品比べ雛の遊びの酒事にわたしが差いた盃に紅が付いたと戴いておじやらまぜりの妹脊事はでな浮名が嬉しうて人のそしりも世の義理も厭ひはせじと取り付いておなたへ引けばこなたへもつれ〳〵よれつもつれつ糸柳風に揉まるゝ風情なりおかんはそれと見るよりも中を隔てゝ立ち寄りてどちらも〳〵も莟の花梅の若木の香にめでゝ見とれてゐさんす其中へうちのこがいの太郎作がおはうのくせにいやらしい幼遊びをかこつけてめんないち

染の戀衣。思ふ身巾のゐふこと違ふ。無理を結ぶの神さんへ。愚痴な繰言卷き返し。又繰り返す我思ひ。そつとゐふぎの窓の內。かいまみえにし面影は。目に月影の宵を待つ。けはひ化粧もとゞへやら。胸の鏡の包むにゐまる。文の返事の幾度か。心で讀みてうつつないぞや。そりや片時も忘らりよものかなぶられて。耻かしながら嬉しさを。聞かぬ振する耳にさへ。紅の色添ふ花娘。離れじと番の蝶の比翼紋。蔭と日向によれつもつれつ。岩の木蔭にひらり。おのが羽風にくるり。くる／＼／＼。扇車の廻れ／＼。くるりくる／＼／＼。おもしろや。梅の花笠色糸つけて。品よき振の枝垂梅。それさこれさ。廻るは風の手鞠梅。くるり／＼。挽くや車のわくらばに。悋氣の雨や袖濡れ／＼て。相合傘に夜の梅。見て移り香の言譯暗き。闇はあやなし梅の花。一重開けば七重八重。ぬつと山路の旭梅。月雪花や初時鳥。てゝもつかさの名も高尾山。がなめは四つの紅葉榮えて。

隅田川

名にしおふ武藏の國と下總の。中に流るゝ隅田川。瀬々の白浪しげくして。霞を分くる春の日に。よしなき人の事問はん。ありのまに／＼都鳥。是はそれには引きかへて。女姿の水馴棹。是も世渡るならひかや。しばし木蔭に立ちにける。戀に

づけ。末を頼みのかひもなき。思はぬ憂目みつせ川。胸に漲る思ひの淵。淺いはえにし深いは恨み。恨みは人をも世をも思ひ思はじ。只其人こそ憎しつらし。情ないぞとかこちなき。かつぱと伏して泣き居たる。いつしかに。君を待乳の山々越えて。通ふ庵崎駒がたや。千鳥鷗の心がわらば。白髭

どり。恨めしの心やな。人の恨みの深くして。刄にかゝりし身の因果。生きて此世に有るならば。いとし男と添ひもしやう。かわい女と添はんものと。なまなか出家を遂げし身の。苦患にさへられ。發心のなかだちを忘れしも。皆誰ゆゑぞおくみゆゑ。わたしが迷ひは松若さま。幼馴染のいひな

とて今の世に。傳へて其名を殘しける。

有馬名所

有馬名所は藥師に愛宕。三社富士山かゐのをに。鼓が瀧や落葉山。清水稲荷とりちごく。竹細工糸細工。一の湯戸。二の湯戸。湯壺へいりたいな。

天神祭

名にし浪花の神事。其宮々の多けれど。中に名高き名物は。天神祭に雇はれて。其夕暮の川景色。囃子法師の引く三味の手を。浮かれてさわぐむかひ船。おつな太鼓の川いつぱい。星をあざむく有樣は。見事な事ではないかいな。勇み勇むる人形舟。そも〳〵神代の初より。唐の大將おやまらず。神功皇后武内なんど。髭もしら〳〵白樂天。見事な吞口足もよろ〳〵。戯れ遊ぶ猩々や。浮かるゝ蝶の番離れぬ。その拍子よき樂大鼓。えびすに大黑。布袋に福祿毘沙門。壽老人が辨財天。此舟成就する時は。やら〳〵目出度や。雀踊が。音に聞えし其唐土の蜀の關羽がはたらきに。なむきやらたんのとらやあ〳〵と。切りしたがへたはあつぱれ賴政。木津の勘助。お前はいつでも俵をよこたに抱へて。廻るがおすきで。さりとは一倍。お疲れなさるでなアござんせうな。浮かれ〳〵てそゝりぶし。源の義經さんは。

さんへ願掛けて。ちよつとお顔をみめぐりならば。それてそはんに首尾の松。それそれそれもそふかいなア。えもん坂。今宵くるわの逢瀬の首尾も。橋場の雨にしつぽりと。君は山谷の三日月さまへ。眞實心から願掛けて。ふたつ枕で樂しむならば。うれしの森であろぞいなア。それ〳〵それもそふかいなア。深きえにしの中じやもの。あらおそろしやくるしやナア。娑婆の業因深きゆゑ。思はぬ此身の苦患をうけ。共に奈落の底までも。引立て行かんとせしかども。觀音薩埵の誓におそれ。我と我が身を。責めに責めくる冥途の使。かげもよしなや恥かしの。もりてやよそに白露の。見えつかくれつ。はらひきよめ奉る。神は梵天。てんのてれんの癪の種。下はしたいの二上りに。內外清淨。こしんかもめで。外に浮氣はわれます神の。其神々にそやされて。うそとまことの二葉山。通ふ神の神託に。戀といふ字は來いといふ。言の葉草を岩本の。神かけてこそ願ひけり。のふ恨めしのあだ人や。六趣衆生を出でやらず。人間不定芭蕉葉の。生きて返らぬ死出の旅。謹請東方諸龍衆生。きんせい西方白體白龍。一大三千大千世界の。恒沙の龍王。おいみんりきんのみぎんなれば。いづくを恨みのあるべきぞと。いのりいのられかつばと浪間へ。入るぞと見えしが。かの怨念の舊跡も。日高にあらぬ隅田川。鐘が淵

やる〳〵。鳥はなん〳〵何鳥。ひば目白瑠璃雲雀〳〵。まんがらこんがら四十雀。東山から谷から〳〵ひよ鳥の。雀の踊るやうに。ひよこ〳〵〳〵。鳥はなん〳〵〳〵。暁の鶉啼く夜は。しよからかいとな。面白や。雁と燕はどちらがかわい。やゝを育つる燕がかわい。花を見捨つる雁がねならば。文の使又頼む。エヽそふかいな。エヽそふじやいな。〳〵返す〴〵もよき御代なれや。万歳の御代に歸りなん。〳〵。

秋のしらべ

一葉散る。梢の風に秋初めて。紅葉のはやし渡すらん。夕陽すでにおのづから。影をとゞめし立田姫。霧が籬に錦の衣。濡れてや袖の照り添ふる。裳裾まばゆき夕霞。いろどる野邊に咲く花の。名も七草の可愛らし。尾花がもとに吹く風が。そつと身にしむ戀草も。まだ白萩の女郎花。花の姿が。目に月かげにをとこへし。露待ち兼ねて濡れかゝる。荻の浮氣なきやうとも知らで。色香の憎や。オヽにくや刈萱われもかう。思ひそめにし戀衣。色もあだなれ。薄紫の藤袴。つい綻びし糸芒。夜半の嵐のまに〳〵花の。靡く心がしほらしや。池水に。よな〳〵月の通へども。岩にせかれておちあはぬ。亥中の空や隈もなき。三五の月の影さえて。今宵ぞ秋と

西海をしづめて。首尾よく出世なされませ。俄に一天曇るとひとしは。荒波蹴立て。白柄の長刀小脇に掻い込み。舟のみさきへつゝ立ちあがつて。そも〳〵是は。桓武天皇九代の後胤。平の知盛幽靈これまで顯はれ出でしが。義經めづらし辨慶久しや。實家は無事なか皆々達者が。言付頼むと。そこらを四五へんのたくり廻つて。海へざんぶと飛びこんだ。エヽなせ〳〵。そこらでやらしやませ。どんじりばやしの夏神樂。渡り拍子で浮かれ來て。勇み〳〵て。

とりさし

さいた〳〵見さいな。鳥をさいた見さいな。唐土の鳥差は。孔雀鳳凰に。いんこの鳥に紅雀。雁鸚鵡に比翼の鳥を。さいたとさ〳〵。我朝の鳥さしは。鷲か天狗をさいてくりよとおもて。空を眺めて竿しやにかまへ。すつくり立つて見たれば。さいた〳〵見さいな。蜂がさいた見さいな。こいつかなはぬ。竿じや屆かぬ。笠伏のかはりに大手をひろげて。えだ〳〵見れば。雲雀駒鳥村雀。ひらり〳〵花の木蔭に。ちり〴〵ぱつと立つては羽を休め。はて面白の景色やな。雲雀山から數の小鳥が。花に戯むれ囀るやうに。ちつちら〳〵。ひしやぼしやてんするか。てんする〳〵〳〵や。ちゝちつとも囀りたいといな。春景色山々を見渡せば。鷺を烏と爭

のさき受ける曲撥三尺の劍にひやうすわざものと。これぞ纏茅の玉矛に。おつ立てられて大神樂。逃げる拍子に狂ふ獅子。こなたは戀の物狂ひ。狂ふは獅子の冬牡丹。獅子とらでんのとはくとも。逢はで果てなん我つまの。鞍馬のかたと聞くものを。鞍馬のかたはいづくぞと。そこはかとなく。走れば走るうつつなさ。止むる男を振袖の。はらふ羽風に翻す。賤の苧環繰り返し。昔を今に戀しさの。戀には翅もあるものを。添ふて行きたい逢はせてと。くどいつ泣いつ。生體もなく。とりすがられて大神樂。のりかゝつたる灘の舟。よるべかねにし風情なり。

一代奴

あら面白の景色かな。山も色めく花紅葉。ちら〳〵袖に。袖にちら〳〵散る紅葉。情もあらば。ちよと一筆柿紅葉。まゐらせ候べく候かしく。もしやお心。心かはらばわしや薄紅葉。げに戀は曲者。ふれ〳〵ふりこめさ。ふりこめさ。お先を拂ふてあれはのさ。ありやんりやん〳〵。こりやんりやん〳〵。勇んでさ。進んでさ。行列揃へてほつたてる。行くもやれさて。通ふも忍ぶ夜も。亂れ風が吹くやら戀風が。つれてつれて。さつさぬうちよよりも。さつさ我里を花と眺めん。えいやらさ。さらさ〳〵。しととんとんとんと。かうのみをなげかけゆりかけ。しとゝんとよいしと

知られけり。忍ぶ其夜にナアさえた月こそ。つらやしんきや心なや。闇に妻戸をやう〳〵と。明の別れはなはつらや〳〵。賤が手業に拍子さへ。月の名所に打つ砧。四つ手打たぬのも更科の。月の桂の鏡山。うつせば影も田毎に須磨の。うらやましまを。眺め明かして三笠山。越路の雪かみよしのゝ。花の盛りも及びなき。秋の眺めぞ類なき〳〵。

鞍馬獅子

諸國廻り天照らす。神をあきなふすぎはひに。襟に懸けたる曲太鼓。かしらに獅子のふたりまへ。ひとつに寄せて打つたり舞ふたり。月の朔日十五日。大つもごりも元日も。股引懸の旅神樂。我と浮かれる路草に。獅子のまねして來たりける。そもそも神樂の其初め。天の岩戸の屏風の中に。天のうずめのこんたんに。神の心をとりはやしてれん手管の眞實に、トン〳〵チチチツチリリン〳〵〳〵。眞拆の葛よりかけて。しなだれかづら玉葛。ながきどりのとこやみに。しつぼり。汗を角兵衛獅子。獅子はお家のてれつくてん。つく〳〵見れば。てんとたまらぬしなものめ。誰と寝て見た亂れ髪。とこの岩戸の睦言を。とはまはしやと寄り添へば。もとより狂氣のうろ〳〵と。なぎなた取つて打ちかゝる。オツト危ない鼻

やれやれさて。おれはさて。是はさて。そつこいさとな。これはいさの。よいよいと〳〵〳〵よいとなとな。これはいさのよい玉兎。是はさておき。昔〳〵やつがれがてがらを夕の添乳にも。ばぐた爺やが其敵。うつやぽんぽらぽんの腹鼓。狸の近所へ柴刈に。ふとやつめがうせたら大束を。えつちう〳〵〳〵。えちかりまつたじやござんなれ。こゝこそと。あとより火うちでかつち〳〵。かち〳〵かち〳〵かち〳〵のお山といふ。打つにあつゝあつゝ。そこで火傷のお薬と。唐辛子なんぞでみしらせて。今度はちよきたん合點だ。心得狸に土の舟。おもかぢとりかぢぎつちらて浮いたなりとや山谷のお舟。こがれ〳〵て通はんせ。こいつはおもしろおれさまと。しやれる下よりぶく〳〵〳〵。のふ〳〵これはのふ泣面。よいきみじやんと敵討。それそれで市が榮えた。てがらばなしに乘が來て。お月さまさへ嫁入よなさる。やときなさのせ。とこせい〳〵。年はおいくつ十三七つへ。ほんにへ。お若いあの子を産んで。やときなさのせ。とこせい〳〵。誰に抱かせませうぞ。おまんに抱かそへ。風に千草の玉兎走り〳〵て急ぎ行く。

夜まはり

はでな半被の梅鶴や。たるみ股引はいて來る。夜深ならねど夜廻と。見下げられ

ゝんさつさしとゝんよいしとゝん枝垂柳のほつそりすうはり黑繻子帶きりゝとしやんときりゝとしやんと結びしめたるやれさてな花は九重ひやろの奴の奴のこの〳〵あかづら茶袋頭巾の花がよくにじりしをぞべら〳〵とかきのれんの色さまたちがあだし奴の晩にでざらば背戶からでざれ脊戶はひろかれやれさて見やれのをやれやあれ〳〵咲いたとさ〳〵ふりこめ〳〵よいやさきやぼうすとんしよなしてなしのくせとして惡洒落いふたり大つう仕打が憎らしいどふいふ理窟か氣が知れぬ〳〵〳〵あれ見さいな結ぶの神の御仲立出雲八重垣つま定めあるはいやなり思ふはならずそれじや〳〵其氣じやへしんを結ぶの神まうでおくにしよていの行列揃へておお先ふる〳〵腰をふる〳〵ふれ〳〵花見奴の難波宿入

玉うさぎ

げに樂天が唐歌につらねし歌のしるしとて三五夜中の月の照中に餅搗く花兎餅じやでざらぬ望月の月の影かつとびだんでやれもさうさやれやれさて。サア臼と杵とは夫婦でござるやれもさ〳〵夜なが夜一夜オゝやれやれさてとゝんがうへから月夜にそこだぞやれこりやよいこの團子が出來たぞオゝ

世を送る。いかに此身が海人じやといふて。しんき〳〵に袖濡れ濡れて。いつか嬉しき逢瀬もと。君にや誰か黄楊の櫛。さしくる汐を汲まふよ汲み分けて。見れば月こそ桶にわり。是にも月の入りたるや。月は一つ影は二つ。見つ見られつも雪の上。て丶は鳴尾の松影に。月を荷ふて休らひぬ。見渡せば面白や。馴れても須磨の夕まぐれ。すなどりのやつしつし。波をけたて丶友呼びかはす。はんま千鳥のちりやちり〳〵。ちりやちり〳〵ちつと鹽屋の烟さへ。立つ名厭はで三年は爰に。須磨の浦回の松のゆきひら。立ち歸りこん我も木蔭に。いざ立ち寄りて磯馴松の懐かしや。かたみこそ今はあだなれ見そめてそめて。逢ふた其時やつい轉び寢の。帶も解かいでそれなりに。ふたりが裾へ狩衣をかけてぞ頼む睦言に。かわい鳥のエ丶何じややら。泣いて別りよか笑ふて待ちか待てば來んとの約束。を忘る丶隙はないわいな。それから深ういひかはしまの。水も漏らさぬ中々は。濡れによる身は傘さしてござんせ。人目關傘いつ青傘と。はんに指折り其日傘。待つに長柄のしんきらし。それへ〳〵。氣を紅葉傘白張の。殿ごに操立傘も。相合傘の末かけて。誓文眞實妻をり傘と云はれたら。思ひも開くはんな傘。しはらしや。いとま申して歸る浪の音の。須磨の浦かけて。村雨と聞きしもけさ見れば。松

ても銃の。ねらんでうまれ玉川の。ぎやつと產湯の吾妻子。火の用心さつしやりませう。二階を廻らしやりませうと。ふれあるく。我もおちぶれ。夜廻とはなつたれど。是でも昔は大盡さまよ。うんといひねへ立引を。たゞの事なら野暮なしに。昔はわれらも此里で。浮かれ暮せしさわぎ歌。とゝがどんぐわらぐわんで。たいこゝにふるすゞひうや。ひやろなかちつくり三味の手。ちつちりちんをひかした。したかたでく。ちりからく　たらすはゝと。打たせた。さても陽氣な拍子へ。いよだてのまゝ。格子なんぞへぶつゝいて。新手と思ひ心なら。心元ない戀ながら。コレ待たしやんせ。胴慾な。別れし後でこのやうに。命とかいた彫物を。けさせてみせのあいあがりどんな大事の男の名でも。樣と呼ばれぬをかしさは。女房氣取じやないかいな。竹のな。丸木橋はすべつて轉んで危ないけんども。君となりや渡ろへ。夜は何どきとうはのそら。きほひいさんで。火の用心さつしやりませうと。ふれあるく。

汐汲

松一木。かはらぬ色のしるしとて。今もさかえに在原の。かたみの烏帽子狩衣。きつゝ馴れにし面影と。うつし繪島の浦風に。ゆかしさつでも白浪の。寄する渚に

み送る荷物はなに〳〵やろな。瑠璃の手箱に珊瑚の櫛笥。玉をのべたる長持に。數も丁度の潔よく。さまはナアナア百までナアアわしや九十九まで。ナアエ。共にナア。白髪のナアはゆるまでナアエ。心浮き立つ踊唄。花が咲き候黄金の花が。でんこちない。今を盛りと咲き匂ふても。さても見事な黄金花。はしかおましよぞ一枝折りて。エヽそりや誰に。いとし女郎衆のかざしの花に。ホヲヤレ戀の世の中。じつ戀の世の中。おもしろや。すぐにも歸り御目見へを。又こそ願ふ種蒔や。千秋萬歳萬々歳の。末までも賑はふけふの。お目出たさと舞ひをさむ。

狂亂

春の梢もいつしかそめて。むかひ小山の其仇名草。浮かれ〳〵て散りかゝる。蝶の比翼のよい中せしは。君が離の其戀草に。こがれ〳〵て日をおくる。〳〵。露のよるべの緣結げに戀は曲者かんな。身はさら〳〵。さらに戀こそ寝られね。浮雲の。よるべやいづく白糸の亂れて物や思はする。風に柳の寝亂に。かたしく袖も花衣。うつろふ色にせかれては。うつし心と岩見がた。アヽ恨めしの朝嵐。夢の睦言。わしたの露の床詞に。濡れてかいなき浮名立つらん。花の夕べの移り香もれて。空に知られぬ雪の日も。かざして行かんかざし草。拂ふ袂のくちもせで。わや

風ばかりや殘るらん。松の噂は世々に殘るらん。

志賀山三番叟

僞紫のなか〳〵に。及ばぬ筆に寫繪も。池の汀の石龜や。ほんに鵜のまね烏飛び。とつぱひとへにありがたき。花のお江戶の御贔負を。頭に重き立烏帽子。さつはもおのが古鄕へは。錦を着なす踊立。をこがましくも五とせの。けふぞ名殘にさふらふよ。天の岩戶のナ神樂月とて。祝ふほん其年も。五つや七つ三つ見しよと。縫の模樣のいとさま〴〵に。竹に八千代の壽こめて。松の齡のひく萬代も。替らぬためし鶴と龜。びんとはねたる目出たいな。海老もまがりし腰のしめ。寶盡くしや寶舟。やら〳〵めでたいな。四海波風治まりて。常盤の枝もよへこの葉も茂る。えいさら鯉の瀧のぼり。牡丹に唐獅子、唐松を。見事に〳〵。さつても見事に手を盡し。仕立ばへわるよい子の小袖。着せてきつれて參るかの。肩車にぶんのせて。乘せて參るの氏神まうで。きねが皷のてんつくでん。笛のひじきの音もさえたりな。さえた目元のしほらしさ。中の〳〵な中娘を。ひだつ長者が。嫁にほしいと望まれて。藤內次郎がぞちくりげに乘つて。ヱイ〳〵〳〵。えつちらおつちら。わせられたので。其意に任せまうした。さて。婚禮の吉日は。緣をさだんの日を撰

の心中立。おふよいことの〱。恨み顔にて何にもいはず。みぶのたゞみは氣をはるみちの。つらき浮身に大江の千里。たとへどなたが水誘ふとも。深いえにしは在原の。業平さんへの心中立。おうよいことの〱。磯馴松の懐かしや。松に吹き來る風もさやうじて。須磨の高浪烈しき夜半の山颪さらり〱〱。關路の鳥の聲々に夢も跡なく夜も明けて。村雨と聞きしもけさ見れば。松風はかりや殘るらん。

女夫獅子

花も紅葉もときませて賑ふけふの神いさめ。盛り浮立つ江戸の花。紫匂ふ袖袂。誰も三桝のこい中は。おふさと縁の綱五郎。ふたり連れたる女夫獅子。桃や柳のいろどりいろどる綾錦。わきて柳の。しなへてもつれて面白や。夏は時鳥卯の花かをる朝朗。花橘の香をとめて。菖蒲は軒のつま定め。露が誘ふて〱露の颪に亂るゝ風車くるり〱〱。くる〱車に乘せて。重荷のげに〲戀は曲者。咲き揃ふ花の木陰に。見えつ隱れつ比翼の蝶の翅のおしろいもはでに浮名の。花より花に移り氣は浮氣らしいじやないかいな。盛りまばゆき花の笑。紅をさすがに風俗も。あだになさじとまことを見せて。粋なとりなりほんに思ひの。深見

くな風のいたづらも。たが小櫻や憎からぬ。かはゆらし。かぶり〳〵て打しほの。めおちやめのとも腰元も。連れてゆこもの花の山。さても見事に。見事に花の色揃。それで心を迷はする。おのや君さまは。いつのいつから逢ひもせで。沖の船程こがりやせぬ。宵は見もせで夜半は逢はぬ。鳴かぬ烏のきぬ〴〵は。しやうてこい〳〵。譯知らぬ。亂れ亂るゝ峯の白雲。さら〳〵〳〵〳〵。あなたへもつれてこなたへ誘ひ。しどもなくこそ見へにける。

濱の松風

あはれ古へを。思ひ出づればなつかしや。船路長閑き海原や。四海の波を汲みて知る。見れば。月こそ桶にあり。月は一つ影は二つ。滿つ汐の。よるべ渚に立ち出でゝ。いざや汐を汲まふよ。磯馴松葉の夕煙。三歳は爰に須磨の浦。寄せてはかへすかたをなみ。それは行平さんを待ちあかし。浪にたゞよふ捨小舟。こがれて渡るかひもなし。待つはつらいと皆おしやんすけれどもナ。忍び待つ夜は樂しみに。しめて根松と二葉の松の。中に小松と思ひしに。それ〳〵〳〵。そふじやへ。まつに添寢の蔦葛慕ふ心はナみなもとどはり。今宵やいのと文かきのもと。首尾を見合せ逢ふ中とみの。最早夜中は權中納言。さまに別れは坂の上の。是則さんへ

りながら。曇り勝ちなる胸の闇。エヽまヽならぬ娑婆世界。早更け渡る鐘の聲。迷ひも晴れて死出の旅急ぐ心は夏の夜に涼しき方の道のせを。照らし給はれ。三つのともし火。

大原女

東山のナ東山ナ。お月でやる〳〵。中でつかりしよ〳〵。なだしよ〳〵。けた〳〵よの。お月隱す奴は。ろく〳〵な奴は隱さねば。月を便りののらもどりの。野越へ山越へ畔道越へて。がつくりそつくり其まゝの。在所育と見へにけり。繼には八瀬の里育ち。軒の簾の床しさは。玉簾髪をとりあげて。誰に見しよとて夕化粧。わしがきりやうは誉もせで。姿がまいの生際がよいの。口説に無理なひぞりごと。わしほど優れた女をば。嫌ふおまへの氣が知れぬ〳〵。エヽエヽ男冥利が盡きやうぞへ機嫌なほして君と我。共におちよまの我里と。心よくて追分女郎衆へ。淺間山から鬼か出るへ。船出のお市は名代の女で。ちよいと出る時にも。手織前垂着物はびんろうじ。いしわり雪駄で。ちやら〳〵ちらめき。踊り見るよりおいちが手品の。面白やエ。やらじやら〳〵。やらじやませ。草葉にすだく鈴虫の。影をうつるや。

鹿島踊

草オヽなどり草。または岩間にしどけなく。しどけなりふりをさなき獅子の。遊び戯むれ友呼びかはすれつれつもつれつ。あなたへ誘ひこなたへ誘ひこなたへ寄りつ。いとしほらしき風情なり。秋の眺めや通天のはしたなく散るもみぢ葉は。眞間の繼橋。まゝにして千束の橋やふみはろ〳〵。とりちらしたる亂ればし。さゝやきの橋いつか其。洩れてやよそに岩橋いやを。常盤の橋の千代かけて。今を盛りの冬牡丹。匂ひ滿ち〳〵。大巾利巾の獅子頭。けにも上なき勢ひの。しゝとらでんもかくやらん。萬歳千秋と舞をさめ〳〵。獅子の座にこそなほりけれ。

加賀の千代

ゆき暮れて。うつら〳〵と夢見草。夢に結ぶの神さんへ。賴むのかりの一筆に。いつしか戀に濡燕。比翼の床のちわごとに。別れを告ぐるひもすどり。ヱヽ憎らしい手枕や。のちの逢瀬を松葉ちやう。首尾と心を殘すらん。

夕顔

きのふまで。詠めし花もいつしかに。けふは我身と夏草の。日にぞしほるゝ憂き思ひ。せめてあはれと夕顔の。露の命とかねては知れど。知らではかなき夢の世や。袖は淚のかわくまも。泣いて明かして山時鳥。一聲空にさへ渡り。日の鏡は照

男はだかでナア百貫。くわんの寒も土用もわしや苦にならぬ。エヽほんにへ。お門へ立つた一門に。見かぎられたる破衣。手桶とみがら一しんに。浮世を渡る道樂寺。八宗九宗を丸のみに。さかむに如來鼻の下。宮殿建立とうきたりや。とう〳〵〳〵とうときおいぐち。ヤレどらがによらいヤレ〳〵〳〵〳〵ちよぼくれちよんがれ。そもわつちが。のつぺらぼんの。すつぺらぽん。すつぺらぽんの。のつぺらぼんと。坊主になつたる。いはくいんねん聞いてもくんねへ。しかも十四の其春初めて。一軒隣の。いつちくだつちく太右衛門どんの。おんばさんとちよぼくり。色のいの字のわぢ覺へ。裏のかみさん。むかふのをばさん。お松さんにお竹さん。椎茸さんに。干瓢さんと。さはりしだいに。おてヽん枕で。やつたわけくが。女郎とでかける。ヤレ〳〵畜生め。そうだぞやらかせ。てれん手管に。がらがらかヽつて。家にや片時。お尻もすわらず。舟じや危ねへ。お駕籠で來なせへ。なんのかのとの。親切ごかしに。いよくびだけ。はまつてのめつて。だりむく。むくつたぞ。其時に。ぶんながしたる大酒落に。さらば是から。惡玉踊はどふじやいな。なつときなせと面白や。鳶烏にならるヽならば。飛んで行きたやねしの側。ねしと二人でわしや暮すなら。酒に苦勞はおきながし。鍋釜へつヽい銅壺藥鑵に擂鉢か擂木か。

鹿島のや〱。手振はふりの宮雀。おじやれが申す神の告。ことしや世がよふて豊年で。米もじうぶん作も出き。ほんに綿さへ當り年。有卦が七年無卦五年苦界十年川竹の。水性ならば取り分けて。身うけに入りし金性は竈の神のたゝりなし愼みたまへ戀風を。よもやぬけじの要石。諸國諸在所津々浦々を。廻る紋日の里通ひ。戀の奴と白張の。鈴を振り〱來たりけり。是やこなたへ。名代ごめんを受けて。是は鹿島のことふれや。鈴振り立てゝ聞しめし。先づ第一女夫が中も睦まじく。内外の玉垣不淨を拂ひ。みこ踊りて神いさめ。これはいナ。鹿嶋浦には。たからき船がつん着いた。オヤモサ〱。御代はめでたのナア。これはいナ。御代はめでたの。サンサ若松樣よ。おつやがとつさん抱いたら放すな。てんぼう所じや。オヤモサ〱。ことしや世がよふて穗に穗が咲いて。桝は入らひて箕ではかる。聲も高天が腹鼓。なるかならぬか引いても見やれ。しめてよいのは博多帶。恥かしうござるおとましうござる。ござる度毎にお茶立てまゐらしよ。まゐりや腰膝草臥申す。こちは御ゆるされ寢なりや申すと。ねはらばふ。うたふもつきみが代は。仰ぐもおろか。さつさつの。いざや我が家へ歸りけり。

願人坊

つか逢瀬をとこふしに逢ふて離れぬ蛤の。其月日貝馬刀貝といふを頼みの妹脊貝。未だ戀にはいたら貝。日も早西に入相の。極樂寺の鐘の聲耳を貫くばかりなり。由井が汀に寄する浪。峯の嵐に揉み合せ。寄する浪はとう／＼と。どつと打つてはさつと引く。日本無双の名所や。雪の下へと急ぎ行く。

犬神

そふよふたる。くゝとんがんひにのせられて、けんひけんていおのづから。此身に受けて淺ましや。我も北斗を拜しては。心のまゝに姿をも。うつすや池の水鏡。かづく玉藻に梳り。其通力も忽ちに。蘭麝の香の馥郁と。薫りにおそれ本性を。見るにこはさも忍ばれず。野干の形顯はせし。はかなの巳が有樣や。野末の草の葉がくれに。葛の恨みのうらめしく。親の敵のうつゝにも。夢にも忘れやるかたも。泣いて明かしてくま／＼と。焦れて燃ゆる狐火は。炎となつて去りやらん。煩惱の犬のいかにせん。紲に繋ぎまとはれて。伏して見寢て見執着の。尙去りやらん思ひにより。よめり／＼と里の子に。囃し立てられしつぱりと。露のかごとの草枕。ひとり寢の床の内。ねむるとすれど犬塚の。ちやつと起き立ち身をふる尾花。こなたは尾をまきねらひより。寄せじとたければ飛びのいて。瞋恚の劍忿怒の

序におやぢもそへじやいな。滅多に手まかせ足まかせ。げんぱちおうしやうは雲を闇。勇みちらして入りにけり。

相模蜑

在所ながらもナ名所がござる。相模女子の笑顔もよしや。振袖の模樣は濱の貝づくし。目籠に拾ふみるふさの。ふりさけ見ればまん〳〵と。月も宿かる武藏野の。空もひとつに契りしし。眺めに明かぬ景色かな晩に待たしやんせ。こき洗ふてしまふて。牛に水くれふて。苫を敷寝の楫枕。戀に焦るゝ遠浦の鷗。浪に浮寢の其中々は。番離れぬ戀すてふ。あれゐの花を見るにつけ。なぜに見捨てゝ歸る雁。跡に嵐の吹くともまゝよ。花吹雪。雪の吹雪は富士の峯。それを見やてかう〳〵。戀にや心もなかつくの御詞に。はつと欺されて。それで寢もせで泣さや明かす。これやまことにせう〳〵の。夜の雨にも濡れてくる。千雨取るとも馬方よ。しやれなんなせに。腰に馬柄杓。手にや又煙管。吸付煙草で知らすのが。こつちの大事の男をば。ほてつぱらゐが何とするのじやへ〳〵。唄ふ小歌の貝盡。君の姿を見初めて。ひく袖貝を打拂ふ。戀は鮑の片思。あだし仇浮櫻貝。梅の花見。其身は粹な粹な酢貝は男の心こちの姫貝。一筋な女の心は。そうじやないわいな。い

つかみ振り廻されて水車。淀から伏見へ一飛に。越した鳥居の廉の玉屋で。休んだ床几のうちかへり。草臥足なら駕籠よかろ。駕籠かゝんすか。駕籠かくのじや。くもかさきかた目なし鳥か。わとかたじや。はい頼みましよ／＼。杖に及ばぬ一散走りに。下り船じやが合點か。がつてんじや。櫓を押し／＼二ちやう立て。エイサッサ／＼／＼／＼。船は女子に譬へし物よ。いやなおらしにひらきによう。思ふ方へと入舟ならば。エゝそうじやへ。花の都へ歸りけり。

のぼり夜船

のぼり夜舟は。かいや艪じやとて。楫音つたへ。佐田やひらかた淀。水に車はくる／＼と。伏見へ着くへ。オゝイオゝイ脚半の紐じや。まひとつじや。三尺帯じや。まひとつじや。笠じや簑じや。シテ歩くのじや。

仕丁

てれてん／＼てんとうまかせ。昔は花のやるせなや。酒と云ふ字にぐつと一杯。エゝ機嫌上戸水桶さらへも打ち捨てゝ。わたりきよろ／＼來たりけり。野わけのわしたならねども。朝風寒く供待も。大盃をひつかへエゝ飲んだりや。治郎又押さへたりや。五郎又合ならござれと。太郎又が廻らぬ舌に。燭臺は丼火鉢で南

牙。とぎ立て〳〵いどみあふ。親の別れの其境ひより所定めずうろ〳〵と。戀し床しいさながらに。人間よりは百倍の思ひ重なる胸の內。仇も報も白眞弓。犬追ものや鼠罠。かゝるも知らぬ輪廻に引かれ〳〵て。さはゆへ親の恨みのしもと。聞くを追つとり擊つてかゝれば。寄せ付けず。貞女を守る朝鮮犬。ようせいきしんが犬とても。かくはあらじと耳逆立ち。吠ゆれば叫んで出で向ひ。おつゝかへしつ其風情。いのふやれ我古鄕へ。戾ろやれ。其名玉をと立ちかゝるを。よりたかやらじと引き留むる千枝狐がかへりざき。姿の花や六つの花。木ごとの花の顏見せは。めでたかりける次第なり。

伏見座頭

官に登ると徒歩から行けば。道の伽とてイエ〳〵エト瓢簞酒を吳れた。情の露雫もりぐちの言葉にはやす。人の噂もさだかにやならぬ。宵の口說なりやつい解けやすい。帶のひらかたおじやれが招く。せめて一夜は天の川。泊りかへ。とまらんせと。いふ口ちよつとなめつたら。惡い事しなさるな。振袖かわかづめか。但しはとしまがおすきかへ。見取にさんせといふたれば。いや〳〵我等は水に捷む。かはづにいなふといふたれば。どつこいならぬとうしろから。袴の腰板ひつ

合町や丸山を。洒落た顔しておかしやんせ。わんなんこんなんわんたらり。よかもさばつてんおそろんか。日本詞で。洒落やんす。酒をやめても浮氣はやめぬ。それが勤のうさ晴らし。世話やかしやんすな。おまへさんのお世話じやわるまいし。靴音たか〳〵響かせば。それと見るより唐團扇。補襠脱ぎ捨て走り寄り。ちと取りにくいむなづくし。どつた方から涙ぐみ。どんぐわんさん是れマア胴慾な。そも入船の其時に。にほひせんかうの移香も。ほんに忘られぬ嬉しさを。覺へてかいなと取り付けば。ヤアぬかしたりとらげいせい。もうおけろんかいけろんか。座敷上手に小唄節。沖の島山ちくらかいそよ。鮫や鯨が面白い。サヽヽ沖の島山わんなんこくよ。珊瑚瑪瑙が流れ寄る。サヽヽ寢言まぜりの口拍子。早入船のよそほひにてつこふつかいが先拂げにや治まる。四海浪。其淸國のいさをしさ。

都座頭

都登りのかす一座頭杖をもからにとぼ〳〵〳〵〳〵と。夜更け小夜更け鼻唄小唄。いやおんらが在所は奥山の。てゝうちでんぐり〳〵。栗の木の根を。枕に轉寢この小女郎は。戀する山家のしなもので。小褄はら〳〵かいどり褄で。エヽみ

無三寳。將棋倒しに泣上戸。此水鉢の割れたのを。見るに付けてもお娘が事。今年十二で麻疹も輕ふ。はやり風さへハアクシャミ引きもせず。つい十三で此やうにと。しやくりあげたるため涙。側にはヱヽむつと。ヱヽ何だへ。此水鉢がヱヽ割れたといつて。お娘の事でヱヽ泣く氣なら。水壺が割れたなら。婆さまの事で泣くであろ。ヱヽわた外聞だと腹立も。笑上戸はふき出だす。ふゝ／＼こいつはえいわい／＼。ワハヽヽハヽヽ。腹を立てたり。泣いたりして。どむこむいへなへ／＼と。オホヽ。ワハヽ、ワハヽヽ。何でもかでもふへるのは。めでたい事ではごんせぬか。それに涙を溢すとは。筋を出したりオホヽおいた。オホヽヽヽワハヽヽヽおいた／＼／＼。わけなばよいとしどもなや。まだも廻るは風見の車。挽臼鐵棒ちやうちん切店。盆の踊は淀の水車。上野に六角堂四國を廻るは長家の佐治兵衞さん。そんなに廻ると目が廻る。違ひないのそふだよ。そふじやいな。早日も西に傾けば。しんせんさして急ぎ行く。

唐人

入船を。待ち明かしたる長崎へ。どつと碇をおしかりも。かへり三桝や市川の。團十郎と聞きや唐までも。つよい／＼評判の。重荷小附の御贔負を。ありがたや。寄

を撞く時は。是生滅法と響くなり。晨朝の響は。生滅々已入相は。寂滅爲樂と響くなり。聞いて驚く人もなし。我も五障の雲晴れて。眞如の月を詠め明かさん。言はず語らず我心。亂れし髮の亂るゝも。つれないは只移氣な。どうでも男は惡性者。さくら〳〵と唄はれて。言ふて袂の譯ふたつ。勤さへ只うか〳〵と。どうでも女は惡性者。都育ちははすはな物じやへ。戀のわけざと。武士も道具も伏編笠の。張と意氣地の吉原。花の都は。歌でやはらぐ敷島原の。勤めする身は。誰と伏見の墨染煩惱菩提の鐘木町より。難波よすおに通ひ木辻に。禿だちから室の早咲。それがほんに。色じや。一二三四。夜露雪の日。霜の關路も共に此身を。馴染重ねて中は丸山。只まるかれと。思ひ初めたが緣じやへ。梅とさん〳〵櫻は。何れ兄やら弟やら。わきて言はれぬ花の色へ。菖蒲杜若は。何れ姉やら妹やら。わきて言はれぬ花の色へ。西も東もみんな見に來た。花のかほサヨオへ見れば戀ぞますへ。サヨオへ。かはゆらしさの花娘。戀の手習ひつい見ならひて。誰に見しよとて紅鐵漿つきよぞ。みんなぬしへの心中立。おゝうれし〳〵。末はこうじやに。そうなるまでは。とんと言はずとすまそゞへと。誓紙さへ僞りか。うそか誠が。どふもならぬ程あひに來た。ふつゝり悋氣せまいぞと。嗜んで見ても情なや。女子には何がなる。とのご

しらした。旦那一つくださりましよ。ちようど注いではあゝあつゝ。盲に熱燗とはこりやづゝない何じや肩を揉め。かしこまつて候ぞや。元より按摩はしよたいでござる。按摩けんびき揉んではつてはりこんで。騷げや〳〵。きなさのきなさの。やなぎやなぎよすぐなる柳。いやな風にも靡かんせ。こぞの初秋七夕の。それへ〳〵でやつこせ。女郎のまことゝ玉子の角は。ないものと歌にさへ。あれば三十日のまんまる月よ。エゝエゝゝありがたい。仲居が取りもつ酒ごとに。出て來る喜介が咳に。お松が氣轉のはやり唄。替るまいぞと誓紙もあるに。みせつけな男づら。おまへ其氣でわしや何としよぞいな。エゝエゝゝ憎てらし親の異見も何のその。耳にも懸けず出でゝ行く。今宵は宵から籠の鳥。面白や罪を滅することとなれば。此世の罪ははれぬとも。來世は罪もはれやらん。

八重一重

八重一重。山も朧に薄化粧。娘盛のよい櫻花。嵐に散らでぬしさんに。散りてなまなかあと悔し。恥かしいではないかいな。

娘道成寺

鐘に恨みは數々ござる。初夜の鐘を撞くときは。諸行無常と響くなり。後夜の鐘

しき。冬は雪見の亭床し。よい〱よい〱〱。ありやゝこりやゝ。よいとな。うきに浮かれて。第一中有に迷ふた。さんげ〱六根さいしやう。南無不動明王。南無不動明王。おゝなんでもせい。〱。〱。動くか動かぬか。なまくさばんだばさらだ。こりやこりや。動かぬぞ。眞言秘密で責めかけ〱。珠數のあるだけやつさらさ〱。せんだまかろしやな。なんのこつちやへ。そはたやうんたら。なんのこつちやへと祈りける。謹請東方。青龍しやうりうしやう〱。謹請西方。白體白龍。一大三千大千世界の。恒沙の龍王あんみんなうじゆ。おいみんりきんのみぎんなれば。いづくに恨みのあるべきぞと。祈り祈られ飛び上り。御法の聲に。金色の花を降らせし其姿。げにも妙なる奇特かな。

亂菊枕慈童

千代までと。咲きそふ花のまさり草。久しき君のためしかな。藥と菊の紫の。雲色深し深谷水。是はむかし周の穆王に仕へし慈童といへるものにて候。峯の初花谷の月。七百とせもきのふけふ。名をも彭祖と呼子鳥。おぼつかなくも唯ひとり。都の空を戀衣。夜半の嵐に梳り。あしたの雨に髮洗ふ。木の葉衣の綾錦。我から染むる秋の色。さくの一夜の夢にさへ。思ひ出づるも耻かしや。げにいにしへは宮

とのごの氣が知れぬ〳〵。惡性な〳〵氣が知れぬ〳〵。恨み〳〵てかこち泣き。露を含みし櫻花。障らば落ちん風情なり。面白の四季の詠めや。三國一の富士の山。雪かと見れば。花の吹雪か吉野山。散り來る〳〵嵐山。朝日山〳〵を見渡せば歌の中山石山の。末の松山いつか大江山。いくのゝ道は遠けれど。戀路に通ふ淺間山。一夜の情有馬山。いなせの言の葉。飛鳥木曾山待乳山。我三上山。祈り北山稻荷山。緣の結びし妹脊山。ふたりが中の黃金山。花咲くエイコノ〳〵姨捨山。峯の松風音羽山。入相の鐘を筑波山。東叡山。月のかほばせ三笠山。只ための氏神さまかはゆがらしやんす。出雲の神さんと。約束あればついにひ枕。里に戀すれば浮世じやへ。深い中じやと言い立てゝ。こちや〳〵よい首尾で。憎てらしほどいとしらし。花に心を深見草。園に色よく咲き初めて。紅をさすが品よく形よく。あゝ姿優しやしをらしや。さあ〳〵そふじやいな〳〵。さつき五月雨。乙女〳〵田植唄。裾や袂を濡らした皐月。吉野初瀨の花紅葉。更科越路の月雪は。しゝとらでんも時を知る。げにありがたき法の庭。笙笛琴箜篌。夕日の雪に輝きて。歌ふも舞ふも法の聲。なんでもせい。アゝなんでもせい。春は花見の幕ぞ床しき。夏は屋形の舟床し。よい〳〵よい〳〵〳〵。ありやゝこりやゝ。よいとな。秋は武藏野月ぞ床

へさん〳〵戀風と思はんせ。オヽそれ〳〵それ誠々。かさで逢ふ夜はナア月の雲づらにくや。いとししんきの顔見たや。いとししんきの。なん〳〵情の。それが誠にてんと誓文我思。それが浮名のナ。立つともこちや嬉し。いとししんきの顔見たや。いとししんきの。なん〳〵情の露や時雨や。でんと誓文我にはひ。それが浮名の。たつともこちや嬉し。ちらぬ姿の乙女菊。もとより藥の酒なれば。醉にもをかされす其身もかはらぬ。七百餘歳を保ちぬるも。此御枕の故なれば。如何にも久しき菊の水。汲めや汲め〳〵盡せじと。菊かきわけて山路の仙家に。其儘慈童は歸りけり。

神樂月惠方萬歳

げに朔旦の冬至梅。もろこし和おしなべて。けふ元日の壽や。珍らかなりし霜の月。花の顔見せ若々と。千代のはじめの鶴太夫。萬代かけて龜太夫。素袍烏帽子もたをやかに。御萬歳とは年も相生。門松竹の。色は變らぬ御代の春。かつかる目出たき寶の君の。御殿づくりの結搆は。瑠璃や珊瑚の玉の階。西と東に金山銀山。白金や黃金の。日輪月輪の。わたり輝く其景色。誠に目出たふ候ひける。はやせや才若やしよめ〳〵。京の町のやしよめ。賣つたる物は何々。大鯛小鯛ぶりの大魚。鮑

中にて。錦の褥玉の床。君が情の言の葉に。露の契りを重ね菊。いとしかはいも妹と脊の。戀にもはるか增鏡。おろの妻こふ山鳥の。あだな假寢もつれなきを。末しら菊の玉かづら。人目の關は越へもせで。枕の咎や亂髮。今は深山に世を捨菊の。かりのはつかのたよりも絶へて菊の葉末にかく文字の。筆の命毛切れはてもせず。汲むや流れの菊の酒。おひもおさへも一本菊の。かぶろ菊とは笆垣の。ませたなり振川竹の。えんにひかるゝ名もかはゆらし。戀の命は初時鳥。月の影さへ空なつかしき。二度の逢瀨は時雨の紅葉。見ればそのまゝ顏に火が。高いも低いも色の道。後は互にいふことさへも。袖にわかるゝとめきのかをり。君と我とは飛びかふ蝶の。二つつれたる比翼の車。ちらりちら〳〵ちらり。そでや袂に春ならで。胡蝶の夢か幻か。風に翅のおしろいも。亂れ〳〵て。糸のもつれや思ひのきづな。花にあくがれ月にうかれて。待つにこぬ夜は。氷の地獄にせめられ。身をきるきづな。明け行く八聲の鳥鐘。火中に焔に苦しみて。くるりくる〳〵　日かげの小車。我のみ物や思顏。思へば昔なつかしや。初春霞秋の風。四季物狂と人や問ふ。人のながめも。袖にそよ〳〵　吹く風を。戀風とおもはんせ。オヽそれ〳〵それ〳〵　誠々。心も曇る胸の闇。かんならず月の夜にござんせ。つまかへさんつまか

しぐれに雨に。かざす肱笠袖がさ小笠。戀に人目をせきぢの笠は〳〵。かざす扇の手もとのしなよ。ぱつとうらふく嵐の音は。ど ふ〳〵どつとくる〳〵くる。狂ひの狂人。くるひ伏すこそおもしろや。

道行旅の初櫻

花の都を。いでそよ一人旅の空。あづまからげの吾妻路へ。はる〴〵來ぬる旅衣。しやんと小褄も春風に。もれてやにほふ花の山。のぼりくだりの道のべに。草摘む袖やかざし草。見わたせば。柳櫻をこきませて。今を盛りの面白や。急ぐ心かまだ暮れぬ。大磯の宿につきにけり。其色によくさゝやきそめし。花にうつろふ蝶よ胡蝶よ。戯れ遊ぶへ。枝垂柳に露の玉柳川添柳。つばめ小鳥戯れ遊ぶへ。おゝ面白の春景色。一しほの眺とて。しばし宿かる花のもと。むかし〳〵の神さんも。鳥がをしへし妹脊ごと。今の娘は六つ七つからげに戀はくせもの。空にも戀のゐるぞとよ。七夕樣の天の川。ふかき底にもあまの戀。あはれ鮑の片思。其まん中の戀すてふ。我名はたちし里の戀。あのしやうわるしやうわるじやぞへ。道のじやらくらしほらしや。にほひ櫻の。ちり〳〵〳〵散りかゝる。雪か花の雪吹か。ちりかゝるへ。袖笠の。うちぞ床しき花娘。旅の道づれ。招けば招く法界坊。ひよく

蠑螺蛤こはまぐりこはまぐり見さいなと賣つたる物は何々。オヽさて〳〵まゐるは是の御庭へ。數の御馬ぞ參りたり。目出たや〳〵。春の始の春駒なんぞは。夢に見てさへよいとや申す〳〵。大牧御牧の諸國の名馬は。ふじ白おら川櫻木早川。れんぜんわしげに月毛に雲雀毛。はいしいどう〳〵。よいとや申す〳〵。轡の音がりんがら〳〵。踏むやひづめのひやらとり。室咲梅の花笠や。人が傘をすならば。我もさしかけ雪見傘。げにもそふよの。やよげにもそふよの。忍ぶ戀路にや隱笠。あひに合傘中のよさ。ちるな散らすな六つの花笠。天下泰平國土安全。君もゆたかに我等も浮れて。鼓太鼓の音に寄せくる四海浪。をさまる御代の萬歲樂。百萬年の御祝義と。開く扇の末ぞ目出たき。

雪吹の雛形

げにや船きそふ。堀江の川のみなぎはに來居つゝ鳴くは都鳥。それは難波江是は又。名にし吾妻の花なれや。花の顏みせ陽氣だつ。浪打ち寄する。磯にむら〳〵村千鳥。亂れて遊ぶ我もいざ。亂れ心の柳髮。ちらり〳〵ちら〳〵雪の。降れや積れや思ひぞつもれ。外山八重山端山に月の。船は西へと入りてけり春前に雨おつて花開く事はやし。秋後に霜なふして落葉おそし。色ぞる木々の錦見よやれ。

さ〳〵。びんとすねては見すれども。ついあやまつてはりよはく。なぜ女には生れたぞ。よいやさ〳〵。よしや世の中いたづらに。山めぐり。一樹の蔭や一河の流れ。是みな他生の縁ぞかし。まして我名を夕月の。浮世を渡る一ふしも。狂言綺語のみちすぐに。讃佛乘の縁ぞかし。おら御名殘をしや。暇申して歸る山の。山はもと山水はもと水。塵積つて山姥となれる。春は花咲き紅葉も色こく。夏かと思へば雪も降りて。四季おり〳〵の山めぐり。萬木千草も一時の戯れ。面白や〳〵。鬼女が有樣見るや〳〵と。峯にかけり谷に響きて。今までこゝにあるよと見へしが。山また山に山めぐり。山また山に山めぐりして。行衛も知れずなりにけり。

山姥四季の英

春　山うば

それ山といつぱ。天雲かゝる千丈の。梢にひゞく山彦の。山はもと山水は水。塵ぞつもりて山姥と。かたちは晴れて春景色。峯のかすみは帶すなる。あしから山にかけわたす。山より山の岩橋や。四方の梢の一やうに。春は花紅葉色こく夏かと見れば雪ふりて。四季おり〳〵の戯れに。つゞみは瀧なみ袖は白妙。雪をめぐらす此花か。なにはの事か法ならぬ。よし足引の山姥が。山めぐりするぞ面白や。ま

りひよ〳〵。ひよくり〳〵〳〵〳〵。ひよつと出て見れば。野でも山でも畠でも田でも。戀の世の中戀の世の中。袖ひくつま引く三味を引く。大磯小磯のさとざとも。入相をしむ花盛り。實淺からぬ歌枕。

山姥

山の端に。心も知らで行く月を。うはの空にて影や絶えなん。見しも聞きしも花心。色をも香をも捨てざりし。ふたり添寢の長枕。こちよれ枕。身に添ひそめし移香の。にくふはないもの。そちの心が變らねば。こち木枕一筋に。これ此處に。たゝみ枕や文枕。口に任せて塗枕。あとやさきなる言葉の端を。黒枕のない人さんが。縁が因果かかはゆらし。こなん思やてそ。四つの太鼓を合圖に來るに。宵はいづくに隱れて拔けて。鐘の鳴る時今來た顏で。よふ知ると思はんせ。にくい仕方と思へども。顏見りやいとし。まこと浮世がまゝならば。うそつく男がなかよかろ。恨みがちなる神佛。待宵は。三味線ひいてしんきぶし。逢うて別れてきぬ〴〵の。袖よ袂よ恨みわび。末はどふなる事じややら。よいやさ〳〵。こつちにさわりのない操。唯一すぢに糸卷の。しめくゝりせし合の手も。逢ふ時ばかり引きよせて。よいやさ〳〵。いとしかはいも皆うそのかは。ばちあたれとは誓ひてし。よいや

がや芹生の野邊の色。賤が樣なる賤しき身にも。朝な夕なに物思ひ。戀の重荷はさりとはつらや。牛の綱引く男七夕。空に知られぬ妹脊でと。かはい〳〵買はんせ。是なふ戀ざかり。

冬 うかれ座頭

位とるとて都をさして。座頭のぼう〳〵。ついでながらに名所や古跡。さぐりあるきて。寒のしはすもいとはぬ氣丈。杖を力にそれさこれさ。あぶない所も合點だ。ぞてぞのひやうしで。けつまづいてわいたして。心よささそな草枕。二人ねん〳〵。ねがちに引きしめて。まこと明石の浦ならば。我にも見せよ人丸樣よ。ほんに見たさは限りなや。八瀬や小原の片山里に。沈や麝香はもたねども。匂ふてくるは薫物。大原木〳〵。買はい〳〵。黑木めされよ。てうりやうふりやう。ひやうるり。るりやう。ふやううり。ひやうろるりてうふれう。麻の中なる一蓬〳〵。よれてかゝるも緣で候もの。親や子じやとてのふ。さのみに人なしめし候。しばしたゝずむ下紅葉。たつる錦木綾の竹。綾どるひやうし砧の音の。情あるなら小夜ふけて。でざんせでざんせ。枕並べて語るぞへ。さいなおもはく樣の空見れば。ともにながるゝ我心。かざす袖笠紅葉笠。人目耻かし目關笠。月には忍ぶ隱笠。百夜も通へ車笠。

つに嬉しき花の顏。頓て二人が見つ見せつ。戀ぞ積りて淵瀬川。かはらぬと皆さんを。ほんに結ぶの神さんと。願ひまゐらせ候かしく。どふで皆さんすいじやもの。耻かしや。老を忘れし樂しみの。我子を招きて山めぐり。山また山に山めぐりして。行衞も知れず成りにけり。

夏　金太郎

乳房離れし其日より。熊や猪友だちに。引きつれつれて夏木立。母を慕ふや山水の。かげはおどろのかぶつきりおのがさま〲鉞の。上にひよつくり。おんどりさいはねのふぢで。智惠の輪の。猿が杵もつ大山の。臼でつく〲でん〲太皷。おきやがり小ぼうし振皷。羯皷拍子の音もいさぎよや。つんと〱。あと長崎へちやつと〱おじやいの所なれたるいたづらや。しゆくしやむすびはオヽそれよの。ねざゝおり。山ぼこおはひ風車。太皷の音は。してゝいからとうつのやんさ。してゝいからとうつの。花の振袖しはらしや。げにくわいどうがあひざかり。勇ましかりける風情なり。

秋　黑木賣

折りそへて。秋の眺めや花紅葉。我も思ひのあればこそ。君故ほんに八瀬の里。さ

布ざらし

しやござかしや愚人ばら。我をあざむく者あらば。こんな微塵になさんとて。大手をひろげて待ち居たり。其時寄手の大せいは。たとへ如何なる天魔鬼神のいきほひありとも。いで〳〵からめとらんとて。はがねを鳴らして飛んでいづれば。ひらりとはづしひら〳〵〳〵。ひらり〳〵〳〵と。四季おり〳〵をさま〴〵に。さま〴〵に。今見る如く覺えしは。是ぞ神慮の威德なり。

蟻通

和歌の心を道として。〳〵。所も住吉。玉津島に參らんといで其ころは雨もやみ雪の降り積る。鳥居玉垣げにおもしろたへの景色やと。誰か是をほめざらん。中にもつらゆきは。御書所をうけたまはりて。いにしへ今までの。歌の品を撰みて。よろこびをのべし君が代の。直なる道こそ有がたや。六つの花。匂ひのあらばさぞ嬉しかろ。雪をいたゞき笹もひきずるへ。水仙寒菊山茶花の。柳の枝に雪をれはなし。雪ころばし雪まろめ。雪見づれ。梅も櫻も野路も山路も。初雪おと雪たひらゆき。山は富士の根。いつも雲景色眺むらん。四季おり〳〵に御見物様方。御ひいき頼みあげますとぶきや。

くるりや／＼。やつくる／＼／＼車笠。江戸で名取の妻折傘じやへ。四季の花笠見事さよ。瀬川ぼうしの譽かな。

花笠踊

扨も見事に揃ふたとうなりきつれてつれた花笠や。内ぞ床しき花の顏。どれが姉やら妹やら。よふ似た／＼。さつても似たじやな／＼。どふともかうとも。云ふにいはれぬ風俗や。鎌倉風の今様を。またやはらぐるさゝめごと。九十三ぎの大一座。大磯小磯けはひ坂。名ある女郎衆を引きよせて。思ひ／＼にさす盃の。まだ聞きなれぬ女郎の名も菊川の菫草濁らぬ戀を總角の。歌川小式部半太夫。此面白き其中に。虎さんひとりござんせぬ。わけに心もすまぎぬの。糸くりかへす口々に。和田さんも心づき。三度迎ひにやりてまで。行けど返事も白玉の。さわらば吉野と云ひすてゝ。あさ様を使に立て。今や／＼と其返事。松坂越えて。是を來て見よかしのへ。今宵忍ぶと。さんさくる文枕。首尾に逢ふ夜は袖枕。ふたりねがちに引きよせて。皷枕の。しめつゆるめつ長枕。うたゝね枕のしみ／＼と。かはす枕の肱枕。／＼。末は實の妹背中。つもる思ひは。そつちもこつちも物思ひ。いふかいはぬか誓文かけて。神に誓ひの二世枕。契るも浮世の戀ぞかし。

衣笠山よなん〳〵なんでも錦織なん〳〵でも錦織。裾はちらはら紅葉ば散らす高尾とがのを。いやといはれぬ。どうもいはれぬ。袖をひかへた男山。これも愛宕の御利生。をかのゝぼれば。さつさえいさつさ〳〵。さつささぶろく十八町。嵐山風厭はで北山。春はかならず東山へござれの。花の盛はまん〳〵丸山。

山伏歌踊

男持とならのあさはれ。しちやほんこの。山伏男を持ちやれの。元結ねらず袴きず。やれこりや袴着ず。のんやほのあさはれ。しちやほんこの。山伏男を持ちやれの元結ねらず袴着ず。やれこりや袴着ず。

浦づくし踊

和歌の浦なるいきがた男戀に通はゞ千賀の浦。文とりかはす袖の浦。紅うら白うら淺黄うら。伊達を駿河の三保の浦。なりよき振よきふしを荷ふた。たん〳〵たん田子の浦〳〵。晩にや必ず〳〵かたゝの浦と。筆が使にくる夜の。君に大津の浦は七浦。なん〳〵。ドッコイ〳〵なあ七浦。なん〳〵〳〵七浦。これからさきも七浦。なん〳〵ドッコイなん〳〵なあ七浦。なん〳〵〳〵七浦。かはらでこゝに須磨の明石の。浦は高砂。

菊づくし踊

かゝのお菊は酒屋の娘顏は白菊紅菊つけてよひこの〳〵よいこの小菊。とりなりしやんと菊ながし。咲いて見事な扇車のくる〳〵車菊かさね菊。猩々舞をまひのそで〳〵見初めて初めて戀に焦れ焦るゝ。身はからにしき通ふみち。しばぎく。ませがきさ。あし足でとん飛びこえ。づどんと飛びこえ。そん〳〵そんそつとした〳〵。一重二重三重四重。七重八重菊よ。御所の御紋は菊の九重。

都橋づくし踊

都大橋渡りて行かば。思ひ初めたよこいたの橋に。又も近江の瀬多の橋。かけよ情の一つ橋。人の心は假橋うき橋そり橋なれば。あだに其夜はもどり橋。つれなや君にふられてさ〳〵。ふられて〳〵。雪に降られて鵲の橋。ちよつとかはせし言葉のはしを。なんの忘りようぞ〳〵。それが嬉しゆて清水の。とんとろ〳〵とゞろ〳〵。とゞろ〳〵とゞろとんどろ轟の橋。積りて戀の大和橋。朽ちぬ四條の橋柱。

小倉山踊

小倉山から詠む言の葉の。歌の中山都の節よ。つゞく山々戀の山。伊達を飾るや

月は武藏野よい月だしの女郎は三日月。伊達な道中袖月。誰れを待宵あの顏つきよ。年は十五夜腰つき足つき。冴えた聲つき。なに夕月よ。桂男よ。さつさいとしかござれ。さつさかはゆかござれ十六夜月に戯むれ遊べ。えい〳〵〳〵。えい〳〵〳〵。てる〳〵つき〳〵。てる〳〵月を見たらば。なんとよござるまいかの。てる〳〵月〳〵てる〳〵月の面影。月を見あかし飮みあかし。

松づくし踊

にほの松山それ唐崎よ。志賀の浦わの一つ松。ずんとよい氣な姫小松。まつ夜は〳〵。君を待つ夜は遠山松よ。山坂越えて〳〵〳〵。見とて北野の七本松よ。ほんに必ず青葉の松よ。殘るきぬ〴〵衣かけ松よ。嵐松山さら〳〵どつこいさら〳〵。どつこいさら〳〵〳〵〳〵〳〵。さつと打つては濱松の。おとはざゝんざ。

さんがらか踊

荒い風にもよふやよやよ。おてまいさまを。やろか信濃の雪國へ。さあささんがらか川じやざんざら柳のよいやさ。しろねが〳〵。よい手は〳〵。こまのひざぶ。しんからが〳〵。信濃へやろか。やろか信濃の雪國へ。あささんがらか。

阿部川帋子踊

碁盤づくし踊

京は十らく樂しみ所。町は碁盤のなりよや見よや。四角四面な御分別。向ひおはすりや手に手をしみやる。よござる〳〵よい手が見ゆる。戀のなかてに。とゝんとゞぶおしだ。とゝんと飛ぶおしだ。渡り八目すんずんすとのびるはまは。なん百ろく〳〵。三百六拾目。いちごつれそふつれそふ中の。白いちん縮緬黑羽二重で。ぬめらんす繻子の帶。〳〵。しめつゆるめつ。よいなん中で。〳〵。打つや打つたり〳〵。おてゝん手を打つ。打つたりな。打つたり〳〵。おてゝん手を打つ。打つたりな。しやうずめ〳〵。思ひのたけの。よゝを重ねて。打ちやをさめた。

大津繪追分踊

上り下りに目に付く姿。露の命を君にくれべい。追分のだるま書心。鬼に衣はそげたもをかし。座頭走り井に犬が吠えつく。猫が三味彈く。酒飮む奴。愛宕參りに袖を引かれた。伊達な若衆が鷹手にすゑて。ふれやれ〳〵。大鳥毛〳〵。浮世のんせい。ぷんらんらんしんらんどんらん十三佛。掛針くけ針疊針。いゝ池のかはすげ。かさよりぽに算盤つぶ。關の淸水はうき名所。

月づくし踊

こゝなに吉めは。與五兵衛が君。たんだ〳〵すのこきみ。ちり〳〵かますのふぐた君。たんだかますのふぐた君。たんだおぼとこふんではおぼちよこ。けべいてはこちよん。燈火じや。ふやらの〳〵ふん〳〵ふ。ふやらの〳〵。それはへ。ふやらのそれはへ。

晒賣踊

晒じま。晒高みや晒しさらせば。娘は黒む。布はなるほど〳〵。なるほど〳〵。なるほど。なるほど。なるほど娘は黒む。白く成るほど〳〵。なるほど〳〵。なるほど〳〵。なるほど。力にまかせた。搗杵。娘は黒む。ゑじまをそれを見て。なぜに顔ふりやるぞ。ゑじま高宮なんとしよぞ。ゑじまは生れつき。

難波長吉踊

えい〳〵〳〵。難波の梅や。よしべ心は入江の海の。濁り淀みて住めども遂に。蘆のかたはの穂にあらはれて。引かれ出づるや心の鬼よ。せめて百兩の金ばかりかや。未だ幼なき長吉を殺すと。たくみあるとは夢にも知らで。主の使のかなしさは。是がな此世の名殘かや。えいこりや此世の名殘かや。長吉久しの姉に逢はしよぞ。さあこちおじやと云ふにだまされ。連れ立ち行きて。長吉さきの物は有

お江戸〳〵土産に。阿部川帋子〳〵。ありやこりやよいきてはござ〳〵と。さあんささあんへくわんこや〳〵。しやつき〳〵しや。ちんからこゝ。此までは走り出て見れば。〳〵。ありやこりや。戀の中やどさあおろせ。これさ〳〵。着てはござ〳〵と。さあんさゝあんへこつがらてくせ。天照大神御出なされて目出度いな。

ちゆつちゆら踊

烏かあか。かつちりかあかゝあ。鶯ちう〳〵。ちゆつちゆらちう〳〵。春になろとて。ほけきやうとないてさ。ほけきやうでんぐりかへしてさつさ。

づんがらもんがら踊

ゆのふとふげのまでじやくし。さゝつとしめかけさ。えいこの〳〵柄が長ふて。つんがらもんがら。からづんがら。もんがらやつてくりよ。常陸の國のつのをかに。しほうり長者と云ふ人が。黄金の築土をつくならば。蓮花はちすと云ふ娘。かれら二人の兄弟をこの衆と定めて。思ひのまゝにつくならば難なく築土は出來たるらん。よふつふなんよへ。

君ちり踊

薩摩の鹿兒島の長吉どのは。伽羅の板橋を渡るとて。こゝたはとんどへ。いで其頭は花見月櫻せたら負ふたる。なまず見つけた。長吉どの長松どの。長吉長松ちよろ〳〵。めさがわけておとして。藤の花をしつかとからげて。さつさ姉の土産に。

棟上踊

四本〳〵柱を。いよへおつ立て。大工のちこ助。これのお竹にほれましたさ。錐やしやつきりきりしやつきりき。〳〵。ちこ助の。こぎりこぶくら。やつこりやこりやこりや〳〵。引き廻し。一筆書いてはやりがんな。さてのふ親見たや。あの子うんだる親みたやちこ助鋸こぶくらやつこりやこりや〳〵引き廻し。一筆書いてはやりがんなさてのふ親見たや。あの子生んだる親見たや。ちこ助さあやるぞえい。松に子鶴が舞ひ遊ぶ。

源五兵衞踊

高い山からの谷底見れば。薩摩源五兵衞は目に立つ男の。はゝんにはしやれた。ぴんつき茶筅髮寢て又起きても茶筅髮。ずんどくぼんだ塗笠。おまんはどこへ。播磨の明石へ。蛤踏みに〳〵。はまぐり〳〵〳〵踏みにて。ぐり〳〵〳〵。舟にの。

るか。何んの事でござんす。金が懐に有るかと云ふ事。いや〳〵何んにもござんせん。出さにやあ殺すが一度で出せと。三斗土器はどな目をむき出せば。是は。旦那の爲替の小判。命助けて助けてたべと。手を合すればかしましい。殺しはせぬぞあゝと云へども。奥の納戸へ脇差取りに。行くを見てから身もふるはれて。むざんや吉兵衞は長吉を捕へ。さあどふする最期じや。あゝ悲しやな。此に姉樣でざらぬかいの。あら恨めしやと恨みなげゝど。つれなや梅は聲を立てたら。殺すと云へば泣くも泣かれず。かわいやな只鴛鴦の。羽でにかゝりし野末の糸の。そてにありとは夢にも知らで。親子親類かやせ〳〵長吉を。かやせ長吉かやせとな。夜一寝もせで迷たへ。

一番雞踊

ぼんさま〳〵。ちとたしなまんせ。うちにや女房子供もないものか。なんぞのやうに。性あるぼんさま。一番鳥の鳴く時は。こと〳〵〳〵と。叩き明けて。はや出るとの〳〵。内にや水がつくか。あまりの事いの〳〵。さつても〳〵。あまりけふてつ。

伽羅板橋踊

なうてならぬへも一つかへして足や千鳥足。西は田の畔わぶないがてんじや。わぶないがてんじや。わぶない〳〵。わぶなうてならぬへ。ぬれにやめのない。かな山どつていをとてへ。

お先鈍助踊

お先さわりやらん。りやんりや唐崎の。してゝん奴のはつたてろ。まかせておけろのよいやさ。是は豊後のわりやこりや。やり梅のやり梅。豊後のお先で。石突つかんですつ〳〵もちりて。ふれとんや。小臂でふれとん。やつとうやとう。しやんぎり〳〵〳〵。しやんぎり太鼓の。ずんでんとん。すゝの鈍助が。わりや上の町。下の町。中の町は晴じやほどに。胸鬚さすつて。すつ〳〵ふしいの。

福之田踊

さまが舟かや神戸ざき。沖の繪島の姫むろは。福之田〳〵。わのゝかんす〳〵よの。うけてのながくの。すはごんの。ごゞのすけ。おしやりやそうでござる。福之田〳〵。わのゝかんす〳〵よの。うけてのながゝの。すはごんの。ごゞのすけ。おしやりやそうでござる。福之田よ。いる〳〵福之田。

大小見踊

此舟に乘せた源五兵衞。壹萬八千寶藏。えい〳〵やえい〳〵。代の榮え。

長刀踊

さてもそなたはくわんくわつ人か。眞紅下緒の長刀。おつとり揃へた長刀。すやり〳〵〳〵。やり〳〵。すやりちかくとうさ。八方からめて。蜘蛛手かさやり十文字。御代は〳〵。一か二か三か四か。七つ道具で治めて。おつとり揃へた長刀。

小野村彥惣踊

城洲〳〵小野村の彥惣を見たかへ。頭茶筅。太元結で細元結で。ふともとはそもと〳〵〳〵引きしめて。地下で一人の伊達男へ。彥惣はどこへ山へさ。山へ登れば茨やとめる。いばらやつとん〳〵離しやれ。やつしてさ。日が暮れる。彥惣彥惣。彥惣の叔母御の。歌うて臼ひきやるいのめゝかまへ。臼の目じやものかまりよかい。彥惣〳〵〳〵〳〵〳〵。彥惣は地下で一人の伊達男。

山谷土手路踊

えい〳〵どつこい。長い刀を差いたは。御先片臂怒つて。やつしつつし。對の挾箱。つきどつこい鎗振じや。たてたへ山谷土手道な。ゑふたとさ。ゑふたとさ。足や千鳥あし。西は田の畔あぶないがてんじや。あぶないがてんじや。あぶない〳〵。あぶ

いつもより賑ふ門の二柱。でつくりと幾代重ねて。毎年の〳〵。惠方からとて。惠比須と大黑と。ふつくな身でござつた。祝ふて釣竿さわまゐろ。お前へござれ。くるかわとから〳〵。わとから見れば。丸福頭巾で。〳〵。にこ〳〵丸福頭巾で。につこりと今朝の笑顔はなはでつくり。なはにつこり。いとしへ。

福助買初踊

門は一五三かざり藁さげて。ものもどれ〳〵〳〵。どつてひどれ〳〵。どつてひどれ。當年の惠方より。福助が買初は。は目出度な。藏開き店おろし。革の財布を肩にひつかけて。古金買を。からかね買を。文の上書きしやうの下書。買ひましよよい〳〵。伽羅のたきがら。かをやれかをおふかを。心中のよい女達を。千年も萬年も。まん〳〵年も。正月買と祝ふた。

有卦初踊

花は四季咲くやれさて都は錦。野山つゞきて一ぱいに。えいずつしりと。とことことんとことと。〳〵。つんと〳〵。つゝんつとゝんと。とこ〳〵〳〵〳〵。ずつしりと。有卦七代の年八卦。正月初事初。やれ十七八も有卦初。火性はつらりつ。とことんとことと〳〵。つんと〳〵つゝんつ。とゝんとどこ〳〵〳〵〳〵〳〵。ずつ

鹿嶋浦からのふ浦から。〳〵。寶舟がついたとさ、かはのわかやぐ年男。よい事よい事。よい〳〵事。〳〵よいことぶきを祝ふて。事觸がまゐりた。是やこなたへ。ごめんなろ。まづ來年の惠方は。申酉の間をば。年德神と定めて。庚辰の年初め。卯の十六日が豆蒔だ。わつとつかんでよいやさ。鹿嶋踊をばちゝちつとちと〳〵ちつと。踊り拍子にかゝつて。こりやこなたへものとふ。まづ正月は大かの。はて大とも〳〵二月小。三大四五小々た。夫れ六月は大よの。さて〳〵さて〳〵。どつこひ。七八月は小と定めて、九月は大の菊月。十月小はがつてんか。霜月十二月は大小。きはめて〳〵。しつかときはめて。大小げんと定めた。

下六藤六踊

えいどつこいえい〳〵えいこのえい。どんな婿がくるやら。下六藤六と。御樽持つて參つた。おつとりそろへた御祝儀。霰まじりの霙酒。春はめでたひ屠蘇の酒。ひつかけて花橘。やれ宇治水えいどんな。うんえいどんな。池田伊丹の下六と藤六が。晝は前垂玉襷。夜は繻子の三重廻り。ちんたの酒や信濃酒は。婿殿のおすきじや。

丸福頭巾踊

ち解けて。おりや山雀の。おの〳〵おの〳〵おの〳〵。おのがひきよくの羽もかろく〳〵つまさきしづめて〳〵つでもの〳〵。つでもの〳〵えゝへえさしさはへ〳〵。けさ初聲はしほらしや。

卯の葉重踊

日本目出度い門に松竹飾り立て。若水男年男卯の葉重の着初め。やれ御馬乗り初め弓初め。このやつつるつ。つる〳〵つるやつつるつ。雄鶴雌鶴つる〳〵つるつる。やつつる〳〵。松は替らぬ此殿の。御繁昌さてお目出度いもの。

八重垣踊

小倉くわせんちよこ〳〵。とをひのおもてからござれ。どつとひきしめやとんどんせきは八重垣大戸のくろゝのくんぐり戸。くんぐり〳〵くんぐり〳〵。なんぼくゃり。くんぐりくゃり。よびくんぐり戸。くんぐり〳〵。くんぐり〳〵。ぐゞりくんぐりくゞつて。だん〳〵目出度い御祝儀。

文まけ孫左踊

坂の下には一夜もいやよの。ぶんまけ孫左がお手枕。みつは出で行く。山吹やそつこでしよげろいよんの愛してさ。ねざめにや鹿よ鹿の聲よんの。おの峯通る

しりと初めて開いた。扇子のかなめは。しつかと〳〵。末はんじよへ。

順禮踊

よい〳〵〳〵。肩にや笈摺ひつかけて。あえいとこな。あなんどこな。つんつき揃へた。ほうの手。きりゝえ〳〵。きり〳〵きり〳〵。わつとまはつた順禮衆。是は播磨の書寫寺よさ。だん〳〵揃へて登つた。えい〳〵〳〵。えい〳〵えい〳〵。諸願成就。ちんちやう〳〵。つゞいて登つた。よいやさ。めでたいな。

次郎冠者踊

千石のよねばね。萬石のよねばね。御庭にずつしり。つゞいてまゐれ次郎冠者。げに尤そうよの。目近に持てさあまゐろ。いそ〳〵勇んで。さあきり〳〵。いそ〳〵いさんでさあきり〳〵。きり〳〵まゐれ。さあまゐろ。參る〳〵參る〳〵。さあ參ろ。鳥は雁鴨。雀ひよどり鶴のはし。さつても云ふた。よふ云ふた。參る〳〵參る參る。さあ參る。花は紅梅。白玉水仙花。さつても云ふた。よふいふたげに尤そふよの。揃へて〳〵。揃への扇は末はんじよへ。

さい鳥さし踊

鶉々。なゝなる深草野邊の根笹を押分けかき分け。〳〵。よく見れば。人目鶺鴒打

新庄のや踊

紺屋もがりのやだん〳〵〳〵だら助の細帯。さつてはたぐつて三重廻はる。このよいかどのや。新庄やのさ。竹ごしによつくるよ。〳〵。よつくる〳〵。よつくる〳〵。くる〳〵〳〵と。〳〵よりたけれども。まづ通る。それはへ。

楊弓踊

御代は目出度や袋に弓を。をさめ〳〵て。いざや矢を取れ一百年。君の羽風にな。どつこい。一度は落ちよ。的はたまやのな。どつこい。ねんね〳〵〳〵。ねもさえ渡る。紋は花桐。おれとそなたは。まつどつこい〳〵。松竹じや。

先陣宇治川踊

先陣宇治川。づら〳〵ずつと。まくりこむ勢ひに。駒が勇むの。はらは〳〵のはゝはは〳〵。はんにやしとてとささ足と手とさ。勝つて兜の緒締の巾着。金銀のは娘の。頼みに受取つた。おゝ大分の。

なんほゝ踊

君は二階のはん箱梯子。奴のぼし立て。かんじり〳〵〳〵。かんじり通ふてござれ。ずんど登りつめては。おりぬきだ。小娘を見たか。年はなんほゝゆかないが。な

はこつちん〳〵。下つて上つて上つて下つてごいよころ〳〵。ころ〳〵ころころ〳〵。ころび落ちて逢瀬もあらば。あぶなかたやどつちかび。かたはやまだ〳〵。ぬまたかふけか〳〵。足が引かれぬ。逢坂へさかの女郎衆と。

髮結小五郎踊

こひ〳〵小五郎髮結さして。やつと束ねてや。轡かいとり大津八町で六つ聞く。どん〳〵。新酒古酒はござひかくもなどつこいなろかへ。せきの女郎衆は。やれこりや。馬の口取る雨手綱。若衆見かけてなどつこいなんな。なん〳〵なんなん。やつこのやつとたばねた。

傘踊

婿殿はなつくべいとて。夏は何を土産にずんどくぼんだ。塗傘召そなら〳〵。いつそとがり傘。ほそり傘。朝日のやつる〳〵〳〵。やつゝるつ〳〵。そりやさせ男。やれ〳〵男。かゝの〳〵市大男。

井關踊

我は巖にさ打寄する波。ぱつと立つ名は。井關の竹のかごのや。目しげきや。なか〳〵あたごぞ。逢はでやみなん。憂いぞつらいぞ。

舟指踊

高砂や〳〵此浦松に年を經て。木陰の塵を一さらへつまげてからげて。〳〵高づまとりて。まほどよ走り出てゝらをまちやれ。さあよいさ。是さよい〳〵。世の中。お目出度いよの。

七道具踊

おさきさき〳〵。さあさき〳〵振手の衆とろり〳〵こ。ふらねばなんよさ。つぎつき〳〵は。あれ助よい〳〵。是助よい〳〵。浪助關助。臺笠は持助。立笠はでく助。戀のきつこいだて助しやれた目元で一ひねり。こんどの〳〵〳〵。今度は藪入にやうらからでざれ。裏の藪から妻戸からなりから振から物ずきて。殿をめがけて振るは大鳥毛。

繁昌之市踊

めでたいな。あゝめでたいな。我が住家は都のたつみ。稻荷山。こぼれかゝれる玉霰是の殿御に逢ひとて見とて。あの山越えて此山越えて。えいさつさ。さあさえいさんさ〳〵。君を思へば音羽の瀧の。瀧の白糸いといとし。いと〳〵いとしよの。いとしよの。〳〵いとしけりやこそ繁昌な市で。此酒に醉ふたとさ。こん〳〵

んはゝなんはゝ〳〵。やれ床取つてはなんはゝなづみかゝる。おゝ忍びの〳〵。かくし殿を見たか。やつこのぼし立て。年はなんはゝゆかないが。なんはゝ〳〵なんはゝ。やれとことつてはなんはゝなづみかゝる。

竹馬踊

五十三次にかくれない男。世々をこめたる竹馬をさて〳〵見事に飾り立て。手綱かいくりしつしどう〳〵。どゞんどどつこいせと。どつこいせ。朝の出がけにや小諸節。でがけにやあさの。〳〵でがけにやこむろぶし。一聲こふし三藏や。いふたりつん〳〵連れ立ち。さあ〳〵いくべい。〳〵。轡と鈴がりん〳〵から〳〵。りんがらがら〳〵。はいどう〳〵。はい〳〵はい〳〵。はいどうし〳〵。あつぱれ御馬は。上手と上手が乘つたか。乘つたぞ。それ〳〵そろたへ。

白樫踊

えい〳〵三熊野の。那智のお山を今朝こそ見たれ。順禮衆。札をちやうど打ちや納めて。岩のはざまの白樫を。〳〵。國の土産になろたよ。棒の手。そつこで一ふり。やつとを〳〵。やつとを〳〵。とを〳〵〳〵〳〵。やつとを〳〵。まゐろとうとう。とを〳〵まゐろ。岩のはざまの白樫を。〳〵。國の土産になろたよ。棒の手。

て助がよおちらすく\やれこりやよおちらす。どつこいよおちらすく\腰をよおちらす紅葉笠。まん丸こふて着ようて。さまが菅笠百万貫。

権之助踊

若衆さんさ。しのばゝさ。若衆しのはゞ寺通ひ。なんでおじやそろく\。年々じやが。おじやそろく\ねん。さても久しの権の助。あげのまりの。さげのまりの。あげのさげの。やりはりより。おりや踏みならふた。おれが踏まいで。それを誰が踏もぞいの。お手打ちかけて。ほろと泣いたをいつ忘りよ。

金山まぶ踊

佐渡の山。まぶ山越えて。善右衛門さんが。とゝぼんが。とゝおんく\。おじやぎんする。おじやぎんする。ずらく\ずつとたけながし。竹に花咲く善右衛門さんが。とゝぼんが。とゝおんく\。おじや八百挺の。たゝらでせんざをまんざを。どつぽりく\。どつぽりと。踏みやならふたに。どつぽりく\。どつぽりこ。

岡山通踊

やんれ白浪の。打つや皷の川柳。水にもまれて。ねこそいりけれ岸陰の。花や櫻や藤やうつ。えい。太皷の撥や川卯木。雨のはやしも五月雨も。たのむ汀の田歌の音

こんこんの盃は。千秋樂〳〵。萬歲樂と祝ひ納めた。

山之手奴踊

薩摩のいちのやは。どつこい。三箇國の伽羅よな。どつこいなゝん〳〵名もさてよいやな〳〵。伽羅〳〵伽羅男へ。縱から見ても。横から見ても。はつわよい男へ。お先一番での奴。上鬚びんとした。しやんとした。つりゝん〳〵。つりゝん〳〵。つりゝん鬚の長刀。それ八文字。うから〳〵。うかれてわとから。うか〳〵うから〳〵。うかれてわとから。うか〳〵うかゝら振る。手を振るだてをふる。こゝは山の手の。よい〳〵奴の出どころ。

早咲梅踊

ひらき初めたる早咲梅のはんなりと。袖褄揃へてふつくりときいたか〳〵。えいえい〳〵えい。太郎くわんじや。御まへに。ねんのうはや〳〵と早咲梅の。鶯が。きりきつててう〳〵。きいてうきりきり。きつてうきつきよ祝ふた。太郎冠者。梅の花笠はどふでもさ。こふでもさ。どふでもこふでも。えい〳〵太郎くわんじや。

菅笠踊

東からくる花嫁嬉し。おれが目あての菅笠嬉し。ほんに嬉し。お供にとつゝくだ

おじが杣山からもろたよかしを。鎗にすげたる十文字。立てゝ並べてなわぞつこいなわぞつこい。長押をよけて。一段〳〵〳〵やつとふ〳〵。二段〳〵〳〵やとゝふ〳〵。一段〳〵二段〳〵。二段三段段々揃へた。石づきよする。〳〵〳〵。手なみを。揃へて。寄する汀の。こまがへしはかたごぶぞり。人にやかまはぬおりやすいた。

しさゝん踊

尼が崎からこつちの婿殿。〳〵くるとさ。しつし艪楫早めて。壹丁の二丁の三丁の四丁の五丁の。六丁こばや。花の繪島へ。おせやれ男。えゝやつさ。須摩や明石の月を見しよ。しつとん〳〵しつとん〳〵。しつとんしとゝん。〳〵。とん〳〵とんとん。とうから唐艪のおとがした。花の繪島や。やんれおせやれ。男えどやつさ。須摩や明石の月を見しよ。しつとん〳〵〳〵。しつとんしとゝん〳〵。とん〳〵とんとん。とうからからろの音がした。嫁が馳走に。人の見る目と磯の見る目が。肴じや、

四季の花笠踊

關の小万は龜山通ひ。色を含むや冬ごもり。まづ立つ春の祝ひには。縫ふてふ鳥

頭拍子を揃へてはやせども。えい。いさみてうつる面白や。植ゑい〳〵早乙女。笠買うて着しよにさ。笠買うてたもるならば。なはも田をば植よにさ。岡山通の六ちよこばやに艪を八丁立て。おさのおまへの三ぼがせとを。小女郎戀しきとな。唄ふて名のりてお漕ぎやるは。えいこの小じやくし小娘こせんぞ。かこさいかか丶いか。こぐる松か小女郎か。つがわつかわ〳〵のんえい。よは丶ではやらいで。唄でやる。君を思はで通はりよか〳〵。どこで見た。ぞつとしたとよ。えいえい。君は春咲く梅の花じやとよへい。かをりゆかしきとりなりは。ありやありやこりや〳〵。えい〳〵さつさえいさつさ。萬歳じや。〳〵。千秋樂じや。

馬場先踊

松はゆたかに大手馬場先繫馬。がいにつめたい今朝の雪。殿の御馬は錆月毛。連錢蘆毛鹿毛糟毛。しと〳〵打てはかけをり。お江戸育のひげひげ男。御馬の口をしつかとさつり。りん〳〵ひげ男。つりりん〳〵ひげ男。つりりりんつり丶んつり丶ん。つり丶ん〳〵。りん〳〵りん〳〵。りんとはねたるひげ男。繫ぎとめたよ戀の關札。

杣山踊

三番叟踊

喜びの文をへて。ちやうど參つた婿殿。いさみて末廣扇御祝儀に。しよざつくわしもと見扇もひとつ見扇〳〵〳〵。さしわふぎ。さぎわしする〳〵張臂扇で。ぬきわし揃へて。〳〵。揃へてふく〳〵ふくじや〳〵。長者〳〵。ふく〳〵ふく〳〵。男は大々福長者の花婿じや。えい〳〵〳〵えい子寶の。このさいはひ。心にまかせてめでたいな。

地福踊

さてもめでたやな。目出たや〳〵。えい世の中の米俵心やすくも抱へた。地福できすけが納めた俵をお藏にずつしりど。積めたか〳〵女が袖のつしりところりと似合ます。色増す〳〵色増すど。よねが目につく〳〵。そりやえい〳〵ことことどえいこと聞きます。ます〳〵てつちの寶増す。黄金の桝で米はかるんよの。めでたき御代は。たんだにこ〳〵やかに米の御山。

してゝん奴踊

五丁先から。ふりだす肩のゆきの長いは。御國の小小姓。色はまつ〳〵黑々いが。どこやらがよい靜に見ゆる。奴の〳〵〳〵管鎗を。ひろ取れば何尺。〳〵。なんぼ

の花笠。夏は川瀨に網代笠。秋は踊りに菅笠を揃へて。それ〳〵小万踊り出せ。小万てん手柏子も。そん揃た〳〵。揃た〳〵そろ〳〵そろ〳〵。月の笑顏に照つたりや紅葉笠。そりや加賀笠よ〳〵。冬は雪見にかづく臂笠、花の都の御所塗笠は。形がよふて。さて〳〵どつてい着よござる。

櫓拍子踊

えい〳〵和歌の浦こそ。それしてのさての。第一名所うんそうだぞへ。さつと滿潮寄せきてはやの。かたを波にぞ乘りくる舟の。櫓は一丁のいきはひ〳〵。きはひにきはふて漕ぎ寄せた。しんとろとろ〳〵〳〵。とろりん〳〵とろ〳〵〳〵。おつとる櫓かいにさ。船歌。あれから是まで。いさぎよござる〳〵。妹脊鹽濱。

釣舟踊

沖にこがるゝ女舟を見たか。をつと楫を枕に。ろかいをさ。立つる〳〵立つる立つる。波立つる。〳〵。雌波寄すれば雄波も寄する。とかくや雄波は。やよいてこい。こゝ〳〵今宵はどち枕。をつと楫を枕に。ろかいをさ。立つる〳〵立つる〳〵。波立つる〳〵。雌波寄すれば雄波も寄する。とかくや雄波は。やよいてこゝいで。こゝこゝ今宵はどち枕。

さても見事に揃たり〳〵。そつこて振りだせお手廻り。大事のまへのいやいごしずんよしふりよしなりもよし。みよし吉野の花よりも。えい〳〵。紅葉よりも。えい〳〵えいこの〳〵〳〵。こつちの〳〵いまがする事を。珍内が見つけた。でつかい事を云ふたりなりな。ないふそ珍内。ない〳〵ない〳〵ない〳〵。酒もろぞ。珍内酒は下戸なりな酒でないぞ。そこらを是非共〳〵そこらを。〳〵〳〵。是非共おつひしげ。やでへてまつかせ。やでへてふりやれ。やつとん〳〵〳〵。殿のおたちにおとも花やか〻。

春駒踊

勇む春駒引連れ。千びきも繋いて自慢での。しやなら〳〵しやなら〳〵。れんな。もみうら誰だ様だ馬鹿やつだ。づきんちやちりちり〳〵ちん〳〵。ちんなとりなりで。おつとまかせのよい〳〵〳〵。ふりよしや〳〵。ぬらりひよ。誰も彼も。めつけんしよ。こゝもとでえい。

荒木弓踊

君はなげしのや。荒木の弓よ。挽手数多逢瀬のあらば。はつと答へてよんそ張よや。ひよや〳〵はりよや〳〵。はり〳〵はり〳〵。弓張月の。さまは三日月。よいよ

〳〵何尺。なん〳〵〳〵ほの何尺。てゞころつけてきあ參ろ。してゝん奴が。手の内〳〵。してゝん奴がしてゝん手の內。〳〵。してゝん〳〵から〳〵〳〵。してゝん奴がすりさけ男。國にかくれない大介万五郞。おふそれ〳〵かくれない。

世繼踊

お江戸通ひに世繼ができた。やつとうおなはかゞにきく酒。お江戸まん鉢すんどのめば。よござんす。吉六酌取れがつてんた。金〳〵の盃に。おさへた松風〳〵。つぎめじや〳〵。よつつぎ〳〵〳〵。世繼つぎめは目出たいな。顏にいろますこれ。繁昌〳〵へ。

糸屋娘踊

本町貳町目を。とん〳〵とん〳〵。とてとんとてとん〳〵。とんとてとん〳〵。通りたうはないが。糸や娘は廿一はたち。やつしつし〳〵。姉に望みは少しもないが。妹見る目はしんとろ〳〵とんと。親を見る目は猿まなてへ。さる〳〵さる〳〵さる〳〵さるまなてへ。

珍內花笠踊

ら。天下打ち治め。おめでたいよの。

三國玉屋踊

三國玉屋の新兵衛を見たか。三國一のやさ男。まるで〳〵繻子のびんつき。はけ長につりびん。〳〵。なぜに小鶴は出てまたぬぞ。さつこのせう。酒でたらふく。つるてん〳〵。だらふく〳〵。たんたらふく。つるてんふくつん。ゆふはかうしに。まつのをのしんべどの。

彌之助踊

えい〳〵〳〵。是から先は。お先手をふる長刀。〳〵。お先手をふるなが刀。さんやれさんやれ。えい〳〵〳〵。是からさきは。宮城野に咲く萩の花。〳〵。宮城野に咲く萩の花。さんやれ〳〵。えい〳〵〳〵。彌之助〳〵。さむそにござる。火桶やりたや炭添へて。〳〵。火桶やりたや炭添へて。さんやれさんやれ。

美濃國てしやこ踊

美濃の國にて。つまもちおいて。さつこのいよこの九重の。花の都に住居すれば。てしやこ雨は降らねど。みの〳〵どつこい。〳〵簑こひし。行かしてならぬはでしやこてしやこてしや〳〵〳〵。てしやてしやことしよ。まだ〳〵雨はな。なん

いとつこい。よい〳〵とつこいよいござる。せめて今宵は有明のさ。はつと答へてよんそへ。

ぞんぞりこ踊

麻の中にも三度は寝たが。麻が物いはにや名も立たぬ。ぞんぞりこどん。ぞり〳〵ぞんぞり。こいもよ〳〵。ぞんぞりこのいもよ。どの子がいとし。負ふたもいとし。抱いたもいとし。かたぐまの女小郎はなは。どつこい。なはいとし。ぞんぞりこぞん。ぞり〳〵ぞんぞり。こいもよ〳〵。ぞんぞりこのいもよ。負ふたもいとし。抱いたもいとし。かたぐまの小女郎はなは。どつこでなはいとし。ぞんぞりこ。おすはとふ。

牛窓踊

牛窓のへ。觀音堂の側でへ。どつこい。是はきいたぞや。今朝のや時を打つ。どふ打つのふ。はてのふ時の太鼓はのぽゝん〳〵おでゞんがら〳〵。おでゞんがら。でんでんがらりの。でんがらりの。おでゞんがら。おとも聞えて。さらりつともへ。いよえいよへ。どふ打つのふ。はてのふ。時の太鼓はのぽゝん〳〵おでゞんがら〳〵おでゞんがら〳〵。おでゞんがら。でん〳〵がらりの。でんがらりの。おでゞんが

やたて〳〵めでたや。こちのやの寳じや。元服よしの色男續く日數をかろくかたげて。曆大きやうじ。曆はたちの。とのでに十九のおんおかた。十九のおん〳〵御方。やれさてしつくりと〳〵。くり〳〵〳〵しつくりと。〳〵。嫁入婿取。ふく日大みやう。やら〳〵めでた。

但馬小女郎踊

但馬小女郎。ありやこりやといの。にのぎよの札わいの。見れば其日の。やつこりや。祈禱となるわいの。ありやこりやといの。にのぎよの札わいの。見れば其日の。やつこりや。祈禱となるわいの。なるぞ。

もんつく〳〵踊

今津海津に朝通ひさ。〳〵。蒔繪の指櫛桐のとふもんつく〳〵〳〵もんつく〳〵。朝通ひさ。蒔繪の指櫛桐のとふ。もんつく〳〵。もんつく〳〵。朝通ひさ。

都の町青物踊

都町々に。賣つたる物は何々何ぞ。青菜小菜もみ大根。〳〵〳〵。柚子や生姜や茗荷の子。唐辛子や菠薐草。白瓜唐瓜おこだ瓜。四五寸のびたる淺葱。拙僧踊

な降らないにさ。簑てひし。行かしてならぬは。てしやこ。てしやこ。てしや〳〵。
てしやてしやてしやてふとしよ。

ごうらく踊

いとし殿御は。破魔弓はじめさ。あの道樂め。向ひ小女が羽根つくにの。手鞠つくにの。よいつく〳〵〳〵には。つてんひつ。和合樂とぶつけた。招く袂に文や玉章。袖のうちは文や玉章。あの道樂め。向ひこよねはさやれ。こりや羽根をつくにの。手鞠つくにの。つく〳〵〳〵には。つてんひつ。和合樂とぶつつけた。招く手下に文や玉章。袖のうちは文や玉章。見たか。

繪島踊

繪島岬に帆をまきかけて。どつこい。別れの小手招き君にまはらば。さつさ。押寄せ漕ぎ寄せならば。よへ。それ〳〵姉のおまきは。もんやと契る妹おなべは。よきちとしよげろ。はてそなたをどつこい。をどつこい。おん〳〵おもはく。さつこりや。はかりをぶつこめ。松風押寄せ。漕ぎ寄せ。〳〵ならばよへ。はりはどつこい。あみでせ松風。

暦踊

萬の虫に第一の藥じや。

手合相撲踊

よい〳〵〳〵。お待ちやれ。やつとこところ〳〵ところ〳〵と。御前がゝりにふり出だす男してゝん。立かゝみ力自慢。ゆりかけ〳〵幸嵐にきり〳〵やつきり〳〵。きりゝとまわつて。しつかと結んだ力帶。一夜なれ〳〵帶買ふて取らしよ。それふれさ〳〵。帶買ふて取らしよ。解けて亂れて。やんれ〳〵。それ〳〵〳〵。男勇んでさ。進んでさ。進んでさ。繻子のぴんつき。やとゝんところ〳〵〳〵。やとゝん〳〵〳〵ところところ。みとれてやさ男。國で隱れないさつても見事なでつかい男へ。

藤内太郎冠者踊

藤内太郎冠者。次郎冠者でござる。日本一の御きげんに。立つて舞をぞ舞ふたりける振を揃へてどりやどこの。そりやそこでの。さらば舞へ太郎冠者。えい次郎冠者。さまとならばゝ雛の殿よ。ならべて顏を〳〵。顏をならべて。にゝにつとも笑ふた。こつちのや〳〵。こつちの〳〵。よい殿へ。おれとそなたは二重の帶よ。そなたはそちらへくるりとまはりや。おれはこちらへくるりとまはろ。手先を揃へてとんとんとん〳〵。や。どゝんとん。とん殿樣の二重帶。しめてくゝして。しつ

頭丸めて浮世をかるく、拙僧本意にあらねども、かど〳〵で貰ひまする。鉢の米の情に。親をはごくむだんな。一重に拙僧本意にあらねども。今日の釋迦の御弟子と思召し。みす〳〵某を。佛菩薩の化身とて。もろ〳〵の亡者を弔ふだんな。せつそ本意にあらねども思ひ忘れぬ娘盛をすいてきた。是がまことに拙僧本意でござるよの。是非ない。人目恥かし。色々通ひ。一錢や。二錢や。報謝を頼むと夕暮に。すぐあがたんぎはかにょらい。けべすじもとをやしろふて。なくすのけんかん。へれ袖つかんで。へめ殺せ。おいよところしや。

堺の濱踊

堺の濱に。ありやこりや。流れ枯木が捨てゝある。或人の申されしは。もくやふしやえんどや。木曾や都にやない。定めて〳〵。きんきめ細にござるほどに。唐木でござる。べんよのさんがれ。

梅の木踊

昔より賣初め候。梅の木村の和中散。君の病は思ひか戀か。よその藥は定齋でござる。こちの家には。じよさいとてはござらぬ。じんじやく胸虫こはり腹。酒の二日醉には。よねや若衆の。やとゝんとん〳〵。寝顔で飲まんせの。飲まんせの〳〵。

からうき浮氣がましましじや。それさ。くるり〳〵くる〳〵〳〵〳〵。それはへ。春はどつこい伊勢參宮。

菖蒲刈踊

千代を〳〵重ねて。えいえてこい。又毎年の菖蒲刈所は名におふ廣澤の。池の池の菖蒲を。ちよん〳〵きり〳〵〳〵。ちよつきりと家土産に。ひつ束ねかい束ねてかづいた。ことしや世の中。中の〳〵。よい〳〵よい〳〵〳〵。なつかの〳〵。なつかの節句の大飾り惡魔外道を打拂ひ。きよめたてまつるの〳〵。千年も萬年も萬々〳〵年も。お家はつきせぬ飾りへ。

芋之子踊

芋の其子の育ちを見たかへ。さつては子寶めでたいな。子は四十八よの末廣がりで。やら〳〵やら〳〵そんれわへ。〳〵。やら〳〵やら〳〵。めでたしやん〳〵。いちざわざらりと並べて。一度に呼んだお名はへ。おとよけさよたつまつゆるまつだんだらいなごにかいつくぼう。ひつつくぼう。かいつくひつゝく。火打袋に。しやん〳〵。おめでたいよの。

小川踊

くり〳〵力帯結びとめたらなほよかろへ。

蟹川踊

蟹川を渡るとて。鯉の文を落した。蟹等は知らぬか。噺する〳〵。出る月をえては。お手を引き合ふて。しんところ〳〵ところ〳〵。ところ〳〵〳〵〳〵。たらたらおりで休んだ。おれはそなたを忘れまい〳〵。

俊乘坊踊

大和でんま。ぎつこいしてから〳〵。都がとまりでおんじやり申せよさのふよふほんに。ほんにお釋迦の堂供養。しゆんぜう法師のあとを繼ぎ。檜のお笠で鉢の子手に持ち。都の町を殊勝らしう。通れば〳〵。おれの姥も爺も。とゝもかゝも姉も妹も。ちよき〳〵ちよき〳〵。ござれの〳〵。ちよきりこ〳〵。ちよきり〳〵〳〵。ちよきり〳〵。ちよともぶんだしたむな木かまつかせ。山家奥よりまてだきに。とやれとやれ。でつくりす。わつた楠。

伊勢宮巡踊

さてもえいしやさ見事な。天照神の今日吉日の宮廻り。おとさき揃ふたら。さあまはれ〳〵やゝまはまはれ風車。まはれ〳〵ばきんきの藥。根から葉から。底眞實

へども、善太どの〳〵、情にへだてはない物を、せめて一夜の情のあらば、今の嬉しきごしんもじ忘れまじ盡きせまじ、此世はさておき後の世も、これさて〳〵〳〵よいやさ忘れまじ

まんまる踊

まんまるでされ〳〵、十五夜の月の輪の如くはら〳〵輪の如く、よいどんな、どんどん、十五夜のよさり〳〵、網引女郎にうつはれた、はり〳〵うつはれた、まん〳〵丸やの七左が手管は、がつてんか、おしつけたおさへて、やらかわいの、み船やでかしたでかしたでれさ。

今度屋踊

こんどやござらば、よふやよはいはいは、ぞんこしの町へ行けば、左へもどれば右へ、えゝよはいは直に通へば一里十八町、畑らば三里、よはいは、それをば行過ぎ、花のかのさまに尋ね逢ふこれさ、こんの暖簾によの字と書いてじちくでこしでかくれなや、えい、それをば行過ぎ、花のかのさまに尋ね逢ふこれさ〳〵〳〵。

ふくこん踊

情夕霧ぼつとりとり、おことなわらん、はづむなわふくどん〳〵ござつせいさ

水を汲みやらばよふやよやよ。小川で汲みやれ。小川小石川ころびよてころびころび〳〵かゝるとよへ。君はさい鳥刺。わりや百舌の鳥。むねんしごくや落されたとよへ。

ほい〳〵踊

こちのちんちくらをぱい〳〵褒むるではないが。どつと奥山のむきてものが有るとの。親子中に五六本といふて借りてこいとの。人が借りてないとの。それ〳〵見たか。それ見たか。根性長な子をもてば。人についつい〳〵。つい〳〵とられて事をかゝいした。ほい〳〵のほい。

のんやほゝ踊

戀とくれ〳〵。のんやはい〳〵。おしやおん〳〵。おしやおしやれ〳〵。のんやはいゝのんやはいゝとは思ふたさうできたのやおんは〳〵。えい〳〵〳〵。裏の春戸のや。のんやはい〳〵。おしやおん〳〵おしやおしやれ〳〵。のんやはい〳〵とは思ふたさうできたのやおんは〳〵。えい〳〵〳〵。

二木踊

二木戀しやな。世におるときは。ひけを靡かぬなきよくもなや。とは思へども思

ぬの別になれば花も雪も。紅葉（もみぢ）のあはれ。冬野（ふゆの）の契りまで。かはらぬ色をへ。

おなじく

風もなつかし夕べの空に。袖のかをりもまださめやらぬ。深き縁（えにし）のかたさまなれど。おだし此身もまゝにはならぬ。月日（つきひ）ほどへて昔（むかし）のわけを。とふは嬉（うれ）しやさりとは命（いのち）。いつそ露（つゆ）とも消（き）えなば消えよ。心までくる涙の川に。流れはかなき浮（うき）世（よ）のつとめ。染むも染まぬも枕の夢よ。さめてあしたのつらさを知らば。たとひ丹波のしないた鬼も。さゝしたことのよるせはなくと。せめて便（たより）を松の葉の。かはらぬ色をへ。

高瀬舟（たかせぶね）

ゆかりもとめて若紫（わかむらさき）の。草のまがきを今きて見れば。花か紅葉（もみぢ）かその面影（おもかげ）の。見えつかくれつ木（こ）の間（ま）の月の。うはきならぬど身は高瀬舟。こがれ〳〵て焼くや藻（も）塩（しほ）の夕けぶり。此身をこがすへ。

おなじく

君が心を引かるゝほどは。ひき見んとは思へども。まだめなの世や飛鳥（あすか）川の淵（ふち）瀬（せ）。ふかき思ひをいろの一葉（ひとは）にのせて。浮（う）きぬ沈（しづ）みぬおもはく。馬はあれども。君

小太夫。ふくとんふく〳〵。ふくとん〳〵〳〵〳〵〳〵

さゝら踊

やんらめでたや。やんら樂しや。さつさ。せおよやまんおよの鳥追が參り。殿も福德殿婿が來た。やれこりや。爪立てゝ。そろ〳〵そろ〳〵。そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。やつこりや爪立てゝ。御代の盛りのまん中。まんまんなか。中でひとりの御代繼。

○端唄

いはゆる端唄流行唄都々一の類すべて短篇中短篇の俗曲をあつめしるす。寸鐵人を刺す如き妙篇も少なからず。

飛鳥川

戀と云ふ字はむくつけだにも。大宮人はいとまなき戀路。櫻かざして木の下かげの露に。濡れにぞ濡れし我小夜衣。夕べ〳〵はあすか川の淵瀨。底はあさいぞ濃紫よ。よしやこがるゝ澤邊の花に。けぶりくらべん來いよ〳〵螢。かをりをしたふ芝蘭のもとに。きつにはめなでそのくだかけの。亂るゝこころははやきぬぎ

吹の夏は卯の花吹き初めしより軒の橘かをるもゆかし初音たかまの山時鳥うきなたがはし戀ひわたる身は。その吾妻路の常陸帶。結ぶ契りのえにしはながと。秋はきてしも宮城野の風。おつるにもろき花桐の。戀の道芝なはわけがたき。露の夕霧立ち迷ひつゝ。冬野につよき柏木も。ひとりこがるゝ色をへ。

玉の緒

なんぼおしやつても。逢はぬつらさを見てたもれ。ほんにそふ身ならば。からしたつとめはせまいに。もはや玉の緒。たゆるばかりのうき枕。いや待ち久し一夜さへ。よそにゐられぬ我思ひ。

加賀節

其一

つとめもののうき一筋ならば。とくも消えなん露の身の。日影忍ぶのよる〳〵人に逢ふをつとめの命かな。

其二

いつしいづれの日に立ち初めて。いなき細江の身をづくし。くちもはてなば浮名も共に。同じ濱名の橋ばしら。

を思へば徒歩地さはいひながら。戀の重荷を何にのせてやろうぞ。とゝを木幡の里になしてはしやのこゝろ身にもあまつた。

有明

世の中〳〵のうれしきうちにまさりてつらき逢ふ夜の床よ。我も妹背は有明つぐる。鳥の鳴く音にきぬ〴〵の袖の白玉なにぞと問はば。露と答へて消えぬ命をさ。思ひに沈む。

蘆分舟

難波のうらに。よしや思は蘆わけ舟のこがれ〳〵て逢ふ夜もつらや。せめて別れの鐘ばかりかや。未だ名殘もつきせぬ夜半に。鳥もつらいは告げわたる。ういこの〳〵うき別れ。後のあしたの文枕しばしな傳へん荻の葉の。そよとばかりの便もないか恨みなげゝどつれなやよそに。うつる色かと微塵も知らで。たゞかはらじと祈る心は。いつまで草のいつもくるしき身をうき床に。夜日とねもせで迷ふたへ。

みやまぢ

なるゝ深山路名も吉野川。ふかく立たせぬ思ひのうさを。いはでかさぬる八重山

く。どれが吉野のながめやら。花やら雪やらわきて。

其二

荻と萩とは。どれが露やら嵐やら。どふやらかふやら。わきて待つ夜の袖は。どれが露やら涙やら。どふやらかふやらわきて。

其三

須磨と明石は。どれが月やら名所やら。どふやらかふやら。わきていろわかちなく。どれが月やら名所やら。どふやらかふやらわきて。

其四

あだし情は。いづれはかなき思川。どふやらかふやら。わきて逢瀬もあらで。いづれはかなきおもひ川。どふやらかふやらわきて。

其五

うらみぬる夜は。夢もつきなく又うらみ。どふやらかふやら。あけて見し面影の。いづれ夢やらうつゝやら。どふやらかふやらあけて。

伊香保節

其一

其三

よしやわざくれ身は朝顔の。日影まつまの花の色。恨みられしも恨みし人も。其に消えゆく野邊の露。

其四

あだし此身を煙となさば。とても淺茅の里ちかく。さよの衣に香はとゞまりてせめて見ぬ夜のかたみとも。

其五

わきてつれなき人ゆゑ我はくらす日影の朝顔か。露は袂におきあまれども。かひも涙の身ぞつらき。

其六

ひとりとゞめて恨みしかひも。もとの水なき隅田川。さても流れに身はくれくれて。いまははもくずの捨小舟。

わきてぶし

其一

花と雪とは。どれが吉野のながめやら。どうやらかふやら。わきていろわかちな

長崎節

其一

しんきなしめそ木綿車。かけてめぐりあふよる〳〵〳〵は。そりや逢ふ夜々は。かけてめぐり逢ふ夜ばかり。そりや逢ふ。

其二

こがれ〳〵てもろこし舟の。袖にみなとのよる〳〵は。そりや逢ふ夜々は。そでに湊のよるばかり。そりや逢ふ。

其三

桐の一葉のなはそれよりも。もろき涙のつゆ〳〵よ。そりやあふ。つゆ〳〵よ。もろき涙の露ばかり。そりやあふ。

のんやほぶし

其一

晩にござらばひごなたさいてござれ。〳〵。晩にや梅の木の枝おろそ。のんやはのんやほ〳〵。ひごなたさいてござれ。晩にや梅の木の枝おろそ。のんやほ。

其二

花になりたや。ほんほとんどどつこいしよ。よし〳〵〳〵。よしのゝ花にい
よしもほとんどへ。さいて亂れて。ほんほとんどどつこいしよ。つゆ〳〵櫻の下
露落ちて。いよしもほとんどへ。

其二

夏は垣根の。ほんはの〳〵。あやなしや卯の花。しら〳〵あけても。いかに訪ひて
ぬ時鳥。かたび夕だつ。おとすゞしき小村雨。こずゑにひぐらし蟬のね。いづれ夕
べはたゞならぬ。

其三

忍ぶ涙の。もれてはあやにくや。いつ〳〵〳〵。いつしか浮名立田の夕時雨。
濡れて牡鹿のつま。哀れや妻こひて。よる〳〵さりとは。よすがらひとり。いよし
も鳴き明す。

其四

月になれ〳〵はかなし。いくたびか袂の露。〳〵かわかでものや思ふとしばし
さへ。すまぬ浮寢をとへこととへども。ちどりうら〳〵〳〵。さだめぬ鳴く
音。哀れや夜もすがら。

戀はわやにゝ五月雨。降りくる涙。〳〵〳〵。せめてどへかし時鳥。うき身を五月雨。〳〵降りくる涙。〳〵。せめてとへかし時鳥。うき身を。

其七

夕べ〳〵は。常さへものわびしきに。わびし〳〵。千々のあはれは妻戀ふ鹿の音。たそがれ〳〵ものわびしきに。わびし〳〵千々のあはれは妻こふ鹿のね。

くひな

其一

水鷄の鳥の。夜すがらたゝき明けておいてさ。はや五月雨に色ます菖蒲の。ことはいの〳〵。山時鳥またの東雲もないものかなんぞのやうに。待宵〳〵。

其二

おぼろの月をたのみに。夜もすがらながめた。はや春風。かをりもてくる。軒端の梅はいの〳〵。あだ名や立たん。かはす手枕もないものか。なんぞのやうに。轉寝〳〵。

其三

海人の刈る藻にすむ虫の。われからとなげいた。はや初時雨。尾花ほにいで。あま

戀はうきもののんやほ。待宵きぬ〴〵つらやつらい。逢ふ夜ながらもわが涙。のんやほ〳〵。まつよひきぬ〴〵つらひ〳〵。あふ夜ながらもわがなみだ。のんやほ。

其三

春はござらばのんやほ。三吉野のよしのへござれ。〳〵。いつもながらの山櫻。のんやほのんやほ〳〵。みよし野よし野へござれ。〳〵。いつもながらのやまざくら。のんやほ。

其四

思ひがけてはのんやほ。雲井の鳥の一聲〳〵。閨の伽羅の香むつごとに。のんやほのんやほ〳〵。雲井のとりの一聲。ねやのきやらの香むつごと。のんやほ。

其五

いつの有明のんやほ。袖振わかれしつらさに。〳〵。もはやあさぢもせにすぎたのんやほのんやほ〳〵。袖振別れしつらさに。〳〵。もはやあさぢもせにすぎた。のんやほ。

其六

梅のかをりの花笠うれしほんにゆかし月影のこりてさりとはあけぼの遠山げしきの雪もすこしは白妙に霞のまより。こゝは鶯一こゑを。

其二

吾妻からより花市うれし。しんぞうれし。連三味相唄。さりとは庄五郎も一つたのむぞ。はんだ土佐節浄瑠璃を。まん〳〵だんもきかまほし。さてもそろふたつれうた。

其三

けさの別れの鳥の音つらや。ほんにつらや。みだるゝ〳〵。さりとはみだるゝねん〳〵みだるゝ。みだれみだるゝ黒髪の。ゆひかひなしや。又の逢瀬をいつの夜。

其四

秋の雲間の月影ゆかし。しんぞゆかし籬の虫の音。枕におらそふあかつき東雲。はては明けゆく閨のひま。おかでもわかるゝ。さすが形見のおもはゆ。

舟橋

其一

佐野の。いよこの舟橋。さのゝ舟橋かけてなほ。おもひ。いよこの。わたるを知らせた

りの色わいの〳〵。ちりのこせかし。露の名殘もないものか。なんぞのやうに。秋風〳〵。

其四

ねざめならひし眞木の屋に。とぼそをおくに。さはやてがらし。落葉ふりしく。枯野の色はいの〳〵。訪へかし。人の雪のあしたもないものか。なんぞのやうに。冬枯〳〵。

其五

忍びかねたる人目の關守をなげいたはやうき涙。袖や朽ちなん獨寢の夢はいの。丸寢の夢はいの。絶えなば絶えよ。とても逢ふ夜のあるものか。なんぞのやうに。玉のを〳〵。

ちらし

ひとへがさねの契りは薄し。千代もながゝれ糸櫻。そりやさふさ。結ぶえにしの糸櫻。そりやさふさ。江戸やつさういてさた。

花笠

其一

まゝならぬ。

其七

人のいよこの。上にもかけて見よ。人のうへにもかけて見よ。まゝのいよこの。つぎはし。まゝのつぎはしまゝならぬ。

朝妻舟

其一

あだしあだ波。よせてはかへる浪。あさづま舟のあさましや。あゝ又の日は誰に契りをかはして色をかはして。色をまくら恥かし。いつはりがちなる我とこの山。よしそれとても世の中。

其二

うきねつらさの。待乳の山の風。夕こえくれて笹小舟。あゝ定めなき床のうら。なみともなき千鳥。〳〵。たえぬ思ひに。月日を送るもあだ人心。よし逢ふまでの移り香。

其三

あだしあだなる身は浮枕。ならはぬはどの床の露。あゝいくたびか。袖にあまれ

や。

其二

春の色香の名殘もふかのたそがれものわびし夏は卯の花さみだれ。せめてとへかし時鳥。

其三

志賀の辛崎つれなく。よそにのみ聞く小夜しぐれ。おもひかけては常磐の。松もゆるさぬ蔦もみぢ。

其四

秋の色よき錦を。秋のにしきを誰が織りて。染もいろよく染めたよそめも。染めたよ小夜しぐれ。

其五

時雨〳〵に濡れ〳〵て。濡れて妻こふ鹿のこゑ。いろの道とてやさしや。しかも浮名の立田山。

其六

よしや浮世の中にも。人のうへにもかけてだに。何かいよしも心の。眞間の繼橋

濡るゝ我袂。

其二

間はちかふて逢はせはせいで。ちかの鹽釜。〳〵身をこがす。〳〵よい〳〵濡るゝ我袂。

其三

かりのねまきにたきものすれば。よしやわざくれ。〳〵いろとなる。戀となる。きぬ〳〵濡るゝ我袂。

其四

たえぬ思ひど人には告げよ。今は難波の。〳〵身をづくし。身をつくす。よひ〳〵濡るゝ我袂。

其五

くちてかひなし名にのみ立ちて。うき身ながらの橋柱。〳〵よひ〳〵濡るゝ我袂。

ふじから

おれてやさしき伏見の里の。雪に雪降る呉竹の。折れそふな雪に。〳〵雪降る呉

る涙のいろを。わゝたもとのいろを。峯の紅葉ば。ひとりこがれて枕の涙。哀れと人のとへかし。

其四

憂きを語らん友さへなくて。慰めかねつ我心。あゝうつゝなや。過ぎしつたへの其水茎の。くろみしあとを。見るにつらさのいやます涙は。たれゆゑ濡るゝ。哀れと袖もとへかし。

うかれめ

花は吉野よ紅葉は高尾。松は唐崎霞は外山。いつもときはのふりは。さんさしほらしや。とにかく思はるゝ。

おなじく

八千代ふるともかはらぬ色よ。松に藤枝のその面影を。見るにひとしほ。にしをさんしうしほらしや。とにかく思はるゝ。

しがらみ

其一

たえて逢はずと文をば通へ。ふみは妹背の。〳〵中となる。はしとなる。よい〳〵

つけてもなほゆかし。ひとりね。

戀風

戀草のたぐひならば。葛は恨みの思ひぐさ。秋の夜なればなほ短夜と。逢ふ夜のそらをなげいた。何故に身を戀風と尾花そよ〳〵袖の香。

まがき

秋のまがきに咲いたは小萩。露のおきさだふ露白露。濡れた〳〵。壯鹿つまこふ鳴く音。わざあゝ鳴く音。わざ〳〵。いとゞ身にしむひとりね。〳〵〳〵。かなしさまさる袖はかわかぬ。此身のつらさへ。

立田

秋の立田に流るゝ紅葉が。染めてあか〳〵有明の。月もろともに照るや散るや。こきくれなゐの川波。さだめて〳〵〳〵。色より色にうつるならば。戀ひわたるたよりとものさりとは。

おなじく

後のあしたに名殘の袂は。濡れてあか〳〵いかなれば。身を憂き里に行くやくるや。いつまで草のいつまで。さだめて〳〵〳〵。きん氣の毒なるさはりもあら

竹の折れそふな。

おなじく

刈らばとく刈れ淀野の眞菰。かれば月影したに澄む。そこに澄む。かればかれば月影したに澄む。そこにすむ。

しほや

今日とくらして飛鳥の川に。なふさいく夜。なんなんなじみも。かればかはるよの定めなや。

おなじく

立田山道たどりて見れば。なふさ鹿の。なんなん鳴く音は。かはひや妻ゆゑに身をやつす。

梅が枝

庭の梅が枝いのちの君に。何がをしかろぞ花一重。さいたのさいたさいた。何がをしかろぞ花一重さいたの。

おなじく

さつさ五月雨涙の雨の。降るにつけてもなほゆかし。獨寢かはす枕手枕。ふるに

草の中にも物思草。誰に恨みは眞葛が原や。どんと此身を捨草にして。朽ちもはてなばそれかれそれよ。えんは朝顔わさくとまゝよ。せめて逢瀨のふかみぐさ。

もろこし

花に戯むれまた時鳥。月にめでぬる時しもあるに。年の名殘と降る白雪と。いづれ哀れさりとはへ。うつるも浮世へ。ながきためしの松さへも。くつとのさては。千歳も一夜の夢かへ。はかなの此身へ。

おなじく

憂いぞつらいぞは里馴れて。染むも染まぬも逢はねばならぬ。いつか思ひの八重霧晴れて。せめて夢になりともへ。わけあるかたへ。まゝにならぬは。誰が身にもありとの。それを便にうき身を送るへ。此年月をへ。

ありま

露になりたや袂の露に。消えぬうき身のかこちぐさ。なにを種とか我思ひ。

おなじく

星になりたや七夜の星に。はしは紅葉の色ふかく。かけて願の糸の縁。

白菊

ば。はかなき我かよひぢ。ざりとは。

くしだ

其一

霜にさまよひ時雨に通ふ。袖の落葉も涙に濡るゝ。野路の棚橋戀ひわたる身は。何につけてもものうきわざよ。宵は首尾なし更けてはさはり。四つを限りの夜の關。

其二

いく夜かはせし情の末も。いかに逢瀬のなる中川に。ほんに洩らさぬ心の底を久米の岩橋たえても人に。戀ひや渡らん思ひをかけて。いつを限りに身をなげん。

其三

よしやたのまじあだ人心。一重ばかりか八重山吹の。たんとなじみの誓ひもあるに。移りやすさの花色ごろも。問へど答へぬ口なしわらや。我は木幡のかちはだし。

其四

なみだ川

其一

涙ならではうきをば問はぬ。かわくまもなき我袖のいろ。

其二

花は折りたし梢は高し。心盡しの身はいかにせん。

其三

立田川には紅葉を流す。我は君故浮名を流す。君故流す。

其四

浮名立田の山道行けば顔に紅葉がよい散りかゝる。紅葉が散りかゝる。

しがまつち

恨みつわびつ思をしがの。とこの淋しさよつれなき人に。見せたや庭の柳の糸の。風になびきしを。

ちらし

さてもやさしき螢の虫や。忍ぶ瞬の暗路を照らす。人の心も情あれ。

てまり

難波津のみじかい蘆の節のまを。濡らさるゝ身の朽ちはてずさてもうつゝにうつろひくれて。夢も見ようや見まいやら。なかば咲いたる白菊の。ころになれ〳〵尾花も亂れ。けふは降りゆく時雨の雲よ。しんぞ八まん忘られぬ。袖は別れの露涙。

與作

ひとりこがるゝ心のいろ〳〵通ひ。いはで忍ぶの山山吹通ひ。露の玉垣卯の花重晴れぬ思ひを五月雨に。さつとかをれあや菖蒲。さりとは假寝の床の夢。短夜の夏の夜に。東雲ことゝふ山時鳥。浮名に立ちし。せめて知らせんこのつらさ。なはしもかはかぬ我袖に。さつと降れむら時雨。

捨小舟

まがきながらの御見はつらや。人目忍べは思はくばかり。袖は涙の淵瀬となりて。うきは流れの身は捨小舟。せめてしばしはとまれかし。

おなじく

逢ふは別れとかねては知れど。今朝のきぬ〴〵いつよりつらや。袖は血汐の涙となりて。恨みこがるゝ身は戀衣。せめて一夜は來ても見よ。

其三

後のわしたに通はす文の。よべの手枕。今朝はなか〳〵。けさはなか〳〵亂れ髪。ゆふかひも。

くざき

其一

二丁はげしき。夏の夕べにつく舟も。人目づゝみの。しんぞ螢も我思。戀とうき身を。沖のかもめにかこちて。氣の毒うそもすてられず。

其二

夕べ淋しき。秋のなかばの通路。戀にくちなん。袖の湊の捨小舟。月はもとより隅田川に流して。いざこととはん都鳥。

其三

見しや玉簾。うちぞゆかしき思ひづま。引くな唐猫。綱にまかせて。追風くゆる心を誰にかこちて夕暮。あだにはきかぬ浮名を。

其四

人のつらさに。こりぬ心のいつまで。うきは玉緒。たえぬばかりに呉竹。いくよ伏

つる〳〵と出づる月を。松のえだでかくしたゝいざさらば伐りても捨ちよやれ。松の枝の下枝。

ちらし

とんとつきあげきりゝとまはり。〳〵。見てし人こそゆかしけれ。

いつの夕べ

いつの夕べからやらついかの人になづんでひたすらに。深き緣も。替る枕のおきふし。この里の習かや。いたづら草の秋風。さそふ色とてうつろふ人の心やと。いふたら憂さを忘りようか。えいはいな〳〵。と云ふても性は直ろうか。おとを云ふほど氣のどく。

さかづき

其一

玉の盃底なきとても。とても契らば二世と結ばん。〳〵常陸帶。さてよい中。

其二

たとへ御見はまかせぬとても。おりしなじみの。〳〵。末は互の逢瀨川。さてよい中。

もはや垣根も雪かと見ゆる卯の花なはなつかしき時鳥。

和歌の浦

其一

和歌の浦には名所がござる。一に權現二に玉津島三に鹽釜四に妹脊山。片雄波こそ名所なれ。しやうがへ。いよわけよふいふたなのはん〳〵のはんへ。かふしたわけよ。片雄波こそ名所なれ。

其二

人はつねとやうつろひやすき。露のかごとをまことゝ思ひ。たづね入らばや山のおくの。見えぬ色こそゆかしけれ。さのおくいよわけよふいふたな見えぬいろこそゆかしけれ。

其三

吉野川には櫻を流す。立田川には紅葉を流す。橋の上より文とり落し。水に二人の名を流す。しやうがへ。いよわけよふいふた。なのはん〳〵よほひほ。かふしたことの。水にふたりの名を流す。しやうがへ。

薩摩節

見の夢も流れて涙川。しがらみかけてせかふよ。

其五

戀の初風。身にしむほどぞなつかしし月は文月。たがかよはしの文月。七の夕を。星もいくせの思川。かさゝぎ橋をかけふよ。

其六

袖にふりくる時雨。立田の思川。濡れて紅葉の。いろも流れのはてしなや。何を恨にたえて契りの薄氷。なか〳〵戀はわたらじ。

其七

かはす手枕。たえぬ逢ふ夜の中川。さはり浮橋かゝるつらさは誰ゆゑ。よしや流れに朽ちははつとも。一すぢをあだにはせまじ我心。

其八

閨にとゞまり。過ぎしその夜の睦ごと。思ひ亂れて。ひとり寢る身のうさつらさ。つらき今宵は。夢もなく〳〵泣き明かす。そひねの枕なつかし。

其八

なんぼ惜しみし。昨日の花もいたづらに。今日はいつしか。かはるならひの戀衣。

やみの夜にえいさらえい。

ちん／＼ぶし

其一

いくよ重ねて降り積む雪の佐野のわたりに駒ひきとめて。はらひかねたる吹雪の霙まじりに降りくるを。かちひともへ。それは戀の夕暮。いろにこゞえて死のともせめて。思ひを語りなばはてそれまで。

其二

ならぬ戀なら止めたもましよ。沖のちん／＼千鳥が。羽根うちがへの戀衣。さてよい中。それがおやうよおきのちん／＼千鳥が羽根うちがへの戀衣。さてよい

其三

もはや曙別れのつらさ閨にことゝふ虫の音。たえなばたえよ玉の緒。我涙へ。それはうき人の閨にことゝふ虫の音。たえなばたえよ玉の緒。我涙へ。

其四

舟に召せ／＼色ある里へ。波のよる／＼たれ待乳山。追風あらしの來ました。見

其一

親は他國に子は島原に。櫻花かや散り〴〵に。

其二

そらに鳴く音は皆うそ鳥よ。閨のうちこそ時鳥。

其三

お江戶出てからとつかは泊り。駒を早めて藤澤へ。

其四

美濃に妻もち尾張に住めば。雨は降らねど蓑こひし。

ひよどり

ひよ〳〵と鳴くは鵯鳥。小池にすむは鴛鴦。をしどりの。しかも鰥におふやの留守もり。さらばえいやとな。な。えいさらえい〳〵〳〵。えい〳〵〳〵。しかも月の夜か。暗の夜にえいさらえい。

おなじく

かず〳〵の宵のむつごと。恨にふくる東雲。東雲の涙ながらに。もはやかへるさらばえいやとな。えいさらえい〳〵〳〵。えい〳〵〳〵〳〵。しかも月の夜か。

秋は高尾に染めたとさ染むるとなおくつゆ時雨それはへ

其五

冬は霜夜のさえたとさざゆるとさなく友千鳥それはへ。

さんさぶし

宵は月にもまぎれてすむがふくる鐘にはさんさ袖絞る。よしなの思ひ。

かごしま

其一

こゝにはやらぬ鹿兒島にはやるになきさ三十振袖四十島田なほいさ〳〵。

其二

志賀のさゞ浪立つともまゝよ。霞がくれの舟ゆかし、

其三

文はあまたに書くともまゝよ。思ひ初めしは只一人。

みどり

ながめいみじき吉野の山や。花の八重雲たなびきつれて。峯の白雪麓の吹雪。野邊の緑と色こきまぜて。其にちりしく薄花むしろなれじその夜の袂に匂ふ。春

附はござきわけの里、舟召さぬか。それはおだしおだ浪。落ちて沈んで死のとも。ひきはかへさじ二丁だち。名はながさじ。

其五

まつにはそなく今宵となりて、年に一夜の逢瀬も絶えて。頼むかさゝぎ〳〵。戀の湊の渡守。いく秋も。それは文の織女。あかぬ別れの名殘に。いとゞ袂は星合の空きのきく。

さいこのぶし

其一

佐渡となえ佐渡と越後は。さいてのさいよ筋むかひ。それはへ。橋をな橋を懸きよやれ。さいてのさ〳〵いよ舟橋を。それはへ。

其二

春は吉野に咲いたとさ〳〵。初花櫻それはへ。

其三

夏は雲井に鳴いたとさ〳〵山時鳥それはへ。

其四

別離苦の。死んで又きて。その〳〵〳〵。その先の世も。思ひ知らせん思ひ知れ。袖のみなとの戀の淵。わたりくらべん。涙川。いろに沈みて死のとも。ひきはかへさじ早小舟。名は流さじ。

あづまをごり

朝の六つからずんど出掛けた。ずんずど踏みだす八文字。びんつけとろりと人がらで。いせてうふなてうのだて姿。酒屋の娘。店のひまよりちらと見た。見そめた晩に逢はふぞや。語ろぞや。さしあしそろ〳〵くゞりをちつくら〳〵。くらちくらぱつたりくら〳〵。がりちつくら。ぱつたりくら〳〵がりくら〳〵。がりのくら〳〵とも。明けてお待ちやれ。おそく〳〵月の出るまで。

おなじく

よひ〳〵よな〳〵。通ふ夫もつ女は。髮の結ひどき鐘つけ頃は。月は三日月いづる頃。なふやれ〳〵さてもの。誰をまつやら黄昏時に。かどに〳〵〳〵。立つとなふ錦木かいの。よる立ちやる。

野中

わのや野中におしふせられてうしろいばらてさゝれはすれど。前は結構な〳〵

の移香よそにのみ洩らすなえいこのさんさ。袖の移香よそにのみ洩らすな。

白雪

うそのかたまり誠のなさけ。このまんなかにかきくれて。降る白雪の一山〱。つもる思ひとつめたいと。わきて云はれぬ世の中。

村雨

村雨〱晴間を凌ぐ。人目づゝみの草葉の螢。胸にたく火のたぐへてもゆる。我は消えなん〱。我は〱消えなん。いつかへ。

おなじく

ひとりね〱夜寒の衣。まことうらなき山の月も曇れ〱ど降りくる涙我はくちなん〱。袖は袂くちなん。うき名も。

みだれがみ

君と我とは七つ八つ。十で殿御を見そめて初めて。人こそ知らね振分髪を。そなたならでは誰にか見せん。この黒髪を。今はあだなる亂れ髪。亂れ心やあゝ〱。逢ひた見たさに來たぞかし。つらや〱と思ひはすれど。また捨てられぬ。憎さあまりていとしさまさる。さても命はつれないものよ。君つらや。いきて思ひは愛

君とふたりは雙の岡のぞゐて小松のよい中なれど。恨みかねては降るしぐれ。

おなじく

かづま

恨は人をも世をも〳〵思ひ思はじ只身ひとつの。むくいの罪や數々の。浮名に立ちし懺悔のありさま。岩洩る水の思ひとなり。なほあだし野の露涙。つゝめどあまる世のならひ。きのふの花は今日の夢。おどろかねこそはかなけれ。身の憂きに人のつらさのなほ添ひて。忘れもやらぬ我思ひ。せめてしばしはとまれかし。梓の弓に立つ空の。これまであらはれきたるぞや。あゝなつかしや今とても。忍び車の我姿。我姿。ものにくるひしありさまを。哀れとも又はかなけれ。世の中は廣いようでせばいよの。にあひのつま〳〵。いとゞ太皷の音。どん〳〵もよし。どん〳〵〳〵。どん〳〵〳〵。つく〳〵てんつく〳〵。どんがらが。太皷の音もよしやつとしよ。にあひのつま。いとゞたいこのね。どん〳〵もよし。どん〳〵〳〵。どん〳〵〳〵。つく〳〵てんつく〳〵。どんがらが。たいこのねもよし。やつとしよ。ものにくるひし我姿。

門ばしら

お正月じや〳〵。前はけつかうなおけつかうなお正月じや。

小町

思ひ深草色には誰も。迷ふ道芝露ふみわけて。百夜通へといつはる文を。まことゝ思ひかの少將は。月の夜もゆく闇の夜も通ふ。思ひあまりて涙に濡るゝ。雨の夜も風の夜も。はらへど〳〵袖にちりくるは。雪かみぞれか木の葉か露か。軒の玉水とく〳〵と。行きてはかへりかへりては。またせんかたなみの夜のみち。こゝを通ひて來にけらし車のしぢに通はんと。こゝにたゝずみかしこに立てば。さてもかなはぬ浮世かな。

うたゝね

心の問へばかくれない。戀路知る人。波のよるさへ夢さへうつゝさへ。よしなの猫の身をそぼぬれて。なれようとは又うそばかり。それはじやうなら浮世にかゝる。露のあだものの。しばしもへ。

いしきり

思ひそめてはいとまなきうらさ。涙しほれて妻こふ千鳥。どこの浦かけて鳴きあかす。

さまの戯むれにつれて〳〵くるはの。のんやはゝ〳〵。はんやしたふてんとさ。さあしたふてんとさ。勝つて兜の緒締の巾着。金銀のは。たとひ此身はぼんでんこくになるとも。ものゝ日〳〵は無にせまい〳〵。さらばへおつとせ頼むによ。ならぬにさうそつきめ。傾城めひんはめ。へへへへへ。かへる姿はやぼ人の。傘も足駄も踏みちらかいて。雪のその夜はばか〳〵しやう〳〵たどりゆくほどに。だうてつの鐘のこゑ。千手陀羅尼を讀むときは。はや明方になりなんど。千々に心をくだけども。ゆきてかへりてぬめる身か。

さんやがへり

世にこくに。あはれ〳〵しきは。さんちやがへりのふと吉三。宵の酒宴に思はれて。あなたの方へさらばへ。こなたの方へのさばはんや。馬にも舟にもえ乘らひで。手編笠をさしかざし。土手のくぼみでけつまづいて。膝がしらをすりむいた。なんとした。わたゝのたちんば引き〳〵。金龍山の米饅頭はおりないか。世によない。ない〳〵のない。とかく戀には身がふとる。

おなじく

世にこくに。わびた茶の湯は。朱雀通ひの浮れ人。宵のさわぎに聲かれて。あなた

晝はたんこ〳〵な。桶の輪をさしみやる。さのはんへ。よさりやせんまじよの。こししみやる。しやうがへ。

おなじく

たんだ振れ〳〵六尺袖を。さのはんへ。朝鮮寺門柱をふりかくす。しやうがへ。

池田

池田伊丹の六尺たちは。晝は繩帯繩だすき。夜は綸子の八重まはり。

一夜かゞみ

更けゆく空の犬の聲。あげや〳〵もうちすみて。恨みらうさい別れ酒。いびきみだれの閨もあり。しどけなりふりのひとへ帶。もすそでだかく脛しろく。送り屆くる仲の町。おのがさま〳〵待乳山の。松の嵐はその夜の夢をさまさせ。寢ぬ馬鹿ばかりあゝばかりへ。明けぬさきにと葛城の。あゝ降つたる雪かな。雪をまろめて一つかみ。投げつけたまへば操のまへ。だれじやいの。こんな惡ひことはせぬものよ。金をあつめて一つかみ。なげつけたまへば晦日のまへ。だれじやいの。こんな結構なことするものよ。納豆あつめて一つかみ。投げつけたまへば局のまへ。だれじやいの。おかさんせ。こんな不道戯なことはせぬものよ。げにさまざ

はつね

初音つらにく障りがちにござる。せつくはいてゐよよざどのわけは。きのどくぬらす〳〵〳〵〳〵。もれてみだれてはつとさ。だん〳〵ものうい正月。御慶御慶と明けゆく春の。二丁目わたりに鶯鳴いて。きのどくのやますたりしむかし。鐘のかず〳〵今更をしと。わけを友禅ひだりの腕。股にすけさま命とほりて。りうしのてんと睦言も。皆いつはりよ。あきのろくざもいたづらごとよ。月に廿日はあふたいていも。おくしよすてぼのさんせきゆゑに。今は便の文ばかり。

餓鬼舞

あら閻浮戀しや。安きひまなき身のくるしみを。のんさてまことに。たふれ伏してぞ泣くばかり辨慶きいておゝ道理〳〵。骸骨達去りながら。たちまちそこを立ち去らずば。片端よりかつひしやがんとぞ申しける。がいこつ此虫きくよりも。武藏さま〳〵辨州さま。それはあまり曲もじもござんせんはいの。こればかりの盛切飯を。一ぱひばかりは。ふんぞろばいでもけころばいても。ちつともぞつとも大事もないが。火焔となつて燃えあがる〳〵。火焔かたをばお御覽じやつて。おゝかなし。おゝ〳〵泣く〳〵ばかりひもじ。

のかたで投節。こなたのかたでそもべんけい二まいかたにも得乘らいで。やきいん編笠うちかざし。丹波口にてけつまづいて。裾つきまでふん裂いた。なんとしたざこんかないぼろをさげ〳〵。松原どほりの蒲焼は召すまいか。けらいせにとくない〳〵のない。とかく食はねば身がほそる。

舟唄

わさのおまへのさんはが瀨戸を。小女郎戀しとな。唄ふてなのりておこぎやる。てしやくしこん娘。こさいたこせんかこかい。かこぐるまつのこよねが〳〵。つがはが〳〵〳〵。のんえい。よほろではやらいで唄でやる。君を思はで通はりよか〳〵。どこで見た。どつといたしたとよ。えい〳〵。君は春咲く梅の花。おゝじやとよえい。かをるゆかしきとりなりは。わりやりやこりやりや。えい〳〵さつさえいさつさ。萬歲じや〳〵。千秋樂〳〵じや。ちよぎや〳〵ちよぎりや。ちり〳〵やちり〳〵〳〵とも。渚に友呼ぶはんまちん〳〵千鳥が。よせくるこん〳〵〳〵小波にゆられてもまれて。たんどりちんどり。しどろもんどりはねられたほゝたん〳〵つるやら。このしたんたん〳〵たゞちがよんきゝよ。こんこゝこのこんこのへ。

さいたさ形はよふてっぴやくらび着よふてさ。

さいもん、

もとよりまことの行者にもあらざれば。武士たる祭文知らばこそと。ではうだいにぞ。そも／＼祓ひ清めたてまつる。みもすそ川の影清く。外宮は四十末社。内宮が八十末社。あはせてやしやくのなぎたおふ。ひざぐるまにかいこふで。そこさんこゝさん。上方の社には。稻荷祇園加茂春日。松尾の大明神。北野は天滿天神なり。あのおしやんすことわいの。あのおしやんすことはいの。鹿島浦には寶舟がつくとの。千本舟岡朱雀色里やあそれの。問はゞ問へかし。いよ伊豫に松山讃岐に。金毘羅。おなじく志度寺の觀世音。津の國にいたつては。天王寺は聖德太子の御願所。しはやまつとも二芝居。えい／＼／＼。ことしや殿御の草刈年よ。鎌もよく刈れ千草もなびけ。心よいぞの鹿毛の駒どこ／＼／＼。どつこい／＼。あねさまや／＼。あんすで／＼よござんす。山を通れば山桃はしや。身をもなげかけゆすらば落ちよ。あまりつれなの山桃や。山につれなの山伏や。なは山深く分け入れば。加賀に白山信濃なる。淺間更科伊豫甲斐國。つるがこはりや小笠原。相模の國に鶴岡。鎌倉山をよそに見て。沖の小島に友もなく。憂きを駿河の田子の浦。

あみすき

あみすき又兵衛殿はでせしやてござる。はだし裸のだいまゐり。祈るしるしの利生もあらば。まち〳〵かど〳〵店のはなにも。ひつかけて置いてから。子供衆〳〵。もちつとそちらへよらんせの。おゝもちつとそちらへよらんせの。わくるは〳〵。わくる〳〵〳〵。すきわくる〳〵。網を五色にすいてかきよとの。宿願かけて。因幡藥師〳〵はんな。蛸鮓蛸殘らずかけた山葵信濃の國には戸帳にかけた。それがうそなら善光寺の佛所に問ふて又見さんせの。愛宕様へは月まゐり。祇園やれ〳〵清水たんばの。子安の鐘の緒かけた願なりやすかねばならぬ。この町は子供でかしまし。上の町ですきましよ。上の町下の町。みせのはなにもひつかけておいてから。子供衆〳〵。もちつとそちらへよらんせの。おゝもちつとそちらへよらんせの。わくるは〳〵。わくる〳〵〳〵。すきわくる。網を五色にすきわくる。まん〳〵又兵衛が。網すきまん〳〵又兵衛は。網すき又兵衛が。ずいた鐘の緒。とかく又兵衛どのはしゆぐはん。後世ねがひ。

ぬりがさ

おかた塗笠七年はやい。すけがさにかへておめしやれさ。近江の笠はいよこの。

よ及ばぬ戀を瀬多に掛橋ばつと立つ名が浮名のうきにさ。網引く〱よねたちは。やんれかはゆらしやの。えい〱叡山の御山は。くされだてしやじやないか。やれ雲の帶。鹿子まだらに雪の振袖。げに〱江天のぼつとりもの。志賀の唐崎〱代參り。ひつゝれだつていつれだつて。まゐる女は男ほしさに。宿願かかかかけたへ。利生をまつぞ一つ松。その木のもとでさすぞ盃やつこりややつこりや。のめさやださ。ぞめきさわぎしありさまを。見たか平沙の樂あそび。かぶろやりてに太鼓持。瞽女や座頭に按摩取。さても惡所のせいらひやとばつといふて。ばんしゆ〱。ばん〱しゆ。雨も降らぬに高足駄。簑きて笠きて棒ついて行燈さげてどんがらり。どんどゝなるは。夜店じまひの太鼓持。どんがらり。なにものじや。おれは遠寺の番太郎。さつては別れの涙こそさつき濡れてしつぽと濡れたが。瀟湘の夜の雨にもまさるべし。あくる日は二日醉の作り病ひで。親兄弟の見るときは。まことらしげに洞庭の。おゝきのつきともいひつんべし。いかひたはけのなれのはて。うかりひよんとぞ見えにける。

津島祭

津島祭に浮れ出てへ。ひるは〱神樂に。ちやんきりしつかさり舟あそび。まづ三

きぬたのおとのいと高く。宇津の山邊を三保が崎。磯によせくる浪のおと。名のつたる千鳥の。轡のひゞきがちん〳〵〳〵鴨の足。かはるまじ〳〵。此世をさておき後の世も。これ〳〵。さつて〳〵。ういてきた身は浮島や遠江。名たかき古事を三河なる。かの八橋やいつのまに。尾張の國には鳴海潟。いつまでこゝに伊勢の國。鈴鹿宮川月讀や。阿漕に引くはなみだへに。山田が原や宇治橋や。橋のいよこの下には。はしのしたには。そつこで御旦那ほんのせにきせろの。がんくびはとのめ。おつとよどんだ。ねこのすゞでもそつともとまれ。かしげにうはき。だんなうつゞは。よねやまやくし。なんなむきめう長左衞門。おぶらうんけん總右衞門。御祈念とぞ。うや松原どほりへ。

失念

こんど長崎で。かはつた小唄を習ふた。あとさきは覺えないが。中の唱歌を忘れた。さこそあるべいとて。書いてもらつたが。それさへ出口で落した。これ面目ない。首尾もしよわけもこのとほり。これ面目ない。

あくしよ八景

なんぼせきやるとも。逢はなけりやならぬ。やだといやらば。出直してやりかけ

笑止

せうし〳〵が三笑止ござる。一に出ぬ首尾。二に舟の雨。土手の夕ぐれ橋場の烟。明の烏の聲々もきのどく。

おなじく

せうし〳〵が三笑止ござる。一にかす首尾。二におそひしゆび。軒の夕暮かぎりのたいこ。ならぬもらひの。やくそくも氣のどく。

永代橋

願もいとゞ掛巻も。露をしからぬみちのくの。深き情をくみあげて。なむやたいじの觀世音。枯れたる木にも花咲かせ。いまの若いに浮氣もしやれ。風がさそはゞなるまいに。まだ夜は深ひにさりとては。きぬ〳〵せつく舟むかひ。箸をりくべし酒のかん。猫のおらせし座禪豆。月は待乳のこがくれに。つげてたゞよふ村烏ひふみ夜をこめて歸るつらさに。またの御げんと神かけて。まだ見ゆる今戸橋。しゝ向島ざき名殘あり。おしきりなだもつゝがなく。いそぐ心はなけれども永代橋にぞつきたまふ。

ころく

番叟の鈴のねは、おふさへ〳〵や、おんは〳〵、しやん〳〵。とゝん〳〵。ふみわたる。はやせや〳〵役者衆。そのつぎは供の衆。かぞへ〳〵見たれば。一つ人の忍ぶ新町の式部は。花車なものじやと。ぞつと褒めたもことわりよ。二つ二葉の松は。頼みに別れは浮舟なあゝん〳〵。三つみかさに。四つ吉田の兼好がながれとて。その敷島の道を立つる。女郎はあくしやうらしやの。びやくらいかはゆらしの五つ井筒はいきおはりおひ。強いか弱いか。六つ武藏は辨慶せいのつはものじや。七つなかはしは欄干につゝたちて。口説の男をいまやおそしと待つたりけり。雪駄の音はざら〳〵ざ。ざらりひしやり。すはしれもんのんよと。盃手に持ち持ちかける。かへるさはところさになつて。門まで送れさ。さらばやはつといふては。八つ八重桐は髪切姿にさまをかへ。とさんくみおう盃を。かぶろにもたせてさすいさやぼさ。てんと〳〵てんと〳〵てんとや。おつつめぼいかけ。紋日もの日をいちに禮拜。なむ歸命頂禮くせつもなかれ。九つ小太夫は。おしつけ小藏を立てそめて。家もさかひやの。女郎やあげやの大黑舞と。夜店の太鼓ではやした。十でとふからか。明日はとふからござんせ。三番だいこでずんてんとふから。文はやりてのかぶろやりくる。

よいよ花がちる／＼

吉田通れは二階からちよいと招く。しかも鹿子のずんど振袖がなん君ちよいとしよ。

吉田小女郎

四季よほん節

さそふ嵐に。散り行く花の。よほん／＼／＼へ。よほん／＼へ。せめてしばしは。香ばかり袖にはのこれ。よほん／＼／＼へ。よほん／＼へ。

軒の橘枕にかゝる。よほん／＼／＼へ。よほん／＼へ小夜の寝覺に。事とふ山郭公よほん／＼／＼ゑ。よほん／＼ゑ。

ところ關屋の月さへつらや。よほん／＼／＼ゑ。よほん／＼ゑ。鹿の鳴く音に。いよしもあはれをそふる。よほん／＼／＼ゑ。よほん／＼ゑ。

雪にならはで思ひはつもる。よほん／＼／＼ゑ。よほん／＼ゑ。きゆる思ひになどかはとけぬは君のよほん／＼／＼ゑ。よほん／＼ゑ。

しうさめ

おれがしうさめはさふいぞ／＼。あの松山の葉をよめ。あの松山の葉をよめば。

ころくぼつくり〳〵ついたる竹の杖。ころく本は尺八。中はひうやりちやうやりふえ。ころく末じや。一筆啓上せしめ候。せんどは御狀を下されたれども。ついしか返事も仕らひで。さて〳〵無沙汰に思ひまゐらせ候べく候とも。書いてやれ。筆の軸竹ころく。

たかを

たかを内にゐて蛤くゆるよの。もはや河豚時。やんや今年の河豚はへ。それ〳〵〳〵。かいてお見しやれ。ぞぶろく〳〵〳〵や。しるすい〳〵のすい。

花見車

花見車を引きやるはよいが。〳〵。御所の女郎衆の袖ひくな。やれ袖ひくな〳〵。御所のおよろしゆの袖ひくな。

五條車

五條あたりを車がとほる。のほんへ。たぞと夕顏。さんさ花車。のほんへ。花車。くるまのほんへ。

咲いた櫻

咲いた櫻になぜ駒つなぐ。のほんほへ。駒がいさめば。のほん〳〵ほんほのん。い

おろせがやどにてこれをなげき。神樂を以てもんざく袖をひるがへせば。また常闇の氣もはれて。ともしび光りかゞやきて。これより色里繁榮し。末の世までもぶたいてん。寂光淨土の臺とかや。

思ひきれどやきり山の。朝霧こめてやつきり〳〵〳〵八重霧や。小原高倉たませしは。しきぶ奥州小倉山。せやま宮越唐崎や。くれはやしはの道もせに。浦のわげなき釣はせで。磯のかつ山わけのぼる。麓の野邊の萩原が。敷とねし夜のねたましく。荻のうは風吹き拂ひ。わくるわびしき葛城や。たかま高崎のせ小川。大江大ぎし大淀や。此おほ國の君達に。替らで通ふ人々に。來るまじきはわわくるしの災難が。たゝりをなすとも今よりは。諸客は成就。わげやはまんぞく。全盛と敬つてぞ申しける。

手杵

市兵衛かしらに弟は二人。餅の米がな。やれ小豆がな。山に手杵を見ておいたしよがいな。やれ見ておいた。山に手杵を見ておいた。しよがいな。

さまがたより

わらいたしや百合若樣は。〳〵。しらぬ他國に捨てられて。橋の欄干に腰打かけ

そなたは。天なる星をよめしうとめ。おどり一おどり。

茶摘

くもの御來迎は。さご右衛門が拜むへ。其子無事郎ともおお事はするなへのちはさ右衛門が。みせかはりゐ。

隣藪からによき〳〵出たは。去年の竹の子の。この〳〵眞竹。こちの樋竹に見ておいたしよがいな。やれ見ておいた。こちのとゆ竹に。見ておいた。しよがいな。おどろとまゝよ。はねぎろとまゝよいとし殿御と。こちや寢たがよい。袖を敷寢の新枕。

鹽屋長次郎

鹽屋長次郎はこいさばにのせて。のふさ。おきにやとん〳〵。どんどろのけば。夜の目もよねられず。朝せうがない。

替祭文

祓ひ清め奉るの。色はこんほん太夫しよく。さてはてんしよく姿なり。まんづ江口の始より。君といふ字をかきそめて。世々の末にはよねと君かへ。せんしやう大臣閨の戸ぼそにひきこもり。常闇の夜店となりけるを。八代萬代の末社たよ。

君を待つ夜は。のほんほんに〳〵さ。西も東も南もいやよ。ほんにさりとて待つ夜は來たがよひの。ほんほんほんにほんにさ。

替榮閑神颪

かざらるゝ百色の道具をならべければ。たがしまひものゝ如くなり。五通の手形の五本立てならべ。もとよりせいすけ三國にかくれなき。神變奇異の智惠者なれば。旦那のゑんにさしあがつて。まづ無き事をぞ申しける。金子三兩〳〵かし給へ。かみへ上るも路銀なければ。てんとびやくらい。どうのつまりは下界におつる。伊勢にしんだいかためたれども。雨にふられ風に吹かれ。月待日待におまつさへ。大日におひおさましや。火ふく力もあらばこそ。大屋の屋賃もなさゞれば怒り切つて立てよ〳〵よと。あたまくだしに叱られて。男ならば正八幡大菩薩。まつぞやしばしおなしあれ。伏見の御坊はいつもの如く。どうにすまさば何かせん。たてたは此月申の日よ。車はすこし御免なれ。眞實おんになすならば。錢は一文なけれども。天王寺で醬油造らせ。炭うりしても大事もない。四國の米は讃岐で一石。同じゝ一石三斗なり。筑紫の彦三はいつもの如く。大屋して奇特に。夫婦は方便なり。たんでになれあひ。きれいにもんたて。大せいくらすと承

て〳〵。そより〳〵と吹きくる風は。樣が便かなつかしや〳〵。鳩が豆くふ。八兵衞殿はとが〳〵。お花出て追へ竿打かたげ。よやりひやりに出て追やれ。〳〵。ちやつと出ておやれ。よやりひやりに出ておやれ。

間の山念佛

うき事を。思へばいとゞ胸の火の。消えやすき身といひながら。輪回のきづなにつながれて。南無阿彌陀〳〵〳〵。

夢のうちなる夢の世を。さとらぬ事のはかなさよ。なむあみだ〳〵。野邊よりあなたの友とては。胎藏界のまんだらと。血脈ひとつに數珠一連。なむあみだ〳〵〳〵。

伊勢の櫛田

伊勢の櫛田のまん中程で。深き思ひのやれ紫ぼうし。ほんにくどくか。そりや眞實か。五智の如來も惠もあろと。戀の重荷を乘掛馬に。離れがたなき我思ひ。

おもやこそ

思やこそ來れ思はでこよか。千夜萬夜は寢てこそよけれ。かけてよいのは小竿に小袖。かけてわるいは薄情〳〵。

のういものよ。忘れた戀を又思ひ出す。

鬼が出る

おくりかへせば。比叡の山風身にしみて。菜種の花もいろ〳〵。鬼がでる。跡より子鬼が。いくらともなくによき〳〵と。ある所につき給ふ。

思草

長い刀をぼしや〳〵とさして。おはれぬ中を文にて通ふ。いつそ此身はもみくしやにして死なば野中の身は朝露と。消えてはかなく成りゆくものを何が殘りて罪とは成るぞ〳〵。

庄屋の庄左

おとんとん〳〵とろさく。やれなりそめてこんにもせい。なかさへよくば鍋買うて所帶しよ。うれがそこへいてることか。庄屋の庄左どの。はつちやはづかしや。

つく物揃

雛がもとに立ち出でゝ。こぬ人を〳〵。まつ身の恨みいはんため。燒くやもすそなかいとりて。土手をつく〴〵見渡せば。土手の番太は棒をつく。扨又我等はか

はる。日吉は山王廿一じやが。親は白髭左ちんばでこすいな。をとこちゝをふんぬくぞんめいなり。みやうぎ町には願人坊。ではで腹切る湯殿のゆかたは。見ぬ間にうせたが。だいつが取つた手もとが見たい。見付けたぞ。おいくる時は一厘にげ。二厘にげ。第三にわたつては。奴に頭を切りわられ。惣じて身のきずは。一萬三千餘きずなり。たとへ定業かぎりのしちもつなりとも。今一度うけさせてたび給へと。せりかけ／＼祈りけり。質屋もの不自由したりけん。五兩二つにさつとわれ。二兩二歩にぞ成りにけり。三人のぞろばぞも。左手右手より取り付いて。おんかたつたり／＼。かほぞのかたりは漢家本朝に。又と二人はあるまいとて。金かす者こそなかりけり。

うらのせごの屋

裏の脊戶の屋できしり／＼ときしめくほどに。なんじやと思ふて走り出て見ればなんでもしやり／＼。おんじやれめされ。さしまさぬか。夏帷子の。ぬのをおしやり／＼とさらす。おんじやれめされ。さしまさぬか。

旅の日暮

いふて歎くは愚でござる。いはで思ふはのふ身をこがす。といの。旅は日暮がも

すいな在所の癖聞けば。まづ土手町はけしからぬ。雨の夕は面白や。又氣をかへて島原と。ゆゆけばかぶろがはしたなく。はやう言葉の口わひに。あゝけたゝましきおん町へと立歸り。もんじがかぞで誰やらがきてせい〳〵と石かけに。はやる口わひまわそふよ。それは一升がなんぼする。はてそふいやるがいやじやいの。

下の關節

其一

しあんばしとん〳〵〳〵。こへてなおやぞにござん〳〵る。そこせひ〳〵。三里隔てし波の上。色となさけを小舟に乘せて。くるは誰故そさま故。

其二

北山ばら〳〵ば。時雨ながら笠持てこい。降りてきたこそせひ〳〵。雨は降るともぬるゝとも。たゞ恐ろしきかざし風。とかふいふまに晴れて行く。

其三

淺黄はざつとしたい。いやよな望がござんす〳〵る。そこせひ〳〵。小雀山雀四十雀。唐松たけのいく千代も。戀にうき茶の葉の色に。

す〳〵の。つくりし罪のおそろしや。後の世たのむ。南無阿彌陀佛〳〵。ゆいてかへるさにゆきやあたり。まはりて胸をつく。

三瀬川

西は堀川。中小川沅湘日夜ひんがしに。ながるゝ水の加茂川や。わらはがための三瀬川。げに〳〵としも三本木。頃は卯月といふでらの。ほんですごく立ならに小家のとぼしび消え殘る。影を便りてふみ迷ふ。かしてこゝを定め得ぬ。いつそふたりが中の嶋。かくれゆく身今さらに。忘れぬ顏を今一度。見つゝ見られぬうす月夜。しばし入間の水かゝみ。川を隔てゝほのきこてゆ。撥もしどろに引く三味線の。調子〳〵といふ聲きけば飲みしらけたる風情して。夜もはやいたく更けぬらん。わけと啼き行く時鳥。誠冥途の鳥ならば。地獄の有樣かたれきこ。聞ともいかでかはらめや。今宵限りのうき契り。ひじきものには薄羽織。はおらで敷くも短さよ。さしおり帶の長枕。起きて見さんせな後の世も逢をに。今しばしぞや又寢のとこ。〳〵にもぬるゝは袖。東がしらむ。しらむか鳥も告げ渡る。羽根をかはさんためしにや。褄と褄とを引き結び。ともに假寢の夢すがた。

はてくせ揃

だてをこのみやる御馬屋のせき介。くるやら馬も馬もいなゝき。くつわもなるに。次郎よ太郎よ。どこに〳〵に。さて馬どゝんど。つゝんと。つ繋いだ。お寺の寺の柿の木に。づんぼろぼ〳〵。とゝんとつゝんと繋いだ。

加太の粟嶋

かだの粟嶋を。ゑい〳〵ゑい〳〵ゑい〳〵な。ゑい〳〵ゑい〳〵ゑい〳〵な。何といふて又をがむへ。君とねじやかを。ゑい〳〵ゑい〳〵な。いふて又拜むよへ。

さまは天人

さまは天人。それ〳〵とんとろり。乙女の姿雲の通路。ちらと見た。とんとろり。をとめのすがた雲のかよひ路。ちらと見た。とんとろり。

つんさ坊

つんとぼがさ〳〵。ゑちやのおまへの反橋を。おんまいぎやたら〳〵のほんほほ。おゝつんとぼがさいや。おりやつんどすいたよさ。

蔦の葉

おちよ〳〵とおとしておいて。壁に蔦の葉の氣心。蔦の葉〳〵。かべに〳〵。蔦の

其四

一夜はちよつとの間。これなびけな。おんまり〱どうよくな。そこせひ〱。さりとはつらき御心。物のむくいは物ごとに小野の小町の身は市原のしやれ姿。わなめ〱と吹く風に。熱のさめたる末を見よ。

忘れがたき

忘れがたきは彼人様の。過ぎしたよりにこされし文を。たとひ三千年おはずとまゝよ。親と〱の結びし縁を。なんの解かれう其下紐を。うらが解かいで。解くものはおんじやるまい。おとの亥の子にこされし文は。いつ〱よりもかはいらしや。のふ〱ゑいこのさんさ。富士の裾野にな一本薄。やれかゝれしは。いつかわが戀穂にいでゝ。亂れおはふといふ事か。ゑいこのさんさ。岩のはざまにな。やれたまり水。獨すませといふ事か。

つらい〱

つらい〱と思ひはすれど。顔が見たさにおこがれきたを。それと知らぬへよしやよそに。うつらふぬれぎぬなれど。色深くも思ひ初めたへ。

御馬屋關介

日酔後悔すりに金だらい。

其二

やんしうすむいろまりやんけん。たにこたまさんちゑまさんな。はらりと酒のかん。おなじこと梅の花。とうらいきうこ五うりうすう。

其三

かせやまうす雲。江口白菊。坂田花崎。から崎じや。若松小紫。でん／＼りきてうにしきや。ことうら玉の井だてみよし。

沖の石

沖の石とは愚のさたよかわく間もなき我涙。まもなきなまもなき。かわくかわくまもなき我なみだ

さうだんべい

そなた待夜のあふらいを。細く長かれとろ／＼と。だんべいしごくと聞きわけた。

おなじく

内裏女郎衆は水の月手にもとられず見たばかりさうだんべいしごくとき、

葉の氣心。

酒は酒屋

酒は酒屋に茶は茶屋に。女郎はきつちのなる川に。泣いそ勿泣いそ五月にやもどる。おそて六月中ごろに。

いかな客衆

いかな客衆よりも。ひげの角こまおいとし。おかへりのあとを見れば。鬢附一貝鼻毛抜。小栗の雙子をおかれた。これが花かや。たゞし今宵のつとめか。もの日もの日の口ふさげ。世にこくに世話しらしひは。晦日ごとの夕暮。白い御手にて出だされたなによ。おわしを二百いだされた。

むこ川

むこ川に住居する茶吉殿わいの。年が十五なら。心は月のまん中よさく。としがとしが十五なら。心は月のまん中よさ。

かんふうらん替り

其一

大酒亂冷酒のんでみや。なかざけ飲じらけも。一つのんで見そたんたらふく。二

や。それをたづねて北島や。文のかずよむかみたや紙屋。あまがさき屋で身はぬれ衣。色が黒けりや大黒屋じやと。人が名立つりやすこしはわくや。さきに恵比須屋わしや但馬屋で。こがれ扇屋あのひめしやで。たがいちん〳〵ちかいのお手のうち。ちがいのお手枕。じつかはす。枕にちぎりをこめて。かはすまいとて起請までかいて。のぼりつめたる坂本や。誰が思ひもあの太子やの。花の振袖としや若松や。つらいつとめは身にしみ〳〵と。はやり小歌のその一ふしも。聞いてなりとも月日をまつや。かくのこさんはな綿やのつとめ。戀がござれば勤の障り。内のかゝたやな目をむきだして。しかりますやといふてたもれ。ゑいこのこいや思ひしづみし。身は河内屋の。うき名かさけす住吉屋。波の枕にかじまやたて、京や伏見や讃岐やまでも。くるり〳〵と賣られてめぐる。便ござらばあの三笠屋で。一つまゐれとな。手にするゑたさ。

法性寺の入道

其一

法性寺の入道前関白太政大臣。うななせうせをつた。やれたゝき出されるな。

其二

わけた。

五尺手拭

其一

五尺いよこの手拭。五尺手拭なかそめて。おれにいよこの呉りよより。おれに呉りよ。はりやどにおけ。

其二

やどがいよこのよければ。宿がよければ名もたゝぬ。佐渡といよこの越後は。佐渡と越後はすぢむかひ。

其三

橋をいよこのかきよやれ。橋をかきよやれ舟橋を。橋のいよこの下には。橋の下には鵜の鳥が。

大坂茶屋名寄

ゑひ〳〵ゑひ〳〵ゑひ〳〵。つながぬ舟は波にゆられて。身は捨小舟。よるべさだめぬ港屋の。二階座敷でひく三味線の。音はてんつる〳〵てんまやたゝや。水の流れに吉野屋みれば。いつもかうしに花橘屋。ゆかりもとめて御名をば聞く

やら〳〵めでたや〳〵。天下泰平國土安穩。治まる御代は天長地久。千歳樂萬歳樂。民もゆたかに住吉樣の。岸の姫松しつてん〳〵に。大悲の風ふかば。地には黄金の花が咲こ。わりやくいよしのめでたいな。

朝妻舟

近江のやわだしわだ波よせてはかへる波。朝妻舟のあさましや。あゝ又の日は。誰に契をかはして色をかはして色を。枕はづかし。いつはりがちなる我床の山。よしそれとても世の中。……英一蝶作。

片時雨

待乳しづんで梢のりこむ今戸橋。土手の相傘。片身がはりの夕しぐれ。首尾をおもへば。逢はぬ心の細布。どう思ふて今日ござんしたさういふ事を聞きにさ。……同人作。

京の四季

春は花いざ見にごんせ東山。色香あらそふ夜櫻や。うかれ〳〵て粹も不粹も物語。二本ざしでもやはらかう。祇園豆腐の貳間茶屋。みそぎぞ夏は打ち連れて。川原につどふ夕納涼。よい〳〵〳〵よいやさ。眞葛が原にそよ〳〵と秋ぞ色ます

祇園町のまん中が、海なら川ならよござんしよ。魚をつるしの竹の。やれさまを釣りましよ。

其三

猿丸太夫奥山に。紅葉ふみわけ鳴く鹿の。うななぜ鳴きをつた。たゝき出されるな。

其四

關の小刀銘はなけれど。綾もたちます錦もたちます。金襴緞子は申すに及ばず。瓜もわります西瓜もわります。うななぜわりをつた。やれたゝき出されるな。

おつゞら馬

とても見事ななおつゞら馬よ。下にやせんしさからじまの蒲團。ふとんばりしてな小娃衆を乗せてそなたのぼりかおりや今下る。文をやろにも言傳しよにも。こゝは箱根のな山中なれば。筆にやこと缺く硯墨はもたぬ。もしも水口な御泊ならば。札の辻から四五軒めの茶屋で。馬も息才其身もぶじに。やがてのぼろといふてたもれ。ゑいてのさんさ。

姫小松

ゝになるならは。サア鶯宿梅ではないかいな。サッサ何でもよいわいな。

御所車

香に迷ふ梅が。軒端の匂鳥。花に逢瀬をまつとせの。わけて嬉しき懸想文。開く初音も恥かしく。まだ解けかぬる薄氷。雪に思へば深草の。百夜も通ふ戀の闇。君が情の假寢の床よ。枕かたしく終夜。

おもかげ

面影や。目先に殘るむつの歌。なほ日に增して思ひぞ積る。富士や淺間の煙と共に。きよき盛を魁の。花と散りなん寒雀。

夜ざくら

夜櫻や。浮れ鳥がまい〳〵と。花の木蔭に。誰やらがゐるわいな。とぼけさんすな。芽ふき柳が。風にもまれてゐるわいな。ふうわりと。おゝさそふかいな。そふじやいな。

一夜明くれば

一夜明くれば又氣も晴るゝ。花の盛は梅屋敷。初音一聲鶯の。ほうほけきやうの約束も。實に嬉しいじやないかいな。

華頂山。時雨を厭ふ傘の。濡れて紅葉の長樂寺。思ひぞ積る丸山の。けさも來て見る雪見酒。エヽそして櫓のさしむかひ。よい〳〵よいやさ。

松露取

旅立の。はでに連れ立つ須磨の浦。一夜明石の松露取。舞子の濱にざゞんざと。おらしよいやしよ。おらしよいやしよ。そこでな。浮れ拍子の青葉の笛を。道のあないに岩間の躑躅。敦盛さんに似た面影と。招き戻せし袖あふぎ〳〵。

あひたさに

逢ひたさに用もない門を二度三度。呼べど叩けど性根なし。さほど內がこわいのか。

鷺を烏

鷺を烏といふたが無理か。葵の花が赤く咲く。一羽の烏を鷄と。雪と云ふ字も墨で書く。

春雨

春雨にしつぽり濡るゝ鶯の。羽風に匂ふ梅が香や。花に戯むれしほらしや。小鳥でさへも一筋に。塒定めん木はひとつ。わたしや鶯ぬしは梅。やがて身まゝ氣ま

櫻の花が散る。

夕立

夕立や田を三囲の神ならで、葛西太郎が洗鯉。さゝがちやうじて狐分。ほんに全盛な事じやへ。堀に小舟が。オヽイ竹やの。オヽイ竹や人と呼子鳥。

福壽草

初春の。日向にならぶ福壽草。めでたき御代の長閑さに。花の心の移氣なつい蕾さへ。

仙臺

仙臺の陸奥の殿さま吉原通ひ。御家中を引き連れて。中洲の沖へと急ぎ船、やれ船唄よいやな。アヽめでたく〳〵の若松さまや。あゝ不憫や高尾はさげきりだい。

竹の春

秋の野に。誰が脱ぎ捨てし藤袴。花の紐解く竹の春。そふと吹きこむ忍ぶの竹よ。竹に思ひを吹き込んで。焦るゝ胸の闇の夜に。しんと松虫なき明かす。いとしかわいは女子のくせよ。萩の枝折を便り來る。あだな戀路を便りにて。雁の涙か白露か。月にこぼるゝしほらしい。

扇づくし

花の色は。うつりにけりないたづらに。是見よかしとてんちうで。互に濡れし袖。扇顔は。檜扇袙扇。名も岩本の御社に。口説扇のきれいせん。中よき扇八重一重。千代の舞鶴寫繪や。扇の數は盡きせぬど。一花開けば天が下。みな春なれや萬代のなほ安全ぞめでたけれ。

木津川

折から月の出汐や。流るゝかたは木津川へ。漕ぎくれなゐに染め込みし。紅葉古郷へ錦せん。散り行く葉末はら〳〵と。降るは涙か秋雨か。しかとはならんかはつゞみ。

川竹

川竹の。浮名を流す鳥さへも。番離れぬ鴛鴦の。中に立つつきすご〳〵と。別れのつらさに袖絞る。ほんにしんきな事じやいな。

咲いた櫻の木に

咲いた櫻の木に。駒の頭をしつかり。ほどけぬやうにくゝりつけ。駒がかむりふりや。見事に咲いた櫻の花が散る。花散る見事に。咲いた櫻の花が。見事に咲いた

ゆかりの色

濡れて色よし雨の藤。其あだざきも君故と。姿うつらふ水かゞみ。ゆかりの色もなか〳〵に。嬉しい縁じやないかいな。

小町おもへば

小町思へは照る日も曇る。四位の少將が涙雨。九十九夜さでござんしやう。仰に及ばず。そりやそふでなうてかいな。五緒車に簾をかけたかへ。こちや卒都婆に腰かけた。エヽ婆々じやえ。

風ふいて

風吹いて道も絶えなん雪の夜半。來ぬがましぞとあきらめて。酒の相手にうたゝねの。積る恨の宵のうち。思ひやつたがよいわいな。

志賀の唐崎

志賀の唐崎一つ松。夜每〳〵の。泊り鳥がむれくるを。あを〳〵と。嬉涙のかわく間もなく。曇がちなる夜の雨。

花の曇か

花の曇か遠山の。雲か月かは白雪の。中をそよ〳〵吹く春風に。うきねさそふや

初音

初音きかして春告鳥や。人の心も白梅の。かごとがましく嬉泣。エヽじれつたい。戀の浮世か浮世の戀か。ちよつと一筆懸想文。

淡雪

淡雪と。消ゆる此身の思ひ寢に。浮名をいとふ戀の中。亂れしまヽの鬢つきや、義理と云ふ字は是非もなく。夢かうつヽか朝烏。

五月雨

五月雨の。ふけて一聲なく時鳥。聞かしやんせコレもうし。君にこがれて短夜を。明しかねたるうたヽねを。思ひやつたがよいわいな。

花菖蒲

ぬれて來た。文箱に添へし花菖蒲。いとゞ色ます紫の。戀と云ふ字に身を掘切の。水にまかせてゐるわいな。

天の戸

天の戸の。明くると云へる嬉しさに。つい引かさるヽ春霞。思ひの丈をいふ節も。直な心の一すぢや。酒の機嫌でなぞそはじめ。顔にうつろふ初日の出。

此里に

此里に。もう幾度か鶯の。初音を聞いて鳴き明かす。山時鳥わがなみだ。五月の雨と降りしきる。空渡り來る雁の聲。悲しき思ひ白妙の。雪の姿は身にしみ〴〵と。世をおくる年月日。ほんに指折り數へ歌。

花になく

花になく鶯水にすむ蛙にも。みやびはおなじ相對の。雲の籬の漁船。ながれ次第は風次第。縁の上に繋がるゝ。楫を枕に港ぞへ。

羽織かくして

羽織かくして袖ひきとめて。どふでも今日は行かんすかと。云ひつゝ立つて連子窓障子はそめに引明けて。それ見やしやんせ此雪に。

堤に靡く

堤に靡く青柳の結んでといた縁の糸。引留められて見歸りの。思はせぶりな捨言葉。そふじやないじつじやほんにへ。

忍ぶ戀路は

忍ぶ戀路はさてはかなさよ。今度逢ふのが命がけ。涙でよごす白粉の。其顔かく

漣のこゝは鷗も都鳥。扇拍子のざんざめく。內やゆかしき內ぞ床しき。

秋の夜長に

秋の夜ながに主に逢ふ夜の短さよ。月夜烏が鳴くわいな。月じやでんせん。しら〳〵と明の鐘。

あだしのゝ

あだし野の露の命の鈴虫も。あきはてられて今更に。鳴くになかれぬ物思ひ。

お前と一生

お前と一生暮すなら。深山の奧のわび住居。縫針仕事糸車。細谷川の布ざらし。柴かる手業もいとやせん。

起きて見つ

起きて見つ寢て見つまでも便なく。蚊屋の廣さに只ひとり。蚊を燒く火より胸の火の。燃ゆる思ひを察さんせ。

梅が主なら

梅が主なら柳がわたし。中のよいのかすねるのか。ある夜ひそかに山の月。心なひぞへ小夜嵐

淺くとも

淺くとも。淸き流れの杜若。とんでゆきゝの編笠を。のぞいて來たか濡燕。顏が見たうじやないかいな。

枯野ゆかしき

枯野ゆかしき角田堤。心もさえる夜半の月。田面にうつる人影に。ぱつと立つては雁金の女夫づれ。

垣根卯の花

垣根卯の花時鳥。一聲ないて聞かまほし。音信ないがごぶじなか。どふじやいな。

桐壺に

桐壺に一葉を見るにつけ。わしや氣にかゝる。秋が來たとの辻占か。

萩桔梗

萩桔梗中に玉章しのばせて。月は野末に草の露。君を松虫夜毎にすだく。更け行く鐘に雁の聲。戀はかうした物かいな。

かげろふの

かげろふの。燃ゆる柴戸に胡蝶の遊び。それとは知らで玉琴の。〳〵。糸の青柳ひ

す無理な酒。

身は一つ

身はひとつ。心は二つ三俣の。流によどむうたかたの解けて結ぶの假枕。曉がたの雲の帶。なくか中洲の時鳥。

わしが在所は

わしが在所は。京の田舍の片ほとり。八瀬や大原に牛ひいて。柴打盤に床几頭へちよいと載せて。黑木かはんせんかいな。栗かはしやんせんかいな。エヽかはしやんせんかいな。

立田川には

立田川には紅葉を流す。わたしや主故浮名を流す。よいさ〳〵よいやらさ。

其曉の

其曉の一聲は。花川戸より鳴きそめて。土手をやこゑや時鳥。

春も長閑

春も長閑に梅屋敷。吾妻の森のうら〳〵と。霞にむせる柳嶋。あかぬながめじやないかいな。

和歌の浦には名所がござる。一に權現二に玉津島。三に下り松四に鹽濱よ。天の橋立切戸の文珠文珠さんはよけれども切れると云ふ字が氣にかゝる。さつさ何としやうか。どうしやうぞいな。

月影に

月影にうつる姿のエゝにくらしい朧かげ。鬢かき撫でゝ物思ひかうもやつるゝ物かいな。

あれ見やしやんせ

あれ見やしやんせ海晏寺。まゝよ立田の高尾でも。及ばないぞへ紅葉狩。

あふひこは

葵とは。逢日とかいて嬉しさは。二葉の露に洩らさじと。うつる遠寺の鐘の音に。燃ゆる思ひをさつさんせ。

きぬ〴〵の

きぬ〴〵の別に空も雨さそふ。蟬も螢を科にかけて。泣いてわかりよかてがれてのきまかアゝむかし思へば見ずしらず戀すてふ

きよせられて、ちよつと東風吹いてぬれかゝる、軒に近づく八重梅や、すいた二人がきげんぜう、まだ春若き鶯の、はづかし音初を聞きに來た。

我物こ

我物と、思へば輕き笠の雪、戀の重荷を肩にかけ、妹がり行けば冬の夜の、川風寒く千鳥なく、待つ身につらき沖の石、實にやるせがないわいな。

名にしおふ

名にしおふ、富士と筑波の山間に、露の情の一夜妻、色もほのめく千草の里へ、人目の關を忍びつゝ、木の間がくれに逢ふ夜さは、水に角田の月もいや。

つくろひは

つくろひは無けれど、何所か尾花草露を含めるしほらしさ、月に光りをますわいな。

戀しくが

戀しくがつい癪となる、胸にさし込む窓の月、今や來るかと待つ身はしらで、またぬ一聲時鳥。

和歌の浦

の浮橋中たえて、やるせなみだやもつれ髪、いふにいはれぬ胸の内。思ひやつたがよいわいな。

伊勢に宇治橋

伊勢に宇治橋。内宮外宮八十末社の宮めぐり。相の山には。お杉お玉が縞さん紺さん。岩戸さんへは道つゞき。二見が浦には淺間山。鸚鵡石。いそべひくには太々神樂に。これもうしやらしやせ。

鈴虫の

鈴虫の。我身思ふや忍び寢の。枕ならべて松風の。月もさすがに秋の色。耻かしながら忍びあひ。肱を枕に雁の聲。

初卯がへりに

初卯がへりに梅屋敷。薫を慕ふ鶯や。枝に宿かる心根は。アレしほらしい春の友。

打水に

打水に。晝の暑さを忘れてし。雫の山の草の葉に。月も宿りて涼風の。そうて澤邊に鳴く蛙。更けてたよ〳〵とぶ螢。

夕ぐれの

戀すてふ。身は浮舟のやるせなき。浪の夜々漁火の。燃ゆる思ひの苦しさに。消ゆる命とさつさんせ。世を宇治川の網代木や。水にせかれてゐるわいな。

ものいはで

ものいはで。鳴かぬ螢を笑ふてか。眞に心も闇の夜の。草に宿かる露の身を。散らす嵐の戀しらず。

紀伊の國

紀伊の國は。音なし川の水上に。立たせ給ふは船玉山。船玉十二社大明神。さて東國に至りては。玉姫稻荷が三めぐりへ狐の嫁入御荷物を。かつぐは合力稻荷樣。頼めば田町の袖摺も。さしづめ今宵の町女郎。仲人は眞さき眞黑な。黑助稻荷につまゝれて子までなしたる信田づま。

のぼりくだり

のぼり下りのおつゞら馬よ。さても見事な手綱染かいな。馬士衆のくせか高ごゑで。鈴をたよりに小諸節。さかはてる／＼鈴鹿は曇る。あひの土山雨がふる。

しぐれふる

しぐれ降る。淺茅が原の夕ぐれに。二聲三聲雁金のたより待身のうやつらや戀

蒲刀やあやめ草

めぐる日の

めぐる日の。春にちかいとて。老木の梅も若やぎて候。しほらしや〳〵かをり床しと待ちわびかねてさゝ鳴きかける鶯の。來ては朝寢を起しけりさりとは氣短な。いま帶しめて行くわいな。ほうほけきやうといふ人さんじや。

おちのこる

落ち殘る月の隈なる胸の内こがれわびたる時鳥たゝみし聲の恨鳴。風にもまるゝ若竹のかうもやつるゝ物かいな。

春の鶯

春の鶯ナア何を來てねる花を枕に羽をかけて。よい〳〵。

淀の川瀬の

淀の川瀬のナアけしきをこゝに引いてのぼるやれ三十石船きよき流を汲む水車。めぐるまごとは皆水馴竿。さいた盃おさへてすけりや。醉ふて伏見へくだまき綱よ。かうしたところが千兩松。よい〳〵〳〵〳〵。

秋の七草

夕暮のながめ見あかぬ隅田川。月に風情を待乳山。帆かけた舟が見ゆるぞへ。アレ鳥が鳴く鳥の名に。都といふ字があるわいな。

辻君の

辻君の。絶えぬ流れの思川。戀にはほそる柳かげ。しばしとめたき三日の月。櫛のむねさへ小夜風に。さらりと解けし洗髪。結んで淸き水の音。

逢ふこ見し

逢ふと見し。夢はむなしくさめて又。つらきうつゝの閨の内。思ふて見てもふさいでもほんに心のやる方もなや。どふで逢はれぬ浮世なら。深山の奥の其奥の。ずつとの奥に住居して。人目思はで物思ひたや。

朝顏に

朝顏につるべとられて物思ひ。人の心と淀の水。早明近き鳥羽の船。もやひはなれし蔦葛。聲もやさしき田植歌。

金時が

金時が〳〵。熊をふまへてまさかりよ持つて。富士の裾野のかりくらや。義經辨慶渡邊の綱。唐の大將あやまらせ。神功皇后武内の臣。軍人形よしあしちまき。蔦

君は今

君は今頃駒形あたり。鳴いてわかせし山時鳥。月の顔見りや思ひだす。

松は唐崎

松は唐崎時雨は外山。月の名所は須磨明石。雪は越路かな久方よの。おれはよいよいよ。おれはさてこれはさてな。

秋の野に

秋の野に出て七草見れば。サアヤレ露は小褄て皆濡れる。サアよしてもくんな鬼あざみ。

わしが國さで

わしが國さで見せたい物は。昔や谷風いま伊達模様。床しなつかし宮城野しのぶ。うかれまいぞへ松島盆。しよんがい。

菖蒲に似たる

あやめに似たる杜若はあれど。主に見かへる花はない。ほんに浮世は。アヽアヽまゝならぬ。

そもやそも

秋の七草虫の聲。殘る螢の身をこがす。君を松虫鳴く音もほそる。戀といふ字が大切だ。

竹になりたや

竹になりたや紫竹だけ。本は尺八中は笛。末はそもじの筆の軸。思ひまゐらせ候かしく。それ〳〵そうじやへ。

四社にあります

四社にありますす住吉樣の。岸の姬松。ひめ松は裾によりかゝる。ソレ磯に打ちかゝる。見やれな嶋山出て見やれ。嶋山出て見やれ。月もきなされな。住吉が名所でござるな。

今日は日もよし

今日は日もよしお出かと思ふて。小松はやして夜もすがら。ソレやらしやれやらしやれ。

源氏車は

源氏車は跡へは引かぬ。意地と我慢の江戸がたき。わかつてそして。おまへは程がよい。

わしひとりえ

うたひはやせや

うたひはやせや大黒。一本目には池の松。二本目には庭の松。三本目には下り松。四本目には志賀の松。五本目には五葉の松。六つ昔は高砂の。尾上の松や曾根の松。七本目には姫小松。八本目には濱の松。九つ小松を植ゑならべ。十でとよくの伊勢の松。此松はふようの松にて。情ありまの松にくどけば靡く相生の松。又いつ〳〵の約束を。日を待つ月待つ暮をまつ。連理の松に契りを込めて。福大黒を見さいな。

つがひはなれぬ

つがひ離れぬ蝶々さへも。水のもようて離れゆく。人の口ゆゑ遠ざかる。

人さちぎるなら

人とちぎるなら。薄くちぎりて末をばとげよ。楓葉を見よ。うすきが散るか。濃きはまづ散る物としれ。そふじやわいな。

土手を飛びかふ

土手を飛びかふ螢の虫よ。追ひ〳〵てちらりちら〳〵ちよいと出て。おさへた

そもやそも此富士の白酒と申すはむかし〳〵駿河の國三保の浦に。白龍といふ漁夫。天人と夫婦になり。其天乙女の乳房より。流れ出でたる色を見て。造り出せし酒なる故に。それからどふしたへ。第一壽命の藥にて。さればにや東方朔は此酒を。八はい呑んで八千歳。又浦島は三ばい呑んで三千年。三浦の大助百六つ。おうさつてもさつても。壽命のながい富士の白酒。

箱根山をば

箱根山をばくらしとほり。花の小田原星月夜。しよんがへ。小田原花の。小田原ほし月夜。しよんがへ。

越後の國の

越後の國の角兵衛獅子。國を出る時は親子づれ。獅子をかぶつてひつくりかへつて。ちよいときまります。親父やまじめで笛を吹く。

稻荷祭の

稻荷祭の太鼓の音。狸つく〳〵考へ。ひとりで氣を揉む腹つゞみ。

このさえゝ

とのさエゝ買うてくりやれ。朝鮮鼈甲の簪を。サッコウ〳〵。村でさゝないのは

へば、ヤッコラサ浮氣おもはくさゝ、船にのせて。楫を枕にねてこがりよしよんがへ。

こしまざかりの

としまざかりの初寅參り、忍ぶ頭巾のつい見知られて。じみな小袖のかくしうら。こぼれ松葉の幾千代も。離れぬ中の樂しみは。太平樂で世をおくる。オヽよい事の。よい事の。

八重一重

八重一重山もおぼろに薄化粧。娘ざかりはよい櫻花。嵐にちらでぬしさんに逢うてなまなか跡くやむ。耻かしいではないかいな。

物おもふ身は

物思ふ身は鶯の。をり近く。薫床しき春のきさみ。初音ひとこゑ手枕に。

伽羅のかをり

伽羅のかをりと此君樣は。幾夜とめてもとめあかぬ。とめあかぬ。

朧にうつる

朧にうつるゆかりの影は。こい紫や藤浪の。離れないてふ柵も。身は氣づまりな

團扇のてくだ。エヽしよんがへ。

紺の前垂

紺の前垂松葉を染めて。待つにこんとは氣にかゝる。

秋が來たとて

秋が來たとて鹿さへ鳴くに。なぜに紅葉は色づかぬ。ほんにきまゝな浮世じやとても。妻にひかれて今日も時雨がするわいな。じつ〳〵ほんかいな。まんざらそうかな。わしや人に云ふわいな。

摘みやれ

摘みやれお摘みやれ。宇治の里の茶摘。廿歳あまりは莟の花よ。廿の人の木とかいて。茶といふ文字に讀むわいな。伊豫簾おろしてちやと摘みやれ。

十日惠比壽

十日惠比壽の賣物は。はせ袋にとりばちせにがます。小判に金箱立烏帽子。ゆではすさいづち束熨斗。御笹をかついで千鳥足。

われがすみかは

われが住家はかくれ里。猫が三味ひく鼠が唄ふ。うたふ小うたの面白や。是を思

月の前の調は。夜寒をつぐる秋風。雲井の鴈がねは。琴柱に落つるこゑ〴〵。

其四

長生殿の裏には。春秋とめり。不老門の前には。月の影おそし。

其五

弘徽殿のほそ殿にたゝずむは誰々。朧月夜の内侍のかみ。ひかる源氏の大將。

其六

たぞや此夜中に。さいたる門を叩くは。叩くともよも明けじ。宵の約束なければ。

其七

七尺の屛風も。踊らばなどか越えざらん。羅綾の袂も。ひかばなどかきれざらん。

梅が枝（一名千鳥の曲）

其一

梅が枝にこそ。鶯は巣をくへ。風吹かばいかにせん。花にやどる鶯。

其二

花散里のつれ〴〵。たえ〴〵の琴の音。花橘の袖の香に。山時鳥音づるゝ。

其三

池の鯉。アレお手が鳴る。せわしないまだ。はなし殘りがあるわいな。

其二　琴唄

筑紫琴に合はせ歌ふ唱歌の總稱なり。その起りは委しく知られざれど。大永年間筑紫の國に善導寺といふ寺の僧が世に傳へしなりといふ說あり。慶永の頃にいたり八橋撿挍出でゝ其唱歌を撰び。表、裏、中、奥の品を定め。尋いで北島、倉橋、安村、三橋、久村、石塚などいふ法師たちのいよ〳〵增補し擴張せしものなりといふ。

茱萸（一名越天樂）

其一

茱萸と云ふも草の名。茗荷と云ふも草の名。富貴自在德ありて。茗荷有らせ給へや。

其二

春の花の琴曲。和風樂に柳花苑。柳花苑の鶯は。同じ曲を囀る。

其三

其三

夏の夜の曙。夢をさます時鳥。白妙に見ゆるは。月にさらす卯の花。

其四

霧にたゝずむ小車。やつして立つる小車。人目忍ぶの契こそ。更けて閨の通路。

其五

飛鳥川の水上を。硯の水にせき入れて。かく言の葉は盡きまじや。今日も暮さん命かな。

其六

契りし宵の黄昏。しるべ深きそらだき。とめいるかたの萩の戸を。開くや袖の移香。

天下泰平（一名雛鶴の曲）

其一

天下泰平長久に。治まる御代の松風。雛鶴は千歳經る。谷の流れに龜遊ぶ。

其二

人知れぬ契りは。淺からぬもの思ひ。包むとすれど紫の。色に出づるぞはかなき。

思ひ寢の夢の間。枕に契る明がた。覺めてはもとのつらさにて。涙の外はあらじな。

其四

小夜更けて鳴く千鳥。何を思ひ明し寢。浮世を須磨のうらみにて。我とひとしき涙かや。

其五

白眞弓のまゆみの。そるべきはそらいで。八十の翁の戀に。腰をそらいた。

其六

三保の松風吹き絶えて。沖津波もあらじな。水にうつろふ月ともに。ながめにつゞく富士山。

心盡（一名小車の曲）

其一

心盡の秋風に。須磨の浦囘の波枕。衣かたしき獨寢に。夢も結ばぬよな〳〵。

其二

故鄕をはる〴〵と。隔てゝ此に隅田川。都鳥に事問はん。君はありやなしやと。

若紫を手に摘みて深き心のいろます。長き契と結びしも。草のゆかりと知るべし。

其四

東雲の籬に。露を含む朝顔。玉の葛たをやかに。かゝるや花のおもかげ。

其五

世々の人のながめし。月はまことのかたみぞと。思へば〳〵。涙玉をつらぬく。

其六

吉野川の花筏。さをさすひまもあらじな。岩浪たかき山風。四方に散らす花の香。

雪の朝 (一名葵の曲)

其一

雪の朝の嵐は。梢の花の散る風情。名残惜しきは兎に角に。待ちえし君のかへるさ。

其二

わさましや我身は。雲井の雁に夕霧の。おとしめられし思ひをば。いつの世にかは忘れん。

其三

はかなくも隈なき。月をいかで恨みし。とにかくに我袖に。絶えぬ涙の夕暮。

其四

花の宴の夕暮。朧月夜に引く袖。さだかならぬ契りこそ。心浅く見えけれ。

其五

住吉の宮所。かきならす琴の音。神の惠みにわひそめて。過ぎし昔を語らん。

其六

秋の山の錦は。立田姫や織りけん。時雨降るたびごとに。色の增すぞあやしき。

薄雪（一名東雲の曲）

其一

恨めしや我緣。薄雪の契りか。消えにし人のかたみとて。涙ばかりや殘るらん。

其二

比翼連理の語らひは。かはればかはる世の習。さりとては恨むまじや。昔は情ありしを。

其三

おもしろや五月雨。花橘の匂へり。時鳥音づれて。短夜なれど寝られぬ。

其三

なか〳〵にはじめよりは馴れずは物を思はじ。忘は草の名にあれど。忍ぶは人の面影。

其四

思ひあまりせきかねて。恨みぬる夜の涙は。さこすさまじや獨只。枕に戀ぞ知らるる。

其五

武蔵野に行き暮れて。月をながめて草枕。戀しき人を夢に見て。うたゝねの袖しぼる。

其六

軒をめぐる點滴。琴の音にたぐへて。七年の夜の雨。かつて知らぬ夢の世。

薄衣

其一

数ならぬ身には只。思ひもなくてあれかし。人なみ〳〵の薄衣。袖の涙ぞ悲しき。

其三

まどろめば面影の。しげ〳〵と短夜に。時鳥音づれて。初音に夢ぞさめける。

其四

ながむればいとゞただに。戀しき人の戀しきに。曇らば曇れ秋の夜の。月に恨みはあらじな。

其五

峯の嵐の通ふかゝ。溪の水の流れかゝ。ねざめに聞きし松風は。琴の音にたがはじ。

其六

葵の上のときめき。加茂の物見の折から。車あらそひつれなきは。深き恨なるべし。

雲の上

其一

雲の上のながめは。ありし昔にかはらねど。見し玉簾の中ぞたゞ。なつかしや床しや。

其二

桐壺の更衣の。比翼連理の契りも定めなき世のならひとて夢の間ぞ悲しき。

其二

短夜の夢さめて。面影は夏虫の。身よりあまる思ひをば。いかで人に語らん。

其三

秋の夜は更けゆき。月は西に傾く。松風や波の音。鹿の聲ぞ淋しき。

其四

道しるべせし小君の。行衛迷ふか空蟬の。衣のかをりぞゆかしき。

其五

たぞや今宵小夜更けて。柴のとぼそを叩くは。尾上おろしの音づれか。水雞のつぐる聲々か。

其六

青柳を片糸に。よりて鳴けや鶯。うぐひすの縫ふてふ笠は。梅が枝の花笠。

四季の友

其一

春たちくれば我宿に。まづ咲きそむる梅の花君が千歳のかざしぞと。見るも長

其二

あこがれて思ひ寝の。枕にかはす面影。それかとて語らんと。思へば夢は覺めけり。

其三

白雪のみゆきの。積る年はふるとも。あくまじや諸共に。寝亂髪のかはばせ。

其四

ひく人はそれ〳〵、數多あれども妻琴の。もとの心かはらずば。琴柱におちよ秋風。

其五

柏木の衛門の。鞠をとんと蹴たれば。鞠は枝にとまりければ。梅ははらりほろりと。

其六

さりとてはつれなやひかふる君が袂の。生憎に靡かねば。手がひの虎の引綱。

桐壺

其一

いろ／＼

其三

蛬夜すがら何を恨みすだくぞ我も思ひに堪へかねていとゞ心の亂るゝに。

其四

なか／＼に人をば恨むまじや恨みじ兎に角に數ならぬうき身のほどぞ悲しき。

其五

三五夜中の新月隈なきぞおもしろや千里の外の人までもさぞやながめあかさん。

其六

深更に月さえて車のおとの聞ゆるは五條わたりのあばらやの夕顏をしるべに。

明石

其一

所から名にしおふ明石の浦の秋の頃月さえわたりよる波にうつろふ影のお

聞き色なれや。

其二

瀧の白玉千代のかず。岩根に落つる五月雨の。雲間過ぎ行く時鳥。只一聲の音づれ。

其三

月をのみながめても。かくばかり惜まるゝ。秋の夜ごとをいたづらに。過ぐる人こそつらけれ。

其四

神無月時雨れても。いろかへぬ松が枝の。緑埋める白雪は。十返りの花ならん。

須磨

其一

須磨といふも浦の名。明石といふも浦の名。更科の月ともに。ながめていざやあかさん。

其二

春によせし心も。いつしか秋にうつろふ。黑木赤木の笆のうちに。よしわる花の

末の松

其一

末の松山浪越すとも。かはらぬ色は松が枝に。君が千歳の限りなき。汀の池に鶴遊ぶ。

其二

身にしみ渡る秋の頃。月も隈なき閨の戸に。歸るさ告ぐるくだかけの。まだきに鳴くぞ恨めしき。

其三

なか〳〵に今は只。思ひ絶えなんとばかりを。人づてならでいふよしも。あらでこがるゝ身ぞつらき。

其四

しのぶ山〳〵。あはれ忍ぶの道もがな。人の心のおくまでも。見でや止みなん我思ひ。

其五

小夜千鳥よもすがら。鳴くは我を訪ふやらん。すまのすまひの物憂きに。涙を添

もしろや。

其二

此頃はいとゞしく。都の方の戀しきに。かゝる所の人心。憂きを慰む今宵かな。

其三

いつとなく長き夜を。語り明石のうらなくも。いかで岩根の松の葉の。契は末もかはらじ。

其四

幾夜あかしの浦の波。寄せてはかへり浮き沈み。あはれを思ふ折からに。あはれをそへて鳴く千鳥。

其五

庭の落葉か村雨か。かきならす琴の音か。よそに知られぬ我袖に。あまりてもるゝ涙かな。

其六

四智圓明の明石潟。迷の雲もうち晴れて。八重さきいづる九重の。都にかへるうれしさよ。

戀し床しとつれなくもかひなき世にも住吉の松は我身の思にて逢はでや年をふるらん。

其五

思ひ重ねて年月を經れば昔の懷かしく思ひ出でたる今宵しも涙に雨やさそふらん。

其六

兎に角に〳〵まことのあらば荒磯の浪のあなたに隔つともよるべのなどかなからん。

四季富士

其一

田子の浦波うち出でゝ見れば雲井に高き名の山のすがたに四つのときわくるぞわきていひ知らぬ。

其二

春は霞の朝もよひきのふの雪をそれながらうへなき花の色ぞとて見るや山は富士の根。

ふるこゑ〴〵。

其六

契りきなかたみに袖をしぼりつゝ。末の松山浪越さじとは。いかにいひけん。あだになりし恨かや。

空蟬

其一

空蟬のあるかと見れど。面影のかげもあやな。香をとめし小夜衣。もぬけし人ぞ戀しき。

其二

尋ねてもなか〳〵にあはでの森の逢はでのみ。つれなき物は命にて。獨胸をやこがすらん。

其三

よな〳〵にも我袂。濡れつゝまさる戀心。人こそ知らね忘られぬ。身のほどいかでわびまし。

其四

其三

忘草がなノウ一もとほしや。植ゑて育てゝ見て忘りよ。サユエイ見てわすりよ。

四季の曲

其一

花の春立つ朝には。日影曇らでにほやかに。人の心もおのづから。のびやかなるぞ四方山。

其二

春は梅に鶯。躑躅や藤に、款冬。櫻かざす宮人は。花に心移せり。

其三

夏は卯の花。橘菖蒲蓮瞿麥。風吹けばすゞしくて。水に心移せり。

其四

秋は紅葉鹿の音。千草の花に松虫。鴈啼きて夕暮の。月に心移せり。

其五

冬は時雨初霜。霰霙こがらし。さえし夜の曙。雪に心移せり。

扇の曲

其三

雪にたとへて三重重、扇をとれる手のうち、夏は消えて夕暮のながめをうつす富士の根。

其四

秋は更なり月雪、見ぬ人にしも語りなば、なか〳〵なれやなか〳〵に、いはでやみなん富士の根。

其五

三冬になれば都人、まつらん雪を鳥が鳴く、吾妻に住めば朝なぎに、見てこそあらめ富士の根。

雲井弄齋

其一

月とや入ろやれノウ山の端に、はなれ〳〵の浮雲見れば、あすの別れもあのごとく。

其二

思ひ初めたよ濃き紫の、袖は千しほの我涙、サユエイわがなみだ。

其六

明しかねたる霜夜の床も。さびしき嵐の音はそよ〳〵さら〳〵と。降るは霰の玉霰。

雲井の曲

其一

人目忍の中なれば。思ひは胸に陸奥の。千賀の鹽竈名のみにて。隔てゝ身をぞこがるゝ。

其二

忘るゝや忘らるゝ。我身の上は思はれで。あだ名立つ憂き人の。末の世いかゞあるべき。

其三

たまさかに逢ふとても。猶濡れまさる袂かな。あすの別れをかねてより。思ふ涙の先だちて。

其四

雨の中のつれ〴〵。昔を思ふ折から。あはれをそへて草の戸を。叩くや松の小夜

其一

扇は櫻の三重がさね。霞める月を繪に書きて。水に移ろふ心ばへゆゑ。なつかしきありさま。

其二

黃昏時のまぎれに。ほの〴〵見えて咲けるは。小家勝なる軒のつまに。餘りてかゝる夕顏。

其三

武藏野も更科も。須磨や明石の面影も。うつしてこゝに見る月の。ながめはいつも廣澤。

其四

夢にばかり夜な〳〵。思ふ人を陸奧の。名古曾の關を誰かすゑて。現に言も通はず。

其五

戀ひ〳〵て戀ひ〳〵て。戀しき人を待乳山。まつらんものを行きて見ん。行きていざや逢ひ見ん。

楢の小川の夕風にしらゆふかゝる浪の音。神のこゝろをすゞしめの。御禊ぞ夏のしるしなる。

其四

齢久しき山人の。折る袖匂ふ菊の露。打ち拂ひ〱。千歳の秋や送るらん。

其五

鳰の海面見渡せば。たぐひ浪間にありわけの。月影さえて白妙の。雪をかけたる勢多の橋。

其六

萬代かけて相生の。松と竹との深翠。かはらぬ色はもろともに。老せぬ契りなるべし。

若葉

其一

ゆかりよしある初草の。若葉のうへを見つるより。いとゞ乾かぬ袖の露。なほうきまさる旅寝かな

其二

風。

其五

身は浮舟の楫をたえ。よるべもさらに荒磯の。岩打つ浪の音につれて。千々にくだくる心かな。

其六

雲井にひゞく鳴神も。落つればおつる世のならひ。さりとては我戀のなどかはかなはざるべき。

羽衣

其一

君の惠は久かたの。天の羽衣まれにきて。なでし巖はそのまゝに。動かぬ御代のためしかな。

其二

星をとなふる皇の。雲の上まで長閑なる。あしたの景色あらたまの。春日くもらぬ天が下

其三

其一

逢瀬わだなる思川。岩間によどむ水茎の。かき流すにも袖濡れて。乾す日もいつと白波

其二

面影のつく〴〵と忘れもやらで思寢の。夢だに見えて明けぬれば。逢はでも鳥の音ぞつらき。

其三

いつの間にかはかき絶えて。隔つる中となりにけん。見し玉章の文字が關と。名を聞くだにもうらめし。

其四

つれなくも行く人を。留めがたみの唐衣。たつよりいとゞ我袖は。露にぞしをれしをるゝ

其五

戀ひわびて只ひとり。伏屋の床に夜もすがら。おつる涙は音なしの瀧とや流れ出づらん。

うつゝなや獨寢。夜半の枕に吹き迷ふ。深山おろしに夢覺めて。涙もよほす瀧の音。

其三

いざさらば宮人に。行きて語らん櫻花。木の間の景色ことなるを。風より先に見せばや。

其五

黄昏すぐる折から。ほのかに見えし花の色に。迷ふ心は朝霞。たちわづらふぞ物うき。

其四

隱家深き奥山の。松の梢をまれに明けて。まだ見ぬ花のかほばせを。見るより濡るゝ衣手。

其六

いつしかに汲み初めて。悔しと聞きし山の井の。淺きながらもさりとては。絶えぬ契りを賴まん。

おもひ川

一方ならぬ物思ひよるべさだめぬ浮舟あだなる名のみ橘の小嶋が崎にこがるゝ。

其六

小野の花の秋の頭闇のつまの紅梅。それかと紛ふ花園昔の人ぞ戀しき。

新雲井弄齊

其一

月もろともに時鳥鳴きているさの山のは見ればはやみじか夜も明け渡る。

其二

又の逢瀬のいさ白露のあまりておける袖のうへげにも袖のうへ

其三

わはれはかなき浮世の中に。ともに絶えせぬ契をぞまつ實にも契をぞ待つ。

飛燕の曲

其一

久かたの雲の袖ふりしむかし忍ばし花に殘る露よりも消えぬ身ぞはかなき。

其二

其六

なか〳〵につらからばたゞ一筋につらからで情のまじる僞と思へば深きうらみかな。

橋姫

其一

水の上のうたかた露に宿るいなづまあるかなきかの世の中を宇治川の橋姫

其二

身の憂きときは立ち寄らんかげと賴みし椎がもと空しき里となりにけり契りのほどぞ悲しき。

其三

峯におふる早蕨昔の花のおもかげわすれがたみに摘みおきて主なき宿に贈らん。

其四

さきの世の契か此世の中の情か空しき跡と宇治の里絕えずこゝにやどり木。

其五

そなか〳〵なりし恨なれ。

其二

浮世を渡る柴ぶねのみなれ〳〵てさす棹の雫を見ればいつとなく。物思ふ袖もかくばかり。

其三

身をわくる。ことはかたしや玉櫛笥。ふたみちかくるわりなさに。思ひ亂れてうちかへす。心ひとつの苦しさよ。

其四

小野の住居のおのづから聞えやわふとつゝましく。峯の嵐やさを鹿の聲にも立てずなりにけり。

其五

いにしへの二歌ならでなにとなき。心床しの手習はつれ〴〵なる日暮しのぴ〳〵の涙なり。

其六

田面の秋になりぬとや稻葉にまじる少女子が聲はをかしう打ちそへてうた

よを照らす白玉の數の光ならずは。天津乙女のかざして。月に遊ぶなるらん。

其三

紅の花のうへ。露の色もつねならぬ。夢は殘る横雲。降るは袖の涙かな。

其四

なつかしや古へを。忍ぶに匂ふ我袖。濡れて乾す小簾のとに。あはれなれしつばくらめ。

其五

たぐひなき花の色に。心うつすこの君。うつゝなき思ひこそ。いとゞなほも深見草。

其六

散りやすきならひとは。よそにのみ聞きし身も。うつろふは我科。恨むまじや春かせ。

浮船

其一

思ふ事。いはでやつひに山城の。宇治のわたりの浮瀨にも。沈みてはてぬ行衞こ

咲き亂れたる色のうちに。床なつかしき撫子の。もとの垣根を人知れず。こゝろにかけて忍べり。

其六

篝火に。立ちそふ戀の烟の。夜とゝもに。たえぬほのほとなりぬるは。ゆくへも知らぬ思ひかな。

玉川

其一

いはで思ふ。心の色を八重にしも。うつしそむてふつれなさに。春の月毛の駒とめて。いざ水かはん山吹。

其二

おのが秋とや小男鹿の。しがらむ花の摺衣。うつろふ波もむらさきに。亂れ初めにし白露。

其三

川門につたふ松風の音だに秋はさびしきにころも卯木の垣も荒れて。礁もいとゞいそぐなり。

へば空に雁ぞ鳴く

玉かづら

其一

いかなるすぢと夕顔の。露のゆかりの玉かづら。むかしをかけて戀ひわたる。緣もいかで淺からん。

其二

初音ゆかしき鶯の。すだちし松のねをとへば。谷の古巢もめづらしく。春の日影ぞ長閑き。

其三

櫻山吹とり〴〵に。花の籬にとびちがふ。小蝶の舞ははかなくも。あかず暮れゆく景色かな。

其四

聲はせで。身をのみ焦す螢こそ。うすき一重の情にて。それかとばかり忘られぬ。面影ぞ床しき。

其五

りやすき人ごゝろ

其三

薄き情ををりはへて。いとはかなくも泣き暮し。包むにあまる胸の火に。よすがら身をやこがすらん。

其四

年ごとに逢ふとても。ぬる夜すくなき契かな。歎けとてやは照り添ふる。影にぞ千々のかなしさ。

其五

小笹がうへにたばしるは。別れの袖の白玉。おもひふるやの軒に積る。恨も解けてしのびね。

宮の鶯

其一

花清の春の朝霞。柳櫻の色深く。錦の袂かをり来て。行幸を待つぞうるはしき。

其二

宮のうぐひす花に鳴き。軒の燕は雨を喚ぶ。うらやましきは己が身を。心のまゝ

其四

昨日の袖もほしやらで。まだき濡れそふ朝露に。なみも光りを打ちよせて。さらすや賤が手つくり。

其五

汐風越して夜もすがら。月にみがける川浪も。くだけて物をおもひねの夢をさそひて啼く〱千鳥。

其六

とかへる鷹の山深み。鹿は嵐のこがらしに。ながるゝ水の名のみして。氷もむすぶばかりなり。

四季の戀

其一

物のあはれは是よりぞ。知らざらましや知らざらめ。時につけつゝ移る心。何れか思ひの種ならん。

其二

糸よりかけし綠こそ。寢みだれがみのおもかげ。ながめせし間に色も香も。うつ

きたゞ一人。

三の調

其一

春の夜の間の風に。吹きひらく露井の桃の花。なかばならざる宮の前。月のかつらの影たかし。

其二

雲井の空に君めづる。姿やさしき舞姫の。夜や寒きとてめぐみ添ふ。花のにしきのたもとかな。

其三

しづけき宮の窓のうち。あやなく花のかをりきて。恨はながき春の夜に。捲きも得やらぬ玉すだれ。

其四

斜に琴を抱きつゝ。月にむかへば朧なる。影さへやがて木がくれて。ひとりつれなき夜半の床。

其五

たまかすらん。

其三

楊家を出でし其色に。君の心まどはされ。一人のほかは目につかで。遠ざかるこそうらみなれ。

其四

撰ばれ入りし二八の春。うつされ來ては六十の秋。空しき床に老いはてゝ。音をのみ泣くぞあはれなる。

其五

芙蓉花おとろへて。露の玉ひかりなし。今は見えじな見えもせば。うとき人にはわらはれん。

其六

壁に背ける燈の。またゝきのこる夜はすがら。窓打つ雨の音聞けば。いとゞさへ寢られぬ。

其七

たとへて云はゞ花鳥。文に作り詩にうたふ。今樣すがたとり〴〵の。中にわびし

其四

移り植ゑてし庭の面に。生ひ添ふ竹の枝しげみ。繁くも見ゆる千代の陰に。馴るゝ齢やいつまでも。

其五

向ふも廣きわたつみの濱の眞砂をかぞへつゝ。世の有り數にとりなして。久しきほどを知らばや。

其六

ことぶきなれし鶴龜も。千年の後はしらなくに。おかぬ心にまかせつゝ。限りもわらぬ行末。

雪月花

其一

櫻卯の花白菊の。まがふは雪のいろながら。まがはぬ雪の白がさね。とむるは袖の梅が香

其二

小野の御室のつれづれを。夢かと思ふ雪の夜の。深き心に踏み分けて。とひし君

池の芙蓉も及びなき。人の袂に吹きわたる。風のかをりはなか〳〵に。花よりもなほかうばしき。

其六

君がなさけの忘られで。捨てぬ扇の秋も更け。かたむく月の夜もすがら。行幸を待つぞはかなき。

友千鳥

其一

滿干絶えせぬしほの山。差出の磯の友千鳥。君が御代をば幾千代と。聲もゆたかに啼きかはす。

其二

日影長閑き春日野に。若菜摘みつゝ萬代を。祝ふこゝろの道すぐに。神のめぐみを祈らん。

其三

誰かはわかん常盤なる。松の綠も春はなほ。今ひとしほの色見えて。ながめも深き木のもと。

足ひきの巖なでしこやなほ眞鶴の羽衣。千代にひとたび打ちつけて。撫づともさらに盡きすまじ。

其二

長井の浦や春の日の蘆の若葉のやはらかに。雛をも連れて遊ぶなる鶴の景色ぞほてらしき。

其三

鶴に乘りし山人の心にまかせ行きかよふ蓬が島と聞えしは。いつも老せぬところとや。

其四

籠の内知らぬ思ひでは。物數ならず古へ高き位をゆるされ車に乘りしためしあり。御手洗川にすむ龜は。神代をかけて知りぬらん。蓮の浮葉に遊ぶこと。千歳の後ぞ身はかろし。

其五

數の占文字負ひ出でし跡にならひて今もなほ。夕占を問へば何事も。吉にさだまる目出度さよ

こそ忘られぬ。

其三

久かたの中に生ふる桂の。にほふ花ならば一枝。誰も折りかざし。世々につたへん月の名。

其四

葉月なかばの月すみて。空とぶ雁の聲落つる。白妙衣うつゝなる。夢のちぎりのあはれさよ。

其五

花は三吉野小初瀬や。嵐の山もおしなべて雲とながめし人麿の。昔の名こそうれしけれ。

其六

世のなかは物かはり。星移れども春の花。柳の糸のたえやらで。來る年々のたのもしき。

二長

其一

の大將。

其六

いとゞなほ深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りこそ今身に思ひ知らるれ。

蓬萊

此殿はむべもとみけりさきくさの三つば四つばのいつまでも。かはらぬ春の雛鶴に。色をならぶる白梅の。匂ひも聲も長閑なる。夏をむねなる。泉のほとり。尾をひく龜に浦島が。昔がたりのいとわか〳〵と。釣のでたちの人がらは。雲井にまがふ沖のかた。あら面白の青海波と。酔へるが如くたゆたふて歩むともなく行くともなく。いたるところは蓬萊宮。黄金をのべ玉をしきて。ことなる龍の都にも戀と情は目に立つ波の。音に聞えし姫はまだ言ひよることも白縫の。つゝしつゝせる心の中を。それと覺れどうちつけに。なんと岩間のうつせがひ。よその見る目もなか〳〵になかだち入らぬ新枕。濡れぬうちこそ露をもいとへ。思へは不思儀のえにしぞと。名殘は盡きぬ月日貝。かひある今日の玉手箱。たづさへ出づれば悠然と。波の鼓ぞ聞ゆなる。枝はふりても色かへぬ。松風は千秋の聲。

花の宴

其一

幾春もこゝになはば。御階の櫻。色増され。雲井の花はひさかたの。そらふく風もおよばじ。

其二

雲の上人挿頭して。色をあらそふ紫の。袖のかをりは打ちはゆる。大内山の夕づく日。

其三

夕暮の薄がすみ。誰がならす糸竹。おもひある身にはたゞ。よそのしらべもなつかし。

其四

梅つぼのあたりより。小簾のひまに洩れくる。風のかをりは宵の間の。闇はいとゞあやなし。

其五

弘徽殿のほそどのに。たゝずむはたれ〳〵。おぼろづきよの内侍の督。光る源氏

吹きくる松風の通ふは翠の願ひもみつや四つの社の御惠み。なほ幾千代の限りなき。道の榮えと祝しけり〳〵。

布袋

戀といふうきはかうした憂きものと合點はしても白紬の。もたれぶくろの長きひも團扇片手に思ひ寢のうつら〳〵とこがれて暮す。其ぬしさんの三重の帶つひくる〳〵と一重には。結びもはてぬ春の夢。あだな此世に墨染の。こちや木の端じやないものを。

春宮曲

三千歳になるてふ桃の花のかは開くや露の玉の井に玉の簪さす月影の。玉しく宮の舞の袖。唐の大和の織物は。梅に牡丹に名も薫る。都言葉はすいも草。吾妻は伊達の澤瀉や。はひまつはるゝ蔦葛。匂ふ花菱富貴自在。冥加ありける此とのゝ簾のひま洩る春風の。寒さ凌げと惠みも厚き。君がたまもの重ねて幾重。千代に八千代も榮え盡せじ。

千箱玉章

常盤なる松をひたせる千歳河月の夕べの品定め桂をとこの面影床し見初め

年もやう〳〵呉竹の。幾代かふべき長生殿老せぬ門に立ちかへる。春を數ふる
さゞれ石の。巖となりて苔のむすまで。

住吉

一千年の色は雪のうちに。深き願ひも今日こそは。はる〴〵きぬる旅衣。日もう
らゝかに四方の空。霞みにけりなきのふまで。波間に見えし淡路島。あをきが原
も思ひやるげにひろまへのすが〳〵し。かたそぎのゆきあひの霜のいくかへ
り。契りや結ぶ住吉の。松の思はん言の葉を。我身にはづる敷島の。道を守りの神
なれば。四季の詠めの其上に。戀はことさら難題がちに。詠めたやうでもよみお
ほされず。てにはちがひに心を盡し。高いも低いもあゆみを運ぶ。中おしてるや
なにはめの。よしあしとなく假初に。謠ふ一筋みやびなる。忘貝との名はそらで
とよ。逢ふて別れて其後は。又の花見を樂しみに。日數かぞへて思ひ出す。忘草と
の名はいつはりよしげりてかれてそれからは。後の月見を樂しみに。よはをつ
みつゝ思ひ出す。春や秋。そのかみ世に光る君。御願はたしのよそほひの。今に絶
えせずおくはなほ。深緑なる其中に。花や紅葉をひとゝきに。でき散らしたるに
ぎはひは。筆も詞も及びなき。折しも月の出潮につれて吹きくる松風の。つれて

で文章を雁がもてくる雲井よりちらと見せたは冬立つそらに降りくる雪の肌自慢。これ見よかしに三保の松。羽衣といふなぞかけた。天津乙女は浮氣かわだか男ひでりか此年月を賤が伏屋に假枕。糸も繰り候はたおり／＼に。霓裳羽衣の曲をなし吾妻遊の駿河舞。雨にうるほふ花の袖。かへす袂に充滿の寶をあまねく世にふらし施し給ふいつくしみ。盡きぬ其名は蓬萊の。山またこゝに富士の嶺の扇の裾の末廣き。御國の要と祝しけり。

四季の艶

春霞。紫だちし曙の。うゐにこづたふ鳥の音も。いつしか更けて卯の花の。衣やうすき舟人の漕ぎ行く方は隅田川。ありやなしやの宵の月。尾花の風は音まねく。あさき契りは七夕のさゝの一夜の假枕。思ひは積る雪の朝。簾からぐる別れには。裳ひかへて三輪ならぬ其苧環の糸による戀。

相生

われ見ても久しくなりぬ住吉の。松のふたもとしげりあひ。連理の枝をうちかはし。妹脊の道はいつとても。通ふ夜毎の笠のうへ。遠時鳥鳴きつるゝ。短き夏の明近き尾上の鐘ぞ告げ渡る。又とかはせし中のいつまで。

てそめて染みかゝる。龍田姫とは。浮氣ばかりの色かへ。露の間も。忘られんぼのなかなかは。いにし驪山の春の園。其に詠めし花の色。其言の葉も妹脊鳥。女夫の枝といひかはし蜜の。水も漏らさぬ誓詞のかずを。筆に誓ひし墨色の濃い中。浮名の種を卷紙に。愚痴のありたけ文枕。文がやりたや室の津の君へ。君がなげぶし。投文なげて口說き文。夜每に通ふ神かけて。ほんにどりなりよい封じ文。ちよつとこなたへかゝりの文。祈りまゐらせ候かしく。文も見ずとは橋立の道よ。みちのきれとて切文いやよ誓文。いよしでげんと書いたるは。絆のたねか緣結文。紅葉分けつゝしかの文。思ひまゐらせ候かしく。とめて嬉しき大和もじ。返すぐ〳〵もめでたけれ。君は千代ませ八千代ませ。なほ色ますや万歳樂。千箱の玉章奉る。是ぞ久しきみつぎかな。

芙蓉峯

眞白なる。高嶺も春は櫻花。さくや姫とは神代の昔。神代も花のいろざとも。花の姿のいとしらし。しんぞいとしらし。いとも畏き人の世に。節もすぐなる竹取の。翁が娘はよい娘。磨きたてたるかつらのまゆに。顔は照り添ふ秋の夜の。月にかこちて古郷を。戀しがるやつ慕ふやつ。やつとやつとを指折り見れば。二八十六

長閑なる春の心に誘はれて、花の下紐うらとくる。契りやきのふけふは又思はぬかたの山風の吹くにまかする花の枝。それも浮世のならひじやものを。心よわさをとがにして。あだなる花とともすれば。立つ名恥かし山櫻。

花妻

誰に靡くかいつしかと。紐解きそむる萩が花。錦の床におく露の。思ひ亂れて秋の夜の長きよすがらいたづらに雲井の月の影更けて。とふにつらさの。まさるとも。知らでや過ぐる秋の風。身にしむころはなれも又。しのびかねてや小男鹿の。聲より落つる涙さへ。なほ萩がえにかゝるらし。兎にも角にも思ひあまり下葉も今は色に出て。焦ると知らば立ちこむる霧の籬の隔てなく。千秋をかけて紫の。ゆかり忘るな萩が花妻。

花のかゞみ

うつればぞ。花の鏡に我姿。うつる心はまことの影よ朧月夜の渡殿に。人待つ影は誰れやらん。うはのそら吹く花の香は。こちへとゞかぬかいまみの。人目關路の隔てはいやよ。せめてたのもの雁の文。おくる其日のつじうら〳〵に。人く人くの初音も嬉し。むかふ鏡のかはよどり。かはらぬ契りかたからめ。君が代の。惠

竹筏

葉がくれて亥中のかげのふけがてに。面影殘る一聲は。夢か戀しやアゝ戀し鳥ぞ。待つ夜の閨に風誘ふ。松のしらべのをのへより。眞如の月は西の空。水は東にとゞまらで。流れにうかぶ竹いかだ。

花曆

ことぶきを。こゝにのぶるは年を經て。同じ櫻の花の色を。そめますものは心から。ひらく日數をいつむつと。指折り見れば七所。思ひ立つ。雲も一重の上野より。ながめはじめて淺草や。薫は深き奥山に。袖ふりあふていろ〳〵の。姿は雪に隅田川。渡しもりに。ことゝへばげにも吾妻の都鳥。言葉のはしのあかなくに。昨日といひ。今日と日暮しとこしなへに。こゝはかはらぬ飛鳥山。鳥のかほよのひとむれを。ほゝうとほむる鶯に。もとよりうたのえにしあれば。人の心をやはらぐる。春のひとゝき小金井の。河の名さへも玉なれば。ひかり長閑き空につる。汀に龜の御殿山。あふげばなほもたかきやの。惠みも滿つる賑ひの。民のかず〳〵千代かけて。よろづ吉野の花曆。

山櫻

も晴る、春雨。

櫻狩

長閑なる頃もきさらぎおしなべて見渡す山もうちけぶり。柳のいとのかきみだり。春の錦のかやなくも。都に知らぬ白雲のたてるやしるべ櫻狩。人の心もあこがるる。空を見捨てゝ越路には。待つらんものをゆく雁の。かをる〳〵翅は雲に消え。聲は哀れに聞ゆなり。行衛慕ひて立ち留まり。名殘はしばし忘れねど。初花車廻ぐる日の轅つらねて見ずもあらず。見もせぬ人や花の友。知るも知らぬも花のかげ。相宿りしてすがのねの長き春日もいたづらに。日數過ごして花衣。なれし袂も香にそみて。野邊も山邊も花ゆゑに。いたらぬくまはなけれども。山の岩根をとめておつる。千筋百筋佐保姫の。手びきの糸の瀧なくは手折りて行かん入相の。鐘より先に春霞。立ちなかくしそ風は吹くとも。

四季の段

山寺のや。春の夕暮來て見れば。入相の鐘に花ぞ散りける。散ればこそ。いとゞ櫻はめでたけれ。よしや散らでもあだし世と。花によそへし口ずさみ。それを手本に鶯が。歌を諷へば琴ひく鳥の。聲に合せて鼓草。チッチッタンポゝ。手をつくづ

みも深き池水に。すめる蛙も祝ひ歌。歌にやはらぐ人心。しづもたときもおしなべて。花の鏡の曇なき。春や久しき春ぞ久しき。

あづまの花

吉野よく見し人はいさ。花は吾妻の隅田川。世に似ぬ春の光りぞや。都鳥にことゝひし。昔には似ず渡守。春はひまなくみなれ棹。さして堤を行き通ふ。人の髪のあけみどり。柳の糸にひかれきて。長きひぐらし花の香を。袖にしめてはくみかはし。遊び戯れつ手弱女の。謡ふ一節夢ならば。のこらじ袖の移香を。いかに定めむ咲き匂ふ。花のたまくら夢ならで。かはすもあだの花の陰。さすが嬉しきゆかりにも。紫おふる武藏野の。ひろき恵みやおふぐらん。なほ行末も千世八千代。長きつゝみの花櫻。榮え榮えん御代の春。

曲水

盃を。かずかく水に流しては。思ひ〳〵の歌のつま。心の中は言はぬ戀。床しき人は山吹の。かきのおくなる上﨟。花のかんばせすきびたひ。眠れる妾海棠の。夢かうつゝか忘られぬ。こき紫の藤の花。さむるといふは色ならで。酒の手枕よひながら。朧月夜の影うすく。星も三つ四つひかる君。須磨に己の日の祓して。心も空

梓弓彌生の空も立ちかはり。春と夏との杜若。紫きはふ藤なみの。かけてとなの
る時鳥。ゆかりの人の寢覺にも聞く一聲は夢ならで。枕のうへの五月雨。ふるの
なかみちふりし世の昔の人の袖の香に。花橘の風通ふ。軒端涼しき夕月の。宿れ
る露か飛ぶ螢。焦れ〳〵てそれかとばかり。忘られず。消えぬ思ひのはかなけれ。
アヽ我ながら。君を思へば恨みつわびつ浦島が子の箱なれや。あけて悔しき。あ
けて悔しき夏の短夜。

時鳥

夏の夜の。明くる間はやみ假初に。見る程もなき月影を惜むとすれどいねがて
の枕にかこつほどをさへ。たえて忍べと音づれぬ。うしやつらさの人ならば。恨
みもはてんかにかくに雲井にとほき待乳山。心關屋の里風に。雨もつ空の五月
闇闇はあやせの川船に浮寢しつゝも聞かまほし。かくばかり。まつとは誰も白
鬚の。もりの下露くさ〴〵に。世のみやびをのあくがれて。君待つ夜半にかはら
ぬは。只一聲の時鳥。

葉隱

夫れ罪深き女の身。あるが中にも川竹の。一夜〳〵のあだ枕。ほんにしみ〴〵う

くしつぼすみれ。躑躅山吹いろ〳〵の。花もいつしか夏山の。若葉をわけて。初音めづらし時鳥雲井の夜半に戀ひ慕ふ。身は卯の花のしらむまで。寝ずに待つのをなぶりに來るか。まきの板戸をほと〳〵と。叩く水雞のだましくさつたが。エヽじんぞつら憎や。憎い可愛の睦言を。誰に洩らして名は立花の。薫はのめくうす衣。袂涼しき秋風に。招く芒は若紫の。萩にそをとてこぼるゝ露の。露のよすがを忍び寝松虫鈴虫きり〴〵す。きりはたりてふ霧のまを。分けてえきつる初雁の。翼にかけて送る文。見よかし〳〵紅葉葉も。色のもなかの時雨に濡れて。龍田の河に流れの身。戀じやせくまい浮世は車廻る月日もふるやふる〳〵。雪も霜も霞も消えてたまらぬ。諸行無常のことわりを。告げてや鐘も響くらん。

笠の内

時鳥。あれ〳〵月の笠のうち。濡れぬ顔するあどなさを。思ひやつたがよいわいな。よひ〳〵ごとの關守も。ゆるさぬからにうき中は。泣いて嬉しき日もあれば。笑ふてつらき假枕。ひとりぬる夜はふたりが淋し。ほんにしんきな事じやいな。人待つ宵の鐘の聲。あかぬ別れの雞はものかは。

夏

のぞみ。足んぬるもげに君が代のなは久方の雲のあや五雨十風のほど〳〵に。時をたがはぬ八つの景色。

夏痩

逢ふ事のたえまがちなる中なれど名立がましく皆人の羨ましいと捨詞にも。言はれていとゞ物思ひ酒で散らして紛れて見ても。心ひとつに迫るやら。しんき〳〵〳〵〳〵はうかぬ姿をなぶられてかへす詞も夏やせと。人に答ふる涙川深い契りとわしゆゑに浮名立たせる身ならば。今の思ひを忘草。

千里の梅

とことはにふかせてしがな家の風。世をへてあふぐ文のみちひろき恵みを思ふその心づくしや下さとまで。匂ひおこせし梅の花。心をそむる一枝を。只其まゝの手向にて天満神のまに〳〵とゆくての袖も薫るまで。思ひを運ぶ思河。水の底意も深緑。結ぶ手にふく春風はけふきさらぎの神わざによるのつゞみのすみのぼる眞如の月も所から。和光のかげにかたしきの花の枕に夢結ぶ。えにしは知らぬ道芝の露と亂れん刈萱の。關もる人も心せよ。神も情はふかき夜の。闇にもしるき梅が香。そもこの花は。萬木にさきがけしてかばかりの。かたち色

やつらやとは。いふものゝあるときは。思ふ男に思はれて。解けて逢ふ夜の嬉しさは。何にたとへん言の葉の。語りも盡さず。ついきぬ〴〵の別路や。アゝあすの日の。暮を待乳の神かけて。かはらぬ色の深緑。深きちぎりのなか〳〵に。繁き人目に隔てられ。逢はで戻した心の中を。君ならずして誰か知ろ。はかなやなゝにならぬ身を。思ひつゝけて獨寢の。明け行く空もはしたなく。鳴く音血を吐く時鳥。月の桂の葉がくれか。

播磨八景

今日を門出の旅の空。浮かるゝ聲も播磨なる名所などころ尋ぬれば。心ときめくながめかな。山鷄の尾上の鐘は入りあひの。睦ましづきのなか〳〵に。獨ぬるのを花にして。その花蝶もしづやかに賤のわらべにことゝへば。おのれを名のる時鳥。飛び行く方は高濱の。晴るゝ嵐に誘はれて。飾磨に歸る帆はちら〳〵と。夕日斜に高砂の。松は千歳のいろなはふかく引く人多き手柄山。落つる雁たつ鷲山に。翅まじゆる其數は。三五夜中の新月。千里の外の人心。ちゞにうつろふ秋の空。別府の雨さゝく手枕に。夢も結ばぬまな〳〵。思ひはいとゞ増井山。積るがうへに積る雪。是ぞまことにゆたかなる。年の貢と知られたり。あら喜ばしやこの

佐多の浦雪の苫屋に友呼ぶ千鳥。ちりやちりゝ〱ちりかゝる。吹雪を花の面白や。旅のやどりを指折れば。はる〲来ぬる道しるべ。見かへる空の八雲立つ。出雲八重垣つまごめに。八重垣つくる其八重垣を。守るや神の國すぐに。いく十かへりの春やまつらむ。春ぞ待ちぬる。

小督曲

男鹿鳴く此山里と詠じけん。嵯峨のわたりの秋の頃。千草の花もさま〲に。虫の恨みも深き夜の。月に松虫招くは尾花。萩には露の玉虫や。そよぐをぎむし。轡虫鳴く音につれて仲國が。寮の御馬たまはりて。宿直姿の藤袴。尋ぬる人の面影に立つうすぎりの女郎花。それかあらぬかまぼろしのまゝもきがしまね尋ねわび。駒ひきとむるさゝのくま。やすらふかげの松蔭に。通ふ爪音つまこひの。ねによる鹿にあらねども。昔おぼゆる笛竹や。あはすしらべのまがひなき。聲をしるべに慕ひよる。さが野の奥の片折戸。想夫戀の唱歌は。比翼の翅の雲井をこひ。盤渉調のしらべは。松の連理の枝に通ふ。小督の局世を忍ぶ。住家もあすは大原に。かへん姿の名残とて夜半に手ならす妻琴の。いはこす思ひせきかねて。涙に袖をかしはばや人目もいかゞあそのかた糸の色音をしるべにてさし入る月の

香の花なければ。おのづから御神も。めでさせたまひ花も又。心ありけり飛び通ひ。あるじ忘れぬ功を。知る人ぞ知る言の葉の。しげきはやしにとりそへて。君が千歳をまもるなる〳〵。梅の匂や天に滿つらん。

八重垣

春立つや。門は松枝の若緑。雲井斜に白浪の。渚に寄する有乳山。光り長閑き日の岬。その簸の河の流れ〳〵む。鰐が淵瀬の御寺まで。ぬかづきすぐる草枕。ぬふてふ鳥も聲にはふ。梅の花笠日より笠。櫻はものを思はする。あさな〳〵の峯の白雲。浦は錦のひかたのかひ。名にいろ〳〵を呼び立てゝ。いそなつむて賤の女の。つぼをりならぬ褄からげ。しどけなりふりよ。その十六の島小舟。のりとる業も手馴れて馴れて。さをも水馴れのやるせなき。浪の荒和布や打ち寄する。よその見る目も何よしあしの。サヨエ闇をぬひ〳〵飛ぶ螢。袖師がうらのもやうどり。ほんに〳〵しほらしや。染いろ〳〵の蔦紅葉。手間の關山つむ打ち越えて。サヨエ月は夜ごろに木がくれの。つまに焦るゝ小男鹿の。ほんに〳〵しほらしや。秋もくれ。わがの河原の我が思ひ。縁を結ぶの御社へ。歩みを運び。かねて願ひの一筋を。つひ打ち明けて言ふて見よかいな。人目を土師の片里や。戀ひわたるらん

を。かあいがらんせ烏羽の。色に此身を染糸の。結び目かたき語らひも。縁盡きぬればいたづらに。又この島に歸り來て。猶懷かしき古へを。思ひ出づれば哀れなる。驚破霓裳羽衣の曲。まれにぞかへす乙女子が。まれにぞかへす乙女子が。袖打ち振りし心しりきや。さるにても。君には此世逢ひ見んことも。よもぎが島つ鳥。浮世なれども戀しや昔。戀しや昔の物語。盡さば月日も移り舞の。しるしの簪給はりて。都に歸る家土產は。文にもまさる文月の。七日の夜半の。さゝめごと。比翼連理も今ははや。かれぐ\なりしうき契り。天のとこしなへなるも。地の久しくふりぬるも。つくる時あり。此恨み。綿々縷々として絕間なく。今に殘せし筆の跡。

今様朝妻舟

一夜假寢に近江路の。朝妻やまは深からぬ。人の契りの名なれやと馴れにし床の山風に。寢亂髮の柳影。繫がぬ舟のうきて世に。つひのよるべはいさや河。いさ白浪も聲添へて。うつゝや皷の。うつゝや皷のうつゝなや。

那須野

梟松桂の枝に鳴きつれ。蘭菊の花にかくるゝや此ふしど。虫の聲さへわかちなく。荻吹きおくる夜嵐に。いとものすごき景色かな。野邊の狐火思ひに燃ゆる。燃

雲井より、御つかひに参りしと、かしこき君がみことのり、野邊のをちかたわけきつる。露の玉章さしよする。妻戸のはしの縁の綱。又ひきむすぶ。御かへりごと。添へてたまはる五つぎぬ。きぬ〴〵おくるほどもなく。迎ひの車奉り。昔にかへる百しきや。昔にかへるもゝしきや。千代を契りの松の言の葉。

長恨歌曲

今はむかし唐土に。色を重んじたまひける。帝おはしませしとき。楊家の娘かしこくも。君に召されて明暮の。おんいつくしみ淺からず。常に傍にはんべりぬ。宮のうちの手弱女三千の寵愛も。我身ひとつの春の花。散りて色香も亡き魂の。ありかを尋ねみなれども。さしてはる〴〵行ゝ船に。方士は浪の浮寝する。常世の國に來て見れば。樓閣玲瓏として五雲起れり。うちになまめく女のわらは。殊にすぐれて玉眞の。姿はいづれ李花一枝。雨を帯びたるそのけはひ。見るよりそれと言の葉もなんだ溢れて欄干を浸すもいかに馴れそめし。驪山の昔思ひやる。あら懐かしの都人。耻かしながらありし夜の。其睦言もきえはつる。露の契りのうさ晴らし。いふて見よなら一かたに。思し召すかや深き江に。春の氷のうすきはいやよ。思ひ逢ふ夜は打ち解けて。寢亂髪を其まゝに。とりつくろはぬ女子氣

兎に角に涙がさきのよわい氣を強う見せたりしなふたりうき川竹の流れの身。せめて汲めかし明烏。

めぐりあふせ

つましあれば。きつゝなれにし戀衣。重なる中に一つ身の。小裁のきぬはむつきより。別れ／＼の裏表。うすきひとへの懐かしながら。こんな辛苦なつらさ思へば。逢はぬもましかといふも浮世じやへ。廻り逢瀬は倭文機帯の。解くに解かれぬ我思ひ。いつか晴れゆくこゝろも春雨。

江島曲

春過ぎて。いまぞ初めの夏衣。かろき袂が浦風にしなどの追風そよ／＼と福壽圓滿限りなき。誓の海のそれならで。干潟となればいとやすく。歩みを運ぶ江の島の。繪にも及ばぬ眺めかな。水は山の蔭を含み。山は水の心にまかす。神仙の窟。名に聞えたる蓬萊洞。そばだつ岩根峨々として。隨縁眞如の浪の聲。心もすゝめる折からに。蜑の子供が打ち群れて。磯馴小唄も貝盡し。君が姿を見そめてそめて。引く袖貝を振り拂ふ。戀は鮑の片思。あだしあだ浪櫻貝。梅の花貝其身は粋なすいに酢貝は思の心。こちは姫貝一筋な。女心はそうじやないわいな。いつか逢瀬

ゆる思ひに焦れて出でし玉藻の前。萩の下露厭ひなく。月にそむけて恨み言。過ぎし雲井にありしとき。君が情にいくとせも。比翼の床に鴛鴦の。衾重ねて契りしことを。胸にしばしも忘れはやらで。獨涙にかこち草。濡れてしをるゝ袖の雨。抑も我こそは天竺にて。班足太子の塚の神。唐土にては褒姒と呼ばれ。日の本には鳥羽の帝に宮仕。玉藻の前となりたるなり。清涼殿の御遊のとき。月まだ出でぬ宵の空。砂吹きこし風につれ。燈火消えし其時に。我身より光り放ちて照すにぞ。君は御惱となりたまふ。桐の一葉に秋たちて。きのふにかはる飛鳥山。今は浮世を隱笠。都をあとに見なしつゝ。關の白河よそになし。那須野の原に住み馴れて。つひに矢先にはかなくも。かゝる此身ぞつらかりき。殺生石と世の人に。疎まるゝ身となりはてし。涙の霰萩すゝき。ふりみだしたる有樣に。消えてはかなくなりにけり。

あけがらす

待ちくらし。そして恨みしその夜半は。おそい來やうと一言が。つひ言ひつのるなか〳〵に。泣いて居るのを笑ふかと。そむけた背中打ち叩き。男心のにくいのも。嬉しいことも兎に角に。涙がさきの野暮となる。女子のくせじやないかいな。

明治三十一年三月十六日印刷
明治三十一年三月十九日發行

定價金六拾錢

版權所有

編者　大和田建樹

發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　野村宗十郎
東京市京橋區築地三丁目十五番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目
博文館

の床節に。逢うて離れぬ蛤の。その月日貝まて貝と。いふを頼みの妹背貝。謠ふひとふし戀の海。かの深澤の惡龍も。たへなる天女の神德に。忽ち一念發起して。長く誓を龍の口。昔の跡をとゞめける。幾千代も。盡せじ盡きじ此島の。磯山松を吹く風。岩根に寄する浪までも。さながら和風樂。青海波を奏すなり。ことわりなれや名にしおふ。妙音菩薩のしらべの糸。長く傳へて富貴自在壽命長久繁榮を。守らせ給ふ御神の。ひろき惠みぞありがたき。ひろき惠みぞありがたき。

日本歌謠類聚上卷　終

大和田建樹先生編

增補 謡曲通解

第二版出來

全壹册 背皮金文

字入洋装 頗美本

正價 金貳圓

目方 六百匁

目次

其文は自然、其意は幽玄にして神韻一掬すべきは謡曲にありとは、大和田先生の持論なり、而して先生が謡曲文學の紹介者として、獨特の手腕を有せらるゝは世人皆之を知れり。此書は現存の謡曲を悉皆網羅して、註釋を附し妙處を示すこと丁寧反覆而して專ら通俗を主とす、一讀以て神道佛法を學ぶべく、以て歷史故實を暗ずべく、以て詩歌文章を知るべく、以て名所舊跡を探る可し。

- 第拾五編　後太平記・殘太平記……著者不詳
- 第拾六編　續水滸傳……田中從吾軒譯
- 第拾七編　釋迦八相倭文庫……萬亭應賀著
- 第拾八編　紀海音淨瑠璃集……水谷不倒生校
- 第拾九編　兒雷也豪傑譚……著者不詳
- 第貳拾編　保元平治物語・義經記・曾我物語……著者不詳
- 第廿壹編　脚本傑作集（上卷）……水谷不倒生校
- 第廿貳編　脚本傑作集（下卷）……水谷不倒生校
- 第廿參編　近松淨瑠璃集……水谷不倒生校
- 第廿四編　近松半二淨瑠璃集……水谷不倒生校

福地櫻痴居士題詞
大和田建樹君序文
歴氣樓主人編

義太夫文粹

全二冊洋装 一冊金廿錢 郵税各六錢

淨瑠璃は我が國特有の美文なり、世の人多くは淨瑠璃の歌曲として謡ふべきものなることを知て、その詞章として玩誦すべく文學として頗る尊ふべきものなることを知らず、淨瑠璃殊に義太夫文の長所は和語漢語雅語俗語に論なく經史若しくは佛典に取りて融和混同し煮炙溶化し、奇峭幽怪の致ありて佶倔聱牙の弊なく、天眞爛熳の態に富みて絶て陳腐平凡の失なく、情中景を寓し景中情を含み、流暢にし平板ならず富贍にして亂雜ならず、千萬無量の事物を包羅し來りて綜錯洒落の妙を曲盡せるにあり、千古の妙搆洵に百世に龜鑑たるにあり、豈詞章として文學として吟誦玩味すべきものにあらずや、而して古來尤も多く世に行はるゝ所の義太夫本は所謂稽古本たるものにして即ち謡ふ者のためにせるに過ぎず一章中の語り易く聽き易き部分を節略せるに過ぎざれば段落照應起伏波瀾の妙境、作者の意匠慘憺たる經營苦心の在る所文學詞章として味ふべき所に至ては見ること能はず、故に本編は所謂まる本と稱するものに就て壓巻といふべき一段を全く抄出して詳に評釋を加へたり、或は人口に膾炙したるものもあらむ、或は奇警人を動かすべきものもあらむ、本書を誦みて味ひたまへかし。

大和田建樹君著

淨瑠璃評註

全一冊大判 正價拾五錢 郵税六錢

諸葛孔明の出師表を讀んで、泣かざるものも、伽羅千代萩を讀めば、必ず泣き、李密の陳情表に對して、涙を濺がざるものも、奥州安達原に對しては、必ず涙漣々たるは、何ぞや。他なし淨瑠璃文章の通俗にして、多數の讀者を感ぜしめ易きが爲めのみ、或は怒り、或は笑ひ、或は泣き、或は歡び、趣向に變化多くして、文章自在を極むるが爲めのみ、先生の通俗文學に熱心なる、此評註を著して、其解し易く、味ひ易きものより入らしめんとす、其註や、丁寧。其評や、爽快。誰か之を一讀して、近松文學の眞趣味を、掬し得ざるものあらん。

大和田建樹君著

狂言評註

全一冊大判 正價拾五錢 郵税六錢

能の狂言は足利時代の言語を留めたる蓄音器なり足利時代の風俗を遺したる寫眞なり之を一讀せば當時に言文一致の文章ありしを知るべく之を再讀せば當時に通俗文學の好例ありしを見るべし中には諧謔を以て世々諷し冷罵以て人を笑はすの妙に至りては他に何物か肩を比ぶるを得べき先生此に見るあり其妙文を特撰して評註を加へらる其評は輕快其註は簡明閑窓永日の友蓋し之に過ぐる物なからん。